

それでも私は——

エヴァキャラのボディラインはすこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公は碓カノン（旧名レイ）。TS新劇再構成もの

目次

序	You are (not) repeating.	
再会は虚しくて		1
初出撃は無様		10
嬉しいけど悲しい		15
feel so bad		20
yori、上手に		28
幼くて、子供っぽくて		37
冷たい唐揚げ		47
コンプレックスはつらいよ		55
嫉妬		65
絶叫		76
Result		94
破 You are (not) weak.		
セカンドチルドレン		105
難しいな、この人		119
新しい日		137
r↓b		154
暗黒臨界凶星 サハクイエル		176
よくやった！		199
猫とお誘い		212
日常？		227
計画		243
半端者の罪		260
死してなお		303

無我	705
苦痛	686
E V A N G E L I O N : + 0 . 0 1 S T A N D B Y M E	
絶対レイ度	666
ターニングポイント	650
挫けないで	636
Who am I?	617
気のせい	599
別世界	579
モラトリアム	557
疎外感	537
嚴重拘束、監視	520
急 You are (not) faker.	501
鬼の書 急	442
鬼の書 破	404
鬼の書 序	373
……もう、いいや	345
これから	322
壊死	

序 You are (not) repeatin
g.

再会は虚しくて

良いことはいくつかあった。でも、それ以上に嫌なことがいくらでもあった。

伯父さんに怒られた日、私はむしゃくしゃきた感情のまま家出したことがある。なんの計画性もない、バカみたいな家出。どうして怒られたかは……よく覚えていない。ただ、私のお母さんのことを悪く言われ、我慢できなかつたことは覚えている。

自動販売機の下に落ちている小銭を見つけ、コンビニで買った安いグミが美味しかった。その後、結局空腹で力尽きたところを警官に保護され、家に連れ戻された。

私はいったい何がしたかったのだろう。そう伯父さん伯母さんに怒られながら考えていた。ふたりがひっきりなしに私のお父さんの名前とお金のことを口にしていた。そして気づく。

ああそうか、この人たちは私を預かる代わりにお金をもらっている。それが目当てなのだ。私という個人なんてどうでも良くて、私を預かっているというポーズをし続けたかったのだと。

だから、『来い』と書かれた手紙が届いた私には、この家に留まる理由なんてなかった。

◆
アスファルトが灼ける。

暑すぎてどうにかなくなってしまいそう。セミが忙しく鳴いている。普段なら行き交う人々の騒々しさにかき消されるだろう。でも、今は誰一人としてここら一帯にはいない。なぜなら警報が発令されているからだ。電話も電車も止まり、私は立ち尽くしている。

熱い。汗びっしょりだ。少し休もう。

近くの階段に座り、私は封筒から一枚の写真を取り出す。

その写真には高そうな車をバックに、女性がセクシーポーズを決め

ている。胸の谷間に矢印をさし、わざわざ『ここに注目!』と書かれている。

「……変な人」

こんなことで興奮するのは男の子だけだ。私がこれを見て抱くのは、持たざる者の劣等感だ。

待ち合わせ場所まではまだ距離がある。あと二駅分ほど歩かなければならない。

最悪だ、こんな時に待ち合わせなんて。そう内心で思っていると、戦闘機が一機、低空飛行で私の頭上を飛びすぎていった。突風が私のスカートを捲りあげ、咄嗟に手で押さえる。恥ずかしさに赤面するが、そもそも誰もいないため下着が見られることはない。

杞憂だ。しかし突然聞こえた爆音が私の意識を切り替えさせた。

「えっ!」

さっきの戦闘機のものだろう。他にも何機も集まり、何発もミサイルを撃っている。

爆風がなんども私を叩き、飛ばされないように電柱にしがみつく。

一条の閃光が、その内の一機を貫いた。バランスが崩れ、回転しながら私のすぐ近くに墜落した。

ビル群の隙間から、巨大な黒い影が現れた。白い仮面を被る、大きな影だ。私の口内が乾燥し、舌が張り付く。逃げないと。そう判断してきたが、恐怖で足が動かない。影は大きくジャンプし、墜落した戦闘機を踏み潰した。

至近距離での爆発に、私の身体は軽々と吹き飛ばされてしまう。

「あうっ!」

背中から地面に落ち、意識が一瞬明白する。怪我は運のいいことない。走れる。

私は急いで立ち上がり、その場から逃げようとしたその瞬間、一台の車が華麗なドリフトを決めて私の前に現れた。助手席のドアが開き、運転席に座る、サングラスをかけた女性が口を開く。

「乗って!」

命令口調のような、鋭い声には何も考えずに車に乗り込んだ。

影が迫る。巨大な足で踏み潰される寸前、アクセル全開でその場から離脱する。影は逃すまいと手を伸ばすが、突如現れた紫色の巨人にタツクルされ、体勢を崩した。

その間にも車は遠ざかっていく。

「ごみんね、ちよつち遅れて。状況が状況つてのもあるけど」

陽気にそう言つて、女性はサングラスを外した。その顔を見て、私は誰なのかすぐに理解した。なぜか女である私にセクシーな写真を送りつけてきた人。

「えつと……葛城ミサトさん、ですか？」

「そうよ。あなたは碓レイちゃんよね？」

「あ、いえ……私はカノンです」

「いやあ、ちゃんと見つけられて良かった………ええ!! カノン!!
もしかして双子だったの!!」

葛城さんの驚いた様子で問い詰められる。

「私、名前変えたんです。今はカノンって名乗ってます」

「あり? でも資料には……まあいいわ。本人であるならそれでよし」

「あの、さっきの大きな怪物は何なんですか?」

脳裏に思い浮かぶあの戦闘。この人に拾われていなかったらどうなっていたことか。想像するだけでも怖くなる。

「ああ、黒い方は敵、紫のは味方よん。詳しいことは後で話すわ」

後ろを振り向き、怪物の姿を捉える。紫の巨人は一方的に攻撃され、最後はエレベーターのように地面ごと地下に消える。

さらに、周りに飛んでいた戦闘機も離脱し始める。

「あれ? みんな離れていってますね」

「——まずい! 顔を引っ込めてショックに備えて!!」

葛城さんに頭を強引に下に向けられる。刹那、目を開けているはずなのに、すべてが真っ白に見えた。割れた音が耳をつんざき、爆風が車体を軽々しく持ち上げた。

上下左右の感覚、すべてが狂った。ぐわんぐわんと痛む頭。顔が葛城さんの豊満な胸に押し付けられ、呼吸ができないこんなのが原因で

死ぬのなんてご免だ。なんとか脱出することに成功し、葛城さんの様子をうかがうと……。

「ローンがまだ残ってるのに……。もう、イヤ」と涙目になっていた。

さすがに同情する。可愛そうだとも思った。

車を降りて、車体を起こす。なんとか目的地に到着すると、移動式リフトで車ごと下に移動する。葛城さんからパンフレットを渡される。

「このパンフレット見といてね」

表紙には大きくロゴが描かれている。

「ネルフ……？ お父さんが……ここで……」

「特務機関NERV。ここがあなたのお父さんが働いてるところよ。お父さんのこと、嫌い？」

パンフレットに書かれた内容を読みながら、私は考える。お父さんのことは……そもそもよくわからない。小さい頃にお母さんが死んで、それからは今までずっと預けられ、何も音沙汰がなかったから。「よく……わからないです。どうして今頃私を呼んだのかが疑問ですけど。葛城さんはわかりますか？」

会ったところで、互いにギクシャクしそうな気もするが、それはわからない。

「会って、直接訊いたほうがいいわね。あと、ミサトでいいわよ」

「……はい、ミサトさん」

急に開けた空間に出てきた。下を見下ろすと、なぜか緑にあふれていた。ここは地下のはず。光も外にいる時と全く変わらない光量だ。「す、すごい！ これは何ですか？」

「私達の秘密基地、ネルフ本部よ。世界再建の要……人類の砦となるところよ」



どれだけ長い時間歩いているのだろう。私が「まだですか？」と尋ねると、「もうすぐよ！……たぶん」と後半を濁す。これはどう考えても迷子になっていて、それを私に悟られないように必死に誤魔化しな

がら進んでいる状況だ。

どう見ても適当に乗り込んだエレベーターに私も追隨する。もはや、何をしているのかもわかっていなさそうだ。ミサトさんの顔が物語っている。

不意に、エレベーターのドアが開いた。そこには一人の金髪の女性が立っていた。目の下の泣きぼくろが目立つ。

「何やってるのミサト。あまりにも遅いから迎えに来たわよ」

「ごめん、まだ不慣れで迷っちゃったわ」

「……その子ね。例のサードチルドレンというのは」

私の方を見て、女性は意味深なことを口にする。何のことかさっぱりわからないが、とりあえず自己紹介をする。

「初めまして。碓カノンです」

「……改名したんですってね。初めまして。私は技術一課E計画担当博士、赤木リツコよ。よろしく」

「はい、よろしくお願いします」

「さっそくで悪いのだけど、お父さんに会わせる前に、あなたに見せたいものがあるの。ついてきてもらえるかしら」

案内されたのは、薄暗い通路だった。金属の床。見えにくいのが、両脇には水がある。よくわからないが、赤色に見える……？

突然、電気が点く。

何度も瞬きして慣れたあと、改めて前を見ると、そこには巨大な鬼の頭部があった。

「うわあああつ?!」

あまりに驚きすぎて、私は尻もちをついてしまう。赤木さんとミサトさんが隣にいるのに、醜態を晒してしまった自分が恥ずかしい。

ミサトさんに起こしてもらい、今一度鬼と向き合う。よく見ると、これはさつき見た巨人だ。というより、巨大ロボット？

「何ですか……これは？」

「汎用人型決戦兵器、人造人間エヴァンゲリオン。その初号機よ」

赤木さんがすらすらと説明する。私には人造人間なんて言われてもロボットにしか見えないし、これがさつきまで怪物と戦っていたと

思うと……。

「……………これが……お父さんの仕事ですか？」

「——そうだ」

帰ってきた返事は、ミサトさんでも赤木さんでもなかった。鬼のま
た上、そこにガラス越しに私を見下ろす男の影があった。

メガネをかけ、髭をやし、ヤクザ映画に出演していてもおかしく
なさそうな外見の男。

「……………お父さん？」

「久しぶりだな」

「う、うん」

「……………」

「お父さん……う？」

それ以上何も言われることはなかった。

お父さんに対して、どう接したらいいのかわからない。そもそも、
どうやって人と会話したらいいのかわからない。ずっと家でも事務
的な会話しかしなかったから、自分から話を切り出すことができな
かった。

訊きたいことなんてたくさんある。今まで何してたの？ どうし
て私を預けたの？ どうして私の改名を快諾したの？ 私のこと、ど
う思ってるの？ なんて。言葉が喉まで上がってきているのに、どう
しても吐き出せない。

その様子を見ていたお父さんが口角を上げる。

「——出撃」

「出撃？ レイは怪我しているんですよ?! ……! まさか！」

ミサトさんが狼狽しながら私を見る。

私はその意味がわからなかった。何もお父さんに話しかけられな
い自分が嫌になって俯く。

ミサトさんに肩を捕まれ、私は顔を上げる。

「えっと……ミサトさん？」

「カノンちゃん、あなたがこれに乗るのよ」

鬼……エヴァを一瞥する。鋭い眼はまるで私を睨みつけているよ

うだ。

「すみません、よく……わからないです」

「エヴァに乗って、使徒と戦ってもらいます」

赤木さんに説明してもらっても、頭のどこかでわかりきっている流れを否定したがつっていた。

「冗談だよな？ 違う理由があつて私を呼んだんだよね？ まさかこのためだけになんて……」

「このために呼んだ。エヴァに乗って使徒と戦え」

「嫌だよ……さっきの怪物と戦う？ ……無理に決まつてるよ！ 私は……私はそんなために来たんじゃない！」

声を荒げて、必死に否定する。お父さんに久しぶりに会えたのに、何がどうなっているのか全くわからない。なのに半ば強引にこのエヴァという乗り物に乗せられるのは、嫌だった。

ここに来たら、今までの私から変わるかもしれない。そう思ったのに。

「お父さんは私に死ねっていうの?!」

「……座ってればいい。それ以上は望まない。説明は赤木博士から受けろ」

「嫌だよ……どうして私なの……」

「他の人間には無理だからだ。お前がやらなければ人類すべてが死滅する。人類の存亡がお前の肩にかかっているのだ」

「そんなこといきなり言われても……無理だよ……!」

周りで作業をしていた整備員たちが私を見ている。見ないでほしい。今すぐここから逃げてしまいたい。頬を熱いものが伝い、私は俯いてしまった。

「……そうか、わかった。お前は必要ない。……帰れ」

お父さんの『帰れ』という言葉が頭の中で何度も反復する。帰りたい。帰れと言われたから帰ろう。あの家に帰る？ 私のことを想ってくれない人たちのところに？

お父さん、ミサトさんと赤木さんが何かを話しているが、私には何も聞こえなかった。

ただ、言葉にできない虚無感が私を襲っていた。ふと、スライドドアが開いた。ふたりの医師がタイヤ付きのベッドを運んでいる。寝かせられているのは、ひとりの少女だった。

薄い水色の髪で、陶器のような綺麗な肌。身体中に包帯が巻かれていて、とても元気には見えなかった。私の隣まで運ばれる。

私はそれを、じつと見ていた。

「レイ、予備が使えなくなった。もう一度だ」

レイと呼ばれた少女は弱々しく「はい」と返事をする、呻きながらも立ち上がるうとし始める。

なんて……なんて情けないのだろうか、私は！

私が乗らないと拒絶したから、私の旧名と同じ名の少女が無理をしようとしている。

でも、でも、だからといって私の意思が容易に揺らぐことはなかった。この人は私なんかよりも遥かにこのエヴァというものを知っているはずだ。だから、素人が乗るよりマシだ。そんな人任せな考え。そして突然、部屋全体が大きく揺れる。使徒の攻撃による衝撃であることを私は知らない。

天井からぶら下がる電灯が大きく揺れ、少女のベッドは倒れてしまった。

私は咄嗟に駆け寄り、倒れる少女を抱き上げる。声をかけるが、反応できないほどの痛みに苦しんでいる。

「……………」

この瞬間まで人任せなことを考えていた私が恥ずかしい。私よりも酷い状態の子が私の代わりに戦うなんてやっぱり……。でも、私は戦いなんて……。っ。

「カノンちゃん、私達はあなたを必要としているの。なんのためにここまで来たの？ お父さんにあそこまで言われて黙って帰るつもり？」

「だって……」

「だって何も無いわ。あなたが乗らなければその子がまた乗ることになるのよ」

「だって……そんな……っ」

何のためにここまで来たのか。それは、自分が変わるかもしれないと思っただから。そして、もう私が生きていくかわからないあの家に戻るのが嫌だから。

何を言えいいのかなんてわかりきっている。舌を動かして、口を開いて、それを吐き出すだけの簡単なことだ。

「乗らないのならぐずぐずしないで帰れ！」

お父さんの言葉。上から一方的に押し付けるような物言いに、私は反抗期の子供のようにムキになってしまった。

私は少女を抱えながらお父さんを見上げた。お父さんは薄ら笑みを浮かべていて、私が今から言おうとすることがまるでわかっているみたいだ。それが気に食わないから、自分でも驚くほど大きな声で言ってみせた。

「——乗るよ！ 私が乗ればいいんでしょう!？」

きつとこんなに大声で叫んだのは生まれて初めてだった。お父さんが僅かに驚いた表情になったのを見て、ああ、これで少しは変わるかな、と思った。

初出撃は無様

頭にカチューシャのようなものをつけられ、エントリープラグと呼ばれるカプセルに乗り込む。

操縦席は想像より簡素なもので、両側にレバーがあるのみだ。足で踏んで操作したりということはない。窪みに脚を嵌めるような感じで、違和感がない。長時間でも疲労は溜まりにくそうだ。

「大丈夫かしら、カノンちゃん」

「はい」

赤木さんの顔がディスプレイに表示される。返事を返し、私はレバーを握った。

「乗ってくれてありがとう。私達ネルフスタッフ全員があなたを全力で支援します」

「よ、よろしくお願いします」

「よろしい。では、次にL・C・Lを注入するから飲み込んでね」
「へ？」

すると下から段々とオレンジ色の液体が溢れ出しているあつという間に腰までつかり、胸のあたりまで水位が上昇する。

これ、溺れちゃうよ!!

「赤木さん、私これ、溺れちゃう!!」

「大丈夫よ。酸素を直接肺に送ってくれるから」

「そんなこ、わー! ぶぶぶぶ……!」

ついに頭のでっぺんまでL・C・Lにつかり、反射的に私は息を止めてしまう。目も閉じ、一切を拒絶する。しかし、やがて酸素を求めてL・C・Lを飲み込んでしまう。不快感に襲われるが、すぐに慣れた。

でもやっぱり目は開けられない。

「目を開けなさい」

「えっ、そんな……水の中だったら何も見えないです! せめて水中ゴーグルが欲しいです!」

「……ぶふっ。あ、いえ、ごめんなさい。視界は問題ないから目を開け

なさい」

プールの時にゴーグルをしないまま目を開けるとボヤボヤして結局全然見えなくなるのと同じことを危惧したんだけど。勇気を出して、私！

カッ！ と目を見開く。

広がるのは遥か下にある床。ジェットコースターで頂上まで登った気分だ。視界の端に紫色の腕が見える。巨大なリフトに乗せられ、壁まで移動しているようだ。

「はい、目、開けました！……って、スカートが！」

あくまで液体であり、無重力状態だとスカートの裾がひらひらと踊ってしまう。これじゃあ下着が見えちゃう！ 大急ぎで裾の端を持ち、股に挟んでしまう。

「何かと忙しい子ね」

「ご、ごめんなさい」

「初めてだから仕方ないわ。シンクロも……完了したわ。シンクロ誤差は極小。素晴らしいわ。ミサト、いけるわよ」

ミサトさんが今度はディスプレイに映された。初対面で車に乗せてもらったとき、この人は朗らかな感じで、私とはベクトルの違った人間なのだと思っていた。しかし、打って変わって真剣な眼差しで私を見ている。不思議と背筋が伸び、言葉を待った。

「いい、カノンちゃん。リッコも言ったけど、エヴァに乗ってくれたこと、私達は本当に感謝しています。人類の命運、あなたに託すわ」

「そんな大層なこと言われてもわかりませんが……頑張ります」

「少し上昇の圧がかかるけど我慢してね。——エヴァンゲリオン初号機、発進！」

急に上から押さえつけられるような圧に私は呻く。これじゃあジェットコースターの逆バージョンだ。

地上に射出されると、すでに夜の帳は降りていた。兵装ビル群が照らす光が、使徒と呼ばれる敵のシルエットをはっきりと映し出す。正面、約数百メートルに使徒はいた。目が合い、動きが止まる。数歩歩けば衝突するほどの距離だ。

今から、戦う。

誰かを殴ったことなんて一度もない。ましてや戦うなんてとても。使徒が見える位置よりも遠くにいる感覚。非現実的に、私の意識は私を客観的に捉えようとしている。

「エヴァンゲリオン初号機、リフトオフ」

ミサトさんの命令でカタパルトの拘束が外れ、エヴァが自立する。

「カノンちゃん、まずは歩くことを考えて」

「どうすれば……」

レバーを適当に動かしてみるが、これといった反応はない。これ、もしかしてまずいではないだろうか。

「考えるだけでいいのよ」

そんなことを言われてもよくわからない。一般に、車が意思で動くわけないし、ガンダムだっていろいろ操作して動くことくらい知っている。考えたらその通りになるって言われても、その概要がいまいちわからない。

しかし敵は目の前。チュートリアルをいちいち理解しようとするのは時間の無駄であり、命の危機に直結する。

歩くことをイメージする。左足を前に。前に。前に突き出す。するとエヴァも意思を汲み取ってくれたのか、グググ、と一步を踏み出した。

「う、動いた……」

ゆっくりではあるものの、続いて二歩、三歩と歩行を続ける。安堵したものの、今度はどうやって止まればいいのかわからない。

一瞬でパニックになり、闇雲にレバーを動かすと、今度はエヴァが走り出してしまった。

使徒とぶつかる！ 小さな悲鳴を上げて腕を前に交差させると、エヴァも同じように腕を動かした。

しかし使徒は一步横に避けるだけでなんなく躲される。そのままビルに激しく衝突。私は腕にじんじんと痛みを覚える。

「カノンちゃん、立ち上がった!!」

ハツとして顔を上げると、使徒がこちらを覗き込んでいた。敵の目

の前で無防備な状態を晒している。

立たないと！ でもわからない！ 意識するなんてわからない！
使徒はのんびりしている私を放つてなどくれなかった。

手を広げて、頭を鷲掴みにされる。抵抗することもできず、そのまま持ち上げられる。何をされるのかわからず、怖くて私はその場につきまっけてしまった。

「お願い、逃げてー！」

「怖いよ……！」

ミサトさんの悲鳴にも似た声が聞こえる。でもなぜか私の身体が掴まれているわけでもないのに、頭を直接触れられているような感覚に恐怖が増幅する。

使徒のもう一方の腕がエヴァの腕を掴んだ。筋肉が盛り上がり、腕を粉碎しようとする力を込め始めた。するとどういうわけか、私の左腕に何かに握りつぶされるような痛みが襲った。

「痛、い……！… なにこれ!!！」

「カノンちゃん落ち着いて！ 掴まれたのはあなたの腕じゃないわ！」

「ならどうし、て……!!? 助けて……!!！」

ミシミシと嫌な音とともに、ついにエヴァの腕が粉碎されてしまう。その激痛は、私の腕に直結する。

——絶叫。

何も考えられなくなってしまふ。壊された腕を確認するが、外見に異常はなさそう。でも、痛い。こんなに痛い思いのするのなら、エヴァになんて乗るんじゃないやなかった！

「カノンちゃん、避けてー！」

「え?！」

気づくと、頭を掴む手が輝き始めていた。何かをする前兆なのだとはわかるが、拒絶するために目を背けるのが精一杯だった。

しかし、そんなことはお構いなしにゼロ距離で光線がエヴァの頭蓋に放った！

「う、アッ!!！」

右目が痛い！ ドリルで掘られているようだ。目の奥が熱くなり、脳が溶けてしまいそう。

装甲を貫くために何度も放たれる光線が、うずくまる私の頭を執拗に抉る。

何発目かわからない光線がついに頭蓋を貫通した時、私は痛みを耐えきれなくなり、意識を手放してしまう。

……ああ、死んでしまうんだな。

すぐくあっけなかつたな。私という存在は結局ちっぽけなもの。死ぬときは死ぬ。そんなよく聞く言葉を再現しているようだ。

……でも。それでも。

何もできずに死ぬのは悔しかった。せめて何かを残したかった。だからこそ。

——死にたくない！
と願った。

嬉しいけど悲しい

目覚めは最悪だった。

どこへ行っても、正体のわからない巨人に追われる悪夢を見た。おかげで汗びっしょりだ。

「私、は……」

死んだ……はずだ。だが今はベッドに寝かされていて、開いた窓から一定間隔で聞こえるセミの鳴き声が、そうではないと否定している。

あの戦いは、夢だったのだろうか……？

ベッドから立ち上がり、部屋を出る。ここはたぶん病院かな？ メインホールに取り付けられたテレビから、ニュースが流れている。

『先日の第三新東京市爆発事故についてですが、政府の見解では——』
その内容には、エヴァや使徒のことなどは一言も出てこなかった。それがなんだかしっくりくる。私の都合のいいように解釈しているのかもしれない。

つまり、お父さんに呼ばれて、エヴァに乗って、使徒と戦う……。私と同じ年頃の男の子が発症するらしい中二病が、末期まできたらこんな感じになるのかな。そんな馬鹿げた夢。

記憶はないが、なんとかして使徒を倒せたのだろう。今はそれ以上のことを考えたくない。

通路を歩く。誰もいない、私だけの通路。しかし、ガラガラと後ろから何かが近づいてきていることに気づいた私は後ろを振り向いた。

あの時に見た少女が、車輪付きベッドに乗って運ばれてきた。

「……………」

私はそれを無言で見届ける。向こうも私の存在に気づき、目が合う。ただそれだけだった。そのまま通り過ぎるかと思いきや、さらに現れたお父さんの前で止まった。

「あ……………」

声をかけようとしたが、お父さんは少女になにか声をかけた。きつと心配とかそんなことだろう。

でも、私がいることに気づいても、向こうから視線を外されてどこかへ行ってしまった。その行為がとても悲しくて、同時に少女に少なからず嫉妬を覚えてしまう。

「……………はあ」

「酷いわねえ。あれが実の娘にする態度かしら」

「ミサトさん……………」

後ろを振り返ると、「迎えに来たわ」と陽気に手を振る。

「外傷は大したことなくて良かったわ。あなたの家まで送るわ。本部があなた専用の個室を用意したそうだから」

「はい」

一人暮らしは初めてだ……………。これから実質的にネルフの職員になるわけだし、お給料も入る。中学生が働くなんて常識的にはあり得ないけどネルフは超法規組織だからとかなんとか……………よくわからないけどどうにかなるらしい。

「いいの？　ひとりで。申請すればお父さんと住むことだってできるのよ」

「——いいです。ひとりのほうが気が楽ですし。それにお父さんだつて、私なんていないほうがいいに決まっていますよ」

久しぶりに会ったのに、あんな扱いを受けて……………親子ってなんだろう？　一緒に住むのはきつと、どっちにとっても苦痛でしかないと思う。だからひとりがいい。呼び出された時だけ顔を出して、事務的な会話をする。それ以上は望まない。そんな当たり障りのない関係がベストなのだろう。

「やーねーもー！　親子なんだから一緒に住むのが自然じゃないの！　我慢せずに言いたいことは無理せずに——」

「これは私とお父さんの問題です。ミサトさんには……………関係ないでしょう」

私の明確な拒絶にミサトさんが顔色を変える。私も少し言いすぎってしまったかもと恐る恐る顔色を窺うと、やはり漫画表現にありそうな怒りマークを額に浮かべていた。あ、やっぱり言い過ぎたのだと思つて口を開こうとしたが、ミサトさんの大音量に吹き飛ばされた。

「暗い！ 暗すぎるっ！ ……その性格、私が治したる」

「え……う？」

ミサトさんは不機嫌そうな表情を浮かべると、おもむろに携帯電話を取り出して通話を始めた。

「あ、もしもしリツコ？ うん私。カノンちゃんねえ、私のマンションで一緒に住むことになったから」

「ちよつと……い！」

「ああん？」

ヤクザも顔負けの睨みをされたらさすがに黙りこくる。さすがネルフの職員。こういうところもミサトさんが採用された理由の一つに違いない。あつという間に話をつけられ、同居することが決まってしまった。お父さんとは悪い予感しかしないが、ミサトさんならまあ……でもやつぱり。

「私はそれでもひとり暮らししたいですよ……他人がいるのは……」

「つべこべ言わない！ まだ中学生の子供が、しかも女の子が一人暮らしするのは危険すぎるわ！」

「そもそもなんで私がミサトさんと一緒に住まないといけないんですか」

「上司の命令が聞けないっていうの？」

「うっ」

痛いところを突かれた。上司の命令には基本絶対。私生活に口出しされるのは嫌だけど、目が座っているし、たかが中学生の私にはその固められた意思を砕けそうにない。

そのままズルズルと連れられ、車に詰め込まれてしまった。

「オーホッホッホ！ 今日はずらなきやね！」

荒い運転だ。

混雑しているわけではないから交通事故に遭わないものの、一秒ごとに寿命が削られる。いつか車の免許を取るときは良い反面教師になってくれるだろう。

私は顔を腕に乗せ、外を眺める。

「何をパーツとするんですか？」

「それはもちろん同居人の歓迎会よ」

「私は……そんな気分じゃないです」

「もお、何ふてくされてるのよ」

「別に……。ミサトさん、こつち見ないで運転に集中してくださいね」
「そんなこと言われなくても……。おつと危ない」

対向車線に少しはみ出してしまっている。慌てて戻ろうとしたところ、勢い余ってポールに衝突しそうになる。

心の中で、私は二度とミサトさんの運転にお世話にならないと誓う。

「……………」

「やあねえそんな目で見ないですよ。……ちよつち、寄り道するわよ」

連れてこられた場所は、街を一望できるスポットだった。ピクニックとかにここは絶好のポイント。でも私は何も感じることはなかった。

ほんのりとオレンジがかかった空。水色の風が少しだけ涼しい。

「……………いい景色ですね」

「ええ。でもそれだけじゃないわ。……そろそろ時間ね」

ミサトさんが腕時計で時間を確認する。何が始まるのかと思いきや、突然大音量のサイレンがなり始めた。何か異常事態が起こったのではと無意識に身構えてしまったが、そういうわけではなさそうだった。

ズオツ！ と地面のゲートが開き、次々とビルが出現する。たった数十秒で全く別の街に変わったのを見て、私は目を丸くする。

「すごい……ビルが地面から生えてくる……!!」

夕日の日差しがビル群に反射し、ひととき眩しく輝いて見える。

「……………」

「対使徒迎撃要塞都市、第三新東京市。これが私達の街よ。そしてあなたを守った街」

目に焼き付く戦闘の記憶。

……そうだ。結局あれは私が倒したのではなくて、エヴァが勝手に動いて倒した、が正しい。つまり、この街を守ったのは私なんかでは

ない。

「私は何もしてませんよ。私はミサトさんたちが思っているような、すごい人ではありません。エヴァに乗ったのだから、大層な理由もない、お父さんへの反抗からでしたし」

「わかってるわ」

私が守った。そんな実感がわからない。

これほど巨大な街を見せつけられても、理解するのが難しかった。

ミサトさんが私の頭に触れる。私は抵抗しなかった。

「理由はどうあれ、あなたは立派だった。自信を持ちなさい。それと、ありがとう」

「」

わからなかった。わからなかった。でも、ありがとうの感謝の言葉が私の心に届いた。胸が熱くなり、目頭も熱くなる。しだいに街の様子が滲んで見えるようになってしまう。

雨なんて降ってないのに。目元を拭えばなぜか濡れている。

きつと私は嬉しいのだ。私のしたことが誰かに認められたことにこの上ない喜びを感じた。

「カノンちゃん？ ちょっと……私、何か悪いこと言ったかしら」

「いえ……なんでもありません」

恥ずかしい。ミサトさんに見られないように顔を背けて必死に涙を拭う。

「ミサトさん、私は……私は……」

嬉しいのと同様に、私は悲しかった。

——その言葉を、あの時、あの場所で、あの人に言ってほしかった。

feel so bad

「着いたわよ」

私は買い物袋をぶら下げながら、ミサトさんが鍵を開けるのを待った。

「ささ、入って」

「あ、はい。お邪魔します」

そう言つて中には入ろうとするとなぜかミサトさんが私の行く手を阻む。

「……いい、カノンちゃん？　ここはあなたのお家なのよ。お邪魔しますかじゃないでしょ？」

「……ただいま」

なんだか恥ずかしい。歯が浮く。そんな様子を受け取ったのか、ミサトさんは微笑みながら。

「なんだ、可愛いところあるじゃない。お帰り」

と快く迎え入れてくれた。

「ちよつち散らかってるけど……まあ大丈夫デシヨ」

ミサトさんに促されるがままに家に入ると、そこには地獄がすでに顕現していた。ゴミ屋敷。足の置き場がないレベルだ。絶望的。およそ人間の住めるところではない。つまりミサトさんは人間ではない？

「待っててね。今食事の支度をやるから」

家に帰つてくる途中に寄つたスーパーで買った買い物袋を机の上に置く。これで卓上スペースはほぼ埋め尽くされた。

「悪いけどそれ、冷蔵庫に入れたいもらえらう？」

ミサトさんがインスタント食品を電子レンジに突っ込んでタイマーをかける。上着を脱ぎ散らかし、自室に消える。

「はい」

私が持つ袋にはセット買ったビールがたっぷり。指差された冷蔵庫を開けると、インスタント食品、おつまみ、そしてこれでもかと詰め込まれたビールの山があつた。

まさに不健康の権化。そのくせになぜかあのスタイル。美人。まったくもって神様はなぜこんなにも酷い仕打ちを行うのだろうか。もっと私に乳をください。同年代の女の子達との格差に苦しみたくはありません。

「あの、あつちのは何ですか……？」

自室で部屋着に着替えているミサトさんに訊く。もしかしたら今私が開けている冷蔵庫がサブで、あつちの冷蔵庫がメインなのかもしれないからだ。それだとしてもビールの占める割合が笑えないが。

「ああそれ？ 気にしないでいいわよ。たぶんまだ寝てるから」「寝てる……？」

冷蔵庫の中に誰かが住んでいるのか？ いやいや、ここは地獄だ。常人には理解できないことだってあるかもしれない。そう私は自分を納得させる。

チーン、と電子レンジの軽快な音が鳴り、インスタントオンリーの偏った夕食が始まる。

「ンンンンン。ツプハーーツ!! くうーーツ!! やっぱ人生、このときのために生きてるようなもんよねえ」

「はあ……」

オヤジ臭い。生活水準が低く、救いようがない。まだ若そうだが、これじゃあ将来が心配だ。とはいっても私はミサトさんよりも年下だ。私の推測なんて当てにはならない。

「どうしたの？ 食べないの？ インスタントも結構イケるわよー」

「あ、いえ、こーういーうの、慣れてないんです」

するとミサトさんはガンツ！ とビール缶を机に叩きつけて私の前に身体を乗り出した。

すでに酔っているのかもしれない。

「ダメよ！ 好き嫌いしちゃあー！」

「そういうわけではなくて、あの……」

怒られるのかと思いきや、ミサトさんはにんまりと笑顔になる。

感情の起伏が激しい人だ。

「楽しいでしょ。他の人と食事するのは」

きっとこの人だと良い意味でも悪い意味でもこの家は賑やかになるのは間違いなさそうだった。他人との……上司との同居。普通に生きてきたならば間違いなく経験できないこと。

私は少しだけ、嬉しかった。

食事を済ませ、ゴミを袋にまとめる。ついだから何日前のかもわからないゴミも回収した。異臭は放っていないが、これ以上の放置は私が看過できない。

「ミサトさん、明日掃除しましょう」

「え？ 別に大丈夫でしょ。生活に困ってないし」

ビールのお代わり——たぶん四本目——を開け、テレビで漫才を見ながらソファーにだらしなく寝転がって寛いでいる。

これで美人を維持できるなんて世界はなんて理不尽なのだろうか！

「私が嫌なんです！ いいですね？ これじゃあ貰い手がないですよ？」

「……………はい、お願いします」

最低限だけ片付けると、まるで一部だけキツチンにオアシスが出現したかのような落差にミサトさんが唾然とする。

私は鼻を鳴らす。

「私のレベルは中学生以下……？」

「……否定はししないで」

「お風呂、湧いたから先に入ってきなさいな。……うっ、私は中学生以下」

涙目のミサトさんを尻目に私はそそくさと浴室に去る。適当なパジャマを漁り、服を脱ぐ。

吊るされたミサトさんの下着が私の劣等感を煽る。私にも未来はある。悲観は……しない。はい。

そう考えながらお風呂のドアを開けると、目の前で見たことのない生き物が身体を激しく震わせた。大きさは私の足の付け根ほど。水しぶきが私にかかる。

「きゃああああああああああ!!」

カーテンを開け、ミサトの前に全力でダッシュする。

「ミニミニミサトさん！ あれ、あ、あれ……！」

私が指をさした妙な生き物が遅れて出てくると、私を一瞥し、ふたつめの冷蔵庫のスイッチを押した。するとスライドドアが開き、その中へと消えてしまった。

「ああ、彼ね。温泉ペンギンのペンペンよ。セカンドインパクト前はたつくさんいたらしいわよー。……それより前、隠したら？」

「——あ」

女の人同士だからよかったものの、もしこの場に男の人がいたら、私は間違いなく羞恥のあまり倒れていた。

右手で胸を、左手で股を隠してすぐごとミサトさんの視界から消えた。

◆

「碓カノンです……。お父さんの仕事の都合でやって来ました。よろしくお願ひします……」

たくさんの人から注目を浴びるといっただけで経つても慣れない。私は歯切れの悪い自己紹介をする。たぶん第一印象は……普通に思われているかな。

そばかすの男の子が私を品定めするかのような目で見ている。そしてなぜかうんうんとひとりで頷いている。私の自己紹介が気に食わなかったのかな。

「じゃあ碓さんはその空いてる席に座ってもらいましょうか」

「はい」

私が席に座ると、周囲を見回してある人を探した。ファーストチルドレン、綾波レイ。ミサトさん曰く、透明な人だという。ふたつ左の席。綾波さんは肘を付き、顎を乗せて窓の外を眺めている。

病院では……というよりまだ会話すらしたことがない。いったいどんな人なのだろうか。……気になる。授業が終わったら話しかけてみよう。

先生が授業の趣旨からしだいに離れていき、いつの間にかセカンドインパクトの話に移行してしまう。なんだか子守唄を聞かされてい

るようです、ついうとうとしてしまう。

皆の様子を窺うと、それぞれが好きなことをしていた。寝たり、遊んだり、おしゃべりしたり。そんな中でも綾波さんはずっと変わらなかつた。

私のパソコンに、メッセージが送られてきた。ウインドウを開くと、『あなたがロボットのパイロットって噂、本当？ y/n』と表示された。私の胸がどくと鳴ったのを感じる。昨日の爆発事故。そしてその翌日に転校してきた私。何かあると思われるのは仕方ないことだ。でもどうしよう。ミサトさんには守秘義務とかでいろいろ言われたが、パイロットであることを公表してはいけないとは言われていなかったような気がする。だからといっておもむろにはいそうですと答えるのもリスクだ。

ここは一応『no』と……。

——いや、そもそも答えるのにこれほど時間をかけているという事実がなによりも『yes』である証拠だ。

否定したとしても後々面倒なことになるような気がして、『yes』と返事した。

「「ええええええええええ!!」」

まさか共通メッセージにされていたのか、クラス全員が驚きの声を上げ、授業中にも関わらず席を立ち上がって私のもとに殺到する。

「ねえねえ、どうやって選ばれたの?」「ロボットの amongst どんない感じ?」「必殺技とかは?」「テストとかは?」「怖くなかった?」

「えーつと……」

私は聖徳太子でも何でも無い。ちょうどチャイムが鳴り、委員長らしき女の子がなんとか最後に起立と礼をさせ、授業は終わりとなった。

語り終えた先生は満足そうに教室を去る。

それでもクラスメイトたちは私に首ったけで、どう頑張っても抜け出せそうにない。

綾波さんに話しかけたいが、できない。

とはいってもこれ以上何かを言うと守秘義務に違反してしまうか

もしれない。

「えつと……私もよくわからないの……ごめんね」

「——なんや、偉そうにしてても結局なんも知らへんのやな。パーな
んちやうか？」

明らかに私をバカにする言葉が、背中に突き刺さった。声のした方を振り向くと、ひとりのジャージ姿の男の子がドアにもたれてながら私を睨んでいた。

「あー鈴原！ あなた一週間も無断で学校を休んで——」

「じゃかあしい！ 黙つとれ!!」

もしかして私、不良に絡まれる？ 委員長の言葉を遮り、ガタガタと机を押し退けて私の前に立つ。そして目の前で力強く机を叩いた。

「ひっ」

「転校生！ ちょっと顔かせや」

どう釈明してもこの鈴原という子から逃げられそうにない。明らかに私に怒っている……。何をしたのかは全くわからない。初対面だというのに。

強引に手を引かれ、私は校舎裏へと連れて行かれる。鈴原君の後ろにあのそばかすの子がついてきている。

「なあ、確認するけどお前はあのロボットのパイロットなんやな？」

「……うん」

「そうか……ならしゃあないな」

眼の前に迫られる。次に瞬間、私の身体は浮いていた。どきりと地面に倒れ込み、擦りむいた両肘と、鼻につーんと冷たい痛みが私に何が起こったのかを教えてくれる。

……私は今、殴られた？

鼻に触れると、鼻血が出ている。

……痛い。

「すまんなあ転校生。わしはお前を殴らないかん。殴らな気がすまへんねや。女やからとかそんななんも考えられん程にな」

「トウジ、流石に殴るのは……!」

「わたし、なにか悪いことした、の……?」

知らず内に涙が流れる。

まさか鼻血が出るほどになるとは思っていなかったのだろうか。泣く私を見た鈴原君が一瞬身じろぎする。しかしそれでも私の胸ぐらを掴み上げる。

「謝るからあー！ 苦、しい……！」
「っ！」

すぐに突き放され、また私は背中をうつ。

「……よう聞けよ。わしの妹はなあ。お前が暴れたせいでビルの破片の下敷きになったんやで！ 今入院してて、看病できるんはわししかおらん。もし妹の顔に傷でも残ってみい。絶対許さんからな！」

「――」
知らなかった。私はずっと、私自身のことしか考えていなかった。使徒を倒した先にある、人々を守る使命。それを見て見ぬふりをしていた。……いや違う。そもそも考えてすらいなかった。

私が戦うことで間接的な被害を減らすことはできるが、直接的な被害を考えていなかった。

「ごめん、なさい……」

「泣いたら許されるんちゃうからな！ これから足元よう見とけよ」
踵を返して鈴原君ともうひとりから私から遠ざかっていく。私はただ、その場で弱々しく泣きじやくるしかできなかった。

あの時、私をもっとちゃんとエヴァを操縦できたら被害をもっと減らせたはずだ。そんな当たり前の事実を突きつけられた。

私はなんて馬鹿なのだろう。

「碓さん！！」

名前を呼ばれて顔を上げると、委員長が血相を変えて走り寄ってきていた。

「碓さんが鈴原君に連れていかれたって聞いて来てみたけど……鼻血が出るほど殴るなんて最低ね！」

ポケットからハンカチを取り出し、私の鼻にあてる。

「委員長さん、これは私が悪いから……。鈴原君は悪くないの。だから、自分で……」

「そんなの関係ないわ！　なんであっても暴力はだめなの！　あとヒカリでいいわよ。立てる？」

「あ、ありがとう、ヒカリ」

肩を借りて立ち上がる。ハンカチを押さえ、制服についていないかを確認する。裾に少しだけ滲んでしまっている。

「あ！　血がついてるわね。急いで水で流しましょう！　あと保健室にも……」

「ヒカリ、やっぱり自分で……」

「委員長ではなく、一人の人間として泣いてる子を見過ごせないのよ」
「……ありがとう。私も、カノンでいいから」

「じゃあ行きましょうカノン」

「う、うん」

ヒカリに連れられて私は歩き始める。顔がヒリヒリと痛い。でもそれ以上に、心がどうしようもなく痛かった。

Yori、上手に

「エヴァの射出口の位置、非常用電源、兵装ビルの配置、回収スポット、全部頭に入ってるわね」

「……はい、赤木さん」

「リツコでいいわ」

「……はい」

エントリープラグ内で私は俯きながら返事を返す。

青白いプラグスーツは私のボディーラインをくつきりと表す。これはスタイル維持を意識させる格好という意味では大成功だ。しかし、未だ発展途上の双丘までくつきりとなると総合してマイナス点だ。これは所謂公開処刑だ。

あとでリツコさんに意見しよう。

エヴァ初号機が立っている。場所はネルフ内、閉鎖空間。エヴァが数歩歩く距離もないほどの広さだ。まさに檻。

エヴァに何本かケーブルが接続されている。私がエヴァを通じて見ている街の光景は、仮想だ。技術的なことは何一つわからないが、これで効率よく訓練ができる。

使徒と呼ばれる敵を倒すために、私にはより高レベルな操縦が求められる。私自身も、歩いただけで一喜一憂する領域から脱するために血の滲むような努力をして基本動作をマスターした。

全ては使徒を倒し、被害を抑えるため。

「ではインダクションモードへ切り替え。その後、パレットガンでの射撃訓練が始まるわよ」

「……わかりました」

三秒間のカウントダウンで一体の疑似使徒が登場する。姿はこの前倒したものと似ている。

「いい？ 使徒には必ずコアと呼ばれる赤い球があります。それを破壊することで殲滅できます。画面を見ながら、目標をセンターに入れてスイッチ。これを意識して」

ビルの間を走り抜け、私は隙を見せた敵のコアに向けてパレットガ

ンを一斉射撃する。狙いは大きく外れ、コアには一発も当たらずに周りのビルなどに命中する。

「あ」

今の私のミスで誰かが死ぬかもしれない。もしあのビルに人がまだ残っていたら、きつと死んでいた。そう言い聞かせる。より上手く操縦して、使徒を倒さないと。

「落ち着いて」

「はい」

敵から発せられる光線を避け、ビルを利用して死角に入り込む。そして一斉射撃。今度は半分くらいがコアに命中し、敵が倒れた。

銃を持つことに抵抗はなくなった。実際に私の手が持っているわけではない、という考え方ができるが、そのようなことでいいじじすることは許されない。

——武器を、私は持っているのだ。

リッコさんのアドバイス通り、私はコアをセンターに収め、スイッチを押す。

より素早く、より正確に。

全ては使徒を倒し、被害を抑えるため。

いつからか、嫌なことがあった時、それを客観的に捉えることができるようになった。まるで自分ではない誰かが怒られているのを、一歩引いた場所で現場を眺めているような感覚だ。

そして私はそこにいる私を守るために頑張る。

敵は倒され、次々とレベルアップする。移動速度、出現感覚、反応速度。どれも上げられるが、それでも私はおいていかれないように必死になる。

訓練を終えた私は、また自分が少し強くなったのだと嬉しく感じた。

◆

仕事帰りのミサトさんと買い物をして一緒に家に帰る。「ただいま」って言うのも慣れた。

この家もずいぶんとキレイになった。私の懸命な家に対する救助

活動（掃除）のおかげで生気を取り戻した。今後はミサトさんが家を荒らさないかを逐一チェックする必要があるだろう。

さっさと風呂に突撃するのを見送り、私は買い物袋を机に置いた。今日の夕食は肉じゃがにしよう。浴室まで行って、「今日は肉じゃがにしますね」と伝えると、「あら、楽しみにしてるわね」と嬉しそうな返事。

料理を始めようかと戻ってくると、そこにはペット用のお菓子を啜えているペンペンがいた。ペンペンが私に気づき、数秒睨み合ったあと、親指を立てて何事もなかったようにミサトさんの部屋に消えた。

「あー…ペンペン！こらー！」

こんな時間にダメなのに。追いかけるとすでに袋は破かれ、美味しそうなお菓子を頬張っている。開けてしまったものは仕方ない。諦めて帰ろうとするが、私の目にふと一冊のノートがとまった。

手にとってタイトルを読むと、『E計画サードチルドレン 監督日誌』と書かれている。

「……………」

開いてみると、私がこの家に来た日から今日まで毎日、びっしりと私の様子が書かれている。その中には私が鈴原君に殴られて鼻血を出したことまで書かれている。

学校であつたこと、私は何もミサトさんに話してないのに。私を監視しやすくするために、同居をさせたの…………？」

「くあああああッ!! やっぱビールは至高ねえ!!」

三本目のビールを一気飲みしたミサトさんが悦びに震える。ペンペンと乾杯までして上機嫌だ。ドライヤーもせずに濡れた髪。首にかけたタオル。おっさん臭い。

「どう？ カノンちゃんも飲む？」

「ダメに決まってるでしょ！ 未成年なんだから」

「相変わらず身も蓋もない子ね…………」

「どうしますかミサトさん？ 『ネルフ作戦部長、未成年に飲酒を強要』って新聞の一面に大きく載るのは？ 結構貴重な経験だと思いますよ」

「思った以上に毒舌を吐く子ね……」

私の肉じゃがは好評だったようだ。私の三倍ほどの量を平らげ、さらにおつまみまで手を出している。

「今日の訓練見てたけど、エヴァの操縦だいぶ慣れたそうね」

「それは……まあはい。もっと上手くなってみせます」

「嬉しいこと言うじゃないの」

「だって私……それ以外特にすることがありませんから」

自嘲しながら私は微笑んだ。

ビールを飲むミサトさんの手が止まった。

「エヴァ以外にもあるじゃない。学校とか。どうなの？ 友達とかはできたの？」

思い出すのは鈴原君に殴られたこと。ヒカリにハンカチを借りてそのままでいること。

学校が嫌いというわけではない。勉強することは大切だから、その場を提供してもらえるとという意味でだ。それに人との関係を希薄にしているから嫌なことはない。でも楽しいこともない。

「別に……普通ですよ」

「しっかり教えてくれないとわからないじゃないーい。これでも保護者は私なんだから」

「……っ！」

ミサトさんはあくまで私の口から直接聞きたかったのだと思う。状況を何らかの手段で知っているだけで、私から経験として聞く。その中で私の挙動などをきつとあのノートに書くのだろう。

それが堪らなく嫌だった。私がまるで、割れ物注意のレッテルがはられたようで、嫌だった。

急に立ち上がった私をミサトさんが驚いた目で見ている。

「どうしたの？ トイレ？ なにかあたって？」

「私、もう寝ます」

「え？」

どうして私が怒っているのかわからないミサトさんは、あとでこのことを書くに違いない。それでノートに築かれる『何か変な私』像が

嫌いだ。私が嫌いだ。

今日はもう、何も考えたくなかった。

◆ 「綾波さん」

「……………なに？」

授業の終わり、私は綾波さんに話しかける。ずっと外を眺めていた綾波さんは私を見る。見惚れる水色の髪。吸い込まれるような赤い瞳。まるで人形のような顔だ。

「この前は面と向かって話せなかったから改めて紹介させてほしいの。私は碓カノン。よろしくね」

「……………よろしく」

「ところでエヴァのことなんだけど、どうしたら上手く操縦できるようになるの？ 綾波さんはわかる？」

「……………心を開くの」

綾波さんって口下手だったりして。ずっと一言で済むようなことを言っているし、そもそも言葉に生氣を感じられない。おそらく私以上に人と会話がしたことがないのだろう。

「心を開くって……………どういうこと？」

「……………エヴァに心を開くの」

「それは……………難しい？」

「……………慣れるとそこまで難しくもないわ」

ノウハウ……………のようなものかな？ 職人が言葉では言い表せない技術があるのと似たようなもので、感覚で掴みを得るというのなら、このアドバイスは私にはまだ早そうだ。

「そうなんだ。ありがとう。じゃあさ、今度綾波さんのテストとか実験のときに見学させてもらってもいいかな？ 参考にしたいんだ」

「……………ええ」

「ありがとう！ 頑張ろうね！」

良かった。これで私の実力も上がってほしい。綾波さんの手を掴んで振ると、目を見開く。もしかして人との接触が嫌だったかもしれない。「急に触ってごめんね」と言ったら「……………大丈夫よ」と言いなが

ら自分の手を凝視している。

なんだかその仕草が可愛らしくて、綾波さんの口数をもっと増やしてみたら会話が弾みそうな気がした。

今度はヒカリにハンカチを返さないとかだ。今は鈴原君ともうひとりもない。ヒカリもない。トイレに行っているのかな？

教室を出ようとしたその時、ポケットの携帯が鳴った。ネルフからの呼び出し、非常召集だ。

どうやら綾波さんの携帯にも同じ連絡が来たらしく、ふたりで一緒にネルフに出向することになった。

「今って零号機は凍結中なんだよね。たぶん使徒だろうし、出撃するのは私だけか」

「…………ごめんなさい」

「謝る必要なんてないよ。でも凍結解除されたらいっぱい頼らせてもらうからね」

「…………ええ」

校門に黒い車が止まっている。黒服の人たちが私達を見つけると手招きしてくれた。急いで車に乗り込んで、ネルフへ向かう。

『来たわね。使徒はすでに防衛ラインを突破。すぐにでも出撃してもらうわ。いいカノンちゃん？』

「はい」

ミサトさんが通信で連絡してくる。私はプラグスーツに着替えながら得られた使徒に関するデータを閲覧する。

スルメみたいな形で、胸にムカデのような脚。二本の触手。赤のデザインで、前回とは全く違ったタイプであることがわかる。

エントリープラグに乗り込んで、エヴァに挿入される。虹色の光景が広がり、シンクロが完了する。

『エヴァ射出後、敵A・T・フィールドを中和しつつパレットの一斉射。練習どおり大丈夫ね？』

「はい」

コアらしき場所はわかっている。強襲して一気に撃破する。これが一番理想的な流れだ。

「エヴァ初号機、発進！」

カタパルトの急上昇に慣れるのは時間がかかりそうだ。レバーを力強く握ってなんとか耐え抜く。射出口から素早く身を現し、装備しているパレットの引き金を絞る。

目標をセンターに入れてスイッチ！ 実戦となると緊張してしまう。パレットの反動が普段より大きく感じてしまう。コアを狙ったつもりで撃ったが、おそらくほぼが外れた。

弾着の煙で使徒の姿が霞む。これ以上撃ち続けても意味がなさそうだ。

『煙で敵が見えないわ！ 落ち着いて！ いったん留めるのよカノンちゃん！』

射撃を止め、様子を伺う。使徒が撃破された時、多量の血色の液体が飛び散るはずだ。それが無いということは撃破できていないということ。

仕留め損なった。

煙を裂き、二本の触手が鞭のように激しく襲いかかってくる。反応が僅かに遅れた私はパレットを破壊されてしまう。

「うあっ！」

そのまま後ろに倒れ、尻もちをつく。

『予備のライフルを出すわ！ 受け取って！』

すぐ左手のビルのシャッターが上がり、ライフルが現れる。

立て！ 立て！ 私!! ここでうじうじすることは許されない!!

左手を伸ばす。しかしそれを察知した使徒の触手がしなるように伸び、ビルを破壊した。

「っ！」

すぐ目の前にまで使徒が迫り、この前を思い出す。倒れる私を無言で見下ろす使徒。殺意をもった、明確な敵としての使徒を。

触手が暴れる。

右に身を投げ、その猛攻から逃げる。修復されたビルも、容易く使徒の攻撃で破壊される。あの攻撃の前では近づけそうにない。

一瞬のミスが命取りだ。私はその内、アンビリカルケーブルが断線

したことに気づく。回避ばかり考えていて、このことを全く考えていなかった！

「どうすればいいですか!」

『まずは距離をとって! その後ビルを利用して接近、死角に入り込んでナイフで仕留めて』

「わかりまし、た!」

ステップを踏む。使徒から離れ、呼吸を整えよう。

しかし何かに足首を掴まれてしまう。見るまでもなく触手であると理解する。ずっと私は視界の中央で暴れる範囲を注視していた。つまり視界の端、地面スレスレで私の認識外を狙われたのだ。

——やられた!

と思ったと同時にエヴァを軽々と宙に投げ捨てられる。

激しく山に背中から落下し、私はフィードバックの痛みに呻く。

「ううう……」

しかし、おかげで使徒との距離が取れた。今から急いで非常用電源の場所まで戻れば、戦闘に復帰できる。

『ダメージは軽微よ! いけるかしら?! 無理なら一度撤退もあるわよ』

「大丈夫です、いけます!」

呼吸を整えて、いけると自分を励ます。撤退なんて許されない。今ここで必ず倒す。私はそのためにずっと訓練したのだ。

鈴原君の言葉を思い出す。『足元よう見とけよ』と。私の操縦が下手なせいで身近な人が怪我をしている。それが私には何よりも耐え難い苦痛だった。

大丈夫、立ち上げられる。まだ戦える。

……ふと、手の辺りに見慣れない色が見えた。山はだいたい緑だから、異物との違いがよくわかる。なんだろうと思い、その正体を確認する。

「——あ」

そこには鈴原君とたぶん相田君であろうもうひとり、そしてなぜかヒカリもいた。

私の落ち着きは、
乱された。

幼くて、子供っぽくて

この地下シエルターは広い。

鈴原たち生徒全員が収容されてもなお余りある広さだ。生徒たちは先生の誘導に従い、各々クラスごとに集められている。だが実際は他クラスの友達と話すために歩き回ったりとかなり自由に過ごしている。いつ避難指示が解除されるのかわからない。これは仕方のないことだった。

そんな中、ひとりの生徒が貧乏ゆすりをしながらモバイルテレビとにらめっこをしている。そう、この生徒こそ、カノンが自己紹介した時に品定めするかのような目で見ていた男子、相田ケンスケだ。

背中まで伸ばした美しい黒髪。若干幼さが残る柔らかい顔立ちは庇護欲をそそることだろう。ただ指摘する点は、少し根暗なところだ。綾波レイのようなミスティアスを醸し出しているわけではなく、中途半端なポジションにいる。どちらかに傾けば人気が出ること間違いないとみる。

「お前ほんま好きやなあ。こーゆーの」

鈴原が相田の貧乏ゆすりに気づいて近づいてくる。

「まあね。情報規制。あーあ、やだなあ。俺だってエヴァの戦い見たいなあ！ こんなビッグイベントだっていうのにー。一度でいいから見たいー」

そこで相田は考える。ついこの前、父親のパソコンを触っているときにゲットしたシエルターに関する資料。もちろん、外への出口への通路、そのロック解除方法が記載されている。

どうしても見たかった。見れるのならば死んでもいい……とまでは思わないが、それでもどうしても見たかった。目の前に最高の食事が置かれているのに待てをくらったペットの如くつらい。

……いや、相田はペットなどではない。人間だ。だからこそ、やりたいことをやるのが人間ではないだろうか!!

「……トウジ」

「なんや」

「内緒で外に出ようぜ」

「はあ?! 外に出るなんて何ゆーとんねん!!」

「声大きい!」

鈴原のリアクションに誰も気づいていないことを確認し、ホッと胸を撫で下ろす。

「いいか? これはトウジにも関係あることだよ」

「んなわけないやろ」

「考えてもみなよ。トウジは理由はともあれパイロットである碓を殴ったんだ。そのせいで碓が乗らないなんて言い出したら俺たち、死ぬんだぜ? トウジには、戦いを見届ける義務があると思うんだけどな」

前半はただの動機付けだ。ひとりだけで行くのは少し気が引ける。だから誰かと一緒にがいいという無意識での説得だった。

鈴原もそれがなんとなくわかったのだろう。目を細め、僅かに口角を上げる。

「委員長、わしら便所や」

洞木は友達と談笑していた。もちろん委員長としてクラスメイトみんなの場所はだいたい把握している。しかし驚くことに、鈴原はわざわざ席を外すことを伝えに来たのだ。

洞木を腫れ物扱いしている鈴原が、だ。安心する半面、疑ってしまふ。特に嬉しそうにやにやにやしている相田が怪しい。さつき鈴原が何かを叫んでいたのも知っているし、これは何か良からぬことを考えてそうだ。

単なる女の勘ではあるが。

「うん、いつてらっしやい」

ふたりが無効に消えたのを見届けると、洞木も立ち上がる。さすがに男子便所に突入するわけには行かないからトイレ周辺で待ち、出てきたところを確認するだけ。

杞憂で済めばいいが、万が一がある。委員長として、皆の面倒を見なければ。

影に隠れてここで適当に時間を潰している感を出す。数分待つて

もふたりは洞木の前に現れない。不思議に思い、角から顔を覗かせた時、遠くの方からガチャリ、と重い音が聞こえた。

あっちの方向はゲートの方向だ。まさか、今のはゲートが開いた音!?

洞木は急いで駆けつける。もし事実なら先生に知らせないといけない。外の光が伸びている。風が鋭く流れている。間違いなくゲートは開かれている!

ゲートから外に出ると、遠くで二体の巨大物体が戦っているのが見えた。すぐ近くではないだけ幸いだ。すぐに戻って報告しようと考えたが、開けたということは誰かが外にいるということだ。その人を連れ戻さないと。

「おお！ すっごい!! あれがエヴァンゲリオン!! あれが使徒かつ!!」

興奮して叫んでいる声が聞こえた。坂の上、ふたりの人間がいた。いったい誰がこんなことを。激怒しながら洞木は声を張った。

「あなたたち！ はやく戻ってき……つて、鈴原君と相田君!!」
「二げ、委員長!!」

説教する余裕なんてない。今は死の危険があるのだ。チカラづくでも連れ戻そうと坂を登り、前に立ちはだかった。

「何考えてるの！ 本当に死ぬわよ!!」

ふたりの腕を掴む。そのまま戻れば先生から厳しい説教だけで済みそうだ。洞木はこれで安心してしまった。だから、飛ばされてくるエヴァから逃げられなかった。

人生一番の激しい後悔をした。

◆ 「——どう、して」

使徒から完全に意識が逸れてしまう。民間人は地下シエルターにいるはずだ。私を殴った人が、そこにいる。それだけでも十分に恐怖だった。

はやく戻って。……いや、無理だ。使徒がもうそこまで迫ってきている。

変に立ち上がってしまおうと三人を潰してしまおうかもしれない。それだけはなんとしてでも避けなければならぬ。

触手がビュオツ！ と襲いかかる。立つことはできないと判断した私は手を前に突き出し、直接掴んで防ぐ。掌がじわじわと焼かれる痛みを感じる。我慢することはできるが、長時間となるとキツイ。「くっ……い！」

使徒が更に接近する。覆いかぶさるように全体重をかけてくる。胴体のムカデ脚がエヴァの胸部装甲をガリガリと削る。恐ろしいほどのスピードで剥がされていく。ほんの少しで数枚がなくなる。胸を乱暴に引掻かれるフィードバックに私は呻く。手が痛い。胸も痛い。でも、まだ戦える。

『カノンちゃん！ 使徒を引き離れたあと退却、出直すわよ』

アンビリカルケーブル断線がここで足を引っ張る。残り時間が三分半をきった。もたもたしている時間はない。私の今のエヴァ操縦技術なら、たぶん三人を傷つけないように立ち上がることができる。それでも、もしもの場合がある。

私はエヴァを固定モードにし、エントリープラグをイジェクトする。

『カノンちゃん?!』

私のしたことは明らかかな命令無視だ。でも目の前にいる人を無視するなら私は喜んで上司の命令を無視しよう。

「三人、とも……乗ってッ！」

学校では一度も聞かなかつた私の命令口調に、三人は物言わず素早く乗り込んでくる。

「み、水!」

「溺れてまうわ!」

「ああつ！ カメラが!」

三人にかまっている時間はない。急いでエントリープラグを再挿入する。これで動きの制限はなくなった。腕を広げ、脚を曲げて使徒を蹴り飛ばす。

「向こう、うに……行けっ!」

使徒は都市に戻され、大きな隙を見せる。

痛みから解放され、私は大きく息を吐いた。その吐息は震えている。

「カノン、大丈夫?」

ヒカリが私を心配してくれている。どんな理由であれ外に出ていることは許されないことだが、こうして心配してくれる人が身近にいるのは嬉しい。

「うん……大丈夫だよ」

『今よー！ 撤退して!』

ミサトさんの声が私の意識を切り替えさせる。残り時間は少ない。だが、撤退するには十分だ。

ここで撤退? 使徒が目の前にいるのに? 私にはわからなかった。使徒は倒さないと。このまま野放しにするとどれだけの被害を被るのか私にはわからない。

私のせいで鈴原君の妹が怪我をした。今度は私のせいで怪我はさせないもの、もつと不安にさせるのか? いつ警報は解除されるのかと。私達は死んでしまうのではないかと。

そんな思いはさせたくない。

そんなことをさせるのなら、碓カノンはここで死んでしまえ!!

「転校生、撤退しろ言うとするで!!」

鈴原君が私の肩を揺らす。その焦りは確かだ。今私が考えていた時間をもつたいたいと感じたのだろう。でも、次は絶対にもつたいたいと感じさせない。

手の表皮の融解、胸部装甲の損傷。アラートが鳴り止まない。

「ここで倒すよ。もう一度と、私のせいで誰かを傷つけないからね」

そう、微笑みかけた。

そして活動限界が三十秒をきった瞬間、プログレッシブナイフを装備して私は叫び、山を駆け下りた。

無我夢中だった。私は命令無視を重ねたのだ。ミサトさんが『あの馬鹿……』って言ったのが微かに聞こえた。ごめんなさい、私はそれ

でも使徒を倒す。

使徒はすでに起き上がっていて、ただ突撃してくるエヴァを攻撃するなんて容易いことだった。触手が鋭く伸び、身体を貫通させる。

「うあッー・ぐッー」

シンクロ率が高ければ高いほどフィードバックは重いと聞いている。普通に考えたら身体を貫かれて無事なはずがない。それでも胃の内容物を吐き出しそうな激痛で済んでいるのは、シンクロ率がそこまで高くないという証拠だ。

大打撃を与えられたが、これで使徒の動きを制限させることができた。

「あああああああああああああ!!」

超近距離まで接近し、私はナイフを使徒のコアに突き立てた。激しく火花が散り、使徒の触手が暴れる。活動限界まであと十秒。

お願いだから、倒れてちょうだい!

叫んで、叫んで、痛みを紛らわせながら割れることを祈る。レバーをありったけの力で限界まで押し込んで、さらに深く潜り込ませる。そしてエヴァが停止する寸前、コアは割れた。そのまま私は前のめに力なく倒れこみ、胸を抑えて大きくえづく。

喉元までこみ上げてきたものを我慢できずに吐き出してしまう。不純物が混ざったとアラートが鳴る。

「あ……………ごめん」

急いでL・C・Lを排出しておく。それから救助が来るまでずっと私達は一言も言葉を発することはなかった。

三人は保安部に引き渡され、私はブリーフィングルームに呼び出された。早くシャワーを浴びたいが、ミサトさんたちが気持ちもよくわかるからおとなしく従った。

私はベンチに腰掛け、栄養ゼリーを十秒で全て吸った。

ミサトさんが壁にもたれて私を睨んでいる。たった二人だけの空間。思い空気だ。

「なぜ命令を無視したの? 無断で三人をエントリープラグに入れたことはそこまで言わないわ。でも撤退命令を無視するのは立派な違

「反よ」

「はい……すみませんでした」

「あなたの上司は私よ。あなたは私の命令に従う義務があるの。わかるかしら」

「……はい」

ミサトさんと目を合わせたくない。私は俯いたまま中身のない返事を返す。

「本当にわかってるんでしょうね!! もしあなたがあそこで活動限界を迎えたら人類は終わっていたのよ!!」

零号機は起動実験にすら成功していない。だから今稼働可能なエヴァは初号機しかない。活動限界で停止した初号機を使徒の目の前で堂々と回収、もしくはアンビリカルケーブルを接続することなんて不可能だ。

私はそのことを一切考えていなかった。ただ、使徒を倒す。そのことしか頭になかった。考えのない単なる馬鹿だったが、私は間違っているとは思わない。

「……でも、使徒は倒せました。三人も守れました。それでいいんじゃないですか。私、この前と比べてすごく操縦が上手くなりましたよ? これからも訓練頑張りますよ」

直後、私の頬にミサトさんが平手打ちした。痛かったが、痛いとは感じなかった。そのまま胸ぐらを掴み上げられ、強引に目を合わせられる。

「あなたねえ!」

ミサトさんに殴られたという事実が苦しかった。これから一緒に住む人。私はこんな亀裂を生みたくない。でも、あんな風に私を監視しているなんて知ってしまったら、私は同居人としてではなくただの監視対象物としてそばに置かれているような気がして、どうしようもなく苦しかった。

目尻に熱いものを感じる。私はミサトさんを睨みつけた。

「ミサトさんにとって私は何ですか? エヴァを操縦できる便利な部下ですか? それとも根暗なくせに生意気な、どうしようもない子供

ですか？ 私と同居するように言ったのは、私を監視しやすいからでしょう？ そんなの、前の家と同じです。私は生きてるふりをするのをやめようって……前の私から変わろうと思ってお父さんの呼び出しに応えました。それでこうなるのなら、私は……」

「……………」

私とミサトさんは睨み合う。

たぶん三分ほどまったく動じずにいた。そしてついに折れたミサトさんが私を突き放した。

「もういいわ、今日は着替えて早く帰りなさい」

「はい」

ゼリーの容器をゴミ箱に捨てて立ち上がる。ふらりとバランスを崩し、前かがみに倒れそうになる。咄嗟に手を差し伸ばしたミサトさんに支えられる。これだけ喧嘩したのにその相手に助けてもらうなんて恥ずかしい。

「誰か呼ぶ？」

「いません。少し……疲れただけです」

自動ドアをくぐり、シャワー室に向かう。プラグスーツを脱ぎ、シャワーを頭から浴びる。壁に背中を預け、ずりずりと擦りながら私はその場に座り込んだ。ここには誰もいない。シャワーの音がうるさい。

私は声が枯れるまで叫び続けた。



「あ……」

「……………」

制服に着替えてシャワー室を出ると目の前に綾波さんがいた。何も言わずに、ただじつと私を見つめている。

「えつと……何か用かな？ あ、それともシャワー使うの？」

「……あなたの叫び声が聞こえた」

「あー………そっ、か」

「……なぜ、叫んでいたの？」

まるで悪事を問い詰められているような気分だ。思わず萎縮して

きまい、その場で誤魔化すことだってできたのに、私は正直に答えてしまった。

「悔しかった……ううん、たぶん悲しかったからかな」

「……悲しかった？ なぜ」

「ミサトさんに殴られたから。監視されていたから。使徒を倒したのに、褒めてもらえなかったからだと思う」

怒られるだけ怒られて、それで終わりだった。私は使徒を倒したところへの見返りをどこかで欲していた。お金とかそういう可視化できるものではなく、「ありがとう」とか、「よくやった」とかを聞きたかったのだと。

「そう」

「綾波さんは嫌なことがあった時、大声出したりしないの？」

「しないわ」

「私が叫んでいたのを聞いて、どう思った？」

「どう、とは？」

「ほら、怖い人だなとか。変な人だなとか」

綾波さんは微動だにせず、私を見つめていた。なんだか気恥ずかしい。本当に考えているのかと疑問に思ったのと綾波さんが答えを返したのは同時だった。

「幼い人だと、思った」

「幼い……？」

「私、行くから」

そう言い残すと綾波さんは通路の向こうに消えてしまった。

指摘されたことがよくわからなかった。私はバスに揺られながらもずっと考えていた。危うく乗り過ぎそうになったほどだ。

でも、ミサトさんとあれだけ喧嘩した私の気持ちは収まる気配を見せなかった。出ていくこう。この家から出て行こう。誰も寝てはならぬ私を知らない、どこか遠くへ。

家に帰った私はそそくさと荷物をまとめ始める。たった十分少しで完了し、私は嘆息する。所詮はこの程度だったのだと。

お父さんは今日の私の行動について一切何も言わない。というよ

りそもそも顔も合わせていない。変わりたくてエヴァに乗ったのに、これじゃあ私はただの便利な道具だ。かばんを背負い、自室を出る。ペンペンがジツと見ている。それに気づいた私は優しくペンペンを抱き寄せた。

「短い間だったけどありがとう、ペンペン。生意気だったけど、嫌いじゃなかったよ」

くえっ、と鳴くとペンペンはそれ以上私に何もしようとしなかった。しかしそのつぶらな瞳は私をどこまでも追いかけていた。

「幼い、か」

容姿の話ではない。それぐらいわかっている。きつと綾波さんは私を心が幼い人だと思ったのだ。それはそうだ。身勝手な行動をし、結果怒られ、その鬱憤を晴らすために叫ぶ。

「……出て行くって決めたんだから」

玄関に立つと、また自問自答を繰り返してしまう。綾波さんの言葉が足首に絡みつく。強引に薙ぎ払い、私は外へ出た。

私のしようとしているは果たして正しいのか。傍から見れば幼いのか。

「私って、どうしようもなく幼いか」

変わろうとして、私はエヴァに乗ると言った。今出て行けば、ミサトさんと向き合った経験から逃げることになる。それは私の成長の停滞であり、望みの反するところだ。

……ミサトさんともう一度話そう。私は私で思っていることがある。ミサトさんはミサトさんで思っていることがある。今一度ぶつけて、前に進もう。

家に戻ってかばんから財布だけ抜き取り、あとは部屋に放り投げる。

今日は美味しいビールを買ってあげよう。夕食はビールに合うものにしよう。

私はこれで、変われるのだろうか。

冷たい唐揚げ

「ミサト」

始末書をようやく終えたミサトはビールに飢えながらだらりと椅子にもたれている。ぐったりと机に突っ伏した様子を見かねてリツコが声をかけたのだ。猫の模様のコップを片手に、コーヒーを啜る。「なあに？」

「お疲れ様。今日はもう上がり？」

「そうよ。帰ったらビールよビール。色々あったからね」

「カノンちゃんかしら？」

「まあ……そうね」

ミサトは自責していた。監視ノートが存在が知られたことではない。いつかはバレるだろうと思っていたが、想像よりはやくにバレただけ。それよりもカノンが本心を曝け出したことだ。ミサトがカノンをどう思っているか。あそこまで話が膨らむとは。

「思春期の子供は難しいわ。男の子は母親への拒絶。女の子は自問の繰り返しよ」

「……………」

「あの子は相当こじらせてるわよ、心。知っているとは思うけど、MAGIのシミュレーションによると、ひと悶着あったあと、あの子がエヴァに乗り続けることに抵抗はなくなるわ。でもそれにだんだん依存してしまい、最終的に機械のようになるわ」

「ターミネーターになるのは嫌ね……。まあ冗談として。そのひと悶着ってのが今ってこと？」

「ええ。このあと家出るわね。ほぼ間違いなく」

ミサトが頭を抱える。先に帰らせたのがまずかったか。足元もふらついていたし、無理にでも自分がそばにいるほうが良かったかもしれない。しかし喧嘩したばかり、互いに難しいところだ。

「私、間違っていたかしら？」

「そんなの私にわかるわけないわ。子供なんていないし。MAGIに訊いてみたら？」

「それはまた違うような気がするからいい」

「それがいいわ。人間関係の問題なんて、機械が真に解決できるわけがないから」

碓司令は娘の失態に何も口を出さない。全て部下であるミサトに丸投げ。いつそMAGIに司令とカノンの相性マッチングでもしてやりたい。が、そんな私用のために使うわけにはいかない。テクノロジーを集結した巨大コンピューター。実質的な政治はこれが担っているとも言われている。

記入ミスなどが無いかを再度チェックして問題がないことを確認し、書類をまとめて端を揃える。

「そっちももう終わり？」

「戦闘データの整理がまだだから徹夜ね。異物が紛れ込んだ状態での活動データは貴重ではないものの、保存しておくべきものよ。頭が痛いわ」

「そんな時はビールが一番よ」

「アル中は辛いわね」

ミサトは荷物をまとめ、ひらひらと手を振って部屋をあとにした。日向などオペレーターたちも半数ほどが帰っている。

ポケットから携帯を取り出し、保安部にかける。

「カノンちゃん、今どこにいる？」

『現在自宅にいます。帰宅後、買い物に出かけていました』

「……それは本当ね？」

『間違いありません』

「そう、ありがとう」

なるべく急いで帰ろうと決意した。

MAGIの演算結果は全て正しい。が、それに反してカノンがまだ家にいるという事実に驚いた。買い物にかけたというのが、家出するつもりがない何よりの証拠だ。

つまり、カノンに何かしらの変化があったのだ。あの子にはあの子なりの考えがあった。第四使徒が来るまでずっと、こちらが提供した訓練プログラム以上の量をカノンはずっと自主的に行っていた。ス

タツフは素直に感心していた。ミサトもその一人だ。しかしその背景までは探らなかつた。

「……馬鹿だったのは私か」

車をとぼしながらミサトは自責する。シエルターから抜け出した三人の尋問報告書を見ても明らかだつた。ミサトにカノンが学校で何をしていたかなんて筒抜けだ。だから、殴られたことも知っている。エントリープラグ内での会話で背景を理解し、同時に気づけなかつた自分を責めた。

所詮はまだまだ子供。しかも女の子。その繊細な心は、ミサトの見えないところで傷ついていたのだ。

唇を噛みしめる。

いったいカノンをどう見ていたのか。それをきちんと面と向かつて伝えなければならぬ。ミサトもまだ、大人になりきれていないのかもしれない。

マンションに着き、エレベーターで上がって自宅の前に立つ。するとなんだかいい香りがしてきた。これは……唐揚げか？

鍵を差し込みドアを開け、「ただいま」と声をかけると、エプロン姿のカノンがととと走り寄ってきた。なんだか飼い主の帰宅に気づいた子猫のようだ。

なんだか可愛らしい。

「おかえりなさい、ミサトさん」

「え、ええ」

「ご飯、できてますけど……食べますか？」

「……そうね」

適当に荷物を自室に放り投げ、数秒で私服にはや着替え。テーブルにつくと、すでに皿が並べられていた。唐揚げはできたてだ。実にいいタイミングで帰ってこられた。……いや、カノンがおおよその時間を把握して合わせたのかもしれない。

「ビールは……」

「ほ」

そう言つて冷蔵庫から渡されたのは、いつものビールではなかつ

た。二ランクほど上の、美味しいビールだった。ミサトは目を剥く。ビールを大量に買い込むミサトであろうとさすがに金銭事情は理解している。

唐揚げにビール。最高すぎる組み合わせだ。思わずよだれが垂れる。

「ミサトさんがどれが一番好きなのかわからないので、かけるものあらかた揃えておきました」

「そこまで……」

「私が色んなのを試してみたいっていうのもありますけど」

「私は醤油派ね」

「……え？ あ、それは予想外でした。でも冷蔵庫にあるので大丈夫ですね」

テレビはついていますが、ミサトもカノンも見なかった。ビールの悦びを叫ぶこともなく、ミサトはもくもくと食べ始める。

「ポン酢とってください」

「はい」

「ありがとうございます」

食事は美味しい。しかし、美味しいという気持ちにはなれなかった。なぜならまだふたりの間には溝があったからだ。先程からちらちらとミサトの方を見ていることに気づいている。

話しかけようと何度か口をばくばくさせている。そしてついに名前を呼んでも「あ、やっぱりなんでもないです……」と終わらせてしまう。

この子はこの子なりに頑張っている。話し合おうとする意志を感じられる。

子供が頑張っているのだ。ここで大人が動かなければなんとする。

「カノンちゃん」

「なんですか？」

「ごめんなさい」

「え？」

ぼろりとカノンは箸に挟んでいた唐揚げを落とす。ミサトから先

に謝られることに驚いたようだ。

「あなたのこと、きちんと知ろうとせずにただ叱りつけてしまった」
酔いはない。ビールはまだ少量しか飲んでいない。その代わりに唐揚げはすでに半分食べてしまっている。カノンは一度目を逸らすも、意を決したのか、ミサトと向かい合った。

「私はエヴァに乗るために来たんじゃない、私自身が変わるために来ました。鈴原君に殴られて、もっと上手に操縦できるようにならないといけないと思って思いました。だから訓練頑張りました」

「……………」

「ミサトさんの命令を無視して使徒を倒したのは……すみませんでした。私の勝手な判断でした。でも正直なところ、反省はしていても後悔はしていません。使徒を倒せてよかった。これで使徒の被害に遭う人を減らすことができましたって思っています」

「そう」

「私ってどうしようもなく子供ですね。そんなのは建前で、たぶん本当は誰かに褒めてほしいんだと思います。だから誰にも褒めてもらえなくて、拗ねてしまったんだと思います。……変わりたいっていうのは一応本気なんですよ?」

カノンはそう言っただけにやりと微笑んだ。

テレビはつまらない漫才を続け、ふたりだけの奇妙な空間が生まれている。ミサトは知ることができた。カノンの本質を。カノンにとって、エヴァとはただの手段でしかないことを。

「わかったわ。カノンちゃんのこと、よくわかった。……いい? エヴァに乗る以上、使徒殲滅はカノンちゃんの義務よ。どんな私情があっても上司である私の命令に必ず従いなさい。もしそれが守れない、またはエヴァに中途半端な気持ちで乗るのならここを出て行って、昔の家に帰りなさい。あなた個人の気持ちなんて、ネルフが……お父さんが考えてくれるとは思えないから」

「……………」

だからこそしっかりと、曖昧にせずに現実を突きつけるのだ。中学生とはいえ社会のことを自然と知り始めている頃。将来のためにも、

毅然とした態度で社会人として伝えなければならぬ。

あなたはぬるい環境にいるのではなく、どちらかをはつきりさせながら生きていかなければならないと。だらだらとその場しのぎの生活をするのは無意味だと。

カノンにはつらく厳しいことだろうが、それがエヴァに乗るということだ。褒められるためだとか、そんなものはネルフからするとどうでもいい。エヴァに乗って、使徒を殲滅できるのならカノン以外でもいいのだ。しかしそれがいないからカノンが乗っているだけだ。ここで、エヴァに自分の意思で乗るか否かを決定する必要がある。

「……怖いですよ、エヴァに乗るのは。本当に。痛いし、ミスすれば人類滅亡って、漫画の世界みたいで、笑っちゃいます。変わりたい。褒めてほしい。エヴァを通じて、私は誰かと繋がることができました。お父さんや学校のクラスメイトたち、リツコさん、ミサトさんももちろん。私は間違いなく独りぼっちだった私から少しずつ変わり始めています。だからそれが無くなってしまわないように、皆を守るために私はエヴァに乗ります。いえ、乗せてください」

出会ったばかりの時のなよなよしたカノンはそこになかった。確かにまだミサトの顔色を窺うような素振りを見せてはいるものの、はつきりとした自分の考えをぶつけてくれた。それだけでも大きな成長と言える。

「あなたの想い、しっかりと受け取ったわ」

ミサトはテレビの電源を切り、ペンペンを呼んで抱き抱えた。

「この子はね、前は実験施設にいてね。殺処分されるところを私が保護したの。なんでかわかるかしら。ただの大食い鳥でなんの役にも立たないのに。私はただ、家に帰ってきた時、おかえりって言うてる……出迎えてくれる誰かがいてほしかったの。……家族がいてくれればいいなって思ったのよ。だからさつきカノンちゃんに言われた時、本当に嬉しかった。ああ、この子は私を待っていたんだなって」

ずっと独りだった。ペンペンはいるが、独りだった。おかげで家は荒れ、生活のレベルが大きく下がった。ペンペンがいなければ、ただ

食って寝るだけの場所になっていたことは間違いない。

そしてカノンが来たことで変わった。家はビフォーアフターのよ
うに生まれ変わり、生活にメリハリがついた。もはやこの家の主はカ
ノンであると指摘されても否定できないほどだ。

楽しかった。誰かが一緒にいるということに。ミサトは誰かの温
もりを密かに求めていたのだ。

ペンペンを下ろし、立ち上がる。そしてカノンの前に立つと、
ぎゅつと優しく抱きしめた。

「さつき言ったのは、ネルフ作戦部長としてよ。ここからはカノン
ちゃんの家族としての私の言葉」

「あ、はい」

「使徒殲滅、ありがとう。よくやってくれたわ。この前に続いてさら
に使徒を倒すなんて私達には決してできない偉業よ。だから胸を張
りなさい。誇っていいわ。もしそれを非難する人が現れたら、カノン
ちゃんがどれだけ凄いことをしたのかを私が嫌というほど聞かせて
やるわ」

ミサトはエヴァには乗れない。エヴァパイロットにすべてを託す
しかない現実が辛い。実際それによってカノンは傷ついたのだ。そ
れを癒やすのは家族として当然のこと。守り抜くのも、当然のこと
だ。

カノンがミサトの腰に手をまわし、強く抱き締める。痛いほどだっ
たが、同時に暖かく感じた。さらに服が濡れているのを感じる。

「わたし……がんばります……ここで、がんばって、生きていきます」

「ええ、私もカノンちゃんにここにいてほしいわ」

「……それって、家事全般っていう意味です、か……？」

泣き顔だったからか、少し目が腫れている。それでもジト目でミサ
トを見上げる。その仕草が可愛らしかった。が、ミサトは誤魔化すた
めにもしくは相応しい返答を考えるためにカノンの頭を撫で始めた。

「……………」

「……………」

「やあねえ家族としてに決まってるじゃないの！」

カノンの髪をぐちやぐちやにしてようやく答えたが、いまいち納得してもらえていないようだ。ミサトはだらしない人間だからそう思われても仕方のないことだ。

「……まあ、いいですよ。こんなならしない人を放っておくとどうなるかわかりませんし」

唐揚げはすでに冷えてしまった。ビールも温くなり、旨さをあまり感じられなかった。

それでもミサトは美味しく感じられた。料理だけではない要素が絡んだのだ。溝は埋まり、ミサトとカノンの談笑は何時間にも及んだ。

流れで風呂も一緒に入ったが、格差を見せつけられたカノンはふてくされてしまい、そそくさと自室に消えようとする。

「ミサトさん、おやすみなさい」

「ん、おやすみ」

そんな何気ないやり取りだけでも、十分幸せだった。

コンプレックスはつらいよ

休日を終え、月曜日を迎えた。

ミサトさんとの喧嘩も収束し、今では仲がいい。だいたい朝は私が起こし、朝のビールはなるべく一本のみに制限させた。ゆくゆくは朝はコーヒーとかにさせるつもりだ。しかし私はコーヒーは飲めず、代わりに牛乳を飲む。

牛乳を飲むと成長する。私は今、間違いなく成長期に迎えているのだ。ここで大きくなることができなければ一生身体的特徴でコンプレックスを抱えることになる。目指せ150センチの大台。私は信じている！ 頼んだよ！ と願いつつ五杯目を飲み干す。

「いっぱい飲むわねー」

「牛乳は健康ですから。それに身体も大きくなりますし、一石二鳥です。学校にも牛乳を持っていきたいところですね」

「おお……さすがに私も職場にビールは持っていないわ……本気度が違う……」

朝食を片付け、弁当の用意も済ませる。基本的に野菜などを中心に入れ、肉は鶏の皮。私が好きなだけだが。ミサトさんはなんでもいそう。たぶん納豆を入れても顔色一つ変えなさそう。

身支度を済ませ、カバンを手取る。手提げが面倒だ。リュックのようなものもいいが、それだと背中が汗でへばりつきそうで嫌だ。

「じゃあ行ってきますね」

玄関に立ち、靴を履く。ミサトさんがだらしなない格好のまま私の後ろに立ち、大きなあくびをする。

「ふあああああ。……あ、そうそう。今日はシンクロテストがあるから、学校終わったらそのまま来てね」

「わかりました。……そうだ、特に学校の宿題もないし、ついでに訓練もさせてもらえませんか？」

「お、やる気に満ち溢れてるわねえ。でもごめんね、この前倒した使徒の検査に皆行くからたぶん難しいと思うわ」

「じゃあ私もそれに行ってもいいですか？」

「いいわよ。気をつけてねー」

「はい、行つてきます」

そう言つてドアを開けると、目の前に三人が立っていた。

「おわっほう!？」

「わっ」

「oh……」

鈴原君と相田君、それにヒカリだ。そういえば使徒戦から一度も顔を合わせていなかった。

「えつと……三人揃つてどうしたの……つて、ミサトさんはとりあえず奥に引つ込んでくださいー!」

ラフな格好のまま出るのは不味い。すでに鈴原君と相田君はミサトさんに釘付けだ。それに気づいたヒカリが鋭い眼光で睨みつけると、ふたりは姿勢を正した。

「あなたたちは……あの時エントリープラグに入った……」

「その節はとんだご迷惑をおかけしました!」

鈴原君がそう言うと、三人が深々と頭を下げる。そして鈴原君が私の前に向き直つた。

また何かを言われるのかもしれないと私は身構える。

「碇……」

「……はい」

「……悪かつた!」

しかし、言われたのは叱責ではなく、謝罪の言葉だった。

「あの時はわしのごことで頭がいっぱいやつた。お前のごこと何も考えずにどついてしもうた。その上命まで助けてもろうて。……殴つてくれ。これで貸し借りチャラや」

「素直にごめんつて言いなさいよ」

「イインチョ! んなこと言わんでくれや! 恥ずいやないか!」

「殴るの? えーと……いいの?」

「もちろんや。遠慮なく本気で殴つてくれよ」

ミサトさんに目配せをすると、「いいんじゃないの?」と面白がつている。鈴原君は背筋を伸ばして私の一撃を待っている。人を殴る

の初めてだ。握りこぶしを作り、大きく振りかぶる。が、止まる。本気でと言っていたから、私の力では半端になるかもしれない。ならビインタのほうが弱い力でもそれなりの威力は出せると思う。

手を広げ、私は渾身の一発を放つ。ペチンツ！　と思っていたより気持ちの良い音が鳴る。

頬にはキレイに私の手形が赤く残り、鈴原君が豆鉄砲を撃たれたような顔になっている。

「ビ、ビインタ……？」

「……あれ？　もしかしてダメだった？」

「そんなことあらへんけど……そうくるとは思わなかったわ……」

「ある意味痛い一発だったな、トウジ。……碓。オレからも謝らせてほしい。もとはといええばオレの欲から皆を危険な目に遭わせてしまった」

相田君も頭を下げ、私はどうすればいいかわからなくなる。再びミサトさんに目配せで助けを求めても、微笑んでいるだけだ。

「皆無事なんだし、これでいいよ。でもこれからは気をつけてね。絶対に皆を守るほど、私はまだ強くないから」

「あ、ああ」

「……そうそう、ヒカりにこれ、返すよ。ありがとう」

かばんから借りたままだったハンカチを手渡す。ちゃんと血も洗い流せている。端っこにたんぽぽが刺繍されている可愛いハンカチだ。

「うん。……そろそろ学校行く？」

「わかった。誰かと登校するのって初めてかも」

「そうなの？　ならこれからみんなと一緒に登校しようよ！　だからこれで私達は友達だよ」

ヒカリの委員長レベルがとても高い。きつと将来は人を思いやれるいい人になる。転校してからずっとひとり登下校していたし、思ってもみない申し出だ。

「わしらもか？」

「当たり前でしょ!!　悪いと思ってるのなら、毎日カノンと登校する

こと！ わかった!？」

委員長権限はこれほどまでに強いのか。ふたりともヒカリの言葉に説き伏せられ、ここに約束が結ばれた。

『友達』という言葉に胸を打たれる。学校でもひとりで過ごしていくことになっていたかもしれない私に、ヒカリは手を差し伸べてくれた。それがたまらなく嬉しい。

「……ありがとう。遅刻しないようにもう行こっか」

「うん」

「ミサトさん、今度こそ行ってきます」

「はい。行ってらっしゃーい」

いつもは沈黙のまま降りていたエレベーターが、今日は少しキツイ。しかしそれはそれで良かった。だからだと話しながら歩いていくと、学校についた頃にはクラスメイトがほぼ全員席についていた状態だった。チャイムがなる五分前。遅刻はしなかったものの、危ういラインだ。

綾波さんは一番最後に登校してきて、パソコンを起動させると肘をつけて窓の外を眺め始める。ここまでがルーチンだ。

昼食の時間になると錠剤を何粒か飲むだけで、それ以上何かを食べることはない。

鈴原君と相田君は購買のパンを食べに消え、私はヒカリと机を合わせて食べる。どうしても綾波さんの様子が気になった私は訊いてみることにした。

「綾波さん」

声をかけると、綾波さんが振り向く。その瞳にはまるで私なんて存在は映っておらず、風景として私を見られているような錯覚に陥る。

「……何？」

「えつと……お昼は食べないの？」

「葉……飲んでから」

「それだけ？」

「ええ」

「ええ!? それはダメだよ! 絶対に午後の授業生き残れないよ!」
机をバン! と叩き、私は吠えた。

「……問題ないわ」

それでも綾波さんは涼しい顔で受け流す。

ヒカリが「そういうことじゃないでしょ……」と残念そうに額に手を当てている。いやでも私にとっては死活問題だ。腹が減っては戦はできない。空腹状態で授業に望むなんて愚の愚。到底考えられない。それに絶賛第二次性徴期真っ最中の中学生が食事を疎かにするのは信じられない。私より身長が高く、かつぱつと見私より胸が大きいくせにまったく食事をしていないなんてこの世界のバランスはどこがおかしい。

誰よりも意識している私が報われないのはおかしい。

「でもやっぱり私は心配だよ。せめて購入のパンとかは食べたほうがいいんじゃない?」

「……この薬でも栄養は取れるわ」
「う」

そう言われると私は何も言えない。食事に関しての知識は曖昧で、テレビで『これがとてもいいですよ!』と言われたものをインプットしているだけだからだ。

しかし、知識がなくても私が断言できることはある。それはミサトさんと暮らし始めて知ったこと。前の生活では感じられなかったこと。

「……なら、一緒に食べよう。綾波さんが好きで薬を飲んでいるのなら私が言っても意味ないし。私のお弁当も少し分けてあげるから」

幸いまだおかずは残っている。鶏の皮は速攻で食べてしまったからないが、その他は残っている。ヒカリは全然大丈夫だよ、とOKサインを出している。

「……なぜ、私に構うの?パイロットだから?」

「逆に聞くけど、あの日、どうして私に構ったの? 無視しても良かったのに」

「……………」

綾波さんは答えられずに沈黙する。首を傾げ、私を待った理由を探している。

理由などあまりにも簡単だ。考える必要なんてない。打算などどこにもない。私が叫んでいる声が聞こえて綾波さんは立ち止まった。それはどうしてか。今の私と全く同じ理由だ。

「——気になったからだよ」

「……そう」

「ささ、一緒に食べようよ。今からでも時間は十分にあるから」

やや強引な手段だったが、無事にこちら側に引き込むことに成功した。誰も寄せ付けないオーラを放ち、誰に対しても同じ対応をする淡白さから、真に綾波さんの人柄を凶ることができなかった。

これから私は綾波さんと協力しなければならぬ。今度はどんな使徒が来るのかわからない。そもそも零号機がその時になっても起動実験に成功しているかわからないが、いつかは肩を並べる日が来る。

私とヒカリが訊ねてもだいたい「ええ」とか「そう」程度しか返事が帰ってこないが、第一歩としてはまあまあのところだろう。



もちろんネルフまでの道も綾波さんと一緒にだ。しかし電車に乗っている間も、バスに揺られている間も一言も喋ることはなかった。私も学校での覇気はなくなり、無闇に話しかける必要はないと沈黙を守った。

真顔で前を見つめている綾波さんの横顔を見つめる。あまりに美しすぎて、神々しい。光が降臨している……と思いきやただの照明だった。

「……なに？」

私の視線に気づき、細い声で尋ねてくる。

長い長いエスカレーター。私たち以外に誰もいない。

「綾波さんって普段何考えてるのかなって思っ」

「……別に。碇司令のこと」

「お父さんか……そっか」

「……あなたは碇司令のこと、嫌いなの？」

嫌いか、と訊かれたら嫌いだ。小さい時に厄介払いのように他所に預けられたし、呼ばれたら呼ばれたで突然人類のために命を懸けて使徒と戦えなんて虫が良すぎる。

私だとえ男の子でも絶対に断っていた。それに……褒めてくれないし。

「嫌いだよ」

隠す必要なんてない。私はどれだけ言い繕ってもお父さんが嫌いという気持ちは隠せない。私に対する仕打ち、そして今も続いている私への態度。救いようがない。

「そう」

私に興味を失ったように、顔を逸らす。どうやら悪い返事だったようだ。

綾波さんにとって、お父さんは大切な人なのだろう。「レイ」とよく声をかけているのを見かける。でも私を名前で呼んだことはネルフに来てからない。カノンに改名したが、私の旧名は『レイ』だ。果たして『レイ』という名前にお父さんが固執した結果なのか。その辺りは直接訊かないとわからないだろう。

「……でも。これから知って、好きにはなれないかもしれないけど、嫌いじゃなくなるように努力はするつもり」

「……………そう」

相変わらずよくわからない返事だが、明らかに雰囲気の違いのものとわかった。

一緒に更衣室に入って着替える。着たときはぶかぶかなのに、手首のスイツチを押すとシュツ！ と張り付いてくる感覚が気持ちいい。それでも少なからずお腹が圧迫されるから着る前の食べ過ぎは注意だ。

コントロールルームに着くと、リツコさんの指示に従ってエントリープラグに乗り込む。これは実際にエヴァに挿入されるわけでは

ないから危険なことになったりはしない。と、リッコさんから説明は受けている。

まだL・C・Lを肺に満たす行為は慣れない。終わったあとに吐き出すのがつらいからだ。ひどい風邪をひいたときに、喉が乾燥したまま咳をするような感覚だ。どうやらコツがあるらしいが、私はまだそれが掴めていない。

『始めるわよ。集中して』

「はい」

私はゆつくりと瞼を下ろし、雑念をできるだけ振り払った。正直なところ、集中するといっても具体的にどうすればいいのかわかっていない。意識をエヴァに向ける方法なんてわからない。そんなことをリッコさんに正直に言ってしまうと怒られそうだから胸の奥にしまっておこう。



「……それにしても、家出していなかったとは驚きね」

レイとカノンのモニタリングを見ながら唐突に話しかけた。ミサトは椅子に反対向きに座り、背もたれに前向きに体重を預けたまま「そうね……」と返事する。

「買った物までしてたのよ。しかも唐揚げ作ってくれてさ。すんごく美味かったわよく。ビールに合って最高ねっ」

「舌が死んでるからあなたの食レポはあてにならないわ。そんなことよりもちゃんと仲直りはできたの?」

「それは結果を見ればわかるでしょん?」

ミサトが顎でモニタリング中のモニターをさす。リッコはその数値を確認するとひとつ頷いた。

「マヤ、ハーモニクスは」

「ふたりとも正常値です。問題ありません。ですが、下げるとカノンちゃんには耐えられないかと思われます」

「そう。ならいいわ。エヴァ起動に十分なシンクロ率だから良しとしましよう」

レイ、38%。カノン、33%。カノンが初めてエヴァに乗った時

は40を超えていたが、それより低い。エヴァとのシンクロ率はパイロットの深層意識に大きく依存する。表面的外傷に左右されることはない。きつと父への反抗心からやる気があったのだと推測される。これからもずっとこのままのシンクロ率、というのは流石に困る。20台に落ち込むと実際の活動に大きなラグを感じるためエヴァを操縦にするには難しくなってくる。

レイはいいが、カノンが問題だ。心が幼稚すぎる。中学生だからという理由で終わらせるには足りない。誰とも関わりを持たうとせざるに生きてきた子供が大人のコミュニティに足を踏み入れる。間違はなく未知の領域。面白いと思うことはあるだろうが、それ以上に不快だったり、悲しいことに出くわすことがある。これは断言できる。他人の心に触れながら生きる。それがどんなに辛いことか。その精神的ケアも含めてミサトは大切な役割を任されている。そして最初の関門を突破できたところ。だがそれはミサトからではなくカノンからのアプローチだ。

これが良いのか悪いのかは誰にも判断できない。

「ふたりとも、お疲れ様。上がっていいわよ」

『はい』

慣れた動作でレイはL・C・Lを吐き出しているが、カノンはえづくように吐き出す。見ているミサトたちにも苦しく感じてしまう。下手さだ。しかしこれはパイロットには避けられないことだから、慣れてもらう他ない。

そそくさと更衣室に向かうレイをカノンが後ろから追いかける。パイロット同士仲良くしたいという気持ちはわかるが、あの性格では心を開くことはそう容易ではない。

レイはこのまま帰宅。カノンは使徒の死骸の視察に参加。

……たかが中学生が、使徒を見ても何ひとつわからないだろうに。何かをしたい。何かをすることで人との関わりを保ちたい。そんなわかりやすい構ってちゃんな部分が滲み出ている。無意識かもしれないが、それが今回家出を思いとどめた理由かもしれない。

口元が寂しくなったりツコは一次データ処理をマヤに任せ、喫煙室

に足を向けるのだった。

嫉妬

あまりに騒々しい音に私は耳を塞ぐ。

辺りに間に合わせで組み立てられた鉄骨やら機械やらが鳴らす音が脳まで響く。

「すごくうるさいですね……」

ゴウン……と絶え間なく鳴っている。

私には一切わからないが機械がたくさん並べられ、そこかしこに配線コードがばら撒かれていて、足に引っかかりでもすれば大惨事だ。

ここは第五使徒を倒した場所。その死骸を検査するため簡易につくられた施設だ。たった数日でここまでの設備を整えるのはとても手のかかる作業だっただろう。

「はい、これ被つといてねん。安全第一よ！」

「わかりました」

ミサトさんに渡されたヘルメットを被るが、サイズが大きくて目元が隠れてしまう。斜めに傾けたり顎にしたベルトでうまくバランスを取ろうとするが効果はなく、数秒に一度は手でヘルメットを押し上げないといけない。

「すみません、ひとつ小さいサイズはありませんか？　ちよつとこれ、大きいです」

もう諦めた。いちいちヘルメットを上げるのが面倒になってしまった。すでに私の視界は閉ざされ、ナビゲート役としてミサトさんの服の端を掴んでいる。

「あー……ごめん、大人用サイズしかないから無理っばい。まあでも動き回らなければいいか！　それに可愛いわよ」

「え、あ、はい。ありがとう……ごさいます……？」

「連れ回すのは危険だからリツコのどこにでも行こうかしら」

ミサトさんが歩き始める。私もなるべく注意しながら進む。頭にあけ、ズレないように押さえるのだ。でもそれだと少ししたら腕が疲れてしまい、またヘルメットが下がってしまう。しかしミサトさんの「階段よ」とか「段差に気をつけてね」などといった注意喚起

のおかげで比較的スムーズに移動することができた。

自動ドアのようなものはなく、ポツンとリッコさんはひとり、パソコンに向き合っていた。急造施設のため空調は完備されておらず、この部屋だけ少し暑い。

「……予想外だったわ。カノンちゃん」

私の姿をディスプレイの反射でとらえたリッコさんは、こちらを振り向くことなく突然話を切り出した。

「え……？」

「私はあなたが家出すると思っていたの。でも違った。MAGIの予想も、時々外れるものね。……まあこの話はおいておきましょう。それより使徒が見たいんですってね」

「問題はありましたけど、私が倒した使徒ですから。……たぶん、自分の目で直接見たいっていう好奇心からきてますが」

「ふふ。そんなものよ。結局のところ、誰もがそうよ。使徒に興味津々ですもの。私も含めてね」

そう言いながら目にも止まらぬ速さでキーボードを叩いている。私も学校でパソコンに触れる機会はあるが、人差し指でゆつくりとキーを確かめるように打っている。まるで何十年と向き合わないとリッコさんの領域に達することはできないだろう。

やがてカッコよくエンターキーを押すとピーと音が鳴り、三桁の数字が表示された。それを私とミサトさんが食い入るように見つめる。

「これが敵さんからわかったことかしら？」

「見ての通り、解析不能を示すコードナンバーよ」

「つまりわけわかんないっこと？」

「でも、使徒の遺伝子が人間のものと99.89%一致していることがわかったわ」

「……それってエヴァと同じじゃない」

はやくも私はダウン。遺伝子なんてことを言い始めたなら何もわからない。言葉でしか知らないからだ。現在も死体を分解中の現場をぼんやりと眺める。

台座に乗せられコアの破片が降ろされてきている。そしてお父さ

んが冬月副司令と姿を見せる。声をかけようとしたが、あつという間に私の目の前を通り過ぎていった。

私がよく見えなかったからもしれないとズレたヘルメットを上げながら思う。……いや、これは都合のいい言い訳だ。呼んだところで何を話そうかなんて考えてすらいなかったのだ。

「ん……？」

間近で見るとのために手袋を外し、ぺたぺたとコアに触れている。その手に私は違和感を覚えた。

「爛れてる……？」

ひどい火傷をした跡のようなものが見えたのだ。私を知る範囲ではお父さんがそんな怪我をしただなんて聞いていない。

「何してんの？ カノンちゃん」

「わっ！」

突然ミサトさんに肩を掴まれ、私は猫にも負けなくらい高く飛び跳ねた。大きくズレたヘルメットが落ちてしまう。その音に気づいたお父さんが私の方を振り向き、目が合う。しかしすぐに私から視線を外した。

「あ……」

胸が痛い。私自身の弱さもそうだが、お父さんにまるで相手にされなかったという事実がなによりも辛かった。やっぱり私のことなんてただの部下でしかないと思っっているのか。

「……悲しいわね」

肩に触れられたまま、ミサトさんがぽつりと呟く。必要以上のことを言わない優しさが嬉しい。

「……はい。まあこれは私とお父さんの問題なので。それよりお父さんの手、火傷の跡みたいなのがアツたんですが知りませんか？」

「そうなの？ いつも手袋してるから知らなかったワ。リッコは？」

今度は他の解析を進めているようだ。まるで指を独立した知能のように動かしながらリッコさんは流暢に語った。

「あれはこの前行った零号機の起動実験の時ね。失敗して、さらにエントリープラグの緊急射出も不安定だった。その後、碇司令が自分で

ハッチをこじ開けてレイを救い出したの」

「へえ、あの碇司令が意外ねえ」

「でも、どうしてそこまでしてお父さんは助けたんですか？」

「……さあ、わからないわ」

……知っているのは本人だけということか。

やがてコアの確認を終えたお父さんたちがどこかへ消えてしまった。その間私のことを一切見向きすることすらなかった。

より一層お父さんの私への態度の理由がわからなくなってくる。

果たして私は、お父さんと仲を修復することができるのだろうか。



常夏である日本の体育の授業にはプールがある。セカンドインパクト前は四季があったらしいが、地軸が傾き、季節は固定されてしまった。

今日は私たち女子がプールの日だ。男子とは交代で外で球技をしている。休憩中の男子たちから刺さる視線が恥ずかしい。

プールとは己と他者の身体を比較されてしまう、もしくははしてしまう場である。大人びた身体へと徐々に変わっていく年頃、気にならない人はいないはずだ。すでに体型が女性のものとなっている人もちらほらいる。私？ あはは、何を言っているのやら。発展途上だから焦る必要はない。ないから。絶対に。

「クロールとか平泳ぎとかどうでもいいと私は思うの。ようは泳げたらいんだし」

25メートルを泳ぐテスト。終盤、もはやクロールの原型を留めていないレベルになりながらも私は泳ぎきった。先生は訝しむ目をしてながらチェックをつけている。ぎりぎり合格だ。

私の次の人たちがすすいと泳ぐさまを見ながらヒカリに愚痴をこぼした。

「何を言ってるの。泳げないからってそんな言い訳通用しないわよ」

「プールで遊びたいのになんで泳がないといけないのさ……」

座学ならば自分の出来は他人にそう公開されることはない。しかし水泳となれば皆に見られる中泳がなければならぬのだ。私に

とっては地獄のような時間だ。

「そういうものなの」

「辛い」

テストが終わり、残り時間は自由行動となった。私とヒカリは隅の方でぷかぷか浮かんでいたらだらしめている。

こうしてだらけていると、何もかもがどうでも良くなってしまいう。エヴァのこと、お父さんのこととかも全て。このまま水に浮かんだまま眠ってしまいたいほどだ。

ベンチの方では綾波さんがひとりで座り込んでいる。どこを見るでもなく、ぼんやりどこかを眺めている。

名前順だから綾波さんのテストでの出番は早かった。私とは違い、綺麗なフォームを保ったまま25メートルを泳ぎきった。タイムは平均よりほんの少し速いくらい。別にとてもすごい結果を残したわけではない。でも、どうしても私は羨ましいと思ってしまう。これはどちらかという嫉妬に近いものだろうか。私以上に私のお父さんと仲が良く、エヴァに関しては先輩だ。なんだか私の存在意義が薄れそうな気がしてしまうのは否定できない。

◆ ……そんな綾波さんって普段何をしているのかな？

ぐびぐびとビールを飲み干しているミサトさんを尻目に、私はソファーにだらしなく寝転がってテレビを眺める。

「あー美味しい！ 私定年迎えたらドイツに永住してビールに生きるわあー！」

「はいはい、それまでにアル中になって死なないように祈りますよ」
「あら、私を誰だと思ってるのかしら？ そうやすやすと死ぬわけないじゃないの〜」

かかか、と下品に笑いながら手慣れた動きで六本目のビール缶を開ける。本人が幸せそうだからいいが、一日十本を超えるようになったら必ずリツコさんに相談すると心の中で決めている。

十時を過ぎ、そろそろ寝ることにする。テレビの主導権を譲ろうとしたが、「私も寝るわあ」と酒臭い息を吐きながらミサトさんはその場

で下着姿になった。ブラジャーが少しズレている。服は自室に投げ込み、へらへら笑っている。

私は目を手で塞ぎ、見て見ぬふりをする。あまりにもだらしなさすぎてこっちが泣いてしまいそうだ。同居人といえども私がいる目の前でこんなことをされるのはいろんな意味できつい。

「ミサトさん、着替えくらい自分の部屋でしてくださいよ……」
「女同士なんだから問題ないでしょー。そりゃあカノンちゃんが男の子だったらすすが、ね？ あ、そうだ。あとこれこれ」

一度自室に入ったと思いきや一瞬で出てきたミサトさんの手にはカードがある。ネルフの職員カードだ。これは……。

「今度新しくなるから、レイのカード渡しといってくれる？」

「あ、はい。わかりました」

受け取り、私は綾波さんの顔が印刷されたカードをまじまじと見つめる。相変わらず人間離れた容姿の人だ。

「あらーん？ レイちゃんに一目惚れ？ いいんじゃない？ そういう世界だつてありっちゃありよん」

「そ、そんなんじゃないですから！」

酒が入って上機嫌なミサトさんは私をからかう。別に私はそういう趣向はないから日呈してそそくさと部屋に退散した。

綾波さんは明日、零号機の起動実験があるらしいからその前にはやめに届けに行こう。携帯端末から住所を確認する。それでも私もネルフの職員だから、綾波さんのプロフィールを知る権限くらいはある。さすがに住所となれば申請が必要だが、あつさり通る。

場所はマンション。歩いていける距離だ。昼くらいに家を出ても十分間に合うだろう。

私はS—DATにイヤホンを繋げ、リピート再生に設定する。これは以前お父さんから譲り受けたものだ。以降暇があればずっと聴き流している。

私はあまり集中して聴かない。聴き流すという行為に意味があるのだ。これによって、私は『無』に存在していないという認識ができるからだ。

布団をかぶり、目を閉じる。

……明日はいいことがありますように。

昼に出るとは言っても私の起床は早い。ミサトさんを起こし、朝食を食べ指せてネルフへ送る。掃除をして、宿題をしていたら昼になった。

気分的にカップヌードルを食べ、家を出る。太陽は頂点に昇り、あまりの暑さに私は「げえ」と呟く。零号機の起動実験には余裕がある。じわじわと照りつける太陽と、目玉焼きができそうなほど熱いアスファルトに熱され、綾波さんの家に着いたときには汗がびっしりだった。

インターホンを押す。壊れているのか、音が鳴らない。もう一度押してもならなかったから今度はドアをノックする。

「綾波さん？」

……返事はない。もしかしてもうネルフに行ってしまった？ もともと綾波さんの行動原理にはミステリアスなところが多かったが、まさかこんなにはやく出かけるとまでは予想できなかった。しかし、取っ手を掴んで回してみると鍵はかかっておらず、ドアが開いた。

「ええ……」

セキュリティがあまりにも甘いのではないか。これじゃあ泥棒が好き勝手に入れそうで心配だ。

「入るよ……？」

玄関口には靴がある。ということは家にいるということだ。これが予備の靴という可能性もあるが。部屋はあまりに殺風景なものだった。壁はコンクリート丸出しで、家具と言えるものは数えるほどしかなかった。ベッドの上には包帯が散乱している。意外に綾波さんって雑な性格だったり？

……棚の上にある眼鏡に目が止まる。

「……………」

これは間違いなくお父さんの眼鏡だ。レンズが少し割れ、歪曲している。私は無意識にそれを取り、実際にかけてみた。視力の悪くない私にはボヤけるだけで、特に大した意味はなかった。

ガチャリ、と音が聞こえた。玄関のドアからではない。その近くのドアからだ。眼鏡をかけたまま目を凝らすと、人が立っていた。恐らく綾波さんだろう。

「あ、ごめんなさい。勝手に上がっちゃっ……!!」

眼鏡を外し、綾波さんに謝ろうとしたが、なんと裸にバスタオルを首にかけるというとても状態だった。そして私が咄嗟にとつた行動は、もう一度眼鏡をかけることだった。これならボヤけてしつかりと見えることはないかと判断したからだ。しかしそれはハズレだったらしく、私に近づくと手を伸ばし、眼鏡を外した。

膨らんだバスタオルが目飛び込む。それにシャンプーのいい匂いがする。

…首を振り、私は一步下がる。すると足が落ちていた包帯を踏んでしまい、滑らせてしまう。そして勢いのまま綾波さんの身体に抱き付き、床に押し倒してしまった。

「――」

虹がかかったような気がした。

私の右手は綾波さんの胸を鷲掴みしている。……目が合ってしまった。嫌悪感を剥き出しにするわけでもなく、ただ私を見つめている。頭の中が混乱する。どうすればいいのかわからなくなっていると、

「どいてくれる？」とだけ言われた。

私は再起動し、猫のように飛び退いた。手に残る感触は、間違いなく私のものより大きかった。綾波さんは立ち上がると、私がいるのに何一つ気にしない様子で服を着始めた。

「……あなたは どうして来たの」

「ええつとね……ミミサトさんから渡されて！ ……そう、新しいカード！ 新しくなるからって、それで来たんだけど返事がないし……ドアも開いてたから………勝手に入って……ごめんなさい」

「カードは？」

「これ、だよ」

怒っているようには見えなかった。謝ってもそれに対する返事は

なかった。ポケットから取り出したカードを渡すと無言で受け取る

「今日は起動実験なんだよね？ 私も行つていい？」

「好きにすれば」

「う、うん」

普段から反応の冷たい返事が少し苦しかった。その後も一緒にネルフに行ったが、その間にやはり会話はなかった。この前はそれが心地良いと感じていたが、今回は……心地悪かった。私のことをどう思っているのか、まったくわからない。何度か尋ねようとは思っても、結局気まずくて話しかけられなかった。嫌われてしまったのではという怯えがある。綾波さんは感情の隆起を態度で示さない人だから、余計に気になってしまう。このままでは駄目だとは思いつつも、つい惰性で更衣室までついて来てしまった。

もちろん今日は私がエヴァに乗る理由がないのでプラグスーツに着替えることはない。ネルフに来たからついでに訓練する、だなんてことを突然言ったとしてもリツコさんたちがその用意をしなくてはならないから、今日は起動実験だけ見届けたら帰ろうと決めていた。……宿題もまだ終わっていないし。

「……あの、綾波さんー！」

自動ドアが開き、綾波さんが中に入る。振り向き、私を見る。

無言で別れるなんてどうしてもできなかった。これでは昔の自分と何も変わっていないからだ。

「……なに？」

「その……頑張つてね。私も……見てるから」

とはいっても咄嗟に思いついた言葉はこんな程度でしかなかった。

「……………ええ」

自動ドアが閉まると、私はこの気持ちで自分でもわからないまま、走つてコントロールルームへと向かった。



そこにはお父さんがいた。考えてみれば当然ではあるが、この前無視された記憶が心を傷つけている。お父さんは私がいることになんとも思っていない様子だ。

「これより零号機再起動実験を行う。レイ、準備はいいか」
『はい』

ガラスの向こうには肩を壁に拘束された零号機が立っている。この前はこの拘束を壁ごと破壊して暴走したという。はつきり言って心配ではあるが、私は綾波さんの成功を信じる。

「第一次接続開始」

お父さんの指示に、リツコさんとマヤさんがテキパキと作業を始める。グググ、とメーターが上昇し、エヴァとのパルス、ハーモニクス値を示すグラフが正常値になる。

「シンクロ問題なし。オールナーブ、リンク終了。中枢神経素子に異状なし。1から2590までのリストクリア。絶対境界線まであと2.5、1.3、1.1、0.7、0.4、0.2、0.1……ボールドラインクリア。零号機起動しました。引き続き連動実験に移ります」

マヤさんのアナウンスが終わる。

ほっ、と胸をなでおろす。これで今度からは一緒に作戦に参加できるという安堵だ。私ひとりでは難しい敵でも綾波さんとなら……と。だからあとでもう一度きちんと謝って、仲良くなろう。エヴァパイロットとして義務のような絆ではなく、普通に人同士で友達のような絆を作りたい。

突然備え付けの電話が鳴る。応じたのは冬月副司令だ。

「碇、未確認飛行物体が接近中だ。恐らく使徒だろう」

「……テスト中断。総員第一種警戒体制。零号機はまだ戦闘には耐えられないため待機。赤城博士、初号機は？」

「380秒で準備できます」

「よし、では出撃だ」

あつという間に段取りが終わった。もしお父さんが他人だったらそのスムーズさに感心していたところだ。でも、あの人はお父さんだから。

そしてようやくお父さんの方から私を見てくれた。

「どうした？ はやく行け」

「……………うん」

やっぱりどこまでも私のことは部下で、それ以外の何でもないのでろう。

エヴァに乗って戦う。私はそうミサトさんに意思表示した。だから私は戦う。でも見返りが欲しい。

今まで倒した使徒二体。撃破報酬としてお金が与えられたようだが、私はその額を確認していない。口座はミサトさんに管理してもらっている。別にそれに手を出さなくても問題なく暮らせるからだ。たからお金はそこまで求めていない。将来を考えたら必要ではあるものの、今の私に欲しいものはそんなものではない。

言葉だ。ありがとう、とか頑張ったね、とかそんな他愛のないものでも私はとても嬉しいのだ。

綾波さんとは違って、私には「頑張れ」の一言もない。

そういうところなんだろうな、と心の中で言い、私はお父さんに背を向けた。

絶叫

大急ぎでプラグスーツに着替え、私はダツシユで通路を走り抜けた。

綾波さんの零号機はまだ起動実験に成功したばかりで実践には投入できない。残念に思いつつも、よかったとも思った。今やってきている使徒を倒せば次の使徒まで一定期間空くはずだ。その間に零号機の調整などを万全にしてもらえるからだ。そうしたら安心して共闘することができる。

……そのためにもまずは、私が使徒を倒さないで。

エヴァの格納庫に入り、作業員の誘導に従ってエントリープラグに入り込む。するとすぐさま内部がL・C・Lに満たされた。落ちて着いてこれを肺の中に染み込ませ、ゆっくりと呼吸を整えた。この前のようにがぶ飲みして変に嘔吐したりはしない。そのあたり私は成長した。褒めてくれてもいいんだけど。

『いいカノンちゃん。使徒は現在も侵攻中。正八面体の青いやつで、攻撃パターンはまだ不明よ』

突然ミサトさんの声が聞こえ、次に使徒の外見がホログラム出力される。説明通り、幾何学的な美しい見た目だ。表面は光沢のある青い鏡のよう。

固定ボルトが外され、エヴァの肩の拘束がなくなる。目の前の巨大なケイジのドアが開かれ、台車ごと発射口へと移動する。

私は左右の操作レバーを掴み、基本的な動作確認をする。同時にシートの深さは大丈夫か。レバーを押し込んだとき、限界まで押し込めるかなど入念に確認する。

そして「問題ありません。いけます」と報告するとマヤさんの事務的な返事が返ってくる。

ガコン、と発射口まで移動が完了し、頭上のシャッターがすべて開く。

……これから戦闘だ。やはりどれだけ意識から除外しようとしても恐怖や不安は不可能だった。呼吸は若干震え、指先の感覚が希薄に

なる。ちよつとした脱力感に襲われそうになり、私は両頬をバチンと力強く叩いて「よし！」と喝を入れた。

ケイジ内のスタッフ用通路に制服姿の綾波さんがいるのを見つけ、私は手を振って声をかけた。

「綾波さん！ 行つてくるよ！」

ミサトさんの発進の号令がかかり、勢いよくエヴァが射出された。上からのしかかる圧にはいつまで経つても慣れそうにない。

射出スピードをもっと下げるように終わったら言つてやろうと心に決めた。

するとこれまで一度も聞いたことのない音が聞こえた。甲高い音が急速に収束するような音だ。その音の正体は先程から表示している使徒のホログラム、その隣のエネルギー反応グラフだ。二重三重と逆回転を重ね、その中央にエネルギーが集中しているのがわかる。

……なんだか、嫌な予感がした。

『避けてッ!!』

ミサトさんの悲痛な叫びと、エヴァが地上に現れたのはほぼ同時だった。

「——えっ」

遠い位置に浮遊する使徒が変形を始める。不規則な動きを繰り返して、あつという間に銃口のような形に変化した。上下左右の隅にあるコアらしき物体から中心部へエネルギーが集約し、カツ！ と光線が発射された。

ここまではほんの数秒の出来事。攻撃までの時間が圧倒的に短いせいでまだカタパルトの拘束すら外せていない。

——今の私は、動かぬ巨大な敵だった。

圧倒的な熱量の光線が丁度胸の中央に命中する。

瞬間、私の胸の奥が灼けた。

全面に大きく機体の急激な温度上昇を警告するパネルが表示される。

そんなことッ、言われなくてもわかってるッ……！

頭蓋が割れ、脳汁が泡のように弾け飛びそうだ。私自身の胸を掻き

筆つても意味などなく、身体の水分がすべて一瞬にして蒸発させられる灼熱地獄に絶叫する。

息ができない。目の奥が灼ける。耳の奥が灼ける。喉の奥が灼ける。うずくまって、身体をひねってこの苦しみから逃れようとするも、エヴァと繋がっているから不可能だ。一方的に灼かれる続けるのみ。

涙を流すことすらできない。ただ声無き声で泣き叫ぶしかできなかった。

突然、目の前に大きな遮断壁がせり上がる。ミサトさんが起こしてくれたのだらう。地獄から解放された私はぐったりと力無くシートに倒れた。視界が上手く定まらない。プラグスーツのセンサーが生命の危険を察知してブザーで絶え間なく知らせてくれる。その音ですら苦痛に感じるほど私の身体は弱ってしまった。

心音図なんて見なくても心臓の鼓動が恐ろしい速度で弱まっていることなんて感じている。

一刻も早くエヴァを降りたい。情けないがもう戦える状態ではない。

しかしそうはさせないとばかりに使徒が再び光線を発射した。その熱量はさっきのものより段違いで、離れていても火傷しそうなほど熱かった。

それでも遮断壁が受け止めてくれる。そう思っていた私の甘い考えはすぐに打ち砕かれた。

ほんの数秒で容易く壁を氷のように溶かして防御を突破してきたのだ。そして今度はより強力な光線が胸を直撃した。

……死を確信した。

背骨が折れるほど限界まで身体を仰げ反らせ、私は叫んだ。

「いア、ア、アあ、あ、あ!!! アツいッ！ あツい、よお、おオオオ
おお、お、おオ!!!」

心臓を直接バーナーで炙られているようだ。

口の端から泡を噴き出し、なおも逃れられないフィードバックに喘ぐ。

「ヒャアアアア、あああ、あ、っっ!! ござろ、してっっ!! だれっ、か、コロじてええエエっっ!!!」

必死に懇願する。これほどの痛みが続くのなら、今すぐにでも殺してほしかった。そっちのほうが私にとつて救いになるからだ。

殺して!! 殺してよ!! 助けてッ!!

今なら胸の肉を抉り、心臓を取り出して握り潰せるほど死の躊躇いはない。でもそれを実行に移せないほど私の運動機能は極限まで低下している。

だから誰か、なんでもいいから私を助けて! と必死に叫んだ。それが日本語ですらないのはどうだっていい。じわりと口内に鉄の味が広がる。

……そして、ついに喉も潰れて声すら出せなくなった私は、ぷつりと電源を抜かれたように崩れ落ちた。



嫌な思い出だ。

親戚の家でのことだ。私は邪険に扱われていた。向こうからすれば突然転がり込んできた碇の娘で、あの厳格なお父さんの遺伝子を引き継いでいるせいか、不気味に思われていたのだろう。

『レイ、そろそろ中学生になるから勉強部屋を作ったんだ。ほら、あそここの庭にあるだろう?』

叔父さんの指差す先には、かつて庭の端にぽつんと建てられた物置部屋、これを少し改装しただけの部屋と呼べるかどうかとも怪しいものだった。

叔父さんはにこにここと張りぼての笑顔を私に向ける。叔母さんも「自分の部屋が欲しいと思ってたからね」と擬似的な家族愛を向けてくれる。影に隠れて男の子がクスクスと私を笑っている。

小学生の私でもなんとなく察することができた。……ああ、私は遠ざけられているのだと。でも私はこの人たちの庇護なくしては生きていくことができない。たかが小学生がどうやって独りで生きていくのだろうか?

だからこの人たちの言うとおりにしよう。そうすれば摩擦を起こ

すことなく平穩に生きることができるのだから。

「ありがとう、叔父さん、叔母さん。私、勉強頑張るよ」

そう、私も張りぼての笑顔で返した。

……嫌な思い出だ。

バケツをひっくり返したような土砂降りの雨の日のことだ。天気予報に騙された私はびしょ濡れになりながら学校から下校していた。

少し雨宿りしようとして潜り込んだ橋の下に自転車が捨てられていた。大きさは私にもちようど良かった。これで帰ろうと思い、ベチャリと濡れたお尻をスタンドに乗せてペダルを漕いだ。

しかしそこを警察の人に目撃され、盗んだものと勘違いされて署まで連れて行かれてしまった。基本的に小学生が自転車を使つての登下校は禁止されていたから、もしかすると私が悪い人に見えたのかもしれない。

執拗に住所を問い詰められても私は答えられなかった。そもそもあの家の住所がわからないからだ。それにあの人たちの名前も姓しか知らない。

だから保護者の名前を聞かれた時。

「……碓ゲンドウ」

と答えた。

それから程なくして迎えにやって来たのは叔母さんだった。

それからのことはよく覚えていない。どうしてこんなことをしたの、とか。自転車を買うお金ならもらってるのに、とか言われたけど、私にはそんなことはどうでも良かった。

こんなことになっても迎えに来てくれないお父さんと、もしお母さんがいたら迎えに来てくれたのかな、なんて考えていた。

目が覚めるとそこは見慣れた天井だった。

大きく息を吸おうとしたが、それを阻害するかのように喉奥に何かがつつかえていた。激しく咳き込み、口元を抑えてついにそれを吐き出すことに成功した。

手を開いてみると、消しゴムサイズの血の塊だった。何も考えられ

ないまま、とにかくこれをなんとかしなくては、とパニックになっていると、ふと誰かが布巾で塊を拭き取ってくれた。

綾波さんだ。

そのまま顔色ひとつ変えずに布巾を丸めてゴミ箱に捨てる。

「ありが、とう……」

喉がいがいがして私の声は張りがない。

「……これ、食事」

綾波さんが荷台のお盆を私の隣まで運び、コップに牛乳を注ぐ。

バランスの良い和食だったが、私はどうしてもそれを食べる気分にはなれなかった。むしろ食事を見ると……吐き気を催す。まだ胸のあたりがじんじんと痛む……む……む……？

患部に触れてみると、生身の肌の感触があった。不思議に思っ自分分の身体を見下ろすと、上半身が生まれたままの姿になっていた。咄嗟に布団で覆い隠すが綾波さんは一切無反応だった。

「一時間後に出発だから食べといたほうがいいと思うわ」

「出発……？ え？」

すると綾波さんはスカートのポケットからメモ帳を取り出し、その中身を読み上げ始める。

「碇、綾波両パイロットは本日1730にケイジ集合。1800にエヴァンゲリオン初号機及び零号機起動、1805に出動。同30に仮設基地に到着、以降は別命あるまで待機。明朝日付変更と同時に作戦行動開始」

ただスケジュールを読み上げただけだったが、ここまで長く綾波さんが話したのは初めて聞いた。

「——怖い」

そして、ぽつりと私は本音を漏らした。

あの攻撃をあと数秒でも受け続けていたら間違いなく死んでいた。あの熱さはまだ身体に鮮明に刻み込まれた。思い出すだけで本当に身体を灼かれる錯覚すら起こしてしまうほどだ。きっとこれはトラウマなのだろう。

正直なところ、はいそうですかとまたエヴァには乗れそうにない。

「……そう。なら初号機には私が乗る。パーソナルデータの書き換えなんてすぐなもの。あなたはそこで休んで——」

「でも、私は乗るよ」

「……………」

ミサトさんと約束した。みんなを守るためにエヴァに乗ると。確かに生死の境目を彷徨った。トラウマを植え付けられた。でもだからといってエヴァから逃げるのは違う。

私はただの子供に過ぎないが、きちんと役割を受け入れた人間なのだ。望んで大人の世界に足を踏み入れた。決して半端な覚悟ではない。

常に使徒を楽に倒せるわけがないことはわかっている。それも覚悟済みだ。だから私は立ち上がる。

箸を手に取り、食事を口に放り込む。今は英気を養わなければならぬ。私の健康は世界の健康と思ふべし。

「じゃ、一時間後にはまた。食事……ちゃんと食べてね」

私はハムスターのように頬いっぱい頬張りながら大きく頷いた。



スケジュール通りエヴァ二機は基地に運ばれ、片膝をついた状態で鎮座している。すでに日は沈み、夜は暗闇に覆われている。その中でもひととき存在感を放つのは、たくさんのスポットライトに照らされたサファイア色のボディ。

聞くところによると、虹色のエフェクトを輝かせながら底頂点からドリルのようなもので地面を穿っているらしい。

遠く離れたここでもラ——と高いソプラノ音が聞こえてくる。再びプラグスーツに身を包んだ私と綾波さんはミサトさんとリツコの前に立つ。

この仮設基地は山が幾重にも重なっているおかげで見つかりにくい構造になっている。はるか向こうの道路まで蛇のように圧巻されるほどの数の車両が並び、そのすべてに『高電圧注意』と貼り紙がされている。

「いい？ よく聞いて。私達の隣にあるこのデカイのがポジトロン・

ライフル。戦自研で開発途中だったものをネルフが徴発して組み合わせたものよ」

私はすぐ隣の超長いだけの鉄の塊を見上げる。人間サイズで見れば全体像を把握することすらできない。

「計算上ではこの超長距離からでも敵のA・T・フィールドを貫通させることができるわ。それで今度はあっちの盾。こっちも急造仕様だけど敵の攻撃を十七秒は耐えられる」

スペースシャトルの底面をそのまま盾にしたようなものが初号機のすぐ横に立て掛けられている。背面のグリップには後から溶接したような跡がある。

「砲手はレイ、防御をカノンちゃんにお願いするわ。これはより精度の高いオペレーションを求められるため、シンクロ率の高いレイに担当させます」

私のシンクロ率は三十と少し。対して綾波さんはそのもう少し上だ。私は特に不満もなく説明に耳を傾ける。

作戦は以上で、順番がリツコにまわってきた。

「レイ、射撃時、地球の自転、磁場、重力の影響を受けて直進しないわ。その誤差を修正することを忘れないように。最後に真ん中にマークが揃ったら撃つよ。後は機械がやってくれるから」

「わかりました。もし一発目が外れたら？」

「再装填から冷却などを含めて二十秒はかかるわ。その間に予想される敵の反撃を躲さなければ……アウトよ。最終的にはカノンちゃんの盾に守ってもらえない」

……つまり一発目が外れた場合、盾の耐久性を考慮して三秒の誤差がある。その誤差の間は敵の攻撃を文字通り身体を張って受け止めるのだ。リツコさんは暗に綾波さんに二発目は考えるなど言っているのだ。

しかしもし最悪の事態になっても私なら耐えられる。具体的な時間はわからないが、長時間耐えてみせたのだ。どちらかという慣れている私のほうが盾役に向いている。

それでも同時に私の命を綾波さんに預けるのと同じ意味を持つ

だ。過度なプレッシャーになるだろうが、そこは頑張つてと言う他ない。

時間を告げるサイレンが木霊し、ミサトが凜々しく言った。

「時間よ。ふたりとも準備して」

私と綾波さんはエヴァの待機する場所へ移動する。カツン、カツン、と高い階段を登り、ようやくエヴァのうなじの高さまでになった。別々の艦橋の先で体育座りをして、段々照らされていた街の明かりが消えていくのをぼんやりと眺めた。

今この時間、日本で人工的な明かりが灯っているのは遙か先で使徒を照らすスポットライトと、私たちのいるこの場所しかないらしい。

……夜空を見上げる。いつもならぼんやりと星が光るのを見るだけだったが、今日の夜空は感動するほど美しかった。

地表からの光がないおかげで普段なら見えない星までくつきり形が見えるのだ。その輝きも神々しく、今から大規模作戦が開始されることを忘れてしまいそうになるほどだ。

「私たち、死ぬかもしれないね」

そう、陽気に私は空を仰ぎながら話しかけた。

ぴくりと眉が動き、綾波さんが私を見る。

「どうして、そんなに樂觀的なの？」

「空、見てよ。すごく綺麗じゃない？」

「どうでもいいわ」

「いいからいいから」

私は催促する。少し嫌そうな顔をしたが、綾波さんは渋々と顔を上げた。一分ほどだろうか。綾波さんは口を小さく開いたまま動きそうになかった。

「どう？　綺麗でしょ？」

「……ええ。そうね」

「星を見てたらね、今から私達がやることなんてちっぴけなものだっ
て思い知らされちゃった」

数えられないほど無数に宇宙に生きる星、その中のたったひとつの星。その中のさらにはんのひとつまみ分の時間軸に生きる私達のす

ることだ。客観的に見ると大したことなどないのだ。

「綾波さんはどうしてエヴァに乗るの？」

別の話題を投げかけてみる。作戦時間まで心を落ち着かせて集中するべきなのだろうけど、私はその逆だった。

「絆……」

「お父さんとの？」

「私には他に何も無いもの。もしエヴァのパイロットをやめてしまつたら、私には何もなくなってしまふ……それは死んでいるのと同じだわ」

最後の一言が、引つかかった。

それは、私と同じ在り方だからだ。その結果中身のない人間になつてしまい、主観的にも自分が生きているのかすらわからなくなつてしまった。

うじうじ悩むのはなるべくやめよう。そして過去の私に別れを告げるのだ。だから私はここで生きる。

「……綾波さん。生きているふりをするの、もうやめない？」

「……え？」

それは、初めて見た動揺だった。大きく目を見開き、私の横顔を覗く。明確な感情の表現はこれで初めてだった。

「私はね、細かいところはもちろん違うけど、綾波さんと同じ人間だった。でも、それじゃいけないと思った。何か変わるかもって考えたからあの時私は綾波さんの代わりに初号機に乗ったの」

「……そう。あなたは意外にしっかりしてるのね」

「えへへ。ありがとう」

そして綾波さんが立ち上がる。

月光に受けるその姿に私は夜空と同じくらい見惚れてしまふ。純白のプラグスーツが陶器のようにスラツとしたボディを美しく見せつけるのだ。

「時間よ。行きましよう」

「あ、うん」

「……碓さん、私たちは死なないわ」

「——。そうだね」

初めて名前を呼ばれた気がした。いつもは私のことを『あなた』としか呼んでくれなかったのに。少し嬉しかった。私の言葉で、綾波さんの心を僅かながら動かすことができたのだ。

エントリープラグのハッチを開け、中に乗り込もうとする綾波さんの背中に私は叫んだ。

「——私は！綾波さんのことを絶対に守るから！」
すると、こつち振り向いて。

「——ええ」

◆ とだけ相変わらず無愛想だが、心地の良い返事が返ってきた。

秒読みのカウン트는もう終わりそうだ。画面は『23:59:43』を表示し、作戦開始まであと二十秒もない。

呼吸を整えろ。トラウマを抑え込め。向こうの——距離にしておよそ二、三キロほどだろうか——使徒を見据えろ。そして綾波さんを守ることに全神経を集中させろ。砲手担当の零号機はその場から動けない。外してしまえば私と同じように格好の標的に早変わりだ。あの苦しみを味あわせてはならない。

そしてついに『00:00:00』になり、日付が変わった。ポーン、と軽快な音が鳴り、次にミサトさんが『では、ヤシマ作戦開始』とだけ告げた。

まず動いたのは山々に隠れていたミサイル発射台が顔を出し、一斉に攻撃を開始する。数十発ものミサイルが飛翔するが、咄嗟に使徒は姿を変えて迎撃体制をとる。光線を発射しながら薙ぎ払いをしてその悉くを撃ち落とした。爆風がエヴァの機体を叩きつける。そして同時に攻撃元となる発射台にヘイトが向き、文字通りやまを抉り取りながらも蒸発させられる。

様々な方位に設置された砲台の砲撃もあつさりとA・T・フィールドに弾かれて瞬く間に蒸発する。

一見ただやられているだけのように見えるが、使徒の注意をうまく分散させ、エヴァの存在を隠し通すことに成功している。

ポジトロン・ライフルの砲身から煙が発生する。日本中の電気をすべて集約した超大電力がそのひとつのフューズに送られるのだ。

北海道から沖縄まで。すべては使徒を倒すため、綾波さんの手元に送られる。

銃身に何本ものケーブルが繋がれ、その後方にはさらに多くの極太のケーブルが幾重にも分岐している。伝導率が一ではないため、じゅうじゅう!! と熱や音として発散される。それでも肌で感じる圧倒的な電力に私はごくりとつばを飲んだ。

陽動は完璧。フューズへと超大電力が送られる最終回路の解除を知らせる通知が届く。その瞬間、フューズが激しく発光した。

あとはフォーカスが揃い、綾波さんが引き金を引くだけだ。私は息を殺してその時を待つ。

そして遂に訪れる。

零号機が引き金を引く。

背後の配電盤が青白く発光し、ポジトロン・ライフルに繋がった。刹那、夜を明かす太陽のような閃光が爆発し、一条の光線が放たれた。それは使徒のA・T・フィールドを貫き、迎撃のために剥き出しにしていたコアを正確に撃ち抜く。

一拍おいて、女性の叫び声に似た轟音を響かせてウニのように全身を尖らせた。さらに色がドス黒く変色し、中から体液が勢いよく噴き出しながら後ろに倒れる。

『やったか!?!』

しかし、一瞬でひび割れたボディは修復され、何事もなかったかのように元の正八面体の形状に戻った。

……奇襲の失敗。同時にこの位置がバレた。

「——綾波さん!」

使徒が変形する。一段、二段、三段と外皮を割るように外部に広がり、コアを露出させる。

——閃光!!

それは私達の潜伏する山のすぐ目の前の山に命中し、その半分を抉り取った。爆風と爆音がエヴァを叩きつけ、一瞬だけ平衡感覚を失

う。次に目を開けると、仮設基地のほぼが崩壊していた。もしこれが直撃していたらと思うと背筋が凍る。だが次は今のようには運良く回避できない。カモフラージュになつていた山が消えたのだ。零号機と使徒を隔てるものはもう、何もない。

『レイ！ 今すぐ再装填するわ！ 集中して!!』

ミサトさんの鋭い指示に、仰向けに倒れていた零号機が起き上がる。狙撃台は破壊され、もうここで安定した姿勢は取れない。急いでライフルを手にし、最適な狙撃ポイントへとケーブルごと引つ張つて移動する。

この瞬間、どちらが先に撃つかという極限の緊張に突入した。手際よくポイントを確保した零号機が腰を下ろし、うつ伏せになつてライフルを構えた。

ガコンツ！ とフューズを吐き出し、リロード。

一発目はオートで狙撃の誤差修正をしていたが、そのツールは今の衝撃で破壊され、二発目は完全に綾波さんの手動になる。精度はもちろん格段に落ち、使徒の撃破率はがくと下がる。

「……綾波さん、落ち着いて」

回線を開き、それだけ伝えた。しかし返事はなかった。それほど追いつまれているのだから仕方ないと私は盾を構える。

先に撃つたのは使徒のほうだった。遠くても弾ける閃光をしつかりと肉眼で捉える。

『きやっ！』

綾波さんの短い悲鳴。

前に出ろ！ 碇カノン！

私は綾波さんの前に躍り出た。盾の底の楔を地面に深く突き立て、上半身すべてを使つて支える。

私を殺しかけた光線が盾に押し寄せる。それに負けてたまるかと私は吼える。

「うおおおおオオオオオオ——……!!!」

バギ！ と嫌な音とともに盾の端が融解し、弾け飛ぶ。

なんてっ！ 理不尽な力なの……!!

押し負けてしまいそうだ。だがここで負けるわけにはいかない。私の役割は綾波さんが二発目を撃つまで時間を稼ぐことだ。ここで負けたら、あの約束は嘘になってしまう!!

上半身だけじゃ足りない？ なら頭を盾に押し当てる！ 貪欲に食らいつけ！ コンマの世界でもいい！ とにかく綾波さんのために、時間を!!

盾が剥がれる。すでに半分以上が無くなり、脚が光線に晒される。楔はどうにもなくなり、少しでも気を抜けば紙のように吹き飛ばされるだろう。両膝をつき、つま先を楔代わりに地面に付き立てる。

再びあの地獄のような時間を思い出す。

トラウマを消し去れ！ 二度も直撃を受けて生還した女だ！ 三回でも四回でも生き残ってみせる！

そして、ついに盾がすべて溶ける。どろどろこになった鉄が手に滴って火傷を負う。

「ま、だまだああアアツツ!!」

両腕を広げる。全身を使って光線を受け止める。私のシンクロ率は低い。だからこの程度のフィードバックはむしろ軽い！ 目が開けられない。眩い光量に目が灼かれそうだ。皮膚がぼろぼろと炭化して崩れ落ちるかのような錯覚。

私の意識が霧散しかけた、まさにその時。

私の脇横から二発目が放たれた。それは使徒の光線をも打ち破り、一発目と同じように直進して再び使徒のコアを貫いた。

『よー』

ミサトさんが歓喜の声を漏らす。おそらくガッツポーズを決めているのだろう。使徒はひときわ大きな悲鳴を上げ、さらに無数の棘を突き出す。夥しい量の体液が噴き出し、街を染め上げた。

そして私はうつ伏せに倒れる。まだ警告アラームは鳴り止まないが、その中に生命活動低下の警告はないからひとまずは安心だ。

初号機の背中を零号機が抱えあげる。そして目の前の湖まで運ぶと、そこに優しく入れてくれた。エントリープラグ内の温度が下がるのを体感し、脱力する。

『碓さん、大丈夫?』

綾波から心配の声かけられ、私は手を振る気力もなく、弱々しく微笑んだ。

「ああ……うん……。なんとか、生きてる……よ」

『私たち、生きているのね』

「そうだよ。でもつ、さすがに……疲れた、な……」

緊張から解放されたからか、急に眠気が襲ってきた。大丈夫、これは寝たら駄目なやつではない。シンプルに疲れ切っているだけだ。それに実際には火傷はしていないが、全身の痛みも全く引く気配がない。

そろそろ回収班が来てくれるかな、とミサトさんに催促の連絡でも入れようかと思ったその時。

『そんなッ?! 使徒の活動が停止してない?! ふたりとも、まだ終わってないわ!』

ミサトさんの悲痛な叫び声が割り込んできた。

私と綾波さんは湖の向こう、倒したはずの使徒の姿を視認する。

ひとつだけ残ったスポットライトが、その姿を映し出す。滑らかなサファイアのボディは大きくひび割れ、自己修復すら間に合っていないようだ。さらにコアも何本も亀裂が走っているがそれだけで、完全な破壊には至っていない。

使徒が弱っているのは明らかだ。これならもう一度ライフルで狙撃すればいい。

「ミサト、さん……もう一度ライフルを……」

『もう電力がないの……!』

たった二発で日本の電気をすべて消費してしまったというのか。もうライフルは使用不可能。つまり遠距離攻撃ができなくなったのだ。

ラ———というオーケストラを想起させる声はキリキリと嫌な不協和音になり、ふわふわと浮遊する挙動もぎこちない。

「そんな……」

『一度撤退……いや、もうそんな時間もない!! 敵はもうネルフ本部の直上に侵入している!!』

ミサトさんもパニックを隠せないようだ。今から作戦を立てて……などといった時間はない。

ヤシマ作戦は失敗。

これ以上打つ手はなし、だ。

『碓さん、やっぱり私たちは死ぬようね。これもちっぽけな出来事……』

……しかし、死ぬと諦めるのはまだはやい。諦めるのは、本当にすべてを出し尽くして、それでもどうにもできなかつた時だけだ。死んだら死んだであの世で皆に謝ればいいだけ。

……そう、まだ私にやれることは残っているのだ。

「ミサトさん、使徒のコアの状態はどうですか？」

冷静に状況を把握する。初号機の冷却は十分済んだ。零号機の手から離れ、自分の脚で立つ。が、うまく力が入らずに倒れてしまう。咄嗟に手を差し伸ばしてくれるが、私はそれを拒否して自分の力のみで立ち上がる。

『損傷率は91.18%。軽く叩くだけで崩壊するわ』

「……そうですか。なら、いけます」

『いけますって、カノンちゃん何を……！ まさかッ！』

「はい、初号機単騎で接近戦を仕掛けます。零号機は無理して実戦に投入させているんですよ？ もう狙撃以外の運用は不可能なはずです」

零号機は起動実験が成功したばかりだ。本来ならば、これから様々な調整をして実戦投入されるはずなのに、その過程をすべて飛ばしてこの作戦に参加させたのだ。当然防御役もできたかもしれないが、狙撃以外で走り回ったり、さらに使徒を殲滅するなどもつてのほかのはずだ。

『何言ってるの！ そんなの接近する前に撃たれて終わるわよ！』

危険は百も承知。しかし戦いに危険はつきもので、生命の危険など当たり前だ。私はそれを数時間前に身をもって経験した。

エヴァに乗るからには覚悟は決めている。誰もが死と隣り合わせなのだ。なよなよした私とは違うのだ。

腹の底から声を絞り出す。

「——私は!!」

しん、と通信が静まり返る。私は使徒を見据え、内部電源がマックスになっているのを確認する。接近して撃破までの時間はあるはずだ。できなければ死、あるのみ。

「私は……うまく操縦できる自信が、あります。それとも、ミサトさん、にはこの限られた時間で他……の作戦を提示できますか？」

『——わかったわ。ごめんなさい。そして、ありがとう』

今度は命令違反ではない。きちんとミサトさんの許可を得た。

正直すべての攻撃を回避して接近できるだなんてことは一切考え

ていない。間違いなく一発はもらうだろう。でもそこは根性で耐え抜くしかない。

『碓さん、私も』

零号機が後ろに立つ。しかし私は首を横に振った。代わりに振り向いてサムズアップをキメる。

使徒の動きはまだない。しかしこちらにはすでに気づいているから、いつ攻撃してきてもおかしくない。事実、出鱈目な変形を繰り返して発射体制になろうとしている。

もう時間がない。不安定な動きだからこそ予測することすら困難だ。今すぐにも動き出さなければ。

「まだ零号機に無理はさせられない。それに、私は綾波さんを守るつて約束したからね」

そう言って、私はアンビリカルケーブルを切り離した。

同時に、内部電源のカウントダウンが始まった。

Result

——禿げた山肌を蹴る。

一直線に使徒に向かおうとすると湖が最大の障害になる。そのため大回りをしなければならぬが、その分時間のロスに繋がる。

接近するのに時間を費やすのはなんと少しでも避けなければならぬ。接近し、A.T. フィールドを破ってコアを破壊するのに時間を費やしたい。

「ミサトさん！」

作戦部長の名前を叫ぶ。

するとそれだけで私の求める行動を起こしてくれた。

まだ残存していたミサイル発射台や砲台が一斉に稼働し、攻撃を始める。陽動など必要ない。ありったけの火力を叩き込み、弾幕を張ること初号機の姿を捉えにくくするのが役割だ。

弱っているから通常兵器でも倒せるか？ と淡い希望を抱くが、使徒はなんなく弾いて反撃にでる。しかし光線はか細く、レーザーのような印象だ。それでも威力は衰えず、むしろ凶悪さを増している。命中すればと思うとゾツとする。

心の中で悪態をついて、私は傷ついた初号機を走らせる。

視界が霞む。ぐらりと足元がふらつく。

まだフィードバックの傷が癒えていない。しかしそれは向こうも同じだ。次々と反撃にあい、弾幕は薄くなりつつある。

残り四分。

——出鱈目な薙ぎ払いが迫る。

これは命中ルートっ！

「ッ!!」

目を剥く。掠れていた意識を覚醒させる。咄嗟に高くジャンプする。初号機の頬を光線が掠め、鋭いフィードバックに唇を噛みしめる。

あたり一帯は瞬く間に焼け野原にされる。しかし私は振り向かない。

残り三分十二秒。

ようやく湖の迂回が終わる。街に脚を踏み込み、使徒を見据える。弾幕はもうなくなった。援護は、ない。兵装ビルも激しい攻防の末ほぼが倒壊していて、身を隠すほど大きなビルはない。

一対一の正面勝負。私はプログナイフを装備して様子をうかがう。使徒は変形させた四つの針を尖らせ、その先端からエネルギーを収束させる。

先に仕掛けたのは私だった。左に大きく飛躍して注意を最大まで引き上げさせる。しかしそれはフェイント。タタン、とステップを踏んで急なターンをする。引つかかった使徒が必殺の一撃を放ち、真横で生じた衝撃に初号機の身体が吹き飛ばされる。

地面を腹で激しく削り、装甲の一部が剥がれたと警告が入る。もともと融解しかけていたのだ、これは仕方ないと思いを切り替える。

フェイントは成功したが次には繋がられなかった。光線の影響を考えていなかった。

私の頭は考えるな、動けと命じる。動きながら考えろと告げている。使徒はずっとコアを露出させている。A・T・フィールドさえ破ればこちらの勝ちだ。

残り二分と少し。

余裕がない。

……勝負に出るべきだ。

汗がL・C・Lに溶ける。呼吸を整え、前屈みになる。レバーをぐぐ、と押し込んで動いた。

ノーモーションからの大ジャンプ。反応の追いつかない使徒の頭上からラストアタックをきめる！

「やあああああアツツ!!」

ナイフを両手で垂直に持つ。しかし使徒の軌道修正能力は想像以上で、墜とさんとするレーザーが頭部の角を持っていく。奇跡的に外れたことに安堵しつつ、私は目を見開いて集中する。

届く！

しかし、がぎいいいん!! と激しい火花を散らし、ナイフの先端は

出現したA・T・フィールドに防がれる。

……残り百秒をきった。

ここからは時間の勝負だ。初号機の内部電源が尽きるか、A・T・フィールドを破るか。

こちらもフィールドを展開して侵食を始める。ナイフを膜に押し込んで強引に切れ目を入れるが、まだ浅い。

使徒の抵抗。超至近距離で閃光が弾ける。

反射的に身体を横に投げようとしたが、理性で抑え込んだ。

——避けるな！ このチャンスを逃したら終わ리と思え!!

使徒の攻撃が初号機の下腹部を捉える。ジュワツ！ と一瞬で装甲が溶ける音が聞こえた。

冷たい爆発。次に、急速に広がる灼熱がフィールドバックとして私の身体を襲った。奥歯が割れるほど強く歯を食いしばり、逃れられない激痛を耐える。

今度は泣かない。泣いても使徒は攻撃を止めてくれないのだ。己の生存をかけた殺し合い。妥協も手加減もあるはずがない。

「ガああアアツツ!!」

咆哮する。

それと同時に初号機のモデルがエントリープラグ内に簡易出力され、レーザーが貫通したと患部を赤く点滅させて警告が入った。瞬く間に内部温度が上昇し始め、呼吸が苦しくなる。マグマを肺に流し込まれるような感覚だ。

ようやく使徒のA・T・フィールドに大きな亀裂が走る。侵食も進み、もう少しで突破できる。あと、少し、だ。

残り二十秒!!

身体の中で、内臓のどこかが破裂したような感覚を覚える。口を開けば血が滲み、ショックで視界がチカチカと点滅し、目が痙攣する。それでも気を保たせるため、私は再び咆哮し、力任せにナイフを突き立てる。

糸のように細い音を鳴らして広がる亀裂。柄尻を掌で包み、最後の力を振り絞って振り込んだ。

そしてついに限界を迎えたA・T・フィールドは、硬質な音とともに粉々になって四散する。

咄嗟に変形してコアを守ろうとするが、ぎこちない挙動では間に合わないだろう！ 私は落下エネルギーを乗せ、そのまま惰性でコアをナイフで刺した。

コアは今度こそ完全に破壊され、砕け散る。同時に内部電源が尽きて初号機は使徒の亡骸の上に膝をついた。使徒は最後の断末魔を上げて赤い爆発を起こした後、天に届くのではと思ってしまうほど巨大な十字架のマークを残した。

私の耳には何も聞こえなかった。

ぼんやりと通信音が聞こえるが、それに応える余裕は私にはなかった。

シンクロが切断されても一向に鎮まらない激痛に、身を縮めて耐える。獣のような声を漏らし、死に至るこれが治まるのをただ待つ。下腹部を手で押さえ、目をギュツと閉じてより小さくうずくまる。鉄の味がする。L・C・Lが酸素を送ってくれるとは知っていても、口を大きく開いて呼吸の動作を繰り返した。その度に血が混じり、気分はいつそう悪くなる。

死ぬのではないかと考えた。極限状態のおかげでアドレナリンで痛みを誤魔化せていた。状況が終了した今、麻酔の代わりとなるものは何もなかった。

すると突然、L・C・Lが外へ排出される。どうやらやってきた零号機によってプラグが強制射出されたようだ。すばやく肺に残ったL・C・Lを吐き出し、鋭く息を吸う。

そのまま地面に置かれ、しばらくした後にはハッチが開いた。ふわりと水色の髪を靡かせながら勢いよく中に入ってきたのは綾波さんだ。

「碓さん……！」

私の姿を見た綾波さんが名前を呼ぶ。

耳に響く音すら苦痛に感じてしまう。私はなんとか喉から声を絞り出す。

「あやな、み、さん……」

「すぐに救護班が来てくれるはずよ。それまで何かできることはあるかしら」

綾波さんが自分から何かを提案するのは初めてのことだった。私は数秒だけ考えて思いついたことを口にする。

「……だきし、めて」

「わかったわ」

躊躇うことなくすんなりと承諾してくれた。

綾波さんは私と一緒にシートに座り、覆うように優しく抱きしめてくれた。

背中に胸を押し付けられ、心臓の鼓動……人の熱がじんわりと広がっていくのを感じた。たったそれだけの何ら特別なことでもないのに、ちよつとだけ痛みが引いた気がした。

「……ありがとう」

次第に荒んでいた心身は落ち着きを取り戻し、リズムカルな呼吸を取り戻した。

大きく息を吐く。腕に爪が食い込むほど握む力も段々と弱まり、穏やかな気分になる。それに綾波さんはいい匂いがして、急に眠気に襲われる。

終わったからいいよね？ もう私は休んでいいよね？

抵抗することなく私は重い瞼をゆっくりと下ろした。そして極度の緊張から解放されたからか、思ったことがすんなりと口から出てきた。

「お母さん……」

と囁く。

綾波さんの身体がびくりと震えた気がした。

◆

次に目覚めたのは見慣れた病室で、私は一瞬で意識を覚醒させた。部屋には私ひとりだけ。開かれた窓からセミの鳴き声とともに、カーテンを靡かせる音が聞こえるだけだ。時刻は昼を少し回ったくらい。ちよつぱりお腹が空いた。

ベッドの暖かい香りに包まれ、思わずへにやりと顔が綻ぶ。そしてベッドから身体を起こそうとお腹に力を入れた瞬間、ハンマーで叩かれたような鈍痛を感じた。

「あ、っ……」

使徒に貫通されたお腹のフィードバックがまだ強く残っている。球の汗を噴き出し、痛みを我慢しようと低く呻く。しかし痛みはそれきりで、断続的に私を苦しめることはなかった。

起きたことを知らせるためにベッドの脇にあるナースコールを押すと、ピピピピ、と無機質な音が鳴る。少しした後、病室に入ってきたのは、リツコさんとミサトさんだった。ふたりともいつもの仕事服に身を包み、何やら重い雰囲気を漂わせている。

「こ、こんにちは」

「こんにちはカノンちゃん。調子はどうかしら」

「元気ですけど……お腹が痛いです」

「どのあたり？」

「このへんです」

私は下腹部を擦る。ただそれだけでも痛みが再燃しそうだ。無理に動くことはできそうだが、シンプルな腹痛が最終フェーズに悪化したようなレベルになる。

「どれくらい？」

「起き上がれないくらいです」

「……………」

「ミサトさん……？」

ミサトさんはそれきり口を閉ざしてしまう。私から目を逸らしてリツコさんを見る。

何が何だかよくわからなかった。私の知るミサトさんならたくさん私を褒めてくれるはずだ。でもリツコさんもいるから徐にそれができないのかもしれない。だとしても距離を置くような態度は理解できなかった。

「……まずは報告をするべきね」

そう言つてバインダーをパンパント叩いたリツコさんが機械的に

報告を始める。

「使徒の殲滅には成功。しかし街の防衛機能の65%を損失。完全復旧には四日ほどかかるわ。それと初号機については、全身の表面が溶け、さらに下腹部に拳が通るほどの大きな穴を開けられ大破。同じく修復中。急ピッチで二日ね。零号機は装甲の表面が少し傷ついたくらいで大した怪我はなしよ」

ふと握りこぶしをつくってお腹にあてる。そしてその傷の大きさを今になって知る。

零号機がほぼ無傷なら、私はちゃんと防御役をやれたということだ。使徒も倒せたし。でも、全体的に見るとそれに見合うだけの成果なのかどうかわからない。

「すみません……すぐく被害……出てしまいましたね」

「気にすることはないわ。あなたは臨機応変に自分の仕事をきちんとかなしたのよ。胸を張りなさい」

「あ、ありがとうございます」

リツコさんに純粹に褒められたことに驚いた私は少し声高に反応してしまう。

「それであなたのことだけど、左の腎臓の機能が低下し、また子宮へのダメージが特に酷く、機能不全と診断されました」

……あつさりとした物言いだった。流れるように紡いだ重大な言葉の羅列を私は聞き逃しそうになってしまった。ミサトさんが「そんな言い方……！」と詰め寄るが、依然として眉一つ動かさない歴然たる姿勢を崩さない。私は呆けた顔でリツコさんを見上げた。

なんとなく予想はしていた。今までで一番を痛さだったし、何かしらの傷跡は残ると思っていた。でも私のシンクロ率が低かったおかげでまだ規模を抑えられたのだ。

「ごめんなさいカノンちゃん……私の作戦が失敗したせいで……っ！」

ミサトさんが頭を下げる。私は咄嗟に「謝らないでくださいよ」と言うと、苦虫を万匹噛み潰したような表情で顔を上げた。

「……仕方ないですよ。物事が全てうまくいくわけじゃありませんか

ら」

「でも……」

リッコさんの言い方は確かに冷徹なものだった。しかしそれによつて変に私を刺激したくないという配慮があったのかもしれない。そのように言われて、あつそうなんだ、とすんなり受け入れることができてしまう。ゼロ距離からの攻撃をノーガードで受け続けているから仕方ない。

仕方ない……が、あまりに残酷な結末だった。私は未来を奪われたのだ。まだ実感はわかないが、子供のできない身体になったのだ。これを残酷と言わずしてなんというのだろう。しかしたったこれだけで世界はまた救われたのだ。そう考えたら安い代金だと思える。

そして私はミサトさんにもリッコさんにも怒らない。この人たちの命を私はあの時背負っていたのだ。最大のパフォーマンスができるようにあらゆる手を尽くしてくれたし、これからもそうだからだ。「……これが『戦う』ってことですよね？」

「ええそうよ。現実には甘くないわ。でもしばらくは安静にしていなさい。近いうちにセカンドチルドレンも来日するから、あなたの負担も大幅に減るはずよ」

「はい、ゆっくり寝ておき……って、新しいパイロットですか!!」
ベッドからまともに動けそうにないから大人しくしていようと
思った矢先、とんでもない発言に私は飛び起きた。そして案の定その動作でお腹を痛め、「お、うツ」とオットセイのような鳴き声に似た声をあげて私はあつさり撃沈された。

見えない何かにベッドに縛り付けられたような感覚だ。それほど私のお腹は悲鳴をあげている。

「言ったそばから……」

リッコさんが額に手をあててやれやれといった素振りを見せる。私はあはは、と小さく笑って誤魔化した。

私に本当にやることはなさそうだ。ベッドはリモコンの操作で背上げなどをしてくれる便利なものだ。これなら力を入れる必要なく楽な姿勢で食事などをとることができる。でも逆に介護そのもので

あつて、気恥ずかしさも拭えない。一人では満足に動くすらできないから、下の世話も……と思うと気分が重くなる。

さらにこの病室にはテレビすらないから暇の極みだ。

「あの、ミサトさん。この部屋にテレビを持ってきてもらったりは……」

「ごめん、どこもいっぱいいっぱいらしいの」

「そんな……」

「でもいいじゃない。誘惑されることなくその間たっぷり勉強できるわよん」

お茶目に言ったミサトさんの何気ないセリフが私を傷つけた。

「ぐはッ」

クリティカルヒット。ノックダウン。

ミサトさんの言うことも最もではあるが、実際に口にしてそう言われると面倒に思ってしまう。本当は宿題だって終わってないし、追撃するならば、この入院期間中に学校の授業が進んでしまう。その勉強……ともなるとただでさえ酷い有様なのにオーバーキルだ。

しかし今手元に勉強道具はないし、できることといたったら寝ることだけだ。

「じゃああたしたちはこれで帰るわね。カノンちゃん……本当にありがとう」

「はいー」

私は布団を被り、ゆつくり目を閉じる。運動せずにずっと寝ているだけだと、退院した時に太ってしまいそうだななどと場違いなことを考えながら私は瞼を下ろした。

あと、セカンドチルドレンがどんな人か、今から楽しみだ。



カノンの病室を後にし、初めに放ったミサトの言葉は。

「……リツコ、もう少し言い方っていうのがあるでしょ」

と、怒気の孕んだものだった。病院の中だから大きな声を出すことはできない。押し殺した声が静かに木霊する。

しかしリツコは涼しい顔だ。それがミサトにとっては心底気に入

らず、胸ぐらを掴みそうになる。しかしそんなことはしなかった。

「わかつてるでしょう？ カノンちゃんも言ってたはずよ。これが『戦い』なの」

どこまでも冷静な物言いに、ミサトは思い知らされる。

今の人類の歴史は悲惨な戦争の上で成り立っている。技術は戦争というギアによってその進化を加速させ、また当然その犠牲も加速した。

セカンドインパクト後の世界中の大混乱がいい例だ。その結果、旧東京は新型爆弾を投下されて壊滅した。

いつまでたつてもアニメのようなご都合主義の塊にはならないのだ。犠牲なくして成しえないことなどいくらでもあり、その頂点が『今』である。

それを知ってはいても、どうしても腑に落ちない。あのような無垢な子を傷つけてでも戦おうとする大人たち。子供を守るのが大人の責務だ。なのにこれでは……………。

大義名分は覆らない。仕方ないというのがあらゆる考慮の結末で、これからも何度も戦地に送るのだ。

『『こういうこと』には耐性をつけておくべきよ。ネルフの、しかも作戦部長様がいちいち気に病んでいたら作戦指揮に支障が出るわ。そんな人は降りるべきだと私は思うのだけど』

理性に徹したリツコの言葉は非の打ち所のないほど正論だった。ミサトは言い返せずに歯噛みする。

カツ、カツとリズムカルにリツコのヒールの踵が高く鳴る。なんとなく威圧されているような気もしたが、ミサトはゆつくりと口を開いた。

「……………あなたは悲しくないの？ あたしたちより小さな子の未来が奪われてんのよ？」

「あの子の未来と人類の未来。どっちの方が大切かわかるかしら？」

……………私達全員、綺麗事で生きていくわけじゃないのよ」

「……………」

どこまでも間違えていない説得に、ミサトは完全に論破されてしま

う。水を打ったように静まり、何も言えなくなったミサトは誤魔化すように窓の外を眺めた。

外は遠くに半壊したビル群が目立ち、クレーン車などで復旧作業をしているのが見える。あれらは戦いになるとまた囷となり壁となり、パイロットたちをサポートするのだ。

エヴァにパイロットが乗るだけでは使徒を倒すのはほぼ不可能。地下でネルフの職員たちが文字通り命がけで後押ししてくれるから戦えるのだ。エヴァがやられたら最後、使徒に一方的に蹂躪される未来が待ち受けている。

……心と命はみんなひとつだ。

「……それでも、あたし達はあの子たちのために全力でサポートする。これだけは間違っていないはずよ」

これだけは揺るぎない事実。これからも大人たちは子供たちを死地へ送る。変えられないもの、どうしようもないものは確かにある。しかし子供たちに世界中の人間の命を預けている。だからこそ、少しでも助けになり、いいパフォーマンスをしてほしい。

リツコはミサトと同じように外を眺める。

そして。

「そうね」

とだけ呟いた。

破 You are (not) weak.
セカンドチルドレン

中学生の仕事は何かと訊かれると、私は光の速さで勉強だと答える。私は部活に入っていないからそういった青春を経験したりはできない。別にしたいと切望しているわけではないし、エヴァパイロットとしての役割だってある。そういつたでこぼこのピースが上手くハマったのが『私』なのだろう。

つまり何が言いたいのかというところ。

「勉強もうやらああああああああ!!」

入院していた間に遅れてしまった学校の授業の取り戻しだ。

あんまりだ。横暴だ。今度ネルフにそういつた教育関連の補助をしてくれる福利厚生的なのを付け加えるよう訴えなければならぬ。そんな決意を硬めながらヒカリ……現在別名赤ペン先生による見るも残酷な丸付けから目を背けた。

「はい、目を逸らさない。これが今のカノンの学力よ」

「うつつ……」

「一週間も学校来なかったんだから、ちゃんと遅れを取り戻さなきゃ。その調子だとテストで……」

「いやー」

使徒の光線に腹を貫かれて入院を余儀なくされた私がベッドの上で無味な生活を送り、ようやく退院したと思えばこれだ。

ふたりきりの教室に軽快なチャイムが鳴り響き、私はバネに弾かれたように重い頭を上げた。すでに窓から夕焼けの淡い光が差し込んでいて、ヒカリの顔が眩しく見えた。

今日はこれからシンクロテストがある。私がまだ本調子ではないから頻度は減らしてくれている。激しい運動はまだできないから模擬戦闘はもちろん無理だ。

「ごめんヒカリ。そろそろネルフに行かなきゃ」

「ああ……もうそんな時間なのね。ちゃんと勉強頑張るのよ？ 世界

を守ることはもちろん大切だけど、勉強も同じくらい大切なんだから！」

「……あい」

そそくさと荷物をまとめカバンを背負って「じゃあばいばい！」と元気に手を振って小走りで教室から飛び出して校門へ出た。

そこにはすでに黒服が私を待っていて、速やかに高そうな黒塗りの車へと乗せてくれた。ネルフのこういった配慮にはとても感謝している。

あつという間に目的地に到着し、私は門前のセキュリティバーにIDカードをかざして中に入った。

ミサトさんに連れられて初めて来た時は右も左もわからなかったが、よく向かう場所ならば今ではもう完璧に覚えられた。

リツコさんの研究室に足を運んで指示を受けた後、更衣室でプラグスーツに着替える。そして手首のスイッチを押してキュツと身体との隙間が引き締まった瞬間、違和感を覚えた。

「……うん？」

なんだか少しだけ、お腹がへこんでいる気がしたのだ！ 今までの側面から見るとちよこつとだけぽっこりと丸みのある膨らみがあったのだが、今確認してみるとそれが無い。

……太っていたわけではないからそこは今違いしないように。

そう、鏡の前に映る私は少しだけせくしーになったのだ！ 普段から太らないようにと細心の注意を払いながら食事には目を光らせていたが、やはり入院生活の中での食生活が物を言ったのだろう。所詮私はなんとなくでやっているだけで、その道のエキスパートには敵わない。

素晴らしき私のぼでー。愛おしげにお腹を擦っていると、幽霊の如き透明な囁き声が聞こえた。

「何をしているの、碇さん」

「うわあああ！！」

猫も顔負けするほど高く飛び上がると、私は速やかに後ずさった。すぐ後ろに立っていたのは綾波さんで、相変わらずの仏頂面でこち

らの様子を窺っている。前世はくノ一だったのではとわりと真面目に考えながらロッカーに荷物を詰め込み、ロックをかけた。

「ちよっとお腹が痩せたからそれが嬉しくて」

「そう。でも前とあまり変わってないように見えるけど」

そう言つてちらりと私のお腹に視線を向ける。

「変わってるもん！」

「誤差では？」

「誤差じゃない……はず……だよな？」

後半部分は曖昧になってしまった。綾波さんの淡々として指摘にボロボロと自信が崩れていく。

女性の二キロ体重が減った……とかは誤差だとか言われる風潮があるのは知っている。まさかそれと同類だったりはないと思いたい。

更衣室を出て通路を進み、シンクロテスト用の部屋に入り、擬似エントリープラグに乗り込んだ。

すると音声デバイスからリツコさんの落ち着いた声が流れてきた。

『ふたりとも、今からシンクロテストを始めるわよ。カノンちゃんは少し日が空いたけどいけるかしら』

「いけます」

『よろしい。では、シンクロテスト開始』

同時にL・C・Lが閉鎖空間内を満たし始めた。

これを肺に取り込む方法は、飲み物を飲むようなものではなく、呼吸をしながら自然に飲み込むのが一番違和感がないと学習した。

液体を見ると無意識に飲もうとするスイッチが入ってしまうため、目を閉じて私は肺に送り込んだ。

よくわからない用語をオペレーターが滝のように次々と並べる。

まず初めに離人感が私を襲った。次に生温い感覚が身を包み、暗い海にゆっくと沈んでいくよう。

その果てにカチリ、と私の身体が何かと合致した。急激に意識が収束し、視界が明瞭になって開ける。

シンクロ……できたようだ。

接続確認の声が聞こえると、そのまま次へ移行する。とはいっても私がすることは特にないのでそのままぼんやりたゆたうだけでいい。しかしながら本当にぼんやりしているとシンクロ率が減少してしまうからちゃんと集中しないといけないらしい。

途端に、ガクンと身体が重くなるのを感じた。重量的なものではなく、私を構成する……なんて言えばいいかわからないが、概念？ 精神？ に重みが加えられたのだ。

少し息苦しくなり、顔を顰める。

『深度を少し下げてみたのだけれどどうかしら？ 苦しくない？』

なるほど、向こうに操作されたのか。それにしても、できれば事前通告とかあるとこちらも心構えができるのだが。

「ちよつとだけ……でも慣れたら大丈夫かもです」

『了解。一旦戻すわ』

すると重みが消え、身体が楽になった。

その後、特にこれといった問題はなくシンクロテストは終了した。L・C・Lを排出し、着替えるかあー、と大きく深呼吸をしたところにミサトさんから『ちよつちミーティングするからあとで来てネ』と通信が入った。

まあシンクロテストの後はいつも、こんな結果で——前回と比べたら——といった風に正直私には全くわからないから、申し訳ないがリツコさんの話は真面目に聞くふりをしている。最後につまりどういうことかをミサトさんが非常にわかりやすく教えてくれるのだ。そのパターンは三つあり、「よかつたつてことよん」「まあ普通ね」「ガンバリマシヨウ」のいずれかだ。

私と違って綾波さんは鳥の行水で、適当にL・C・Lをシャワーで洗い流して「じゃあ先行くわ」とだけ言い残して早々と着替えに向かった。ペたペたと足音が遠のく。

恐らく以前の綾波さんなら絶対に言わないだろう言葉に私はふと動きを止める。この前の私の言動に、少しは認めてくれたのかな、と嬉しく思った。

追いかけるように私もシャワーから上がるがにその姿はすでにな

く、丁寧にドライヤーで髪を乾かした——なるべく急いで——後にミーティングルームへ向かった。

どうやら私が最後らしく、プロジェクターやら諸々がすでに用意されていて準備万端だった。そこからは恒例のリツコさんの講評。そしてミサトさんから「まあ普通ね」を頂戴した。少し間が空いたからできが悪くなってしまっているのではと危惧していたがどうやら杞憂に過ぎなかったようだ。

「あとひとつ話しておくことがあるわ。レイ、席に戻って」

ミーティングが終わり、さっさと退室しようとした綾波さんの背中にリツコさんが声をかけた。

席に戻ったのを確認すると、シンクロテストの結果グラフが映されていた場面から切り替わり、広い赤い海を多数の軍艦が見事な陣形を維持して直進する映像が流れ始める。

何がしたいのかわからず、リツコさんに問い質そうと開いた口は、次の瞬間驚愕のものとなった。

なんと、海面から巨大生物がギラついた歯を見せてながら飛び上がり、画面左前方の軍艦を噛み砕いたのだ。

私が驚いたのは巨大生物であることではない。生物が海に存在しているという事実にある。セカンドインパクト後、地球上の海はすべて赤く染まり、生物はほぼ死滅したと聞いている。なのに映像ではこんなにも力強く泳いでいるのだ。

それだけではない。撮影艦の甲板で異様な存在感を放っていた布に覆い隠された何かが動き出した。勢いよく布に包まれたものが飛んだ。

それは、真紅のボディだった。布を外套のように靡かせ、空を舞う。スリムな体型で、四つ目が特徴的なロボットだ。……いや、これはもしかしなくてもエヴァだ。

すると突然エヴァが高く跳躍し、遠く離れた別の軍艦の甲板に跳び移った。ぐらりと大きくバランスを崩すこともなく直立の姿勢を保ち、プログナイフを装備した。直後、軍艦を噛み砕かんと身を乗り出してきた巨大生物の腹に正確にナイフを挿し込んだ。

これだけでも並外れた身体能力が備わっていることがわかる。一連の完成された動き。桁外れの体幹。どれをとっても私より上であることは明らかだ。

……と、ここで映像が途切れる。

「この後、太平洋艦隊の助けを借りたとはいえ出撃より約三十秒で使徒殲滅。危機回避能力。操縦テクニク。どれをとっても完璧よ」

「あれ使徒なんですか？ 私が入院している間にそんなことが……」

「見たことない変なヤツはだいたい使徒って思えばいいのよ」

ミサトさんの作戦部長とはまるで思えないふわっとした判断基準に私はなるほどと相槌を打つ。

「それにしても輸送中に災難だったわね。何が狙いだったのかしら？」

「式号機ではというのが我々の予想よ。それにしてもセカンドチルドレンの実力は噂以上ね」

「式号機？ あんましっくりこないわねえ」

腑に落ちないといった様子で首を傾げるミサトさんを尻目に、私は気になった疑問を口にする。

「つてことは、新しいパイロットさんはもうネルフにいるつてことですか？」

「いえ、まだ正式な手順を踏んでいないからアスカはホテルで休ませているわ。気になる？」

セカンドチルドレンはアスカというらしい。名前からして……女の子の人だろう。

「それはまあ……これから一緒に戦うわけですし」
するとリツコさんは口の端を僅かに上げた。

「聡明な子よ。十四歳でもうドイツの大学出てるし」
「だ、大学?!」

つまり飛び級ということだ。

そんなの見た目は子供、頭脳は大人を忠実に再現しているではないか。もうコロンに追いつく時代になったのかとひしひしと感じしていると、

「まだ正式な手続きが終わってないから、でき次第紹介するわ。とはいっても明日にはできるから楽しみにしててね」

可愛らしくウインクを決めるミサトさんに思わずどきどきと胸を打たれた。もしこれが男の人に向けられたら間違いないと脈アリと勘違いして自滅の道に進むことになるだろう。

ミサトさん恐ろしいと思いつつながら私と綾波さんはそれぞれ帰路についた。



わくわくしていないと言ったら嘘で、少なくとも私はどんな人が来るのか気になって堪らなかった。そのせいで授業中も意識がそちらにばかり傾いてしまい、ただでさえ遅れているのにまるで話が頭に入ってこなかった。声が耳に届くとそのまま反対の耳からすり抜ける感じた。

「なあ碓、ゲーセン行かへんか？」

そう言ったのは鈴原君だった。カバンにしまおうとしていた筆箱を机に戻して私は顔を上げる。

「げーせん？」

聞き慣れない単語を、まるで言葉を初めて覚えた宇宙人のようにオウム返しした。

「まさか知らんのか？ ゲームセンターやゲームセンター」

「ああ、なるほどね。うんうん。それならわかるよ」

ゲームセンターには……行ったことがない。そもそもゲームをしたことすらないかもしれない。

興味はあまりないが……こうしてお誘いしてくれたのはとても嬉しいが、勉強が……。

「碓、最近ずっと委員長と勉強漬けだろ？ だからたまには息抜きも必要なんじゃないか？ 説得は任せてくれ」

ひよこつと横から現れた相田君までわりと真面目に私を誘おうとしている。ここまでされたら逆に何か別の目的があるのではないかと疑いを抱きそうになるが、正直私も脳のキャパシティをオーバーしそうなところだ。

「じゃ、じゃあ……お願いしようかな？」

「よしー」

やけに派手にガッツポーズをキメた相田君がバレリーナ選手にも劣らない滑らかな動きで委員長に近づいた。

「――委員長。碓、借りていくぜ」

「はあ？ 駄目に決まってるでしょ」

その答えは想定済みだ、と言わんばかりに相田君は「チツチツチ」と人差し指を振った。

「いいや、これは譲れない。碓には休みが必要だ。だから俺たちがゲーセンに連れて行って、日頃の疲れをふっ飛ばしてやるのサ」

「……………」

「異論はないだろう？」

「カノンは良いって言ってるの？」

「言ってるからこうしているんだ」

ヒカリは訝しむように睨みつけるが、やがて「まあそれもそうね」とぼつきり折れた。しかしふたりがガッツポーズを決めようとしたその瞬間。

「ただし私も行くわ」

と予想外の発言を試みさせた。

するとふたりはフリーズしたかのように動きが止まり、動いたかと思うと小さく固まって何やら話し込み始めた。「これじゃあ計画からずれてしまう！」とか「わしがなんとか隙を作らせるから」とか聞こえなくもない。ほんの数秒で会議のようなものが終わり、いつそ気持ち悪いほどの微笑みを浮かべて「ほなら行くか！」と意気揚々と教室を出ていった。

その後を追うように私とヒカリも教室を出た。

……と、廊下に出ると綾波さんがじつと立っていた。まるで気配を感じさせない佇まいに驚きそうになったが、なんとか持ちこらえた。そして。

「…………じゃあ碓さん、また後で」

とだけ言い残すとスタスタ歩き去っていった。もしかして、それを

言うためにわざわざ私を待ってくれていたのだろうか。だとしたら純粹に嬉しい。

綾波さんとの距離が縮まった、明確な変化だ。これからもっともつと近づきたい。

校門を出て、やや興奮気味に足早になっていくふたりを追いかける。じーわじーわと夕方前になっても元気に鳴き続ける蟬の暑さを助長させる。

知らない道。知らない場所。迷ったりしないか不安になるが、きちんとふたりは私たちがついてこれているのかなかなかの頻度で振り返ってくれている。

それほどの距離を歩いてはいないと思われる。しだいにゲーセンならではの軽快なピコピコ音が近づいてきた。

ふたりによりやく追いつくと、何やら神妙な顔で前方を見据えている。

「どうしたの？ 入ろうよ。きつとクーラー効いてるだろうし」

そう尋ねると相田君が顎をさすりながら私を見もせずただ一点だけ見ている。

「いや……あの娘、すごく可愛いな……」

鈴原君も首が取れるほど首肯している。いったい誰のことを言っているのかと気になって、私もその人物を探し始めた。

そして、いた。

ひと目でこの人を見ているのだとわかってしまうほど可愛らしい人だった。白のワンピースに身を包み、さらさらなブロンドのロングヘアが靡く。横顔しか見えないが、陶器のような白い肌に、くつきりとした顔立ち。海外のアイドルですと言われたら私は一切の疑いなしに納得する。

前のめりになって必死にプレイしているのはUFOキャッチャーだ。

男ふたりは完全に鼻の下を伸ばし、理由もなくその場にしゃがみこんだ。目はハートマークで、その意図は私にもすぐわかった。

「や・め・な・さ・いー」

すぐに行動に出たのはヒカリだった。大股でふたりの後ろに立つと、耳を摘んで立ち上がらせる。

「いででで！ イインチョコ、痛いわ！」

そしてUFOキャッチャーに勤しむ美少女がレバーを操作して猿のぬいぐるみを掴んだ。しかし既のところであームから落ちてしまった。

惜しいところだったね、とヒカリに話しかけようとした時。

「なによこの機械！ 壊れてんじゃないの！」

苛立ちを隠すこともなく美少女はUFOキャッチャーの台を蹴つてみせたのだ。

そして英語ではない言葉で一言罵る。

私の中であの人の株が下がった。鈴原君も「あかん、あれはごつつ性格悪いやつや」と独り言を言っている。

そして美少女はくるりとこちらを向いた。

「ちよつとあんたたち。さつきから何じろじろ見てんのよ！」

明らかに怒りを露わにしながらこちらに高圧的に話しかけてきた。

「いやわしは別に……」

すると向こうからずんずんと近づいてきて、目の前で腕組みをして立ちはだかった。不機嫌そうに私達全員を見回した後、どういうわけかこちらに手を差し出した。

「百円ちよーだい。ゲーム代なくなったから。ひとり百円ずつ」

「へ？ 百円？ なんでわしら？」

「美少女である私を見た見物料。あとパンツも含む」

「アホかつ。なんで払わないかんねん」

「ひよつとしてお金持ってないの？ そんなダサダサなカッコして百円も持ってないなんてサイテー」

鈴原君のジャージ姿を見下ろして蔑むようにそう言った。確かに正直私もカッコいいかどうかと言われるとカッコよくないと答えてしまうかもしれない。

それでも、この人の態度はなんだかいけ好かなかった。

わかりきってはいたが、みるみるうちに鈴原君も不機嫌になる。

「ちよつとカワイイからって調子乗るんちゃうぞ！」

前に一歩出ると、美少女の手首を掴んだ。

「何すんのよアンタ！ エッチ！ バカ！ ヘンタイ！」

ブンブンと手を振り払おうと暴れていると、ふとすぐ後ろで違うゲームをプレイしていた入れ墨の入った男の背中に肘が当たってしまった。

そのせいで手元が狂い、自機が敵に墜とされてゲームオーバーの画面が表示された。

「マジかよおおおおお!!」

「あ、ゴメン」

男は席から立ち上がり、少女にきつく詰め寄った。ツバを吐き散らしながら喚く様はただ事ではなさそうだ。

「ゴメンで済むかい！ こちとら最終ステージまで行つてたんやぞツ！ どうしてくれるんや！」

それだけでは怒りが収まらず、「泣かしたろうか!」と少女の顎をグイツと持ち上げた瞬間、スイツチが入った顔になった。

男の手をパツと振り払うと、なんの躊躇いもなく強烈な蹴りを食らわせた。まさか攻撃されるとは思っていなかったのか、男の虚を完全に突く形になり、クリティカルヒットをもらった。しかしまだ倒れたわけではなく、むくりと躰を起こし、「キレイたわ……」と口元を拭って立ち上がった。

「おいお前ら。たーっぷり可愛がってやれ」

男の声に、奥の方からぞろぞろと仲間が三人ほど集まってきた。流石にこれは警察沙汰になるのでは、と不安に思っていると、案外そうでもなく武道をやっているとしたか思えない洗練された動きで男たちを圧倒している。

「……今のうちに逃げよう」

ヒカリに耳打ちされ、私は我に返った。

そして次に呆気にとられている鈴原君と相田君を連れてそつと現場から消えようとした。とっかかろうとした男たちをまるで未来予知の如く華麗に避け、曝け出した隙を突いて蹴りを入れる。

どうやらこの場は任せつきりにしても大丈夫なようだ。

そして誰にも気づかれないうちに四人でフェードアウトしようとしたその時、私の襟首が誰かに掴まれた。強引に後ろに引っ張られ、息苦しさに呻いた。

「おうお前ら。なにこそそこそしてるんだあ?」

仲間の一人に私たちが気づかれてしまったようだ。

「あ、あ……」

頑張つて逃れようと足掻くもまるで意味がなく、そのまま上に持ち上げられた。身長差が激しいから爪先立ちになってしまう。それに首元がしまつて苦しい。

三人は緊急事態に足が震えてその場から動けない。助けて、と言いたい私が私も恐怖のあまり掠れ声しか出せない。

禿頭の男が拳に力を入れ、私に狙いを定めた。

——やられる!

そう思った瞬間、素早く危機を察知した少女がバク宙を決めながら一瞬で禿男に肉迫し、ガニ股に開かれた股を渾身の力で蹴り上げた。大切なムスコにオーバークイルをくらい、私はなんとかギリギリのところで解放された。尻もちを付き、大きく深呼吸を繰り返す。

それと同時に遠くからパトカーのサイレン音が聞こえてくる。恐らくゲームセンターの店員が隠れて通報したのだろう。

いち早く反応したのは私たちではなく少女の方で、光の速さでどこかへ走り去ってしまった。

「大丈夫カノン?! 逃げるわよ!」

「う、うん」

ヒカリに手を捕まれ、私たち四人もその場から離脱する。

必死に走つて、サイレン音が聞こえなくなったところで足を止めた。ゲームセンターで遊んで疲れを癒すという目的だったのに、なんだか逆に疲れてしまった気がする。

「すまんな碓……こんなことになってしもうて」

肩で息をしながら鈴原君がぼつの悪そうな顔をして言ってきた。確かに……あまり楽しくはなかった。それにただ遊ぶだけではなく、

何か裏で考えていたのは見え見えだった。でもその根底にあった『楽しんでほしい』という願いは嘘偽りのないものだとかかった。

だからこそ私は、ここで不満を漏らすのは違うと思った。

「ううん、気にしないで。また今度来たらいいだけだし。それに……ありがとうございます。こうやってこれからも色んなところに連れて行ってほしいな」

そう言つて柔らかい微笑みを向けると、「お、う……せやな」とやや顔を赤くしながら歯切れの悪い返事が返す。

「碇の言うとおりでよトウジ。チャンスは……こほん、また来ればいいんだよ」

携帯の時計を確認したら、すでに夕方前なのに気づいた。

「あ、ごめん。そろそろネルフに行かなきゃだから……行くね」

今日はこれからセカンドチルドレンの顔合わせがあるから、それに遅れるわけにはいかない。

「じゃあ三人とも、また明日！」

手を振り、三人に背を向けて私は歩き出した。すぐ左手に駅があるからそこからネルフ直通の電車があるはずだ。改札を通つて電車に乗り込み、揺れに身を任せてぼんやりしているといつの間にか終点——ネルフに着いていた。

ここまで電車を降りなかった人はほぼ全員ネルフ職員というわけだ。ということは言うまでもなくその人たちは私のことを知っている。

「こんにちは」とか「頑張つてね」や「可愛いね」なんて色々話しかけてくれる。

なんだか私が中心にいるという雰囲気は居心地が良かった。今までは私はどのグループでも蚊帳の外だったから、耐性がないのだ。

皆がそれぞれを言つて歩いていった。私はその背中を見届けた後、近くの自動販売機でりんごジュースを買った。今日はずっと外で歩きたっぴなしかったから喉が乾いて舌が貼りつきそうだった。

蓋を開ける前にひんやりとした冷たさを感じようと頬に擦りながら正面ゲートに向かうと、ふと機械を蹴りつける音が聞こえてきた。

何事?! と思いつながらはや歩きで近づくと、ひとりの少女が苛立ちを隠す素振りもなく喚いていた。

「なによこの機械! 壊れてんじやないの! このカード作ったばっかなのになんで受け付けないワケ?」

その声は、つい先程聞いたものとまったく同じだった。

そして私の気配を感じ取ったのか、少女はこちらを振り向いた。

「ん? アンタ……さっきのもやしね」

「も、もやし?!」

「そりやそうよ。あんな雑魚相手に抵抗すらできないから当然。それにもやしみたいな細っちい身体だし。……そんなことより。なんでもやしがこんなところにいるのよ」

そう言つてシツシツ、と追い払う仕草をする少女が持つカードには、【式波・アスカ・ラングレー】と名前が刻まれていた。

難しいな、この人

ネルフ関係者しか所持を許されないカードを見て私は激しく狼狽した。さらに注目すべき点は、その名が先日聞いたセカンドチルドレンのものと合致していることだ。

「あなたが……式波、さん……?」

「そうだけど? 何よあんた。さっさと帰ってお勉強でもしてなさいよ」

ふんぞり返ってあからさまに私を見下した物言いは、威圧的というより高圧的だ。

だが言われたからといってはいそうですかと大人しく帰るわけにはいかない。私もネルフの関係者だ、そこはしっかりと示さないといけない。カバンから同じカードを取り出して目の前にかざした。

それを見るや否や、顔を驚愕の色に染め、

「はあ?! こんなもやしがサードチルドレン?!」

と叫び声を上げた。

たぶん……いや、間違いなくその時私の顔はムスツとしていたに違いないかった。



「紹介するわ。彼女が今日からネルフ本部に配属されるセカンドチルドレン、式波・アスカ・ラングレーよ」

顔合わせは発令所のオペレーター座席の背後で行われた。ミサトさんが陽気に式波さんを紹介すると、まるで別人格が現れたかのように丁寧な口調で自己紹介をした。

「初めまして! 式波・アスカ・ラングレーです! 至らないところがあられるかもしれませんが、よろしく願います」

誰だこの人は、と驚愕する。そんな私の様子を機敏に感じ取ったのか、上手い具合に皆に見えない角度で背中に手を回し、握り拳を作った。

意味は考えるまでもなくわかった。やはり別人格などではないようだ。もし私の疑惑が間違いなければ、後で速やかに病院に行くこと

を勧めていたところだ。

綾波さんは相変わらずの仏頂面で「よろしく」とだけ言った。私もとりあえず当たり障りのない挨拶をしてその場を凌ぐことにする。

「よ、よろしくお願ひします。式波……さん？」

「ええ、これから頑張りましょう！」

『につこり』の笑顔に圧がかかっている。もしかして皆はこれに気づいていない？ そんな馬鹿な。顔にははつきりと『仲良く（上下関係）しましょうね』としか書かれていないというのに。

すると私の勘ぐるような態度に気づいたミサトさんが、「あつらーん？」とわざとらしく手を口に当てる近隣の奥様っぽい仕草をしてみた。

「どうしたのかしらカノンちゃん？ あらあらあ？ もしかしてアスカのあまりの美少女っぷりに惚れたのかしら」

「い、いや！ 違いますよ!?!」

「えー？ でも今かんっぜんに熱い眼差し向けてたわヨン」

ぶんぶんと音が鳴るほど激しく首を振って私は全力で否定した。確かに式波さんは百人が見て千人が美少女と脊髄反射で答えるほど可愛い子だ。しかしそれは外見だけで、中身はなかなかの脳筋で言葉遣いも荒い。

「まあいいわ。せっかくだし懇親会っぽいことでもしますか！ 一緒に夕食食べるだけだけど！ いいわよねカノンちゃん」

瞬時に冷蔵庫の中身を脳内検索する。ミサトさんはビールとおつまみしか手を出さないから、それ以外はすべて把握できている。余り物だったり、賞味期限が近いものを列挙し、今日明日にでも処理しなければならぬものがあるかを査定する。

時間にして僅か四秒。小さく頷いた私は口を開いた。

「はい、大丈夫ですよ」

「え、何？ どういうこと？」

今の私とミサトさんのやりとりが理解できなかつたようだ。式波さんが首を傾げて訊いた。

「いつもカノンちゃんに夕食任せてるのよ。だからほら、色々ある

じゃない？ その確認よ」

「まさかも……ゴホン、碓さんと同棲してるんですか?! しかも夕食を任せつきりつて!」

「痛いところ突くわね……」

それだけでも中破並みの傷を負わせるには十分だった。女子力という涙を拭い捨ててミサトさんが食堂に足を進める。

ガラスケースに陳列されたレプリカ商品を見てセレクト。私が選んだのはエビフライの乗ったカレーだ。偶然人の入りが少ないためスムーズにカレーを受け取って適当なテーブルについた。ちなみにそれぞれ綾波さんはサンドイッチ、式波さんはうどん、ミサトさんは唐揚げにビールだ。

「……ミサトさん、なにちやつかりビール飲もうとしてるんですか……」

「一本くらい問題ないわよ。誤差よ誤差」

一口でも飲んだら飲酒運転が駄目な理由を知らないのだろうか？
ましてやネルフの作戦部長サマ。先が思いやられる。

栓をプシュ! と開けるだけで恍惚の表情を浮かべる様はどう頑張っただい訳してもアル中だ。

ポイポイと唐揚げを掃除機のように吸い込み、爪楊枝で空を描きながら言った。

「そうそう。先日のアスカの戦闘、録画で見せてもらったわ。さすが噂に聞くセカンドチルドレンね。実力が桁違いね」

ミサトさんのストレートな褒め言葉に式波さんはあざとく照れる素振りを見せた。

「そんなそんな。私なんてまだまだ勉強しないといけないことばかりで……」

——猫だ!

ミサトさん! この人、猫被ってますよ!! と必死に視線を送るがまるで効果がない。それどころか「なあに? もしかしてビール欲しいの? まだ二十歳になってないんだから駄目よ」と上機嫌に笑う。

気づいてもらおうとした私が馬鹿だった。この人は大雑把で雑な性格だから、こういった女の人特有の表裏を理解できるはずなどないのだ。

綾波さんはずっとこちらに目もくれず黙々と卵サンドを食べている。何か助け舟を出してほしいが、期待できそうにない。

「なーんか辛気臭いわね。せつかく仲間が増えたっていうのに」

このどよーんとした空気を読むことのできないミサトさんに問題がある。

ミサトさんがふと席を離れるが最後、式波さんが私にどんなことをしてくるのか想像もしたくない。というより、果たしてこの人とやっつけているのだろうか。

不安だ。

不安で押しつぶされそうだ。

と、その時。

ミサトさんの後ろに少し顎ひげを剃り残している男が立ち止まった。

少し長い髪を後ろで止めていて、男の色気と言えいいのか、それらしきものがどこからか滲み出ている。

そしてくわっと両腕を広げると、躊躇いなくミサトさんの首に回した。

「やー！ ちょっと、何ー！」

身体を捻って抜け出そうとするが、ビールを飲んだせいで少し酔っているのか抜け出せない。

そのまま男はぐいっと、ミサトさんの頭を上に向かせ、互いに顔を見合わせる。

「あいもかわらず昼間っからビールとは……いやはや」

どうやら男と面識があるらしく、ギョツと目を剥いたミサトさんがパイプ椅子を倒しながら慌ただしく立ち上がった。

「な、ななな、なんであんたがここにいるのよ!!」

私も式波さんもキョトンとした顔でふたりのやり取りを眺める。

綾波さんは動じずにサンドイッチをぱくぱく口に運んでいる。

「アスカの異動ついでだよ。ロシアから遙々な」

「はあ?! ロシアあ?! そんなところでなにやってたのよ?」

「ま、それは秘密ということだ」

と茶を濁した男はぐるりと私たちを見渡した。そしてふと私と目が合う。

男はにこやかな笑みを浮かべると、礼儀正しくこちらに挨拶をしてきた。

「初めまして。俺は加持リョウジ。君が碓レ……カノンちゃんだね」

「あ、はい」

第一印象。

少し汚い顎ひげ。

でも人となりは良さそうに見える。

「あの、どうして私の名前を?」

「そりゃそうさ。碓カノン、式波・アスカ・ラングレー、綾波レイの名前はこの世界じゃ有名だよ。特に君は何の訓練もなしの実戦でエヴァを動かしたサードチルドレン。しかもすでに三体の使徒を倒したらしいじゃないか」

「そんなにすごいことではないですよ。だって——」

一体目は知らない内に倒していた。

二体目は同級生たちを守るためにミサトさんの命令を無視して突貫した。

三体目なんて、ほとんどが綾波さんの戦果だ。ポジトロン・ライフルの狙撃によって大破したコアをナイフで突いただけ。

だから、私が倒したと胸を張って言える戦果はなにひとつ残していないのだ。

「私ひとりじゃ、使徒なんて一体も倒せませんよ」

伏せ目に、低く呟く。

「そう謙遜する必要はないさ。どんな過程や状況だろうと、倒したという事実があるんだ。それが世界を救った。君には才能がある。もっと自信を持つべきだよ」

突然ミサトさんに抱きつくというセクハラもいいところな男だっ

たけど、この加持という人は決して悪い人ではなさそうだ。

「ありがとうございます……ごいいます」

「すごいわね。でも四体目は私が倒したんだから」

私に対抗するように言った式波さんの瞳には焦りのような色が見える。

「ところで……カノンちゃんは葛城と一緒に暮らしてるんだよね？」

「そうですね。」

すると加持さんはいたずらっ子のように楽しそうに笑いながらミサトさんを指差し、

「——こいつ、寝相悪いだろ？」

と爆弾と投下した。

食堂に衝撃が走る——！

まるで流しそうめんを投入するが如く。

それを食堂という公共の場で。

私は平然。

式波さんは驚愕。

綾波さんは素知らぬ顔で最後の一口を頬張る。

「ななな、ぬあんてこと言うのよ子供の前で!?!」

確かにミサトさんの寝相は悪い。

毎朝起こす時、実は今日はどんな寝相をしているのかな、なんて密かに楽しみにしていたりしている。

写真に撮って記録を残すのも面白い案かもしれないが、それは流石に良心が引き止めた。

顔を真っ赤にして叫ぶミサトさんは、また一味違った面白さがある。

「もうー、あっちへ行け！ シツシツ！」

手の甲でひらひらと仰がれた加持さんはははは、と笑いながら食堂から姿を消したのだった。

その後はつつがなくなんちゃって親睦会は続き、特に加持さんの乱入のような事件は起こらないまま無事終了した。

式波さんは人の前では猫を被った、ツンけんした人だとだいたいわ

かった。

恐らく打ち解けるのはそう簡単ではないな、と考えながら自室のベッドに身を預けた。

◆

司令室に、男が三人。

ゲンドウは机の上で腕を組み、手に顎を押し付ける。

幾何学的な模様の刻まれた床と天井。この場にいるだけで異質な空気に呑み込まれそうだ。

ゲンドウの眼下には横六十センチ、縦五十センチほどの比較的大きなアタツシユケース。施されている嚴重なロックは、その中にどれほど重大なものが保管されているのかを示す証明。

加持は陽気に「いやはや、大変な仕事でしたよ」と前置きをして報告を始める。

「……仮設5号機と第3使徒は予定通り処理しました。あくまで原因は事故という形で。あなたのシナリオ通りです」

冬月はふたりに背を向けたまま、ガラス張りの壁から外を眺めている。

「それと、ゼーレの最新資料はさきほど——」

「拝見させてもらった。Mark. 6建造の確証は役に立ったよ」

すでに目を通したらしい冬月の淡々とした感想が入る。

「……結構です」

冬月から視線を外した加持は次いでゲンドウと向き直った。そして丁寧にアタツシユケースのロックを解除する。

「これがお約束の代物です。予備として保管されていたロストナンバー」

中にはティッシュ箱ほどのサイズの平べったい黄色の台が固定されている。さらに台の中には人間の首から下の骨を模したような印刷がされていて、首から上には注射器に似た用具が埋め込まれている。

「神と魂を紡ぐ、道標です」

ゲンドウの首が持ち上がる。

その口元には喜びの笑みが薄く浮かび上がっている。数秒ほどその注射器を凝視し。

「ああ。人類補完の扉を開く——ネブカドネザルの鍵だ」と満足げに言った。

仕事を終えたとばかりに硬い表情を崩した加持は口を開く。

「では私はこれで。しばらく好きにさせてもらいますよ」

そうして踵を返し、颯爽と司令室を去っていった。

残された二人は数分の沈黙のあと会話を再開する。

「これで、計画に一步近づいたな」

「まだ土台にすら立っていない。まずはあと五体の使徒を、我々はいかなる手段を用いても倒さなければならぬ。すべてはそれからだ」

「ダミープラグはもうすぐで完成だそうだ。いつテストするつもりだ？」

「今のパイロットの精神状態であれば今すぐである必要はない。しかし近々負荷実験も兼ねてテストしなければならぬ」

不穏な計画は、水面下で着実に進む。

誰にも知られず。

ゼーレにも知られず。

ネルフの誰も知られず。

悲願の為に。



学校の勉強の遅れはなんとか取り戻すことができた。わからない部分をミサトさんに何度か訊こうとしたが、数学ならだいたいは教えてくれるものの、それ以外はてんでだめだった。

頭は悪くないし（そうでなかったら作戦部長になってない）、教え方も学校の先生と同じくらい分かりやすい。

ただひとつ悪い点があるとすれば、常に酔っ払っていることだ。

ビールを片手に、ラフなシャツを着た完全に脱力しきった態度というのはいかなるものだろうか。

顔を隣に近づけられるだけで強いアルコール臭がフーンと鼻の奥

を満たす。

これでは入るものも入ってこない。

その点ヒカリは素晴らしい先生となってくれた。わからない部分を写真に撮ってメッセージを送れば、ほんの数分で解説付きで解き方を教えてくれる。

私はきつと、これからも何度もヒカリにお世話になるだろう。

「ええ!? あいつもエヴァパイロットっちゅうんか!?!」

そう驚愕の声を上げたのは鈴原くん。学校にて、私の席を取り囲むように鈴原くん、相田くん、そしてヒカリが立ち、親睦会の感想を語り聞かせる。

「やっぱ、エヴァのパイロットって変わりモンが選ばれる法則でもあるのかな?」

「それ、どういう意味?」

ジト目で見ると、「ああいやごめん」と返ってくる。

しかし言われてみればこの法則は全く当てはまらないわけでもないような気がする。

綾波さんはミステリアスな感じで普段は何しているのか全く知らないし、式波さんはあれ。

私はというと、お父さんがネルフの総司令。明らかにコネで入ったと思われるも仕方がないと思う。ふたりは自身が。私は周りが、といったところだろうか。

「でも、私たちがその人に会うことはもうないでしょうね」

「せやな。碇は仕事やからしゃーないな。まあ頑張れや」

と少し憐れみの含んだ眼差しを向けながら鈴原くんが肩に手を置いてきた。

「頑張れる……かなあ……」

そう自信なく呟いた、ちょうどその時。

ガララ、と勢いよく木造のスライドドアが開かれ、見知った顔の少女が入ってきた。

百人がいれば千人が美少女だと評するであろう少女。

ふと周囲を見渡し、私たちと目が合う。

「ああ——！」

そう叫んで男衆ふたりが指をさすと、美少女——式波さんが済まし顔で口を開いた。

「あら、あなたたち四人ともこのクラスなんだ」

と言つてから小声で「サイアク」と続ける。

それから遅れて先生がやって来て、転校生ということで式波さんが教壇に立つて紹介された。

やはり人前に立つと八方美人。愛嬌を振りまくその姿はいつそ計算され尽くしたかのようにも思える。

その後はつつがなく授業が進み、先生のいつものセカンドインパクトのループに入ると、生徒たちのひそひそ話が始まる。

話題はもちろん式波さんで持ち切りだ。

私は頬杖をつきながらぼんやり窓の外を眺め、耳を傾ける。

視界にどうしても式波さんが写り込んできてしまうが、それを無視して虚空を見詰める。

あのスタイルは半端ないよな、とかすごいキレイなブロンズヘアだとか式波さんを褒め称える囁きがよく聞こえる。

クラスメイトたちの言う通り、式波さんはまるでモデルのような身体の人だ。まさに絵に描いた存在が三次元に現れたみたいだ。

綾波さんも純白の陶器のような美しさがあって、対して私はとなると、どうも気後れしてしまう。

これまで私という人間を客観的に見たことがなかった。だから私の容姿、それにスタイルがどうかかを気にすることがなかった。

人との関わりを極力避け、孤独に生きようとしていた。

まだ孤独を求める心は強いが、以前に比べるとちよつぱり変わってきている……とは思ふ。

式波さんはパソコンを開いて熱心に先生の話を聞いているようだ。手元はペン回しをして遊んでいるが。

クラスメイトたちの囁きなんて素知らぬ顔で。

そうこうしているうちに軽快なチャイムが鳴り、話に夢中になっていた先生が我に返る。

「じゃ、今日はこの辺にしようかね」と言い残すと軽く下校の挨拶をして教室を出ていった。

すでにチャイムが鳴る数分前から心の中でカウントダウンをしていた人たちはすでに下校の準備を済ませていて、先生の後を追うように弾丸めいた速度で教室を飛び出した。

鈴原くんと相田くんもその中のひとりで、「ほんならまた明日なく！」と陽気に私とヒカリに手を振って帰っていった。

どうやら式波さんにはそれほど興味はないそうさ。もしくは転校生恒例の質問祭りでもみくちやにされているところに突撃するべきではないと判断したのか。外面はいいものの、後でどうなるかは恐ろしくて想像できない。

今日は三人でシンクロテストの予定が入っているため、このままネルフに直接向かうつもりだ。

とりあえず綾波さんを呼ぶが、質問攻めにあつて身動きが取れななさそうな式波さんに一言断っておくことにした。

「忙しそうだから、私たち先に行ってるよ。また向こうで会おうね」私の声は他のクラスメイトたちにかき消されるほどだったが、なんとか聞こえたらしい式波さんはこくりと頷いた。

「じゃあ、行くっか」
「ええ」

ヒカリに別れを告げ、綾波さんと一緒にネルフに向かう。

正面ゲートをカードキーでパスして、長いエレベーターを降りる。

通路を歩き、更衣室に入る。

綾波さんは着替えるのは驚くほど早いのだが、脱いだ服を乱雑にロッカーに突っ込む癖がある。

そんなことしたら皺になっちゃうよ！ と注意してきちんと制服を畳ませてからロッカーに入れる。

壁にかけられた時計を確認すると、開始時刻より三十分も余裕がある。

五分前行動とはよくいわれているが、流石に些かこれは早すぎた

か。

だからといつても、もう着替えてしまったわけだし、この姿でネルフの中をうろうろするのは抵抗がある。

綾波さんは全くないように見えるが。もしかすると裸になっても羞恥を感じたりしないのでは？ などと失礼なことを考えてしまい、頭を振って邪念を捨て去る。

それにしてもこのプラグスーツというものは、やはり何度着ても恥ずかしい。もう少し……こう、マシな……恥ずかしくないデザインはないのだろうか。

今度必ず直談判しようとな回目の決意を胸に、リッコさんたちがいる部屋に行くことにした。

スライドドアを開いて中に入ると、すでにリッコさんを始めたとしたオペレーターたちが慌ただしくディスプレイに向き直って作業をしていた。

「あらふたりとも、はやいわね」

私たちに気づいたリッコさんがコーヒーカップを片手にこちらに歩いて来る。

「はい。特にやることもないので」

「そう。アスカは？」

「転校生なので、質問攻めに……」

するとリッコさんは小さく笑った。

「なるほどね。それで先にふたりで来たのね。どうする？ 別に今か

らでもできるけど、待つかしら？」

私は隣に目配せをする。

綾波さんは考え素振りを見せることなく、即座に、

「どっちでも」

と答える。

ならば決定権はほぼ私にあると言っている。

「じゃあ待ちます。その方が手間も省けるでしょうし」

「わかったわ。じゃあアスカが来るまで適当にくつろいでいて頂戴」

式波さんはプライドがエベレストほど高そうな人だから、遅刻なん

てことはしないと思われる。

そこまで考えて、そもそも質問攻めが終わるまで待つてあげておいたほうが良かったかもしれないと今更後悔し始める。

オペレーターのマヤさんと三人で談笑している内に時間は早馬のように過ぎ去り、時間まであと五分となったところで、式波さんがミサトさんと一緒に部屋に入ってきた。

「ミサト！パイロットたちはいいけど、あなたがこんなギリギリに来てどうするの？」

リツコさんの叱責に、「ごみんごみん」と手で謝る仕草をしたミサトさんがそそくさと椅子に座る。

式波さんのプラグスーツはやや明るい紅色で、彼女の性格を的確に表現しているカラーと言えるだろう。

「待たせて悪かったわね。ほら、さっさと始めましょ。で？ どこ行ったらいいのミサト？」

もしかしてすでに面識があるのか、それともついさっきここに来るまでに打ち解けたのかわからないが、呼び捨てで式波さんが尋ねるが、特に気にする様子もなく気楽に答える。

「ふたりについていけばいいワ。それじゃ、アスカをよろしくね」

窓際から見える、三本の擬似エントリープラグ。先端は何本ものケーブルに繋がれていて、その反対側はL・C・Lに浸かっている。

この部屋を出てぐるりと回ればすぐに着く。

移動する距離は二十メートルもない。

「ほんとに退屈なところね。日本の学校は」

両腕を上げ、手を頭の後ろに回してトウトツ二つまらなさそうに話し始めたのは式波さんだ。

「退屈？ クラスメイトの人たちと話してたからそんなことはなかったと思うけど？」

「はん！ あんな子供たちの相手、退屈で仕方ないわよ。それにあの先生馬鹿丸出し。政府の流したウソに騙されてあんなに長々喋っちゃってさ」

「え？ 嘘？」

式波さんも子供じやない、という言葉の代わりに言葉が私の喉から押し出される。

キョトンとした私と数秒ほど見つめ合い、式波さんは呆れた顔で指差してきた。

「やだ、あんた知らないの？ セカンドインパクトのこと」

「知らないもなにも、巨大隕石の落下で南極大陸が蒸発したって……」

そう先生も言ってるし、教科書にも書いてある。

私の言ったことがよほど面白かったらしい。くすくすと可愛らしく笑いながらバカにするような口ぶりで言った。

「もやしつてば、なーんにも知らないのね！ サードチルドレンのくせにー！」

「じゃあ、本当はなんなの？」

「十五年前、南極で発見した人型の物体……最初の『使徒』を調査中に原因不明の大爆発が起きたの。これがセカンドインパクトの真相」

すらすらと秘匿されている情報を開示してしまつていいのだろうかと疑問に思ったが、ここはネルフだから大丈夫と考えていいのだろうか。

「予想されているサードインパクトを防ぐ。それが私たちエヴァのパイロットの使命なのよ！」

自信満々に語るその様は、最後が言いたいだけなような気がする。

「綾波さんは知ってたの？」

「ええ」

「え、もしかして知らないの私だけ……？」

「そうね」

私だけ知らなかったという事実は想像以上に恥ずかしい。

これは間違いなく私が知らないほうが悪い空気になっている。

「えこひいきですら知ってるのに、あんただけそんなことも知らないでエヴァに乗ってたなんて信じらんない！」

「むう」

返す言葉がない。

というより、どうやってそんなことを知ったのかぜひ聞きたいところ

ろだが、そうこうしている間に移動が終わり、擬似エントリープラグの中に入った。

オペレーターたちが私には理解できない専門用語で色々とアナウンスをしているのをぼんやりと聞き流し、最後にリッコさんの「始めるわよ」の言葉で身を引き締める。

L・C・Lが足元から内部をゆっくり送り込まれる。

そしてこの液体を飲むのではなく、吸い込むようにして体内に送り込む。

肺が満たされたところで、「ではスタート」と宣言と同時に、胸のあたりが仄かに熱くなる。瞬時にその熱は全身へと伝播し、浸透する。私は熱い息を吐き、ゆっくりと瞼を下ろす。

不定形の人影と私の影が、微修正を繰り返しながら徐々に重なるうとする。

やがてそれは成功し、シンクロ成功のログが簡易出力される。

左右に首を降ると、右に綾波さん、左に式波さんの内部映像がディスプレイ表示されている。

すでにふたりともシンクロを済ませ、データの採取に入っているようだ。

『なによ、もやし』

私の視線に気づいたらしい式波さんがじつとこちらを睨む。

「いや、別に……」

『まさか私の心配でもしていたのかしら？ あんたに心配されるまでもなく、私は完璧にできるのよ！』

『そうなんだ』

『そうなの！』

ツンけんしないでいてくれれば、私ももう少し接しやすくなるんだけどな、と思いつつ数分ほど集中していると、テスト終了を告げられた。

『終わりよ。この後ミーティングをするから、着替えてミーティングルームに集合よ』

リッコさんの指示で擬似エントリープラグのフタが開き、肺の中に

残ったL・C・Lを吐き出して大急ぎでミーティングルームに移動、リツコさんからのいつもの講評を頂戴する。

シンクロ率は式波さん、綾波さん、私の順で高かったようだ。

ドヤ顔をしてチラチラとこちらを見る式波さんには少しばかりイラツとしたが、それはそれで式波さんの子供っぽいところなんだな、と心を落ち着かせた。

ミサトさんからは『まあ普通ね』を頂いた。

私には競争心というものはあまりない。人生においてライバルといえる人に出会ったことはない。

だからふたりのシンクロ率が低くても不機嫌になったりすることはない。

しかし、それが良いことではないことはわかっているつもりである。

シンクロ率はエヴァの操縦における反応速度に直結する。

高ければ高いほど戦闘に貢献し、皆を守ることができる。

だから、このままでは良くないのだ。

綾波さんはエヴァを上手く操縦するにはエヴァに心を開くのだと言っていた。その意味は頭の足りない私には理解が難しい。

改めてアドバイスをもらおうとしても、申し訳ないが、口下手な綾波さんだ、恐らく有意義なことは聞き出せない。逆に式波さんだと馬鹿にされる未来が目に見えている。

「あ。ミサトさん、夕食どうします?」

ミーティングルームを出る直前、足を止めた私が尋ねる。

ふたりはすでに出ていってしまった。

「そうねえ……特に希望はないわ。おまかせで!」

「わかりました」

冷蔵庫の残り物でいいだろう、と考えて脳内で何があったのかをリストラしようとした途端、

「あ、そうそう。量はいつもより多めに頼むわよ」

「わかり……ました……?」

そんなにミサトさんはお腹が空いたのかな?

と思いつつ今度こそその部屋をあとにする。

シャワールームでシャワーを浴びて、制服に着替える。着ていたプラグスーツはそのままロッカーにハンガーでかけていれば回収してくれる。

時刻はすでに夕方を回っていて、帰ったらすぐに夕食の支度をしなければならぬ。干している洗濯物も取り入れないといけないし、忙しい。食後の皿洗いだけはミサトさんに丸投げしよう。学校の宿題がしたいし。

唯一楽なのは、帰りにスーパーに寄る必要がないことだ。

家の前に立ち、かばんから鍵を取り出して鍵穴に差し込む。

「ふいふ、つと。ただいま〜」

完全に脱力した調子で息をついた私は玄関に上がる。

ただいまと言うことで、ここが私の家であると再認識ができる。

靴を脱ぎ、まずは自分の部屋にかばんを置きに行こう。通路の明かりをつけて、部屋の引き戸を開けたところで、妙な違和感を覚える。

というより、違和感しかない。

私の部屋に知らない段ボール箱が山ほど積み上げられているのだ。私の部屋の領域なんてもう、一平方メートルもない。さらにそれだけでは飽き足らず、一旦リビングの方を凝視すればそっちにも荷物がこれでもかと言わんばかりに積まれている。

「えええ!! なんてえ!! ミサトさん何か買ったの!!」

通販した?! ビール大好き人間でもこんな大量のビールは買わないだろう困惑しつつ、慌ててスマホの連絡ツールでミサトさんに電話をしようとしたところで、私以外の声がりビングの方から響いてきた。

「失礼ね。私の荷物なんだけど」

胸の赤いリボンが可愛らしい白ワンピースを来た式波さんがミルク瓶を片手に我が物顔でぬつと現れた。

呆れた顔で私を見据えながらミルクをごくごく飲む。さながらここは私の家だという風に。

「な、なんで式波さんがここにいるの?!」

ミルクを飲み干した式波さんは片手を腰に押し当てて。
……また、この家の面倒が増える。
私は無言で頭を抱えたのだった。

新しい日

なぜここに式波さんがいるのだろうか？

いつそ笑ってしまうほど大量のダンボールの中にはいったい何が入っているのか気になって仕方ないが、好奇心を我慢しながらもう一度私は尋ねた。

「その……なんでここにいますか……？」

「なに他人行儀になってんのよ。見ればわかるでしょ。引越しよ！引越し！」

「でも、この荷物はあんまりだよ……」

悲痛さを滲ませながら訴えると、式波さんは涼しい顔でこれを一蹴する。

「あら。そんなの簡単じゃない。もやしの部屋を私の物置にすればいいのよ。そうすれば万事解決！」

「じゃ、じゃあ私の部屋はどうなるの！」

ただでさえ足の踏み場もないほどダンボールでいっぱいなのに、この上中身を広げられたら溜まったものじゃない。

布団を広げるスペースすらなくなり、私は一体どこで寝ればいいのか。

廊下なの!! 私に廊下で布団を広げて寝ろって言ってるんだね!!

あまりにみじめな扱いだと私は泣いてしまうかもしれない。

「察しが悪いわねえ。あんたはお払い箱ってことよ」

「おはらい、ば……？」

聞き慣れない単語に、つい私はオウム返しをする。

「そうよ。だって私が来たんだから。私の式号機は本物のエヴァンゲリオンなんだから！当然、それに乗る私も本物のエヴァパイロット。えこひいきのファーストや、ぽっと出のもやしとは全っ然違うのよ」

「本物？ 本物って何？ 私の初号機は偽物だったの……？」

「あんたバカあ？」

呆れ返った顔で、式波さんは私を見下しつつ「仕方ないわね」と前

置きをした。

「所詮、零号機と初号機は開発過程のプロトタイプとテストタイプ。だから式号機に敵うことはないわ！ 世界を守るのは私ひとりです分なのよ！」

「でも、じゃあなんで式波さんは初めからネルフにいてくれなかったの？ いてくれたらすごく楽に使徒を倒せたのに」

私と綾波さんが目まぐるしい死闘を繰り広げた結果、今の地球が守られているのだ。

それを、遅れてやって来た人が無粋な発言をして私たちをのけ者にしようとするのは少し受け入れ難かった。

どれだけ私が傷つき、何を失ったのか知らないくせに。

俯き、下腹部を擦る。

だからつい反抗的な口答えをしまう。

「……一体しか倒してないくせに」

ぎりぎりまで声量を落とした呟きは、どうやら式波さんの耳には届かなかったようだ。

腕を組む式波さんは少し考えてから言った。

「……上の事情が絡んでるのよ。契約とか引き継ぎとか諸々。使徒の襲来だって、完全に予期できるものでもないし」

そんなことを持ち出されてしまうと、私は何も口出しできない。

そもそも私はエヴァやネルフ、それらを取り巻く環境について何ひとつ知らない、式波さんの言う通りのぽつと出サードチルドレンだ。

確かミスアトさんが注釈でユーロ空軍エースパイロットとかなんとか言っていたような気がするし、そういつた分野は私なんかより遙かに明るいはずだ。

「そんなこと言われたら正直強く出れないわ……でも、私が来た！ ならもう使徒なんて余裕も余裕！ 『お茶の子よいいい』よ！」

「……それを言うなら『お茶の子よいいい』だよ」

「そ、それくらいわかってるわよー！」

と、照れ隠しなのか、式波さんは肘で私の脇腹を小突いた。

とにかく引越してきたのはいいとして、私がお払い箱というのは

流石に嘘だろう。

もし事実だとしたら初号機はどうなる？ 私が乗らないのなら放置ということになる。使わないのに笑えないほどの維持費だけが飛んでいくし、それはお父さんもあまりいい顔をしないだろう。

……もしかして私の代わりが新しく現れた？

それはあり得るかもしれない。私より知識もあつて運動能力の高い適合者はきつといるはずだ。

ミサトさんたちも私にクビだと言い難くてここまで先延ばしにしていた……？

いや、ミサトさんはずぼらだけど、そうした真面目なことはきちんとして扱う人だ。

でも『もしかしたら』があるかもしれない。

スマホで今帰宅中であろうミサトさんに電話をかける。

しかしかけるボタンをタップするちょうどその瞬間に当の本人が帰ってきた。

「ただいま〜」

と玄関の方から疲れの溜まった声が聞こえてくる。

「ミサトさん！ 私が、お払い箱つてホントですか!？」

どたどたと弾かれたようにはしり出した私は屈んで靴を脱いでいるミサトさんに詰め寄った。

「お払い箱？ なんてそんなことしなきゃいけないのよ。これからもカノンちゃんには頑張ってもらわないといけないからエヴァを降ろすわけがないでしょうに。あ、それよりアスカのこと——」

裏付けをとった私はミサトさんの続きを聞かず、再びどたどたと走って今度は式波さんの前に止まる。

「私お払い箱じゃないじゃん！ びっくりさせないでよ！」
と不満を露わにした。

すると式波さんはやや驚いたような顔をして、

「騒がしいもやしね……」
とだけ呟く。

「ちよー！ なによこれアスカ！ 荷物がいっぱいあるとは聞いてたけ

ど、これは多すぎだわ！」

そう私と同じ感想を述べながらも、ミサトさんは畏まった制服を脱ぎながらシャツ一枚になる。

その間僅か五秒ほど。先週よりほんの少しタイムが縮んでいるような気がする。

「日本の部屋が狭すぎるからいけないのよ」

「郷に入っては郷に従え、よ」

おそらく式波さんに与えられる部屋は私とミサトさんのもの間にある空き部屋だろう。広さは私と全く同じくらいになっていて、だからこそ、この荷物をどうやって積み込むのだろうとわりと真剣に気になる。

どれくらいかというところ、今日の確か八時から始まるワイドショーよりも気になる。

「アスカとカノンちゃんに必要なのは適切なコミュニケーション。それを育むために、ひとつ屋根の下で同じ釜の飯を食べるのよ。あ、ちなみにこれは命令だから」

命令と言われると、軍人だからか式波さんはぶつぶつ文句を言いながらも素直(?)にダンボールを片付け始める。

一応私も手伝いとして私の部屋に積まれたダンボールだけを廊下に出しておく。

これで帰宅してからようやく一息ついた私はミサトさんにベランダに干していた洗濯物を入れるように指示し、その間に私は学校の制服からエプロン姿に着替えてキッチンに立つ。

長髪は料理の邪魔になるからゴムを口に咥え、しっかりと後ろでひとつにまとめてから結ぶ。

冷蔵庫の中を確認すると、昨日の夕飯の残り物がタツパに入っているが、とても三人では少ないだろう。

数秒考え込んだ私は、追加でオムライスを作ることに決める。

冷凍してあるご飯は十二分にあるから、それを電子レンジで温めている間にフライパンを用意する。

その後も手際よくテキパキと手をせわしなく動かして十五分足ら

ずで三つのキレイな三日月オムライスが出来上がる。

漂うケチャップの美味しそうな香りに引き寄せられたのか、釣り餌を前にした魚のようにじわじわとふたりが私のもとへと接近してくる。

「はいはい、テーブルの上のものどけてねー」

と私がやんわりお願いすると式波さんが掃除機の如くものを片付け、ミサトさんが電光石火の如く高速でスプーンやらを並べる。それに混じって紛らわしくビールも。

薄く湯気が立ち上るのを見て、ごくりと生唾を飲んだのは誰だろう。ともかく全員が行儀良く椅子に座ったのを確認した私が「いただきます」と言うと、ふたりがこれを唱和する。

「もやし、あんた料理めちやくちや上手いじゃない！」と目をキラキラさせながら私を褒め殺しする式波さんを、単純な人だなあと思いながらビールをラツパする勢いで飲むミサトさんを一瞥する。

本当に味わって食べたのかわからないほど早食いした式波さんは「お風呂ある？」と聞き、すでにミサトさんが焚いていたらしい風呂へと導かれる。

最後に食べ終えた私は食器を流し台に運んで黙々と皿洗いを始める。

「……………どう？ アスカとは馴染めそう？」

四本目のビールのフタをプシュツ！ と良い音をたててミサトさんが頭だけをこちらに向けて訊いてきた。

「そうですね……………なんだかプライドが高い感じで、私とはそこまで馬が合わないような気がする、っていうのが私の今の感想です」

「ま、概ね予想通りね。わかったとは思うけど、アスカは結構一匹狼みたいなところがあるからうまく寄り添ってやってほしい」

「一匹狼、ですか……………」

言われてみれば、確かに大勢の人前に出れば社交的になるが、気を張り詰めないでいい時は、他人と必要以上に関係を持たないようにしている節がある。

会話をされていて、ある一定の領域からは絶対に踏み込むことを許さ

ないオーラ……みたいなものご存在している。

「私は一匹兎つてところですね」

式波さんのように自分に高い自信を持っているわけではない。

「食べられないように気をつけなさいよ〜」

とだいぶビールに酔っているのか、ふらりと立ち上がると私の元へと千鳥足で近寄ってくると、「がおー！」なんて両手をかざして私の背中に抱きついてきた。

「ひゃっ?! ななな、何するんですかミストさん?!」

両肩を大きく震わせた私の反応が面白かったのか、お酒臭い息を吐きながら甘い声で囁いた。

「こーんな風に食べられないようにするんだゾ〜。あとカノンちゃん
は可愛いんだから、雄の狼に『あつちの意味』で食べられないように
ね〜」

「もう、からかわないでくださいよー!」

そう言つて私に抱きつくミストさんの頭に軽いげんこつを落とすと、楽しそうに笑いながらテーブル椅子へと戻っていく。

そして四本目のビールがミストさんの胃の中に消えた頃、風呂場から乙女らしい甲高い悲鳴が響いたと思えば、裸姿のまま式波さんがリビングに飛び込んできた。

「ななな、なんか変なのがお風呂に浸かつてるんだけど!!」

おそらく私も経験したペンペンとの遭遇だろう

お風呂に行つてから少し時間が経つてから、身体を洗つて、いぎ
というところでようやく気づいたのか。

「白黒みたくない変な鳥が……!」

そう慌てふためいている間にも、済ました顔をしたペンペンが浴室からタオルを首にかけて姿で出てきて、器用に爪先でボタンをタップして冷蔵庫横の自室の扉を開けて入っていく。

「あれはペンペンだよ。ペンギンっていう生き物なんだって」

スポンジに洗剤を染み込ませながら頭を後ろに振った私は、その後
に「裸だよ」と付け加えておく。

「……あ」

私がもし男だったら、拳、あるいは飛び蹴りが飛んできていたと確信した。

出会ってまったく日が経っていないのに、行動が予測できてしまう。それも式波さんの性格だからこそといったところか。

やや頬を赤らめながら風呂場へと消えていくのを、私とミサトさんは微笑ましく見守るのだった。



式波さんは大学に飛び級で入っていたと聞いたが、なにやら難しい顔をして学校配布のパソコンとにらめっこをしている。

休憩時間にそんな様子を見た私はふと疑問になって、うんうん唸るところに近づいて尋ねてみた。

「どうしたの?」

「……ああ、なんかもやさしか。あんた、これなんて書いてるかわかる?」

投げやりな質問なのはなんとなく感じる。

私に見せてきたのは理科の問題だった。内容はフェノールフタレイン溶液の反応についての問題だ。

「……」

式波さんが指でなぞった箇所を音読してやると、

「なんだ、そんなことか」

と呟いた。

「もしかして……日本語読めないの?」

「そうよ。ある程度は読めるけど、ローマ字や漢字も混じってきたらもうほとんど無理、お手上げよ。もやしだって英語完璧に読めるわけじゃないでしょ? それと同じよ」

「なるほどね……」

たまにドイツの訛りみたいなのが交じることはあるが、それでも式波さんは流暢に日本語を話すし、コミュニケーションになんの問題もない。

「すごいね、式波さんはこんなに日本語をぺらぺら話せて。私だったら英語になるのかな。読み書きは少しだけできるけど、会話は全然で

きないよ」

「いくら読み書きができて、人と話せないんじや意味ないわよ。顔を合わせて言葉のキャッチボールを交わす。これこそ、ずっと大昔から人がやってきた当たり前のことなんだから」

「それを言われたら頭が上がらないよ」

言うことが達観した大人のようだ。

子供っぽい反応を見せたと思えば一転、思わず言葉を失うほど大人びた考え。

さすがエヴァパイロットは一癖もふた癖もあるなあとブーメランを投げる。

式波さんの裏の顔はクラスメイトにも段々バレてきたと言える。

教室に古そうな小型ゲーム機を持ってきて遊ぶわ、下心を隠しつつ近づこうとした男子の顔を蹴り上げて丸眼鏡を粉々に砕くわで、その獰猛さは下手な不良よりもよっぽどである。

しかしながらこれによる被害がそれほど大きくなっていないのはヒカリのおかげと言える。ヒカリは良きストッパー。そして私は良き八つ当たり対象。

基本的に私、鈴原くと相田くん、そしてヒカリの四人で登校していたところに式波さんが加わったことが大きいだろう。

委員長というただの肩書ではない見事な手綱の握り方だ。

「なんや式波、お前日本語読めへんのか？ そいつ災難やのう。それやったら今度のテストの点数、わしの方が高くなるな！」

そう言いながら面白そうに笑い、話に混じってきたのは鈴原くんだ。

「うっさいわねえー！」

一気に目に見えて不機嫌になった式波さんがドロップキックをくらわせようと構えると、「それは勘弁してくれえ！」と大人しく引き下がった。キックなんてすれば鍛えられた軍人のものは強烈なはずだし、なによりスカートが見えてしまうかもしれない。

沸点が常温より一度か二度くらいしか上なのでは？ と疑ってしまったうほどよく怒る式波さんは『触らぬ神に祟りなし』をまさに具現化し

たような存在だ。

私は急いで鈴原くんの元へ走って耳打ちする。

「……鈴原くん、式波さんはドイツ人なんだからその辺り考えてあげたほうがいいよ」

すると後悔か緊張かわからないが、鈴原くんは身体を僅かにぶるりと震わせた。

すっかり大人しくなったところで素直に謝罪を口にする。

「そっかそっか。すまんな式波。だってお前、こんなにも普通に日本語を話すから全然ガイジンって感じせえへんくてつい、な」

「ふん！」

今はヒカリがここにいないから、変に話がややこしくなる前に収められて良かった。

遠巻きに見ていたクラスメイトたちもほっと胸を撫で下ろした。

「えこひいきー！ もやし！ ネルフに行くわよ！」

しかしまだ収まっていない式波さんの怒りの矛先は綾波さんと私に向く。

ひとりで読書にふけていた綾波さんは素知らぬ顔でこれ続けている。

反応してもらえなかったことがさらに拍車をかけることとなり、どすどすと綾波さんの机の前に立った式波さんは本を勢いよく取り上げてもう一度言った。

「ファースト！ あんたのこと言ってるのよ！」

ようやく顔を上げた綾波さんは目をぱちくりさせながら透明な声で言った。

「……私？ えこひいき？」

「あんた、碇司令のお気に入りなんですよ。だからえこひいきよ」

「……そう。行くから、本、返して」

「なんかあんたと話してたら色々調子狂うわね……」

教科書やらをかばんに詰め込んだ綾波さんに本を返す。

淡々とした言葉しか返ってこないことに毒気を抜かれたのか、怒りのゲージが消えたようだ。

私はそれを見て安心したところで式波さんに声をかけた。

「ごめん式波さん。今日は私、ネルフに行けない」

「え、なんでよ。今日は模擬訓練があるはずでしょ」

「そうなんだけど……どうしても用事があったて」

「エヴァよりも大事な用事なんてあるわけ無いでしょ」

そう疑いのない眼差しで私を見る。

しかし私も冗談で言っているわけではない。

「……いや、これは本当に大事な用事なの。リツコさんには事前に伝えて許可ももらってるから……ごめんね」

「あっそ」

案外あっさり引き下がることに違和感を覚えつつも、「今日ほんかつにでもするよ」と言うところからさまに気分を回復させた。

「ならよし」

と深く頷いて去っていくふたりを見送った私はいつもとは違う電車に乗って目的地を目指す。

近くの駅に降りると、からからに乾燥した風が身体に吹き付けてきた。それは決して強いわけでもないのに、どこか寂しさを感じさせる、虚しい風だった。

黙々と歩くこと数分、私の視界に広大な丘が飛び込んでくる。

雑草などといった植物は一切なく、死んだ地面がずっとずっと、それこそ地平線の彼方まで続いているのではと錯覚してしまうほど広がっている。

さらにこの丘には黒く細長い直方体が、少なくとも数千はくだらないほど整然と屹立している。

「久しぶりだな……」

何年ぶりだろう、ここに来るのは。

具体的にどれくらい前に来たのが最後なのか記憶が曖昧なほど。たぶん三年前後。

ここは、私のお母さんが埋葬されている集団墓地だ。

この黒い直方体は申し訳程度の墓石である。

確か並びは名前順になっているはずだから、碇という名前は随分便

利だ。とはいえそれでも結構歩かないといけない。

それから三分ほどだろうか。ようやく『いか』の辺りまでの名前まで辿り着いたところで、遠くに黒服の男がある墓石の前で立ち尽くしているのが見えた。

私は口を閉ざしたままゆっくりと近づき、背後に立つてようやくその人と呼んだ。

「……お父さん」

「……カノンか」

抑揚のない沈んだ声。

ゆっくりとこちらを振り向いたお父さんの腕には、それはキレイな白百合の花束が抱かれていた。

私もなにか持つてこれば良かった、と思いながら視線をお父さんから墓石へと移す。

『IKARI YUI』

と刻まれた簡素なものは私の知っているようなお墓とは違っていて、少し現実味がない。

「ちよつと、信じられないな。お父さんがお墓参りをするなんて。ひよつとして毎年来てるの？」

「ああ」

「そう、なんだ……」

私とは違って、お父さんは欠かさずここに来ていた。

間違いなく私なんかよりお父さんのほうが忙しいはずなのに。

私の場合は、命日だと知つていてもどうも足が動かなかった。面倒だったからだとか、そういったレベルの低い理由ではない。

お母さんを意識してしまうと、どうしても続してお父さんがセットでついてきてしまう。お父さんは私のことが嫌いなんだ。

だから親戚に私を預けている。

その事実を再確認してしまうのが苦しかった。だから行かなかった。

「……お父さんは、お母さんが大好きなんだね」

「ああ。愛していた」

即答だった。

私は小さく笑う。

「お母さんって、どんな人だったの？ 写真とかないの？」

「ない。この墓もただの飾りだ。遺体はない」

「これもまた即答だった。」

「どうして？」

「人は思い出を忘れることで生きていける。だが、決して忘れてはならないこともある。ユイはそのかけがえのないものを教えてくれた。私はその確認をするためにここに来ている」

「私にはお母さんとの『思い出』なんてないし、お母さんに教えてもらった『かけがえのないもの』もないんだよ、お父さん」

「……………」

お父さんには何年もの間育んだ愛があるのだろう、でも私にそんなものはない。

ふたりから愛を受けていたのだろうが、物心のついていない私の記憶には残っていない。

少し、お父さんがずるいと思った。

腰をかがめて、花束を墓石の前に備えたお父さんは沈黙を貫いたまま刻まれた名前を見つめる。

その動じない瞳の奥でどんな感情が揺れているのかは私には全くわからない。

あれだけ他人を寄せつけないオーラを常時放っているお父さんが唯一大切にしていたという、碇ユイという女性。

私が気になるのは無理もない。

「……………全ては心の中にある。今はそれでいい」

「今は……………」

「……………カノン。私とわかり合おうと努力するな」

そう口を開いたお父さんは遥か遠くを見つめている。

「え？」

「人は皆、自分ひとりの力で生き、成長していくものだ。親を必要とするのは赤ん坊だけで、お前はもう赤ん坊ではない」

「確かに私はもう赤ちゃんではないけど——」

「自分の脚で立って、歩くのだ。私もそうしてきた。もう一度言うが、私とわかり合おうと努力するな。人と人が完全に理解し合うことは決してできぬ」

明確な拒絶の言葉だった。

まるでお父さんから発せられるA・Tフィールドが、私のこれ以上の踏み込みを一切受け付けないと言わんばかりの強烈な拒絶。

私は胸がきゆうう、と締め付けられる想いをした。気道が僅かに狭まって、呼吸が少し乱れる。

それでいながら、このままでは一方的にお父さんのペースに吞まれて終わるような気がしてならなかった。

だから、続きを話そうとするのを遮ってまで私は鋭く返した。

「じゃあ、なんでお父さんはお母さんと結婚したの？ 私っていう愛の形を生み出したの？ わかり合ってるじゃん。碇ユイっていう人とわかり合ってるじゃん」

これはどちらかというところがまま……いや、口答えに近いセリフだと思う。

「——」

ここで、お父さんが明らかな反応を示した。

ピクリと肩を震わせ、ゆっくりと私に向き直る。

その顔はいつもより彫りの深い——怖い顔になっていた。

お父さんは、怒っているのだ。

これまでお父さんが私を見る時は、無感情か、腫れ物を見るような目のどちらかだった。

私の身体は、恐怖に怯えている。

眼鏡の奥の瞳いっぱい、私の姿を捉えている。

しかし私は負けじとお父さんを懸命に見上げながら言葉を紡いだ。「私は……お父さんが嫌いだよ。お父さんも私のことが嫌いなんですよ？ だから親戚に家に預けたんだ。きつとお父さんは知らないだろうけど、私ね、向こうではすごく苦しい思いをしたんだよ。いつしか誰とも会いたくなくなつて、心の奥に閉じこもるようになってし

まったの」

「そうか」

「いきなり呼ばれたと思えば突然エヴァに乗せられて、ほぼ毎日シンクロテストとか模擬戦闘訓練とかばかり。こんなんじや、まともに学校の勉強なんてできない。それに使徒との戦いはいつもすごく辛いし、すごく怖いし、すごく痛い。知ってる？ この前の戦闘で私も子供の作れない身体になっちゃったんだよ？ ここに来なければこんなことにはならなかったはずなのに。だから私はお父さんのことが嫌い」

下腹部にそつと手を添えつつ、お父さんにありつたけを吐き出す。

こんなに人と——お父さんと会話をするのが初めてなくらい、たくさん喋る。

本当は何もかも投げ出して、逃げたい。

子供にこんな過酷な役目を押し付けるのは間違っている。

そう、声を大にして上げたい。

でもそんなことをしたからといって使徒は侵攻をやめてくれないし、私はエヴァに乗れる数少ないパイロットなのだ。

これがどう足掻いても覆らない事実。

「そうか」

……でも。

……それでも。

「——でも、感謝してることもあるんだよ、お父さん」

そう、私は微笑みかけた。

「——」

お父さんが目を見開き、僅かに口を開く。

「ここに呼ばれなかったら、私は隔離された庭の小屋でひとり寂しく腐り果ててた。だからここに来る時、『変わろう』って決意したの。それでミサトさんたちに出会って、人の心の暖かさに触れ合った。それがすごく嬉しかった」

だらしなないミサトさんに加え、つい先日暴れん坊式波さんまでもが乱入した。

ふと私が目を離すと家は地獄と化しそうな勢いがあるが、それを私は本気で嫌っているわけではない。

なぜなら、彼女たちと一緒に過ごすのは楽しいからだ。

式波さんとはまだしばらく硬直状態が続くだろうが、いつかは互いに背中を任せ合える確かな仲間になりたいと思っている。これこそがまさにお父さんの言う、『わかり合おうとする』ことなのだろう。

その過程ですれ違って、傷つけ、あるいは傷つけられることがあるかもしれない。

でも、それから逃げていたのが過去の私なのだ。

「私は今までずっと、逃げてた。色んなことから逃げてた。だから、こんな私を変えるチャンスくれたお父さんに本当に感謝してるんだよ？ ……好きになるのは難しいかもしれないけど、私はお父さんのこと、嫌いではなくなるように頑張りたいと思ってる」

両手を胸の前でぎゅっと固く握りしめたまま私は必死に訴えた。

お父さんはすぐには何も言わなかった。

ひととき強い風が私たちを吹き付けた。

「きやつ！」

長い黒髪が激しく靡き、スカートが捲れ上がる。

それぞれ片手でなんとか抑えながら後ろを振り向くと、特徴的な無骨なフォルムの飛行機——VTOL機がゆつくりとホバリングし、着地するところだった。

「……時間だ。私は先に帰るぞ」

私の長セリフに何のコメントもしなかったお父さんが、そうぶつきらぼうに私に言った。

私の目の前を横切り、VTOL機に近寄っていく碓司令の背中に私は叫んだ。

「お父さんー！」

エンジンの唸り音が私の声をかき消したのか、お父さんは止まらなかつた。しかしもう一度大声で呼ぶと、今度は振り返った。

私は右腕を目一杯振りながら言った。

「今日はありがとう！ たくさんお話できて、嬉しかった！」

「……そうか」

お父さんが乗り込んだのを確認したパイロットがVTOL機を上昇させる。

再び髪とスカートを両手で抑えなければならず、砂煙もたくさん浴びてしまう。

もう少し穏やかに操縦できないのかな、なんて不満を内心で吐露しながら今一度お母さんのお墓に身体を向き直る。

さっきの風のせいで、花束に少し被ってしまった砂を丁寧に払いながらここにいるはずもない、顔も知らないお母さんにごねた。

「お父さん、最後らへんはずと『そうか』しか言わなかったよ。あの人のどこが良かったの？ お母さん」

もちろん、この質問に対する答えは返ってこない。

私だってこれに答えなんて特に求めていない。あれほど怖いお父さんと愛し合うことができていたお母さんの器の大きさには、尊敬の念が耐えない。

娘の私にも、お父さんを理解してあげられる日が来るのかな？ とぼんやり考えていると。

再び風が吹いてきた。

だがこれは乾燥しきった死の風でも、VTOL機の激しい風でもなかった。

やや温いが、穏やかであって滑らか。

どこか懐かしい香りがする……ような気がした。

なんだか不思議な気分だった。

気づけば夕日が沈みかけている。赤く照らされた雲底はどこまでも広がっていて、それを見た私はなぜか式波さんのことを考えてしまった。

おそらくイメージカラーと無意識に結びついてしまったからなのだろう。そして連鎖的に夕食をとんかつにすることを約束していたのを思い出す。

さすがに冷蔵庫にそれ用の肉はなかったはずだから、買い物をしなければならぬ。

大急ぎでポケットからスマホを取り出し、電車の時間を調べながら私は駆け出した。

その頃にはとうに、吹いた風のことなんて私の頭からきれいさっぱり消えてしまっていた。

r ↓ b

海と同じように、宇宙はかつて神の世界だとされていたという。決して人に手出しできない領域。遙かソラの彼方。暗黒に包まれた未知の空間。

しかし今や、人は宇宙でも活動できる術を身につけ、緩やかながらも宇宙開拓は確実に進んでいる。

現在でも月に活動拠点を建てるほどだから、数十年後には火星に人が降り立つ日が来るかもしれない。……使徒という脅威をすべて排除できればという前提であるが。

月の周囲をゆつくりと航行するスペースシャトル。ネルフ御用達専用のものであるが、乗客はゲンドウと冬月しかない。

宇宙服に身を包む二人は食い入るように窓の外を眺めている。

その先には月の表面に点在する巨大クレーターに位置する、ネルフ第七支部の発掘用仮設基地「タブハベース」。しかしながら実質的にここはネルフの背後にいる秘密結社ゼーレの庇護を強く受けている。「月面基地を目の前に上陸許可を出さんとは、ゼーレもえげつないことをするな」

そう冬月が不満を口にする。

シャトルがそのまますすぐ二〇〇メートルほど進んだところで、建造施設の影からようやく目当てのものが見えてきた。

そこには一体の巨人がいた。

その体躯は白く、人による手入れがされたと思われる仮面は、ネルフ本部のセントラルドグマに眠るリリスの特徴に似ている。

地に座り込み、上半身を起こしてクレーターの窪みに背中を預けている。いっさいの身じろぎをせず、その身体の周囲に建造施設が建てられている。

どうやら、今ちょうど頭部装甲を接合する場面のようなのだ。

「Mark. 6の建造方法が他とは違う。その確認ができただけでも十分だ」

「しかし、5号機以降の建造は計画されていなかったはずでは？」

「おそらく我々に開示されていない死海文書の外典がある。ゼーレはそれに基づいたシナリオを進めるつもりなのだろう」

「だがゼーレも気づいているだろう。ネルフ究極の目的に」

シャトルの頭上を、三隻の輸送機が通り過ぎる。各輸送機から伸びるケーブルは、巨大なカバーによつて覆い隠された細長い棒状の物体をぐるぐる巻きにしている。物体の長さはおよそ八十メートルほどで、エヴァにしか持ったりすることはできないだろう。

「そうだとしても、我々是我々の道をゆくだけだ。たとえ神の理と敵対することになろうとも」

そう言い切ったゲンドウの視界に、ふと何かが写り込んできた。

ゲンドウの視線の先には建造中のMark. 6の開かれた右手……ではなく、ソラに伸びた五本の指、その薬指の上で座り込んでいる人影があつた。

幻か……？

ゲンドウは目を凝らして今一度その人影らしきものを見詰める。

「……人か？ いや、まさかな」

冬月もゲンドウと同じものを見ているらしいが、即座に否定する。

そもそも宇宙服なしに宇宙空間で生きることがまず不可能だ。

なんとか捉えることのできる輪郭から、宇宙服を着ているわけではないのはわかる。

だからふたりは気のせいだと意識を切り替えた。

「ところで……」

冬月はこれまでの真剣な面持ちからややリラックスしたものへと変わっていた。

「つい先日、第三の少女と話したそうじゃないか。どうだったんだ？」

「……………」

ゲンドウは僅かに頬を強張らせるが、それだけだった。

脳裏によぎるあの微笑みを、冷徹な理性でかき消す。

「私はあの子を一目見ただけで、まだ会話すらしたことがないからな。お前は果たして、最後まであの子に運命を押し付けられるのか？」

「問題ない。すべては悲願を叶えるため。そのためならば、あらゆる

障害を——乗り越えるまでだ」

「あの子を『障害』呼ばわりするか。聞かれたら嫌われるなんてものじゃ済まないぞ?」

「……………」

◇ ゲンドウは答えなかった。

◇ 「——初めまして、お父さん」

◇ と、銀髪の人影は言った。

◇ 『日本海洋生態系保存研究機構』

と、正門のプレートに長々と書かれた施設の名前を私は一瞬にして忘れてしまった。

さすがにこれほど長い名前を覚えようとは思わないし、なんだかすごそうところだなあと頭の悪そうな感想を頭の中で思い浮かべることがなかった。

しかしそんなことを言えば『汎用人型決戦兵器 人造人間エヴァンゲリオン』はそのさらに上をいっている。

正直、最初はうへえと思ったし、『これってロボットじゃないんですね』なんてコメントしてしまったが最後、リツコさんに耳にタコができるほどあれこれ言われてしまった。

そのおかげもあってか、早口言葉並みの精度で言えるようになってしまった。

結局は皆エヴァエヴァと言っているけど。

名称がともも長いたため大幅に略すが、この施設はつい昨日、加持さんに突然社会科見学として招待されたため来ている。

沿岸部を埋め立てて作られたというこの施設は、実際のところ、その約半分ほどを海が占めている。名前の通り、海に関する研究をしているためだろうか。

少し色気を感じさせるスマイルと一緒に、『皆を連れてくるといい』と私に言ってくれた。

それをミサトさんに伝えると拒否されてしまった。やはり加持さ

んからのお誘い自体が気に食わなかったのだろう。

でも私の目にはミサトさんが本当に加持さんを嫌っているようには見えず、どちらかというところと未練……のようなものが垣間見える。

式波さんもミサトさんに便乗してパスしようとしたが、これは七本目のビールを飲みながら拒否された。

加持さんの言う皆とは誰のことを指すかわからないが、とりあえず呼べるだけ呼ぼうと思った。

その結果、私と式波さんに綾波さんは当然として、あとペンペンも。そして――。

「すごい！　すごいすぎる……！　失われた海洋生物の永久保存と、赤く染まった海をもとの姿に戻すという、まさに神の如き大実験計画を担う禁断の聖地！　その表層の一部だけでも見学できるとはッ！　まさに持つべきものは……友達ッ!!」

この上なく大興奮状態の相田くんが超早口言葉で所感を述べ、カメラを顔面にほぼ貼り付けた状態でそこら中を歩き回っている。

相田くんの言葉通り、この施設は赤く染まった海を青に戻すという浄化実験を行っており、その成功を収めている。

ここに来る前にパンフレットをもらっているが、どうやら何段階かにわけて浄化を行っているらしい。

そしてもう一人。

「ほんま、感謝すんでえ〜」

と私の肩に手をほんと置く鈴原くん。

「お礼だったら加持さんに言つてよ。それにほら、この前のゲームセンターに遊びに行くの結局なくなっちゃったから、これで許してもらえるかな?」

「許すものなにも、ほんまはわしらがなんかしてやりたかったけど、まあそうやな。目一杯楽しませてもらうわ!」

あの時は式波さんがゲームセンターにいて、そこで不良たちとひと悶着あったせいで楽しむことができなかった。

でもここならガラの悪い人は決して入れないし、心から楽しんでもらえると思う。

「ヒカリも誘ったんだけど、用事が被ってしまつてて……ちよつと残念。相田くん、カメラがあるなら、撮つた写真、あとで私達にも送つてね」

「承知！ 超高画質でお送りしてやるさー！」

綺麗な青い海に寄せられてきたのか、たくさんのカモメが空を飛んでいる。

その間にも『管理区画』と書かれた正面ゲートの詰所に加持さんが青白い清潔そうな服で姿を現し、ガラス越しにこちらに手を振つた。

『もつとも、ここからがちよいと面倒だけどな』

と面白そうに言つた。

間もなくゲートが開かれ、私達は加持さんに導かれるがままに移動、男女に別れた更衣室に入り、素っ裸になるよう指示される。

式波さんが「はあ!」と脊髄反射で激昂するが、『まだ序の口だぞ』と言われ、綾波さんはそそくさと裸になつてしまつたから私達もそれに続く。

そこからは地獄だつた。

まずは裸のままひとりひとりレントゲン撮影みたいなものをされて。

その次によくやく下着が与えられたと思えば、男子ふたりと合流して水責め……もとい、小学校の、プールに入る前の儀式として有名な地獄のシャワー(熱いver)を五分以上もかけてじつくりと浴びせられて。

そしてよくわからない液体に沈められて。

命からがら助かつたと思えば今度こそ地獄のシャワーに暖かく、ではなく冷たく出迎えられる。

また液体に沈められて。

地獄のシャワーのニパターンは経験したから次は何が来るの!! と身構えれば極寒の豪風が容赦なく私たちの素肌を叩きつける。

そしてメインデイツシュとばかりにまた液体に沈められた。

どうやらそれですべては工程は終わつたらしく、新しく与えられた下着と加持さんと同じ青白の服を与えられるが、それに手を伸ばす気

力すら湧かない。それは式波さんも同様で、げっそりした顔で、死んだ魚の目をしながら裸のまま呆然と立ち尽くしている。

その姿は普段とは真逆でとても面白かったが、私にそれを笑う余裕なんてこれっぽっちもなかった。これまでさんさん馬鹿にされてきた鬱憤をここで晴らしてやろうと思ったが、できないのが残念だ。

「もやし、あんた……なんて顔……してんのよ」

そう小馬鹿にしようとしたのか、式波さんの声に力はまるでない。疲弊した筋肉を動かそうとしているのか、顔の所々がピクピクと小刻みに痙攣しているのがよくわかる。私を笑おうとしていたのだろう。

「式波さんさん、こそ……今皆に見せられない顔してるよ？」

「二度とあんなのゴメンだわ」

「私も同感」

なんとか服を着る気力を回復させ、いざという頃にはすでに綾波さんは着衣を完了させていた。

「先、行って待ってるわ」

そう言い残してすたすと更衣室を去っていく。

「……あの仏頂面は気に入らないけど、何事にも動じないところは、素直に尊敬するわ」

「綾波さんってすごいなあ」

おそらく男子ふたりも着替えているだろうから、くたびれた手を懸命に動かして服を着る。

式波さんと一緒に小走りで更衣室を出ると、やはりというべきか、私達が最後だったようだ。

私たちを待っていた鈴原さんと相田くんもどこかげんなりした顔だ。

やはり男の子でもあれは相当きつかったのだということを実に物語っている。

「おお……お前らもえらい顔しとんなあ」

男の子にそんなことを言われるのは恥ずかしい。私は胸に抱いていたペンペンを地面に下ろすと両手で頬をほぐし、無理やり笑顔をつ

くった。

「き、気のせいじゃないかなあ？」

「……………」

ジト目で見られるが知らないふりをしてしていると、チーン、と軽快な音が響いてスライドドアの上部ディスプレイに通行可と表示され、静かにドアが開いた。

私は飛び込んできた光景を見て、これまでの苦行など一瞬でどこかへ消え去ってしまった。

そこは地下三階。巨大な水槽がいくつも並べられた目を見張る場所だった。

驚くべきはそれだけではなく、私の知っている海とは違って、美しい青なのだ。

外から水槽に差し込んでくる光のおかげで、地下三階は仄かな青色に包まれている。

さらに、水槽の中には見たこともない生き物がたくさん生き生きと泳いでいる。

「わあああ……………」

興奮のままに私が口を開くと、その脇から男子ふたりとペンペンが勢いよく飛び出した。

あつという間に気力を回復させた私は、まだ湧き上がる感情についてこれていない身体に鞭打って脚を動かす。

棚に備えられていたパンフレットを手に取り、前方不注意ギリギリの感じで水槽と視線を行き来させる。

こういうのを『水族館』というのを私は知っている。

背中に硬そうな何かを背負い、四肢を使って泳ぐ生き物がいれば、平べったいひし形のような身体に長い尾を持つ生き物が、身体の両端を波打たせて水槽の中を悠々と泳いでいる。

「こんな変な生き物もいるんだ……………」

セカンドインパクト前は海が青くて、たくさん命に満ち溢れていたなんてまったく信じられない。

ペンペンと邂逅したとき以上の衝撃を受けつつ、私は咄嗟に相田く

んを呼ぼうとした。

しかし彼はすでに遠くに離れていて、鈴原くんと歩き回りながら写真を取るのに夢中になっている。

「ま、いつか」

生き物の写真を撮ってもらおうと考えていたから別にいいだろう。カメラの知識は私にはないが、それなりに高品質なカメラであることは見たらなんとなくわかるし、送られてくる写真が今から楽しみだ。

きつとミサトさんも羨ましがること間違いなしだ。……いやでも『こいつらおつまみとかにできないかねえ?』と酔っ払いながら言いそうな気もしなくもない。

そんなことを考えてしまったせいも、生き物たちへの見方が少し変わってしまったようになってしまった。

おのれミサトさん、と心の中で勝手に責めつつぶんぶん頭を振った私は、ふと大きなパイプに腰掛けている式波さんを見つけた。

「どうしたの式波さん?」

私の声に反応した式波さんは気怠そうに顔を上げると、馬鹿にするように鼻で笑う。

「どうやら身体の疲れは取れたようだ。」

「こんなのではしゃいじやって。バツカじゃないの?」

「む。はしゃぐよ、これは。だってセカンドインパクト前の生き物なんだよ? 知らないのがいっぱいいいて面白いじゃん」

「ふーん」

何やら含みのある返しだった。

興奮冷めぬ男子組が私達の目の前を走り去っていくのを見送る。

「……子供ねえ」

と式波さんがコメントし、心底つまらなさそうな顔で懐からゲーム機を取り出して遊び始める。

私には式波さんが『大人な私ってすごい』みたいな妄想に取り憑かれているのではと邪推してしまっただが、それを指摘してしまうと間違いなく激昂するだろうから口にはしない。

もしかしたら、本当に心が大人のように成熟している可能性だってあるのだから。

「もう少し明るいところでやったら？ 目が悪くなるよ？」

「あんたは私の保護者か！」

ぶつぶつと文句を口にしながらも明るい所へと移動を始めた式波さんを尻目に、私は少し離れたところにある細長い筒状の水槽に興味があい寄せられた。

鉄製の階段をカンカン、と鳴らして上り、立てかけられた橋の中央に立つ。

「あ」

私と同じくこの水槽に興味を持った綾波さんが、向こう側からこっちに来ようとしている。

「一緒に見ようよ」

「……ええ」

私のすぐ隣に立った綾波さんと、水槽の中を観察する。

この水槽にいるのは先程の『カメ』や『エイ』のような大きさの生き物ではなく、比較的小さい……手のひらサイズの小さな生き物がたくさん泳いでいる。

「綾波さんも来れて良かったよ。身体は大丈夫なの？」

前回のヤシマ作戦からしばらく期間が開いている。

初号機は大破で現在修復中。リツコさん曰く、明日にでも完了するらしい。

零号機は狙撃手を担当していたため比較的軽傷で済んでいる。

どちらかというと初号機と私のほうが傷は深いが、しかしながらパートナーを心配するのは当然のことである。

「碓さんの方こそ大丈夫なの？」

「うん。もう元気いっぱい。心配してくれてありがとう」

「ええ」

「式波さんも新しく来たことだし、これから三人で頑張ろうね」

「そうね」

ほぼ一秒にも満たない返事だったが、私はそれでもいいと思った。

なぜなら、その言葉に僅かな感情の機微のようなものを混じるようになったからだ。

以前ならば本当に言葉通りの意味しかなかったが、ヤシマ作戦を乗り越えて、私たちの距離は確実に縮まったと確信できる。綾波さんは感情を言葉や顔に出すのが苦手な人だ。式波さんとは正反対だからおそらく度々衝突する可能性は否定できない。

「どう？　楽しい？」

私は水槽に手を触れながら訊いてみた。

「……楽しいかはわからないけど、嫌いではないわ」

「良かった。これからも一緒にたくさん出掛けて……色んなものを見て……気持ち共有したいな」

なるべく明るく話すが、後半にかけて私の声は気恥ずかしさに萎れていく。

ちよっぴり不器用だけど、私なりの精一杯の歩み寄り。

自分から他人の心に踏み入ろうとするのは恐らくこれが初めてのことだ。

綾波さんが弾かれたように顔を持ち上げて私に向ける。

少しだけ驚きが混じったような顔だったが、すぐにいつもの無表情に戻る。

「碇さんとなら……いいいわ」

「……！」

今度は私が顔を向ける番だった。

少しだけ私という人間が変われたような気がして、綾波さんと距離がまた一步縮まった気がして、私はこの上ない喜びを感じた。

自然と口の両端が吊り上がる。

「……この魚たちは、この中でしか生きられないのね」

突然話題が変えた綾波さんは私と同じように手を伸ばして水槽に触れる。人差し指からそつと……そつと手のひらを触れさせる。

「私と同じ」

その言葉に如何なる意味が含まれているのか、私には理解することができなかつた。

憂いのような、憐憫のような。

そんな簡単に言葉にはできない顔だったことだけが、私にわかったことだった。

「おっ、こんなところにいたのか」

下の方から声が聞こえたから橋の下を見下ろすと、加持さんがこちらに手を振っていた。

「そろそろ昼飯にしよう。君たち待ちさ。俺も腹が減ったよ」

「すみません、すぐ行きますー！」

と返事をして、私は綾波さんに声をかけた。

「行こっか、綾波さん。お昼ごはんはね、私がお弁当作ったんだよ」

「そう。自信があるの？」

「ある程度はね。ミサトさんいつもレトルトとかだから、毎日私がお弁当作ってるんだ」

階段を降りて加持さんと合流、案内されるままに水族館を離れて、預けていた私服に着替える。

きつと水族館に入館する前にあれほど地獄を味わされたのは、万が一にも菌を持ち込まないようにするための措置なのだろう。

服は綺麗に畳まれていて、『除菌済』の付箋が持参してきていた弁当箱と一緒に置かれていた。

出口で待っていた加持さんに連れられて、私達はテラス……と思いきや、巨大な水槽をくり抜いたような広場に入った。そこはガラス張りの高い天井になっていて、日差しが海をすき透して広場に降り注いでいる。

「待つとつたでセンセ！ さき、はようはよう！」

最近になって鈴原くんを『センセ』呼ばわりするようになったが、その理由はよくわかっていない。

時々勉強のわからないところを教えてあげているからなのか、それともエヴァで戦っているからなのか。

前者はどちらかというところとヒカリのほうが相応しいと思うし、後者にいたっては綾波さんだと思われるのだが、鈴原くんは良くも悪くも意志が硬いから特に矯正させるつもりはない。

センスと呼ばれて別に悪い気分になるわけでもないのだから。すでに広げられたレジャーシートに靴を脱いであがった私はキラキラと目を輝かせる皆の前に弁当を披露した。

「じゃーん！ 私が今日の朝頑張って作ったお弁当です」
そう言いながら私は重箱のように積み上げられた弁当箱を丁寧に分ける。

中身は私が昨夜から楽しみにしながらしこみまでしていた具材を小綺麗に盛り付けた一品たち。

式波さんに「まあ、もやしの弁当楽しみにしてるわ」と期待の声をもらったのだからそれに応えるのが女というもの！

中で具材が崩れたりしていないことにほっと胸を撫で下ろす。

「おおお!!」

男子諸君の感嘆の声が漏れる。

私を手渡したお箸を受け取るもどこかふわふわとした意識のまま弁当に食い入るように見つめる。

「いやあ、葛城から料理が上手いつてのは聞いていたが、想像以上だよ」

加持さんが僅かに驚愕しながらそう言う。

「まだ食べてないのにはやいですよ……?」

「見た目ですでに美味そうなのに、もしこれで不味かったらある種の才能だよ」

「あ、ありがとうございます」

素直に褒められて照れてしまうが、その間にもお腹を好かせた人たち私『よし』を待っているから照れ笑いから苦笑いに変えて『よし』を出した。

それとほぼ同時にいただきまーす！ と元気な声が広場に響き、各々が箸を伸ばす。

そして口にはくっつと運んで――

一同に衝撃走る――!

何かの発作のように手をふるふると震わせながら弁当、そして私の間を視線を何度も行き来させる。

「んんまいつ!!」

初めに高らかに感想を述べたのは相田くんだった。

「絶妙な焼き加減と味付け! それにちょこつと可愛らしいウインナーの切り方とかが相まって、その辺りの中学生にできる料理とはとても思えない!」

「なんかケンスケ、今日はずうーつとハイテンションやなあ」

「こんなのローテンションじゃないぞ! こんなにも素晴らしい施設を見学させてもらえて、さらに碓の手料理が食べられるなんて……俺は……俺は……幸せだ……!」

「あかんないつ、チョット逝ってるわ」

上の空になった相田くんは放っておけとばかりに首を振った鈴原くんが目にも止まらぬ速さで箸を走らせる。

「俺の見立ては間違っていないかったな。君は絶対に良いお嫁さんになるよ。なんとたって家事スキル皆無の葛城と一緒に住んで生きていられるんだからな。これは俺のお墨付きだ」

何を根拠に自ら『お墨付き』と断定できるのかはよくわからないが、大人の人にも認めてもらえるのは嬉しくないはずもなかった。

「これを毎日食べられる葛城とアスカは羨ましいよ」

「この前つくってもらったとんかつは美味しかったわよ!」

「ああ、あれね」

買ってきたお肉をそのまま揚げるのではなく、柔らかくなるようにほぐしてから揚げたのが効果抜群で、式波さんからは絶賛の声、ミサトさんからはビールの追加が止まらなかつたのは新しい記憶だ。

「確かにセンセの弁当はクラスの中では毎日楽しみにされてるからなあ。美味さはもちろん、見た目とか。式波のもなんやろ?」

「そうだよ。ミサトさんのもつくってるんだ」

「はえ、毎朝ご苦労さんやなく。式波もセンセに感謝しとけよ」

「当然よ! おかげで舌がすっかり肥えてしまうわ!」

嬉しい誤算だ。

しかしながらふたりが私の料理に依存しきっているのには少し問題があるような気もしなくもない。

もしいつか私達が家を出る日が来た時、それぞれの食生活がどうか想像するだけで背筋が凍るほどの悪寒が走る。

心の中でふたりの私への依存を改善することをメモしながら視線を振ると、綾波さんがいつさい弁当に手を付けていないことに気づいた。

箸の先も汚れていないし、一口も食べてないことが伺える。

「あ、ごめんね綾波さん。口に合わなかったかな？」

私をちらりと見た綾波さんは次に弁当に視線を落とす。

「いえ……私、肉、食べないから」

「あ、そうなんだ」

思えばこの弁当にはやや肉系が多いような気がする。男の子も食べるのなら、力のつくやつのほうがいいと思ってレシピを選んだが、どうやらそれが裏目に出てしまったようだ。

「なんで悪くもないのにもやしが謝んのよ」

これに突つかかったのは式波さんだった。勢いよく立ち上がると、不愉快な眼差しを向ける。

綾波さんのつらな瞳と視線が絡み合うが、それだけで何も反論もしてこない。

口を歪ませ、しびれを切らした式波さんが「えこひいき！」と罵倒する。

来る人数分の肉を用意していたから、綾波さんのだけいらなくなるとその分だけ余ってしまう。

「肉いらんのか？ じゃあわしがもらったるさかいなー」

鈴原くんが言葉に隠せない喜びが前面に押し出されているが、私はそれを敢えて指摘しないでおく。

しかしそうはさせないぞと今まで気をうかがっていたペンペンがその邪魔に入ろうとしてきた。

鈴原くんの足元に立ち、ひとときわ甲高い鳴き声で牽制してこようとしてくるが、ここで勢いに負けてまんまと肉を横取りされるつもりはさらさらなようだ。

「うわっ！ なんやこいつ！ 卑しいやつちやなー！」

なにくそ！　と思ったのかどうかはわからないが、弁当箱そのものを持ち上げて徹底抗戦を宣言すると、ヒートアップするペンペンの怒りも相まって、一気に広場は慌ただしくなった。

ペンペンの華麗な追撃を躲しながら向こうへと消えていってしまつた鈴原くんを暗黙の了解で放置することになる。

とはいえ綾波さんがこのまま何も食べてくれないのは私も悲しいから、何か食べてもらえそうなものがないか思考を巡らせていると、あるものが思い浮かんだ。

私が手を伸ばして掴んだのは一見すれば水筒と見間違えられる魔法瓶だ。

中に入っているのは――

「じゃあ味噌汁はどうか。お肉入ってないし、これならいけると思うよ」

きゅつ、と蓋を開けて、そこに中身を注ぐ。

さすがは魔法瓶で、結構な時間が経過したはずなのに冷たくも温くもなっていない、最適な温度のまま維持できている。

ほのかに沸き立つ湯気が溶け込んだ味噌の匂いと混じって何とも言えぬ食欲を誘う。

蓋を受け取つた綾波さんは鼻を少しばかりひくつかせて匂いをかいたあと、ゆつくりと口をつけて含む。

「ああつ、ふーふーしてないけど大丈夫？」

私のとっさに出た心配に対する返事は返ってこなかった。

どくん、と身体を大きく跳ね上がりさせた綾波さんの目は大きく見開かれていて、数秒ほど硬直していた。

その珍しい反応に一同の注目が一気に集まる。

「……美味しい」

という短い呟きは、私には綾波さんの可愛らしさがぐつと凝縮されたかのように聞こえた。

その後はつつがなく食事は進み、私が張り切ってつくりすぎたはずなのに、想像以上の男子たちの食欲のおかげで見事弁当は空っぽになったのだった。

◆
「なあ、ケンスケ」

「ん？」

「どうや？ うまいこと撮れたか？」

「ああ、もちろんだとも。俺がその辺ミスするわけがないだろう？」

カノンは加持と散歩にでかけ、アスカとレイはどこかに行ってしまった。

一応一時間後に広場に再集合になっているが、トウジとケンスケはその場から動かない。

ケンスケがかばんから取り出したのは、今日一日ずっとお世話になっているカメラだ。

カノンから撮った写真データを送るように言われていて、それは申し分ない量の写真は取れているはずだ。

生き生きと海を泳ぐ魚たち。カメラの質も相まって、とても素晴らしい一枚になっている。

が、トウジが訊いたのはそれについてではない。ケンスケも分かっているとはかりにデータフォルダを漁り、真の目的たるフォルダを開く。

そこにあつたのは魚たちではなく、なぜかカノンやアスカ、レイの隠し撮り写真ばかりだ。

水槽のガラスに張り付いて目を丸めて興奮しているカノンに始まり、静かに魚を観察するレイやひとりゲームに耽るアスカなど、その数は少なくとも百枚はくだらない。

「最高の写真がこんなにくさん……被写体はもちろん、学校じゃないところだからこそその価値ってもんが付与されるのさ」

ケンスケが恍惚とした表情で写真をスライドさせる。

これを印刷して学校で売り払えば、目を見張るほどの速さで売り切れることはまちがいないとふたりは確信する。

「これでわしらの懐もほくほく、男たちもにっこりやなー」

「ああ、前は綾波だけだったけど、碇に加えて式波までも加わったんだ。これはもう需要が鰻登りだ。今が最高潮と言ってもいい」

「エヴァのパイロットちゆうんは、あないにかわいいおなごにしかないルールでもあるんやろうか？」

「さあな。俺もエヴァには乗ってみたいけど、もしそれが本当なら……諦めるしかないかもな」

綾波レイ。

氷のようできて、なおかつ纏うミステリアスなオーラがより一層魅力を実際立たせる。しかし最近になってカノンとの触れ合いを経て氷が溶けてきていて、見え隠れする感情の隙間に人気爆発中のファーストチルドレン。

式波・アスカ・ラングレー。

歩く火山。誰にも負けない強さとプライドは人間的な意味でも憧れられていて、しかしながら暴力的なせいで特殊性癖に目覚めてしまった哀れな男子が後を絶たないセカンドチルドレン。

碓カノン。

スタイルはレイとアスカには些か劣るものの、内向的な性格を直そうと頑張るその姿が健気で可愛らしいと評判が高い。また、時折見せる幼さを強く残した言動が男子の庇護欲を強烈に刺激するサードチルドレン。

派閥はこの三つに大きく別れ、これらが表の世界で衝突しないように上手く操作するため、適度なタイミングでこうして彼女たちの写真を供給することで束の間の平和を維持しているのだ。

この前カノンをゲーセンに誘った時は、もちろん勉強という鎖から一時的に解き放ってやろうという善の心はもちろんあった。しかし普段学校では見られない活発的なカノンの姿をカメラに収めたいという邪な願望も少なからずあった。

だから今回カノンからお誘いが来たのは絶好の機会としか言えなかった。

「わしらを……世界を守るセンチたちを盗撮するのはちよつと心が痛むけど、やっぱ男のリビドーはどうしても止まらへんもんやなあ」

どこか悟った口ぶりで虚空に呟いたトウジは、写真をチェックをす

るケンスケの後ろから二重チェックに勤しむのだった。

◆ 外の空気を吸いたい、と言った私に着いてきてくれたのは加持さんだった。

一緒にエレベーターに乗って水底から水面、そして更に上昇して私達が出てきたのは、浄化された青い海と赤い海を隔てる境界面の天端だ。

水面から目算でおよそ三十メートル。思ったより高い位置で、つい身体が萎縮してしまう。

「高いところは苦手か？」

加持さんは平然と歩いている。

「いえ……手すりがあるからなんとか大丈夫です」
「そうか」

高いところが怖いだなんて、ここよりエヴァのエントリープラグのほうが遥かに高い。しかしそれが気にならないのは、高さゆえの恐怖ではなく、明確な死——使徒を目前としているという恐怖のほうが勝っているからなのだろう。

なんとか平常心を取り戻した私はそれでも手すりだけは決して離さないようにしながら加持さんの跡をとととと追いかける。

懐からタバコを取り出した加持さんはライターで火をつけようと
する。

「あ、加持さん」

「ん、なんだい？」

「すみません、私、タバコはちよつと……」

「ああ……悪いな、配慮が足りなかったようだ」

タバコをしまい直した加持さんに私は慌てて謝る。

「いえ！ 私の身勝手……すみません」

「別にいいさ。実際、タバコを吸っていいことなんて何も無いからな。ただ気を紛らわせることしかできない」

じゃあなんで吸うのだろうと不思議に思ったが、別に私がしたい話

ではないのでそこでタバコの話は切り上げ、代わりを口にする。

「私が産まれる前は、海が青かったなんて信じられません」

背後には水平線の彼方まで赤が覆い広がっているが、私の眼下には、きらきらと日差しに反射する青い水面が広がっている。

もしこの施設がもつと大きく……例えばネルフの傘下に入って本格的な運用が開始されればネルフという強力なバツクの力によって資金や機材、さらに場所などの提供が大いに期待できるはずだ。

そして何年後になるかはわからないが、美しい青い海を取り戻すことだって可能になるかもしれない。

「すごく……きれいです」

私の口から自然と感想が溢れた。

「人が生きていける環境だけでも、よく復元できたものさ」

「でも……なんだか変な匂いがしますよ」

外に出てからずっと気になっていたことを口にする。決していい匂いなどではない、むしろどちらかというところと不快感を募らせてしまう腐った匂いだ。

「海が生きている証さ。赤い海とは違って、海には色んな生き物がいて、産まれて、死んでを繰り返す。海は生命の起源でもあるしな」

「正直あまり好きな匂いではないですけど、これが……命の循環、みたいな感じでしょうか？」

「お、良いこと言うじゃないか。うん、まさにそんな感じだな。かつて、海はいろんな生命に満ち溢れていたんだ。そのことを君たちに知っておいてほしかったんだ」

淡水で生きる魚たちはだいたい知っているが、海となると話は別だった。

考えれば地球の約七割は海が占めているのだから、陸に生きる生物より遥かに数や種類が多いことは自明の理なのである。

その一部分を知り、実際に見ることができたのは人生においてもとてもなく貴重な機会だった。

加持さんに誘ってもらえて、私は本当に嬉しかった。

「ありがとうございます、加持さん。すごく勉強になりました！」

「そいつはよかった」

「ミサトさんも来たたら良かったのに。今日は非番だから、きつと家で寝てるかビール飲んでるに決まっています」

容易に想像できてしまうだらけきつたミサトさんの様子に、思わず笑ってしまう。

たまにはこうして景色のいいところに出かけて気分をリフレッシュしてくれたりいいのにな、という気遣いから出た言葉だった。

しかし加持さんは手すりにもたれ、誤魔化すように顔を上に向けてさらりと言った。

「んー、葛城は絶対来ないぞ。たとえ俺が招待していなくても。あれを思い出すからな」

「あれってなんですか？」

「——セカンドインパクト」

「あ……」

セカンドインパクト。

南極の氷が溶けたことによつて海面が上昇し、世界中の大都市が呑まれてしまったという、人類史における最大規模の災害。さらにそれだけではなく、地球の地軸を変化させ、日本は四季によつて様々な趣のある風景を生み出していたというが、それもなくなつて常夏の国となつてしまった。

難民や食糧難などから世界中の混乱は紛争にまで発展し、確かその中で旧東京に新型爆弾が落とされて——と学校で習った。

本当のセカンドインパクトの原因はつい先日式波さんの説明で知った。

私はこの災害の後に生まれた人だから、どれだけ厳しい生活状況だったのかは想像を絶する。

例えば、加持さんたちが子供の頃くらいがちやうどその時なのだったと、今更ながら気づいた。

加持さんは私とは違って、この青い海を見て違う想いを抱いていたのだ。

「すみません、私……！」

とんでもないことを言ってしまった。私は加持さんの過去の傷を、無意識に深く抉ってしまったのかもしれないと掠れ声で謝る。

しかし加持さんは「俺は大丈夫だよ」と柔らかい微笑みを向けるがすぐに表情を改め、

「でも葛城にはあまりこの話をしないでやってくれ」

「それは、はい、もちろんです」

「ところでカノンちゃんは葛城がなぜネルフに入ったか知ってるか？」

潮風に煽られ、加持さんのくくられた後ろ髪がふわりと靡く。

「葛城の父親は、自分の研究……夢の中に生きる人だったそうだ。あいつはそんな父親を嫌っていたそうだ」

「私と同じ……」

明確には私のお父さんとミサトさんのお父さんは違っているが、父親を嫌っていた。と言う点においては同じだった。

そういえば私はミサトさんの家族について、何も知らない。

「セカンドインパクトの日、葛城は父親に連れられて南極にいたんだ。それで爆発に吞まれる瞬間、その父親に脱出ポッドに押し込まれて、助けられた」

「……………」

私のお父さんは……最期の場面でも、命をかけて私を助けてくれることなんてしてくれなさそうだ。

ミサトさんは一方的にお父さんを嫌っているが、私の場合は互いが互いを嫌っているのだ。そんなの、どう考えても……。

「生き残るっていうのは、いろんな意味を持つ。死んだ人の意志を受け止め……継ぐ。それがひとりだったら尚更だ」

私は口を閉ざしたままだ。

「……辛いのは、君だけじゃない」

お父さんも、お母さんを失っている。

もしかして……お父さんも、どこか物憂げな加持さんの言っている通り、辛いのだろうか。

私とは違って、毎年きちんとお墓参りをしている。私と目を合わせ

ようとならないのは、お母さんの面影を私に重ねてしまうからだろうか。

……わからない。

お父さんは私に何も言ってくれないから、何もわからない。

命を循環させる風が、そつと私達の身体に吹き付けてきた。しかしそれが運んでくる特有の匂いのことなんか頭になかった。長い後ろ髪がふわりと大きく舞い上がっても気にもとめない。

伏せ目になった私は、碇ゲンドウという人間の真意を理解するには、まだまだ距離が遠すぎるのだと再認識させられた。



海と同じように、宇宙はかつて神の世界だとされていたという。

決して人に手出しできない領域。遙かソラの彼方。暗黒に包まれた未知の空間。

——そして。

今度の使徒は宇宙より飛来する。

これなるは、罪を犯した人類につきつけられる第八の試練。

暗く、暗く。さらに暗く。

暗黒の調べ。

降り注ぐ死の隕石。

是、凶星なり。

暗黒臨界凶星　サハクイエル

発令所が剣呑な雰囲気に含まれる。

ミサトはいつもの赤いジャケットを着込み、腕を組んでオペレーターたちの報告を待つ。

その立ち姿は家でのだらけきった様子とは打って変わって、真剣な目つきはまるで別人のようだ。

慌ただしいスタツフたちの報告によって情報が錯綜する中、日向マコトがいち早く最新かつ確実な情報をミサトに報告した。

「三分前、マウナケア観測所より目標を補足。現在、軌道要素を入力中」

それに青葉シゲルが続く。

「目標を第三監視衛星が光学で捉えました。最大望遠で出します」

発令所の正面に設置されている超巨大モニターに青葉が衛星からの中継映像を繋いだ。

一瞬ピントを合わせるためにボヤけたが、すぐに改善される。

観測された物体——使徒は完全な球体で、その体躯は黒よりも黒い闇色だ。現時点では内部に何が孕んでいるのかは不明だが、表面に幾多もの白い斑点……おそらくは瞳を模した形のものが不規則に蠢いている。

ひどく生理的嫌悪感を刺激するデザイン。

だがシンプルな外見ゆえ、油断は一切できない。

それは正八面体の第六使徒で痛い目にあったことから学んでいる。ミサトたちが使徒の分析や推測が不十分の場合、その分のツケはカノンたちチルドレンに払ってもらわなければならない。

それだけは絶対に避けたい。

第六使徒による加粒子砲を胸に受け、口と鼻から血を流しながら生死を彷徨うカノンがプラグから救急搬送された記憶が鮮明に蘇り、ミサトは自身に喝を入れる。

「光を歪めるほどのA・Tフィールドとは……恐れ入るわね。落下予測地点は……」

そこまで言って、ミサトはわかりきっているかのような口調で片眉を吊り上げる。

「当然、ここよね」

軌道要素の入力が完了し、伊吹マヤがMAGIのサポートによる演算結果をサブモニターに出力する。現時点での使徒の座標、落下速度や地球の自転と公転を要素として追加入力。3Dで表現された日本地図に飛来する使徒の可能性をすべて吐き出し、そこから本部へ落下する可能性を抽出する。

その結果は――。

「MAGIの再計算。ネルフ本部への命中確率、 99.9999% です」

宇宙空間から綺麗な弧を描き、まるでバスケットゴールに吸い込まれるような軌道。

マヤの報告にミサトは眉を寄せる。

その間にも使徒へのN2航空爆雷による牽制攻撃が行われるが、使徒のA・Tフィールドは遥かに強大で、いつさいの傷を受け付けない。

もしこの中継を冬月が見ていたら間違いなく「税金の無駄遣いだな」とコメントするだろう。今の攻撃で大量に消費した爆雷の生産、またさらにそれらを宇宙へ打ち上げるためのコスト……決して馬鹿にできない。

マコトが報告する。

「まるで効いてません」

使徒は暗黒の尾を引きながら迎撃用衛星群をなんなく通過していく。

「軌道修正は不可能、か」

ミサトはリツコやオペレーターたちを作戦会議室へ招集し、集まってきた情報を統合する。

白く発光する卓上に整理された資料たちを電光石火の如き速度で目を通す。

その数秒後にMAGIによる報告が上がり、それをマヤが読み上げ

る。

「A・Tフィールドを一極集中して押し出しています。これに落下エネルギーも加算されます。第八使徒直撃時の爆砕推定規模は、直径四十二万GY——一万五千レベルです」

「使徒そのものが爆弾というわけね」

新たに現れたサブモニターに予想図が示され、地表を深く抉る様子がシミュレートされる。

「第三新東京市は蒸発。ジオフロントどころか、セントラルドグマまで丸裸にされます」

マコトの述べる率直な事実にはミサトは歯噛みする。

セントラルドグマには……第二使徒であるリリースが幽閉されている。第八使徒が直撃と同時に自身を木っ端微塵にしたとしても、次に来たる第九使徒に対して完全にノーガードになってしまう。

MAGI内部——メルキオール、カスパ、バルタザールによる見解が提示される。これらはシステムの中枢を担い、通常のAIとは異なって非常に人間らしい思考をする。

そしてその見解は——。

「全会一致で撤退、か」

しかしすぐさまそんなことできるはずがないでしょう、と内心で一蹴する。

それはネルフの作戦部長としてありえないし、ミサト自身の魂にかけて必ず倒す。

テーブルの上に乗せていた右の拳を強く握りしめる。

「……碇司令は？」

「使徒の影響で大気上層の電波が不安定です。現在、連絡不能」

パソコンを見ながらシゲルが即座に返す。

スケジュールによれば、ゲンドウと冬月は宇宙にいる。何の理由かまでは語られていないが、この緊急事態に司令と副司令がいないというのはとてつもなく大きいハンデだ。

つまり、現在ネルフで最も権力のある人物はミサトしかおらず、この場にいる全員が彼女に対して静かに眼差しを向ける。

「ここで独自に判断するしか無いわね」

意を決したミスアトは背中をまつすぐ伸ばして凜とした表情になると、力強い声で告げた。

「日本国政府及び各省に通達。ネルフ権限における特別非常事態宣言D—17を発令。半径百二十キロ圏内の全市民は速やかに退避を開始」

「問題ありません。既に政府関係者から我先に避難を始めていますよ」

「あら、手間が省けて助かったわ」

ミスアトはシゲルに軽口で返し、すぐさま表情を陰しいものへと変える。

「MAGIのバックアップは松代に委託しました」

マヤの報告が入る。

従来の使徒はほぼすべて地上戦だった。アスカの撃破した使徒だけは例外で、海上戦だった。あの時はアスカの適切な判断によって撃破されたが、今度ばかりはそのどちらでもない。

宇宙から。

咄嗟に思い浮かんだのは、ヤシマ作戦の際に使用したポジトロンライフルによる超長距離狙撃。

しかし相対距離はおよそ数千キロもあり、空間の歪みもひどく、まず命中しない。奇跡的に命中したとしても有効打は与えられない。

ならばエヴァを宇宙に打ち上げるか？

これも否。

エヴァ専用輸送機は存在するが、宇宙に打ち上げるとなると話は打って変わる。

まずそんなものはネルフに存在せず、かといってこれからそれを作ろうしてもその前にネルフは塵ひとつ残らず吹き飛ばされる。

それに、エヴァは宇宙で活動することを前提としていない。

一旦解散を言い渡したミスアトは、リツコと共に資料室を歩く。

低い唸り音とともに、ロボットが整然と並べられたラックに保管されている資料を整理している。

立ち止まったふたりは互いに視線を合わせない。リツコは歩きながらミサトから聞いた作戦に難色を示している。

「……本気なの？」

「ええ、本気よ」

「あなたのこの作戦はあまりにでたらめよ。MAGIの試算では99%強で失敗。たとえ成功してもエヴァ三機を喪失。技術部として、到底受け入れられない」

ミサトの提示した作戦よりヤシマ作戦のほうが成功確率は上。

算出した確率は、『やめておけ』を数値化したものだ。

腕組みをするミサトの背中は一切動じない。

「可能性はゼロではないわ」

ミサトは曲げない。

しかしながらリツコも譲らないと食い下がる。

「奇跡を待つより地道な努力よ。リリスと初号機の保護を最優先とすべきです」

「いいえ待たないわ。奇跡を起こすのよ……人の意志で」

それは、ただの驕りだ。

数字を見ればはつきりわかる。ミサトの作戦は必ず失敗する。

リツコにはミサトが冷静ではないように見えた。

だから睨みつけ、吼えた。

「葛城一佐!!」

ミサトが顔だけこちらに振り向く。

その双眸は鋭くも凜猛な意志を秘めている。

「現責任者は私です。私が判断するわ。それに、使徒殲滅が私の仕事です」

そこにある種の執念をリツコは見る。

「仕事？ 私怨でしょう？ あなたの使徒への復讐は」

◆

スマホの警報がけたましく鳴り響いたのは、昼休み直後の授業中だった。

この時間は大抵の生徒は睡魔という悪魔に優しく背中をさすられ、

それはまるで布団のよう。

柔らかい陽光に窓からほんのりと私たちのいる教室が暖められ、拍車がかかる。

すでに何人かは睡魔に魂を抜き取られてしまったようで、パソコンの影に隠れて眠っている。

私も例外ではなく、出火するのではと錯覚するほど睡魔に背中をさすられていた。

ダメだ……寝たら……ダメだ……。

とは思いつつも、斜め前で穏やかな吐息を立てて気持ち良さそうに眠る鈴原くんを見ていると忍耐が一気に削られてしまう。

何度も何度も船を漕ぎ、視界がゆっくりと狭まっていくのを残った意志力を束ねて抵抗する。

だから突然の警報音に、私の意識は完全に叩き起こされた。

「ふみやああ!」

と、なんとも情けない声を出しながら完全な不意打ちに飛び上がった私は、そのまま椅子から滑り落ちて激しく尻もちをついてしまった。

寝ていた生徒たちも今の警報音より私の叫び声で起こされ、一斉に全員の注目が集まる。

恥ずかしさで顔が真っ赤になってしまい、目元に少しだけ涙を溜め、顔を伏せながらきちんと椅子に座り直す。

両手を膝の上にのせ、ぴんと腕を伸ばして恥辱に耐える。

「あ、うう……」

次に何を言い出せばいいのかわからない。穴があつたら光の速さで飛び込みたい気分だった。

しかし。

私の肩をぽん、と誰かが叩いた。

びくん、と身体が跳ね上がる。

私は恐る恐る顔を上げると、いつも通り無表情の綾波さんが、鞆を手にしながら立っている。

「……非常招集よ。碓さん、急いで」

「え、あ、うん。ありが……とう」

基本的に何事にもリアクションしない綾波さんのおかげで、少しだけ恥ずかしさが和らいだような気がする。

式波さんを見れば喜々としながら荷物を鞆に突っ込んでいる。

「もやしー。なにボサつとしてんのー！」

警報が鳴ったということは何かが起こったということだ。それから間もないうちに各自治体に設置されている非常用放送スピーカーから超大音量で同じ警報が鳴り始めた。

……使徒だ。

直感的に悟った私は、こんなところでだらだらする場合ではないと瞬時に意識を切り替え、大急ぎで荷物をまとめる。

「校門に迎えが来てるわー！ ダツシユで行くわよー！」

「う、うんー！」

弾丸の如く飛び出した式波さんを追いかける形で私と綾波さんが教室を後にする。昇降口で靴を履き替え、校門にダツシユ。

以前だったらこれだけで息が絶え絶えになっていたが、ネルフで訓練を重ねた結果か、体力は間違いなくついていてると自覚する。

黒服たちの指示に従って素早く車に乗り込んでネルフ本部に到着するまで大まかな経緯を頭に叩き込む。ゲートを潜ると、これまでになく慌ただしく駆け回るスタッフたちが多く目につき、それだけで私たちの意識は研ぎ澄まされる。

つい数十分前の眠気は完全に吹き飛んでいる。

あまり時間がないからそのまま更衣室に連れられ、プラグスーツに着替える。

「できればウォーミングアップしてから臨みたかったわ」

小走りにミスアトさんの指定した場所へと向かいつつ式波さんが不満げに言った。

「私もちよつとそれは思う。でもほら、十分走ったからいいんじゃないかな？」

「そりゃあ変な声で椅子から転げ落ちた誰かさんにはいい運動になったでしょうね」

「そうね」

「うあああ言わないでええええっ!!」

記憶の彼方に捨てようとしていたのに、どうしてそういうことを言う!!

ニシシ、と笑う式波さんと、顔の表情筋をピクリとも動かしていないが明らかに私を心の中で笑っている綾波さんを懸命に追いかける。それでも式波さんには追いつかないだろうが、綾波さんなら……という甘い考えはみるみる距離を突き放されていくことに萎れていく。そのせいで集合場所に到着した私は大きく肩で息をしながら膝に手をついた。

ふたりは少ししか息が上がっていない。

「想像以上に速かったわね……」

ミサトさんが少し驚いた顔で私達を見る。

「式波さんと……っ、綾波、さんがっ、私を笑った、から、追いかけたんです……」

「なるほどね。でも追いつけなかったと」

「……はい」

「私は笑ってないわ。碓さんが追いかけてきたから逃げただけ」

淡々とした否定に、私は頬を膨らませながら噛み付く。

「笑ってた! 絶対笑ってたもん!」

「……………気のせいよ」

「んんー!!」

と、ここでミサトさんがぱんぱんと手を鳴らした。

それだけで、私を含めて四人は朗らかなムードから緊迫感の高まるムードへと一変する。

「はい、そこまでよ。本題に入るわ。聞いてるとは思うけど、現在使徒が宇宙から落下中。撃ち落としたり、空中戦などは無理なので——エヴァで受け止めます」

使徒がどのような外見で、どういう動きをしているのかはすでに私達も把握している。

果たしてどんな作戦が提示されるのかと思いきや、極めて普通に、

だからこそ危険なものだった。

「手で受け止めるう?!」

片手を高く掲げた式波さんが、手をにぎにぎと開閉させながら叫ぶ。

「ええ。エヴァのA・Tフィールド全開で直接受け止めるの。目標は位置情報を拡散しているから、正確な落下予測は期待できないわ。状況に応じて多角的に対処するため、本作戦はエヴァ三機による同時展開とします」

なるほど、だから集合場所が屋外になつていというわけか。

橋の下では、すでにエヴァを搬送するために寝かされた状態で地上に揃っている。それぞれがレール上の輸送台に乗せられ、迅速な移動を控えている。

「無駄よ！ 私一人で殲滅できるもん！」

式波さんが頼もしく言うが、ミサトさんは「無理よ」と即座に否定した。

同時に横に用意されていたモニターの電源を入れ、その根拠となるデータを私達に見せる。

その内容は、三パターンでシミュレートされた使徒の落下予測だ。各地に配置されたエヴァ三機がそれぞれ落下に間に合うパターン。モニターを指先でコンコンと叩きながら説明する。

「これを見てわかるとおり、エヴァ単騎では広大な落下予測範囲全体をカバーできないわ」

「…………この配置の根拠は？」

「女の勘よ」

綾波さんの質問にさらりと答える。

「なんたるアバウト！」

私も質問を重ねる。

「あの……勝算は」

「神のみぞ知るってところね」

つまり、言えないほど低い。

逆に言えば、これ以上勝算の高い作戦はない。

超極低確率を現実のものとして引き寄せる——まさに『神のみぞ知る』。

式波さんが高く鼻を鳴らす。

「だから他のエヴァは邪魔なの！ 人類を守るくらい、私ひとりで十分よー」

「この作戦に必要なのは、シングルコンバットの成績じゃないの」

「私の才能を認めないわけ？」

「違うわ。あなたたち三人の力が必要なのよ——奇跡を起こすために」

式波さんはそれでもあまり納得できないようだった。



輸送台に乗せられた私の初号機が指定の位置に到着すると、すでに電源供給用の車両が何台も控えていた。

作戦時間までは残り八分ほど。

シンクロを完了させた私は初号機の上体を起こし、電源ソケットを背面に接続した。

そのまま立ち上がり、ゆつくりとした歩行で移動する。その間にも軽く両腕などを動かしてシンクロの状態を確認する。

エヴァへの神経の繋がりは問題なく、ラグも極小。作戦に支障のないレベルだ。

「ふ、う——」

私は静かに目を閉じ、細く息を吐き出す。

この作戦は前代未聞であることは明らか。

あの膨大な質量を、誰かが受け止めなければならぬ。

それは私かもしれないし、ふたりのどちらかもしれない。

最悪、誰の手にも触れない可能性も——。

「違う、そうじゃない」

必ず受け止めるのだ。

昂ぶる緊張と興奮。

ぎゅっと握った手の汗がL・C・Lにじんわりと溶ける。

ゆつくり、ゆつくりと肺の中の空気を吐き出し、心を落ち着かせる。

すると、ひっきりなしに入るオペレーターたちの報告の音が、波が引くように遠のいていく。

私は、沈黙の湖に落ちる一滴の雫。

湖に触れた瞬間、微かな波紋が同心円状にどこまでも広がっていく。

これほど集中するのは、きっと私の人生で初めてだ。

だからこそ、私はその湖の底に何かを感じ取った。

視覚ではない。

聴覚でもない。

触覚でもない。

そう、嗅覚だ。

匂いは底でずっと黙したままたゆたう。私はそれを上からぼんやりと感じることしかできない。

しかしどこか懐かしい。

ふんわりと香る、甘い乳液のような。

私の心を鎮める、僅かな温かみを含む匂い。

お母さんの匂い……？

いいや、それは違うような気がする。

そもそも私はお母さんのことを知らないから、違う。

では何だ？

私はこれをなぜか知っている。特に最近よく感じるこれは――。

おそらく――。

「綾波さんの、匂い……？」

直後、使徒の接近を識らせるアラートがけたましく鳴り響いた。

高度が二万に達した瞬間にスタートするとミサトさんは言っていた。

それ以上の高度で開始すると、MAGIの計算の誤差が許容範囲を超えるからだ。

『おいでなすったわね？ エヴァ全機、スタート位置』

脛を持ち上げた私は、ゆっくりと前傾姿勢を取り、膝を曲げ、両手の指先を地面につける。

これを陸上競技ではクラウチングスタートと言うらしいが、私はそういつたものはよく知らないため、事前にミサトさんに叩き込まれた姿勢をとる。

心は落ち着いた。

いつでもいける。

私はミサトさんの指示を待つ。

心臓が激しく脈を打つのがよく聞こえる。

どくんと熱く煮えたぎる血が全身を駆け巡る。

『二次的データが当てにならない以上、以降は現場各自の判断を優先します。エヴァとあなたたちに、すべてをかけるわ』

返事はしない。

私は深い深い呼吸をした。

『目標接近！ 距離、およそ二万！』

青葉さんの報告が入る。

作戦が始まる。

『……では、作戦開始』

ミサトさんの低い号令とともに、電源ソケットをパージする。

瞬間、エントリープラグ内にディスプレイが表示され、活動限界までのカウントダウンを開始した。

全身の筋肉に力を込め、一秒後の爆発に備える。

『――発進』

極限まで押し留めていた爆発を解放する。

力強く地面を蹴り上げ、周囲の車両を巻き込みながら私は勢いよく駆け出した。

私の左側に表示されているディスプレイはMAGIとリンクし、使徒の落下予測地点がリアルタイムで更新されるため、そこに向かえばいい。

街中を走る私にはエヴァが走ることによってビルが倒壊したりすることに対する心配をする余裕は一分たりともない。

全員の避難はすでに完了しているときちんと確認しているため、心置きなく走ることができる。

足元は一切見ない。

私が見るのはソラと、左手のディスプレイと、正面のみだ。
アスファルトを砕き。

山を飛び越える。

空気を裂きながら紫の稲妻となつて疾走する私と使徒の距離は
しつかりと詰められている。

単純な相対距離では式波さんが一番近い。

MAGIも現時点では式波さんしか到達できないと示している。

私は心の中で安堵する。

まずは落下地点に到着するという第一段階はクリアとみていいだ
ろう。式波さんが受け止めて時間を稼いでいる間に私と綾波さんが
到着。どちらかがA・Tフィールドを中和して、もう片方がコアを破
壊するのだ。

——いける。

そう確信した瞬間、使徒に変化が現れた。

身体を覆っていた黒い殻が突如として割れて消え去る。露出した
中身はさらに何重にも張られたA・Tフィールドによつて保護され
ている。

暗黒から現るは、七色の凶星。

鮮やかな色彩となつた使徒は、ゆつくりと色を循環させながらその
速度と向きを、A・Tフィールドの傾きを変えることで風の影響を受
けて変化させた。

MAGIによれば、

速度は1.12倍。

向きは2.888度。

数値的にはほんの僅かだが、これまでの私の安堵を嘲笑うには十分
すぎた。

瞬時に更新された予測地点は、受け止め役となるはずだった式波さ
んの許容範囲外まで大きく遠のいてしまう。

受け止められることを回避するために、自力で修正したか!!

使徒は私と綾波さんでもカバーできない場所へと落下しようとし

ている。

まずい！ と出るはずの私の叫びは、それ以上の式波さんの叫び声によってかき消された。

『何よー・ 計算より速いじゃない……!? ダメ！ 私じゃ間に合わないッ!!』

このままだと使徒は何の障害もなく地表に衝突してしまう。

ミサトさんが神のみぞ知ると言ったのは、本当に言葉通りの意味だった……！

式波さんがいけるからと心のどこかで安心していた私が馬鹿だった。

使徒との単純な相対距離は、私が一番近くになった。

しかし近いだけで、間に合うわけではない。

今でも最速で走っているのに、だ。

無理なのか……？ ミサトさんは言わなかったが、成功確率はおそらく10%未満……いや、きつと1%にも満たないだろう。

やはり、無理なものは無理なのか……？

急速に弱気になってゆく。

そんな下向きな思考が、一瞬、あらゆる動きを止めた。

どこまでも時間が引き伸ばされていく感覚。

水面の激しく乱れる湖の底から何かが浮かび上がってくる。それに明確な形といったものはなく、その不定形はそっと私の背中に触れた。

途端。

烈火の如く、熱が私の全身——足の爪先から頭頂部まで一気に燃え広がった。

そして——。

私は割れそうになるほど強く奥歯を噛みしめた。

違う！

いいや、違う！

全然！

全くもって！

何もかもが違う!!

ここで諦めるのは、式波さんと綾波さんへの裏切りであり、ミサトさんたちへの裏切りである!

私には使徒を屠る力がある。あるというのに、それを行使しないのは、あまりに無責任!

もし本当に負けるとしても、それは私のすべてを出し尽くして、それでもなお敵わなかった時。もしくは私が死んだ時のどちらかでないければならない。

私になぜエヴァに乗ると自分の意志で決めたのかを思い出せ!

今ここで諦めるのは、自分自身への裏切りでもあるのだ。

間に合わせる。

何が何でも、絶対に間に合わせる——!

「私が行きますッ!!」

叫ぶ。

目を剥き、私はエヴァのさらに深くへと身も心も沈めてゆく。

極限まで研ぎ澄まされた精神がエヴァに呼応し、これまでにないほどのシンクロ率を叩き出す。

初号機は……私だ。

一步を踏みしめるごとに感じる振動がより鮮明になり、風を切る感覚が肌を刺激し、偽りの身体を動かしているはずなのに、疲労がどつと私に襲いかかる。

まず目の前に飛び込んできたのは再びビル群が並ぶ街。さつきとは違って私が走り抜けるには十分な空間が確保できない。

多少ぶつかってでも使徒への最短ルートを進む。

そう考えた途端、すぐ右手にエヴァよりも巨大な壁が何枚も地表からせり上がって、街を囲むように斜めに立った。

私の記憶が正しければ、これは使徒を撃破した際に発生する大量の赤い液体による洪水を防ぐためのものだったような気がする。

これならば、街中に飛び込まなくても迂回をする際の遠心力や垂直抗力などを上手く逃がすことができるし、スピードが乗って曲がりにくいという難点を克服できる。

ありがとうミサトさん！

と心の中で強く念じながらそれらを經由して迂回を始める。金属を踏みしめる硬質な足音が響く。しかし次に私の目の前に迫るのは巨大な駅のホームだった。

吊架線やらトロリー線やらが張り巡らされた駅は最大の難所だ。しかし悠長にしていられる時間もないから躊躇いなく飛び込む。止まっている電車を蹴り飛ばし、線を大量に巻き込んで架線柱を根こそぎなぎ倒しながら駆け抜けていると、次のサポートが現れる。

地面から現れたのは直方体の台のようなもので、一定の間隔で真っ直ぐに並んでいる。

これの本当の使用用途はぱっと思いつけなかったが、そんなことはどうでも良かった。少し減速を食らっていた私はその場からジャンプして台に飛び移り、三段ジャンプの要領で一気に駅を飛び越した。着地した私は反射的に位置を確認する。

M A G I の予測は『不可能』と冷徹に赤く表示したままだ。

その文字から『不』を消し飛ばす!!

ミサトさんの言った奇跡を、私の手で起こすのだ!!

お願い……!!

どうか!!

どうか、届いて——!!

私はエヴァですらなくなって、ただ走るだけの機構となる。

加速に加速を重ねた私は一条の閃光となる。

音速を超えて。

その先へ。

あらゆる景色は一瞬にして消え去り、白く溶ける。

激しい衝撃波は周囲に存在する悉くを吹き飛ばす。

その果てに、ついに、M A G I の予測が『可能』に青く転じた。

使徒が私が間に合うことを悟ったのか、最終形態への変化を開始する。

まず、A・Tフィールドを捨てる。

そして血色の雲をたくし上げながら、球体から両端に五枚の翼が対

となるように大きく開いた。左右の翼の中央には瞳らしきものが
燦々と七色の光を放っている。

不気味さが五倍ほどに膨れ上がった使徒を見上げつつ、私は踵を地
面に突き立てて急激に減速し、なんとか落下三秒前にポイントに到達
できた。

改めて見ると、この使徒の大きさはあまりに圧倒的だ。比べるなら
ば、アリとゾウといったところか。いや、おそらくもっとだ。

第一段階はこれでクリアした。今度はふたりが到着するまでこの
凶星を受け止め続けなければならない。

できるか……？

いや。

やるのだ。

股を開き、力強く大地を踏みしめる。

「――A. Tフィールド、全開!!」

短い高周波が甲高く響いた後、圧縮されたA. Tフィールドが爆発
する。周囲の家々を粉々に吹き飛ばし、一瞬にして丘となった。

凶星を受け止める準備が整う。

両腕に渾身の力を込めて掲げた私は、胸いっぱい空気肺に溜め
込む。

そして落下してきた凶星に触れた。互いのA. Tフィールドが激
しく接触する。

瞬間。

全身の骨が砕けそうになるほどの強烈な重圧が私の全身を激しく
叩きつけた。さらに接触により生じた圧倒的な暴風が、地表を荒々し
く穿つ。

景色は世界の終わりのように赤黒い帳が下りる。

「は、う、グっ……!」

肺に溜め込んでいた酸素が強制的に排出させられる。

腕が千切れんばかりに悲鳴を上げる。

急いでありつたけの酸素を貪ろうとした私の前に瞳の部分から現
れたのは、使徒の本体らしき人型だ。実体は上半身しかなく、下半身

は瞳に埋もれている。

特徴的な白い仮面に、ふたつの眼を赤くギラギラと明滅させながら私に迫り、完全に無防備な私の両手を指を絡ませて掴んだ。

押し潰す気か？

そう考えるが、すぐさま私の掌が妙な突起物に徐々に圧迫されていることに気づく。

……なに、これ。

その瞬間、肘先まで細く螺旋状に腕を尖らせて槍へと変形し、容易く私の掌を夥しい量の血を撒き散らしながら貫いた。

「ああア、ああ、ああああ、ッ、ッ!!」

意識が消え失せるほどの激痛に上半身を限界までのけぞらせ、私は喉が張り裂けんばかりに絶叫した。

同時に重圧に耐えられなかった腕の筋が立て続けに断裂して出血が加速する。

私にのしかかる重圧は腰をも砕きかけ、内臓が押し潰されるのではと錯覚する。

チカチカと視界が白黒し、腕の力が一瞬だけ弱まる。

足首まで地面に沈み込む。

しかし離さない。敵の手を離してやらない。

螺旋部分に指を絡ませて、決死の意志力を束ねてなんとか持ちこたえる。

私の何百倍もの巨大な使徒との接触は激しい暴風を絶え間なく生じさせ、地を抉り、私の生命力も容赦なく削る。

顔を上げると、ほんの数メートルも離れていない位置で使徒の仮面がこちらを見下ろしていた。その目は『はやく潰れる』と私に告げている。

私も何かを言い返してやりたい衝動に駆られたが、とてもそんな余裕はなく、負けじと睨み返すことしかできない。

しかしながら今の私はこの場から一步も動くことができない。使徒のさらなる追撃もありえなくもなく、私は掠れ声でふたりの名を口にする。

『もやし——ッ!!』

『式号機、コアを』

『わかってるわよ！ 私に命令しないで!』

ついにふたりが到着する。

すでにナイフを両手に構えていた式波さんが裂帛とした咆哮とともに高く跳躍して使徒の背後に肉迫。A・Tフィールドに阻まれるがなんなく切り裂き、使徒の腰の周囲……瞳孔の輪郭上にあるコアへナイフを突き立てようとするが、寸前のところでコアが移動した。

式波さんの狙い澄まされた一閃は瞳に逸れ、ヂヂッ！ と赤い火花を放射状に散らすのみ。

『外した?』

だがコアの移動は使徒を中心として円状にしか回転しないため、見失うことはない。

しかしながらその速度は式波さんでも目で追えないほどだった。

『ちよこまかと往生際悪いわね!!』

活動限界まで残り三十秒を切ったのを確認したのか、式波さんの顔に焦りの色が見え隠れする。

だが、それよりも先に私のほうが限界が速いかもかもしれない。

すでに腕の感覚は麻痺し、骨盤は嫌な軋み音をたてている。足は恐らく骨がズレてしまっている。

シンクロ率は第一段階の時より多少下がっているからフィールドバックはマシなもの、それでも私が受容できる痛みを遥かに凌駕している。

ほんの僅かでも力を抜けば、その瞬間に私の両腕は千切れ、使徒の落下を許してしまう。

大きく口を開けて酸素を取り込むにも喉にナイフを突き立てるほどの精神力が必要で、できたとしてもひとつまみ分ほどの酸素しか取り込めない。

それだけで足りるはずもなく、猛烈に身体が熱くなり始める。視界の端がゆっくりと赤く、濁り始める。

私が弱ってきているのを見抜いたのか、使徒の目がすう、と細くな

る。続いて翼の裏側にびつしりと並ぶ、不気味な触角のような突起物を赤く輝かせる。そして翼を大きく羽ばたかせることで発生した波を中心——槍に伝搬させ、それを衝撃として私に流し込んだ。

「カ、ツ、ハ——」

踏み潰される。

どうしようもないほどの超重量に、踏み潰される。

今度こそ私の身体が限界を迎える。

まず、手が数センチ滑り、螺旋に絡ませていた指の何本かが呆気なく切断される。

そして次に、腕の筋肉、筋、組織のすべてが原型を留めないほどぐちゃぐちゃに潰れる。

脳が沸騰するほどの熱さと痛みに、私は再度絶叫した。

それでもなお姿勢を維持できているのは、本当に奇跡としか言いようがない。

私を中心に、蜘蛛の巣状に大地がとてつもない轟音と共にひび割れる。

とうに危険域に突入していたダメージアラートが、ついに限界を突破する。アラート音はどこまでも高くなり、やがてそれは金属質の高周波でしかなくなる。

私は濁りきった灰色の声で式波さんの名を懇願するように叫んだ。

「アス、カ……はやく……!!」

『わかってるってば……!』

ぎゅつと目を閉じて必死に痛みを堪える。

すると、私の心音がゆっくりと弱くなってきたことに気づく。

零号機の黄色がA・Tフィールドを中和しながら使徒の上によじ登り、高速で回転するコアを直接手で掴んだ。その瞬間コアの侵食が何か恐ろしい速度で腕を赤く変色させていく。

『くっ……!』

『えいひんぎょ!』

これ以上の好機はない。

的は動かない。使徒は私に釘付け。

今動けるのは式波さんだけだ。

『はやく……』

「アすかッ！」

綾波さんと私の必死の願いは、式波さんにしつかりと届いた。

『わかっているっちゆうのおおおおお!!』

私たちに急かされて怒ったのか、式波さんが怒りのままに無防備な使徒のコアにナイフを突き立てた。

大きな亀裂が走り、コアが目に見えて膨張するがまだ浅いようで、破壊には至らない。

すると追撃とばかりに腕に力を入れて身体に反動をつけることで、刺さったナイフを上から膝蹴りをしてさらに深く食い込ませた。

その瞬間。

ぴしっ。

と亀裂が広がり、硬質な破砕音を響かせてコアが砕けた。

それと同時に私を襲っていた重みが嘘のように消え失せる。使徒の身体がだらりと力なく瞳から垂れ下がり、するりと私の掌を貫いていた槍が抜け落ちる。

七色の輝きを失った巨軀がその身を黒く変色させる。そして端から触角を折り曲げて中心に到達した瞬間、超膨大な量の赤い液体を垂れ流しながら死骸を爆散させた。液体は津波となって街に押し寄せ、ビル群をドミノ倒しにする。

爆心地には遙か空へ伸びる光の十字架が屹立し、まるで使徒の撃破を祝福するかのように、いくつもの円形の虹がその周りで眩い光を放つのだった。

◆ 激しくむせ返りながら、私は死に物狂いでL・C・Lに溶けている酸素を貪った。

両腕はピリピリと小刻みに痙攣している。思ったよりフィードバックが重い。

あれほどの傷を負ったのだから両腕麻痺という最悪の可能性も脳裏に浮かんだが、一応なんとか動かせるには動かせる。しかし引き

つつた痛み在眉をひそめ、とりあえず今はどうしようもないと腕の力を抜く。

腰も相当きていて、身をよじろうとするだけでもピリリ、と微かな痛みが走る。

脚は強い倦怠感があるがそれ以上は特に問題なく、せいぜい筋肉痛が約束されたくらいだ。

「ふ、く、ああ……」

深く、深く深呼吸を繰り返す。

今回の戦闘は本当に辛かった。第六使徒に接近戦を挑んだ時よりも長い戦闘時間。それもずっと全身全霊で使徒を受け止めるのは相なことだ。

エヴァの内部電源は切れ、私は倒壊したビルに背中を預けて項垂れている。

動くことはできないから、ここで静かに回収班を待つしかない。

不意に、ふたりに回線を開いてお疲れ様くらいは言っておこうと思った。あのふたりが迅速にコアを破壊してくれたから私の命が助かったと言っている。あの状態をあと数秒維持していたら、私の内臓……特に心臓が圧迫に耐えられずによくして停止、悪ければ破裂していたかもしれない。

心音は正常なものに戻っている。少しだけ感覚を取り戻した指先を動かしてふたりに回線を繋ごうとした、その瞬間。

誰かから一方的に回線が繋がられた。

カメラはオフにされていて、『SOUND ONLY』とディスプレイに表示されている。

きつとミサトさんだろうと思って気楽に構えていたら、思いもよらない人物の声が聞こえた。

『話は聞いた。よくやったな、カノン』

感情をまるで感じさせない淡々とした低い言葉。

その声の主は間違いなくお父さんのものだった。

私は目を丸くする。

「え、あ、うん……あ、ありがとう……」

叫びすぎたせいか、あるいはあまりに唐突すぎたせいか、私の喉からはひび割れた声を漏らして曖昧な返事をするこゝろしかできなかつた。

お父さんは私のことが嫌いで、お母さんのお墓の前でも私とわかり合おうと努力するなど冷たく突き放したはずだ。

それが、なぜ――。

これはただ司令官が部下を褒めたものなのか、それともお父さんが娘を褒めたものなのか私には理解しかねた。

でも、こんなことは間違いなく今まで一度もなかった。

『では葛城一佐、あとの処理は任せる』

それきり回線は切れてしまう。

お父さんがどういう意図で私を褒めたのかはわからない。

もしかしたら墓場での会話で多少なりとも心の変化があつたのかもしれない。可能性は極極低いが。

もしくは、本当にただの気まぐれだったのかもしれない。

正直なところ、私は後者でも全然良かった。

ただ、『お父さんが私を褒めてくれた』という事実が、この上なく嬉しくて。

数分前まで感じていたあれほどの痛みなんてどこかに吹き飛び、私は満面の笑みを浮かべるのだった。

よくやった！

私が回収班の人たちによって回収された後、真っ先に送られたのは診療所だった。

プラグ内のL・C・Lを排出した後、とりあえずスーツを脱がなければ、と思いながら立ち上がろうとして腕に力を入れた瞬間、擬似的な痛みが一気に呼び起こされる。

私は苦痛に顔を歪ませ、そのままバランスを崩してコックピットに座り込んでしまった。そのせいで尻もちをついてしまい、さらに脚に微電流が走る。

すぐさまスタッフたちが腕を刺激しないように私の身体を抱きかかえ、ストレッチャーに乗せて連れて行く。

速やかに精密検査が行われた結果、腕は数日すれば完治すると診断された。もちろんその間、激しい運動、あるいは腕に負荷をかけるような作業はなるべく控えることが前提であるが。

ギプスするのかな？ と内心身構えていたけど、どうやらその心配は必要ないようだ。

とはいえ手から肘まで結構きつくテーピングが巻かれてしまい、しばらくの間は不自由になってしまいうだろう。

だがそんなことはあまり気にしていなかった。お父さんに褒められたことがあまりに嬉しくて有頂天になった私は終始にやけ顔を止めることができなかった。

「……だ、大丈夫かい？」

担当医のおじさんにとっても心配されるほど、戦闘後の興奮というのも相まって、私のにやけ顔は相当なものだった。

さすがに一時間が経過した頃には顔は普段通りに戻り、また自力で歩けるまでになったので、制服に着替えた私は、ミサトさんに挨拶するためにそのまま発令所へ向かう。

痛む手でスマホの時計を確認すれば、すでに七時を回っていた。通知欄にはヒカリたちからメッセージが何通も届いている。

昼過ぎの дайたい 一時前くらいに招集がかかったはずだから、たっ

た六時間の間にあれほど濃密な作戦が行われたのかと他人事のように振り返る。

発令所に着いた私にいちはやく気づいたのは、コーヒーを啜りながらオペレーターたちと事後処理をしているリツコさんだった。

どうやら式波さんと綾波さんはもう帰ったようだ。さすがに時間も遅いし、仕方ない。

「すみません、すごく遅くなっちゃいました」

「来たわね、今日のMVPさん」

マヤさんに一言断って席を離れたリツコさんは、かつこよく着込んでいる白衣のポケットに手をつ突っ込んだままつかつかとヒールの音を鳴らしながら私に近づいた。

そのままそつと私の肩に触れる。

「肩は大丈夫なの？」

「肩……はい、ちよつと痛むくらいで動かすのには特に問題ないです」

「そう。腕の方が痛むのね？」

「そうですね……ジジジッ！ つて感じですよ」

頑張つてこの痛み方を伝えようとしたが、感覚派ではないリツコさんには少し難しかったようだ。

「そういうのはミスアトがよくわかってくれると思うわ。とにかく、入院の必要性はないのね？」

「んー、大事をとって入院してもいいって言われましたけど、私から断りました」

「あら、それはどうして？」

私は苦々しい記憶を思い出しながら答えた。

「入院したら学校に行けなくなるからです。行けなくなったら当然授業が遅れてしまって、またひーひー言いながらヒカリにおんぶにだっこを……ああああ……」

勉強漬けで逆に頭がどうにかなくなってしまいそうになったのは拭いきれない今は昔。

とはいっても、警報音に驚いて変な声を出し、かつ椅子から転げ落ちるという恥ずかしいのコンボを決めたからクラスメイトに顔を合

わせたくないという気持ちも否定はできない。

「なるほどね。でもあなたの学力ならそこまで問題はないでしょう？テストだって別に悪くないじゃない。全科目の平均、八十点ほどだったし」

「それはそうですけど……って、なんで私のテストの点数を知ってるんですか?!」

ミサトさんならいざ知らず、リツコさんにバレているのは全く理解できない。

テストは毎回ちゃんとファイルに挟んでいるし、点数をちゃんと細かく報告しているのはミサトさんにだけだ。

ヒカリたちにはふわつとしか伝えていない。

私はどちらかという自分のテストの点数をおおっぴらに公開する人間ではない。

もしかしてミサトさんが教えた？

椅子にぐったり座っているミサトさんを一瞥する。

私の考えを見透かしたようにリツコさんが言った。

「ミサトは関係ないわ。チルドレンたちのすべてをネルフが監視しているから、これくらいはね」

ということはつまりこの程度はほんの氷山の一角に過ぎず、他にも私の情報はネルフに把握されているということか。

ならばきつと、ネルフから支給されたスマホなんてその代表だ。特に変なことはしていない……いや、ネットサーフィンをしているときにいやらしい位置に配置されたHな広告をタップして飛んでしまったくらいだ。これは一週間ほど前の出来事だった。

あの時の焦りは半端なかった。

これからは細心の注意を払おうと強く誓ってから私はミサトさんに声をかけた。

「じゃあミサトさん、私帰りますね。夜ご飯はどうしますか?」

「なーに言ってるの。そんな腕でできるわけないでしょ。アスカに頼んどいたから、カノンちゃんはゆっくりしなさい。送迎の車も手配するわ」

車を用意してくれるのはとてもありがたい。

さすがにテーピングでぐるぐる状態のまま帰るとなると、周りの人に痛い子認定されてもおかしくないからだ。

それはできれば避けたい。

とは思いつつも、聞き捨てならぬセリフが混じっていた。

「式波さんが夜ご飯作るんですか……?」

そう、家事は基本的に私に丸投げ、時々外に干している洗濯物を入れてくれるくらいしかしてくれない式波さんが料理を。

にわかには信じがたいことだが、たいへんありがたい。しかしながら疑問はある。

「その……式波さんは料理できるんですか?」

「さあ? でもレトルトカレーあったでしょ? あれするって言うってたからまあ大丈夫でしょ」

確かにあれは温めたご飯にルーをかけて、もう一回電子レンジでチンしたら終わりだ。

小学生低学年でもできる。

いやさすがに式波さんを下に見すぎていた。少し反省。

「そうですね。あ、ミサトさんのぶんは……」

「ワタシ、徹夜」

「あ、はい」

私の仕事は使徒を倒すことだが、ミサトさんの仕事はなにも作戦立案だけではない。作戦後の責任者としての事後処理が溜まっている。

使徒迎撃戦ではある程度の範囲——ネルフの防衛施設などがある土地で作戦が行われるが、今回はそれを度外視した超広範囲での作戦。私達がエヴァで踏みつけた跡が悲惨になっているのは言うまでもない。

「が、頑張ってくださいね……」

一緒にリツコさんたちにも挨拶をしようとすると、ミサトさんから待ったがかかった。

「なんですか?」

「これだけは伝えておかないとね」

そう言うとミサトさんはつかつかと私に歩み寄って後ろに回ったかと思うと、バシン!と力のこもった一発を背中に頂戴した。

予想外の強烈な一発に、私は思わずよろめいてしまった。

怪我人を叩くとは何事!?

と抗議するべく顔を上げようとした私を抑え込むように、さらにミサトさんは私の頭をやや乱暴にガシガシと撫でてきた。

「ミ、ミサトさん……!」

十秒ほどたっぷりしごかれた私は、くしゃくしゃになった髪を手櫛で整えながらようやく抗議の意を示した。

だがそれに謝罪するわけでもなく、またもう一度私の頭に手を乗せたミサトさんは、

「よくやった!」

と私を労った。

「あ——」

三秒もないミサトさんの言葉はしかし、私の胸を熱でいっぱいにするには十分すぎた。

「ミサト、さん……」

「カノンちゃんがあそこで踏ん張ってくれたから、アスカとレイは使徒を倒すことができた。もちろんふたりともすごく頑張ったけど、一番頑張ったのは、あなたよ」

……周りを見れば、リッコさん、オペレーターたち、その他のスタッフも私を見ている。

誰も私を憐れむような目で見ていない。

感謝。あるいは応援、はたまた尊敬。

こんな経験は初めてのことだ。

私はつい、鼻の先が熱くなるのを感じた。

視界が七色に煌めく。頬を伝う熱い何か、過去の私という偶像の汚れを洗い、それだけでなく清めてもくれた気がした。

……嬉しい。

そう、嬉しいのだ。

皆に褒めてもらえて、私はこの上ない幸せを感じている。

ここに来なければ経験しなかつただらう幸せ。

この感情を深く胸と記憶に刻み、雫に濡れた目元を指で拭った私は満面の笑みを皆に返した。

「ありがとうございます……ごいまます……！」

ペこりと丁寧に頭を下げ、私は発令所を後にする。

ここで溜まっていたメッセージを確認しようと再びスマホの通知欄だけざっと眺める。

緊急に返さなければならぬものがあるかもしれない。

そして式波さんからのメッセージが目にとまった。

つい数分前に送られたものだ。

『これでいいわよね！』

と画像付きのメッセージ。

炊飯器に研いだであろう白米が張られている。どうやら四合ほどなのはわかるが、水が少ない。これではバリカタな仕上がりになってしまう。

もう少し水を足して、と返信しようとしたが、それまでに追加のメッセージで、

『返事遅いから炊き始めた！』

と送られてくる。

今返事しようとしたのに!!

正面ゲートを抜けるとすでに待機していた黒服の人に誘導されて車に乗り込んだ私は運転手に――。

「ぶっ飛ばして」

と手短に伝える。

助手席に座っていたもうひとりの黒服に私の代わりにメッセージを打ってもらっても、その後式波さんがそれに反応することはなかった。違反速度ギリギリで飛ばして家に着いたがすでに遅く、もうやり直せないところまで進んでいた。

式波さんは少しだけ申し訳なさそうにしつつも素直になれずに食い下がるが、いざ炊きあがった米を試食すると、くるりと手のひらを返して「……ごめん」と言った。

どうやら私は式波さんの家事スキルを見直さなければならないようだ。

結局は胡麻のように硬いこれにルーをかけて食べた。戦闘後だというのになんとも気が落ち込む食事だった。

余った米はタツパに入れて冷凍庫へ。

もちろんこれは捨てるわけにはいかないのです、明日のお弁当に使われてもらう。連帯責任ということにしておく。

食器洗いは無理だから式波さんに指示してやってもらい、L. C. Lを流すときに軽くシャワーは浴びたから、早々パジャマに着替えて寝ることにする。

私の部屋は、式波さんが来たことによつて悪い意味で劇的ビフォーアフターとなっている。

結局式波さんの部屋に収まりきらなかった荷物が私の部屋に流入している。しかしミスアトさんの部屋には一切置かれていない。その理由はミスアトさんの寝相の悪さ以外にないと思われる。

ともあれ私の部屋が物置部屋化しているのは間違いなく、敷地の半分ほどをダンボールに占領されたままだ。

ヒカリから送られた明日の時間割についての情報をもとに教科書などをかばんに突っ込み、倒れ込むようにして布団に身を預ける。

ゴソゴソと机の上を弄つて目当てのものを下ろす。

それは、ちょうどスマホくらいの手に収まるサイズで、しかしながらやや厚い。端に挿入する穴があり、既にそれに合致するものはこの手にある。

電気を消しているせいで暗いが、それでも感覚的にこの辺、というのが私にはわかる。

きちんと穴に刺さったのを手触りで確認すると、スイッチを押し、その機械——S—DATに入れられているカセットの音楽をイヤホンをしなから聞く。

なぜ今どきわざわざ音楽プレイヤーで音楽を聞こうとするのか不思議に思われるかもしれない。

スマホに音楽を入れればそれで終わりなのに、と。

しかし私はそうしない。非合理的なのは私でもわかっているし、わかっていながらなお私はこのS—D—A—Tで音楽を聴くのだ。

これは、私にとってとても大事な宝物。お父さんが私にくれた、愛の代替品。

これをお父さんとの残されたただひとつの？がりだとも思っている。

初めから入っていたカセットは一度も入れ替えていない。

二十五曲目と二十六曲目を何度も何度もリピートする。いつしかその曲がただのBGMなどではなくなって、私の頭でコピーされ、イヤホンをしていない時でも任意に脳内で再現できるほど聴いている。

もちろん収録されているのはこの二曲だけではない。お父さんが最後に聴いていたのがこれで、もう一曲はその次の曲だから聴くというなんとも適当な理由。

繰り返すことに深い意味はない。なぜ二十七曲目に移らないのかと問われても、私にもわからない。

らしい答えを無理やり出すとすれば、それは恐らくこの二曲で満足しているからだと思う。

そう考えているうちにも眠気がだんだんと深くなっていく。イヤホンをしながら寝落ちしてしまえば翌朝に耳が痛くなることは間違いない。

徐々に薄れゆく意識の中、なんとかイヤホンを外した私は、疲労のせいか、あっさりとした深い眠りの渦に吞まれてしまった。

◆
なんとか食器洗いを済ませたアスカは、以前カノンが買い足していたアイスを手にもリビングに向かった。

テレビをつけ、ソファアームにくつろぐ。

あぐらをかき、舌先で器用に溶けないよう均一にアイスを舐める。

時刻は九時を回り、ニュース番組などが多く目立ち始める。その内容はもちろん今回の使徒戦についてだ。しかし基本的に使徒やエヴァについて一般人には伏せられているため、ネルフによる情報規制がされてニュースになっている。

男性ニュースキャスターが流暢に歪曲された内容を読み上げるのを聞いて、アスカは心底不快になった。

「……チツ」

テレビを切る。

不快だ。

ガリツ、と荒々しくアイスを齧り、さっさと寝ることにした。学校の宿題は、途中で抜け出したから知らない。都合がいい。

ミサトは今も事後処理に追われているのだろうか、と心の中で思いながら歯磨きをしてベッドに潜り込む。

お気に入りのぬいぐるみを片手にして。

その手を上げながら猫なで声で呟く。

「あいつらとは違う。私は特別。だから、これからも……」

しかしすぐさま表情を改める。

「……ひとりでやるしかないのよ、アスカ」

でも、できなかった。

認めざるを得ない。

アスカひとりでは使徒は倒せなかった。受け止めながらナイフで

コアを砕く？

どう頑張っても無理だった。

しかも一番おいしいところだけかつさらうという、ハイエナのような戦績だった。

……悔しい。

天才は事実を捻じ曲げたりしない。真摯に受け入れて、考察する。アスカは天才だからその力がある。だから自己を正しく認識し、振り返ることができる。

ミサトの言う通り、三人でなければなし得なかったのは受け止めなければならぬ。

仲間……そんなものはずっと昔から一人たりともいない。仲間、友達……あるいは家族と呼べるのはこの無機質な女の子の人形だけだ。

月光に照らされるラフなパンツ姿になっているアスカの身体はまるで芸術品のようで、肌は陶器のように滑らかで美しい。

目を見張るブロンズヘアが、淡くも儂い光沢を放っているようにも見える。

ごろりと、二、三度寝返りをうったアスカはぼつりと呟いた。

「ずっと、独りが当たり前なのに。ずっと、孤独が気にならないはずなのに」

のっそりとベッドから下りたアスカは、同居人、カノンの部屋へと向かう。

鍵もないとか前時代的、なんて思いながら襖を開けると、すやすやと気持ち良さそうに吐息を立ててカノンが寝ている。

その愛らしい姿に、アスカの中で庇護欲が刺激される。そして次に、疑問と怒りに打ち震える。

なぜ、と。

なぜこんなにも弱つちいもやしだが、あの戦闘で大活躍したのだ。

ゲーセンで絡まれた不良ごときに殴られそうになるし、そもそも普段から根暗なところがあるし、そして何より弱いし、弱い。

それなのに、なぜ……。

……なぜあの時、一条の光となつて疾走するカノンがとてつもなく頼もしく見えたのか。

疑問は尽きないし、考えれば考えるほど怒りがこみ上げる。

カノンはあれだ。本質は異なるだろうが、温厚な人が車に乗ったら性格が変わるやつの亜種だと思われる。

エヴァに乗ったら、カノンは人が変わる。

きつとおそらく、『なんであんなに強いのに』と聞いても曖昧な返事しか返ってこないだろう。

だからちよつぴり、この弱つちい少女のことを知っておいたほうがいいと思った。別に寂しいからではない。

「ごそごそとアスカはカノンの横に寝転んだ。

「狭いわね……」

その理由は自分の荷物を詰め込んだダンボールが原因なのだが。

「ん……」

……起こしてしまったようだ。

少し寝ぼけているようで、こちらに寝返りを打ったあと。ぼんやりと目を開き、カノンは瑞々しい桜色の唇を微かに震わせた。

「式波、さん……?」

——なんという、破壊力。

精神の成熟していない男ならば、カノンの放つ神々しい月光に当てられ、即座に狼男になっていたことだろう。

とはいえ、同じ女といえどもこれは相当きつい。なんとか必死の意志力で理性を維持する。

そして遅れて意識を覚醒させたカノンがくわっ！ と目を見開いた。

「ししし、式波さん!」

「うるさいわね、静かにしなさい」

「う、うん……」

「ちよつとだけ、ここにいさせて……」

何かの機械がカチツと小さく音を鳴らした。

音のした方に見れば、カセットプレイヤーが見えた。

なんであんな古臭いもの、とは思いつつも今はそれについて触れないでおいてやることにした。

「あ、あの……式波、さん……?」

声に反応してアスカが身動きすると、カノンはくっ、と身を固めた。

「今日、どきくさに紛れて私の名前呼んだでしょ」

「え、あ、そうだったっけ? ごめんね、必死だったから覚えてないや」

「……特別にアスカでいいわよ。私もバカカノンって……ちよつと言いにくいわね……バカノン? これもなんか微妙? あ、やつぱりもやしで」

「ええ……」

しばし釈然としない顔をしたカノンはアスカを見つめておすおすと問うた。

「じゃあ、その……アスカはどうしてエヴァに乗るの?」

「愚問ね。だからあんたはバカなのよ」

「……バカって言うほうがバカなんだよ?」

「じゃああんたもバカね」
バカが移る。

不毛な争いだとばかりにアスカはカノンに背を向けた。
カノンはそれが会話の打ち切りだと判断し、再び眠るべく目を閉じる。

「自分のためよ、エヴァに乗るのは。あんたは？」

「皆を守るために」

「――」

躊躇いすらなかった。

さつきまで寝ぼけていたことなんて幻のような、毅然とした口調だった。

背を向けているからわからないが、カノンは今、どんな顔をしているのだろうか。

……いや、わかる。

でも。

「ありきたりすぎて、つまんない」

と、子供っぽく反抗してしまう。

再びアスカが向き直ると、カノンはびくりと身体を震わせた。

そして声のトーンを下げ、やや気恥ずかしく言った。

「じゃあ……皆に褒めてもらいたいから、じゃだめかな？」

「子供ね」

「むう」

カノンはテーピングでガチガチに固められた自身の手を見る。

初号機と同じぐちやぐちやな肉塊ではなく、きれいな白い手。

「今日、初めてお父さんに褒められたんだ。それがすごく嬉しかったの。表に出さないだけで、お父さん、私を認めてくれたのかな？ 皆は私を認めてくれたのかな？」

「知らないわよそんなこと。あんたってほんっとバカで、弱くて、ちみっちゃくて、子供ね」

言い返してくるかと思っていたが、あはは、と苦笑いを浮かべるだけだった。

気持ち悪、と言ってやろうと口を開きかけた、その時。

「うん、アスカは私なんかよりずっと賢くて強いし、堂々としてて頼もしいよ。……でも、アスカも子供だよ」

不快感は強まるだけだった。

カノンという人間は、意外なことに、骨の髄まで弱いわけではなかったようだ。

アスカに言い返せるだけの胆力がある。その辺りがエヴァに乗ったときに豹変する要素の一つなのかもしれない。

しかしキツ、と睨みつけるとすっかりカノンは萎縮してしまった。自分は血反吐を吐くほど厳しい訓練を耐え抜き、エヴァパイロットに選出された誇りある人間。

「私は大人よ、もやし」

するとカノンは優しく微笑み、夜明けとともに暗い地上を徐々に照らしゆく太陽のように囁いた。

「……そっか。すごいね、アスカは」

……これだからぼつと出の、そのくせ活躍するカノンのことが嫌いだ。

屈託のない笑みを向けられるといらつく。

ドジつてるところを見ると、バカね、と思う。

見る度見る度、本当にこのもやしはエヴァのパイロットなのかと疑ってしまう。

ああ、でも。

こいつといることは嫌ではない。

もちろん好きなどではない。別に嫌でもないというだけ。

「……おやすみ、カノン」

そう一方的かつぶつきらぼうに告げたアスカは、瞼を閉じて視覚情報を完全にシャットアウトした。

猫とお誘い

好奇心は猫をも殺すという。

一般的にこの言葉は、過度な好奇心は身を滅ぼす要因になるから必要以上に首を突っ込むなという戒めの意味である。

しかしこれだけでは真に理解できたとは思えない。

この猫を殺すものがいったい何かを理解しない限り。

好奇心のままに動くことで、それらを秘匿しようとする何かに殺されるか。

もしくは、好奇心の果て……追い求める真実に殺されるかのどちらかかと思われる。

もしかするとその両方だということだってありえる。

「俺は猫であって、猫ではない」

記者である「矢矧ユウジ」は、これまで収集した情報を一旦整理することにした。

薄暗い部屋、自室でクリップボードに大量に挟まれた紙を卓上に広げる。それらすべてにはびっしりと文字や表などで埋め尽くされ、矢矧がどれほど真面目な人物なのか伺い知れる。

第三新東京市は日本の首都だ。

人口が集中するのは当然だが、世界の首都と比べるとその集まりはずいぶん少ない。

その理由は、ここで戦いが行われるからだ。数年前まではこんなことは一度たりともなかった。

初めて避難を強制される数日前、ここら一带に対し、突然『特務機関ネルフによる避難指示が出された場合、これに速やかに従うこと』と通達された。

思えばこの都市は疑問点が多すぎる。

まずひとつは、地中深くまで沈み込むことのできるビル群。単にビルと言っても、その中には兵装ビルもある。

地下には超巨大な空洞があり、そこにネルフが本部を構えているという。

矢矧はそこへどうしても入館したいが、ただの弱小記者にはインタビューのアポを取ることすら許されない。当然侵入なんてできるはずもない。それほどの技術を残念ながら矢矧は持ち合わせていない。ふたつは、決してどんな脅威が来て、ネルフがそれをどのように退けているのかを一切公開しないことだ。

ネットにその戦闘の様子を一般人がアップしている動画などはよく見る。しかしこのご時世だ、クオリティの高いCGを使えば、色々ごまかしながらも本物に近い映像を作れてしまう。だからどれも信憑性に乏しい。

そして三つ。これが一番矢矧にとって疑問点だ。なぜ、こうも脅威はここに集中する？

第三新東京市が兵装都市であることは疑いようもない。そのため設備や一般人たちのためのシエルターなどの建設費用は決して安くはないはずだ。

だがこうして上から承認が降り、設備を整えたということ。これらが必要になる日が来ることをわかっていたとしか思えない。それは脅威がここに攻め入る理由にも繋がっているはずだ。

つまり、ネルフ本部には何かがある。

矢矧はそれがどうしても知りたい。

もちろんそこに行き着くための手がかりがないわけではない。

ネルフ側が対抗するのに使うのは、兵装ビルだけではなく、なんと巨大ロボットもいるらしい。

特撮かと最初は鼻で笑ったものだ。

そしてそれは有人による操作で、そのパイロットが子供であるところまで。

結構危ない橋渡りをしたが、それ以上のリターンはあった。

ならばあとの絞り込みは簡単だ。

ネルフ本部へと通じるルートは基本的に警備員が巡回している。ただそこにいるだけならまだ問題はないだろうが、長時間張り込むとなると話は別だ。

不審者認定をされて捕縛される可能性は十分にある。だからその

少し手前で張り込みをする。

地道な作業かもしれないが、好奇心のためならばその努力は惜しまない。

秘密を暴く。知る。理解する。これらは人間にとって最高の娯楽のひとつである。

……ネルフの秘密を知ったとき、俺はどれほどの喜びを感じるのだろうか。

想像するだけで、脳から快楽物質がどばどば溢れてくるのをはつきりと知覚した。

猫のように細い目をさらに細めた矢矧は、

「ちよつと、外回り行つてますね」

と部長に伝え、事務所を出た。



私はいつも六時に起床する。

私の朝ははやい。

もともと早起きな性分だから別に苦ではない。

スマホのアラームとして設定しているラツパの音が鳴り始めた瞬間には目は完全に見開かれ、意識は覚醒する。

アラームを停止させ、さつさと布団から起き上がった私はきちんとそれを畳んでからキッチンへ向かう。

朝の支度は基本的にすべて私が行っている。

この家に来てからしばらくの間はミサトさんと家事を日ごとに割り当てていたのだが、今やその原型はない。せいぜいゴミ出しに行つてもらったり、掃除機をかけてもらったりしているだけだ。

アスカには時々であるが干してある洗濯物を取り込んで畳んでもらっている。あと食器洗いも。

食事に関しては完全に私の支配下である。元より料理センスが地獄のミサトさんに加え、つい先日アスカまで残念とわかってしまった結果、なおさらふたりに料理は任せられないと判断した。

頼むのは電子レンジでチンするだけで食べられるものに限る。

この家での朝食は和風と定めている。少し手間がかかるのは事実

だが、それでも朝からきちんと食べて、英気を養ってほしいという願
いがある。

アスカは慣れないかな？ とは思ったが、そんなことはなく、案外
すんなり慣れたようだ。

それと同時進行で弁当の用意もする。アスカは当然として、ミサト
さんは放っておけば、食堂で偏った食事をするの間違いなした。だ
から矯正という意味でも私の作った弁当を食べてもらおう。

もう第八の使徒との戦闘によるフィードバックも回復し、普段通り
の生活ができるようになった。

その間はずっと冷凍食品で耐え忍んでいたし、ほとんどの家事をふ
たりに任せてしまっていたから、すぐく迷惑をかけてしまった。でも
これで少しでも家事スキルが上がってくれば、とも思う。

「おはよ〜」

と、アスカが眠そうに目元を擦りながら自室から出てきた。

「うん、おはようアスカ。そのままミサトさん起こしてきてくれる？」
「え〜」

面倒くさそうにするが、そのままの足でミサトさんの部屋に向かっ
ていく。

いい具合に味噌を溶かし、味見をする。

「うん、よし」

焼魚もいい匂いだ。焼き加減も文句なし。

アスカがミサトさんを蹴ったであろう音が聞こえ、その後まもなく
涙目のミサトさんが鼻をひくつかせ、ぼさぼさの髪のまま姿を現し
た。

アスカはそのまま洗面所へと直行する。

「おはよ〜」

そして大きな大きなあくびをひとつ。

「おはようございませす、ミサトさん。もうできるのでお箸とか並べて
おいてください」

「はいはい」

幽霊のようにゆらりゆらりと歩くミサトさんが、テーブルの用意を

始める。

お米も炊けたし味噌汁もOK。魚はすでに。

手際よくそれぞれを皿に盛り付けた私は、寝ぼけたミスatoさんにぶつからないように注意しながら皿を運ぶ。

洗面所から戻ってきたアスカはまだパジャマ姿だったが、眠そうだった顔はいつものツンツンしたものへと変わっていた。

「そういえば向こうで日本食なんて、なんちゃって寿司くらいしか食べなかったわ」

そう言いながらアスカが椅子に座る。

「なんちゃって寿司?」

エプロンを脱ぎ、ハンガーにかけた私もアスカに続いて座る。

「言葉通りの意味よ。ピザの形のやつとか、分厚いステーキをネタにしたやつとか。まああれはあれで何周か回って面白かったからいいけど」

「ふーん、そうなんだ。ちよつと興味あるなあ」

「でも私、日本の寿司は食べてないのよね。……ということで、ミスato」

後ろを振り向いたアスカは、目覚ましとばかりにビール缶を三本ほど冷蔵庫から取り出そうとするミスatoさんを見た。

「んえ?」

まだちゃんと頭が起きていないようで、「ああ、アスカも飲む?」

カノンちゃんも意外といけたりするかも?」とほわんほわんしながら言った。

アスカは椅子から立ち上がってミスatoさんに近づくと、スパン! といっそ気持ちの良い音を鳴らしてその頭を叩いた。

「いい加減にしてよミスato! 朝っぱらからビール飲むな! 仕事でしように!!」

「……あい」

年下に朝から怒られるというなんとも言えぬ恥ずかしい経験は結構ミスatoさんに堪えるらしく、今の一撃で完全に目が覚めたようだった。

その後なんのトラブルもなく朝食を済ませると、私が作っておいた弁当をアスカに渡す。

「ん。ありがと。これは匂いからすると……ハンバーグ？」

「冷凍食品だけだね。よくわかったね」

「ふふん、どうよ」

とサムズアップするアスカになんて反応すればわからない私はとりあえず「すごいすごい」と褒めておく。

気分を良くしたアスカは丁寧に私から受け取った弁当をカバンの中に入れた。

時間を確認すると、そろそろ家を出る時間が迫っている。やや急ぎ足で自室に向かい、パジャマ姿から制服に着替える。

次に洗面所で顔を洗い、髪を櫛で梳く。

ぺちん、と両頬を叩いて完了だ。

「行くわよ、もやしー！」

アスカはすでに玄関で準備万端のようだ。

「すぐ行くー！」と返してから、ミサトさんの部屋に向けて言った。

「ミサトさん、ごみ捨てお願いしますねー！」

ミサトさんにできる数あるうちの家事はこれだけだ。いったいこの人をもらってくれる人は現れるのかと結構本気で心配しながら私は弁当を入れたカバンを持った。

「りようかーい。いってらっしゃい」

襖を少しだけ開けてそこから伸びた手が振られる。

「行ってきまーすー！」

靴を履き替えて、家を出る。

エレベーターで一階まで降りたところで、いつもの三人がちょうどやって来た。

ヒカリ、鈴原くん、相田くんのいつものメンバーだ。

「おはよう、ふたりとも」

ヒカリが元気よく挨拶をしてくる。

「うん、おはよう。ほら、アスカも」

そう言いながら肘先でアスカの脇を小突く。

「おはよう、あんたたち。出迎えご苦労さま！」

「もう。アスカがごめんね」

「ええんやで、センセ。それよりもミサトさんはまだいるんか？」

「あーダメダメ。着替えてるから。それにそもそも、朝のミサトさんは誰にも会わせたくないの」

隙あらばだらけようとするものの、基本的に仕事をするときには凛々しいのに、それ以外はてんでダメダメな人だ、とても人前には出せない。

もうここまでくれば、アスカだけでなく、ミサトさんの保護者にもなってしまうそうな勢いになってきていることは否定できない。

ついこの間だって、家の前まで来た三人がインターホンを鳴らして、それに反応したミサトさんがドアを開けたことがある。

寝起きのままのラフな格好で。

あの時ほど恥ずかしい思いをしたことはそうないだろう。

ミサトさんはさほど気にしていなかったようだが、一緒に暮らしている私がすごく気にする。

「そいつは残念やなあ」

「ああ。残念だ。本当に残念だよ」

煩惱だだ漏れのふたりはがつくりと肩を落とした。

確かにミサトさんはとても美人だが、プライベートではなるべく会ってほしくない。

「はあ……これだからあなたたちは」

ヒカリが長いため息を吐くのも無理ないと内心で気の毒に思う。

アスカもこの三人には随分馴染んできたようで、特にヒカリとは軽口を叩き合えるほどの仲になっている。

しかも普通に『ヒカリ』と呼んでいるし、私と比べると雲泥の差だ。全然気にしていないが、すごく気にしている。

学校での授業はいつも通りで、ヒカリと私が真面目に先生の話を聞いているのに対し、アスカは何かPCで遊んでいるし、綾波さんは肘をついてぼんやりと窓の外を眺めている。鈴原くんは睡眠魔法をかけられたようにすやすや眠り、相田くんは隠れてカメラをいじってい

る。

もう慣れた光景だから驚くことはない。

昼になると生徒たちは活気づく。私達もおもむろに弁当を机の上に出す。

おかずがハンバーグだからなのか、アスカの機嫌は良さそうだ。

いつものメンバーで席をくつつけようとしている中、私はある人のもとへと向かう。

授業中からずっと姿勢をキープし続けるその人は――。

「綾波さん、これ」

そう言いながら私は手に持っていた弁当箱を綾波さんに差し出した。

こつちを向いた綾波さんはまず、弁当箱に視線を落とし、その次に少し驚いたように私を見上げた。

昼は薬しか飲んでいないことは知っているし、半ば強引であったことは否定できないが、昼食をともにしている。

本当に薬しか受け付けないかどうかをよく知るのが目的の一つだが、単純に綾波さんと一緒に食事がしたい、という理由もあった。

いける、と確証を得たのは社会科見学の時だ。

「いつも食べてないから。大丈夫、お肉は入ってないよ。ほら、こつちで食べよう」

「え、ええ……」

「大丈夫大丈夫。もし多くても鈴原くんがなんとかしてくれるよ」

「わしは残飯処理か！」と、しっかり突っ込んでくる声が聞こえてきて、私はくすりと笑った。

「……ありがとう」

綾波さんは少し照れ恥ずかしそうにしながら感謝を口にした。

たぶん、初めて聞いた言葉だ。綾波さんも自分の言葉に気づいたのか、微かに目を見開く。

……思ったのだが、綾波さんは可愛いがすぎると思うことがよくある。

前まではお人形さんみたいにきれいな人だなあと思っていたが、最

近はそんなことはないと思いはじめている。第六の使徒を倒したときは必死の形相で私のエントリープラグに入り込んできたし、味噌汁を飲んだときは驚くような反応を見せた。

私が抱いた第一印象の悉くを砕いた綾波レイという人間に対する興味は、日を重ねるごとに肥大化していく。

レイ、という名前だから気になったのが始まり。

私も昔は同じ名前だった。

もしカノンに改名していなければ、もう少し違った見え方だったのかもしれない。

いや、それはi fの話でしかない。

頭を振った私は綾波さんを改めて招く。

計六人で食べるとなると、まあまあのお店の広さとなる。三対三で机を向かい合わせて皆で食を囲む。このうち半分が私のつくった弁当と思うとなかなか面白いものだ。

そのおかず美味しそうだね、とか、それとこれ交換しようぜ、のよきな盛り上がりを見せる。

「ちよつともやし」

真つ先にハンバーグを口に運んだアスカが器用に箸で空に円を描きながら不満げに私を呼んだ。

「どうしたのアスカ？ あ、お箸で遊んだらダメだよ」

アスカは私の指摘に大人しく箸を置く。

「ハンバーグがあるからって楽しみにしてたのに、たった一個ってこれどういうことよ」

「ええ……。だって大きいから他のおかず入れられなくなるじゃん」

「足りないわ！」

ドン！ と胸を張って駄々をこね始める。

この前「私は大人よ」と言っていたとはとても思えない子供らしさに私は苦笑いしつつ、アスカの尊厳のために突っ込んでおかないことにした。

私は仕方ないな、とため息をついた。

「もう、わかったよアスカ。私のあげるから」

「……センセ、式波を甘やかしすぎちゃうか？　このままやと絶対ろくな大人ならんで」

鈴原くんの冷静なツツコミが入る。

確かにアスカは我儘なところがあるし、私は姫！　のような主義主張が多々ある。

「つさいわね！　私はすでに立派な大人よ！」

「そうは見えへんで……？　なあケンスケ」

思わぬ流れ弾に、相田くんが身を強張らせた。

「……いやあ、俺にはよくわからないなあ」

絶妙な間を置いて、相田くんは上手く流れ弾を回避したようだ。

しかしながらアスカを突っぱねてしまうのはかわいそうだと思うし……みたいな思考が何度も何度も循環するせいで、結局は我儘をはいはいと許している節があることを否定できない。

そんなことを考えている間にもアスカが「もーらいつ」と上機嫌に見事な箸さばきで私のハンバーグをかつさらっていった。

そして私はすかさずアスカの弁当から鶏皮をふんだくった。

「はい、これで交換だね」

ハンバーグと鶏皮は釣り合わないのではと考えたのか、アスカは小さく首を傾げた。しかしすぐに「まあいいわ」と前置きしてから、

「あんだ、ほんつとそれ好きよね。そんな脂っこいものばつか食べてたら……太るわよ」

「うぐ……っ！　で、でもちゃんとその辺考えてるし、運動もちゃんとしてるもん」

苦し紛れの言い訳に、アスカは懐疑的な目を私に向ける。

アスカのようなスタイル抜群な人に言われてしまえばぐうの音も出ない。まだ現在進行形で成長途中とはいえ、成長速度の差はあまりに歴然としている。

日本人だからか、それとも単に私が幼児体型から抜け出せていないのかわからないが、とにかく私はアスカに遠く及びそうにない。

「大丈夫よカノン。BMIさえ高くなければいいから！」

私をフオローしようとしたのか、ヒカリが懸命に私とアスカの間に

割って入った。

その気遣いはとても嬉しいのだが、違うのだ。

数値的なものではなく、外見の問題である。

それはフォローじゃないよ、と血の涙を流しながら私は心の中で泣いた。

「おいしー」

と言いながら一定のタイミングで同じ感想をつぶやき、黙々と弁当を食べてくれる綾波さんだけが、私の精神衛生を保つ唯一の癒やしだった。



「ん〜んまい！ ぐちそうさまでしたっ！」

遅い昼食となったミストは食堂ではなく、場所の開けたインナーテラスでカノンのつくった弁当をぺろりと平らげた両手を合わせた。

ここのテラスは特に天井までが高く、青々と広がる空が見えている。この空はジオフロント内に人が作った偽物だが、それでも本物に引けを劣らない。昼食休憩をするには絶好の場所だ。

「よっ。遅い昼飯だな」

そう聞き慣れた声でミストの脇からぬっと現れたのは加持だった。

片手に持ったブラツクのコーヒー缶をミストの横に置き、ぐるりと回りこんで隣の席に座った。

「あ、ありがと」

「カノンちゃんにつくってもらってるんだって？ ま、君は手料理ってガラじゃないしなあ」

流れるように毒を吐いた加持にミストはむすつとなった。

「そうね、暇なあんだとは違って現場の管理職はたんまり仕事があんのよ」

ぶつきらぼうに言ったミストはふん、と鼻を鳴らしてノートPCに向きなおって立ち上げる。

「相変わらず真面目だなあ。まあそこが葛城の良いところだが、弱点でもある。この前だっさりっちゃんやり合ってたって聞いたぞ？ もうちよつと余裕持てよ」

加持の言っているのは、おそらく第八の使徒の対抗策について資料室で口論になったことだろう。

……痛いところを突かれる。

ミサトは眉を微かにひそめた。

結果的に殲滅できたからいいものの、リツコの言い分も最もであったことは否定できない。ミサトの提示したものはきちんとした根拠や確証のない、悪い言い方をすれば行き当たりばったりな作戦だった。

理論や数値に拘るリツコには受け入れがたい作戦であったことも理解している。

だからこそ衝突したのだ。

承認してくれたリツコには頭が上がらない。

「あいにく私の器は責務でいっぱいなのよ」

トラックパッドの上で指で円をなぞるように描く。

「緊張感ありすぎると男にモテないぞ?」

ぶちん、と堪忍袋の緒が切れた。

「余計なお世話——」

睨みつけようとして加持のほうを見たミサトはそれ以上の言葉を発することができなかった。

昔……大学生時代に付き合っていたころ、同じ布団の中で寝る時に見せる色気のある顔だった。

今になって、別れたはずの男とこんなにも違和感なくに会話が弾んでいることに気づいてしまう。

離れようと思っていたのに、いつの間にか心の距離が接近している。その事実気づいてしまう。

◆ 気恥ずかしさや自罰に、ミサトは頬を赤らめながら顔をそむけた。

ゆらゆらと。

ゆらゆらと。

L・C・Lに満たされた水槽の中で、レイは空色の髪をゆらゆらと揺らしながら浮かんでいる。

レイは最近の出来事を思い出しながら目を瞑る。

まるで無色だった日常に色彩が与えられ、目まぐるしく変化していつているのを漠然と認識している。

これは怖い変化ではない。

そもその発端は、碇カノンという少女だ。

ヤシマ作戦の決行前に、カノンがレイに言った言葉が今も脳裏に深く刻まれている。

ふたりで美しい夜空を見上げながらのことだった。

『生きているふりをするの、やめない?』

その瞬間だった。

レイが明確に世界を知覚したのは。

遙か天蓋から神の雷を落とされるほどの衝撃だった。

カノンは自分もかつてはそうだったと言った。そして今、そんな自分を変えるために頑張るのだと。

だからこそ、健気に頑張るカノンの姿がレイの目には眩しく映った。

この輝きを少しでも長く見ていたいとも思った。

美しく、それでいて弱々しい輝き。儂くて、ちよつとした突風が吹くだけで飛ばされそうなの。

……守りたいと思った。

だからあの時、初めて誰かのために必死になって、カノンのエントリープラグのハッチを開けたのだ。

「……レイ」

聞き慣れた男の声が聞こえる。

レイがゆっくり目を開くと、水槽の前のゲンドウがこちらを見ていた。

ここはネルフの地下実験室。一般職員は存在すら知らない場所。

「食事にしよう」

はい、とレイが返すと、ゲンドウが水槽横のデバイスを操作する。

すると水槽を満たしていたL・C・Lが排出され、水槽のガラスケースが上につながっている巨大な柱へと持ち上げられる。

ぺたぺたと冷たい通路をゲンドウとともに裸のまま歩き、シャワールームで別れる。

L・C・Lを完全に洗い流し、いつもの制服に着替えたレイはゲンドウの待つ部屋へと向かう。

そこは司令室に似た、無機質な場所。

食事用のテーブルと椅子しか置かれていない、とても寂しい場所。すでにゲンドウは席に座っていて、レイを待っていたようだ。

長テーブルの両端にそれぞれの食事が用意されている。レイはゲンドウから離れた席に腰を下ろした。

「いただきます」

落ち着いた曲調の音楽が流れ始め、ふたりは静かに食事を始めた。

ゲンドウはこんがり焼いた肉に、香りのひきたつソースをかけたフランス料理。

対してレイは、いつもの錠剤のみ。少し違うのはゼリー飲料があることだけ。

ゲンドウとふたりきりの食事はこれが初めてではない。比べるならば、カノンたちと一緒に学校で昼食を食べた回数よりずっと多い。

……何かが違う。

そうレイは感じ取った。

今までなら絶対に気づかない違和感。

無意識にレイは尋ねていた。

「錠司令」

透明な声で言う。

「なんだ」

「食事って、楽しいですか？」

ゲンドウはちらりとレイを見て答えた。

「ああ」

なんだから、レイの知った『楽しい』とは違う気がした。

「誰かと一緒に食べるって、楽しいですか？」

「ああ」

ではなぜ、これほど互いに離れて食事をとっているのだろう。

学校ではカノンがすぐ隣に座ってくれていた。

不意にレイは首を横に振るが、もちろんそこにカノンはいない。

「料理ってつくると喜ぶ……ですか？」

「ああ」

カノンは毎日、アスカとミサトの食事を作っているのだという。

先日学校でカノンの弁当を食べて、おいしいと言ったらカノンはとても喜んでくれた。

きつと、食べた人がそう言ってくれたのが何よりも嬉しかったのだと思う。

だから――。

「碓司令。今度……碓さんや皆と一緒に食事……どうですか？」

勇気を精一杯に振り絞り、自分の口で誘った。

きつとこの食事は楽しくない。相対的に理解した。

だから、ゲンドウにも食事を楽しんでほしい。学校でレイが感じた、食事の楽しさを共有したい。

カノンに日頃の感謝を込めて。

父と仲良くなつてほしい。

そうすればカノンは喜んでくれるだろう。

ゲンドウがゆっくりと顔を上げる。

互いの視線が交差する。

ゲンドウは相変わらずのレイ以上の仏頂面で言った。

「いや、その時間は――」

しかしそこでゲンドウは手の動きを止めた。

口を開いたままレイを数秒ほど見つめる。

ゲンドウの瞳に何が映ったのかは、レイにはおおよそ見当がついていた。

意図したわけではないが、それは極めて効果的だったようだ。

「……わかった。行こう」

その言葉を聞いたレイは、肩の力を抜いて、安堵とともに小さく微笑むのだった。

「え」

「……え？」

それきり長い長い沈黙が流れた後、リツコはマリアナ海溝より深くため息をついた。

「はあ……カノンちゃんをあなたに預けたのは間違いだったかもしれないわね。ミサトのだらけきった生活態度がきつと彼女に伝染したのよ。まだ軽症で済んでるけど、このままだといけないわ。いつそのこと私の方で引き取ろうかしら」

「え、いやそれは割とマジで困るワ」

「家事ぐらいできないと……この先辛いわよ？ 別にいつまでもあの子たちと住むわけじゃないでしょう」

非常に耳に痛いことを容赦なく告げられ、ミサトはぐぬぬと口をすぼめる。

事実としてカノンに家事をほとんど任せているのは事実だし、金のやりくりすらすべてではないものの、任せてしまっている。いつの間にか、あの子の主人がミサトではなくカノンに交代しているのだ。

「カノンちゃんが来て、ミサトの生活態度はむしろ悪くなった気がするわ」

「やめて。私死んじやう」

それにこの車両にはオペレーターたちも乗っている。リツコの容赦ない言葉責めは公開処刑に他ならない。

蛙の潰れるような声を喉奥から絞り出し、誤魔化すように頭を振って台座に横たわる初号機を見る。

「ところで……初号機、本当にぼこぼこにされたわねえ」

リツコはわざとらしく驚いてみせた。

「露骨に話題を変えてきわね。まあ、あれだけ大質量の使徒を受け止めたもの。むしろ大破で済んだのは幸運よ」

「……こんなになるまであの子は頑張ったのね」

「僕が言うのも何ですけど、こうも損傷が激しいと作戦運用に支障が出てます。バチカン条約、破棄していいんじゃないすか？」

マコトは率直な意見を述べる。

ここでマコトの言うバチカン条約とは、エヴァの運用に関する制限を設けるものである。事細かく表記されているが、メインとなるのは一国のエヴァ保有数を三体にまで制限するという一見するとリスクしかない条約だ。

特に日本は使徒殲滅という何よりも優先すべき使命がある。そのためにはエヴァは多ければ多いほど良い。特に前回のような作戦では三体でギリギリだった。もしももう一体いればもっと作戦の幅は広がっていたし、カノンの短いようで長い苦痛を少しでも緩和できていたかもしれない。

「そうよねえ……。制限されちゃ稼動機体の余裕なんて皆無よ」

ぷりぷりと不満を口にし、マコトに同意した作戦部長はぐちゃぐちゃになつた両腕、潰れた足首などの交換の様子を諦観する。

エヴァの修復コストはバカにならない。超法規組織だからこそ国からある程度の税金を頂戴しているが、それだけではまったく足りない。

ネルフのさらに上に位置する組織による資金援助は必須となっている。

エヴァはロボットではなく人造人間であるため、張り付けられた装甲板の下には普通の人間と変わらないような骨や筋肉組織に覆われている。

それらを接合し、ハイフリック限界を迎えないように調整するなどといった作業は非常に労力がかかる。

「今だつて初号機優先での修復作業です。予備パーツも全て使つてやりくりしていますから、零号機の修復は目処も立たない状況です」

初号機を一瞥したマヤが苦々しい顔をしながら現状を告げる。

「条約には、各国のエゴが絡んでいるもの。改正ならまず無理ね。おまけに5号機を失つたロシアとユーロが、アジアを巻き込んであれこれ主張しているみたいだし、政治が絡むと何かと面倒ね」

面倒ね、とリツコがもう一度繰り返す。

「人類を守る前にすることが多すぎですよ」

後輩は静かに愚痴をこぼした。

◆ ……我ながら、らしくないことをした。

そう私は自責の念を強めながらぎゅつと目を瞑った。

土曜日に家でだらだらしたいと主張したことだ。

不意にやる気をなくしてしまう現象に襲われてしまったのだ。

しかし私は学生ではありつつも、一応は軍人なのだ。出自からも、

その辺りの規則には厳しいアスカに一喝入れられるともう抵抗なんてできるはずもなかった。

屋上でひとり、私はS—D A Tでいつもの曲を聞く。

ごろり寝転がると、太陽の光によって適度に温まったコンクリートの地面は存外に心地よかった。

それに軽やかなそよ風が私の前髪をふわりと撫で、全身に脱力感が巡る。

「ふあああ……」

大きなあくびをひとつ。

まだ放課後になったわけではないので、当然この後授業の予定はある。

寝るわけにはいかない、と自分に言い聞かせた途端、先日の恥ずかしすぎる一幕を思い起こしてしまい、私は頭を抱えて静かに悶絶する。

それにしても、今の私が聴いている曲は私の心情や、外の雰囲気とはまるで似合わない。なんだかそれだけではないような気もするが、今の私にはわからない。

このふわふわした思考を拙い言語能力で頑張って表現するならば――。

聴き飽き――。

不意に閉ざしていた視界がさらに暗くなった。

雲はまばらにしか浮いていないはずだ。薄っすらと瞼を持ち上げると、確かに大きな影が私に落ちている。

が、違和感。

なんだかその影はだんだんと大きくなってきているのだ。

と、考えているうちにイヤホン越しでも聞こえるほどの大声量で逼
迫した誰かの声が聞こえた。

「どいてどいて——!!」

「……へ？」

落下物。

だというのは一瞬で理解した。

親方、空から女の子が！　なんて冷静な感想を口にする余裕なんて
まるでなかった。ネルフで鍛えられた反射神経を総動員して弾ける
ように起き上がるだけで精一杯。

そして。

ダイビングするほどの勢いで、吸い込まれるように私へと一直線に
パラシュートを広げながら衝突した。

「へぶっ！」

狙って私にぶつかってきたのではないかと疑ってしまうほど
正確な軌道だった。

私達もみくちやになつて再び地面に倒れ、私の上に乗っかかる形
で跨った。

「いってて……」

被っていたであろうヘルメットが頭からずれ落ち、硬い音が鳴る。
妙に豊満で弾力のある物体が顔面に押し付けられているせいで、私
の視界は真っ暗だ。

未知との遭遇、と評するべきか。これほど温かみのある柔らかい感
触を私はこの人生で一度も味わったことがない。

しかしながら口も鼻も押し付けられているため、呼吸もままならな
い。

私が懸命にもぞもぞと身じろぎしていると、その人物はややくす
ぐつたそうに身体を起こした。

「もう、そんなにがつつかないでよー」

窮屈さから解放された私は大きく口を開けて呼吸を再開した。

背中の痛みに顔を僅かに歪ませながらも、学校にパラシュートで飛
び込んできた人がいったい何者なのか把握しなければならぬ。そ

して先生に報告、と考えた。
しかし。

「……………」

はつと息を呑んだ。

なんと、どれだけ屈強な人かと思えば、制服姿の少女だった。

しかしその制服は私と同じものではない。赤と緑のチェックのスカート。

私より身長は高そうだ。シュツとした顔立ちに、猫のような目。少し赤みがかったブラウン色のツインテール。

纏う雰囲気は大人の女性のようで、コスプレした大学生なのではと疑ってしまう。

そして同時にあの感触はこの人のたわわに実った胸部だったようだ。

コンプレックスが加速した私は、一秒の間に十回ほど呪詛を内心で少女の胸に唱えた。

数秒ほど私と視線を交差させていたが、すぐさま私から身体を退けると四つん這いになりながら何かを探するような素振りを見せ始めた。

「メガネメガネ……………」

「メガネなら左ですよ……………」

少女は私の助言に素直に従って身体の向きを変える。

「ありがとうねー」

と、とても気さくな返事が返ってくる。

間もなくメガネを見つけた少女は、それを耳にかけてこちらをちらりと振り返った。

「あぁごめん、大丈夫?」

彼女のキヤラは一気に理知的なものになり、失礼なのはわかってい
るが、無言で見詰めてしまう。

その間に少女のスカートのポケットから飾り気のない呼出音が鳴る。少女は屋上に広げられたパラシュートをくるくると纏めながらポケットから通信機を取り、電話に出た。

てつきり日本語かと思えば、驚くほど流暢な英語で通話を始めた。

時々知っている単語が混じるばかりで、ほとんどを私には理解することができなかった。

しかし何か不愉快なことを言われたのか、くるくると纏めていたパラシュートをバサツ！と大きく振り回す。

その後も英語での通話は続き、つつがなく終了した。

どう話しかければいいかわからないままおどおどしていると、こちらにちらりと目を見やった少女が四つん這いのまま私の方に接近してきた。

「え、ちよ、ちよつと……」

なんてたじろぐ私に鼻の触れそうになる距離まで接近すると、徐々に私の首元をなぞるようにして顔を這わせて鼻をひくつかせた。

驚愕と緊張で金縛りにあったように私は上半身を起こした姿勢のまま硬直してしまう。

ごくりと生睡をのみ、眼球だけを動かしてその動きをじっと見る。

もし男の人に同じことをされたら間違いないと叫ぶだろうが、同じ女だ、そのあたりは問題なかった。

ほんの数秒の出来事だったが、まるで無限に引き伸ばされたような感覚だった。

満足した少女は次に薄っすらと目を細め、私を間近に見据える。

そして。

「君、いい匂い。L.C.Lの香りがする」

ぼそつと耳元で囁かれた。

「えっ？」

眼前の少女は品定めするかのように次いで私の頭頂から足先までさっと見下ろした後、低く続ける。

「……君、おもしろいね」

「えっ？ えっ？」

すると少女はこちらに右手を差し出してきた。

そこには衝突したときに私の手元から飛んでいったのだろうS—DATが握られていた。

「ありがとうございます……？」

私が遠慮がちに受け取ると、

「じゃ、この事は他言無用で！ ネルフの子猫ちゃん」

ささっとパラシユートを腕に引き寄せると非常口から颯爽と姿を消してしまった。

嵐のように訪れ、あつという間に去っていく。

どうしてL・C・Lやネルフのことを知っているのかと遅れながら疑問に思ったが、それよりも――、

「……名前、聞き忘れちゃった」

と溢した眩きは、青々と広がる空へと吸い込まれていった。

◆ ネルフにはちよつとした休憩所がある。
両サイドに自動販売機が並び、その間にベンチがある。喫煙所はこ

このすぐ脇だ。

結局あの事故のことは誰にも話していない。あれだけ印象強い登場だ、わけありと私は判断した。

あの人果たして悪い人か良い人かと問われると、私は首を傾げる。

別に私を傷つけようとしたわけではなかったし、妙に近いスキンシップも悪意があるようには思えなかった。

しかし、あれのせいで私のS―D A Tが接触到に不調をきたし、うまくカセットが再生できなくなってしまった。

これを考慮すると僅かに『悪い人』に傾く。

学校終わりにネルフへと直行した私は、水筒のお茶がなくなったから補充するべく休憩所へ向かう。

私の中学校は登下校中の買い食いを禁止にされてはいない。

もし禁止されていたとしても、別にコンビニや道端にある自動販売機ではなくネルフのならばいいだろう、というなんとも曖昧な判断をしていたかもしれない。

などともいいことを考えながら、私はベンチに座ったまま指を顎に当てながら自動販売機とにらめっこをする。

売っているのがお茶だけではなく、炭酸やカフェオレ、野菜ジュー

スなどと実にそそられるラインナップだ。

お茶と牛乳以外は滅多に飲まない私にとってはとても魅力的であるの言うまでもない。

今日ぐらい……いいかな？

自然と口の端が緩む。

いやいや、ジュースを買って飲んでいるところをもしアスカにでも見られたら「ちよーだい！」と要求されること間違いなしだ。

そのまま全部飲み干されそうな予感すらある。

ゆえに、ここは無難にお茶を……と腰を上げようとした瞬間。

「ほれ」

と、知っている人の声が背後から聞こえ、同時に冷たい何かを頬に押し付けられた。

「ぴゃっ！」

なんて甲高い声が短く喉から飛び出した。

不満げに後ろを振り向くと、私の背後には加持さんが立っていた。

「よっ。どうだい？ たまにはデートでも」

「えー？」

あまりに直球な誘いに私は訝しみながら加持さんを見上げる。

「デートってそんな……私たち、年離れてますよ？」

「ノープロブレム。愛に年齢なんて関係ないさ」

そう言う私の手の上に手を重ね、ぐい、と顔を寄せてきた。

これ、デジャヴユだ。

と学校での出来事を思い出す間にも加持さんの顔がさらに近づいてきて――。

「うわああああっ！」

と今度こそ廊下まで響かんばかりに悲鳴を上げた。

しかしそこから何かしら変化が起こることはなく、加持さんは私の耳元で呟く。

「冗談だよ」

「……ミサトさんに報告します」

冷酷に告げる。

「え、そいつは困る。殺される」

「どうぞ殺されてください」

「こいつは手厳しい。これでチャラにしてくれないか?」

ミサトさんが絡んできたなら面倒なことになると悟ったのか、大人しくなった加持さんは懲りたいたずら小僧のような顔をしながらさつき私の頬に当たてたであろうコーヒー缶を差し出してきた。

だが私は両手を前に出して拒否を主張する。

そしてぴしやりと言った。

「りんごジュース」

「え」

「りんごジュース買ってください」

「あ、ああ。わかったよ」

頑として譲らない私の態度に、苦笑いを浮かべながら加持さんは自動販売機に向きなおる。

その後ろ姿を見ながら、ラッキー、と思う私なのだった。

加持さんにデートという建前で連れてこられたのは、ジオフロント内にある畑だった。

結構な広さで、人ひとりがすべてを見るには少し割に合わないほどだ。

作業服に着替えた私と加持さんはその中に入っていた。

「草むしりを頼めるか?」

「はい」

この後シンクロテストの予定があるものの、時間に余裕はある。

勉強をして時間を潰そうと思っていたが、たまにはこうして農作業に勤しんでみるのも悪くはないだろう、と快諾する。

軍手をつけ、腰を落として雑草をなるべく根っこから抜くように意識して手を動かす。

こういう地道な作業はどちらかというが好きだ。なぜなら無心でできるし、ぼんやりと考え事をしながらでもできるからだ。

人の手によって改装されたジオフロントでも、まるで地上にいるのと大差ない。

超巨大な換気システムによって風を感じることができるとし、不意に顔を持ち上げれば遠くに見える湖はとても美しい。

人工の明かりに反射した水面がきらきら輝く。

足元に溜めた雑草を小道に置いた私はその光景にうつとりしながら見詰める。

そして気づく。

私の鼻にこびりついたある匂いに。

くんくんと鼻先をひくつかせ、ついにその正体を暴く。

「……土の匂い」

土に汚れた軍手を顔の前に出し、私は胸いっぱい匂いを嗅いだ。人の作り出した擬似的な自然。

しかしながら、私はこの土地が『生きている』ことを瞬時に理解した。

……この感覚を、私は如何なる手段で表現することができない。

ただ、土色の軍手を見下ろすことしかできなかった。

「……………」

「もうへばったのか？ 給料分は働いてもらおうぞー」

そんな私を見た加持さんは額の汗を拭いながら陽気に言った。

「給料……？ ああ、さっきのりんごジュースのことですか？ さっきはデートって言ってたのに。加持さんはもつと真面目な人だと思っていました」

私は呆れながらそう言った。

デートに誘ってやるのが草むしりとは……なんとも拍子抜けだ。

「はは、大人はズルいくらいがちようどいいのさ」

「確かに加持さんはズルい人ですね。ところでこれは……スイカですか？」

「ん？ ああそうだ。可愛いだろう？」

私が見ているのは、丸々と実った大きなスイカだ。

「オレの趣味さ。何かを作る。何かを育てるってのはいいぞ。色んなことが見えるし、わかってくる。楽しいことかな」

私たちは小道を挟み、互いに背中を向けながら作業を再開する。

「辛いことも……ですよね」

「辛いのは嫌いか？」

「私の手は止まった。」

「……嫌いです」

「おお、ずいぶん素直だな。じゃあ楽しいことは見つけたか？」

「それは……まあ」

ミサトさんの家でのなんともない……とは言えない、主に私があれこれ運営していることや、学校で友達とふざけ合う日々。

……楽しい。

告白すると、楽しい。

嫌なことは確かにあったが、それでも楽しい記憶を薄れさせるほどではない。

「いいことだ。辛いことを知っている人のほうが、それだけ他人に優しくできる。これは弱さとは違う。カノンちゃんはどうだい？」

「それは……わかりません。加持さんこそどうなんですか？」

「オレか？ オレは……そうだな、オレもわからない」

「なんですかそれ、ズルいですよ」

「これが大人だ」

「むう」

そう言われると、それ以上何も言えない。

作業を再開させようと雑草を摘んだとき、不意に加持さんが訊いてきた。

「葛城は……好きか？」

「え？」

再び手が止まる。

後ろを振り向くと、先程までのふざけた態度ではなく、いたって真面目な顔で私を見ていた。

「家ではびつくりするくらいぐーたらでどうしようもないですけど、まあ……好きといえば、好きですよ」

やや照れが混じり、私は加持さんから視線を逸らしつつ答えた。

「そいつはよかった」

と呟き、ゆつくりと言葉を続ける。

「葛城を、守ってくれ」

それは、重みのある言葉だった。

「え？」

「それはオレにはできない、君にしかできないことだ。頼む」

「はい」

私は即答した。

ここは変に誤魔化したり、生返事をしてはいけない場面だと思っ
た。

「ありがとう」

表情を崩した加持さんに、私は追撃した。

「その代わりスイカをひとつ頂きます。いいですね？」

「……君も一歩、大人に近づいたなあ」

葛城家ではその日の晩、食後のデザートとしてスイカが振る舞われ
たのだった。

◆
ネルフによって、チルドレンたちの通う学校は常に監視されてい
る。

しかしながら教室内で起こったことすべてまではさすがに把握す
ることはできない。

その辺りはカノンとアスカから学校の話聞くことで補完してい
るのだ。

これは、ミサトの仕事のひとつである。

車を走らせながら、ミサトは助手席に座るリツコに視線を振りなが
ら言った。

「変わったわね、レイ」

カノンの話によると、自分から挨拶をするようになったのだとい
う。それに、これは推測ですけど前置きをしながら、料理の勉強を
始めていますねとも言っていた。

あまりに劇的な変化だ。

ミサトは心底感心した。

「そうね。あの子が人のために何かをするなんて考えられない行為ね。何が原因かしら」

リツコは手元の手紙を不思議そうに見ながら呟く。

裏面には『赤木博士様江』とど真ん中に丁寧な細い字で書かれている。

「愛、じゃないの?」

「まさか。ありえないわ」

そう言いながらリツコは手紙をかばんにしまった。

間もなくリツコの自宅の前に着くと、リツコを降ろす。

「カノンちゃんを引き取る件、あれ、場合によっては本気よ」

車から降りたリツコはいたずらっぽい笑みを浮かべながら唐突にそんなことを言い出した。

「え、マジ?」

「大マジよ。これでも私なりに心配しているのよ?」

「私を?」

「カノンちゃんに決まっているでしょう」

「ア、ハイ。カイゼン、シマス」

片言で強引に話題を切り上げたミサトは誤魔化すようにアクセルを踏み込み、リツコの前から去っていった。

冗談と思っていたのに、現実味を帯びていたカノン引き取り案件に内心冷や汗だらだらだ。

ちよつと真面目になんとかしなければならぬかもしれないと危機感を覚えながら帰宅。

玄関にはアスカの靴しかなく、まだカノンはネルフにいるのだと思われる。

「たっだいまー!」

汚く靴を脱いで……。

「おっと」

きちんと揃える。

小さな意識改革だ。

「あれ? 早かったわねミサト」

「すぐ本部へとんぼ返りよ。風呂と着替えに戻っただけー」

今日の業務が終了したわけではなく、すぐにまたネルフにリツコを拾って帰らなければならぬ。

はーつつかれた、とため息を吐きながら部屋に向かおうとして――

「おおっ!!」

どういうわけか、キッチンにアスカが立っているではないか。

下着姿にエプロンというなんともラフすぎる格好で、卓上にたくさんの調味料を並べてダシの味見をしていたようだ。

上半身を逸らし、キッチンへ身体を向けたミスアトはわざとらしく手を口に当てて言った。

「あつらくこれはこれは、アスカもカノンちゃんに料理ご馳走するのん?」

するとアスカは目に見えて動揺を見せ、卓上に広げた一式を隠すように覆い被さった。

しかし、それだけですべてを隠せるはずもなく、努力した痕跡がよく見える。

「え!! ち、違うわ! これは……えっと……女の子……そう、ヒカリよ!」

苦しい言い訳にミスアトはくすくすと笑う。

「レイといいアスカといい、急に色気づいちゃって」

「何よ! えこひいきと一緒にしないで!」

「んーそうね。レイにはもつと遠大な計画があるようだし?」

「何それ……?」

ちらりと興味を示したアスカが視線だけミスアトに向ける。

「碇司令とカノンちゃんをくつつける、キューピットになりたいみたい……よ?」

ジャケットの内ポケットを探ってリツコと同じ、レイに渡された手紙を取り出してアスカに差し出した。

「手作り料理で皆と食事会! という作戦らしいわ。ストレートな分、これは効くわよ」

手紙にはきちんとレイの直筆で『式号機パイロット様江』と書かれている。

「ほんと、あの親子を仲良くさせるのは骨が折れるわね」

「あの女がもやしのためにな？」

「サプライズなんだから、あの子にはバラしちや駄目よ？」

ウインクをするミサトを見て、ムスツとしたアスカは手紙を勢いよく奪い取る。

「話すわけ無いでしょ！ この私が！」

その指には絆創膏が巻かれていた。

ミサトは微笑ましげに口角を緩めた。

計画

赤の十字が屹立する。

遙か高く。なお高く。

天蓋を貫き、宇宙へ届かんとどこまでも伸びる十字。

広大な大地を血色に染める。

生存者、なし。

生物、なし。

これぞ、未知に手を出した愚者の末路。

その対価は、死。



法律違反ギリギリの速度で愛車をぶっ飛ばしたミサトは、肩で息をしながらヤクザの殴り込みのような面持ちで作戦会議室に駆け込んだ。

風呂中に報告を受けて十分としばらく。

髪はまだ完全に乾ききっていないが、それを気にする余裕なんて誰にもなかった。

「エヴァ4号機と第二支部が消滅って、どういうこと？」

まず、努めて冷静にミサトは情報の詳細をリッコに尋ねる。

「言葉通りの意味よ。完全に消えたわ。ついさっきね」

淡々とした報告だったが、それゆえに事の重大さを思い知らされる。

エヴァを失うのはそれ即ち使徒迎撃の駒が失われることを意味する。

さらにそれだけではなく、第二支部もろとも巻き込んだ。

当然そこにいた職員は死亡。

周辺地域にも壊滅的な被害が出たことは容易に想像できる。

直接関わったわけではないものの、ネルフが一般人を巻き込んで大災害を引き起こしたというのはあまりに後味が悪すぎる。

「Tプラス十。グラウンドゼロのデータです」

そう言いながらシゲルが手元のタブレットをささっとスワイプし

た。

すると招集された職員たちが囲むデスクの中心に、事故の瞬間の生データを三次元映像化したものが表示される。

円形の平面から、突如荒波のように激しい凹凸が浮かび上がって同心円状に広がっていく様子が映されている。

「……酷いわね」

「A. Tフィールドの崩壊が衛星から確認できますが、詳細は不明です」

マコトの追加報告が入る。

「やはり4号機が爆心か……うちのエヴァ、大丈夫でしょうね？」

ミサトはそう厳しくE計画責任者に問いかけた。

ネルフ本部でこれの二の舞になってはならない。人類絶滅の理由が、自ら開発した兵器の大爆発だなんて馬鹿げた理由は絶対に許されない。

しかしこれに答えたのはマヤだった。

クリップボードをぎゅつと胸元に抱きながら、少し強気に返そうとする。

「4号機は……！」

それ以上続きが語られることはなく、リツコが強引に横槍を入れた。

「エヴァ4号機は、稼働時間問題を解決する、新型内蔵型のテストベツトだった……らしいわ」

断定しない曖昧な表現にミサトは片眉を吊り上げる。

「らしい……？ もしかしてあなたも知らなかったの？」

「まあね。北米ネルフの開発状況は私にあまり開示されてなかったのよ」

「なによそれ」

エヴァに関して一番知識のある人間と問われると、誰もが脊髄反射で名を呼ぶほどの権威のある科学者に満足に情報を与えずにほぼ独自に研究を行っていた。

ミサトの中では疑問が尽きなかった。

間違いなくリツコの介入……少なくとも適度にアドバイスや指摘を挟むべきだ。それを無視してまでする理由が果たしてどこにあるのだろうか。

先のバチカン条約やら、国同士の水面下の利権争い。何事も上手くいかないわね、と難しい顔をする。

「知っているのは……」

そうぼつりと言葉を漏らしながら顔を上げ、ある人物を思い浮かべる。

あの人ならきつと何かを……もしかすると事のあらましをすべて把握しているかもしれないと静かに瞼を下ろした。

◇

静かな司令室。

発令所では第一種戦闘配置が指示されたような慌ただしさだが、ここは違う。

この空間に存在するあらゆるものが、司令室そのものが孕む異質さに、無用意に音を発することができない。

冬月はびしつと直立姿勢を保ったまま、作戦部から提出された事故のデータを確認しながら口を開いた。

「エヴァ4号機。次世代型開発データ取得が目的の実験機だ。何が起こってもおかしくない。しかし……」

司令席に座り、机にいつものポーズで肘をつくゲンドウにちりりと目をやる。

ゲンドウは微動だにせず、静かに報告に耳を傾けている。

無駄なことか、と冬月は思った。

こんな報告はただの格好に過ぎない。

確認でしかない。

しかしこれも冬月の仕事。

少し渴いた唇のまま、報告を続ける。

◇

低い唸り音の響く、配線が複雑に繋がれているコンピュータールームのバックヤード。

自前のパソコンとUSB接続して秘密裏に情報を探っていた加持は、腰を低く落として胸ポケットからたばこを一本取り出した。ジッポで火を点け、ゆっくり、ゆっくりとタバコの煙を吸い込む。身体の中が灰色の空気に満たされ、循環し、落ち着きを得る。たばこを指で挟んで一旦口元から離し、白い煙を吐き出す。それは瞬く間に循環用のファンにとぐろを巻いて吸い込まれてしまった。

そして、ぽつりと呟く。

「本当に事故なのか……？」



米国ネルフ第一支部から、十字柱に磔にされた黒の巨人が姿を現す。

柱に何本ものワイヤーがぴんと張り、大型輸送機のエンジンを噴出す轟音とともに垂直になる。やがて宙に浮きあがった巨人——エヴァ3号機。

起動はしておらず、静かに佇んではいるものの、その異様な光景は壮観である。

まるで、処刑場へ輸送される罪人のよう。

問題がないことを確認したパイロットは、管制塔に報告して輸送を開始する。

目的地は第三新東京市ではなくネルフ松代基地。

なんでも、そこで起動実験を行うそうだ。

零号機は本部内で行ったというのにこの扱いの差はいったい何か。一度は失敗したものの、それでも再起動実験は同じ場所で行ったという。

明らかにおかしい。別の場所に設備や人員をわざわざ移動させるのは無駄なコストがかかるだけだ。そしてそのコストも決して低くない。

何か……何かあるのでは……？

秘密裏に進行している、何か。

パイロットはそんな疑問を、霧を払いようにかぶりを振った。与え

られた仕事は、3号機を無事に松代に届けること。

それ以外考える必要はない。給料はそれなりに高いし、世界を守る一端を担っているのだ、誇りらしき誇りも持っているつもりである。レーダーが前方に暗雲を観測する。

肉眼でも確認できるほどの黒く大きな雲が奥の方に遠く広がっている。

それに雷が時折光っているのも見える。

出発前から気象レーダーでこれの存在は認識している。

少し揺れるだろうが、輸送に問題はない。それに上からも必ず届けるよう念を押されている。

同乗しているスタッフたちに機内放送で注意を呼び掛けたパイロットは、前進を続けるのだった。

◆ 「おばちゃん！ これ三つや！」

そう気前よく鈴原くんが指をさしたのは、サイダー味の棒アイスだ。

中学校の近くにこんな店があるとは知らなかった。

私と鈴原くんと相田くんが放課後にやってきたのは、民家と一体になった駄菓子屋だ。

鈴原くんがもう一度「おばちゃん！ これ三つ欲しいんやけどー！」と声を張ると、奥の方から「はあ〜い」と間延びした返事が返ってきて、老齢のおばあさんがテレビのリモコンを持ったままレジに立った。

絶対テレビ観てて気づかなかったな……と私たちは内心で確信する。

チャリン、と小銭をぴったりトレイに落とした鈴原くんは棒アイスを私たちに配った。

「ありがとう〜」

「おう！ 当たりやったらええな！」

店を後にして帰路につく。

ひぐらしの鳴く夕暮れ。

赤く彩られた街の景色を眺めながら、私はアイスの袋を破って中身を引つ張り出した。

その辺のスーパーにもよく売られている普通の水色の棒アイスだ。「まさか、碇がついてきてくれるとは思わなかったよ」

ふと、私の隣を歩く相田くんが調子のいい声で言った。

「だからヒカリは呼ばなかったんだね。買い食いするなんて聞いてたら、私だつてついて来なかったよ、たぶん」

下校しようとしていた私にふたりが声をかけてきたのが事の始まり。

怪しさが半端なかったが、別に悪意があるわけではなさそうだったから渋々オーケーしたら、こうなった。

買い食いは学校で禁止されてはいないものの、ヒカリはあまりいい顔をしない。ヒカリほどではないが、どちらかという私も否定的な方だ。

なんだか不良がするような印象を抱いていて、どうも好意的に受け止められない。

「騙したのは悪いと思ってるけど、なんだかんだ碇も楽しそうにしてるじゃないか」

「え？ 私そんな顔してた？」

「ああ」

ぺろりと舌でアイスの端を舐めれば、ひんやり冷たい。

暑さと徒歩とで少しばかり疲弊していた私の身体がみるみる癒やされていくのが感覚的にわかった。

「でもどうして鈴原くんはアイス奢ってくれたの？」

「ん？ ああ、せやな。えっーとやな……」

前を歩いていた鈴原くんは私の質問に歯切れの悪い返事を返す。

そして誤魔化すようにガリツとアイスに齧りつく。

「妹の調子が良くなったって素直に言えばいいのにな」

「え？」

「何を言うとなんのやケンスケ！ 余計なこと言わんでええんじや！

あほ！」

照れ隠しに罵倒した鈴原くんは、さらに私たちから前へと足早に歩く。

私たち三人の接点は、間違いなく妹さんの怪我だ。あまりいい出会い方とは言えないが、それでも今ではこんなにも良くしてもらっている。

まだ一度も顔を合わせたことすらない相手。

お見舞いに行くべきなのか、否か。

正直怖いという気持ち強い。大怪我をさせた張本人と会うなんて、そう簡単には思えないだろう。

ぶらぶらと歩いているうちに、私たちは流れるように山方面の階段を登っていた。

着いたのは、ちよつとした大きな倉庫。長年放置されていたせいか、遠目で見ても廃れているのがよくわかる。

錆びついて穴も空き、もはや意味のなくなったフェンスを潜ろうとするふたりを私は呼び止める。

「ちよ、ちよつと……こういうのは駄目なんじゃない……？」

「大丈夫やセンセ。ここはいろんな奴の溜まり場になってな。それにこういうのも楽しいやろ？」

にかつと白い歯を見せつける関西弁の男子はそう言うのと慣れた動きでフェンスを潜り抜けて中に入った。

それに相田くんも猫のようにするりと続く。

「ええ……」

「ほら、礎も」

フェンスの切れ端を持ち上げて穴を広げてまでくると、どうも断りづらい。

ミサトさん、ごめんなさい……！ と心の中で十回ほど頭を下げて、制服に引っかからないように細心の注意を払いながら私も穴を潜った。

倉庫と言っても、手前側にバスケのグラウンドが広がり、その奥に倉庫があるという構図だ。

どこに転がっていたのかわからないバスケのボールを拾ってきた

鈴原くんが、アイスを口に咥えながら遊び始める。

私と相田くんは奥へと進み、段差に座り込んでアイスを食べる。

どうやらここは本当に駄弁るためだけの場所のようで、シャッターの降ろされている壁側には色々物放置されていた。主に漫画や雑誌で、俗に言うエロ本なるものも混じっているのが見えた。

瞬間、私は記憶を消し去って見なかったことにして、勢いよく頭を振って前に向き直った。

その様子を一から全て見ていた相田くんは苦笑混じりに肩をすくめた。

そして口を開いて何かを発する前に私は低い声で言い聞かせた。

「私は何も見てない。相田くんも何も見てない。わかった？」

じろりと睨みつけると、相田くんは白い顔をしながら何度も首を縦に振った。

「そ、そうだな。碇の言うとおりだな。俺たちは互いに何も見ていない。うんうん」

「ん、よろしい」

ボールをバウンドさせるリズムカルな音が聞こえる。

バスケットについて私はよく知らないが、鈴原くんの動きが初心者のものではないというのを見ていてわかる。

ぼんやりと遊んでいる様子を眺めているとこちらに気づいたようで、手を振って声をかけてきた。

「お前らもやらへんかー？」

「いや、私はやめとくー」

「俺もパス。あまり汗はかきたくないからなー」

「ちえっ」

つれへんなあ、と呟いてアイスを齧る。

体操服を着ていたら考えたかもしれないが、さすがに制服のまま運動はしたくない。

それに汚れるし。

「ところで……碇は時間、大丈夫なのか？」

「ん？」

「いやほら、いつもだいたい放課後はネルフに行ってるからさ」
「ああ、そのことね」

私は今朝ミサトさんに言われたことを思い出しながら答えた。
「大丈夫だよ。最近ミサトさんたち忙しいっぽいから、あんまり私たちに割く時間がないらしくて。だから今日はオフなんだー」

私とアスカに難しい顔をしながら事情を説明していたから、あまり簡単な事情ではなさそうさだ。

どうやらしばらくこの状況が続くようで、ひとりでゆっくりする時間が取れると私は喜んでいった。

「それって、3号機が日本に来るからじゃないのか？」

「3号機……？」

完全に初耳な単語に、オウム返しをする。

私は弐号機までしか知らないのだが。

「あれ？ 知らないのか？ いきなり起動実験込みで、米国から押し付けられたって噂だ。ま、末端の搭乗者には知らなくていい情報なんだろう？ なあ、誰が乗るのかなあ？」

ぐいぐいと私に顔を近づける相田くんの顔は、完全にスイッチの入った軍オタのそれだ。

身体を遠ざけながら、私は牽制した。

「知らないよ……そもそもそんなこと聞いてないし」

しかし諦めんとばかりに食い下がってくる。

「いいなあパイロット！ 俺にしてくんないかなあ！」

「私に言われてもねえ……ミサトさんに頼んでみるとか……？」

私自身もよくわからないまま当たり障りのないことを言う。

相田くんはなるほど！ と至って真面目な顔をする。

パイロットの選出について一切知らないし、別に知ろうとも思っていない。結局私はお父さんが司令官だからという理由だけで選ばれたナナヒカリなのだから。

アイスはすでに食べ終え、私と相田くんはハズレだった。

「トウジ、そろそろ帰ろうぜ」

「おう、せやな」

最後の一口を大きく齧りついた鈴原くんが棒とにらめっこをして、「ちっ、ハズレかいな」

と毒づいた。

◆ 同時刻、ネルフ直上施設を眺める少女がいた。

先日、日本に不法入国を果たしたエヴァ仮設5号機のパイロット。整然と並ぶ集光ビルの受け止める光は赤白く輝いていて、一際強い存在感を放っている。

少女は鳥が大群をなして空を飛んでいるのを無言で見ている。

◆ ……自分の目的のために、大人を巻き込むのは気が引ける。

黒より黒く。

闇を呑む闇。

静かに現れた巨大なモノリスたちがゲンドウを囲むように現れる。ここはゼーレとの会議場。実際にこれらのモノリスがここに存在しているのではなく、あきまでプログラムで出力されているに過ぎない。

重々しい雰囲気には包まれ、ゲンドウはゼーレのモノリスたちが語り始めるのを待つ。

「――先に、エヴァンゲリオン5号機が失われ、今、同4号機も失われた」

ゼーレの長の威厳に満ちた発言から始まる。

「両機の損失は、計画の遂行に支障をきたしますが」

ゲンドウが苦言を差し込むが。

「修正の範囲内だ。問題はなからう」

と別の構成員に一蹴される。

「エヴァ3号機は米国政府が是非にと君に差し出した。君の国の政府も協力的だ」

「最新鋭機だ、主戦力に足るだろう」

「使徒殲滅は現在も遂行中です。試験前の機体は信用に足りません。零号機修復の追加補正予算を承認頂ければ」

要求を示すがこれも――。

「試作品の役割は終わりつつある。必要あるまい」

軽くあしらわれる。

「左様。優先すべき事柄は他にある」

「我らの望む真のエヴァンゲリオン。その誕生とリリースの復活をもって契約の時となる。それまでに必要な儀式は執り行わねばならん。人類補完計画のために」

「……わかっております。すべてはゼーレのシナリオ通りに」

そうゲンドウが低く告げると、モリスたちは姿を消した。暗転していた会議場はブルースクリーンに戻り、先程までは写り込んでいなかった冬月が姿を見せる。

「……真のエヴァンゲリオン。その完成までの露払いが、初号機を含む現機体の勤めというわけだ」

考えを巡らせるゲンドウに冬月が口を開く。

「それがあのMark. 6なのか？ 偽りの神ではなく、ついに本物の神をつくろうというわけか」

月面基地で建造中だった新たなエヴァンゲリオン。

こここそと隠れるようにしていると、裏があると考えるべきだ。

人類補完計画。

人を捨て、新たな生命体へと生まれ変わる究極の儀式。

あの式号機ですら本命のエヴァンゲリオンではない。

「……ああ。初号機の覚醒を急がねばならん」

「そのためのあのふたり、か」



3号機受け入れの準備は進む。

そのフローチャートの一部としてある処理が実行された。

「なんで私の式号機が封印されちゃうのよー！」

不満を顕わにするアスカはマヤとリツコにそう叫んだ。

背後ではコアユニットが取り外され、エヴァンゲリオン封印格納地下式サイロ（IPEA管轄区域）へと拘束された式号機がクレーンで

下ろされていく。

地面では分厚い鉄製のゲートが開かれ、式号機をゆっくり呑み込んでいく。

「バチカン条約。知ってるでしょ。3号機との引き換え条件なの」

リツコが説得しようとするが、アスカの怒りはまるで収まらない。

「修理中の零号機にすればいいじゃない！」

「式号機のパスは今でもユーロが保有しているの。私達にはどうにもできないのよ」

努めて落ち着かせようと具体的にマヤが説明を付け加える。

一国のエヴァ保有数を三体まで制限されている弊害がここに現れてしまった。

アスカがエヴァに乗って経験した実戦はたった二回。対してレイとカノンはその倍に匹敵する。

だからこそ、ふたりに引けを取らないほど……いや、独壇場になるくらい戦績をあげてやろうと意気込んでいた。

のに。

「現在はパイロットも白紙。ユーロから再通知があるまでは大人しくしてなさい」

両の拳に力が入る。血が流れる寸前まで爪が皮に深く食い込む。

抑えきれない怒りはすぐにでも爆発しそうだった。

しかしそんなことをしても意味はない。

すでにパイロットでなくなった少女が痙攣を起こしたところで、何も変わらないことはわかりきっている。

規律と理性を重んじる空軍に所属していたからこそ、アスカは自己を落ち着かせることができた。

しかし、どうしても納得はしきれなかった。

「……私以外、誰も乗れないのに」

アスカが伏せ目がちにそう言うが、リツコは冷徹に返した。

「エヴァは実戦兵器よ。全てにバックアップが用意されているわ。操縦者も含めてね」

「……………」

ぐうの音も出ない。

リッコの方が一枚も二枚も上手だ。

世界を守る仕事に失敗は許されない。あらゆる状況に対応できるように予備を用意するのは当たり前だ。聞けば、カノンも初めはレイの予備として父に呼ばれたという。

深い地下に格納されていく式号機を目で追いかける。特徴的な角までも完全に見えなくなるまで見届けたアスカは、

「そんな……私の世界で唯一の居場所なのに」

と悲痛な呟きを漏らした。

その後必要な事務処理を済ませたアスカは、どすどすと大きく足音を踏み鳴らしながらロッカーに向かうべくエレベーターの前に立った。

帰る。もう帰る。

今すぐにも帰りた。

帰って、枕に向かって喉が枯れるほど叫びたい。

そんな気分だった。

急ぐアスカとは裏腹に、のんびりとした速度でエレベーターがアスカのいる階まで降りてきた。

チーン、と軽快な音が鳴り、ホームドアが開く。

「……！」

アスカは中にいた人物に目を見開くが、すぐさま表情を強張らせてずかずかと中へ足を踏み入れた。

ふたりに乗せたエレベーターは緩やかにホームドアを閉め、下降を始める。

アスカはカゴ室の後ろで、腕を組みながら壁にもたれかかる。

同乗者——綾波レイはドアの前で直立不動状態だ。

「……………」

「……………」

何も語る必要なんてない。

ロッカーのある階まで降りて、荷物を回収してそのまま帰る。

しばらくの間ネルフに来ることはなくなる。しかしいけ好かない

レイと顔を合わせるのが学校だけになると思うと清々する。

とはいえ先日渡された食事は例外だが。

だから、レイの方から何の前触れもなしに突然話をし始めたのには驚きだった。

「……エヴァは自分の心の鏡」

跳ねるように壁から背を離れたアスカは即座に反応した。

「なんですって!」

レイはこちらを振り向くこともせず淡々と言葉を続ける。

「エヴァに頼らなくていい。あなたには、エヴァに乗らない幸せがある」

まるで皮肉のような物言いはアスカの逆鱗に触れた。

「偉そうなこと言わないで! エコヒイキの癖に! 私が天才だったから、自分の力でパイロットに選ばれたのよ! コネで乗ってるあんたたちとは違うの!」

胸に手を当てて思い出すのは血反吐を吐くような努力の日々。

挫けそうになっても誰も手を貸してはくれない。己を鼓舞し、褒め、ここまで戦い抜いた。

勝ち取った名誉。アスカが堂々と誇れる功績。

「私は繋がっているだけ。エヴァでしか、人と繋がれないだけ」

「うるさいッ! あんた碇司令の言う事は何でも聞く、おすまし人形だからひいきされてるだけでしょ!」

喚き散らすアスカに物怖じせずレイは否定の言葉を投げつけた。

「……私は人形じゃない」

その一言は、アスカのすでに突破しそうだった怒りのゲージを一気に吹き飛ばすのに十分すぎた。

カツと頭に血が上る。

「人形よ! 少しは自分を知りなさいよ……!!」

激昂したアスカは衝動のままに手を振りかざした。

不愉快。

不愉快!

不愉快……!!

しかしその一発が甲高い音を鳴らすことはなかった。

「……！」

既のところどころを振り向いたレイがぼしつ、とアスカのピンタを左手で受け止めたのだ。

アスカが驚いたのはそれだけではない。

レイの左手には大量に貼られた絆創膏。

それで気づかないアスカではない。レイに数日前に食事会の招待状を受け取ったから、これが何の怪我であるかなど考えるまでもなかった。

それになにより……。

「……ッ」

自分の左手はせいぜい二枚程度の絆創膏。

自分より、たくさん努力している。

敗北。

あの人形に、敗北。

耐え難い屈辱だった。

アスカは俯き、顔を歪める。

「ふん……人形の癖に生意気ね」

そして醜い自分に嫌気がさす。

エレベーターが目的の階に着いた。

ホームドアが開き、アスカは入ってきたときと変わらない態度でずかずかとカゴ室から出る。

どうやらレイはまだ降りないようだ。

いったいどこに行くのかはアスカの知るところではない。

……が、一瞬だけ足を止めたアスカはドアに寄りかかって開閉を阻害する。

「……」つだけ訊くわ。あのもやしをどう思ってるの？」

レイはきよとんとした顔で返す。

「もやし……？」

「もやしと言えばカノンのことでしょ！」

「碓さん？」

「どうなの?」

数秒ほど考える素振りを見せて、返ってきた返答は、

「……よく、わからない」

だった。

「これだから日本人は! ハッキリしなさいよ!」

「……わからない」

伏せ目になったレイはカノンへの想いを表現するために懸命に言葉を探す。探しながら、口にする。

「ただ、碓さんといるとポカポカする。私も……碓さんにポカポカしてほしい。碓司令と仲良くなって、ポカポカしてほしいと……思ってる」

これが、口下手なレイにできる精一杯の表現だった。

「……わかった」

「それに……」

「まだあんの?」

「大切なこと教えてもらった。生きているふりをするのをやめる……だから私は、人形じゃなくなった」

「あっそう」

と無愛想に相槌を打つとかぶりを振り、長髪を靡かせてアスカは去った。

ドアは閉まり、レイを乗せてさらに下降していく。

怒りは収まらないが、透かしを食らったような気分だった。

相変わらず屹然と歩きながらアスカはひとり愚痴を漏らした。

「ほんっと、つくづくウルトラ馬鹿ね! それって、好きってことじゃん!」

◆

「くああ〜! 終わったあ〜!」

ペンペンのような声を出した私は、終わらせた宿題から一秒でも早く遠ざかるために後ろに倒れ込んで床に寝転ぶ。

ふたりと遊んでいたこともあって、宿題に取り組み始めるのが遅くなってしまった。

上半身を起こし、ノートを閉じて机の箸に追いやる。そしてコップに残っていたホットココアを飲み干す。中身は結構時間が経っているからすでに冷えている。

このまま予習に移行できればなお良しなのだが、どうもそんな気分にはなれなかった。

というのも――。

「楽しみだなあ、食事会」

つい先日綾波さんに手渡された封筒を手に取り、中の手紙を読む。

もうこれで十回ほどになるが、綾波さんの書く文字はキレイで、私なんかより女の子らしい。

「でも綾波さんの料理って大丈夫かな？」

練習しているのは知っているし、日に日に手の傷が増えているのも知っている。

でもその成果……料理を私は一度も口にしていない。

不安は尽きないが、そこで私があればこれ口を出すのは違うだろう。

人とあまり関わろうとしない綾波さんが勇気を出して誘ってくれたのだ。自分の力で成功させたいと考えているはずだから、まさに余計なお世話というものだ。

頬杖をつきながら上の空になった私は、ぽつりと不意に思ったことを口から溢した。

「……お父さんも来てくれたら嬉しいな」

もしかしたら。

もしかしたら、お父さんとの距離を詰められるかもしれない。お父さんを知ることができるかもしれない。

そんな微かな期待を抱きながら。

半端者の罪

新しいシステムが初号機に導入されると聞いたミサトは、仕事の手を休めてケイジへ移動し、その着作業を静かに見届けることにした。

新システムの名はダミープラグというらしい。

形状は普通のエントリープラグと酷似しているが、ダミーシステムのロゴマークが離れた位置からでもよく見えるほど自己を主張している。

そのすぐ脇では、ヘルメットを被った冬月とゲンドウが経過を見守っている。

初号機の射出愚痴にゆつくりと挿入されていく様を少し高い足場から見下ろしながら、ミサトは低く呟いた。

「あれがダミープラグ……」

「あくまでパイロット補助との名目ですが、単独での自立制御だけでなく、無人でのA・Tフィールドの発生まで可能。子供に操縦させるよりは人道的だそうです」

すらすらとコメントしたのは、ミサトの視察に随伴していたマコトだ。

マコトを含め、ミサトたちにダミーシステムの詳細は知らされていない。

今聞かされたこと以上のことは何も知らない。技術的な分野であることは間違いなさそうだから、こういうのはリツコに聞けば一発だ。

しかしながらリツコも「守秘義務があるの」と一点張り。

何か裏があるのではどうしても勘ぐってしまう。

ミサトだってネルフが完全にホワイトな組織であるとは到底思っていない。それこそ、表の世界には決して出てこない情報があることを知っている。

——人類補完計画。

不気味な響きであることは否めない。

間違いなくネルフは裏で何かを画策しているが、まだ尻尾どころか情報の切れ端すら見つからない。

とはいえ今はダミープラグの件だ。

無人状態でエヴァを動かせるのなら、それはとても素晴らしいことだ。カノンたちパイロットを危険から遠ざけることができる。

子供が世界を背負って戦うのはいくらなんでも荷が重すぎる。その負担を少しでも軽減できるのであれば、反対する必要はない。

いきなり実戦に運用するわけにはいかないから、試験運用を兼ねての導入といったところか。

だからこそ、ダミープラグの全情報は最低でもミサトにも共有されてしかるべきではないのか。作戦立案にも大きく関わる事が予想される。

それに……。

そのダミープラグには、誰のパーソナルデータが保存されている？

それを明かさないと、やはり疑心は晴れない。

眉を潜めるミサトとは裏腹に、ふたりの男は深く頷く。

同時にダミープラグは問題なく初号機に挿入され、アウンスと共に動作チェックが始まるのだった。

特にこれといった異常が発生することもなく、比較的スムーズに作業は完了した。

腑に落ちないまま自分の職務に戻ったミサトは、落ち着かないながらもなんとか仕事を終わらせた。

時間はすっかり夜で、やや眠気もある。

帰って風呂に入って、美味しいカノンの晩御飯にありつきたい。そしてビールを喉に流し込み、生を実感したい。

それを考えるだけでもミサトの気分は高揚した。

休憩所のベンチに腰かけ、深いため息を吐く。

ピロン、と鳴ったスマホの通知音に気づき、その内容を見る。

『今日は晩ごはんいりますか？』

とカノンからのメッセージだった。

近頃は3号機搬入準備の件もあり、ネルフにあまり来ていないか

ら、両者の間にはどうしても時差のようなものは発生してしまう。
脊髄反射で『よろぴく!』と返信しようとした、まさにその瞬間、背筋にぞわぞわとした感覚が走った。

本能のままに飛び上がり、距離を取る。

軍人の反射速度で、振り抜きざまにいつでも攻撃できるわよと牽制を込めて拳を向けると――。

「おいおい、そんな物騒なことしないでくれよ。俺とお前の仲だろ?」
「ぬあにがあんたとの仲よ! それになにこっさり私の後ろに立ってんのよ! 寒気がしたわっ!」

両の眉を吊り上げながらミサトは今さっきまで背後に立っていた男――加持に向けて罵声を浴びせた。

しかし加持はどこ吹く風。

やれやれと言わんばかりに肩をすくめたあと、こちらに背を向けて自動販売機で缶コーヒーを買った。

「ほれ、お疲れさん」

急にコーヒーを投げ渡されたミサトは、拒否することなんてできるはずもなくキャッチする。

「俺も最近は暇だな。どうだ? 久しぶりに俺たちだけで飲みに行かないか?」

「嫌」

「本当は?」

「嫌」

「そ、そんなに嫌なのか?」

「ここまできつぱり断られるとは思っていなかったのか、いつもの余裕そうな顔が苦笑いを浮かべる。

「ええ。あんたとカノンちゃんの料理とじゃ天秤にかける必要すらないわ」

「すっかり手懐けられたなあ」

「それは……否定できないわ。だって美味しいし」

「確かに毎日三食お世話になってたら染まるわな」

いつか弁当お願いしようかな、なんて呟いた加持は表情を改めた。

「たまにはジャンクなやつ食おうぜ。それに……ここ最近は特に物騒だ。色々溜め込んでるんじゃないのか？」

「言い方！」

デリカシーのまるでない物言いにキツ！ と鋭い目つきで睨みつけるが、加持は臆することなくミサトの懐に潜り込んでくる。

「少し真面目な話……あの新システム、お前はよく思っていないだろ」
「……………」

目元を僅かに逸しながら喉を鳴らす。

加持は裏で様々な活動をしていると聞いているが、その実態はミサトですら全容を把握しきれていない。

掴みどころのない、蜘蛛のような男。

色々と独自に行動していると聞くし、以前カノンたちを招待した社会科見学だつてそうだ。

もしかしたら何か有用な情報を持っている可能性はあり得る。

カノンの手料理と加持の誘いを、ミサトは重い腰を上げながら天秤にかける。

十数秒ほど深く考え込んだミサトは、泣く泣くカノンに返信したのだった。

「俺を取ってくれたのか。嬉しいな」

「普通なら息をするように拒否つてたわよ、馬鹿」

げっそりとするミサトとは対照的に、満足げな笑みを浮かべる加持。

タイムカードを切り、ネルフが出る。

そして連れてこられたのは特に変哲のない普通の居酒屋だった。

中に入れば、ミサトたちと同じように仕事終わりの大人や少し背伸びした大学生たちが楽しそうに酒を飲んでた。

賑やかで騒がしい空気が妙に懐かしく感じてしまう反面、こんな場所ですら話し込んで問題は無いのかという不安はある。

店員に案内されるがままにテーブル席についたふたりは、とりあえず生を注文した。

メニュー表を見て、あれよこれよと追加で肉メインを注文し始める

ミサトをなだめ、加持は野菜も適度に注文する。

まずはじめに運ばれてきた生のグラスを掲げ、ミサトは一気飲みをする。

その飲みっぷりたるや、加持も感嘆の息を漏らすほどである。

「ぶつは——！　くううううッ！」とグラスを机に叩きつけてそう食いしばった歯の隙間から溢れる悦びの叫びはまさにおっさんのそれだ。

「おいおい、まさか家でもそんななのか？」

運ばれてきた鶏の串を食べながら加持は訊いた。

「んーそうねえ……家は自分を解放できる唯一の場だから」

「子供もいるんだ、少しは自重しろよ？」

「それくらいわかってるわよ」

とは言いつつこれまでの記憶を掘り起こすミサトだが、自重どころか夕食の前後は完全に酔っ払いになっていて記憶しか思い当たらず、内心で冷や汗をかく。

しかしビールは至高の飲み物であり、これを欠いては一日を終えることのできない、言わば日課のようなもの。

「葛城がちゃんと子供たちの面倒を見れているのか、俺はちよつと心配だぞ」

ミサトとは対照的に、ちまちまとビールを飲む加持は憂いの感情を交えた声で呟く。

思わずうつ、と身を強張らせる。思い当たる節がありすぎて、逆に自分が健全である証拠が何一つ思い浮かばないのだ。

実質的に家を牛耳っているのはカノンだし、最近では家計簿も大半は任せきりになってしまっている。

アスカはわがままお姫様で、未だに引越時の荷物が全て片付いていない。さらに隙あらばこちらの部屋に置こうとしてくる。

ちなみにカノンは初日から甚大な被害を受けている。気を抜くと物置部屋にされるから要注意だ。

「問題あるわけないでしょう。仮にも女三人。これだけいれば女子力は三百パーセント超えよ」

「……それはカノンちゃんだけで三百じゃないのか？」

「……………もちろん合わせてよ」

「ナルホドナー」

したり顔で野菜をつつく加持の顔は楽しそうだ。

生の二杯目もぺろりと飲み干したミサトは豪快にコロツケにありついた。

とても油っこくて、だからこそ美味しい。

中はふわつとしていながらほくほくで、しっかり味を堪能してから呑み込む。

するとシーソーのように食を満たしたら飲み物に飢えてしまう。

三杯目のビールを飲んだミサトの顔はやや紅潮し、酔いが回り始めているようだ。

へらへらと大人しく笑い始め、机につつぶす。

「飲み過ぎたら明日に響くぞ」

「大丈夫よ……私、酒には強いから……そんなことよりも……」

重たげに頭を持ち上げたミサトは、一口飲んだかと思うと勢いよく向かいに座る加持の眼前に身を乗り出して愚痴った。

「あのダミーシステムってやつ、なんかいけすないんだけどおっ！」

「ゴルゴダベースからの厳封直送品だからな。得体は知らないままだ」

落ち着けとゆっくり宥めながら加持は酒をちびちびと飲む。

すでにこの居酒屋はこの組織の息がかかっていることは把握済み。ついでに尾行もされていないことはわかっている。

「そんな危なっかしいものにエヴァを預けるなんて、気がしれないわ！」

「人間だからあのエヴァを任せるってことか？ 信用されているな、カノンちゃんは。いや、カノンちゃんだからこそか」

もちろんエヴァに乗せられるのはネルフによって完全に情報を掌握し、その上で問題ないと判断されなければならない。それに、戦闘スキルやシンク口率などといった他の要因も強く絡んでくる。もちろんスパイでないことも。

そう考えると、カノンは三人の中で最もエヴァのパイロットに向いていない少女だ。

ずっと前からエヴァに乗るために訓練を積んできたレイやアスカとは違う、親のコネとしか思えない登用。

ぽつと出。

事実、シンクロ率はふたりに比べるとやや劣る。

戦闘訓練のおかげで最近形になってきたが、それでもまだまだ。

正直なところ、エヴァに乗らないでいたほうがよっぽど平穏な毎日を送れたと思われる。それがカノンにとっていいことなのかは考慮しないとして。

しかしながらいざ戦闘となれば、隠された潜在能力のようなものを発揮して果敢に使徒に挑む。

極度の緊張や恐怖から離人感に似た感覚に陥ることで、ある種の幼児的万能感に目覚めるのだとMAGIは推測している。

「それより、ゼーレとかいううちの上層組織の情報、もらえないかしら」

少しだけ真面目な表情になったりミストは、加持の気怠気な瞳を見つめながら求める。

微動だにせず返事を待つミストに、机に片肘をつきながらトーンを落として優しく諭す。

「例の計画について知りたいのなら、止めておけ」

「人類補完計画……ネルフは裏で何をしようとしているの？」

ミストとてただ上から与えられる司令のみをこなす人間ではない。

自分で考え、行動した結果がその計画の名前だ。

「それは……俺も知りたいところさ」

つまみをひと齧りする加持の様子はなんだかつまらなさそうだ。

望んでいた情報は得られなかった。

がつくしと肩を落としたミストは乗り上げた身体をゆっくりと元に戻す。

「ちよつとくらいはわかっていたが、久しぶりの食事だつてのに仕事の話ばっかじゃないか。そういうのはちよろつとだけにしてだらだ

ら話したかったのに」

色々溜め込んでるんじゃないのか？　なんて語弊しか生まない言い方をしたくせに、どうやらミサトの口ぶりは想像以上だったらしい。

「学生時代とは違うわよ。色んなことを知ってしまったし、背負ってしまった」

「お互い、自分のことだけ考えるわけにはいかないか」

「カノンちゃんたちはもっと大きなものを背負わされてるし」

「……そうだな。子供が背負うには確かに重すぎる。だが俺達はそこに頼るしかない」

現状、エヴァに乗れるのは心の未成熟な子供のみ。

大人が乗ればカノンたちはあれほど大きいものを背負わずに済むというのに。

世の中、すべての事象が良い方向に向かうわけではないことは重々承知している。

しかしながら、せめてこれだけはどうかになってほしかった。

ただ、悔しい。

そして情けない。

静かになったふたりは、無言で酒を胃に流し込む。

キラキラと天井の照明を反射して輝くグラスはまるであてつけのようだ。

直後、ミサトのスマホから電話の呼び出し音が響いた。

重そうに身体を持ち上げたミサトは紅潮した顔のまま電話に出る。

「はい……ええ、わかってるわ。日付変更までには結論出すわよ」

それだけで何の話で、誰と話していたのかを看破した加持は、ほんの数秒に満たなかった電話を終えたところで問うた。

「リッチちゃんか……3号機テストパイロットの件だな？」

「まあね。ホント、嫌な催促よ」

そして大きなため息を一つ。

「幸せが逃げたぞ」なんてツツコミを入れてやろうと思ったが、既のところまで気が削がれてしまった。

酔いの感覚が薄らぐのを感じながら、加持は静かに食事をつまむ。ミサトもそれにつれられて黙々と食べ始める。

すっかり重くなってしまうた空気を吹き飛ばす何か欲しかったが、どうもすぐには思いつかなかった。

「人選は君の責任だからな。検討はついてるのか？」

「ある程度は。でも3号機到着の予定がずれちゃって……」

話によると、輸送中に巨大な雷雲にのまれたせいで飛行に遅れが生じたようだ。

仕方ないといえば仕方ないのだが、ずれ込んだ先の日程が――。

「よりによってこの日なのよね」



ミサトさんから夕食はいらないと連絡を受けた私は、手慣れた動きでちやかちやかと夕食を用意した。

アスカは部屋に籠もっている。

どういう理屈なのかはわからないが、どうやら2号機が封印されることになったようだ。

そうなれば私は察しの悪い女ではない。

エヴァに生き甲斐を見出していたアスカの落胆ぶりは想像に難くない。

ミサトさんの分だけ除いた料理をテーブルに並べ、箸や小皿なども同様に並べる。

ひよっこりと廊下に首を伸ばした私は「ご飯できたよー!」と少し大きめの声を張ると、アスカの部屋から「んー」と力のない声が聞こえた。

その数十秒後くらいにアスカが部屋から出てきて、大きなあくびを一つしてから卓上の料理を一瞥し、さらにもう一度あくびをしてドカッと椅子に腰を下ろした。

その動きを観察していた私は、アスカがやや不機嫌であることを見抜く。

「ミサトさん、加持さんと飲んで帰ってくるって」

「あつそ」

素っ気ない返事をしたアスカは「いただきます」と礼儀正しく手を合わせて夕食を食べ始める。

まだ箸の使い方はマスターできていないが、以前に比べるとだいぶ上達してきたような気がする。

時折ぎこちない動きになったり、持ち直したりすることはあるが、そこまで酷くはない。

そんな私の微笑ましい観察に気づいたアスカは箸を片手で握りしめ、険しい顔で口を開いた。

「なによ、キモいわね」

私がかぶりを振った。

「ううん。なんでも。ただお箸の使い方が上手くなってきてるなって思ってる」

「当たり前。私を誰だと思ってるのよ」

依然としてムスツとしたアスカを尻目に、私も黙々と箸を動かす。

テレビをつけず、外の音が少しだけ漏れ聞こえている中でやけに大きく心をかき乱すのは、壁にかけて時計の秒針が時を刻む音だ。

「そうだよやし」

不意に何かを思い出したように顔をこちらに向けたアスカは、不機嫌な猫さながらな目つきのまま言った。

「私の生理用品、あげるわ」

「え」

なんで食事中にそんな話をするのかなあ!? というツツコミが喉までせり上がってきたが、なんとか奥底に押し込む。

努めて冷静を保ったまま私は尋ねた。

「なんで？ アスカ、それがないと困るんじゃないの？」

しかしアスカは心底不愉快そうな顔をして言った。

「無理、あれ無理。私には合わないわ。もう新しいやつ買ってあるからあんたにあげる」

生々しい話は食事にリアリティを与える。

そう考えるだけで食欲が下がる。

はやくこの話題を切り上げさせたいと思いつつ私は答える。

「うーん、ごめんアスカ。私はいらなかな」

「なんでよ。……あ、なるほど。あんたはまだ生理来たことないのね。ホントお子様ねえ……」

小馬鹿にするように口の端を吊り上げるのは少し癪に触るが、もうアスカとの生活でだいぶ許容できるようになった。

これがいいのかはまた別の話だが。

「確かに私はまだ生理とか来たことないよ。けど……」

「けどなによ」

食事の手を止めて私を見るアスカ。

「前の前の時かな、その戦いでお腹を怪我して、それで生理とかが来ない身体になっちゃったんだ」

なるべく思い返したくない記憶。

あの戦闘は死ぬほど辛かったし、実際一度心肺停止状態になった。

二度の狙撃でも撃破できなかったところを、私の単騎行動で追撃を加えて撃破。

混乱するミサトさんたち全員を説き伏せて初号機と自分を酷使したことは認めざるを得ないが、あれが間違っているとは思っていない。

払うべくして払った代償として私は受け止めている。

アスカは私を見つめたままだ。

そして不快感を露わにする目元を伏せ、だらんと肩の力を抜く。

「……ふうん、名誉の傷ってやつか」

トーンの落とした生気のない呟きに、私は背筋に冷たいものを感じた。

「アスカ……?」

アスカはテーブルの縁にしなやかな人差し指を押し当て、ゆっくりと這わせる。

視線を指先へ向けたまま、ぼつりと口を開く。

「何? エヴァに乗れなくなった私へのあてつけのつもり?」

「いや、そんなつもりじゃ……!」

どくんと心臓が強く跳ねる。

全身が熱くなり、気道は狭くなる。

私は無意識の内にアスカの逆鱗に触れてしまったようだ。他人の感情の起伏には人一倍敏感な私は、アスカの怒りを肌で感じ取った。下に見ているはずの私から嫌味ではないとしても、そのように言われたらプライドが傷つくことなんて、簡単に予想できたはずだった。

「そうでしょう？ そうじゃないならなんなのよ」

「ご、ごめんアスカ」

「はー、良かったわね。あんたはこれからもエヴァに乗って戦うことができるんだから。戦って受けた傷もさぞ誇り高いんでしょうね」

アスカはあからさまにテーブルに肘をつき、さっと視線を持ち上げる。

目の合った私はつい反射的に逸してしまう。

「やめてよアスカ……」

なんとか宥めようと努めるがまるで効果がない。

むしろ逆で、アスカの責めはエスカレートするばかりだ。

「私はエリートだからエヴァを誰よりも上手く操縦できるの。あんたやえこひいきとは違ってね。だからバカみたいな怪我はしない。あーあ、私がないからあんたたちの負担がもっと増えるかもしれないわねえ？」

責めるアスカの口は非常に饒舌だ。

私は何も反論することができない。方法がわからない。

なぜなら、こういうときはいつも耐え忍んでいたから。何もせずを受け止めて、どこにも発散できずにストレスを溜め込んでからゆっくり分解する。

それが私の処世術。

でも、怖いと言う感情よりも怒りが徐々に膨れ上がっているのを感じた。

胸の内ですべてを孕んで膨張し、爆発しそうだ。

顔が熱くなる。

両の拳を白くなるほど強く握りしめる。

グラスに注がれる水があとほんの少いで溢れそうな感じ。

「お願い……やめて……」

「嫌よ。なんで私が降ろされないといけないのよ！ 私は自分の力だけでエヴァパイロットになったの！ 碇司令のお気に入りはまだなとか飲み込んであげるわ。昔から訓練していたらしいし」

顔を上げたアスカの顔は怒りに震えている。

ダンッ！ とテールを強く叩く。

私を睨みつける眼力は人を殺せそうなほどだった。

ひどく怯えた私の視界は濁り、ぼやける。

我慢できない。やめてほしい。

必死に私は訴えかける。

もう本当に耐えられない。

「でもなんであんたがパイロットになれるのよ！！ 全部が気に食わ

ないわ！ 突然呼ばれて！！ 使徒と戦わされて！！ そりやそうなるで

しよう！ クズでドジでノロマで、へっぴり腰のもやしだからその障

害だって当然よ！」

「——やめてって言ってるじゃん！！」

いつになく大声で、ついに私は喉元までこみ上げていた言葉の塊を

口から爆発させた。

「私は何も間違ったこと言っていないわよ」

「言わないで！ 気づかせないで！ 私のこれは皆を守るために受け

たものって信じさせて！ 私自身に嘘をつかせて！！ そうじゃない

と私、耐えられないの……ッ！」

頭を抱え、俯き、声を荒げる。

ぎゅつと強くまぶたを閉じ、外界をシャットアウトする。

私の子宮機能の喪失は『名誉の傷』でなければならぬ。

それ以上でもそれ以下でもない。そのレッテルを貼ることで、障害

の影響を考えずに済むのだ。

女として大切な機能を捨ててまで戦うのだ。これからもきつと同

じように、何かを捨てながら戦うことになるという漠然とした予感

間違いなくある。

そんな現実を美化するために、私のこれは尊くなければならないの

だ。

そうやって自分を騙し続けないと、悲しくて泣いてしまうから。

「——なんでもやし、あんた、猫被ってたんだ」

「……………」

「皆の前ではいい子ちゃんぶってたけど、本当はどうしようもなく弱っちいのね、全部」

「……私はアスカみたいに強くなんてないよ」

皆を守りたいという気持ちは本物。

これだけは断言できる。

しかしこれは私ひとりでは不可能で、エヴァに乗るからこそできることだ。

だから。

エヴァに乗らない私には何もできない。

エヴァに乗らない私には価値がない。

苦しくても、痛くても頑張った。

その先に新しい私が見つかると思っていたから。

「知ってるわよそんなことくらい。だからあんたはエヴァの操縦が下手くそで、そんなことになったのよ」

「……………」でもアスカのミスを私がカバーした」

蚊の鳴くような声で呟いたそれに、アスカは目に見えて顔の表情を険しいものへと変貌させた。

「なんですって?」

ガタタつ、と荒々しく立ち上がる。

そのままの勢いで私の隣に立ち、胸ぐらを掴み。

私を強引に立ち上がらせた。

「もう一度言ってみなさいよ……………」

私は吐き捨てるように言った。

「アスカひとりじゃあの使徒は倒せなかった。私と綾波さんが頑張ったから、アスカはコアを壊すだけの簡単な役割で済んだ」

「ごんのツ……………」

怒りに身を任せたアスカは胸ぐらを掴みあげたまま、体格差を利用

して私を力づくですぐ横の壁に叩きつけた。

「ぐっ」

背中に受けた衝撃はそれほど大したものではないが、爪先立ちでないで服で首が絞まる。

鼻が触れ合うほど顔を近づけたアスカは、唾を散らしながら威圧してきた。

「屁理屈言うな！ あんたが調子に乗って先走らなければ私だってきたんだから！ だって私は完璧なエヴァパイロットなのよ!! バカにしないでツ!!」

それを聞いた私のアスカの手首を掴む手は、無意識に力が入っていた。

それは息苦しかったからなのか、それとも怒りからなのかはわからない。その両方かもしれない。

でもそんなことはどうでもいい。

私は負けじとアスカの蒼碧の瞳を睨みつけた。

「じゃあなんでもっと前にネルフに来てくれなかったの！ そしたら私と綾波さんの苦しみがすごく減ったのに！ 私だってこんな身体にはならなかったのに！」

アスカの手首に爪を立てて反抗する。

不満を爆発させる。

この際どうなったっていい。

勢いに任せ、すべてを吐露するように私の口から音の羅列を放った。

「あとから来たくせに、偉そうな顔しないでよ!!」

「――」

瞬間。

私は床に倒れていた。

何が起こったのかわからなかった。

しかし、遅れて身体中を激痛が駆け抜けた。

赤い痛みが頭頂から足の先まで染み渡る。

特に肩や背中、脚が痛い。

どうやらテーブルに強く身体をぶつけたようだった。

私はアスカに押し倒されたのだ。

ゆっくりと頭を上げた私を、アスカは鼻息を荒くしながら睨み下ろしている。

無意識に逃げようとしたが、うまく身体に力が入らなくて立ち上がれない。

私の口の端から漏れたひび割れた掠れ声は、あまりにも矮小なものだった。

アスカが股を開き、倒れる私の真上に立つ。

昔から刻みつけられた恐怖心が過敏に反応し、咄嗟に私の両腕が防御体制を取る。

しかしそれをものともしないアスカは、再び私の胸ぐらを乱暴に掴んだ。

「偉そうにして何が悪いのよ！ 私はあんたとは違う！ ずっと前からエヴァのパイロットになるために死に物狂いで努力したの！ それがなに？ 自分を変えたいからエヴァに乗る？ ふざけるなッ！ それだけのためなら他所でやってろ、この雑魚もやし!!」

そのまま乱暴に突き放された私は再び床に倒れた。

また痛みを感じたが、それ以上に心が痛かった。

私の気持ち、私の理由に対する侮辱はこれ以上はないほど辛かった。

アスカがドストドスとりビングから去る。

そして引き戸を勢いよく閉める音が聞こえた。

その後、私は堰を切ったように顔を歪め、情けなく啜り泣きを始めた。ミサトさんが帰ってくるまでりビングで女々しく泣き続けた。

食事なんて、とつくの昔に冷めてしまった。

◆ 周りからの音を一切遮断しようとしても、カノンの情けない泣き声が嫌でも聞こえてしまう。

掛け布団を被ったアスカは苛立ちを我慢できず、両耳を手で抑えた。

虫唾が走る。

奥歯に力を入れ、ついさつきまでのやりとりを思い返す。

カノンの無神経な言葉は、アスカのプライドを大きく傷つけた。まるで私はエヴァに乗っているのだと暗にアピールしているように聞こえたのだ。

普段はめっぽう大人しくせに、言う時は言う。

怒りに身を任せてカノンを激しく罵倒したが、これに言い返されることは予想できなかった。

てつきり萎縮して小さくなるとは思っていたが、まるでその反対だった。

カノンの啾り泣きはまだ聞こえる。

知ったことか。

カノンの苦しみなんて知ったことか。

エリートには、なるべくしてなるのではない。エリートを志す者たち同士で争い、生き残ってようやく胸を張って主張できるのだ。

アスカはエリートだ。

だから、蹴落としてきた奴らの背景なんてどうでもいい。

ただそいつの出す成果こそがすべてなのだ。

ギリギリと歯の擦れる音。

カノンが嫌いだ。

ふわふわした理由でエヴァに乗っているもやしに嫌いだ。

エヴァに抱く、誰よりも強い想いを侮辱されて胸糞悪い。

不快感以外の何でもない。

唐突に、スマホの軽快な通知音が鳴った。

ミサトからかもしれないと思うと、僅かにもどかしさがこみ上げる。カノンを泣かせたことは、アスカたちの保護者として首を突っ込まなくてはならないのだから。

「……………チッ」

無視しようかとも思ったが、ネルフに勤める者として連絡を無視するのは賢明な判断とは言えない。

気だるげな動きで指を通知タブをクリックしてメッセージを開く。

差出人は予想通りミサトだったが、内容は予想とは全く異なるものだった。添付ファイルを開くとスケジュール表が表示され、目で追っているうちにアスカの双眸はある部分に釘付けになった。

「……………」

天啓、というものなのかどうかはわからないが、絶好の機会であることは間違いなかった。

自然と口角が上がり、先程までの怒りも急激に七割ほど収まった。

懸念があるとすれば――。

「3号機の起動実験の予定日って…………えこひいきの約束の日と被ってるじゃない」

しかしアスカはすぐさまかぶりを振った。

どうでもいい。知ったことか。

そっちはそっちで勝手に乳繰り合っていればいい。こっちはエヴァパイロットになれる絶好のチャンスなのだ。

アスカは反射的にコールボタンを押して、スマホを耳に当てたのだった。



真っ赤に泣き晴らした目元は、朝になるとすっかり元に戻っていた。しかし腫れ上がった心は一向に回復する兆しがない。

重たげに身体を起こした私は、ゆっくりとした足取りでリビングに向かう。いつも通りの時間に起きることはできたが、どうしても身体に力が入らない。

とはいえ染み付いたルーチンワークをこなすことに支障はない。

普段通りふたりを起こしに行こうとして――。

「……………」

足が止まる。

アスカの寝ているであろう部屋の前に立つだけで呼吸が乱れる。

昨晚の出来事が鮮明に蘇り、乾いた喉を通る空気がチクチクする。

もしかしなくても私のことを怒っているだろうし、起こされるなんてストレス以外の何ものでもないからまた暴力を振るわれるかもしれない。

だからといってこちらから避けるのはもつとよくない気がする。でもやっぱり怖い。そんな半端な思考を巡らせていると――。

「カノンちゃん」

「ッ!!」

不意に後ろから話しかけられた私は肩を大きく跳ね上がらせた。

恐る恐る振り返ると、そこにはぼさぼさの寝癖の治つてないミサトさんが立っている。

「無理しないでいいわよ。アスカは私が起こしておくわ。それに、そんなに怯えてるのに無理はさせられないわ」

「あ」

ミサトさんに指摘され、シャツを握りしめる右手に過剰なほど力が入っていたことに今更ながら気がついた。

少し手汗もかいているし、シャツが皺になってしまふ。

緊張状態から解放された私は大人しくアスカをミサトさんに任せて朝食の支度を進める。同時並行で弁当の準備を済ませる。

と、何やら洗面所の方からアスカとミサトさんの言い合いが聞こえてきた。

よく聞き取れないが、あまりいい内容ではなさそうだ。

『もういいー』というアスカの突っぱねる声が聞こえたかと思うと、リビングの方に大股でやって来た。

その姿は制服で、肩には学校とは違った少し大きいバッグをかけている。

「アスカ……」

私の呼び声を無視し、テレビ横に無造作に置かれていたヘアゴムを掴んでバッグに突め込む。

そしてそのまま踵を返してリビングを去ろうとする。

私は何も考えずにもう一度名前を呼んだ。

「アスカ……!」

二度目にして、ようやくアスカは足を止めた。

しかし、ちらりと私を一瞥しただけだった。本当にただそれだけで、不快そうに鼻を鳴らすこともせず、それ以上のことは何もしない

で私の前からそそくさと消えてしまった。

そして「ばいばい」とか「それじゃ」の言葉すらなくドアの開閉の音が聞こえた。

どうしようもない辛さに、私の顔はいつの間にか歪んでいた。

難しい顔をしたミサトさんがリビングに戻ってくると、申し訳なさそうに口を開く。

「アスカ……ネルフの方に泊まるって。ほら、明日3号機の起動実験のテストパイロットだから」

「……そうでしたか」

「……ごめんなさい、なんとかあなたたちの仲を取り持ってあげたかったけど、できなかった」

保護者として責任を感じているところもあるのだろう、ミサトさんの言葉には嘘偽りは感じられなかった。

しかし、これはあくまで私とアスカの問題だ。

「私をもっと早く帰っていればこんなことにはならなかったのに」

私は必死に首を横に振った。

「それは……違います。私はアスカの気持ちを考えないで軽はずみなことを言ってしまったんです。その後も感情に任せてアスカを傷つけるようなことを……」

アスカはプライドに泥を塗られることを最も嫌っている。私はそれをやってしまったのだ。

確かに私も傷つけられたが、発端はこちらにある。

起動実験に立候補したのも、再びエヴァパイロットになれるチャンスを得るだけでなく、私へのあてつけも含んでいるのだろうか。

少なくとも明日はアスカに会えないし、仲直りするのはだいぶあとになりそうだ。

「私が悪いのはわかってるから、近々ちゃんと仲直りします」

朝食の用意を済ませた私は椅子に座りながらそう言った。

「大丈夫？ わかっているとは思うけど、あの子は結構気難しい子だから簡単にはいかないわよ？」

「……なんとかします」

曖昧な返事をした私はいつもの三割増の速度で朝食を胃に送り込み、部屋から鞆を持ってきて弁当をつめ、玄関へ向かう。

ドアを開けると、目の前にはいつもの三人組が立っていて、アスカがない理由を考えるのに苦悩した結果、捻出された言葉が、「アスカは私達とは別の仕事があるから、それに集中するために、ね」だった。

微妙に嘘はついていないが、嘘と言われても強く否定できないほど半端な回答に留まった。

「式波もなんや忙しいんか。さすが、自称エースパイロットやなあ」「そう、だね」

陽気にアスカを称賛する鈴原くとそれに深く首肯するヒカリだが、相田くんだけは得意顔でメガネをクイツと持ち上げる。

その表情はまるで、すべてを理解した天才の顔だ。

「なるほどな。ああ、なるほどな。オレは完全に理解したよ碓」

「え?」

「いやだなあ、『あれ』のことだろ?」

口角を僅かに上げて陽気に語る相田くんの顔を数秒ほどまじまじと見つめた私は、ようやく思い至る。

確か相田くんからは3号機の輸送について追及されたのだった。

恐らくアスカが3号機関連でいなくなっているのだと察しているのだろう。

正解であるものの、それは私の悪い心象が原因ではない。

念の為、私は明言はしない方向で返した。

「ごめんね、これはちよつと言えないんだ」

「……ま、それなら仕方ないな」

食い下がることなく素直に引いた相田くんが背中を向けて「さっさと行こうぜ」と促してくる。

学校に到着して教室に入ると、珍しいことに綾波さんが私達よりも早く登校していた。

いつも通り頬杖をつき、窓の外を見上げている。

私達の談笑が聞こえたのだろう、ゆつくりとこちらを振り向いた綾

波さんは、極々微小な声で「おはよう」と話しかけてきた。

綾波さんのここ最近の成長は凄まじいものだと思う。まだ皆と比較するとまだまだだが、それでも以前より飛躍的に社交性が向上したといえる。

席につき、一息ついた私はチャイムが鳴るまでヒカリとぐだぐだしようとして心を決めつつ鞆から荷物を移していた、まさにその時。

「……碓さん」

水色の声私を呼んだ。

「ん？ どうしたの綾波さん」

綾波さんは私の方を向き、子首を傾げながら続けた。

「式号機パイロットは？」

「あー……、うん。ネルフにいるの」

「どうして？ 起動実験は明日でしよう？」

あやふやにするささらなる追及が飛んでくるような気がした私は、素直に観念して打ち明けることにした。

綾波さんの席の隣まで移動し、他の誰にも聞こえないように小声で囁いた。

「ちよつと喧嘩しちゃって」

「喧嘩？ どうして？」

「私が無意識に傷つけるようなことを言ってしまったって、そこからアスカが怒って、ヒートアップして……って感じ」

「……」

「正直なところ、全部私が悪いとは思ってないの。アスカだって私のこと乱暴に押し倒してきたし、痛かったもん」

「どこが？」

「それはもちろん身体……」

だよ、と言いかけた私の唇が小さく震える。

非常に無垢な綾波さんの赤褐色の瞳に吸い込まれるように、私は言葉が続けた。

「……と、心も」

話しているうちに、少し気分が沈み込んでしまった。

別にここまで話すつもりはなかったし、なんなら私から一方的に話しているだけになっている。

決して綾波さんが聞き上手な人ではないことはわかっているが、どうしてか話すことに強い抵抗がない。

「それは、ぽかぽかとは違う？」

抽象的な表現に、私は若干戸惑いながら返す。

「いや、違うと……思うけど……？」

「なら、よくないわ」

「ええ？」

不意に、綾波さんがゆっくりと手を伸ばしてきた。

触れられたのは胸の中心部分。

急に驚きと羞恥に爆発し、私の顔はトマトのように赤くなる。

完全に公衆の面前だというのに、よくも堂々とできるものだ。いや、そこは綾波さんだからこのこと言うべきか。

「痛いのは、……？」

心臓の鼓動がなんたらなんてくだりを気にするほど、私の心は平静さを保つことができていない。

ただこくりと頷くことしかできなかった。

「碇さんにはぽかぽかしてほしい。だから、式号機パイロットとも仲直りして、一緒に、ぽかぽかして、ほしい」

綾波さんなりに懸命に言葉を選んだのだと思う。

たどたどしい口調がそれを強く主張している。

私のために頑張つてアドバイスしてくれているのだと思うと、言葉にできない嬉しさがこみ上がってきた。

胸の上に置かれた綾波さんの手に、私は自身の手を重ねた。

陶器のように滑らかな白い肌は、冷たいながらも確かな熱がこもっていた。おずおずと私は綾波さんと再度顔を合わせるが、相変わらず表情の読みにくい仏頂面だ。

しかし……なんとなくだが、わかるような気もしないのだ。

数秒見つめ合った後、先に視線を反らしたのは私の方だった。

さつきから私達のやりとりをクラスメイトたちが遠目に眺めてい

るのに薄々気づいているから、なるべく早く切り上げたいという恥ずかしさは少なからずあった。

「……ありがとう綾波さん。確かに、いつまでもギスギスしたままじゃいけないもんね」

『ぽかぽか』という曖昧な言葉は、今の私が最も求めているような感情だと思った。

曖昧だからこそ限定的でない捉え方ができる。

それは悪い意味ではなく、良い意味で認識を広くすることができるからだ。

その後もつつがなく学校での時間は進み、何事もなく放課後を迎えた。

今日も先日と変わらずネルフへ来ないように言いつけられているため、大人しく帰宅することにする。

いつもの三人と一緒に、少し寄り道をしたりしながらのんびりと下校を楽しむ。

家に着くと、玄関前には松代に行くミサトさんの用意が置かれていた。

肩掛けのカーフリュックには大した荷物が詰め込まれている様子はなく、随分と軽そうだ。

「ごみんカノンちゃん！ 明日はやいから今日はもう寝るわね。夕飯は適当に冷凍食品食べといたから〜」

リビングに顔を出した私を迎えたのは、相変わらずラフな格好でお尻をぽりぽりとだらしなくかき、ソファアの上で寝転がっているミサトさんだ。

もう見慣れた光景だから特にツッコミはしないものの、少なくともミサトさんを『素晴らしい女性』と思っているネルフ職員たちの存在は知っている。その人たちに申し訳なく思う気持ちで一杯になりながら、私は相づちを打った。

「わかりました。ちなみに何時に起きますか？ もしあれなら起こしてあげましょうか？」

「やあねえ。それくらいちゃんと起きれるわよ。大事な日なんだか

ら」

「……………」

「……六時です」

「わかりました。一応ミサトさんのほうでもちゃんと目覚ましはセットしておいてくださいね?」

「ハイ」

私の有無を言わせない圧迫感が、ミサトさんの大人としての威厳をあつさりとは吹き飛ばす。

自分の部屋に消えたミサトさんを目で追いながらそれでいいのかと穏やかにツツコむ。

今日はどうしても料理をする気分になれず、賞味期限切れが一番近い冷凍のスパゲティを電子レンジでチンすることにした。

低い唸り音と共に温まるまで六分。心を無にした私は椅子に反対向きに座って電子レンジと面と向かう。

ほんのりとオレンジ色に明るくなったレンジの中を眺めながら、ぼんやりと物思いにふける。

……が、直後。

私は胸元のポケットからスマホを超高速で取り出して、これ以上ない速度で指を動かして画面を耳に当てた。

ややこもっている呼出音は、なんとも言えぬ緊張感を刺激する。

数十秒後ほど経っても呼出音がループするだけで、私は潔く諦めることにした。

「まあ、やっぱり出ないよね。明日だし」

単に私だから出なかつたかもしれないし。

さっさと謝ればいいのだ。変な意地なんて張らず、強引に土台にさえ上がれば否応なく話は進展する。

留守電にするかメッセージに残しておくかで悩んだが、即座に前者を選択。

「昨日のことはごめん、アスカ。私も悪いところがあったと思う。だから……無事起動実験が終わったらちゃんと仲直りしようね」

何も考えず、思い浮かんだ言の葉を並べる。

「打算的に言葉を選ぶよりも、こうして直接話しているかのようにその時その時の話し方のほうがアスカに私の気持ちや伝わりやすいだろう。」

それから、きちんと面と向かって仲直りをしよう。

客観的な評価だが、この動きに私の人間としての成長が現れていると思う。

以前ならほぼ間違いなくこのような行動には移さなかっただろう。誰かに言われてもなあなあにして、中途半端に相手と距離をとってずるずると時間を無駄にしていた。

綾波さんの『ぼかぽか』が私にもきつとできるはずだ。

チン、と軽快なレンジの音が鳴り、私は黙々と冷凍スパゲッティを食べ始めるのだった。

その味は、特に普通だった。



せっかくだから、アスカに仲直りの印として何かをプレゼントしようと思いついたのが数時間前のこと。

そしてデパートに来たはいいものの、何をプレゼントすればいいかわからず、ぐだぐだ時間を過ごすこと数時間。

我ながら計画性のなさに笑ってしまいそうだ。

アスカは当然、ミサトさんもない。

さらに今日は綾波さんからお呼ばれもしている。

休日のデパートはやはりと言うべきか、人が多い。

特に家族連れなどが多く、どうしても辟易してしまう。

それにばったりクラスメイトと遭遇したくもない。なぜならひとりでデパートに来ているという事実がバレたくないからだ。

ヒカリでも呼んで一緒に選んでもらうべきだったかと考えはしたが、これは自分ひとりですべきだと判断して却下。

「うーむ……」

眉をひそめた私はフードコートで買ったクレープを一口だけ大きく頬張る。

シンプルなバナナチョコクレープで、値段はやや安めだ。だがよく

わからない豪勢なものを選ぶより無難な方がいいだろう。

実際美味しいから文句などあるはずもない。

頬が溶けるほど柔らかい生クリームに、チョコのアクセント。そしてバナナというこの完璧な組み合わせ。これを生み出した人は間違いない偉人だ。

なんて食レポをしながらあつという間に完食し、口の端についたチョコを丁寧に拭き取ってからそくさとフードコートを去る。

ミサトさん曰く、起動実験が行われるのは午後で、そこから後始末などがあるため帰ってくるのは晩になるという。これはアスカも同じだ。

サプライズの準備をするには十分な時間がある。

とはいえゆっくりしすぎるのはよくないから、そろそろ真面目に考えなければねらない。

コンセプトは、アスカにずっと使ってもらえるもの、だ。

消費型……ボールペンや食べ物だと消えてしまうし、そもそもそれが仲直りの印になるのかは微妙だ。

ならば服かと思いつたものの、好みがわからない。毎日洗濯しているからアスカの服のサイズはわかるのだが、傾向がわからない。

わかるのは、赤が好きということだけだ。

恐らく選ぶならアスカと一緒にいいはずだから、これも却下。

となると本格的に悩む。

下を向きながら歩いていたらせいか、いつの間にか人混みの中に入ってしまった。

情けない声を出しながら私はもみくちゃにされ、悪い意味でのビフォーアフターの如く憔悴してしまった。

「ついてない……」

少しズレた服を直し、やや疲れた面持ちで顔を上げると、左前方にゲームセンターが目に入った。

「……ああ、そういえばまた今度行こうねって約束してたなあ」

しばらく前のことをぼんやりと思い出しながら、お箸とかマグカップとかならどうだろうかと考えつつ踵を返そうとした、その時。

見慣れた人物がゲームセンターから出てくるのが見えた。

「!?」

鈴原くんとヒカリだ。

猫にも負けない反射速度で、私はふたりから見えない脇側の店に飛び込んでいた。

恐る恐る顔を出して様子を観察する。

ふたりはとても楽しそうな様子で、特にヒカリはニコニコしながら大事そうにクマのぬいぐるみを抱えている。

ここからだと言距離が離れているから声は聞こえないが、恐らくUFOキヤッチャーで獲得したものと思つて間違いなさそうさ。

あのヒカリが、まさかの鈴原くんとデートとは……。

感慨深い何かを感じつつ、見つからないように早めに退散しようとした時、不意にある記憶が思い浮かんだ。

そういえばアスカは人形を持ってたな、と。

少しだけ汚れた女の子の人形。

アスカの部屋を掃除した時に見つけたのだ。

どういった経緯でもらった、あるいは買ったのかはわからないが、並々ならぬ思い入れがあるのは確かだった。

少なくとも大切に扱っていたのは見てわかった。

そう考えている内に、足は自然とぬいぐるみ雑貨店へと向かっていた。

私としては物心ついた頃にはこういった類のものから距離を置いているが、やはり目の前になるとどうしても自分も手元にひとつくらいほしいという気持ちにもなる。

所持金には余裕があるし、ついでに自分のも買おうかと悩む。

とはいえ、まずはアスカだ。

ぬいぐるみと一括にされてはいるが、ちゃんと人形も棚に並べられている。

ただ想像以上の品揃えで、そう簡単に選び抜くことができそうにない。

直感的に良さそうなものを、実際にアスカが受け取った時のことを

脳内でシミュレーションしてみるが、どうも反応はどのぬいぐるみも同じだ。

口では馬鹿にしながらも、顔はやや喜んでいるところまでは想像できる。……だがそこまでだ。

どう喜んでいるのかまでがわからない。

「いらつしやいませ。どんなものをお探しですか？」

そうニコニコと笑顔で店員に話しかけられ、私は顔を横に振った。

店員は二十代前半ほどの女性で、大人びた雰囲気醸し出しながらも、まだ子供らしさが滲んでいる。

「友達へのプレゼントについて考えてるんですけど、あまりいいのが見当たらず……」

「なるほど、そうですか。ちなみにそのお友達はどんな子ですか？」

私は顎に手を当てながら答えた。

「私と同じ年の女の子です。頭が良くて、少し口が悪いけど寂しがり屋なところがある子です」

我ながらわかりやすくアスカのことを説明できたと思う。

これ以上となると、変に語り始めてしまいそうになるからここのま

で。

店員は深く頷いた。

「うんうん……それで君はその子に合うものがわからなくて悩んでるってことですね？」

「その通りです……」

どれをあげたら一番喜んでくれるのかがわからない。まだアスカのことをよく知っていないから当然といえば当然なのだが、そこはなるべく妥協したくない。

店員は考える素振りを見せた後、口を開いた。

「この中からナンバーワンを選ぶことなんて、きつと無理ですよ」
出てきたのは、想定外の否定の言葉だった。

「え？」

「もし本当に『一番』を求めるのなら、この店以外も探さないといけませんよね？ このデパート以外も。でもそこまで特別なものであ

る必要はないと思いますよ」

「えつと……どういふことですか？」

もちろんあらゆるものを見て決めるなんてのは現実的ではないとわかってはいる。

それこそ世界中を探さなければならぬ。極端すぎる解釈になつてしまうが。

「その人にとっての『特別』は、その人自身が決めるということですよ。もしロボロボのぬいぐるみを他の人が汚いと言つても、持ち主が『特別』と思うのなら、それでいいのではないでしようか」

ナンバーワンでもオンリーワンでもない。

『特別』という価値を与えられたものたち。

所有者が持つのはなにも一つだけではなく、たくさん『特別』だ。ずらりと並べられた商品を一瞥する。

確かに今現在、ここにあるぬいぐるみたちの価値は見た目と値段によつてのみ決定されている。

これに思い出などの要素が加わることで価値が更新されるのだ。

「……なるほどです」

自然と私の腕は持ち上がった。

そのまま自然意思に従つて伸ばし、あるぬいぐるみを手に取る。

ハンドボールほどのサイズで、デフォルメされたパンダのぬいぐるみだ。

これを選んだのには特に深い理由はなかった。

値段とかは一切考慮していない。

不意に目についた、ただそれだけだ。

適当だと言われるとぐうの音も出ないが、少なくともこれをアスカにプレゼントしたいと思つた。

これ以上の理由はいらないだろう。

「じゃあ、これをお願いします」

そう言つて手渡すと、店員は柔らかく微笑んだ。

「承りました。プレゼント包装はされますか？ その場合少しだけお値段が上がりますが」

上手いなと思いつつも、私は二つ返事で了承したのだった。

◆ 行き来は電車だ。

日を追うごとに厳しくなる猛暑日であろうとも、電車の中はガンガンに空調が効いている。

思わず快樂の声を漏らしつつ横長の座席に座った私は意気揚々とスマホを触り始める。

通知にアスカからの返事はなく、特に興味のない話題でクラスのグループメッセージが盛り上がっているのみだ。

ちよつぱり残念に思いながらスリープ状態にしようとした瞬間、不快な警告音……もとい呼出音がバイブと共に鳴り響き始めた。

「っ！」

乗客にごめんなさい、と小声で謝り、私は即座に呼び出しに出た。なるべく隅っこの方に移動し、口元に手を当てて声が漏れないように注意する。

電車内で通話は禁止されているが、この音が鳴った時は、非常事態の場合だ。

つまりどういうことかというところ——。

『カノンちゃん！ 今どこにいるかな!?!』

いつもの柔らかかそうな声色とは打って変わり、緊張の張り詰めたような声でマヤさんが出た。

「今は電車に乗ってるんですけど……使徒ですか?」

『たぶんそう。松代で爆発事故が起こったの！ 緊急招集したいけど、そこからどれくらいでネルフに着く? もしかかりそうなら一番近い駅に降りてもらって、車で迎えに行くわ!』

「ちよつと待ってくださいいね……えつと、乗り換えしないでですけど、快速なら五分でネルフの最寄り駅に着きます」

『そっちの方が速いわね……じゃあそれをお願いね! こっちは初号機の輸送準備を進めているから、カノンちゃんが着く時にはいつでも出撃できるようにしておくわ!』

通話をしているうちに、電車は一駅分進んだ。

私はすかさずダッシュでドアから飛び出し、向かい側のホームで発車直前だった快速の電車にダイブした。

すっかりぬいぐるみの入った箱を傷つけないようにリュックを丁寧にに気遣いながら。

乗客たちからは白い目で見られたが、心の中で強く謝る。

快速電車は問題なく定刻通りに発車し、ネルフの最寄り駅に到着する。

怒涛の走りでホームを抜ける。

改札口を通ると、すでに待機していたらしいネルフの黒服ふたりがこちらに近づいてきた。

丁寧ににエスコートしてくれる……なんてことはなく、だいぶ足早にネルフのゲートへ向かい始める。

大の男の人の早歩きは私の歩幅では到底追いつけない。だから結果的に自分だけ小走りになってしまう。

爆発事故ということは、起動実験に失敗してしまったのか。そう考えただけで、私の胸はきゆうう、と締め付けられた。

アスカは3号機の起動実験にすべてをかけていたはずだ。もし失敗しようものなら、アスカはもう本当にエヴァパイロットとしてここにいることができなくなる。

そうなたらどうなるか、私にはまるでわからない。慰めてあげられる自信は正直なところ、あまりない。

私にはアスカの気持ちを百パーセント理解することなんてできないから、またあの日のようにふとした失言から怒らせてしまうかもしれない。

でも。

それでも。

きつと悲しむだろうアスカに、寄り添うべきだと思った。

——瞬間。

視線を感じた。

バツ、と首を後ろに降ると、人混みに紛れて私の方を凝視する男の人がちらりと見えた。

およそ三十代前半で、痩せぎすな身体。

少しヨレヨレの白シャツに、姿勢はやや猫背だ。

男は私を見ながら、スツ、と目を細めて何かを呟いた……ような気がした。

時間にしてたったの一秒半。

私はすぐにそんな出来事のことなんて忘れ、ネルフへ急ぐのだった。

ネルフに到着すると、発令所に向かうことなく直接更衣室に移動してプラグスーツに着替えるよう指示された。

よほど緊迫した空気感は否応なく私にも共鳴し、意識を切り替えて早急に着替えに向かう。

初号機はマヤさんと言う通りすでに輸送準備が完了していて、充電用バッテリー搭載車両はもう現地で待機しているという。

いつもはミスアさんがエヴァの出撃などの号令を出すのだが、今回はいないためオペレーターの人たちが代理でテキパキと指示を出していく。

エントリープラグに入り、座席に座り、操縦桿を握る。

L・C・Lを肺に取り込みながら、もう完全に慣れたたと初搭乗時の頃をしみじみと思い浮かべる。

シンクロも滞りなく完了し、エヴァの輸送が始まる。

輸送方法は第八使徒殲滅作戦時に利用した輸送用列車だ。

横たわったエヴァを列車に乗せ、目的地へと運んでいく。松代に到着したら私は身体を起こして予め用意されていた充電ケーブルを背面に接続した。

山々の間で腰を低く落として待機の姿勢をとる。

時刻は夕暮れ時になっていた。

オレンジ色の空はどこか悲壮感を漂わせている。

微かに聞こえるひぐらしの鳴く声は、不穏な気配を強くする。

一帯は田んぼで埋められ、張られた水が空を反射している。

「……ミスアさんやアスカたちは大丈夫かな」

指定位置に移動した私はぼそりと呟いた。

するとすかさず青葉さんから通信が入ってきた。

『現在救出作業中だ、心配ない』

「そうなんですね……でも、私だけで大丈夫か不安です。ミサトさんも、他のエヴァもないのに」

弾丸のような通信が行き交うのを聞きながら私はさらに呟いた。

『作戦系統に問題はない。今は碇司令が直接指揮をとってるよ』

「お父さんが……？」

確かに作戦部長のミサトさんに代わって誰かが指揮をしなければならぬ。そうなると上司が……となるのは自然な流れだ。

耳を澄ませば通信の中にお父さんの声がところどころ混じっているのが聞こえる。

こうしてお父さんがネルフの人間として動いているのを実際に目の当たりにすると、胸のあたりがぞわぞわする。

これをもっとわかりやすく表現したいが、どうしてもできない。

突然、田んぼの脇道に列をなして待機していた戦車隊の砲塔が動き始めた。

それと連動するように私も意識を切り替えて、山の影から現れるであろう存在を見逃すまいと注視する。

すでに戦車隊からは距離や角度的に見えているのだろう、砲撃が始まった。

爆音がさつきまで静かだった一帯を激しく叩きつける。

私は指示があるまで不動を貫き、数秒後に見るだろう敵に意識を集中させる。

やがて有効打を与えられないと判断したのか、戦車隊が砲撃を止めて大人しく撤退していく。

『目標は接近中だ。カノン。お前が倒せ』

その声は私の心臓にまで低く響いた。

今のお父さんは、家族としてではなく、司令としての厳格な男だった。

より一層無機質さを感じさせる声に、私はすぐさま反応できなかった。

「……………はい。頑張ります」

どうせ使徒なのはなんとなくわかる。

本当は今日、綾波さんのお呼ばれがあつたはずなのに、とんだ迷惑だ。

もし大きな怪我を負うことなく殲滅することができたら、晩にはなるもののお食事会ができたら……………。

……………いや。

アスカとミサトさんも、それに私も、そんな気分にはなれないかもしれない。

そしてついに敵が姿を見せる。

山々の間から墨汁の染みが滲むようにぬうつと現れたのは、人型の黒い影だった。

だらりと肩の下げ、ゆらゆらと歩いてくる。

紅色の眼光は夕焼け色よりなお濃く、細められた双眸は私を即座に認識したようだ。

私は鋭く息を呑んだ。

「……………」
おかしい。

極度の困惑に息が上がる。

口をパクパクと開閉させつつ、なんとかかかすれ声で音を絞り出した。

「これが使徒、なの……………?」

だって。

どう見ても。

あれは。

エヴァンゲリオンなのだから。

『そうだ。目標だ』

「いや、でも……………どう見てもエヴァだよ……………あれ」

なおも敵は歩みを止めない。

相対距離、約五百メートルあたりの地点で動きを停止させた。
こちらの様子を伺っているのか。

私は直立のまま不動を続ける。

続けながら、お父さんに問いかけた。

「お、お父さん……あれってアスカが乗ってるんじゃない？」

ここにエヴァがいる理由なんて一つしか考えられない。

エヴァが何らかの原因で暴走し、爆発事故を起こしたと考えるべきだろう。

『問題ない。そいつは使徒だ。お前が倒せ』

「おかしいよ……！ それってアスカのこと——」

これ以上の発言は、突如として遮られた。

なぜならば、一瞬だけお父さんとの会話に気がとられた隙に3号機の姿が消えていたからだ。

「——、え？」

そして、巨人の拳で殴られたかのような衝撃が初号機の胸に直撃した。

「ぐ、あッー」

完全な不意打ちを受けた初号機は、満足に受け身を取ることもできずに軽々と身体を吹き飛ばされた。

手に持っていたパレットガンがどこかに飛んでいく。

激痛のフィードバックに歯を食いしばりながら、素早く立ち上がる。

何が起こったのか、全く理解できなかった。確かにお父さんの言い草にはカチンときたが、それでも3号機からは決して目を離していないはずだった。

じりじりと間合いを取りながら私は3号機の様子を窺う。

赤い眼光をすう、と細めた3号機は生物の動きとは思えないアクロバティックなステップを踏み、その場で大ジャンプしてみせた。

咄嗟にその姿を見逃すまいと見上げるが、計算されていたのか夕日と被って眩しく写り、捉えられない。

「く……い！」

補足より回避を優先し、私は大きく後方に下がった。

直後、私のいた場所に落下エネルギーの加算された強烈なキックが

地面に炸裂した。

その衝撃はビリビリとフィードバックとして私の骨にまで伝わってくる。

さつき受けた一撃はあれによるものと考えていいだろう。

そのまま二足歩行から四足歩行へと体勢を変えた3号機は低い唸り声を鳴らす。

見下ろすように再度観察を試みた私は、あるものを発見した。

それは、エントリープラグ射出口に不気味に蠢く青い粘液だ。

これがエントリープラグの射出を妨害している。

「やっぱりアスカ、乗ってるんだ……!」

通信を試してみるが、当然反応はない。

今、アスカが具体的にどのような状況になっているかは私にはわからない。ただ、使徒に汚染されているというのは事実で、はやくなんとかしなければならぬ。

しかしどうやって？

最適解はエントリープラグを引き抜くことだが、そのためには使徒とゼロ距離に接近しなければならない。

だが使徒の能力が完全に把握できていない中で接近するのは非常にリスクだ。

『アクロバティックな動きができる使徒』だけなはずがないのはなんとなく直感でわかる。

だからといってのんびりと様子見、というわけにもいかない。

もどかしさに唇を噛みしめる。

違うのだ。そもそもそれらは結局使徒を傷つけることであり、アスカを傷つけることに繋がる。

苦悩する時間を使徒は与えてはくれなかった。

使徒が右腕をぶるりと大きく震わせると、勢いよくこちらに振りかぶった。

距離は十分に保っている。

とてもそれだけではこちらまで届かな——。

い、はずだったが、容易く私の希望的観測を打ち破ってみせた。

使徒の腕は生物のルールを破り、何倍にも伸びて安心しきっていた私の首をガチリと掴んだのだ。

「ハ……ッ！」

あまりに予想外すぎて、その後の反応まで遅れてしまった。

もう片方の腕も同じように伸びて首を掴み、強引に山の斜面へと背中を叩きつけられた。

「か……ッ！　ズ……ッ！」

身体が急激に熱くなり呼吸が苦しくなった私は、呻き声をあげながら力の限りを尽くして使徒の手首を掴んで首からゆっくりと離す。さつきから一方的にやられてばかりだ。

目の前の使徒は必ず殲滅しなければならぬ。しかし使徒にはアスカが捉えられていて、容易に手が出せない。攻撃すればその痛みがアスカに伝わってしまう。

それだけはしたくない。

それだけは、絶対に。

自分の手で誰かを傷つけることは。

なんとか絞める手を完全に離すことには成功した。このまま3号機を突き放して一旦距離を取るべく行動に移そうとした、まさにその時。

使徒の両肩が異様に盛り上がり、パチンツ！ と金属質な破碎音が響いたかと思うとそこから新たな人間の腕が二本生えた。

「……ッ！」

——マズい。

と悟るにはもう遅すぎた。

がら空きの首を絞めるには絶好のタイミングすぎた。

あつさりと二本の手にもう一度捉えられる。

痙攣する私の身体などお構いなしに力任せで山肌を押さえつける。

「ギ……ッ！」

それだけではない。

先ほどとは異なる、明らかな痛みが襲いかかってくる。

ただ絞められる……否、外皮ではなくその内側、肉体にどろりとし

た痺れが浸透してくる。

途端、普通に生きていれば決して味わうことのないだろう激痛が首の内部を中心に爆発した。

必死に痛みを叫ぶことで緩和しようとしても、首を絞められているせいで潰れた喘ぎ声しか漏らせない。

プラグ内に簡易出力された初号機モデルには、使徒の手から生じる青い粘液によって生体侵食されていると警告がひっきりなしに鳴り響いている。

その音が頭の中にガンガン反響して苛立ちが募る。

抵抗しようにも力が入らない。

肺が酸素を求めて暴れる。

限界まで口を開いて求めても呼吸ができない。

『カノン、なぜ戦わない』

娘が命の危険に晒されているというのに、お父さんは涼しい顔でそう言った。

その言い方に、私は怒鳴り返した。

「アスカがつ、乗って……るんだよ……!!」

『相手は使徒だ。我々の敵だ』

「そんなこと、言った、ツて！」

『戦わなければ、お前が死ぬぞ』

できない。

アスカを攻撃したくない。

その想いは何よりも優先されるべきだ。

……思考が定まらない。

足で使徒の身体を蹴り飛ばそうとしても、身体が微かに痙攣するだけで動かすことができない。

「う、あ」

本当に死ぬ。

恐ろしい速度で力が抜けていく。

使徒の絞める強さは大きくなる一方だ。

お父さんはそれ以上言わない。

私を助けてくれない。

心配をしてくれる気持ちは言葉に少しも感じられなかった。

世界がぼやけ、霞み、滲む。

激痛は止まない。

命の灯火がゆっくり、ゆっくりと弱くなっていくのを自覚する。

——死にたくない、と思った。

その瞬間。

私という自我が形成された瞬間からの記憶がどっと脳裏に溢れかえった。

これが俗に言う走馬灯なのは考えるまでもなかった。

無色な人生だった。

お父さんに呼ばれるまで、ただ生きているだけの雑草にすぎなかった。

でもここに来て、色を知った。人の営みを知った。

私という人間を改めて認識する機会が訪れた。

でも私なんて結局は子供で、大人っぽい……それっぽい言葉を並べて自分を安心させているだけだ。

——私は誰だ。

私は碇カノンだ。

——私はなんのためにここにいる。

私という弱い人間を変えるために。

——では、私は今、何をしている。

『使徒を倒す』か『アスカを助ける』かの判断が中途半端なせいで殺されかけている。

——これが本当にしたいこと？

「——ちが、う」

断じて違う。

ここで大人しくやられるのは最悪のシナリオだ。

アスカだって本気で私を殺したいと思っているわけではないはず。

きっとアスカは何もしなかった私を責めるだろう。そして自責するのだ。人殺しをしてしまった罪を一生背負ってしまうことを。

そんなことは絶対にさせたくない。

まだまだアスカのこと、知らないことだらけなのに。アスカにもまた、私のことを全然知ってもらってない。

こんなところでさよならなんてしたくない。

仲直りしたい。

仲直りをするために、

アスカを助ける以外の選択肢が、

あるはずが、

ないだろう——！

「お、お、おとおおお……！！」

胸の内で迸る気合いを、喉奥から力づくで吐き出す。

ぐちゃぐちゃになってよく見えない世界の中、私は死に物狂いで足掻き始める。

初号機の顎関節の拘束をバキン！ と破壊して雄叫びを上げる。

感覚がなくなり、冷たくなった手足を根性だけで突き動かす。

使徒を睨みつける。

叫びすぎた喉は激しく痛み、ついに音を発することすらできなくなる。

声無き声を目と鼻の先の使徒に向けて吼える。

使徒も負けじとドス黒い雄叫びを返す。

痛みなんてレベルの感覚はすでに通り越し、私のすべては死の一手前だ。

それでもこの命続く限り、最後の最後の最後まで抵抗してやる……！

ミシミシと首元で嫌な音が響いている。

損傷が深刻であることを警告されるが無視。

両腕の拘束からなんと少しでも抜け出すために、我が生涯一の力を込めてもがく。

だが。

「あ」

それ以上、力が入らなかつた。

どう頑張っても、腕に十分な力が入らなかったのだ。
そして私は、何もかもを間違えていたことを静かに理解した。
決断するのがあまりにも遅すぎたのだと。

使徒が四本腕になる前に……いや、アスカの存在を確認した時点で
速やかに決断するべきだったのだ。

死ぬ間際に気づくなんて、一体どれほど愚かなのだろう。

お父さんの言う通りだった。

もつとはやく戦えばよかった。

赤く充血した瞳から命以上の熱い雫が止めどなく流れるのを感じ
る。

ついに私自身の喉が限界に達し、短く喘いだ口元から血が滲み、L・

C・Lに溶ける。

悔しく思うと同時に、それ以上に自分のことを激しく責めた。

全然私は変わってなんていなかった。

大切な友達のことを考えてやれなかった。そのせいでアスカが私
を殺すことになってしまう。

こんなので、『ぽかぽか』なんてできるはずがない。

アスカにも『ぽかぽか』して欲しかったのに。

情けない嗚咽が、ひび割れた雑音として狭いプラグ内に虚しく響
く。

……ごめんね、アスカ。

……直接言葉で伝えることすらできずにこんなことになってし
まって。

……どうか、私の弱さを許してください。

泣きじやくる声は誰にも届かない。

私は一人、ここで殺される。

当然使徒はそんな惨めな私に情をかけることなどなく、確実に屠る
ために首を絞める力を加える。

使徒の顔が、死にゆく私を嘲笑うかのように醜悪に歪んだ気がし
た。

侵食によってボロボロになった私の首に爪が深く食い込み。

ギチギチと不快な金属音を歪ませ。

そのまま拘束から抜け出すことのできなかつた初号機の首は呆気なく折られ。

私の生命活動はそこで終わった。

死してなお

発令所にいる面々は、最悪の状況に総毛立った。

主モニターには、首の折られた無残な初号機が映し出されていた。オペレーターたちを始めとして、ゲンドウと冬月を除いた全員が数秒間呆然と立ち尽くしてしまった。

使徒が勝鬨をあげる。

敵を討ち果たした歓びの咆哮に、それぞれが我に返った。

「パイロットは心肺停止状態！ プラグの強制射出は、射出方向が山に遮られているため不可能です!!」

マヤはそう鋭く報告をしながら、稲妻にも負けない手捌きで絶えず入力が続けて初号機へのアクセスを試みている。

初号機の損傷は致命的。

ロボットではなく人造人間であるため、生体部品が利用されている。そのため、頸椎を破損したというのは生物で言う死と同じだ。

フィードバックを軽減するためになるべくシンクロをこちら側で抑えていたが、それでも『死』というフィードバックは想像を絶する。

パイロットの脈はなく、すでにプラグスーツの生命維持装置が起動して心臓マッサージを始めている。

発令所の高所では、危機的状況にも関わらずいつもの姿勢を崩さないゲンドウがいる。

ゲンドウはゆっくりと口を開いた。

「可能だとしても、プラグの強制射出は許可しない」

ゲンドウとカノンの不仲は周知の事実であるが、死に直面している娘に対しても微動だにしない父の在り方に、発令所にいる誰もが嫌悪感を抱かずにはいらなかった。

道具はどこまで行っても道具といったところか。

現場は刻一刻を争う状況だ。

カノンの心拍が停止してからすでに三十秒ほどが過ぎてしまっている。蘇生によって戻ってくる兆しはない。

心肺停止状態が長ければ長いほど蘇生が困難になる。更にその間、

脳に酸素が行き届かないため、奇跡的に息を吹き返したとしても、障害が残りかねない。

以前の戦闘で子宮機能を失ったカノンからはもう何も奪わせたくない、と矛盾した望みを抱くオペレーターたちは、両の拳を強く握りしめた。

「——シンクロカットもダメだ。今初号機のA・Tフィールドが失われると、使徒によって修復不可能なダメージを受ける。それだけはないとしても避けなければならない。ゆえに、ダミーシステムを起動させる」

恐ろしく冷静な判断、と言わざるを得ない。

完全に心を無にしているからこそその正解を導き出せる胆力は、司令だからこそとしか言いようがない。

だがそこに父親としての人間性は皆無。

まだ全容が明らかにされていないダミーシステムを起動させることに抵抗があるが、この状況では一秒でも早くカノンを初号機との繋がり立たなければならぬ。

声を揃えて「はい」と返事したオペレーターたちは、シンクロ接続をカノンからダミーへと即座に切り替える。

使徒は押し折れた初号機の首を絞め続け、指が装甲を突き抜けて肉に深く食い込んでいる。

カノンはまだ息を吹き返さない。

懸念はカノンの心肺停止状態だけではない。

首が折れた状態の初号機が、果たしてダミーシステムを起動させたとしても問題なく活動できるかどうか。

……恐らく難しい。

これは零号機出撃の必要がありそうだ。

どうやら信号を受け取ったらしい初号機の眼に再び輝きが灯る。

使徒以上の凶悪な咆哮を轟かせると、グググ、とバネのように膝を曲げた脚で使徒の腹部を激しく蹴り飛ばした。

人間による操縦ではないため、フィードバックによる痛みなどは一切受け付けない。このダミーシステムを起動させた初号機を殺すに

は、電源が切れるか、物理的に潰す他ない。

ゆっくりと初号機が起き上がる。

しかしながら、首がおかしな方向に傾いているその立ち姿は不気味
としか言いようがない。

ゲンドウは勝利の確信とともに口の端を吊り上げた。

隣で静かに立つ冬月もひとまずはといった面持ちだ。

「このまま殲滅戦に移行。パイロットの心肺蘇生は継続だ」

状況は有利となった。

ゲンドウは密かな安堵とともに指示を出す。

「あの……」

その時、オペレーターの一ひとりから茶を濁すような言葉を投げかけ
られた。

「なんだ」

ゲンドウが鋭く返す。

その男——シゲルは困惑を隠せない顔で続けた。

「いや……おかしいんです」

「何がだ。きちんと説明しろ」

視線を下のシゲルへと落とす。

「は、はい！ すみません」

注意されたシゲルは、今一度自身の操作パネルと主モニターを何度
も見返す。

そして、やはりわからないといった顔で仰々しく報告した。

「ダミーシステムは……初号機側で拒否されています。なので現在、
ダミーシステムは起動していません」

「……………なに？」

……発令所の誰もが動きを止めた。

粘度の高いどろりとした空気がゆっくり、ゆっくりと場を満たす。

ここで初号機がダミーシステムを弾く要因は何一つない。あると
すれば、こちら側の入力ミスしかない。だがこの緊急時であろうとも
そんなミスは絶対にしない。それがこの発令所にいる者たちの責務
なのだから。

だからこそ、おかしい。

初号機が自力で動き始めたことの説明ができない。

……そして悟る。

「……暴走か」

これはカノンの初戦、第四使徒に頭部を貫かれたあと、初号機の暴走が発生した時と酷似している。

とりあえず戦闘続行であることは変わらない。

であれば何も問題はない。

しかしその考えすらも、マヤの悲鳴じみた報告にかき消された。

「暴走ではありません!! 初号機はパイロットによつて操縦されています!!」

「――」

今度こそゲンドウですら完全に黙ってしまった。

ダミーシステムではなく。

暴走でもなく。

あくまで、カノンが初号機を操縦していると結論が出ている。MAGIのお墨付きで。

こればかりはゲンドウも疑いを持たずにはいなかった。

なぜならカノンは今、心肺停止状態で実質死んでいるのだ。

死人が意思を持って活動できるはずなどない。それを確認する方法はただ一つ。

「プラグ内のモニターを映せ」

速やかに命令は実行され、主モニターにオーバーレイ表示でカノンの様子が写し出される。

そこには確かにカノンがいた。

ただそれだけで、やはり死んでいる。

一定のタイミングでプラグスーツによる心肺蘇生が行われ、小柄な身体がビクンと跳ね上がる。

本当にただそれだけだった。

MAGIの推論に間違いがあったようだ。なるべく人間に近い思考をするようプログラムされたものだから、何らかの変数が作用して

ズレが生じたのかもしれない。

どちらにせよメンテが必要にはなりそうだと考えたところで、違和感に気づいた。

カノンの両手が、しっかりと操縦桿を握っているのだ。

細い指は固く握り締められ、鋼の意思を宿したかのようにピクリとも動じない。

たまたま指が引つかかっているだとか、そういうのではない。間違いなくカノンが自分の力でそうしている。

腕に力が込められるのを見た。

肩、胴、脚へと命の熱が伝播するのを見た。

そして――。

――遙か古い岩石が動くが如く。

――全身を使つて命を脈動させ。

――尽きた少女の身体は起き上がる。

初号機の首を肉塊が覆い、ボコボコと肥大化する。それが弾け飛ぶと、折られたはずの首が元通りになる。

「なんて再生力だ……」

マコトが畏怖の混じった掠れ声で呟く。

前回は手首だった。

今回は、首。

生命活動に関わる部位だ。

そこを再生させるのは、人の業ではない。

首をゆつくりと回して動作確認を終えた初号機が、地面に張り付いて警戒する使徒を見下ろす。

深い深い呼吸を繰り返す初号機と使徒の間に長い沈黙が流れる。

カノンは固く口を閉ざしたまま一切動じない。

そのまま緊迫した状態が一分ほど続いたところで、ついにカノンが動き出す。

上半身を限界までのけぞらせ、胸を膨らませる。

紫の鬼はその動きに同期する。

腰を沈ませ、一秒後の爆発に備える。

直後、
爆発。

カノンの音のない雄叫びが、通信を通して発令所を白く震わせた。

◆
ゲンドウと冬月は戦闘を再開した初号機を静かに見守っている。
使徒さえ殲滅できればそれでいい。

ダミーシステムが起動できなかったのは遺憾だが、それはまた別の機会にすればいい。

そんなことよりも。

そつと顔を寄せてきた冬月が、やや緊張した面持ちで尋ねた。

「——碓、どつちだ？」

ゲンドウは答えなかった。

ただいつも通り膝をつき、口元を手で隠す姿勢を保っている。

だが、隠した口元は歓喜に震えていた。

◆
猛進する初号機を受け止めんと使徒は四本の手を大きく広げる。

特に危険なのは、肩から伸びる二本の腕。

あれに触れられると、分泌される青い粘液によって生体部品にダメージが入る。

いくら首を自己修復してみせた初号機でも、無限に再生とまではいかないはずだ。

当然、パイロットへのダメージは考慮していない前提での話である。

勢いを殺すことなく加速力をそのままぶつけられた使徒の身体は高く宙を舞った。

市街地に落下し、あたりの建物を薙ぎ払いながら大量の土埃を巻き上げる。

立ち上がる暇すら与えず初号機が再び使徒に肉迫し、全身を使って身体を地面に押さえつける。左の脇で首を掴み、両脚で下半身をガツチリと挟む。

逃れようと暴れる使徒は初号機の背中中の装甲などをガリガリと削りながら抵抗するが、それでも逃れられない。

空いた右腕をうなじに伸ばし、生理的嫌悪感を刺激する粘液に躊躇いなく手を突っ込む。

瞬間、青い侵食が神経を皮の内側を這いずりまわりながら肩へ向けて侵攻し始める。

それでも臆することなくエントリープラグの周囲にこびりついている粘液を強引に取り除いていく。

しかし、突如として初号機が不自然に身体を大きくのけぞらせた。カノンの心肺蘇生のタイミングにシンクロしたのだ。

晒された致命的な隙を使徒は見逃さず、四本の腕を使って初号機を引き剥がして遠くへ投げ飛ばす。

「……、ッ」

カノンの心臓はまだ動かない。

まだカノンは死んでいる。

だが止まらない。止まらない。

たとえどんなことになっても動き続けるという絶対の決意がある。生物学的な原理は一切不明ではあるものの、この一点だけは譲れない。

アスカを絶対に助ける。

そのために屍となってもこのか弱い身体は動くのだ。

しかしながら、そろそろ戻ってこないと本当に死んでしまう。

肉体はとうに酸素不足による硬直が始まっている。それでも加速度的に酸素を消費するカノンの肉体は悲鳴を上げている。

ぎこちない動きで操縦桿を握りなおしたカノンは、硬直に抗うように吼えながら初号機を駆る。

先程の絡みでプラグ周りの粘液はほとんど除去できた。

あとは勝手に緊急射出してくれればベストだが、自力で引き抜いてやる必要があるかもしれない。

おそらくすでに信号は送られているのだろう、プラグが小刻みに振動してはいるものの、先端が僅かに出ただけで、射出までは叶ってい

ない。まだ粘液の残りが滑りを悪くしてしまっている。

痛みによる怯えといった本能のデメリットはないものの、心肺蘇生による身体の震えという致命的な弱点を抱えた状態での戦闘はあまりにも不利。

さらに、時間をかければかけるほどカノンの蘇生の可能性が低下する。もし蘇生に成功したとしても――。

使徒も初号機の狙いは完全に熟知している。そのためにどんな動きをしてくるのかも予想できる。ならばその対策も立てられる。

つまり今ので終わらせられなかった初号機に勝ち目は低くなった。だがやる。必ずやりきる。

そのために、死してなお動いているのだから。

自由自在に伸縮する二本の腕が迫る。

高シンクロ状態のカノンはそれらを華麗な足捌きで回避して最接近を図る。

しかし大ジャンプでその場を離脱され、使徒を捉えることができない。

そしてまた、心肺蘇生による硬直が初号機を襲う。

次の瞬間、逆に使徒に右手首を掴まれる。

急速に侵食され、肩口まで迫る。

普通なら振り解くべく抵抗するべきだが、初号機は逆に使徒の右手首を掴み返した。

そして眼をより一層輝かせると、最後のチャンスとばかりにひときわ大きな咆哮を轟かせて力任せにこちらに引き寄せた。

その圧倒的な膂力に使徒の身体が浮き上がり、激しい衝突音とともに黒と紫がぶつかり合う。

下顎に力を入れ、そのまま渾身の力を込めて掴んだ腕を引きちぎる。

夥しい量の体液と悲鳴を浴びながら、紫は残された時間で速やかに行動に移る。

怯んだ使徒の首に左腕を回して再度固定。

錆びついた機械のように動かなくなってきた右手を根性で動かし

てうなじに突っ込ませる。

指先に触れた硬い感触を頼りにプラグを引き抜き、遙か遠方へ投げ捨てた。

途端、初号機は糸が切れたようにその場に崩れ落ちる。アスカを助けるといふ目的はここに達成せしめられた。

だからもうこれ以上死体が動くことはない。

今度こそカノンの小さな身体はぴくりとも動かなくなった。操縦桿からも手が離れ、操縦席に静かに斃れる。

その顔は、どこか満ちたようにも見えた。

……だが、これで使徒が倒せたわけではない。

使徒は完全にエヴァという存在とは離脱しており、パイロットがいなくなっても活動が止まるわけでもない。

初号機が倒れる。

目の光を明滅させ、やがて消える。

使徒は恨みのこもった視線を向ける。

残された三本の手を手刀として構える。

狙いはすべて首一択。

折るのではなく、切断。

確実に殺すために。

どこまでも引き伸ばされる時間。

ほんの一瞬の出来事が、まるで永遠の極限まで飛ばされたかのよう。

迫る。

鋭い先端が初号機の首を今度こそ狩らんと触れる、まさにその瞬間。

再び初号機に命が灯る。

目に光が宿る。

赤。朱。紅。

展開されたA・Tフィールドとの激しい接触が、黄金の火花を撒き散らしながら辺りの空間を強打する。

衝撃波に市街地は薙ぎ払われ、二体を中心に小さなクレーターが形

成される。

思わぬ防壁に阻まれた使徒の指は激しく損傷し、痛みに苦悶の声を漏らす。

その間に使徒のA・Tフィールドを中和。間髪入れずに速やかな立ち上がりとともに強烈なアッパーを食らわせる。

使徒の身体が数メートルほど宙を舞い、背中から激しく落下する。その上から身動きが取れないように覆い被さった初号機は、悪魔的な暴力で頭部を破壊。その後、捕食した。

——第九の使徒、ダミーステムを解放した初号機によって殲滅。

——碓カノン、心肺停止から八分二十五秒後に蘇生を確認。

——これにて、作戦終了。

◆
何も見えない。

世界は暗闇に覆われ、私の身体は指先ひとつ動かせない。

「……、う」

痛い。

身体中が痛い。

何もできない。

左腕の感覚がない。

……いや、そもそも左腕がない。

脚も……右脚の付け根から先の感覚がない。

何か……べつとりとした液体に私は濡れている。

お腹もやけにすーすーと空気が通り抜ける。

いったい、何が、どうなって。

わからない。

ただどうしようもなくいたくて、もうすぐで死ぬことだけはわかる。

ここはどこ、

わたしはなぜ、

いま、どうなっている。

ことばがはなせない。

のどを血がぎやくりゆうして、溺れそうになる。

「お、っ」

きおくがぐちやぐちやで、あたまがどうにかなりそう。

わたしはいつたい……、

おそろしいほどしずかなばしよ。

ピツピツとおとがきこえる。

「……………てくれ」

だれかのすすり泣く声が、かすかにきこえた。

みに血がたまっているせいか、濁っていてよくきこえない。

そんなことよりも、はやくわたしをどうにかしてほしい。

はやく楽にしてほしい。

いまずぐにでも、殺してほしい。

殺、して……!!

「……………#してくれ、##」

わたしは醜く喘ぐ。

ごぷりとくちから血があふれる。

溺れる。

脳が赤くとける。

どろどろになって、なにもかもがわからなくなる。

「##まで####つた#、##……」

死にたくない。

殺して。

死にたくない。

殺して。

死にたくない。

殺して。

死にたくない。殺して。死にたくない。殺して。死にたくない。

殺して。死にたくない。殺して死にたくない殺して死にたくない殺

して死にたくない殺して死にたくない殺して死にたくない殺して死

にたくない殺して死にたくない殺して——……。

死にたく、ないよ……！

私は残された生命力のすべてを注いでそう叫んだ。

それが泣きじやくつていた人物に聞こえたのかはわからない。

どうせ発せられたのは濁りきった泥水のような声だ。

だがその人は私の言葉を正確に聞き取ったようだ。

ゆつくりと、優しく頭を撫でられたような気がした。

「……わかった。お前がそう望むのなら」

その声を最後に、私の記憶は閉じた。

◇

「ッ!!」

——今のは、何。

私は額に大量の脂汗を滲ませながら顔を上げた。

咄嗟に手足に触れて無事であることを確認する。

あんなのは知らない。

あれほどの痛みは、エヴァに乗っていても味わうことのない壮絶なものだった。

もちろんあれは私の記憶ではない。あれがもし本当なら忘れるはずがないし、あの時に間違いなく死んでいる。

というより、

「……、……」

確か私はエヴァに乗っていたはずだ。

プラグスーツを着ていたはずなのに、なぜか中学の制服を着てい

る。

使徒と戦っていたはず。

使徒と戦って、それでアスカを救おうとして……でも失敗して、首を。

「ウっ……」

一瞬でその時の感触を思い出し、今更のように息苦しさが蘇る。

激しくえづき、喉元までこみ上げてきた吐瀉物をなんとか強引に飲み込む。

苦い味に顔をしかめる。

首を振れば、ふかふかのシートに座っていることによく気づく。

暖かな夕陽の光が窓から差している。

独特の匂いもする。

ここは……電車の中だ。

状況が未だ掴みきれしていない私は現実との乖離に顔に手を当てる。

「私、死んだ……？　それでここは、どこかに行く途中……？」

ガタンゴトン。

ガタンゴトン。

電車は行方も知らぬどこかへと向かっている。

特に……これといって思うところはない。

たぶんアスカのプラグを抜くことには成功した……はずだ。記憶が朧げだが、なぜか知っている。

私は死んだはずなのに。

まあでもいいや。アスカを救えたのならそれでもう満足だ。

まだ死にたくはなかったけど、死が避けられないのなら、まあ、もう、いっか。

ただひとつだけ残念なのは、もつともつとあの家で毎日を過ごしたかったなあ、なんて儂い夢。

どうしてか後悔に歯噛みしてしまう。

小さな嗚咽を何度も漏らし、私は下を俯いた。

「アスカと仲直り、したかったなあ……！」

幾度となく熱い雫が床に落ちる。

ポタポタと。

ポタポタと落ちる。

どこに向かっているのかわからない。

いつ辿り着くのかもわからない。

でもそれでもいいと思った。

時が来るまで、こうして情けなく泣くのが今の私にはお似合いだと思っただから。

「……ごめんなさい」

「」

誰かの声が聞こえた。

弾かれるように顔を上げると、ちょうど向かい側の席に誰かが座っていた。

小学生くらいの女の子だろうか。

逆光で眩しい。それくらいしか全体像を把握できない。

正体を確かめるべく近づこうとしたが、身体はその場に縫い付けられたかのようにびくともしない。

私は必死に目を凝らしながら女の子から視線を外すまいとした。

「ごめんなさい。ごめんなさい。どうか、私をゆるして」

「君は……誰？」

女の子は泣いている。

手で何度も身元を拭いながら私に対する謝罪を口にする。

心当たりのないことを口にする女の子を私は知らない。

不思議と私はこの子に憐れみや慈しみなどといった感情を抱いていた。母性本能……いや、違う。

もつと別の……それこそ、私の魂そのものが強く惹かれた。

この子を癒やしてあげたい。

この子を助けてあげたい。

そんな想いが急に溢れた。

「謝らないで。どうしたの？」

私はゆっくり、優しく問いかけた。

「ごめんなさい。本当はあなたじゃないのに。あなたが苦しむ必要なんてこれっぽっちもないのに」

女の子とは相変わらず脈絡のないことを話し続ける。

それを遮るべきではないと判断し、話したいだけ話させることにした。

「ゆるして。ゆるして。何もできなかった私を、どうか」

「……………」

「私はだめな子だから。弱くて、泣き虫だから」

ガタンゴトン。

ガタンゴトン。

電車は女の子の自責の言葉なんて無視して進み続ける。

どこまでも。

どこまでも。

「……………あなたはここで死んでおくべきだった。生きていても、辛いだけだから」

「そうなの？」

「うん」

「そうなんだ」

「……………うん」

女の子はまだ泣いている。

私は慰めない。

まだ慰めない。

「私は君のことを知らないから、正直あまり信じられないよ」
だからこそ、思ったことを伝えた。

「それは嘘。だって、あなたは私のことを誰よりも知っているから」

「……………そうなんだ」

「うん」

「……………でも」

私の声に、女の子がようやくやく顔を上げる。

やはり顔はよく見えない。

少しだけ、悲哀に歪む口元が見えた。

「もし辛くても、これは私の人生だから。君にどう言われても進むよ。たくさん苦しむことは、エヴァに乗り始めて少しした時くらいに覚悟してるから。もちろん後悔だってすると思う」
そうだ。

私は他人に言われたことをただやってきただけの人間だった。

だから、ここできちんと抵抗しなければならぬのだ。

「どうして、そんなに強く——」

「——だって、生きてるんだから」

私の口から、私のものとは思えない滑らかな言葉を私の意思で出した。

「——」

胸を張って言えるほどではないけど、私より小さな子の前だ、虚勢を張ってでも良いところを見せたほうがいい。

電車が僅かにその速度を落とした。

もうすぐで目的地に到着するようだ。

女の子はすつと立ち上がった。

両頬には涙の跡が煌めいている。

「そっか。あなたは強いんだね」

「そこまで強くないよ。今のはカッコつけようとしただけだし、ついさつきは使徒に殺されたんだから」

「それでもだよ」

女の子が徐々に白い波動となって霧散していく。

私はその様子をぼんやりと見つめる。

「私はあなたではない。あなたは私の罪。……でも」

白い光が車両内を満たす。

女の子は私の名を呼んだ。

そして、力強く、温かく、包み込むような声で続けた。

「応援しているから」

陽だまりのような暖かさだった。

私はゆっくりと目を閉じ、身を委ねる。

そのまま、光はすべてを埋め尽くして——。

◆ 目覚めは恐ろしいほど穏やかなものだった。

「……あ」

覗けた声が漏れる。

微かに乳液の香りがする、病室だった。

「知ってる天井、だ」

重たげに頭を左に向けると、リズムカルな心電図の音が鳴っている。

まだ、意識が覚醒しきっていないようだ。

目を手で擦ってボヤけた視界から覚ます。

生きていたことはとても嬉しいことだが、目覚めたことをまずは報告しないと。

数時間、あるいは数日かはわからないが、皆に心配をかけてしまったのは確かだろう。

ミサトさんやアスカ、それに起動実験に立ち会っていた人たちの安否が気になる。

アスカはこの手で助けたからいいものの、他の人たちは特に心配だ。

とにかく、まずは報告だ。

大雑把にはあるものの、ナースコールのボタンの場所は知っている。

確かベッドの脇にあるリモコンボタンを押せばよかったはず。

身を少しだけ振って探そうと右腕を伸ばす。

「……あれ？」

ふと、強烈な違和感を覚えた。

なんだか手……腕があまり言うことを聞かない。問題なく動くには動くが、実際の動作までにラグがあるというか、重いというか、痺れる。

試しに拳をつくったりを繰り返してみたが、やは動きが鈍い。

左も同様だが、幾分かはマシだ。

「……ああ」

すんなりと納得してしまった。

私が死んでいた時間がどのくらいなのかは知らない。でも、このようなほど長かったのだと、納得してしまった。

私は強がりだ。

アスカと喧嘩をしたときも、皆を助けるためと綺麗事を並べて自分を強引に丸め込んでいた。

だから今回もそれでいけばいい。

この在り方を私は間違っているとは思わないし、仕方のないことだと思う。

ややぎこちない動きだったが、なんとかリモコンを手に取り、ナー scrolls のボタンを押す。

ボタンがオレンジ色に点滅し始めたのを確認してからそつとりモコンを枕元に置く。

ついでに寝返りを打とうとごろりと身体を横に――。

「……え？」

どうしてかよくわからないが、寝返りが打てなかった。

正確に言うと、身体が動かなかった。

よく、わからなかった。

脳が理解を必死に拒んでいる。

掛ふとんをめくる。

恐る恐る異変を感じた部位を病衣の上から触れる。

確かめるようにぺたぺたと。

すべてを余すことなく触れる。それだけでは満足できず、病衣を捲り、直接触れる。

呼吸が荒れ、動悸が激しくなる。

「はぁ……はぁ……っ！」

間違いであってくれと強く願いながら、何度も、何度も。痺れからではなく、受け入れられないという震えが両腕に生じる。

ついには我慢できなくなって、半狂乱になって殴打する。

でもやつぱり間違いなんかじゃなくて。

「……そん、な」

肩で息をしながら、私はだらり両腕の力を抜いて、掠れ声で呟いた。

「……………脚が、動、か」

壊死

かかりつけ医とナースが来るまでの数分間、私は泣きながら脚を叩き続けた。

通信の悪くなったテレビを叩いたら治る、みたいな短絡的な荒療治が通じると思つてやってみただけ。

そのうち、そんなに甘くないことを理解し、赤く腫れ上がったもどうせ感じないのだからと八つ当たりをした。

今まで出したことのない声で呻くように叫びながら何度も、何度も。

病室に入ってきた人たちは私の豹変した様子を見て、速やかに私を押しさえた。

それでも私は暴れるのをやめなかった。

でも起きたばかりで、力も弱いし、腕もうまく動かないし。

両手首を結束バンドでベッドの骨に結ばれて、あつさり拘束された。

どうしようもなく悔しくて、受け入れられなくて。嫌で嫌で仕方なくて、あらん限りの声で叫んだ。

それすら結局は子供の駄々でしかなくて。

両肩をベッドに押しさえつけられ。

鎮静剤を打たれて。

意識を落とされた。



起動実験失敗から一週間。

特殊隔離室にて、黒い棺桶が安置されていた。

その周囲を、高さ三メートルほどの黒い柱が何柱も囲んでいる。地面には赤い霧が立ち込め、物々しい雰囲気醸し出している。

それをガラス越しに見下ろすリツコは、本日何本目かわからないタバコの吸い殻を灰皿に押し付けた。

その頭には痛々しい包帯が巻かれている。

同じように壁に持たれかけながら棺桶を見下ろすミサトの右腕に

はギプスがはめられている。

松代の爆発事故に巻き込まれたものの、なんとか無事に済んだのだ。

本来なら喜ぶべきだが、喜べるはずもなかった。

「細胞組織の侵食跡は消えたものの、使徒による精神汚染の可能性も否定できない。このまま隔離するのが妥当ね」

ふたりの脇で監視データをまとめていたマヤが重々しく切り出した。

「このまま処分ってことはないですよね……もしそうだったら、カノンちゃんが浮かばれません……」

カノンの文字通りの死闘によってアスカを救い出すことには成功したが、綺麗な状態で救い出せたとは言い難い。

使徒と調和状態にあったアスカの身体にどのような危険があるかわからない以上、使徒封印呪詛柱によって使徒の力を抑え込んだ状態で隔離するしかない。

「……処分なんてありえないわ。貴重なサンプル体なもの」

「……とりあえず一命はとりとめた、という認識でいいのよね」

苦々しい顔でミサトが口を開いた。

「ええ。そう受け取ってくれて構わないわ。でも、もしアスカに何かがあれば——」

「それ以上は言わないで」

鋭い言葉に、リツコは素直を口を閉ざした。

しかしすぐさま別の話を切り出す。

「………ついさつき、カノンちゃんが一週間ぶりに目覚めたそうよ。低酸素脳症による記憶の欠落が起こると思われていたけど、どうやら手足に痺れが出たみたい。脚の方は……ダメらしいわ」

「——ッ」

事実のみをすらすらと述べるリツコの口調はどこまでも冷たい。

ミサトはくしゃりと顔を歪めた。

「面会は？」

「無理ね。目覚めてから随分錯乱したらしくて。今は眠らせてるそう

よ」

「そう……」

「以前、カノンの子宮機能が死んだ時、リツコと言い合いになったことがある。」

「これが戦いなのだと。」

「こういうことに耐性はつけておけと。」

「そう、鋭く指摘された。」

その言葉はカノンたちがエヴァに乗る度に、ミサトに重くのしかかった。

「どれだけ言い訳を並べても世界を救えるのは子供たち。大人たちはサポートしかできない。」

本質的に背負っているものは同じだが、傷つくのは現場で戦うカノンたちだけだ。

大人として、女として、保護者として。これからどうカノンに接してやればいいのか。

方法がポンと出てくるほど聡明ではないミサトはさらに顔を歪めた。

しかしそんなカノンのメンタルケアをするのもミサトの仕事である。

「治……らないのよね?」

「絶対にとまでは言わないけど。リハビリをすれば、少なくとも腕はある程度マシにはなるでしょうね。でもやっぱり脚はあきらめるべきかもしれないわ」

「なら……一生車椅子?」

「ええ。そうなるとミサトの家はバリアフリーではないから不便かもしれない。引越しをはやめに勧めておくわ」

確かにあのアパートは通路が狭いし、車椅子の大きさによっては通れないなんてことが起こるかもしれない。

「そうならば必然的に通路に荷物なんて置けないし、そもそも物を出しっぱなしになんてできない。」

ガサツなミサトにはクリティカルだが、カノンのためならば必ず改

善しなければならぬ。

さらに家事もほとんどできなくなるだろうから、ミサトにもその役が回ってくる。

「……どれだけあの子に頼ってたのよ、私は」

そう呟き声で自責したミサトはガリツ、と下唇を噛んだ。

じわりと鉄の味が口内に広がった。



意外なことに、私はこういうのに興奮する系の人間だったようだ。いざ自覚すれば結構楽しい。

少年のような無邪気な喜びを噛みしめると同時に、ベッドで散々暴れたことが恥ずかしくなる。

「どうですか、碓さん？」

看護師に尋ねられた私は、そつと手すりのざらざらした感触を確かめながら返した。

「大丈夫です。使い方もだいたいわかりました。面白いですね、この車椅子は」

ただの車椅子ではない。

電動の車椅子だ。右手側にあるレバーを倒せばその方向に進んでくれるやつ。

正直楽しい。

レバーを倒せば、低いモーター音を鳴らして廊下を緩やかだが進むのは非常に楽しい。

楽しいしか言っていない気がするが、仕方ない。

ご機嫌ななめだった私の気分はすでに普段通りに復調している。

もしこれがエヴァみたいに思考するだけで動いてくれたら最高なだけでなく、と超オーバースペックを夢見たり。

一応手動——自分で車輪を回して進ませることもできるそうだが、今の私の力では絶望的に不可能だ。

「……あの時はご迷惑をおかけしました。すぐく暴れてしまって、私……」

「気にしないでください。あの混乱は仕方ないですよ。それに問題は

これからです」

「そう……ですよね」

そう話しながら試しに手動に切り替えて自力で進もうとするが、タイヤ横のハンドリムを上手く握れず、思うように進まない。

説明を受ける時に、リハビリも兼ねて時々手動で動かす練習をした方がいいと言われた。

だがリハビリについて言及したのは腕と手についてだけで、脚は一切触れられなかった。

……そういうことなんだろうな、と察しはつくが、泥が胸に詰まる感覚だ。

今後の予定としては、念の為に今日一日だけ入院し、問題なければ退院。これから学校はどうなるかが非常に気になるが、友人との付き合い方も多少は変える必要が出てくるだろう。

……というよりここ最近、ゆっくりと、しかしながら確実に学校と私のいる世界が乖離していつてるような気がする。

使徒との戦いは激化する一方だし、今度来る使徒がどれだけ強いかなんて、正直なところ想像もしたくない。

今回は手足の麻痺だけで済んだが、次は本当に死——……。

それに、

「アスカ……」

私の不意な咳きが聞こえたのか、看護師は少しだけ悲しげな顔をした。

「先程も説明した通り、式波さんは特別隔離室にいますよ」

「……私、アスカを救えたんですよね？」

「……………はい。碓さんが助けるのが遅ければ、もっと酷くなっていました」

「……………」

私でもどうかと思うくらい、同じやり取りを何回も繰り返している。といっても、どうしても不安で仕方のない私が我慢できなくなつてつい口にしてしまうのだ。

それも四回もだ。

私がアスカを救ったという事実を、揺るぎないものであるとして私は私を安心させたがっているのだ。

毎回これに付き合ってくれることにはとても感謝しているのだが、そろそろ注意してほしい。

なんだか私が落ち着きのない女の子みたいに思われていそう……いや落ち着きとかそういうことではなく、ちよつと心が不安定になっていると思われたくない、が正しい。

きつと、さつき看護師が悲しい顔をしたのはアスカに対してではない。私に対してだったのだ。

馬鹿みたいに入れていた肩の力を抜き、背もたれに背中を預ける。暗いことはなるべく考えたくない。

私は大丈夫だ。

頭をブンブンと振った私は電動車椅子の練習を続ける。

ふたりきりのリハビリ室で、ずっと、ずっと、虚しい唸り音を響かせながら練習をするのだった。



次の日、特に問題なく退院が許された。

担当医師からしっかりと今後の生活についての話を聞き、家でできる腕のリハビリ方法をまとめた資料を受け取った。

必ず毎日やれば、かなり改善されると太鼓判を押された。

脚はどうですか？ と尋ねると、みるみるうちに顔が自信が抜け落ちるのを見た。

少し、意地悪なことを言ってしまったと思う。

つい吐露してしまった私の心。

でも腕がマシになるだけでもすごく嬉しいですよ、と空回りの元気を見せつけた。

数人のスタッフたちに見送られて玄関を出ると、車椅子を乗せるための車がすでに私を待っていた。

運転手さんが私の接近に気づくと、忙しなく動き始めた。

バックドアを開け、車椅子を乗せられるように短い橋がかけられる。

その間に助手席のドアが開き、よく見知った人物が車から降りた。片腕にはギプスをしている。

「あ……ミサトさん」

「カノンちゃん……」

ミサトさんは私の様子を見て一瞬だけ悔しそうに両拳に力を入れた。

私がそれに気づいたことに気づくと、すつと力を抜いてはにかんだ。

「元氣そうで良かったわ。その車椅子、使い方とかは大丈夫なの？」

「はい、昨日いっぱい練習したんで大丈夫です。一応ちゃんと取扱説明書ももらってるので、忘れてしまっても読めばわかりますよ」

「なら良かったわ。体調はどう？」

「問題なしです」

「どこか身体が痛かったりしない？ 気分は？ あとは——」

「もお、ミサトさん」

さすがに公の場でここまで大っぴらに心配されるのは少し恥ずかしい。

私の考えていることを理解したミサトさんは、ごめんごめん、と小さく謝りながらそつと私の手に触れた。

軍人さんだからか、少しだけ肌が硬い。しかしその内の熱はしっかりと私の手に伝わってきた。

ミサトさんの手を握り返す。

「カノンちゃん、ごめんなさい。それとありがとう」

そう言つて私と目線の高さを合わせたミサトさんは、私のことをぎゅつと抱き締めた。

「——」

いつからなのかわからないが、少しずつ凍り付いてきていた心がほんのりと温められるのを自覚した。

誰かに抱きしめられるなんて経験は、恐らく物心がついた時から一度もされたことがない。

喉が震える。

何か言葉を口にしなければ。

そう思った。

でも上手くいかずに唇が戦慄く。

この温もりにどう返事すればいいのかわからなかった。

ミサトさんは私の鼓動を感じ取ったのか、より一層強く抱きしめてきた。

「あ」

その瞬間、とても気持ちいいと感じた。

気分的な意味ではなく、私の身体が気持ちいいと感じた。

だから、もつと気持ちよくなりたいと思った。

そつと両腕をミサトさんの背中に回し、優しく抱き締めた。ミサトさんほど力入れられないが、私の行動に驚いたのか、目を見開く。

今さつき公の場でうんぬんと心の中で抜かしていた私はすでに裏切られている。

そのまま抱擁は続く。

急に目頭が熱くなるのを感じた。

安心できる人からの私に対する言葉が何よりも嬉しかった。

だが、それと同じくらい悲しかった。

普通の家族ならば、娘の退院に駆けつけるのは両親のはずで、ミサトさんではない。

お母さんはいないし、お父さんは来ない。

また使徒が来れば、きつと何事もなかったかのようにエヴァに乗って戦えとお父さんは一方的に指示するだろう。

今や、私にとっての心の拠り所がミサトさんだけになっている。

そのミサトさんに、私はこれから日常生活を送る上でたくさんの迷惑をかけることになるのだ。

不甲斐なさに思わず唇を噛みしめる。

じわりと鉄の味が口内に広がった。

車椅子仕様車に乗った私とミサトさんは、そのままアパートへと送ってもらった。

バックドアが開き、リフトが伸び、それを使って車椅子で降りる。

私とミサトさんは運転手さんにお辞儀をしてから、アパートに入っていた。

電動ではなく、背面のグリップをミサトさんに握ってもらい、手で車椅子を進める。

エレベーターは車椅子が入ると結構窮屈で、私とミサトさんと、あとひとりくらいならいけるほどだった。

そもそもこのアパートは障害者のことを考慮された設計ではないため、仕方ないと言えば仕方ない。

ミサトさんが我が家のドアを開け、ゆつくりと中に入る。そして私は強烈な違和感を覚えた。

「――」

ほとんど言っていないほど家が荒れていないのだ。

通路にあつたはずの荷物はひとつもなく、ゴミひとつ散らかつていない。

私のミサトさんに対する家庭的評価は下の下だが、いったい何があつたのだろうか。

呆気にとられる私をよそに、ミサトさんがそくさと玄関横に立て掛けられていた、折りたたみ式の別の車椅子を広げた。

そういえば、さすがに外で使っていた車椅子を室内で使うわけにはいかない。タイヤの汚れを持ち込んでしまうから。

テキパキと用意を終わらせたミサトさんは、「ちよつとごめんね」と断りを入れると両腕を伸ばし、私の脇の下を通してがっちり背中をホールドした。

そのまま私の身体はすんなり持ち上げられ、速やかに室内用の車椅子への移動が完了する。

「痛くなかった？」

「は、はい。ありがとうございますミサトさん」

「ノープロブレムよ。自分でその車椅子動かせる？」

タイヤ横のハンドリムに触れる。

凹凸があつて握りやすく、これなら回転の勢いが余って手が滑る、なんてことはなさそうだ。さらに、室内だからこそ手が少し不自由と

はいえゆつくり落ち着いて移動ができる。

「大丈夫です。ありがとうございます、ミサトさん。たぶん部屋がキレイなのも——」

そう言いながら車椅子を動かしてリビングに向かっていると、不意にアスカの部屋の横を通り過ぎた。

きちんとドアが閉められていなかったから、中が見えてしまった。無意識に私はドアに手をかけ、開ける。

中は恐ろしいほど静かだった。部屋の主人とは正反対の……死すら連想させるほど静かだった。

カーテンは閉められ、薄暗い。

鎮座するベッドの上や机の上、さらに床には箱に詰められた荷物が散見された。

これは、アスカはここにはもう戻ってこないという意味を持つ。

さらに意味を深めると、アスカは数日や数週間……いや、それよりもっと療養に時間がかかるということになる。

私のための引っ越しに先駆けて用意している、ということにしてしまいたい。

うなじから脊髄を無理やり抉り取られるような息苦しさを感じ、私は静かにドアを閉めた。

ミサトさんは何も言わなかった。

リビングはわりとコンパクトに整頓されていて、どちらかという比以前よりもキレイに見える。とはいえ普段リビングを占拠しているのはアスカ四割ミサトさん六割ほどで、まあ色々と散らかすことがあった。

しかし今は掃除屋の手が入ったのではと勘ぐってしまうほどキレイだ。

だが、台所の洗面台の方を視線を向けると、やや乱雑に置かれた食器類が顔を覗かせている。

私は小さく笑った。

「どう、カノンちゃん。これくらいなら家の中でも動き回れるかしら」「はい……ミサトさんがすごく頑張ったの、よくわかります」

人格が入れ替わったとしか表現しようがない。

実はそっくりさんでした、なんてネタバラシを食らってもやつぱり
そうですよねってなってしまうほどだ。

「まあね。今まではカノンちゃんに家のことほとんど任せちゃってた
から。どちらかというとかノンちゃんが私の保護者みたいな感じ
だったわ。でもこれからは違う。私がしっかり支えるの」

ミサトさんの曇りない眼が私を見る。

嘘を言っているような口ぶりではないが、それでもどうしても気にな
ってしまふ。

「なんでそこまでしてくれるんですか？ 保護者とはいえ、ミサトさ
んにも自分の生活があるはずです。その時間を私に割かなくても、ネ
ルフに私を預けたほうがずっと楽じゃないですか？」

自意識過剰という自覚はあるが、少なくともミサトさんは私のこと
を好意的に想っている。

しかし、私が手足が不自由になってしまってもこれまで通り接しよ
うとする理由がわからない。

絶対に「面倒だな」とか「邪魔だな」といった不快な気持ちがある
はずだ。もし私がミサトさんと同じ立場になったとしたら必ず一度
や二度は思ってしまうと確信している。

私はそこまで良い人ではないから。

ミサトさんは落ち着いた口調で、諭すように言った。

「だって、私はカノンちゃんのことを好きだから」

スキだから。

好き、だから。

私は言葉の意味を咀嚼するのに数秒ほど時間を要した。

どうやら私は『好き』という言葉に対して絶望的に耐性がないよう
だった。

みるみるうちに顔が赤面するのを自覚し、陸に打ち上げられた魚の
ようにぱくぱくと口を開閉させる。

「もちろん人としてって意味よ。変な意味で受け取らないでね？」

「ももも、もちろんですとも!!」

自分のものとは思えない、変に上擦った声が喉から溢れ出てしまった。

ミサトさんは私の反応がよほど面白かったのか、いたずらっぽい笑みを浮かべる。

面と向かって好きななんて言われたことが初めてだから、つい少女漫画の主人公並みの想像が爆発してしまったただけだ。

胸に手を当てて軽く深呼吸。

平然を取り戻す。

「勇気のあるところ、子供とはいえ人として本当に尊敬しているわ」「勇気、ですか。すごく頑張ってる、とかではなく？」

「頑張るのはもちろんある。私が言いたいのは……そうね、気持ちの問題。例えば前の作戦で、アスカが使徒の落下に間に合わないとかかった時。あの時点で本当はもう作戦は失敗のはずだった。でもカノンちゃんが勇気を出して、死にももの狂いで走って、それで間に合わせた」

それがアスカと仲違いをしてしまった大きな原因のひとつになってしまったが。

「……………」

「正直私も少しだけ、ほんの少しだけ諦めに入ってた。でもカノンちゃんの声に目が覚めた。あれほど頼もしいと思ったことはなかったわ」

「あの時は私も必死で……………」

「ずっと前からエヴァに乗るために訓練をしてきたアスカやレイじやなくて、カノンちゃんが他の誰よりも勇気を出した。私達よりもね」

「こればかりはどうしようもないけど、これからもエヴァに乗ってもらうことになる。きつと、辛い目にあうこともあると思う。だからこそ、身も心も落ち着ける場所……この家、そして家族として支えてあげたいの」

ミサトさんの瞳は微かに自責の光が煌いていた。

その念から来ているものなのかと邪推してしまったが、態度がそう

ではないと一蹴する。

私がおもしネルフに預けられたらどうなるだろう。社宅のようなものが与えられるのか。でも私の身体のこともあるし、比較的対応のしやすい社宅といったところか。

ヘルパーも割り当てられるかも。

それだと確かにひとりではないものの、その人とは仕事としての関係のみだ。

ネルフから学校に行き、帰り、訓練をして、身の回りの世話をしてもらい、使徒が来たら出撃する。

……私の心身の休息は万全とは言い難い。

ただ学生の皮を被った、障害者でありエヴァのパイロットになってしまう。

エヴァに乗って戦うためだけに消費される駒になりたくはない。

あまり高望みができないことは薄々理解はしているが、なるべく普通に暮らしたい。

それを叶えられるのは、ミスラさんという心の拠り所があつてこそなのだ。

悪い言い方をするならば、これは依存だ。

でもそれでいい。私は子供だから、大人の善意には素直に頼らせてもらう。

私の顔から答えを読み取ったミスラさんは、満足そうにひとつ大きく頷くと、

「よし！　じゃあ今日は私が夕食を用意するわ！　って言いたいところだけど……片腕折れてるからできないのよねえ。だから今日は出前のピザで!!」

さては私がない間、好き放題食べたいものを食べまくっていたな。

私の了承を得る前からすでに出前をとるべく非常に手慣れた動きでカタログを読み始めているさまは疑いようがない。

この人は食に関しては全力で匙を投げるほど絶望的なので、間違はなく野菜なんてほとんど摂っていないだろう。

栄養の偏った生活は良くない。

「ええ、はい。いつものと同じで！ ああ、一応Sサイズで同じものを一つ追加でお願いしまーす！」

うーん、清潔面では成長したが、食生活はグレードダウンしたと言わざるを得ない。

そんなことを考えながら私は、注文を終え、上機嫌にこちらを振り向いたミサトを達観した目で見つめるのだった。



——不意に、ある衝動に駆られた。

しばらく放置されていた自分の部屋をあらかた整理し終え、一息つくこうとした時だった。

下半身——膀胱に強く感じる尿意に、私は口を横一文字に閉ざして顔を強張らせた。

「……、う」

結構溜まっている。

しまった。

片付けに集中しすぎたせいかな、今になって気づいたとは。

股のあたりをもじもじさせることができず、両手をぎゅううう、とあてて少しでも楽になろうと試みる。ちよっぴりだけ楽になってから、手を離す。

やや前傾姿勢になりながら自室を出た私は一直線にトイレへと車椅子を向かわせる。

リビングでは、ビールを飲んだミサトさんがテレビをつけっぱなしでソファアーに寝腐っている。

起こさないように慎重に、しかしながら迅速に車輪を回す。

両腕に力を込めると下半身への力が緩み、尿意が一気に波のように押し寄せてくる。

「くう、っ」

懸命に身を振らせながら辛抱を強要し、額に脂汗を滲ませながら前進する。

残り五メートル。

たったそれだけなのに、途方もなく遠い。
トイレまでの道のりは、これほどまでに遠く、険しいものだったのか。

ただでさえ腕にうまく力を入れられないのに、それにプラスして尿意のダブルパンチ。

顔に皺を寄せ。
身を振らせ。

我慢に我慢を自分の身体に強いながら必死の意思力を振り絞って前進する。

四メートル。

三メートル。

二メートル。

一メートル。

あとほんの少し、と安堵してしまったせいか、身体の緊張のほとんどが解けてしまう。

「んんっ」

決壊寸前のダムを巨大ハンマーで叩かれるような感じ。

あと十数秒も持たずに決壊するだろう。

だがドアは目の前で、ドアノブに手もかけている。

それこそ使徒との戦闘状態にある心持ちで、私はドアを開いた。奥へ進み、便器の蓋を開ける。

そして私はようやく気づいた。

「——あ」

どうやって便器に移ればいいのか……？
今さらすぎた。

病院では看護師がトイレの度に私に追ってきて、車椅子から移動させてくれていた。

ずっとトイレに行くことしか考えていなかったせいで、そんな基本的なことを忘れしていたのだ。

というよりそもそも、このトイレは狭いから、車椅子から便器に移るのも一苦労だ。

「ミサ——」

咄嗟にミサトさんの助けを借りるために呼ぼうとしたが、すでに遅かった。

我慢の限界を超え、決壊が始まる。

静かに股が湿り気と生暖かい液体で濡れ始め、車椅子の骨を伝って床にぽたぽたと滴る。

解放感と不快感という矛盾する感覚を味わいながら、私は必死に股を抑えた。

「ああ……！ あああ……っ!!」

止まらない尿を、止められないことなんてわかっているのに止めようとする。

しかし当然止まらない。

呆れかえるほどのそれはすっかり車椅子とスカートをびちゃびちゃに濡らした。

「ん〜？ どうしたのよ……って……」

寝ぼけ顔のミサトさんが眠そうに目を擦りながらやって来る。

そして、私と私の足元を見て、すべてを察したミサトさんは目を見開いた。

『そう』見られた瞬間、私のあまりの情けなさを自覚してしまった。

じわりと視界が滲み、歪む。

それが羞恥、そして自身への嫌悪からきたものと理解するのにそうかからなかった。

立ち尽くすミサトさんと目が合う。

ぽろぽろと涙が止まらない。

「嫌っ……見ないでえ……!」

弱々しい声で拒絶しながら、この世からいなくなりたい一心で顔を俯かせた。

まさかこの年にもなっておもらしなんてあり得なかった。

しかもその醜態を見られるだなんて一生の恥。

色んな感情がぐちゃぐちゃになって、その出口として口から短い嗚咽が垂れ流される。

この状況を一刻も早く何とかしなければならぬのはわかってはいるが、身体は鉛のように動かず、泣き続けることしかできない。床に黄色い水たまりをつくった私は蹲ることしかできなかった。完全な思考の放棄だった。

「大丈夫……大丈夫だから、ね？　いったん身体を拭きましょう」
ミサトさんはそう言い、ゆっくりと私の服に手を伸ばした。

私は抵抗せずそれを受け入れる。裾を上げられ、素直に両腕を動かして袖口から抜けるようにする。

そのままスムーズに上の服は脱がされ、スカートも脱がされる。汚く濡れたそれらを、ミサトさんは摘み持つみたいなのはせずに両腕で床に垂れないように気にしながら洗面所へと運んでいった。

下着姿になった私はしくしくと泣き続ける。

「もう少し後でいいかと思ってたけど、お風呂も焚けてるようだしもう入っちゃうわ！　温かいお湯で綺麗にするわよ」

「……はい」

ミサトさんの右腕が背中に。左腕が太腿の下へと回され、ひよいと私の身体を抱き上げた。

これは私が軽いのではなく、単にミサトさんが軍人で、力持ちだからだろう。

いわゆるお姫様抱っこをされて運ばれるのはなんとも言えない心境になる。

洗面所の脇にはまた別の車椅子——シャワーキャリーが折り畳まれている。

一度私を床に下ろし、シャワーキャリーを組み、私をもう一度抱きかかえてそれに座らせる。

「うーん、やっぱ引越ししないとだめね。お風呂もトイレも狭すぎるわ」

「……………」

「後から私も手伝うから、先にシャワーだけでも自分でできる？」

「はい、大丈夫……です」

「ん、よろしい。そんじゃ、ちよつち待っててね」

さすがに下着は自分で脱ぎ、選択籠に入れる。
シャワーに手を伸ばし、触れる。

ひんやりとしたステンレス素材の感触。さすがにこれすら掴めないほど腕と手が死んでいるわけではない。繊細な指使いは要求されないから問題はない。

レバーを捻り、水を出す。

初めは冷水で、数十秒ほどで温水になった。

貪るように頭からそれを浴びる。

じんわりと頭頂から温かさが浸透し、つい無意識に身震いする。

不快だった股の部分も、すでに流されて今では温かくて気持ちいい。

そして不意に、いつの日かミサトさんが言っていたことを思い出す。

『風呂は命の洗濯よ』

懐かしむほど昔のことではないが、確かにそのとおりでと思った。

今日一日で溜まったヘドロをさっぱり綺麗にしてくれたような気がした。私はいつも以上に長い時間を使ってシャワーを浴び続ける。

「あ、は——、あ」

あまりの気持ちよさ、快楽に口から嬌声に似たものが溢れる。

頭、うなじ、胸、腹——両脚、はやはりと言うとべきか、何も感じ

られなかった。まるで死んだ肉塊のようだった。

そうこうしているうちに、ドアを開いてミサトさんが戻ってきた。

ギプス状態の片腕の上に専用の防水カバーを装着して準備万端と
いった様子だ。

「おっ待たせー！ 身体は流せたかしら？ さあさあ、狭い浴室でえ、
濃密なスキンシップをしましょうね〜！」

やや猫なで声のミサトさんを少し気持ち悪いと思ったのはこれが
初めてのことだった。

理解度ゲージがほんのちよっぴり下がったのを感じながら私は口
を開いた。

「……スキンシップってなんですか」

「わかってるくせにー。カノンちゃんって初心と見せかけて実はむっつりだったり？」

「そ——」

んなことはないです、と言おうとしたが、その猶予は言えられなかった。

「ま、とりあえず身体洗うからちよつち背中倒すわよー」

と唐突にそんなことを言っつて、本当にシャワーキャリーの背もたれをスライド式で下に下ろした。

「わっ!!」

事前通告があつたからとりあえず後ろに倒れずにすんだが、脚が使えないため、お尻に力を入れて体勢を維持しないといけない。

背もたれも腰のギリギリくらいの高さは維持してくれていて、一応の体勢は辛くない。

手際よくスポンジに泡を染み込ませたミサトさんは「失礼するわよー」なんて意味のこもつてない呑気で、もはや事前承諾ですらないレベルで物言いで私に告げた。

まずは背中をゴシゴシと擦られる。

少しだけ荒つぽい。

が、それはそれで気持ちいい。

誰かに背中を洗ってもらうというのはとても新鮮な体験だ。

力強く。でも丁寧にミサトさんは手を動かす。

「どっっ？」

と訊かれ、

「いい感じ、ですう……」

と甘い熱の孕んだ返事を返す。

「はーい、次は前ねー」

「え」

思わぬ申し出に、私の昂ぶっていた気持ちは急速に平常に戻された。

「前くらいは自分でやりますしできます。それに、は、恥ずかしいですよ」

「ぬあに言ってるのよ。ここまできたら全部私に任せなさい！」
ノリと勢いだけで全力で意見を張られてしまうとうどうも負けてしまおう。押しに弱いと言うべきか。

ここで変に意地を張ったらさらに面倒なことになると悟った私は、素直に頷いておいた。

別に変に意地悪をしてきたりすることはなく、つつがなくシャワーで流してもらうまでした。そのまま頭まで洗ってもらった。

「さすがにそれごと浴槽には浸かれないわね。ちよつと失礼するわ」
その後自分の身体を洗い終えたミスатоさんは、胸に向けられた私の視線に気づいた。そこには痛々しい大きな傷跡がある。「あー、これはセカンドインパクトの時にね」と濁すように言った。

私はそれ以上首は突つ込まなかった。

両腕を伸ばして私の身体をシャワーキャリーに乗せたときと同じように抱きかかえ、ゆっくりと浴槽に足を踏み入れる。

お姫様抱っこ体勢の私はお尻から浸かることになり、じんわりと熱がそこから広がっていくのを感じた。

脚が動かせないから、浴槽でバランスを崩して溺れてしまわないようにミスатоさんの股の前に座らされ、腕がお腹の前に回される。

確かにこれなら安心してゆっくりできそうだ。

「……………」
「……………」

ここまでミスатоさんに流されて来ていた。

そもそもこうして突発的に風呂になってしまったのは私があればしたからであって、ミスатоさんからの言及はまだない。あるいはするつもりすらないのかもしれない。

この人は優しいから、見なかったこと……いや、仕方のないこととして受け止めているのだろう。

でもそれに甘えてスルーしてしまうのは違う気がして、私の口はしっかりと謝罪の言葉を口にした。

「……………ごめんなさい、ミスатоさん」

すぐに反応は返ってこなかった。

しかし幾ばくかの間を開け、ミサトさんは言った。

「いいのよ、気にしないで。私が気づいてやれなかったのもあるし、そもそもこの家はバリアフリーじゃないんだから」

そうじゃない。

「もつと上手くできていたら、絶対にあんなことにはならなかったはずなんです……」

「何言ってるのよ。ここには私がいるんだから、ちゃんと私を頼りなさい」

「……………」

頼るといつても、そうになるとミサトさんにかかる迷惑はとてつもないことになる。

今のお風呂を始めとして、料理は座高とキッチンが合わなくて駄目、洗濯物を干したるするのも駄目、トイレだって補助してもらわないと駄目。

私にできないことを助けてもらうにしてもミサトさんがオーバーワークになってしまう。ネルフの作戦部長にこれ以上――。

「今、もう迷惑はかけられない、なんて考えてたでしょ」

「……………」

「その顔を見ればビンゴね」

私は沈黙で肯定した。

少し姿勢のずれてきた私の身体を抱きかかえ直し、ミサトさんは穏やかな口調で言った。

「変に気を使わないでいいから、たくさん頼ってほしい。私もたくさん頼りになりたいって思ってるから」

「……………本当に色々迷惑かけてしまいますよ?」

「ついさっきだって、私が汚してしまった床を拭いてくれたのだから。それだけではない。」

車椅子も濡れてしまったから、カバーを洗わないといけない。

だからそれが乾くまで私はミサトさんの助けなしに移動すらできない。

「どんと来いよ。引っ越しの手続きも終わってるし、来週くらいには

業者を呼んで荷物を運んでもらうから」

お金は大丈夫だったんですか？ と不意に訊こうとしたが、ミサトさんは超法規組織の作戦部長だからまあまあ弾むはずだし、ネルフ側からも何らかの補助は出しているだろうと思いい口を閉ざす。

ミサトさんと肌を密着させているせいで、浴槽の熱湯から感じるものとは違う熱さを感じている。

絹のような……陶器にも少し似た滑らかな肌の感触が背中からまじまじと伝わってくる。女同士だというのについ顔を強張らせてしまう。

変に身じろぎできるはずもなく、悶々とした時間が流れる。

もしアスカがいたら、こんなになってしまった私のことを助けられるのだろうか。

ふと、そんなことを考えてしまった。

きっと積極的には助けられない気はするが、本当に助けてほしい時は必ず振り向いてくれると思う。

……でかでかのため息を吐きながら。

私はくすりと小さく笑った。

「どうしたの？」

母性の滲む穏やかな声がかけられる。

「いえ……こうして四六時中ミサトさんと一緒に過ごすのは、少し緊張するけど楽しいなって……私みたいな子でも大切にされてるんだなって思っただけです」

アスカはもうこの家にいない。

私とミサトさんだけ。

私は身体と心をボロボロにしながら未知の敵と戦う。

ミサトさんはそんな私を介護する。

「ぬぁに言ってるのよ。大切に決まってるじゃない。あなたはこんなに可愛くて、健気で、優しい子なんだから。私が言えた立場じゃないけど……カノンちゃんを守りたい。こんなにたくさん辛い目にあっただから、それ以上に幸せになってほしいって、本気で願ってる」

ぎゅっと強く抱き締められる。

私は両手をミサトさんの腕に触れる。

——ああ。

——ああ。

これほどまでに私を大切に想ってくれているのか、この人は嬉しい。

頬が急激に熱くなるのを感じた。

この人がもし私のお母さんだったら、どれほど恵まれた生活を送れたのだろうか。

私は腕を絡ませ、

静かに瞼を下ろし、

優しく頬擦りしながら言った。

「……ありがとうございます、ミサトさん」

自分でも驚くほど落ち着きのある、でもどこか虚しさや弱々しさが混じった声だった。

……そんな中で。

私も——

私の周りも——

これからもずっと、

ゆっくりと暗闇に蝕まれるかのよう。

壊死していくんだな、

と……思った。

これから

「人の心というのは、私達が思っている以上に脆いんですよ。大人だろうともね。今の世はストレス社会。誰だって愚痴の一つや二つ、三つや四つはあります。ようは発散したいのです。だから私達が発散して発散先を用意する。そうすれば皆はそこにストレスを発散して気持ちよくなることができる。私たちもアクセス数が増えて気持ち良くなる。そしてネタを骨の髄までしゃぶり尽くしたら次です。Win-Winの関係じゃないですか。世論なんて結局のところ、人の醜い所を食い物にしている、さらに醜い人たちによって操作されるんですよ」

矢作ユウジは饒舌にそう言い、優雅にアイスコーヒーを啜った。

角砂糖はふたつ。

矢矧の言う言葉に、同業者たちは深く頷いた。

卓上に並べられた資料の山は矢矧が独自に調べたものだ。数週間にも渡って調査し、まとめられたものは「確信ができていない情報だからこそ、信憑性がある」。

適当すぎることをでっち上げて記事にするとこちらに批判が向けられかねない。その点を考量した、必要な調査だった。

「私の予測では、この少女が怪しいと睨んでいます」

そう言って矢矧はホワイトボードに貼られたある写真を指す。

盗撮ではあるものの、ピンぼけなどのない見事な写真映りだ。

駅の人混みにもみくちゃにされそうになって、四苦八苦している少女の姿。

「彼女の名前は碓カノン。ネルフ総司令である碓ゲンドウ氏の一人娘です。最近になってなぜかこの第三新東京市にやって来て、現在はゲンドウ氏の部下と同居していると推測されます。私がネルフ職員たちが通勤する際に利用すると思われる駅に張り付き、調査中に発見した次第です」

ネルフには、この街にやってくる脅威に対抗するために巨大ロボットが存在する。

そのロボットは有人であり、パイロットは子供でなくてはならない。

超極秘情報はこのふたつだけで十分すぎる。

あとはどこにいるかわからないガードマンの意識に留まらないように注意しながら、駅を頻繁に利用する子供をリストアップ。あとは継続して監視を続け、中でも頻度の高い子供が黒ということになる。それが碇カノンだった。

……が、それだけでは決め手にかける。

まだ行動に移すには理由があと一歩足りない。

「ですがそれは、本当にただその駅をよく使うだけで、ネルフとは関係ない可能性があるのでは？」

そんな冷静な指摘が矢矧に投げられた。

矢矧は待つてましたと言わんばかりにすう、と目を猫のように細め、口の端を吊り上げた。

「ええ、仰るとおりです。なので決定打となりうる情報をいくつか。先日、松代で爆発事故があつたのを覚えていますか？ ネルフが少し前から何かの実験で封鎖していた区域です」

矢矧たちは知らないが、あそこでエヴァ3号機の起動実験が行われていた件である。

「運の良いことに、あの時私は駅で張り込みをしていました。SNSで松代方面で爆発らしきものがあつたことを知ってほんの数分後、なぜか必死な顔で彼女が駅に姿を現したのですよ。普段通りの時間ではないにも関わらず。さらに。なぜかその日から駅に姿を現すことはありませんでした。さらにさらに。しばらくしてなぜか病院から車椅子の状態で退院したのを目撃しました」

矢矧にとつては強運だが、彼女にとつては悪運だった。

時には運をも味方にしなければならぬ時もあるが、それを司る女神はどうやら気まぐれなのか、男の方に微笑んだようだった。

泥臭く、己の目的のために地道に努力する。そこに目をつけられたのかも知れない。

情報というものは鮮度が大切だ。

スーパーなどで刺し身で販売されている魚より、市場から直接仕入れた魚のほうが美味いに決まっているのと同じように。

同業者たちは静かに空気を吸った。

互いに顔を見合わせ、次に退院の瞬間であろう盗撮写真を舐め回すように吟味する。

そして。

餌を見つけた肉食獣のように目をギラつかせたものへと変えた。

この時、矢矧は勝利した。

「この子がパイロットであることは私達には断定できない。あくまで信憑性の高い噂話、でしたよね？」

ひとり最終確認ともいえる質問をしてきた。

矢矧はコーヒーを飲み干し、あえて溶かさずにカップの底の方に積もらせていた砂糖を口に含んだ。

ガリッ。

ガリッ。

奥歯で満遍なく噛む。

極小の粒がすり潰される感覚。脳に響く快音。

猫は満面の笑みを浮かべて答えた。

「はい。ですので皆さんに手伝って頂きたいことがあるのです。もちろんこの情報を世に出してもいいのですが、もう少し踏み込んでこそ面白いというもの」

好奇心は猫を殺すという。

猫を殺すのは、秘匿しようとする何者か、あるいは秘匿されている秘密そのものなのかはまったくの不明。

だからといって猫とて何もしないわけではない。するりと危険を潜り抜け、死ぬ寸前まで突き進む。それは知性がまだ人に劣るせい、はたまた好奇心が止められないからか。

どちらにせよ、ここにいる猫たちは後者なのだろう。

「——本人に直撃インタビュー、したくないですか？」

砂糖なんかよりも甘美で蕩ける、毒を孕んだ濃密な脳汁が、どくど

くと分泌されるのを彼らは感じた。

◆ 新しい日常を始めるにあたって、いくつか劇的に変わるものがある。

それは、家と学校だ。

家は言わずもがな引越しのことで学校とは車椅子で学校生活と向かい合うことになる。

ちなみにまだヒカリたちには歩けなくなったことを伝えていないため、どう穏便に伝えられるのかを悩み果てている。

フランクに言ったら逆に怒られそうだし、重々しく言うと、私に遠慮がちになってしまいそう。

「やっばい……」

今更ながら、スマホに届いていたメッセージの量に戦慄する。

使徒との戦いから約二週間、なんの音沙汰が無ければ心配されるのは当然だった。

クラスメイトから個人で私を心配する旨のメッセージが溜まりに溜まっている。中でもヒカリのものが尋常ではない。

夜中以外、一時間に一件は必ず送信してきている。

嬉しさ反面、恐怖に顔を引きつらせながらそつとヒカリとの個人チャットを開いた。

そのほんの数秒後。

『あー!』

『『あ』?』

私が既読にしたことを瞬時に認識したのか、鬼のようなスピードでメッセージが送信されてきた。

『大丈夫なのカノン! ずつといなくなってたから本当に心配したんだから!』

「ひえっ」

今の素早さで嬉しさより恐怖がごく僅かに上回ってしまった。

ずつとチャットに張り付いていないと気づけないレベルのはずだ。

やや控えめに指を動かして文字を打ち込んで送信した。

『どうも、お騒がせしました……』

なるべく下から下からを意識して謙る。

確かに心配させてしまったのはどう考えても私が悪いし、ここは大
人しくすべてを受け入れようと広大な海になった気持ちで身構えた。

しかし、てつきり怒涛のチャットラッシュが始まるかと思いきや、
電話のコールが鳴った。

……まあ、そうなるよね。

と考えながら電話に出た。

「……もしもし」

辛うじて出せた第一声。

『……………』

「あの……ヒカリ？」

電話の向こうは沈黙したままだった。

「その……ごめんね？ 色々」と

『……………』

まだ沈黙は続く。しかしかすかな息遣いは聞こえてくる。

そして大きいため息にも似た声を漏らすと、ようやくヒカリの声
が聞こえた。

『よかった……本当に、良かった』

深みのある、暖かい声。

その言葉で、真にヒカリがどれだけ私を心配してくれていたのかを
認識した。

私は心の底から謝った。

「……………うん。本当にごめんね」

『いいのよ……こうしてカノンと話せているんだから。カノンの声
が聞けてよかった』

「私も、ヒカリの言葉が聞けて嬉しいよ」

『……………』

「……………」

それきり、ぴたりと会話が止まってしまった。

私はもちろん、ヒカリもきつとどう話を切り出せばいいのか悩んで

いるのだろう。

さすがにここでヒカリの言葉をただひたすら待つほど私の社交性は低くない……と思う。

「あー」とか「うー」と茶を濁しながら私は続きを促した。

「その……たぶん何があつたのかとか聞きたいんだと思うんだけど……そうだね、うん。ちよつとこれは話しにくいというか、あ、えつと……」

いくらネルフによる秘密保持という制約を背負っているとはいえ、これほど心配させてしまったのだ。八割くらいぼかしてなら教えてもいいのではないか、という考えが浮かんだ。

スマホを持っていないもう片方の手は勝手に握り拳を作っていて、生温い汗を握りしめている。

しかしこのスマホはネルフ支給のものだから、間違いなく内容は把握されてしまうだろう。

もどかしさなどといったものはない。

私はそういう世界の人間なのだ。

口を閉ざし、舌の上で言葉を転がし、飲み込む。

「……ごめん」

で、結局私の口からはこれしか吐き出せなかった。

『まあ……そうよね。話せないこともあるわよね。私からは深く聞かないでおく』

「ありがとう」

『それで、いつくらいから学校に来れるの？ そろそろあの馬鹿ふたりを私だけで抑え込むのも疲れてきてたわ』

「なるほどね……ふふ」

容易に誰のことを言っているのかがわかってしまうのがちよつと面白くて、つい私は口元を緩めた。

「もう数日だけ自宅療養をして、引越もしないといけなから……来週の頭くらいかな」

『引越し?! カノンどこか行っちゃうの?!』

ヒカリの驚愕は、声からでもよく伝わった。

確かにそれは初出しだったな、と思いつながら少しだけ説明した。

「あーそんなことはないんだけどね？ 転校するとかではないし、ただバリ……少しだけ便利な家に移るだけなの」

『そうなんだ。ということはアパートに住んでたわけだから一軒家とか？ それだったらいいわね！ ほらこの前言ってたじゃん？ 式波さんの荷物で自分の部屋まで侵食されてるって。部屋も増えるだろうから解決ね！』

「——うん。そう、だね」

突如出てきたアスカの名前に、私は喉の気道を僅かに詰まらせながら返事した。

アスカのことをどう説明すればいいのかわからない。大怪我を負ったから入院をしている、で誤魔化せるだろうか。その場しのぎの付け焼き刃にはなるが、薄々気づかれるかもしれない。

大怪我なんて可愛いものではなかった、と。

日常の生活との乖離がより大きく……溝が深まった気がする。

不意に机の上にある目覚まし時計に目をやると、十一時を過ぎていた。そろそろ眠いし、明日はまだ平日とはいえ学校は休むし、引越しの用意を手伝わないといけない。

ほとんどはミサトさんがやってくれるが、正直なところ、すごく心配だから見守り役に徹することになりそうだ。

新しい生活が始まることにどんな感情を抱いているのかと自問するならば、良く言ううと新鮮味がある。悪く言えば、やはり壊死だろう。

「ヒカリはさ、私のこと……どう思う？」

少し雑念が混じっていたせいか、口にするつもりがなかった言葉をぼつりと口にしてしまった。

これは失言？

いや……妄言に近い。

どちらにせよ酷い質問であるのを悟ったのは、自分で気道に力を入れて呼吸を止めていたことに気づいた時だ。

口内に溜まった唾液がうまく飲み込めず、強引に嚥下するように喉を上下させる。

私の沈黙の意味を汲み取ったのかどうかは不明だが、ヒカリは真剣な口調で答えた。

『人のことを想える、可愛らしい女の子』

感情をフラットにした、滑らかな答えだった。

――

『恥ずかしいこと言っちゃったわね。ちよつと緊張しちゃった』

『そんなことはないよ。ありがとう』

あまりにふわつとしていて、かつ酷い質問だったにも関わらず真摯に答えてくれたことに私は感謝した。

『……あの、ね』

だからもう、先に告白することにした。

「私とアスカ、大怪我をしたんだ。アスカはずつと意識不明。私は両手と両脚が麻痺。脚の方はもうダメみたい。だからこれからずっと車椅子生活。今のアパートじゃ住みにくくなったから引越すすることになったの」

さらさらと、右から左へ流すように結末を端的に述べた。

いざ話してみると意外に呆気ないな、なんてあっさりした感想が湧き上がるのを感じながら言葉を続けた。

「その前にも私、お腹を貫かれて子供ができない身体になった」

『……』

「たぶんだんだん、私は違う私になっていってるんだと思う。悪い意味で」

私という人間を変えたい、という第三新東京市に来た目的は、負の方向に順調に達成されつつある。

『……』

「それが嫌ってわけではないんだ。みんなを守ることこそが私の生きる理由になっっているし。こんなことは昔なら絶対になかった。だから辞めたいとは思ってない……ただ」

『……ただ?』

「……このままだと私、近いうちに学校にも行けなくなるんだろうなって……二度と日常には戻れないなっていう予感……確信がある。」

実際、アスカは……」

目覚めないし。

途中からではあったものの、必死に助けようと頑張ったのに。それこそ、私が死んでも。

あの結末で本当にアスカを助けたのだと胸を張って言えるのだろうか……？

私の考えていた『助ける』とは命を救うことで、これだけを見るなら確かに助けられた、と言える。

しかし僅かに視点をずらせば、アスカを使徒の汚染からは救えていない。だから私は、アスカの命は救えたものの、アスカ自身を救うことはできなかった。

悪いループに足を踏み入れかけていることは自覚している。でも、そうすることでなんとか私の気持ちを制御しているのだ。

薄氷の上。自分の熱で氷が溶け、絶対零度の水に溺れそう。

「ごめん、なんか辛気臭い話をしちゃって。学校に戻ってきたらいっぱい迷惑かけてしまうかもしれないけど……どうか、私をよろしくお願ひします」

なるべく力強く、しかしながら細い声で頼んだ。

『敬語なんていいから、頭を上げて』

「……うん。ごめん、なんか」

『そんなに謝らないで』

「(ぎ)……うん」

『……それと、もう泣かないで』

口内が赤く震えた。

首から上が妙に熱いと思ったら、私は泣いていたようだった。

知らず知らずのうちに嗚咽の混じった声になっていた。

知らず知らずのうちに胸に溜まったヘドロを、汚いまま吐き出していた。

どうりで目の前がこれほどまでに霞んでいたのか、と今更ながら納得した。

私は今の私に対して憐憫の情を抱いている。

哀れで可哀想な女の子。皆が氣遣ってくれて、大切に想ってくれている。でも戦いは自分にしかできないから、懸命に身を捧げる健気な女の子。

それが私だ。

仮面を被っているのは認める。

皆にちやほやされるのは心地よく、気持ちいい。しかしこれも紛れもない私だ。

だが、ここ最近の心身の傷が仮面に亀裂を走らせている。だからつい本音をぼろりと吐露してしまったのかもしれない。

喉の奥で激しく喘いだ私は、口を横一文字にきゅっと引き締めた。

右耳に当てたスマホを左耳に当て、そつと濡れた目元を拭う。

深く、深く、ひとつだけ深呼吸をする。

『カノンの本音、少しでも聞けて嬉しい』

「本当は私は……強くなんかない。皆のために頑張ってるだけ。本当はエヴァになんて乗らなくても、きつと私は変われる。それでもエヴァに乗り続けているのは——」

誰かに、アスカを助けたときに死んでおくべきだったと告げられたことがある。

生きていても辛いだけだから、と。

全くもってその通りだ。

間違はなく私はこれからも傷つき続ける。何かを捧げて皆を助ける。今度は果たして何を捧げるのか。

人々に求められるままに、鍛え、戦う。

その在り方はまさに聖人と言えるだろう。

もちろん怪我のないように心掛けるつもりではあるが。それでも命の張りどころというのはどうしても存在する。

そういった場面に遭遇した場合、大半の人は腰が引ける。しかし私はどうやら逆で、血気盛んになる。果たしてどちらが普通だろうか。

私は決して聖人になろうとしているわけではない。望んでもいない。

ただ、

「——なんでもない、子供っぽい正義感と承認欲求からなんだと思う」立派な大義名分を掲げるなんて大きなことはできない。せいぜい掲げられるとすれば、『皆を守ること』くらい。

使徒に勝つと皆に褒めてもらえる。

私は悦びを得る。

それでいい。

それだけでいいのだ。

『……カノンのこと助けてあげたいけど、きつと本当の意味で助けることはできない。悔しいけどね。でも、だからこそ、学校で精一杯カノンには日常を楽しんでもらいたい。少しでも傷を癒やしてあげたい』

……ああ、ずるい。

そんな言い方されたら、私の覚悟が揺らいでしまう。

時が来れば、日常を捨てるという覚悟。

人を殺した軍人が日常生活に復帰できないのと同じように、非日常こそが自分の住む世界であると、自身の認識を上書きすると決めていた。

私の現在の人生における優先度は、エヴァに乗って使徒と戦うことのほうが学校生活とは比べ物にならないほど高い。

だってそうだろう。

そもそも使徒に勝たなければ学校生活など送れるはずがないのだから。

ヒカリの言葉は、まるで私はまだ日常へ戻ってこれるといふ信頼を孕んでいる。

私だって戦いたいわけではない。戦うのは、この居場所で生きるために必要な対価である。戦わないのならここで生きる意味はなく、お父さんによって元の叔父さんたちへの家に送り返されてしまうだろう。

厳格で、冷血で、私のことが嫌いなお父さんはエヴァに乗らない私を必要としないから。

……上半身に力が入る。

少し、私はマイナス思考に陥りすぎていたようだ。

片方の拳を開閉させたあと、冷静に一度だけ深呼吸をする。

そして、私は自分の頬を張った。

ぺちん、と土壇場で力を抜いた半端な一発は、ちよつぴりしか痛くなかった。でも今の私にはこれが一番効果的だ。

『ん？ 何の音？』

「大丈夫。悪い虫を叩いただけだから」

どんなことがあつても前を向き続けるのは違うと私は思う。

時々後ろを振り返って過去の残滓に振り回されることにこそ、間違えずに『前』を見据えることのできる手がかりになるはずだから。

……と、時間も遅くなってきた。

本当に眠気が強くなってきたし、それはヒカリも同じだろう。さらに明日は学校だ。

私との会話に耽っていて、寝不足になってしまったなんてことになつたら、私はどんな顔をすればいいのか。

「今日はありがとう、ヒカリ。そろそろ寝るから通話を切るね。学校に行けるようになったらまた仲良くしてね」

別れの切り出しをすると、ヒカリの軽快な返事が返ってくる。

『うん！ また学校で！ 待ってるから！』

「ありがとう。じゃあ、ばいばい！」

通話終了のボタンを押して、熱い息を吐いて車椅子の背もたれに背中を預ける。

顔を真上にし、もう見慣れた天井を見つめる。

この家ともあと少しでお別れだ。

引越しの用意はほとんどミサトさんがやってくれているが、やはり自分の荷物は自分の手でまとめる必要がある。

「明日にやろう……うん、明日にやろう」

正直言って、面倒だ。

もう意識を維持しているので精一杯だし、気を抜いて目を閉じてしまおうと、車椅子に座ったまま眠りに落ちてしまう。そうになると翌朝に

身体を襲うであろう凝りは避けられないだろう。

思考力の低下を察知した私は大人しく寝ることにした。

歯磨きを済ませ、パジャマに着替える。

そしてもう二度と同じことは起こさないと固く心に誓いながらトイレを済ませる。

今度はギリギリというわけではなかったため、落ち着けば問題は無い。

とはいえ便座に座るまでがとても不便で、狭いトイレの部屋で車椅子を器用に回転させるのは困難だ。

さらに補助として右側の壁に元からあった手すりのみしか使えないため、車椅子から便座までの移動は自分の腕の力にほぼ頼ることになる。加えて腕に麻痺があることを考慮すると、結構な苦労になる。たつぷり数分かけてようやく用を足す準備ができるのだ。

トイレを終えて自室に戻ろうとした時、ミサトさんからひとりでできたかと訊かれた。

「大丈夫でしたけど、余裕があるときだけにします」

と返事をして、おやすみを伝えてから自室のドアを閉めた。

ダイビングジャンプする気持ちでベッドに飛び込み、手を下半身を下半身に伸ばす。

膝裏を抱え、「よいしょ」といい感じのポジションに移動させる。

やはり感覚がまるでないというのはどうしても慣れないもので、奇妙な異物という認識に型落ちしてしまう。

軽くマッサージをしてみるが、血の通った暖かい人肌の感触が伝わってくるだけで脚自体には何も感じない。

慣れないから、気持ち悪い。

思考を放棄して枕に後頭部を埋める。

寝返りをうつときも一苦労だ。

無意識に動かした上半身に下半身がついてこないため、その度の手で位置調整をしなければならないのだ。

病院に入院している時に医師からレクチャーはしてもらっている。なるべく寝るときは横向きになること。名前は忘れたが、なにか悪

い症状を起こさないようにするためだという。

右にごろんと身体を向け、腕に力を入れ、時間をかけて下半身を動かす。

「……………ふう」

これから一生このような動きをしなければならぬ。

慣れてしまえば、で話は片付くが、慣れるのにはまだしばらく時間がかかりそうだ。

それに正直、自分の脚があまりにも感じなさ過ぎて気持ち悪い。意識を集中させるほどその気持ちが強くなり、吐きそうにもなる。

腕と手はリハビリで改善されると聞いている。なら今のように疲労することはしだいになくなっていくだろう。

現状があるがままに受け入れて、咀嚼して、飲み込まなければならぬ。

そうであるからこそ、私は私である。

そう強く自身に言い聞かせながら、意識を闇へと落としていった。



目覚めは最悪で、悪い夢を——夢すら見なかったのに、身体に寒気が走るくらい気分が悪かった。

そして、日課である朝食を用意するためにまずは起きるところから……とぼんやりした頭で考えたところで、ふと我に返った。

そういうえば、いつもの目覚ましアラームが鳴っていないことに気づいた。

「あ」

冷水を顔面にぶちまけられたかのように一瞬で意識が覚醒する。

頑張つて腕を伸ばして充電していたスマホ画面に触れ、ロック画面で時刻を確認する。

表示されていた時刻は08:52。

まるで見たことのない数字だった。

普段の私からはとても考えられないほどの大寝坊。

飛び起きようと身体を跳ね上がらせたところで、恐るべき速度で焦りは引いた。

「そっか」

動いたのは上半身だけ。

寝る直前の状態から下半身は一切動じていない。

それに――

「……どうやって朝ごはんを用意するのさ、私」

と呟く。

その言葉がスイッチになったのか、無気力に襲われる。

朝はミサトさんがこれから用意してくれることになっているが、だからといってすべてを任せるわけにはいかない。

食器を並べたりくらいなら私でも全然できる。

掛け布団をめくり、脇に置いてある車椅子を近づける。移動させやすい角度に調整も済ませる。

もし車椅子に移るのが難しかったら、呼んでくれればいつでも手助けしてあげると言われている。が、さすがにこればかりは自分でやりきりたい。

「ふんっ！」

鼻から強く空気を吐き出し、腕に力を込めて下半身を動かす。

ベッドの縁から下ろすことに成功。次に車椅子の肘掛けを掴み、渾身の力で自分の身体をベッドから浮き上がらせる。そのまま車椅子へとシフト。

地味に腕のリハビリにもなるからこれはとても良い運動だ。手のリハビリもしないといけないが、今は置いておく。

将来的に腕だけやたらと筋肉が付きそうな予感がするのは……気のせいではないだろう。

自室から出てリビングに出ると、そこには髪はボサボサ、開いているのかわからないほど目を閉じ、しかしエプロンはきちんと着ているミサトさんがキッチンに立っていた。

引越しの用意の影響で、キッチンにはあまりものがない。棚にあった皿などはほとんど詰め終えてすっからかん。冷蔵庫の中身――全体の六割ほどあったビールの山はミサトさんの胃に無事収納されている。

私の気配に気づいたミサトさんは、トースターからすでに焼けた食パンを皿に移し、テーブルに並べながら口を開いた。

「おはようカノンちゃん。食パンだけでごめんね。ほら、フライパンとかも使ったら後々面倒だし」

「はい、おはようございます。私がいなくてもミサトさんだけでご飯を用意できただなんて……成長を感じますよ」

「サンキューよく……ん？ あれ？ これって素直に喜んでいいのかしら？」

褒め言葉を呑気に受け取ろうとしたところで我に返ったミサトさんに、私は苦笑した。

「いいですよ」

ミサトさんが成長しているのは事実だし。

私が障害を持ってしまったことによる唯一の良いことと言えば、ミサトさんの家事レベルが上がっ……いや、家事という概念を理解してくれたことだ。

今思い出すだけでも悍しい、初めてこの家に来た時のインパクト。ゴミ屋敷直行ルートをアクセル全開で驀進しているような荒れっぴりには感服した。

人間ってここまで家を汚くできるのかあ、と。

エヴァや使徒の存在の次に度肝を抜いた衝撃の事実だった。

ところが今やそれはまるで悪い夢だったかのような生活水準だ。

たぶんアスカが私より先にこの家に来ていたらエヴァパイロットであることとの天秤にかけ、ぎりぎりエヴァパイロットの方に傾くか。

とにかく、ミサトさんのこれからの成長に期待だ。というよりもっと成長してもらわないと困る。

このままだとミサトさんをもらってってくれる人がいなくなる。

だから加持さん、はやくもらってあげてください！ 私はミサトさんの幸せを願ってますからツ!!

つつがなく朝食を終え、皿の片付けは手伝う。

キッチンへは車椅子では入りにくく、方向転換などができない。

雑に食洗機に皿を並べようとするミサトさんに待ったをかけ、丁寧さを要求する。

あと、粉末の洗剤の量も少し多かったのでそこも指摘。及第点にはまだちょっとだけ足りていないかな？ と冷静な評価を脳内で下す。

ミサトさんに手伝ってもらいながらキッチンから出て、今から何をしようかと自室に戻って思考を巡らせる。

今日は平日だから学校があるが、私はしばらくお休みをもらっている状態だ。

やることはふたつ。

まずは引越しの手伝い。

これは言わずもがなだが、私にできる範囲で荷物のまとめ作業をしなければならぬ。

確かミサトさんは来週に引越しと言っていた。今日は金曜日だから、恐らくあと三日後か。

そしてもうひとつは――。

「勉強、嫌いになっちゃいそう……」

遅れた分の勉強である。

ただでさえぎりぎりの状態を引きずっていたのに、もはや取り戻しが難しいレベルまでになっている。

しばらくは勉強漬けの日々を過ごすことになりそうだ。

とりあえずは着替えだ。

ゆっくり時間をかけてパジャマからラフな部屋着に着替える。別に家の中で変に着飾る必要なんてないし、脱いだりもしやすいという理由だ。

朝の最大の難敵は洗面台だ。

まず手が歯ブラシのある戸棚に届かない。

拭きタオルは洗面台の少し奥側に吊るされており、これは頑張ったら取れる。

どちらにせよミサトさんによる介護は必須で、ここは素直にミサトさんに助けを求めることにする。

「ミサトさーん！ すみません、ちよつと歯ブラシ取ってほしいですー！」

ひよこ、と洗面所から顔を出した私は、ミサトさんの自室に向けて声をかけた。すると数秒後に「はいはい、オツケーオツケー。ほんのちよつちだけ待ってねー」と快い返事が返ってきた。

少ししてからやって来たミサトさんの服装はいつもの赤ジャケツトを着込んだ、勤務用のものだ。

私は学校が休みでも、ミサトさんには仕事があるのだ。

手の届く所に置くようにしないとね、と自分に言い聞かせるように呟いたミサトさんがすつ、と歯ブラシを私に渡す。

「私ネルフに行くけど、カノンちゃんひとりで問題ないかしら？ なるべく不便のないように色々物の位置とかは変えてあるから、余程のことがない限り大丈夫だと思うけど」

先日ミサトさんから、私がひとりだけでいる時の過ごし方について話してくれている。

何かあれば、スマホで連絡を飛ばすと保安部の人合鍵で家に来てくれるらしい。

合鍵なんてあったんだと驚きつつも、まあ当然かとすんなり納得する。

「大丈夫ですよ。お昼ごはんも電子レンジくらいには手が届きますし、トイレも時間をかければですが慣れました。洗濯機は回せますけど……干すのだけはちよつと……うーん……部屋干しならなんとか？」

「いいのよそこまでなくても。というか洗濯機はもう回してるし」「えっ、できたんですか？」

私の補助なしでできたの？

本当に？

懐疑的な目でミサトさんを見上げると、自信なさ気な顔になることもなく、

「大丈夫大丈夫。これくらいできないと私の女としてのレベルすら地に落ちるわよ」

と笑いながら言った。

「そこまで言うなら信じますよ。ミサトさんも大人ですし」

執拗に疑うのは逆に失礼だから、素直に信じることにした。

「そうそう、だからカノンちゃんには私に甘えて良いのよ〜ん」

朝だからか、変なテンションでミサトさんは私の頭部を後ろから抱き締めてくる。

「ちよ、離れてくださいいっ。歯磨きできないじゃないですか」

ぺちぺちと腕を叩くけば、大人しくミサトさんが離れる。

歯磨き粉をつけ、歯ブラシを口に突っ込んでシャコシャコと念入りに磨く。

その間にミサトさんは櫛で私の髪を梳く。

変に抵抗するのも面倒になった私は大人しく受け入れることにした。

ちよっぴりくすぐったい感覚。

思わず身体を僅かに震わせると、ミサトさんが小さく笑った。

「小動物の反応みたいで可愛いわね」

今だけ言葉を話せない私は、喉を鳴らして抗議の意を示す。

しかしながらミサトさんは想像より上手だった。

つむじのあたりから変に髪が絡まないように梳いてくれている。おかげで不快感などは一切なく、寧ろ気持ちいい。自分でやるよりも。

壊滅的だと思われていた女子力だが、これだけは違うのか……？

歯磨きを終え、口に含んでいるものを洗面台に吐き出そうと身自分に分にできる限界ギリギリまで乗り出す。

ちよっつと腹筋に力をいれないといけないが、ひとりではできないこともない。

なんとかコップに水を入れ、口をゆすぐところまでできた私は一息をついた。

「ちよっつと高さはキツイわね。でも向こうはちゃんとその辺も考えられてるから安心して」

一幕を見ていたミサトさんが背後で呟く。

「それはありがたいです。毎日こうだと不便で仕方ないので」

「楽しみにしてなさいよ。なんせ私はもちろん、ネルフお墨付きの家なんだから！」

ネルフがわざわざ私のバリアフリーのためにそこまでしてくれていたのか。

……というより当然なのかもしれない。私は貴重なパイロットだし、できる限り不便のない生活を送れるように便宜を図ってくれているのか。

しかしこういうのは最終的な許可を出すのは司令官……お父さんのはずだ。

お父さんは果たして何も思うところなく許可を出したのだろうか。

「……とと、そろそろ行かないと遅刻するわね。じゃあカノンちゃん、仕事行ってくるわ。ひとりでも大丈夫だと思うけど、もし何かあったらスマホで連絡をするように。それ用のアプリのインストール方法がたぶんメールか何かで届いてるはずだから、この後すぐに確認しておいてね」

足早で洗面所から玄関へと向かう背中に「わかりました」と返事をしてから、

「いってらっしゃい！」

と追加の言葉を投げかけた。

するとミサトさんが少しだけこつちを振り向いて親指を立ててみせる。

そして玄関へ今度こそ姿を消し、数秒ほどしてからドアの開く音と、鍵を閉める音が聞こえた。

これで晩まで私は家に一人きりだ。

ミサトさんはああ言ってくれたけど、それでもやっぱり私にできることは出来る限りやっておきたい。それがこれから介護をしてもらうミサトさんへの礼儀だ。

……とはいってもできることは本当にほとんどなく、せいぜい現在稼働中の食洗機が終わったら皿を取り出すくらいだ。

引越しの段ボールは、今の私に持ち運びができないため保留。

ミサトさんの抜けのなさがよくわかる。普段はずぼらという言葉が擬人化したかのような人だが、いざとなるとやってみせる。

私と出会った頃からそうであってほしかったと心の中で涙を流しながら自室に籠もる。

色々と懸命に思考を巡らせていたのは、勉強から現実逃避がしたかっただけかもしれない。

「ああダメダメ。勉強しないとまたヒカリに怒られる」

ある程度は勉強ができる方だと自負していたが、ヒカリの前では影ってしまう。しかも私の学力は停滞をキープしたままだ。

机の上でノートPCを立ち上げるが、どうもやる気が起きない。

そういえば、一昔前の教科書はデジタルではなくアナログだったという。そのせいで漢字の読み方などは問題ないが、実際にペンを握って書くとなるとできない子供が多いという社会問題がある。

これだけを見れば大きなデメリットだが、教科書をデジタルにすることで、紙媒体が不要となり、その分の費用が浮くというメリットもある。

おそらくアナログに戻ることはないだろうが、先生、もしくは科目によってはアナログでの手書きでのテストを実施することがあるため、まだ学校側も方針をどちらかに決めきれていないのだろう。

でも私は書かないと覚えられない派の人間だから、どちらにも対応はできる。タイピングはまだまだだ。

……ほら、余計なコト考えてた。

ごそごそと医師からもらったリハビリの練習メニューの紙を手にとる。

そういえば、とミサトさんに指示されていたアプリもインストールしておかなければ。

ポチポチとスマホを操作して専用のサイトからアプリをインストール。操作方法は……まあ、あとで確認しておこう。

リハビリのメニューは別段難しいものではなく、比較的簡単だ。

記載されている絵と同じように手や腕を動かせばいいだけ。

これをゆつくり時間をかけて三セット。

やっついて気づくが、これ以上動かせなかつたり、感覚が希薄だつたりと、自分の身体の反応が鈍いと感じる場面は確かにある。

あれ？　もしかしたらパンを握るのも難しいのでは？　と実際に試してみるが、長時間でなければそこまで大きな問題はなかつた。

実際に文字を書いてみると、指に上手く力を入れられなかつたりで、思うように書けない。

文字は読めるレベルではあるものの、以前に比べると雲泥の差だ。「なるほど、ね」

ちよつとたらだらしすぎてしまった。

不意に時間を確認すると、もう昼前だった。

少しずつ怠け癖がついてきてしまっているのではと己を厳しく律する。

せめてお昼ごはんまでは勉強に集中すべく、ぺちんと両頬を軽く叩いて机に向かう。

私が療養している時も無慈悲に時間は過ぎ、学校の皆との学習進度の差が広がってしまう。これは私がとても危惧している内のひとつである。

結果的に学力が低下すると成績が悪くなるし、良い高校にだって行けなくなる。それだけは何としてでも避けたい。

未来のことは正直なところあまり深く考えてはいないが、高ければ高い位置ほど見渡せる範囲が広くなる。今はまだ不明瞭でも、いつかは……。

とりあえず一日分の遅れだけ脳に叩き込んだ私は、お昼を取ることにした。

久しぶりに頭を使いすぎたのか、お腹の虫が鳴る。誰にも聞かれなくて良かった。

適当な冷凍食品をレンジでチンして食べる。

皿は付属のもので、そのまま捨てられる。お箸を食洗機に突っ込むだけだから非常に簡単だ。

これからは冷凍食品によく助けられることになるのかあなどと考

えながらキッチンから離れ、すでに洗濯を終えたであろう洗濯機まで移動する。

蓋を開けて、乾燥までされている衣服を洗濯かごに入れる。普段ならこのままベランダに干しに行くのだが、残念ながらこの脚ではできない。

とはいえ何もできないのかというところでもなく、雨の時に使う、室内用の物干しがある。

これなら腕を伸ばしたらなんとか手が届く。

スピード感やテンポは普段通りで、ちゃちゃつとすべてを干し終える。

私がない間、ミサトさんはよくひとりで生活できていたものだと感心する。

……いや、今のはミサトさんに少し失礼だっただろうか？ 私がこの家に来る前からここで生活していたし、人レベルの『生活』は一応できていたのだ。

勝手に脳内で謝って自己解決したところで勉強に戻る。と、その前にトイレだけ済ませておく。

先日のような失態は晒さないと固く誓っている手前、余裕を持った行動が大切だ。時間と腕の筋肉を使うが、ひとりでなんとかトイレができるまでにはなっている。しかし『なんとか』であって、助けはあつたほうが嬉しい。これはできればミサトさんの手を借りたい。

トイレを済ませ、いざ勉強するかとなったところで、どつと腕の疲れが押し寄せてきた。

そういえば朝からリハビリをして、勉強をして、洗濯物を干したりトイレに行ったりでまだ慣れない腕を使いすぎた。

明日筋肉痛になるのはほぼ確定とみていいだろう。

だからといって勉強しないという選択肢はない。

腕にきた疲労のせいで勉強効率は下がるが、何もしないよりは全然マシだ。

時折自分で腕をマッサージして適度に休憩を挟みながら、若干の焦りを抱きつつ肅々と机に向かう。

明日から土日だから、本格的に引越しの準備が始まる。超法規組織であるネルフに勤める身であるため、有事の際は問答無用で駆り出されることになるが、そうでない限りは引越しに集中できる。

間違いなくこの机も動かす必要が発生するから、もう今日しか勉強に時間をたっぷり割ける日がないはずなのだ。

週明け頃に登校する予定だから、授業についていけなければ話にならない。

今日は夜遅くまでかかりそうか。

ヒカリから事前に送ってもらっていた学習進度のメモがなければ間違いなく詰んでいた。当時出された宿題の内容なども教えてくれているため、取りこぼしはない。

ふとパソコンの時刻を確認すると、すでに18時を超えていた。集中していたせいで時間の感覚が曖昧になっていたようだ。身体を一杯伸ばし、腕を高く掲げる。

そして大きなあくびを一つ。

いつもならこの時間あたりから今日の夕食の用意に動き始めるのだが、今の私には必要ない……というのは少々語弊があるか。

料理ができないから冷凍食品をチンすることくらいしかできない、が正しい。

あーでも、であるなら買い物くらいには行っていないかもしれない。

たぶんミサトさんのことだから買い物をし忘れて帰ってくる予感がある。高い確率で。もし買い物に行ったとしても、何を買いえばいいのかよくわからず、結局ビールを買ってくる未来が見えた。

心配し過ぎだろうか？

……ミサトさんはやる時はやる人であることは、十分知っている。事実、私のいない家を汚さず、寧ろ整理までしてみせた。基本的な家事はまだまだという評価になっってしまうが、生活自体にそこまで大きな悪影響はない。

今後の成長に期待、といったところ。

「いや、でも……やっぱり心配だな。ミサトさんだし」

この気持ちはきつと、子離れできない親に似たようなジャンルのも

のだ。

それに単純な心配要因として、仕事後にそのまま買い物に行く手前にある。

はつきり言つて、これは私にもできることだ。代行としてミサトさんにやつてもらうだけであり、たとえば車椅子だからといってできないわけではない。

「うん、やっぱり行こう。できるだけミサトさんの負担は増やしたくないし。ミサトさんに任せたらたぶんビール買ってくるし」

主にふたつの理由を口にし、自分を納得させる。

ひとりですら外に出る練習にもなる。

部屋着から外出用の服に着替え、財布やらマイバッグやらをチェック。室内用の車椅子から外出用のものへ乗り換え、最後にミサトさんに買い物に行く旨の連絡を送っておく。

すぐに返事が帰つてこなかったから、まだ仕事中的なだろう。

家を出たら、しつかり鍵をかけておく。

ここから近所のスーパーまでは五百メートルもないほどだ。もしキロ単位だったら流石に諦めざるしかないが、これくらいの距離なら大丈夫だ。

18時を超えると、外も夕焼けの赤みがゆつくりと薄くなり始める。私の住んでいるアパートは第三新東京市でも人の少ない地帯に位置し、この時間だと人通りは疎らだ。

聞こえるセミの鳴き声も同様に疎らで、どこか空白というべきか、満たされない胸苦しきがある。

時折すれ違う人からは、好奇の目で見られる。

「……………まあ、そうだよな」

普通はこんな女の子、いないから。

私だって、普通じゃない人を見かけたらついつい視線が固定されるだろうし。

される側の身からすると、正直なところ愉快ではない。でもこういうのにも慣れていかないと。いい勉強になった。

レバー操縦によつて目的地に向かう。ヴィイイン、と低く小さく駆

動音を鳴らして。

車とすれ違う時は、少し怖い。

私が今進んでいる道路には歩行者用にきちんとスペースが設けられているわけではなく、白線と道の端との間には人一人分しかない。

車椅子は明らかに白線の中に入ってしまったため、できる限り端つこに寄り、動きを止め、すれ違う瞬間、きゅつ、と身を強張らせる。

「道、変えたほうが良かったかな……」

私が今進んでいるのはどちらかという小道に近い。

遠回りをすれば人通りの多い道路がある。そこならきちんと縁石ブロックが設置されていて安全だし、歩行者スペースも広い幅を確保している。

慣れているし、こつちの方が早く着くからという理由で選んだのだが、どうやら間違いだったようだ。

いつもならもうとつくの昔にスパーに着いているはずだが、まだ半分くらいしか進んでいない。

ここは安全を取るべきと即決。

急がば回れ。

確かあと十数メートルほど進んだら大通りへと繋がる小道があったはずだ。そこで別ルートに切り替えよう。

緊張で強張っているかどうかすらわからない脚を軽く叩き、小さく、鋭く呼吸を吐き出す。

家に帰るのが少しだけ遅くなりそうだが、勉強代でも思えばいい。

淡い陽光はいよいよ弱くなり、地平線の果てに沈む。

夜が巡り、細長い電柱たちの街灯がちらほら灯り始める。まだ完全に暗くはなっていないが、それも時間の問題だ。

人通りはぐつと少なくなり、まるで私しかない世界に飛ばされたよう。

ミサトさんからの返事は……まだない。仕事が長引いているのかな？

別ルートへの小道。その入り口に立つ。

ここは灯りひとつない細い道。家の壁に左右を挟まれていて、足元は非常に暗く、強い閉塞感がある。

車椅子が通る幅には問題ないが、誰かとすれ違うとなると、相手側が背中を壁に擦り付けるほど極限まで端によらないといけない。

見知らぬ誰かに迷惑をかけないように、小道に少し入ってから、駆け足気分でレバーを前に倒そうとした、その時――。

「すみません」

背後から声が聞こえた。

あまりに突然過ぎて、肩が大きく跳ね上がった。

男の人の声だ。少しだけ高いが、粘性のある声。

「私ですか……？？」

首だけ後ろに向けようとするが、「お気になさらず。私が動くので」と止められる。

斜め左後ろからずりずり、と壁に背中を擦る音が聞こえ、私の真横からぬつ、と男の人が現れた。

――その人は、まるで猫のようだった。

黒いスーツを見を包んでいるが、よくよく見るとブラッシングなどの手入れがちゃんとされている。白シャツはシワが目立っている。

そのクセして、女の人でも参考にしたいと思わせるほどスキンケアはしっかりしている。

年齢は……おそらく三十代前半ほどか。猫背気味で、身長は百七十はありそうだ。しゃきつと背筋を伸ばしたら、きつと八十はあるだろう。

男は私をまじまじと見つめると、ひとり納得したように大きく頷いた。

「私に何かご用ですか？ 道案内とかでしたら大丈夫ですけど……」

道は熟知している。

いや、もしかしたら逆に道案内をしてほしいと言ってくるパターンだろうか。それくらいなら問題はないが、今の時代、スマホのナビさえあれば他人を必要とすることはまずないはずだ。よっほどの方向音痴でない限りは。

「道案内？ いえいえ、違います」

予想とは違うことを言われ、小首を傾げる。

「んーと、あ、もしかして夜なのにひとりでいたからですか？ でしたらすみません。今買い物に行こうとしていたところなんです」

「そうでしたか。お忙しい所申し訳ないです」

「そこまで忙しくはないので、長くならないのなら大丈夫です！」

どうしてか、私の言葉を聞く途中から男は心底ご機嫌のように見えた。

その顔に少なからず嫌悪感を抱いてしまう。

男はすう、と猫のように目を細めた。

そして薄く口角を上げて笑いながら……嗤いながら、こう言った。

「君はエヴァンゲリオンのパイロット、碓カノンさんですね？」

……私はその言葉の意味を理解するのに、数秒ほどの時を要した。

二秒が経過した瞬間。

私の中で、危険信号が大爆発するほどの勢いで真っ赤に輝いた。

……もう、いいや

この世界は人の本性に満ち満ちている。
本性とは、悪である。

矢矧ユウジがそれを知ったのは、14の時である。
セカンドインパクト。

世界の終わり。あるいは創生。

どちらにせよ、人類に劇的な死をもたらしたのは間違いなかった。
まず、死という概念への理解度……死の認知ラインが大幅に低くなった。人はあまりに簡単に死ぬことを知った。

物で何度か身体を殴りつけられるだけで。

指で摘めるほどの小さな鉄の塊に撃ち抜かれるだけで。

数日食事をしないだけで。

心の安寧が破壊されるだけで。

セカンドインパクト以前は、死というものをよく知らなかった。

せいぜい交通事故だったり、病気だったり、老衰で死ぬものとはか
り思っていた。

人間は食物ピラミッドにおける頂点であり、超越者だ。だから、死
は身近に存在しないとばかり思っていた。

地球の地軸が傾き、大津波が起きた。

世界は大混乱に襲われ、それは日本も例外ではなかった。

津波で父を失った。

母と命からがら生き延びたが、財産もすべて失ったふたりに明日を
生きる希望を見いだせなかった。水没しかけていたコンビニから食
べられそうな食料をたくさん見つけた時は、喜びではなく失意のどん
底に落ちた気分だった。

自衛隊による救援活動なんて来るはずがなかった。助けを求めて
いるのは日本中の国民たち全員だ。圧倒的に人員と物資が足りない。

矢矧と母は食料というアドバンテージを利用して、廃屋に引きこも
りながら数週間ほど生活していた。

矢矧は母に訊いた。

「これからどうなるの母さん？」

母は言った。

「……何もわからない。でも、内陸の方はきつと津波の影響を受けてないだろうから、そっちに行ったら何かあるかも」

母の携帯は水没し、使い物にならなくなっていた。

公衆電話は当然水没。なんとか使えるらしいものには人々が長蛇の列を為していて、一日待つても順番は回ってこなかっただろう。

人は心の余裕が無くなると、荒んだ行動に出ることを矢矧は学んだ。

復興の兆しはなく、そもそも救援すら誰一人としてこない。瓦礫の撤去すらほぼ手がつけられておらず、時々流されていた死体を見つけた。

死後、時間が立ちすぎていたせいかぶくぶくと身体が膨らんでいた。やや紫に近い白色になっていて、腐臭が漂う。

矢矧は鼻を押さえ、無視し、その場から走り去った。

人々は一向に来ない救援と、底をつきかけてきた食料。それとすり減る心のせいで、一触即発の二、三步手前までできていた。

明らかに皆が飢え始めているのは目に見えてわかる。内陸へと移動していった人数を鑑みても、とてもこの一帯にいる人々の腹は満たせない。

結論は、暴力だった。

略奪である。

殴り、奪う。

己の生存をかけた、理性をぎりぎり維持した本能的行動だ。明らかに災害による死体ではないものがたまたま転がっているのを見るようになった。

時には巧妙に口先で騙す者もいた。

まだ聴くない矢矧には、人を騙すような話術はなかった。

人の醜さを知ったのはその次の日のことだった。

どこからか、噂が飛んできた。

『疫病が流行っている』

そんな荒唐無稽なデマをすんなり信じ込んでしまうほど、人々の心に余裕はなくなっていた。

いつも通り、食料調達から帰ってきた矢矧は不安げに言った。ちなみに成果は中身の残っている缶詰ふたつだ。

「お母さん、どうしよう。なんかこの皆、変」
返事はなかった。

そこにあつたのは、少し前までは生きていたであろう肉塊だった。顔は三倍ほどにまで膨れ上がり、手足はあらゆる方向に曲がっている。辺りには血に濡れた鉄棒などが散乱していた。

残り僅かだった食料はすべて奪われている。

……ああ、そうか。

シンプルに。落ち着いて、すべてを理解する。

ただの、略奪の末の撲殺である。

矢矧は子供だった。だから状況を理解して、冷たくなった肉塊を抱きかかえた時に、感情が決壊した。

その時から矢矧の生死観は一変した。

生きるためには、誰かを殺す必要が生じる場合がある、と。

死とはあつけないもので、実は身近にある。

人間がこれまで積み上げてきた文明と理性の在り方に亀裂が走れば、その向こう側で死はこちらを見つめている。

母を小さな丘に埋めた。墓石はない。

これまでのたくさんの感謝と、これまでの自分を一緒に埋めた。

——生きる。

それだけが、矢矧の全てとなった。

セカンドインパクトによる混乱は日本だけでなく、世界にも広がっていることをラジオで知った。混乱によって紛争が起こっていることも知った。

セカンドインパクトから約一週間後にその紛争に巻き込まれて東京に新型爆弾が落とされ、およそ50万人が死亡したとか。

東京はの復興は事実上の断念。長野県松本市に首都を移す計画が進められている。

半年が経ち、矢矧はある程度利口になった。

2、3年で遷都が完了するとされていいる長野県に移動するかどうか悩んだが、矢矧にはそこまで長距離を移動する手段がなかった。

長野県に行けば、もしかすると食い扶持を見つけられるかもしれないと見積もっていたが、そう考える人たちが大勢いるはずだ。

そうなるとう雇用は溢れ、長野県松本市周辺はスラム街に似たようなものになるのではないかと推測を立てた。

きつとそこは人間というヘドロの溜まったゴミ箱になるだろう。そこで生き抜く自信はまだ矢矧にはまだなかった。

だが遷都が完了した際には、確固たる地盤を築くために移動するべきであることは頭の片隅にある。

子供たちには、この厳しい時代を生きるのにあまりに非力だった。これまでぬくぬくと温室で育ててきた子供が、あっさり人間が死ぬようになった世界で生き抜くのは非常に困難を極める。

だが、救いの手はあった。

ようやく国から救助がやってきたのだ。

とはいっても実際は身寄りのない子供の保護活動を主とし、それ以外の活動としては、復興などはせず、本当に最低限の食料提供のみだった。

もちろん矢矧は舞い上がるような気分で保護されに行った。

母にはきちんと別れを告げた。

この日まで矢矧が何をして生存していたのかというと、人を騙し抜くことで食料や情報を得ていた。

冷静さを欠いた者から死んでいくのが今の世の中。

母の死という極限状態を経て、矢矧は自分の心というものを完全にではないが、そのほとんどを掌握した。

心とはようは固体、液体、気体のようにそれぞれの形を取る物質である。

感情の揺れ幅によって熱を帯び、形状を変化させる。人の心は基本は液体の状態だ。冷やすことができるし、熱することもできる。

冷やせば鋼のような不動となり、熱すればどこまでも発散して収ま

りが効かなくなる。

そう、矢矧は心を定義した。

ゆえに、人間性を失った獣たちの心はすでに発散しているのだ。液体に戻るのには、その感情の熱をどうにかして冷やさなければならぬ。普通は冷やせるが、彼らの置かれていた状況では簡単ではない。つまり、矢矧の心は母が殺された時点で気体だったが、心を掌握することではほとんど固体になることができた。

矢矧を含め、保護された子どもたちは施設に預けられた。誰かが引き取ってくれるまではここで過ごすことになるという。

しかし現実はその甘くなかった。

まず、食料がない。冷静に考えれば当然で、毎日配給されるのはひもじさに震えるような量ばかりだった。

肉なんてあるはずもなく、時々昼食すらないことがあった。子供たちは無償で施設から食料を恵んでもらっているのではなく、それなりに——施設の清掃や、地域の復興支援の手伝いなど——労働をすることで、その対価として恵んでもらっている。

それでも育ち盛りの子供たちにはあまりにも少なく、日に日に痩せ細っていく子が目に見えて増えていった。

人が集まると自然とコミュニティが形成され、そのから社会が生まれ出される。とはいえごっこ遊びに過ぎないが、『社会』であることは間違いない。

おおよその年代によって層がわかれ、その層ごとにヒエラルキーが自然発生する。

このヒエラルキーによる恩恵は何かというと、『配給物の再配給』にある。強い者はより多くの配給をコミュニティ内で再配給され、弱い者は理不尽に搾取される。

矢矧はどちらでもない、『ただそこにいる無関心者』としての地位を確立している。

この事態を大人たちは認知していない。というより認知できるほど大人たちは矢矧たちを見ていない。これもまた誤りで、そもそも人材が絶望的に足りていない。

施設にいる子供は約50人ほど。それに対して大人は知る限りでは3人しかいない。

どう考えてもキャパシティーオーバーなのだ。

彼らの子どもたちへの態度は不快ではないし、優しく接してくれているのはわかる。だがそんなものでは満たされない。

優しさだけで世界が救えるのならとつくの昔に救われている。

人間のエゴや本性、醜さといった様々な要素が複雑に絡み合うことで世界は運営されているのだ。

だから、大人たちは『優しい』だけの、何もできない人だった。

いつの日か、戦場カメラマンが貧しい地域で、今にも餓死しそうな少女をハゲワシがまだかまだかと近くで待ちわびている写真を見たことがある。

あそこまで酷いとまでは流石にいかないが、あれの三步ほど手前の状態になっている子がちらほら散見するようになった。

加減のわからないコミュニティの強者たちは、依然としてこれまでの体制を維持し続ける。

学級崩壊に近い状態。近いうちに限界が来ているのは目に見えていた。

ある日の真夜中、妙な声が微かに聞こえて目が覚めた。

与えられている三人部屋はやや狭く、寝るスペースも狭い。これでどうやって冬を越すのだと愚痴りながら部屋を抜け出し、声のする方へと落ちそうな臉を擦りながらゆっくりと歩く。

そこはある女子部屋だった。ドアは少しだけ開いていて、そこから光が漏れている。

声といつてもただの談笑などではなかった。

悲鳴に似た嬌声。

矢矧は忍び足でドアに接近し、隙間から中を覗いた。

部屋の中にいたのは、三人の女子。裸にされ、後ろ手に縛られ、布を口に噛ませられている。

そして、三人の男子。

確かあの男子たちはヒエラルキーの上位者。その中でも身体の大

きめな横暴な奴らだったはず。

男子たちは女子たちに多い被さり、己の肉欲を欲望のままにぶちまける。

荒い呼吸。くぐもった悲鳴。しだいに溶けていく嬌声。こちらにまで感じられる、甘ったるい臭いのする、生暖かい空気。

——助けよう。

という気にはならなかった。

もし今飛び込んだところで彼らに力で敵うことはない。たとえなんとかできたとしても、それに対する対価はないといっている。

正義の味方を気取りたいわけではないからこうして矢矧は自身も性的興奮を覚えながら盗み見ている。

リズムカルに聞こえる、肉と肉が接触する音。快楽に震える、獣のような声。女の喘ぎ。

ぶるりと大きく身体を震わせ、雌の中で白い爆発をさせる雄の姿を、矢矧は目に焼き付けた。

くたり、と細い雌の身体の力が抜ける。

夜はまだ長い。

理性で本能を黙らせた矢矧は、誰にも悟られずにその場を去る。

「ドアに鍵をつけるよう、提案くらいはしておくか」

それがせいぜい矢矧にしてやれることだった。

とはいえこの施設の秩序の崩壊は想像以上に進んでいる。

何らかの手を打たなければ自分の生死に影響が及ぶと判断したところで、動くことを決意した。

大人たちに対して待遇を良くするよう訴えても、間違いなく改善はされない。

だからこそ、こちら側で決定的な変化を起こせばいい。

矢矧が目をつけたのは、ひとりの少年だ。

ケロッとしている好少年。臨機応変な対処は及第点に到達していないが、それでも子供たちの中では非常に高い方だ。

不安を煽るように、静かに耳打ちした。

「ここはもう駄目だ。近いうちに誰かが死ぬ。こんな場所にはいたく

ないだろう。ずっとここにいてどうする？　いつまでここにいます？　本当に俺たちを預かってくれる大人なんて現れるのか？　そもそも俺達はそれまで生きていられるか？　……大人にばかり頼っているのはダメだ。自分たちだけの力で生き抜くことこそが今必要なことで、将来の道も広がるはず」

少年は真面目な顔をして数十秒ほど考えてから口を開いた。

「ぶっちゃけ俺もここを抜けるべきだと思ってる。でもその先どうしたらいいのさ。俺たちは子供で、ただでさえ荒れた世の中を大人の加護なしに生き抜くとは思えないよ」

「住処を得て、食料調達さえ安定すればそれは解決するよな？」

「それはそうだけど……たぶん住処の方は何とかなる」

とはいえ住処は早急に探さなければならぬ。

すでに秋を迎え、冬が近づいてきている。

春とかならばまだ良かった。その場しのぎの野宿でもやり過ごせる。だが冬はダメだ。明らかに夜を乗り越えられない。

暖を取れる場所をきちんと設けないと、凍死の危険性がある。

しかし矢矧が提案するより前からすでに計画していたのか、少年は目星はつけているという。

矢矧の目に狂いはなかった。

きつとこの少年は、将来はできる男になるだろう。

「でも食料だけは難しい。このご時世、スーパーとかで売ってなんていないだろうからどこかから盗むしかない……」

一番の問題はそれだ。

盗むといっても、これは紛うことなき犯罪。今の日本で法律がしっかり機能しているかは怪しいが、それでもこれまで生きてきた上での常識は備わっている。

だからこそ、受け入れることが難しい。

その踏み出せない一步を、矢矧が背中を押すことで進めさせるのだ。

「君、弟がいるんだろう？　君の弟はどちらかというヒエラルキーの下だ。今後もこのままの生活で生き延びられるかははっきり言う

と難しい。知ってるか？ 俺たちがいつも復興支援している時に、時々見るようになった軍人たちがいるだろう。どうやら近くに基地があるらしいぜ。ということ……そういうことだ」

何を言っているのか理解したのだろう、少年は目に見えて表情を歪めた。

「ダメだ。ダメだ。それはダメだ。そんなところに盗みになんて入れるわけがない。入ったことがバレてみる、その場で銃殺されてもおかしくない」

「じゃあここで惨めに死ぬか？ ひもじい思いをしながら強い奴らの言いなりになって、腹を空かせて餓死するんだ。……ああ、でも先に死ぬのは君ではなく弟のほうだろうけどね」

「――」
少年は憤怒の視線を向けてくる。

だが手は出さない。現状がどれだけ悪いのかはよく理解できているからだ。

グツと握られた拳の力は徐々になくなり、やがてすたと腕を下ろす。

矢矧はその様子の一部始終を見つめた後に再度、念を押すように強く言った。

「これは命に関わる話だよ。どうする？ 外で盗みをするようになれば、いつか殺されるときが来るかもしれない。でもそれを考慮したとしても未来への道が開ける可能性は段違いだ」

「言いたいことはわかった。……納得も理解もしたけど、賛同はできない」

「それはどうして？」

「……あなたはどうするんだよ。まるでここに残るような口ぶりじゃないか」

「そうだよ。ここに残って無気力にいたら生き抜くんだ。上の奴らに搾取されつつも、慎ましく平和にね」

少年には仲間がある程度いる。

もし施設を抜けるならその子達と一緒にみるとみた。ならばその

分の人数が浮く。すぐさま大人からの配給量は人数に合わせて減るだろうが、それまではヒエラルキー上位層に総取りされる。だからといってこちら側にまったく回ってこないことはないだろう。

一時的な満足感を得るために、口実を与えて施設から追い出そうとしている。

そう、少年は矢矧に対して思ったはずだ。

ふたりの仲は良くも悪くもない。互いに『なんとも思っていない』。だからこそ深入りする必要はない。するのもしられるのも、不快なだけだから。

たつぷり三分ほど考え込んだ後、少年は長い長いため息を吐きながら答えた。

「はあああああ………。わかったよ。君の言葉に乗っかってやるよ」

間違いなく人生のターニングポイントになるだろう決断。

それに、人の感情を刺激することで操作する。

この快感を少なからず矢矧は感じていた。

とにかく第一段階は突破した。

結論を出した少年の行動は想像以上に早く、三日後の深夜にこっそり施設を抜け出していくのを見た。

特に通報はしなかった。

翌朝これをいち早く察知し、痲癩を起こしたのは上の奴らだった。

下に見ているとはいえ大切な搾取対象だ。約十人程が消えたとなると、察するにあまりある。

奴らは頭が悪いだけでなく、弱い。

思考レベルが小学生低学年のそれだ。思い通りにならないければ怒りを露わにし、その瞬間の感情で動きがちである。

だから、行動を誘導するのはとても容易だった。

ただ奴らに教えてやったのだ。

『……ここが嫌だから逃げたそうですよ。食料は軍倉庫から盗むことを視野に入れているっぽいので、あまり遠くに構えてはいないと思います。もし連れ戻すならなるべく早いほうがいいです』

矢矧の言葉を鵜呑みにし、次の日には奴らは皆消えた。こき使うための彼らを逃してしたくないといった程度の小さい思惑からだ。

単純な労働力としての彼らは貴重だ。復興作業のしわ寄せと、捜索に行く面倒を天秤にかけて前者に傾いたのだろう。

第二段階完了。

すべて計画通りだ。

人は激情に駆られた時、目の前にレールを敷いてやるとその通りに疑いなく進もうとする習性がある。

矢矧はこの施設で過ごした日々でたくさんのことを学んだ。

人の心は思ったよりつけ入りやすい。バカは特にやりやすい。繊細な奴はつけ入るのに少々手間がかかるが、堕ちれば依存に似た状態にすることもできる。

日本人は比較的奥手な人間ばかりだ。だからこそ、矢矧の方から話を振って場を制する練習にはあまりに最適すぎた。

矢矧の口車に乗って施設を出ていった奴らはどれだけ経つても戻ってこない。戻ってこないということは、死んだか、新たな生き方を見つけたかのどちらかだ。

だがそんなことはどうでもいい。

時代は加速度的に進み、もう治らないものはあるものの、扱われた地球の傷が癒えてきた。それによって人々の本性は落ち着きを取り戻し、人間性のある社会を取り戻しつつある。

矢矧も上京し、大人になり、今に至る。

——なぜメディア業界への就職を希望したのか。

知っている。ネットでメディア業界が好き勝手に叩かれていることを知っている。

世間の注目を寄せるためにあることないことを記事にし、混乱を巻き起こしていることを。

だがこれも競争のひとつだ。『つまらない』『普通』の記事では人々の目に止まらない。一発で理解し、かつ面白そうなタイトルでなければそもそもスルーされるご時世だ。

多少色を付けてでも閲覧数を稼ぎたい——。そう考えているのだ

ろう。

だから尾ひれをつけるのだ。大きく水をかくことのできる尾ひれを。なんなら魚の見た目すら捏造する。

そんなことをするから、マスゴミなどとよく揶揄されるのだ。

矢矧はそんな陰湿で小癩なマスコミたちとは違う。

正しい事実を広め、正しく人々の『正義』を煽る。

ゆえにこそ矢矧が糾弾されることはない。

人の『悪』を見るために、『正義』の対象となる悪を舞台に引っ張り出す。

言わば劇場。

いつしか矢矧は、劇場で繰り広げられる醜い惨劇が観たいだけの異常者になってしまっていたのかもしれない。

自覚はある。しかし突き進む。

それもまた、矢矧ユウジという人間の本性なのだから。



——当たりだ。

矢矧は溢れ出る貪欲な笑みを抑えるのに精一杯だった。

目の前の少女は焦点の合わない目で激しく狼狽をし始め、手で胸を押さえ、掠れるような……苦しそうな呼吸へと推移する。

「あ……あ……」と弱々しく漏れる声は恐怖からか。

なるほど、嘘はあまりつけない性格のようだ。

気の毒に。

車椅子の速度で矢矧からは逃げられない。

叫ぶという手もあるだろう。しかしここでは効果はない。なぜならこの狭い両壁の向こう側に視認できる家は空き家であることは事前に調査済みだからだ。

しかし少女は叫んで助けを呼ぶという思考にすらたどり着けていない。それほど極度の緊張状態に陥っている。

震える指で胸元のポケットからスマホを取り出そうとする。きつとスマホを使った何らかの手段で助けを呼ぶという考えには至れたようだ。だが残念ながら手を滑らせて地面に落としてしまう。

矢矧はそれを丁寧に拾って少女に返した。

「自分のものは大切にしましょうね」

「……っ、……」

「助けを呼ぼうと考えているのでしようけど、無駄ですよ。すぐに護衛が来ることはありませんから」

「――、え？」

ここでようやく少女……碓カノンが顔を上げる。

目と目が交差する。

優しげでつぶらな瞳はまるで煌めくサファイアのよう。ちよこん、と丸みのあるあどけない容姿は、世間一般では美少女と呼べるものだろう。

普通の男ならば情欲の1つや2つは抱くことは避けられない。

このような娘が決戦兵器に乗って世界を救うために戦っている……？ どこかの漫画かアニメの話か？

信じられない。が、これが真実であり、残酷な現実だ。

そして矢矧も残酷な現実を突きつける人間の一人となるのだ。

少女に常に張り付いている護衛は三人である。業界人の目を舐めてもらっては困る。さり気ない仕草に見え隠れするプロの所作。それに気づけないようでは話にならない。

結局のところ、少女に護衛がいるという事実こそが黒である何よりの証拠。そして本人も嘘をつけないのであれば、もうこれは確定だ。確かにネルフの保安部の教育は徹底されているだろう。

だがエヴァパイロットに対する秘密保護の教育を怠っているのが見え見えだ。

三人はすでに矢矧の仲間たちによってロックオンしている。

つまり、護衛が来ないと言ったのは嘘。もし護衛を少女が呼んだ瞬間、仲間たちが彼らをあらゆる手段で足止めしてくれる。とはいっても相手はプロだ。せいぜい頑張って二、三分ほどだろう。

それだけの時間があればこの場から即離脱することは容易だ。

少女は矢矧の嘘にまんまと騙されている。どうやら嘘をつきにくくだけでなく、人を疑わなさすぎるようだ。

なんと、なんと気の毒なのだろうか。

「碓さんはいつからエヴァに乗り始めたのですか？ やっぱり初めての敵がやって来てからですか？ それともずっと前からエヴァに乗るために、どこかで訓練などをしていましたか？」

初めから少し飛ばしすぎてしまった。

だが貴重な直撃インタビューだ、一秒とて惜しい。可能な限り情報を引き出さなければならぬ。

少女はぎゅっと口を結び、沈黙を選ぶ。流石に容易には情報を開示しないようだ。

だが心情はおおよそ量れた。あとはそれに対応した手段で切り崩すだけだ。

この手の場合、脅せば一発。

優しい心につけ込んだ悪意をぶつけければ容易く壊れてくれる。

見える。

見える。

少女の心は消えそうなほど小さい。熱され、矢矧が手を加えるまでもなくいつか勝手に自滅する。

ここ最近で心を悪い方向に強く突き動かされるようなことがあったのだろうか。

今度こそ、矢矧はほくそ笑んだ。

「少し顔色が……心の形が良くないようですね。もしかしてここ最近で嫌なことでもありましたか？」

「ない、です……！ そんなのはない……です」

初めて反応してくれた質問への回答は、反抗的な態度だった。

だがその口ぶりとは裏腹に、表情が目に見えて陰るのを矢矧は見逃さなかつた。

「それは車椅子生活になったことですか？」

「……違います」

「それは嘘ですよね？ おそらく碓さんは先日松代での爆発事故の対応にあたったはずです。その結果がその脚なのでは？」

反射的に何かを返そうと口を開きかけるが、わなわなと唇を震わせ

るだけで音は発せられなかった。

てつきり車椅子生活になってしまったことが原因だと踏んでいたが、どうやら違うと見るべきか。

少し違う質問に切り替えたほうがいいと判断。

「そもそもエヴァンゲリオンとはなんですか？ 戦闘が日本のこの都市でのみ必ず発生する理由なども、もしご存知でしたら教えていただきたいです」

核心に触れる質問。

ネルフが絶対に公開しない機密の機密。

実際に戦いに身を投じるパイロットだからこそ知る情報がないかという探り。

「……………」

沈黙を貫かれる。

まあそうなるだろうと矢矧は知っていた。

緊張。恐怖。不安。

まだ子供だ。

こんな狭い場所で、大人から高圧的に質問されたら黙りこくってしまうのも仕方ないのかもしれない。

だからといってそれを良しとする気は毛頭ない。なぜならこの目の前のいたいな少女は、情報の宝物庫なのだから。

喉から手が出るほど有益な情報をこれでもかと知っているに違いない。

なんとしてでも引き出さなければならないのだ。

とはいえ長時間インタビューをすることはできない。護衛たちも付近にいるだけで、まったく目視で確認しにこないなんてことはないのだから。いつ仲間からアラートが飛んでくるかわからない。

所詮は同じ人間だ、驕ってしまっている部分があるのだろう。

執念を燃やすほどの執着でエヴァパイロットを特定し、突撃してくるような奴なんていないだろう、と。

だからこうして矢矧は少女に接触できたのだ。

ガチン、と意識を切り替える。

少し怖そうな人から、論理的に、かつ現実を突きつける正義の味方となる。

……さっさと鍵を壊して、心を灼いて、宝を頂こう。

矢矧は大きくため息を吐いた。

予想外の出方だったのか、少女はびくびくと怯えを見せた。

「……碓さんは私の質問に答える義務があると思ってるんですよ。そうやっていつまで経っても黙っていられたら、私も少しはイラツとします」

「義、務……？」

「はい、義務です。この街に住む人々は確かにネルフの庇護下にあると言っていていいでしょう。そして街を……世界を守るのがネルフの使命。なら、どんな脅威を、どのような手段で迎撃しているかを公表するべきなのです。でないとも市民は安心できません。本当は戦闘なんて起こっていないくて、市民を全員地下シエルターに追いやってから地上で実験を行っているのではという疑惑も少なくともあります」

特務機関ネルフは超法規組織。

絶対的な権限を数多く有しているとはいえ、都市に強く根付いた組織である。ゆえに、そこに住む市民たちの理解を得る必要性が少なからず発生する。

「そんな……っ！ 戦ってます！ 私たちは命懸けで戦ってます！

だからそんな風に言わないでください!!」

そうだろう。怒りは最もだ。

そんな身体になってまで戦っているのに、まったくの部外者からそのような疑惑を持たれていることに怒りを覚えなはずがない。

「だから教えて下さいよ。本当に命がけの戦闘が繰り広げられているのなら、その証拠を」

「——っ」

いい。いい。

感情はいい感じに刺激できている。

このまま激昂させ、ぼろりと情報を零せ。

「——碓さんはきつと、世界を救うため、もしくはみんなの命を守るた

めなどといった崇高な理由で戦っているかもしれませんが、本当に『それだけ』なのですよ。今の碓さんの態度から思うのは」

『それだけ』って……どういことですか」

「もしかして気づいていらっしやらない？ 確かに碓さんが戦ってくださっているおかげで私たちは生き残れているのでしよう。ですがそれだけ。戦闘による住宅や施設の破壊などによってみんなの帰る場所、あるいは職を失う人は後を絶ちません。そのあたりも配慮されていますか？」

「あ」

クリティカルを確認。

ヒーローものの創作はいつもそうだ。

人々を魅了して止まないヒーローが、絶対的な悪を倒してハッピーエンド。戦いによって破壊され尽くした土地に対するアフターフォローはなし。そこで生きていた人々には知らんぷり。

これが現実だ。物語に登場することすら許されない一般人たちのことは有象無象に過ぎない。

「街の修繕費はどこから出ますか？ 家や職を失った人々への支援金、あるいは保険金は？ すべて日本政府？ ネルフ？ それとも別の組織から？ どちらにせよ碓さんは皆さんの未来を潰しているんです。その自覚はありますか？」

「それ、は——」

「なかった、なんて言わせませんよ。……きつと多くの人は碓さんに感謝しています。世界を守ってくれてありがとうございます。でもそれは自分の居場所を壊されなかった人たちしか言いません。憎しみというのは人の本性に区分される内のひとつです。その感情は人を豹変させます。現実には善意に溢れているかもしれませんが、ほんの少しの超高密度な悪意も混じっています」

「私は戦うのに必死で……だからっ、そこまで考えられなかった……です」

消え入りそうな小さな声。

心の臓に拳は突き入れられた。あとは指先でそっと熱く脈打つそ

れを撫で、その後には爪を立て、低く、低く、ゆっくりと呟く。

「皆には知る権利があります。私は代弁者。ネルフは一体何をしているのか。少しでもいいから知りたいのです」

すでに少女の目は真つ赤に腫れ上がり、大粒の涙をぼろぼろと流している。

十分に心を痛めつけた。あとは少しだけ癒やしてやるのだ。

……矢矧が望む心の形へと。そうすれば、それを土台として勝手に自己修復してくれる。

ズボンのポケットからハンカチを差し出し、少女の目元をそっと拭いてやる。

「世界を背負って戦うなんて辛いでしょう？ そんな脚になってまで戦うなんて、どうして中学生の、それも君のような可愛くて優しそうな女の子が」

「私なんて……」

憂うように心の傷にそっと潜り込む。

「自分を卑下なんてしないでいいですよ。さあ、辛いことは全部吐き出してしましましょう。そうでないと壊れてしまいますから」

ほろ苦くて、優しい劇毒を流し込む。

ようはアメとムチだ。アメは毒だが。

さあ吐け。吐け。吐け！

知ってることを洗いざらい吐け！

その情報こそが、矢矧の知りたいもの。流布すれば、皆の『正義』の処罰対象になるのだ。

人の本性は悪である。

民意という歪んだ絶対的な善によってすべては決められ、運営されていく。

ゆえに間違いはひとつもない。

何もかもが正しい世界。

素晴らしい。面白い。

悪は排斥され、より正しさの純度の高い世界が築き上げられるのだ。

「……………辛い、です。皆も私も傷ついていくのが。でもどうしても……それは、避けられなくて。だからっ、余計に……辛い……です」顔をぐずぐずにしながら心情を吐露する姿は、多少なりとも矢矧の心に響いた。

弱々しい声は、どれだけ苦しい目にあつてきたかを痛切に語っていた。

どのような想いを抱いてエヴァに乗っているかなんて、矢矧にとってはもはやどうでもいい。脳みその足りない弱者たちの一時的な娯楽になれば、それだけでいいのだ。

とはいえ美少女が苦しんでいるという構図は世間的にも美味しい。嗚咽を含んだ憐れな美少女は細切れに言の葉を紡ぐ。

「でも、私が皆の未来を奪ってるのなら……でも、どうしたら許してもらえるかわからない……っ。私、そんなにお金なんて持ってないから、全然足りない……」

愚直な償い方を口にする。

そんなもので償えるはずもないが、子供らしいと言えば子供らしい。

しかしながら返事はすべて矢矧のほしいものではない。内心で舌打ちをしてさり気なく話題をすり替える。

「敵はどんな攻撃をしてくるのですか？ 他に形や大きさなどは」

「それは……だ、だめです。守秘義務って言われてるので」

詰めが少し早かったか。

もつと言葉で責めて責め抜いて、心を還付なきまでに砕いてから訊いたほうがよかった。

しかしそんな時間に時間はかけられない。人のいない狭い道であるとはいえ、護衛の目がある。

誘拐……は明確な犯罪になるからできないが、もし護衛を完全に欺けられるのなら誘拐も視野にあった。

車椅子を蹴り飛ばして立ち上がれずに地面に蹲っていると、口を塞ぎつつ腕を掴んで強引に車内に引きずり込んでやればいい。

障害のある身体では満足に抵抗すらできないはずだから楽勝だ。

拷問の技術や道具は流石にないからしないが、それでも責めの方法はいくらでもある。

ネルフのトップである碇ゲンドウの娘だ、そこらへんのネルフ職員程度では知り得ない貴重な情報を持つているはず。

……やはり惜しい。

目を改めて本格的に誘拐の準備をするか？ 否、この出来事は少女から直接ネルフに伝えられ、警備は現状になる。そうなってしまうと、誘拐なんて夢のまた夢。

——今、やってしまうか？

そんな運命の決断をしようかと思考を始めたその瞬間、スマホのバイブレーションが急速にその熱を冷ました。

これは事前に仲間内で取り決めている合図だ。

何らかの理由で護衛がここに接近してきているという合図。ここで勿体ぶってインタビューを続けるわけにはいかない。

あと少し。もう少しで心を完全に砕き、氷に閉じられた甘い甘い蜜を浴びるように啜れたというのに。

えづきながら激しく泣きじやくる少女に背を向け、矢矧は早急にその場を離脱する。

メインの収穫である、『碇カノンがエヴァパイロットである』という確証は得られた。それとどのような精神状態であるかも凡そ知ることができた。

まあ、メディアとしての娯楽になるだろう。

切り忘れていたボイスレコーダーの録音を切る。早歩きで人通りの少ない道から抜け、人ごみに溶けるように紛れる。まるで何事もなかったかのような軽快な足取りは、ついさつきまで少女に強く言葉責めをしていたとはとても思えない。

しかし矢矧はつい、今更ながらあることに気づいた。

……エヴァパイロットの心を傷つけたら、それが原因で世界が終わるかもしれないな、と。



あれからのことはよく覚えていない。

知らない人が歩み寄ってきて、私の顔を見た途端血相を変えて誰かに連絡を取っていたと思う。

それから間もなく大勢の大人の人に囲まれて、嚴重に護衛されながらネルフへと連れて行かれた。

そして専用の個室に割り当てられた。

何も考えられなくなつて頭が真っ白になった私は、言われるがままに進んだり、話したりした。

この状態の私なら、誰でも簡単に騙して危害を加えられそうだったと後からミサトさんに言われた。

振り返れば、満足に人の顔すら見ず、頭上から降り注がれる言葉をすべて忠実に受け取っていた。

非常に危険な精神状態だったと認めざるを得ない。頭がぐちゃぐちゃになつて、これまで頑張ってきた私が、指で触れるだけで崩れ落ちてしまうような感覚になっている。

……私がしてきたことは何だったのか。

吐き気を催す虚無感。

気怠げにだらりと身体の力を抜く。

眩いLEDライトの照明は個室を余すことなく光を届けているが、私の心にまでは届かない。

結局夕食も食べられていないからお腹も空いた。でもそんな気力がないから少しもお腹が空いていない。まるで心の傷を自分で食い荒らしているような気分だ。

両手を目の上にあて、意味なくぎゅうう、と瞼を強く閉じる。鼻から深い呼吸を三回ほど繰り返し、内部電話で夕食の話をすることに決めて受話器に手を伸ばす。

しばらくの間、この個室で待機するようミサトさんに命令された。お願いではなく命令だ。

部屋はもともと使われていなかった空き部屋で、私用に急ぎで用意したのがわかる。

非常に簡素な部屋で広さは4畳ほど。ベッド、テレビとあり、洗面台などはない。さらに車椅子を置くスペースも必要なため、動きにく

い。

とはいってもアパートの自分の部屋と比べると、体感でほんの少しは広い気がする。

上官にあたるミサトさんの言葉となると首を横に振るわけにもいかず、渋々ながら待機命令を了承するしかなかった。

ミサトさんもそこはわかっていたはずだ。もう少しで家の引越越し、そして私がようやく中学に登校できるようになるまさにその時だったのだ。

しかし今回の事件は、私がエヴァパイロットであるということが特定された極めて重大なもの。

もちろん護衛たちの職務怠慢は大きな要因になる。降格、もうしくはクビにさせられるのかどうかは私にはわからない。そのあたりはきつとお父さんが判断するのだろうか。

わざわざ起き上がって車椅子に移るのが面倒だから、シンプルな見た目のベッドに寝転がってうだうだ思考を巡らせていた数時間。これに終止符を打つ。

内部電話で食事をお願いして、もそもそと車椅子への乗り換えを完了させる。

トイレを済ませ、もう一度ベッドに寝転がる。

テレビを観れるほど私の心は落ち着いてなどいられなかった。

あの男の人の言葉が、何度も何度も頭の中で反芻する。

私が人の未来を奪っている？

……確かに。言われるまで気づかなかった。見向きもしなかった。あれだけ街を荒らしまわったくせに、知らんぷりで私だけ日常を謳歌していただなんて。なんて罰当たりな女だ。

アスカと綾波さんとはそういった話題は一度もなかった。恐らく私と同じように気づいていないのか、あるいは割り切っているかのどちらかだろう。

少なくとも私にはこの事実を受け止めきれない。

ふたりのように、私は強くあることができない。

間違いなく私は皆の居場所を壊している。だからといって、今度か

らはなるべく街を破壊しないようにしながら使徒と戦うことはできない。

使徒の攻撃パターンすら戦闘開始時では把握できないのに、どうやって。そんな余裕なんてどこにもないのに。

私たちネルフが負けなければそれは世界の終わりを意味する。

命は間違いなく救っている。

でもこれ以上はどう頑張っても対応しきれない。

「……無理だよ」

そんな小さな呟きは、外ではなく内に向けられたものでしかない。私自身の正当性を高めることしかできない。

今後、どうエヴァパイロットとして前に進めばいいのかわからなくなってしまう。

ミサトさんに相談したい。相談して、どう考えて向き合えばいいのかアドバイスが欲しい。

お父さんは……ありかもしれないが、「使徒殲滅が最優先だ」とか言ってそれ以上話してくれなさそうだからパスだ。

やはりミサトさんだ。私に真摯に寄り添ってくれる、大好きな人。

だが今はまだ声をかけるタイミングではないだろう。指令所ではSNSや動画投稿サイトを主にMAGIでネットの監視に集中させている。

ネルフの機密情報を暴露するには相当の覚悟がなければできない。そして、暴露する手段もネルフより一枚上手でなければならぬ。

ネットは監視されているものという前提を置くならば、それ以外で最も効率よく情報を拡散させやすいテレビや雑誌が挙げられる。タレコミを防ぐにはメディアも目を光らせて掌握しておかなければならない。さらにはチラシなどといったアナログな方法も網羅しなければならぬ。

情報漏洩を防ぐべく徹底した体制を敷いている。これならば世間に知られることはないだろうとミサトさんは諭すように私に言ってくれた。

でも。

それは嘘だと思ってしまおう自分がいる。

その事実を知る人間がいる以上、誰かが私がエヴァパイロットであることを知っているわけである。それで言うところクラスメイトたちも当てはまるが、ネルフという強力な背景のある私の秘密を外に明かす人はいないはずだ。

だからこそ、あの男の人は危険すぎる。

表に出ていないだけで、あの人の人脈を伝って情報が知れ渡っているとみていいかもしれない。

情報戦に疎い私でもそれくらいのこととはわかる。ネットにアップした情報が二度と消えないのと同じように、私の秘密も二度と消えない。むしろ密かに拡散していく。

……テレビ台の脇に置いていたスマホの通知音が鳴った。

誰かからメッセージでも飛んできたのだろうか。

下半身を支えながら寝返りを打つ要領で身体の向きを変え、懸命に手を伸ばしてスマホを手取る。

通知欄にはヒカリからのメッセージが表示されていた。

その簡素な一文を見て、私の時間は止まった。

『今はあまりネットを見ないほうがいいと思うよ』

呼吸が停止する。

全身の肌がきゆうう、と固くなって締まり、目の奥が急速に熱くなる。熱は一瞬にして全身にまで広がり、大量の汗が吹き出るような錯覚がした。

目を見開き、静止する。

指先が震え、喉奥に溜め込んだ空気につつかえる。

既読にしたが、返事は返さなかった。返せなかった。

ようやく再開した呼吸はあまりにぎこちなく、やり方を忘れ、貪るように口を開閉させて取り込む。

喉が乾燥し、激しく咳き込む。咳き込みすぎて、胃液がこみ上げてくる。

「う、う」

身体を丸めながら自分の胸を強く叩き、酸味のある液体を強引に飲み込む。

荒々しい呼吸には、気持ち悪い味があった。

——どうしようか。

私はスマホをもう一度手に取り、ヒカリの忠告を無視するかどうかを思索する。

普通なら素直に従うべきだ。無視してもいいことなんて何も無い。嫌なものには蓋をして、前だけを見ればいい。後ろじゃなくて、前を見る。今後どうすればいいのかはミサトさんたちが考えてくれる。ほとぼりが冷めるまで、私はこうして静かにしていればいい。それで、いいのだ。

「……………本当に？」

私の判断は絶対に間違っていない。

蓋を開けたところで私が傷つくだけだ。自分から傷つきに行くのは馬鹿のすることだ。私はそこまで馬鹿ではない。

だから何もしない。何も見ない。

そこにあるのに、何も。

苦しみや悲しみをこれ以上知りたくない。

アスカはいなくなつたし、私はこんな身体だし、主戦力は綾波さんしかない。

この状態で果たして次の使徒を迎え撃てるのだろうか。できたとしても、綾波さんのダメージが私のように決して無視できないものになる可能性は十分にある。

傷つき、崩れ、壊れ、無くなる。

そういう世界に私は足を踏み入れている。

私は皆を守るために戦っている。

私がエヴァパイロットであることを知り、どう考え、どう思っているのかを知ること私の役割の一つではないのだろうか。

これは間違つた選択かもしれない。いや、間違つた選択なのだろう。

それでもそうせずにはいられない。

ほんの少しの興味と、悪い意味での義務感と正義感に駆られ、私は適当なニュースサイトを開いた。

上の方にやはり、それらしきニュースが上がっていた。タップして詳細を見る。

どうやら飛び降り自殺未遂のホームレスが、私がエヴァパイロットであるというチラシを施設の屋上からばら撒いていたらしい。

チラシ画像付きのコメントを見ると、車椅子に乗った私の顔写真がはつきりと写っている。目を黒い横線で隠してはいるものの、線が細いし、隠しきれしていない。

そして人々の関心を煽るようなタイトル文。

『ロボットが本当に世界を救うのか!? パイロットの少女に直撃インタビュー!』

ホームレスはお金で釣ったのだろう、やり口が汚い。しかしとても効果的だ。

まず何らかの方法で人々の注意を引き、その後チラシをばら撒く。駅前のビラ配りのようなやり方では決して誰も見向きをしてくれない欠点を回避している。

それに注意を引く手段が最も賢い。

自殺という非日常を行うおうとすることに關する興味でスマホを向けてしまう現代人の性。不謹慎であると頭の中でわかっていても、止めることができない。拡散されたそれをまた別の人が不謹慎と思いつつも、興味は寄せられてしまう。

散々注意を引いた後、メインである機密情報の暴露。屋上からばら撒かれる大量のチラシは、聴衆たちへと降り注がれる。

ネルフでもこれは防げない。

今やすべてがデジタルな時代。誰でも情報を拡散することができ。私のような中学生でも。

手元のスマホでその様子を撮影して、SNSにでも流せばいい。それを面白く感じた誰かが拡散を加速する。

こうなってはもう歯止めが聞かない。

情報発信者が大人数になってしまった今、ネルフはどう動いても悪

い方向に転んでしまう。

誰かが拡散した瞬間にMAGIによって強制的に削除された場合、『そういうことである』と自ら認めてしまうことになるからだ。

これがまだメディアによる工作ならばまだカバーできた。質もしくは量で攻めてきても問題なく対処できた。しかし今となっては量の母数が段違いだ。

知っているだけで情報発信しない者には手出しができない。

だからもう、過去に逆行でもしない限りやり直せない。

そしてニュースコメントや匿名掲示板を覗き――。

「……………、え？」

よく、わからない……………文字の羅列を見た。

『こいつが俺たちの家をぶっ壊しまくってるってマ？』

『こないだの松代の爆発事故とかも関わってるんじゃないね』

『でも車椅子ってことは大怪我をしたんじゃないの？ 少しかわいそう』

『そりゃしゃーない。世界を救ってるんだから怪我のひとつやふたつくらい』

『ネルフが勝手に言ってるだけで、本当は第三新東京市でロボットの実験してるに一票』

『わいも一票』

『あーあ、この子は毎日温かい食事が食べられて、気持ちいい寝床で寝てるんだろうな。んで、お金もがっぼがっぼ』

『その金俺にくれメンス』

『いや復興に全部寄付しろよ』

『ネルフは真実を隠蔽している！』

『まあ元から胡散臭い組織だっつのはずっと前から言われてた』

『碓カノンだっけ？ ネルフトップである碓ゲンドウの娘じゃん。絶対なんがあるって』

『わい、家なくなつて疎開民。絶対こいつ許さないマン』

『碓カノンをテレビとかに引きずり出せばなんか情報吐くんじゃね？』

『家特定。案の定それらしき警備員がめっちゃいる。やっぱり組織ってのはこういう手回しだけはエグいほど早いよな』

『ちょwおまwww仕事早杉www』

『晒すなよ？ 絶対ここで晒すなよ？ 晒したら多分消されるぞ？』

『フリかな？』

『まあ碓カノンがこの街めっちゃめっちゃにしてるのは間違いなさそうだから、本当に戦闘があったにせよ、使えねえわな』

『確かに。もつとしっかりした奴にしろよ。こんな弱そうなのひよろガキじゃなくて』

『でもなんかパイロットってのはどちゃシコな格好して乗るらしいし、一目見てみたいなあ』

『マジか。この子がそんなやべー格好するんか？ ……ネルフに転職するわ』

『誰かが流してくれることを期待』

『まあそういうお前ら向けの需要は結構ありそうだから、碓カノンが堕ちたらそういう√になりそうだな。おかず的な意味で』

なんだ、これは……？

私は突きつけられた現実を受け入れられなかった。

唐突に目が悪くなったのではと強い願望を抱きながら目を擦ってみるも、デイスプレイに表示される心無いコメントは消えなかった。

もちろん、全員から認められるなんて都合のいいことは考えていなかった。ある程度の批判も想定していた。

だがこれはなんだ。

これは、なんだ。

私を批判……いや、馬鹿にして……いや、いや、それも違う。ただ『つまらない日常を盛り上げる、面白くなりそうなネタ』のように扱っている。

まるで私を人間扱いしていないような、おぞましいコメントだった。どこか遠い世界の人間。自分とは関わりのない、だからこそ一方的に感情を投げつけられるネタ。

……人の本性を垣間見た気がした。

こんなに。

こんなに頑張ってきたというのに、皆を守るために。

命を懸けて。

二度と治らない障害を背負って。

ゆっくり向き合うことすらできずに次の戦いに私自身を捧げて。

爛れた心身に鞭を打つ。

そうして今まで頑張ってきたのに。

スマホを床に叩きつける。

「う、あ、あああああ……!」

枕に顔を窒息しそうになるほど強く押し付け、喉が張り裂けんばかりの怒りと悲しみに叫んだ。

こんな人たちのために、私は戦っていたのか。

決して私はそういう目で見られたいからエヴァに乗ったのではない。

皆を救いたいという、漠然だが明確な意思を持って戦っていたのだ。

この人たちはきつと、アスカや綾波さんにも同じようなことを言うのだろう。

それだけは絶対に許せない。ふたりは私なんかよりも前からエヴァに乗るために人生を費やしてきた、真の努力家である。

その実績と成果に後ろ指を指すのは我慢できない。

「悔、しい……ッ」

長い時間枕に顔を埋めているせいで、本当に窒息しかける。濡れた袖をさらに濡らし、私は叫びと嗚咽の混じった汚い声をあげ続ける。

喉が灼けそうなほど熱い。

この世界は優しい人たちに満ち満ちているとずっと思っていた。意地悪な伯父さん伯母さんや、以前の小中学校のクラスメイトたち。

あのコミュニティから抜け出せば、暖かくて居心地のいい所に行けると信じていた。

目の奥が溶けそうなほど熱い。

でも実際は違つて、より大きな、より悪質なコミュニティが大口を開けて私を待ち構えていた。

私は知らなかっただけ。

まだ真の悪意——『本性』に触れたことがなかっただけ。

恐怖と、絶望と、悲哀に私の心が耐えられない。

見えない何かに心臓が握りつぶされるような強烈な圧迫に伴う痛み。

ぷつん、と切れてはいけない最後の一本が切れる。鋭い音が脳に響いた。

脳の血管が潰れたような小爆発。どろりと広がる赤い痛みは私の割れた心を赤く彩る。

「ああ……」

身体に深く染みる、甘い甘い毒の蜜。

純血は汚され、二度と戻らない。

人の本性を知ってしまった、綺麗だったかもしれない哀れな私。

儂い承認欲求すら全否定されたような気がして、より深みに墮ちる。

皆のために命を懸ける理由がわからなくなる。

私はいったい今まで、何をしてきたのだろうか。

あんなに一生懸命に生きて、バカみたいだ。頑張ったら頑張った分だけ皆に認められるなんて甘すぎる希望なんて胸に抱いて。

希望は悪意に無惨に貪り食われる。

骨まで噛み砕くくせに、肉や皮は半端に残している。

汚い。

皆、汚い。

そして私も、汚くなった。

何もかも、わからなくなった。

私の存在意義もわからなくなった。

そうして私は色褪せた目で天井を見上げながら、微かに震える声で囁いた。

「……もう、いいや」

蒸発して、静かに舞い上がる心の塵を幻視した。

鬼の書 序

目覚めは特に普通だった。

悪い夢などは見ていない。いつそ今が悪い夢であつてほしいほどだ。

いつものアパートではない、ネルフに設けられている空き部屋で目覚めた私は、もう慣れた動作で腕を伸ばして下半身を動かして車椅子に移動する。

スマホは昨日、ミサトさん回収されてしまった。

私の手元にある私物は、あのS-I-D-A-Tのみ。

遅い夕食を運んできてくれたマヤさんが気力の失せた私に気づき、素早い連絡を聞きつけてミサトさんが飛んできた。

あの時ミサトさんに何を言われたのかは、ちよつとよく覚えていない。

ただただぼんやりと天井を眺めていた私の手を握って、許しを乞うように謝っていた……ような気がする。

それを私は横目でちらりと見て、なんて言ったのかを懸命に記憶を掘り起こそうとする。

「……嫌だ。やめよう」

思い出したくないことを思い出してしまうから、思考を強制的にカットしようと試みる。

しかしどうしてもかえしのついた棘が余計に深く刺さるだけだった。

ネットに触れてはいけないというミサトさんの判断は間違っていない。間違っていたのは私だ。

わざわざしないでいいこととして自分で勝手に傷ついただけ。だから、ミサトさんがあそこまで痛切に頭を下げてまで私に謝る必要なんてないのだ。

知らないでいれば、悪意に犯されなくて顔を上げられたかもしれない。それらしい理由をその場ででっち上げ、間違いを犯し、自分を傷つ

けて周りに迷惑をかける。

「……何してるんだろ、私」

後悔と反省の念に押し潰されそうだ。

ふとテレビを見つけようと電源を入れたが、なぜか無反応だった。

そしてすぐに気づく。

「ああ。そっか」

確かにこれも必要な処置だ。

無意識に強く握りしめていたりモコンを、元の位置に戻して壁にかけてある時間を確認する。

およそ8時。普段の私ならとても考えられないほど遅い時間。でもこれに次第に慣れていくのだろう。

朝食は申告制だ。内線で依頼を投げれば、しばらく待っていると職員が運んできてくれる。

食堂には行けない。

そう命じられているのではなく、私自身が食堂に行けない。車椅子だからという物理的な意味ではなく、人のいるところに顔を出すことが急に怖くなってしまったのだ。

皆は私のことをどう思っているのだろう。

視線に込められた心の声が気になって気になって仕方ない。知りたいけど知りたくない。その心が笑っていようと哀れんдейようと、極度に怯えてしまうことに変わりはない。

こういうのを、人間不信というのだろうか。

この部屋はある種の異界だ。

外界とのネットワークを完全に絶たれた孤島に監禁されているようなもの。私ははつきりと口にはしないが、きっと皆もそう思っている。

お父さんなんて、使徒が来たら私を呼んで戦わせ、終わったらこの部屋に押し込んでおけばいいとでも考えているはずだ。

お父さんは私を愛していない。だから世界を守る歯車としか見えてくれない。油をさすことすら他人に任せている。

パジャマから私服に着替えなければ。

用意されていた私服は私のものではない。きっと家には戻れないから別のものを用意したのだろう。新品独特の匂いは、少しだけ落ち込んでいた心を落ち着かせてくれた。

肩口にフリルのついた白いノースリーブシャツと、デニムのショートパンツ。

私の知らない領域だ。短いパンツ自体滅多に履かない私には些か挑戦的なチョイスである。

ミサトさんが選んだのだろうか。どちらにせよ着替える以外の選択肢はないから渋々と着替える。

備え付けのブザーが鳴る。

誰かが朝食を持って来てくれたらしい。

着替え終えた私はドアまで移動し、警戒しながら人を出迎えた。

「あ……おはようカノンちゃん。朝ごはん持ってきたよ」

「……マヤさん」

カートに朝食を乗せてやってきたマヤさんは私の警戒に気づいたのか、ニコリと微笑みを向けた。

いったいネルフの中で、さらにマヤさんに何を警戒していたのだ、私は。

すぐさま自然と滲ませていた警戒心を消し去り、マヤさんを部屋の中に招き入れる。

「……どうしてマヤさんが？」

てきぱきとカートからお盆ごと朝食をテーブルに移すマヤさんの背中を眺めながら問いかけた。

「カノンちゃんと同性で、なるべく年も近いのが私だからかな」

「……………」

「葛城一佐から頼まれたのもあるけどね。もし手が空いたら、碓司令の制止があつたとしても無視してここに来てたと思うわ」

朝食はいたって普通で軽めなものだった。

いい感じに焼けている目玉焼きに、ぷりぷりしたソーセージ。レタスも一緒。

そして味噌汁とご飯も欠かしていない。

どれも熱々で湯気が立っている。本当についさつき調理されたものを持ってきてくれたのだろう。

私の手の麻痺を配慮してお箸はなく、スプーンとフォークのみある。

素直にその気持ちは嬉しい。

「カノンちゃんが普段どれくらい食べるかわからないから、もし多かつたら言っただけ」

車椅子のグリップを握り、私を机の前まで移動させる。

私の車椅子にプラスして大人の女性がいるから、この部屋はさらに少しだけ窮屈に感じられた。

私はマヤさんの気遣いに言葉を返した……だろうか？ わからない。ただ適当に口をもごもごさせて返事をした気になっているかもしれない。

しかしソーセージを小さく齧って肉汁を口内に感じた時、「いただきます」すら言っていなかったことに気づいてこれだけは明確に言葉に出した。

「……いただきます」

「はい」

大きく笑顔で頷いたマヤさんを尻目に黙々と食べ始める。

私は一言も喋らない。代わりに盛り上げてくれるテレビやラジオはここでは許されなかったため、スプーンと皿が触れる音や私の咀嚼音しか存在しない。

とはいってもやはり他人に食べる姿をずっと見守られるというのはどうしても緊張するし、いい気持ちではない。

「ごめんなさい、あんまりじろじろ見られたくないよね？ 私は横を向いておくから」

そう言っただけでベッドに腰掛けたマヤさんは、向こうの方に身体の向きを変えた。

「……なんでここにいますか？ 食べ終わったらまた連絡するの、その時に来ていただいたほうがいいんじゃないですか？ 私なんか結構暇があったら、別のお仕事をしたほうがずっといいで

しようし」

返事は意外に素っ気ないものだった。

「いいえ。これも仕事だから。カノンちゃんがちゃんとご飯を食べて、健康であることを確認するのが私の役割よ」

ミサトさんの代役……ならば何一つ間違えていない。

今の私は実質幽閉されている身だ。ストレスに耐えかねて——なんて起こさないための可能性も考慮しての役割、ちよつとしたカウンセラーなのだろう。

当然の措置とは思えるが、病んでいると断定されているようで少しだけ癪だった。

病んでいないと強く否定することはできないが。

「……そうですか」

理解も納得もしている。だがこれを素直に受け入れるのは多少なりとも苦痛を伴う。

朝食は普通に食べられる。食欲はある。身体はいたって健康だ。

「う、ぶ」

突然こみ上げてきた吐き気。

逆流する胃液。今食べていたものがまだ分解されておらず、固形物が喉の壁に触れて不快感が更に増す。

飲み込め、ない。

机下に置かれていたゴミ箱に急いで手を伸ばして膝上に置き、顔を下に向けて口を開く。

汚らしい音とともに私の口からどろどろになった食べ物がゴミ箱の底に貯まる。

「大丈夫!？」

マヤさんが血相を変えて私の背後に回って背中を擦ってくる。

呼吸をひとつつすると、口内にこびりついた酸味と吐瀉物の臭いに我慢できずに、もう一度吐いてしまう。

激しく咳き込みながら、ゴミ箱に突っ伏すように顔を埋める。

苦しきから涙も溢れる。

喉が赤い棘で刺られたような痛みで静かに悶える。

鼻で呼吸しなければいいのだ。酸味のきいた空気を味わうことだけ気をつけながらゆっくり、大きく呼吸を繰り返す。

それでもやはり我慢できず、最後に残り滓を振り絞るよう、ありつたけを吐き出す。

「うえ……ッー」

喉を大きく震わせながらゆっくりと顔を上げる。

いつの間にか別室から濡れたタオルを持ってきていたマヤさんが、私の口元にそれをあてがう。

そのまま椅子を押しして部屋を出てトイレへと連れていき、洗面台の前に差し出す。

タオルを脇に置き、蛇口から水を出して両手に溜めて口に含む。

ゆっくりとはなく素早く濯ぐことを意識。不快を今すぐ消し去りたい。

数回水で満たした口内はあつという間にすっきりし、顎に伝う水をタオルの端で拭う。

正面のガラスに映った自分の顔を見て、小さく呟く。

「……酷い顔」

どれだけの間、私は自分の顔を見ていなかったのだろう。

生気を半端に残した目元。

肌の赤みは薄くなり、血が通っていないようにすら見える。

これでは死相だ。

頬に触れる。

生きているという熱はある。

しかしながら、ただただ無感動だった。

なぜ突然嘔吐なんてしてしまったのだろう。

別に熱っぽくて身体がだるいわけではなかったのに。食欲もそれなりにあつたし、まだ食べられた。

スイッチが切り替わるかのように、急にすべてが逆流したのだ。

胃はむかむかするが、一通りスッキリした私は謝罪を口にした。

「すみませんマヤさん……私……、なんだか変みたいです」

マヤさんは答えずに何度も私の背中を擦る。

もう大丈夫なのに。熱くなるくらい、強く擦る。

鏡越しに見ると、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

私にはその理由がどうしてもわからなかった。

「どうしてそんな顔をするんですか……？」

「だって……だって……カノンちゃんは私達のせいでこんなことになったのよ？ カノンちゃんは私達を恨まないの？ 吐くくらいストレスを溜め込んでやって」

スト、レス……？

そうか、私は耐えきれないほどのストレスを抱え込んでいたのか。自覚がまるでなかった。

私にあるのは皆に対する失望と、私の無意味さのみなのだから。

恨みなんて感情を持つことができなかった。

「そう、でしたか……。そんなことも気付けなかったんですね、私は」
気分は悪いが、動けないというほどではない。

「戻りましょう」と声をかけ、マヤさんが私の車椅子を押して一緒に部屋に戻ってくる。

鼻腔を撫でる吐瀉物の臭いに顔を顰める。

ゴミ箱のみでは受け止めきれず、床にもそれらが散らばっている。

「ああ、掃除しないとですね。私がやったことなので私が——」
流石にこれの掃除を人にさせるわけにはいかない。

これは他人任せにしていい後始末ではない。車椅子から降りての作業になり、時間はかかってしまいが掃除を完了させるのは問題ない。

しかし、言葉を遮ってマヤさんが有無を言わさぬ優しげの含んだ強い声で話した。

「いいの。いいのよ。私がやるから」

別室から持ってきた濡れ雑巾でたったの5分で散らばった吐瀉物が綺麗になる。ゴミ箱のそこに溜まったものもどこかへ持っていき、最後に置き型の消臭剤を机の上に設置して終わりだ。

確か……マヤさんは潔癖症だったと記憶している。なのにここまでしてくれるなんて感謝しかない。

だから「ありがとうございます」と口にする以上のことはできなかった。

「気にしないでいいわよ。それで、朝食はもうやめておく?」

私は静かに頷いた。

まだ食欲はあつたが、また嘔吐してしまいそうで怖かった。

マヤさんは机の上に残った朝食を回収してお盆ごとカートに移す。そして私の横で中腰になって尋ねてきた。

「わかったわ。じゃあ私は一旦職務に戻るけど……何か欲しい物とかはある?」

「……ないです。適当に音楽でも聞いて過ごします」

今やS—D A Tが私の唯一の娯楽である。アスカみたいに片手サイズのレトロなゲームをする気にはなれない。

遅れている勉強を取り戻すこともできるが、なんだかやる気がなくなってしまった。これまでなら追いつかないと! という使命感から頑張っていたが、なんだかそれが無意味に思えてしまう。

だって、使徒と戦ったらまた入院して勉強が遅れるから。なんだか私が勉強する理由が皆に追いつくためだけになってきている気がしてならない。

そんなループが嫌になったのだと思う。

「……そっか。また何かあったら内線で連絡してね。私じゃない時もあるかもしれないけど、誰かは必ず対応してくれるから」

私に背を向け、カートを押して部屋から出て行くこうとする。

私は微動だにしない。ぼんやりと目の前の壁の僅かなシミを見つめている。

だが、いつの間にかマヤさん呼び止めていた。

「マヤさん」

「どうしたの?」

カートの車輪の回る音が止まる。

服の擦れる音が聞こえる。

きつとこちらを向いたのだろう。

そして私は訊いた。

「私はこれから……どうなるんですか？」

私の家はここになって、これからもエヴァに乗り続けるんですか？」

最も大切な質問。

いつまでもならだらだとここにはいられないのはわかっている。私
がここにいるのは、エヴァに乗る覚悟を決めていたからだ。

その覚悟が無くなった今、私の存在意義はなくなった。つまり、ネ
ルフにいる理由はなくなった。

「——それは……わからないわ。今、上層部でカノンちゃんをど
うするか話し合いが行われているの。それ次第になると思う」

上層部……ということはお父さんが間違いなく関わっているはず
だ。

でもどうせお父さんのことだ、冷たい結論を出すに違いない。

「わかりました。ありがとうございます。それと、今朝は色々と迷惑
をかけてすみませんでした」

振り返り、きちんと向き直って深々と頭を下げる。

いくら落ち込んでいたとしても、冷静さのある今なら礼儀は欠かさ
ず尽くせる。

これくらいしか私にはできない。

「迷惑だなんて思わないで。皆、カノンちゃんのことがかって、好きだ
からやっているのよ」

好き、とは……、なんだろう。

ミサトさんに以前言われたときは、ただ漠然と嬉しかった。だが今
では素直に受け入れられなかった。

脳が理解するのを拒絶するかのよう、強いノイズがかかってしま
う。

人の言葉を言葉通りに信じられなくなってしまうのかもしれない。
卑屈な人間になりそう。

胸がとても苦しい。心臓を鷲掴みされているかのような辛さだ。

ぎゅうう、と服を握りしめる手の力を強め、頭を下げた姿勢のまま
言葉を続けた。

「……ごめんなさい。私、マヤさんの言葉を信じたいのに……信じられないです。ごめんなさい……ッ」

「……。そっか……そうよね。あんなことがあつた後だもんね」
言葉を失ったマヤさんは、言い繕うように寂しそうな笑みを浮かべているのだろう。

というのは私の勝手な予想で、本当はどんな顔をしているかは下を向く私にはもちろんわからない。

だからこそ、マヤさんの顔を見たくなかった。

実は馬鹿にしたり、哀れみの視線を向けていたらと思うと耐えられないから。

被害妄想が過ぎると自分でも自覚している。

でも怖い。どうしても怖い。

人の本当の気持ちを知ってしまうのがどうしようもなく怖くて仕方ない。

すたすたと足音が向こうへ……ではなく、私の方に近寄って来た。なぜ。どうして。

自然と全身が強張る。

「人って難しいよね。口では言いたいことを言いたくだけ言えるんだから。正確に真偽を見抜ける人なんていないし、それは私もカノンちゃんも同じ。だからこそ、寄り添って、知っていくの。たとえ傷つくことになってもね」

少しだけ落ち込んだトーンで、間近からマヤさんの声が私の頭に落ちてきた。

それに対して私は頭を振った。

「違う……違います。私からは寄り添ってません。皆が私のことを一方的に知って、一方的に言うんです。碓カノンは役立たずだって」

私は知らない人たちから傷つけられるだけ。その人たちがどんな顔をしていて、どんな人なのかなんて何も知らない。なのにこんなに傷つけられた。

握りしめた拳に指の爪が食い込む。もう少しで血が出そうなほどだが、私にはそんなこと、今はどうでもいい。

目の前でしゃがんだマヤさんは、じつと私を見上げる。

「そうね。この世界はまったくうまくいかないし、全然綺麗なかわらないわ。汚くて、乾燥してこびりついた血がいつまで経っても洗い流せない世界よ。皆が皆を善くわかり合うことは決してできないわ」

「……………」

「でもね、決してそれだけじゃないはず。それはカノンちゃんもよくわかっているはずでしょう？ 胸に手を当てて、思い出してみて」

そう言うと、私の手をそつと掴んで胸に押し当てた。

静かに瞼を下ろし、過去を振り返る。

そこには悦びがあった。生の悦びがあった。

私を求める人がいる。そして私がそれを為せば、喜んでくれる。

でもそれだけではダメだと知った。愚直に為すのではなく、きちんと考えて行動する必要があることを鈴原くんからの一撃で学んだ。

これは世界を救う者としての責任である。

嬉しかった。楽しかった。

学校生活というものがあれほど面白いことだらけなのを初めて知った。

私の周りの人々は、私にあんなにも優しくしてくれた。

だからこの人たちを死なせたくないから、守りたいからエヴァに乗ること、そして傷を負う覚悟をした。

でも、現実は一——。

「やっぱり、無理です。今までのことより、今に押し潰されてしまいました。……誰も信じられない。誰かのためになんて、もう頑張りたくないです」

私のことを悪く言う圧倒的多数の人々のために頑張る必要なんてどこにもない。

人を信じることで裏切られるのはもう嫌だ。だったら初めから何も信じなければいいのだ。そうすれば裏切られることもないのだから。

強引にマヤさんの手を離させる。

その時にはもう遅かった。私が拒絶したことで、マヤさんが少なくとも傷ついてしまったことに気づくのに。

「あ、……」

言葉が続けられない。

どう続きを言えばいいのか何もわからない。

時間にして数秒。しかし私には無限に引き伸ばされた空白のように思えた。

やや寂しそうに微笑んだマヤさんは「ごめんね」と謝りを入れてから、

「……うん、すぐには立ち直れないよね。本当にごめんね。やっぱり私、こういうカウンセラーみたいなのは上手くないみたい」

と残念そうに言ったのだ。

違う。そんなことはない。

私を癒そうとしてくれたのはよくわかっている。ただ私がマヤさんの言葉を受け入れなかつただけ。それだけだ。

むしやくしやす。

変に突っぱねて、その後の弁明に詰まる私自身にむしやくしやす。

ちゃんと人の気持ちを考えて発言しなさい。この世界は私一人だけのものではないことを自覚しなさい。

「たぶん今日か明日にもカノンちゃんのこれからについて結論が出ると思うから、その時は葛城一佐がここに来るはずよ。……時間は短いけど、ゆっくり休んでね」

そう言い残してマヤさんは部屋を後にした。

私は何も言わずに頷いただけだった。

ひとりになった部屋は、驚くほど物静かだった。

静寂を碎き、さらに静寂の底に沈んだような感覚。

聞こえるのは服の僅かな布擦れ音のみ。

耳を澄ましても、何も聞こえない。

あまりにも暇だからといって廊下に出てネルフ内を散歩する気には到底なれない。

人目に私の身体を晒したくない。誰にも私の存在を認識してほしくない。

そういった意味では、この部屋は最高なまでに私の需要を満たしている。

つまり。

ここは私を隠す檻。

そして、愛玩の空間。

S—D A Tから伸びるイヤホンを耳に押し込み、ベッドに倒れ込む。

適当にボタンを押して音楽を再生する。

流れるはベートーヴェンの第九。

ループ再生をオンにして意識を耳に集中させる。

滑らかな曲調に、絶妙なバランスで噛み合わさる男と女のコーラス。かと思えば一気に過激なテンポになって音圧を上げる。

ドイツ語だから何を言っているのかさっぱりわからないが、自然とその音が人間の発する音ではなく、曲の一部として同化し、聴き入るほど心地よい。

数百年前に作られたものが、長い時を経て現代を生きる私の耳の鼓膜を震わせる。

なんてロマンチックなのだろう。

私はどちらかというところプラグマチックな方の人間だが、なぜかそう、強く思えた。

…ループに入る。

終わりの尾は始まりの角に繋がり、輪廻する。

私は囚われの愚かな女。

巡って、巡って、巡って。

何度も何度も同じような自己問答を繰り返す。

そして結論はいつもぶれぶれ。

確固たる自分を貫けない。

だから今こうなっている。

きつとこれからもそうだ。

いつか、私はこの状態から立ち直るだろう。これは確信に近い。でもまた傷ついて、落ち込んで、塞ぎ込む。その度に私自身を納得させるその場凌ぎの『答え』を染み込ませるのだ。

でも。人ってそういうものでしょう？

結局、自我を強く貫ける人なんてほとんどいないのだ。この人はそうであると断定できるのはお父さんしかいない。

私はお父さんのように強くはない。それに嫌いだ。しかしながらその一切揺らぐことのない自我は、人として素直に尊敬するべきなのかもしれない。

お父さんは逆に、私のことを軟弱な娘だと今頃思っていることだろう。

「はは」

微かに嗤う。

音楽の再生を停止させる。結局3ループほどしか流していない。

ああ。

ああ。

おかしいな。

この曲に感動したことなんて一度もないのに。

どうしてか、枕が濡れている。

おかしいな。おかしいな。

なんでだろう。なんでだろう。

それに発作のように心臓が締め付けられて、苦しい。痛い。とても痛い。

胸を強く抑えながら、上半身を掛ふとんの中で極限まで小さく縮ませる。

眠れ。眠れ。

眠ってしまえばこの苦しみから解放される。

眠ってしまえばこの痛みから救われる。

眠ってしまえば――。

眠ってしまえば――。

辛いことをさっぱり忘れられる。

そうだといいな。そうだといいな。

……お願いだから、そうであってください。
継るように。

声にならない声で祈りつつ。

◆ 瞼を閉じて、私は滲む視界をシャットアウトした。

私は母親という揺りかごを知らない。

母親の愛というものを知らない。

愛というものが、わからない。

それは私がお母さんを何も知らないという理由だけではない。

私だって、小学校の時に道徳の授業や、あるいは本やテレビなどで
愛を学ぶ機会があった。

愛とは、こうこうこうで、こういうものである。

それを教わって理解はできたが、だからといって認識することは
できなかった。

なぜなら、愛を誰からも受けたことがないから。

知識としてしか愛を知らない。

その感情がわからない。

『好き』ならわかる。

ようは好きな食べ物や色などの認識でいい。その幅を広げてやれ
ばいいだけ。

だからこそ、愛の深みに陥る。

愛と好き、は異なるものなのか？

きっと私が愛を理解する日は来ないのだと思う。

私を好いてくれている人がいることを知っている。私もその人の
ことが好きだ。

もしかするといつかの未来、異性を好きと思う日が来るかもしれない。
い。だがそれはただの好きであって、愛ではない。ゆえに愛は育めな
い。

それにどうせ私は子供の作れない身体だから意味もない。

……ほら。

まあ。今はそんなの求めなくてもいいだろう。まだ子供だし。それに愛なんて、もう私には――。

「……ん、くう」
目が覚める。

ぼんやりと瞼を持ち上げようとする、乾燥した目元のせいで、ほんの少しだけ痛みが伴った。

「ごしごしと手で擦って目を慣らす。

「ごめんね、起しちやっただ？」

「………ん？」

私ではない誰かの声が聞こえて、覚醒しきっていない頭を動かす。ぼんやりした視界が、ゆっくりピントが合うように鮮明になっていく。

そして、椅子に座って私を見下ろしている人影を認識した。

「………ミサトさん」

思わぬ侵入者は調子に乗ったりするでなく、憂いの混じった微笑みを私に向けてそつと手を伸ばしてきた。

その細い指は私の頬を優しく撫で、顎までなぞる。

私はされるがままになりつつもミサトさんをじっと見つめる。

撫でるのに満足したのか、今度は顔を近づけてきた。それも直前で止めるのではなく、そのまま私の頬にキスを落とした。

どくん、と心臓が一度だけ強く脈打つ。

あまりに柔らかい感触。ふわりと大人の女性らしいいい匂いがした。だが私は顔を赤らめるなどといった反応なんてできず、ただただ無言で見つめ続ける。

いったい何を考えているのだろう。

一種の求愛行動？

弱った私につけ込んで襲おうとしている？

何を邪推しているのだ、私は。

……そんなことはない。ミサトさんはそういう人ではないことはわかってる。

だから悪い方向に捉えようとした私が悪い。

「そろそろ夕食の時間だったから声をかけようと思って。でも内線で反応がなかったから心配になって来たの。マスターキーを使つてね」それは良くないことをしてしまった。

確かに、私が何も反応を示さなければ心配されるのは当然のことだ。

マスターキーの存在も納得できる。

私が本当に引き籠もった場合、あるいはストレスからの自殺を防止する強行手段なのだろう。

「すみませんミサトさん……私、寝ちゃってました」

「気にしないで。ちょっと私が心配しすぎたのもあるわ。でもそのおかげでカノンちゃんの可愛い寝顔を見れたし」

「……どれくらい前からいたんですか？」

「30分くらい前から」

私は小さくため息を吐いた。

「起こしてくれてよかったんですよ？」

「ダメよ。そんなことしたら可愛そうじゃない」

「いいですよ別に。ミサトさんの時間を使わせてしまってるんですから」

下半身を力業で動かしつつ上半身を起こす。

少しだけ喉が渴いている。

でもそんなことは後でいい。それよりも、今どうしても訊きたいことができたのだから。

「……マヤさんではなく、ミサトさんがここに来たということは、私のこれからが決まったってことですか？」

「……………」

ミサトさんの顔が沈みこむ。

部屋の淡い照明は微かに舞う埃を照らす。

「そうですね？」

私ともう一度訊くと、ぎこちなく首肯した。

「……ええ。確定ではないけど、大まかには。話は私からではなく、碇司令から直接言い渡されるわ。だから今からカノンちゃんを連れて

行かないといけないの」

「そうですか」

それなのにミサトさんは私の睡眠を優先して待つてくれているのか。

きつとお父さんは私が司令室に来るのを待つている。

「今、準備します……あ、でもちよつと服は着替えたいです」

自分の格好を見下ろす。

お父さんの前とはいえ、きちんとした場だ。普通な私服で行くのはあまり良くない気がした。

では何に着替えるのかといえ、やはり制服しか選択肢はない。

ほんの数日ぶりだが懐かしく感じるそれを手に取り、もそもそと着替える。

……慣れたものだ。

そう思いながら数分で終えた私はミサトさんに「お待たせしました」と言葉を投げかける。

「ん。じゃ、行きましようか」

前を歩くミサトさんの後ろに私が続く形で移動を開始する。

手元のレバーを押し倒して前進。通路を通り、ミサトさんが開いてくれたドアを抜けようとして――。

「あ、れ……？」

――動かない。

どういうわけか、車椅子が動かない。進まない。

厳密には、私の手がレバーを押すことを止めている。

まるで金縛りにあったかのようにぴくりとも指を動かせない。

おかしい。指や手に障害はあるものの、ここまで酷くはない。リハビリもしているし、ほとんど脳とラグがないほどに改善に向かっているはずなのに。

それだけではない。脳が急激に熱くなる。呼吸が恐ろしいほど細くなる。

身体中の血管が収縮して血の流れが滞るような感覚。

視線は次第に足元へと落ち、小刻みに肩を震わせる。

これは……恐怖だ。

私は今、外に出ることに強烈的な恐怖を感じている。

「ご、ごめんなさい……」

辛うじて発せた謝罪の言葉は、ミサトさんに聞こえたのかわからないほど消え入りそうだった。

外——広い場所に出ることが何よりも怖い。たとえ人に会わなくても、誰かが私を見ているかもしれないという妄想からの恐怖がある。

今朝はそんなことを意識していなかったからやり過ぎせたのだ。

だが今は違う。

「大丈夫？ たぶんカノンちゃんは人が怖いよね？ 事前に司令室までの道に人はいないようにしたんだけど……それでついてこれる？」

私は下を向いたままふるふると首を横に振った。

「ごめんなさい……ごめんなさい……怖いです」

人がいたら絶対に無理。

いないとしても、もしかしたら誰かが、と想像してしまつて無理。

嫌だ、出たくない。

私はこの狭い部屋で、ベッドで小さく包まっていたい。

小さな私の世界でじつとしていたい。

ああでもそれだとミサトさんに迷惑がかかってしまう。

「じゃあ、私が司令室までずっとカノンちゃんをおんぶしてあげる。片腕は使えないからちよつと不安定になるし、腕をしつかり首に回してもらふ必要があるけど、どう？」

どうして？ と返したくなるほど穏やかな語りかけだった。

そこまでしなくていいのに。まだ怪我也治りきつてない。苛立ちを感じて、少しくらい私に当たってもいいのに。なのにどうしてそんなに私に優しいの？

誰も信じたくない。

でも、ミサトさんなら……信じてもいい。

「お願い、します」

「よしきた。カノンちゃんくらい軽い荷物、司令室までひとつ飛びよ！」

そう言うや否や、ミサトさんはこちらに背を向けてしゃがむ。私はまず腕を肩に伸ばして掴み、そして腕の力で身体を車椅子から離れさせた。

「おっとっと」

バランスの崩れかけた私をミサトさんにしっかりと支えられ、背中に密着することに成功した。

右腕が私のお尻の下にまわされ、しっかりとホールドされる。私も落ちないようになり、しっかりとミサトさんの身体にしがみつく。

そして誰も見えないようにぎゅっと目を瞑りながら顔を肩に押し当てる。

穴があつたら入りたいほど恥ずかしいことをされているわけだが、おもらし事件に比べれば可愛いものだ。

「よーし行くわよー」

私を抱きかかえているというのにしっかりとした足取りで移動を開始する。

固く口を閉ざし、早く司令室に到着することだけを祈る。

確か部屋から司令室までは少しばかり距離があつたはずだ。それに階層も違うため、エレベーターを利用する必要がある。

「私は碇司令が何を話すつもりなのかを知ってる。でも敢えてカノンちゃんには教えないでおくわ。親子の会話を私は助けない。きちんとお父さんに向かって、目を見て話してきなさい」

ミサトさんの諭すような口調に、私はすぐには領けなかった。

私の今の状態をよく知っていてなお突き放すような宣告は、少なからずショックを受けたからだ。

「少し酷なことを言ってるのはわかってる。好きじゃない父親とふたりきりで話すことほど辛いものなんてないから。でもカノンちゃんの唯一の肉親であることは変わらない。だから、親を大切にすることは持ってなさい」

ただ教えを与える大人の言葉とは思えない重みを感じ取った。

私がお父さんを嫌っていることは変わらない。でもせめて好きになるのが無理でも、『普通』に思えるようになりたいとはあの日、お母さんのお墓の前で告げた。

果たしてあれから動きがあったかというとな、ない。

お父さんからのアプローチは当然ないとして、私からもなかった。ゆえに、これはお父さんとの距離を詰める丁度いい機会かもしれない。

こくん、と私は小さく頷いた。

ふと気づくと、ミサトさんは司令室のドアをノックしていた。

「――入れ」

と、お父さんの厳かな返事が聞こえた。

「失礼します」

そう言いつつミサトさんがドアを開くと、ややひんやりした空気を肌と感じた。床も通常の金属質な廊下よりさらに硬質のようで、明らかにミサトさんの足音が硬くなった。

「……葛城一佐。なぜカノンを抱きかかえている」

当然の疑問だった。

「は。広い場所と人目に対しての恐怖が自力での移動に悪影響を及ぼしていたためです」

「そうか。だがそのままでは腕も辛いだろう。少し待て。椅子を持ってこさせる」

「承知しました」

ガチャリ、と受話器を取る音が聞こえた。

「冬月、適当な車椅子を持ってこさせろ。今すぐだ」

数分もかからないうちに知らない誰かの声が新たに現れ、車椅子を私達の直ぐ側に用意する音が聞こえる。

「カノンちゃん、一旦下ろすわよ」

私が軽いほうだといっても、長時間抱くのはかなりの重労働だったはずだ。びくびくとミサトさんの腕が震えるのは少し前から感じていた。

ゆつくりと体勢を変えながら私の身体が下ろされる。そして車椅

子へと着地する。

ここで私は初めて目を開けた。

長い時間を瞑っていたためか、突然の光は非常に眩しかった。机と、いつものポーズをとるお父さんらしきシルエットは視認できた。

だんだんと光に目が慣れ、明暗のバランスが釣り合う。

司令室と言うにはあまりに広い部屋だった。大雑把な目算だと、学校の体育館より少し大きいくらい。

側面の壁は全面がガラス張りになっていて、ジオフロント内の自然が一望できる。

そして床と天井には見慣れない幾何学模様が緻密に刻まれている。

この部屋は、異様だ。

「ご苦労、葛城一佐。それでは退室したまえ」

「承知しました」

お父さんの指示に、ビシツと敬礼したミサトさんは踵を返して司令室をあとにした。

この空間にいるのは私とお父さんだけになった。

すぐに話を切り出すわけでもなく、サングラスの奥の瞳はじっと私を観察している。

もしかしてこれは私から何か話しかけなければいけないのか？

怖い。

何を言っても否定されそうな気がして、硬直するしかできない。

口内に溜まった唾を、ごくりと飲み込んだ。

直後、お父さんの口が開いた。

「初号機パイロット」

「は、はい」

「お前はこれからもエヴァに乗る意思があるか？」

ぐらり、と大きく脳が震える。

数メートル離れている私達の距離が、さらに遠くに離れているような錯覚がする。

いつの間にか汗ばんでいた手で、意味もなく車椅子の手すりを撫でる。

「どうなんだ」

「……………」

お父さんの考えていることはわかっている。でも、お父さんが何を思っているのかがわからない。

しかしながら私の答えは思案するまでもなく決まりきっている。

この場では誰も私を助けてはくれない。きちんと自分の言葉で、お父さんに伝えるのだ。

「私はもう、エヴァに乗りたくありません」

「そうか。では出ていけ。お前の戸籍はこちらで消し、新しいものを用意してやろう。望むのなら整形もだ。住居もいくつか候補があるから自分で選べ。お前の家事能力は聞いているが、これももし望むなら家政婦もこちらが手配しよう」

「……………」

「——話は終わりだ。部屋に戻って荷物をまとめておけ」
「えっ？」

あまりに短すぎる。

それだけ……………？

ここまでの会話時間は一分もない。

私のこれからに関する大事な話のはずなのに、たった数度言葉を交わすだけで終わってしまったていいのか……………？

いや、もちろんこれもそうだが、違うだろう。

それだけではないだろう。

お父さんの中ではもう、私のことは完了したタスクのような扱いになっている。すでに頭を切り替えて別の作業に手を付け始めてすらいる。

え、なに？

これはどういうこと？

ぽつんと残された私は完全な放心状態に陥る。

「なんだ。話は終わったはずだ。早く出ていけ」

その場から動かない私を訝しんだお父さんが、心底邪魔そうに突っぱねてくる。

「これ、だけ……？ 私にもつと言う事と違って、ないの……？」

「ない。必要な会話と必要な決定はされた。これ以上の会話は余分であり、する理由もない」

それでも毅然とした態度のお父さんは応えない。

「いや……違うでしょ？ おかしいでしょ？ お父さん、私に話すことあるはずだよ？」

どうして。どうして私はこんなにも自分を惨めに感じながら言い繕うように促しているのか。

親として。

やるべきことがあるはずだろう。

ネルフ総司令としての立場、そして一連の発言はわかる。

でも足りない。

親として、私に話すべきことが明確にあるのだ。

「ない」

これだけヒントを与えているというのに、絶対零度の声色は私を拒絶する。

少し、怒りが溢れた。

「あるじゃん！ お父さん、知らないはずないよね？ 私がエヴァパイロットだったことが世間にバラされたこと！」

「無論知っている。だがお前に伝える必要のある情報がないから話さなかったままでだ」

「娘を心配したりはしないの!？」

「心配してどうする。私が心配することですべてがなかったことになるのか？」

「それは……」

「表面上のものに過ぎない行為に意味はない。さっさと出て行け。私に時間を浪費させるな」

「――」

何も言い返せず、結局は同じ結論。

事実の塊をぶつけられ、私は言葉を失う。

受け入れがたい問答。

何も得られず、寧ろ何かを失った数分間。

こんなにも私は求めたというのに、お父さんは壁のように動じない。

ただ、私を心配してほしかった。慰めてほしかっただけなのだ。

『今はゆっくり休め』とか、そんな簡素な言葉でもよかった。それだけで崩れきった私の心が癒えたのに。

嫌いな人の言葉に、ありがたみを感じる事ができたのに。

「……私が使徒にお腹をビームで貫かれて後遺症が残った時、お見舞いにミサトさんが来てくれたの。両手と両足が不自由になった時も、退院の時だけどミサトさんが来てくれた。痛いくらい強く抱きしめてくれたの。悲しかったけど、すごく嬉しかった」

「……………」

「ねえ、この役目って本当はお父さんなんじゃないの？ お父さん、一回も私のお見舞いに来たことないよね？ これってなんで？ 私が死にそうになってたのに、それでも何もしないってどういうことなの？ もし私が戦いで死んでも、葬式にすら来ないつもり？」

「……………」

「お父さんは私のこと、どう思ってるの？」

司令は私の縋るような問いを無視して作業をしている。私には理解できない難しそうな書類をテキパキと捌いている。

もう司令の意識に私はいない。

だから、一番訊きたいことを、ありったけの熱量を込めて言い放った。

「——私を愛してる？」

「——」

ぴたり、と作業の手が止まった。

そのまま数秒静止する。

私は無言でお父さんの反応を窺う。

ゆっくりと書類に向かい合っていた顔が持ち上がる。サングラス越しに目が合う。

きつとこの瞬間、お父さんの中で様々な気持ちが渦巻いている……

と期待したい。そのための沈黙であると信じたい。
無限に引き伸ばされたかのような時間の果てに、ようやく口が開き、低く応えた。

「……私はお前を愛している」

そして私は。

「嘘だ」

と拒絶した。

私は目を見開き、語気を荒らげる。

「それだけは信じられないよ、お父さん。本当にそうなら、さつきみたいなこと言わないでしょ、絶対に。嘘つかないで。どうせ私が死んでもなんとも思わなくせに。私が死んでもお父さんの大好きな綾波さんがいるもんね」

誰も信じられない。

ミサトさんだけは信じてもいい。

お父さんは今、信じようと努力したけど、最悪の形で裏切られた。たぶんどう答えても私は信じなかったと思う。

きつと私は浅い傷で済ませたかっただけなのだ。

それが思いの外、深すぎた。

車椅子を動かし、お父さんの作業机に近づく。

私には理解できない書類の山を乱暴に手で払い、適当なボールペンを奪い、握りしめる。

そしてその鋭い先端を自分の首に突き立てる。

「これでもお父さんはどうせ止めないんでしょ!? 私、死んじゃうよ!? いいよねっ!」

いったい何をしているのだろう、私は。こんな馬鹿みたいなこと。でも勢いは私自身にも止められない。

情けない。情けない。

こうまでして私はお父さんに構ってほしいのか。

極限なく燃える感情とは別に、頬に熱いものが伝う。

お父さんは無言で、無表情だ。

止めてよ！ 死にもぐるいで私を止めてよ！

そう叫んだのかも自分でもわからない。
ペン先が首に浅く刺さる。

つう、と一筋の血が首から胸にまで流れ、シャツに赤いシミを作る。
このまま力を込めて押し込んで、思い切り引き裂けば私は死ぬことができる。

そうだ、死だ！

父親の目の前で、娘が死ぬ！

それでもなお、お父さんは動かない。

「なんでッ!？」

「それはお前が本気ではないからだ」

「――」

どこまでも冷徹な一言が、あらゆる熱を一斉に薙ぎ払った。

私は割れそうになるほど奥歯を強く噛み合わせ……そして、力なく
ペンを床に落とした。

この場からいなくなってしまういたい恥辱に震え、子供っぽく泣き出
してしまふ。

嗚咽を含んだ泣き声は、あまりに情けなさ過ぎた。

勝手にひとりで燃え上がって奇行に走り、たった一言であっさり鎮
められた。

また、人に迷惑をかけて自分を傷つけた。

何度同じことをすれば学ぶのだろうか。

「お前はまだまだ子供だ。そんな子供の駄々に付き合ってる暇はな
い。私と対等に話したければ、大人になれ」

そう言つて黙々と私が床に落とした書類たちを拾い始める。

お父さんの言う通り、私はただその場の感情を発散するだけの考え
なしの馬鹿な子供だ。それをたった今自覚した。

対してお父さんはどこまでも大人だった。

「ごめん……なさい」

子供の私にはそれしか言えなかった。

私はお父さんに背を向け、司令室をあとにした。



それから、外で待っていたミスアトさんにまず医務室に連れて行かれて治療を受け、首に包帯を巻かれた上で部屋に戻ってきた。

なにか色々決めないといけないことをした記憶はあるが、正直臆げだ。

荷物をまとめるとは言われたが、服とS—DATくらいしかない。

ふて寝をしていた私はとうに時間間隔を失い、気づけば深夜になりかけていた。

「痛」

首が痛い。

あんなこと、しなければよかった。

布団の中で悶絶する。

ここは私だけの世界。暗くて、小さくて、狭くて、誰にも侵されない絶対領域。

唯一心の底から安心できる場所。

このまま腐ったトマトのようになってしまってもいい。

もうすべてがどうでもよくなってきた。

不意に視線を天井、その端に向けると、以前はなかったはずの監視カメラがそこにはあった。

明日にはここを去るであろう私のためだけにここまでするのか。いや確かに必要か。

未遂だが司令室で自殺しようとしたのだ、当然の処置と言える。制服姿のままだが、着替える気にもなれない。お腹も空いていない。

まとめる荷物もない。服はこのままでいい。

もう一度布団を深く被り直した私は、意識をゆっくりと沈み込ませようとして――。

コンコン。

誰かがドアをノックする音が聞こえた。

「ん？」

無視しようと思い、聞かなかったことにする。深夜だし。

しかしもう一度ノックされたので仕方なく出ることにした。

慣れたものの、毎回車椅子に乗り移るのが面倒なんだけどな、なんて内心思いながらベッドから移動し、ドアを開けた。

そこにいたのは、予想外の人物だった。

「綾波さん……？」

ぽつんと立ち、私を見下ろしている。

「こんばんは」

「あ、うん……こんばんは」

それきり綾波さんは無言になる。

何をしに来たのかさっぱりわからない。

どちらかというと言理堅い人でもないし、私に用があるのは間違いないのだろうが、思い当たる節はない。

「入る？」

「ええ」

スタスタと部屋に入ってきた綾波さんは、ベッドに座り、ぐるりと周囲を見渡した。

自分から何か行動を起こすのは非常に珍しいから無下にはできない。が、こんなに遅い時間なのは正直少しだけ迷惑に感じてしまう。寝ようとしていたところだったし。

「それで……どうしたの？」

控えめに話を切り出してみるが、特に反応はない。

私をじつと見つめるだけだ。

「……………」

「……………」

「ネルフを出て行くって、本当？」

「……うん。もうエヴァには乗らないからね。たぶん明日にでも」

「そう」

それきり会話は終了する。

呆気ないものだが、もとより綾波さんとの会話はこんな感じだった。た。

そして私はふと、あることを思い出した。

「あ、そうだ」

「なに？」

「食事会、招待してくれたのに行けなくてごめんね。あんなことがなかったら、アスカたちとも楽しめたのに」

3号機暴走からの使徒の発現。

アスカへの侵食と、私に残った障害。

タイミングとしてはあまりに最悪すぎた。

とても楽しみにしていたし、皆ともっと仲良くなれるいい機会だとわくわくもしていた。

だが、食事会のことを忘れてしまうほど色々なことがあって、今の今まで気づかなかった。

綾波さんがたくさん練習していたこと、指に貼られた絆創膏を見て知っていたのに。

「仕方のないことよ、問題ないわ」

「そう、なの？」

主催者が問題ないと言うのならそうなのだろうが、こうもあっさり許してくれるとは。

「碓さんは碓司令が嫌いなのでしょう？ なら、なくなってもよかったかもしれない」

「ん？ ちょ、ちよつと待って。もしかしてお父さんも誘ってたの？」

「ええ。サプライズとして誘っていたわ」

「お父さん、OKしたの？」

こくりと頷いた。

「……………ふ」

私は小さく鼻で笑った。

「ただの気まぐれだったかもね、それは。たまたま予定が空いていて、綾波さんに誘われたからOKしたんだよ、きつと。そうじゃないと絶対に来ないはずだもん」

「そう？」

「絶対そうだよ。だってお父さんは私なんてどうなってもいいって思ってるから」

きつと綾波さんは私とお父さんを繋ぐキューピッドのようなこと

をしたかったのだろう。しかしそれは無意味だと断言できる。

もし何事もなく食事会が行われたとしても、私とお父さんは表面的な会話しかしなかっただろう。

「それはほかほかとは違う?」

「……全然違うよ」

「そう……私はふたりにほかほかしてほしかった」

そう呟き、綾波さんは目を伏せる。

「……………」

できるはずがない。これまでも、これからも。

私は十分お父さんのことをわかろうとした。

でもお父さんは絶対に私に触れて、知ろうとしてこなかった。だからもうダメだ。無理だ。

お母さんのお墓の前でしたお父さんへの宣言は、捨てる。怒りだ。

お父さんが何もしてくれないことへの怒りが急激に再燃してくる。涼しい顔で私をあしらうあの人。

アプローチがやや間違っていたことは認めざるを得ない。でも、それも含めて受け止めるべきではなかったのだろうか。

拳を強く握りしめつつも、落ち着いた声で言う。

「お父さんとはもう二度と会わないと思う。でもこれでいいんだ。これで変にお父さんに迷惑をかけることはなくなるし、私が傷つくこともなくなるの。だからこれでいい」

わざわざ嫌なことに正面から向き合う必要はない。

お父さん然り、私に対する世間の声然り。

逃げてもいいのだ。逃げないと壊れてしまうことだってある。

向き合って、立ち向かって、乗り越える。

それは今の私には不要な行為だ。

第一、そんな精神状態でない。

「今の碓さんは、ほかほかしてる?」

何て変なことを訊くのだろう。

私はあまりに面白おかしくて、笑ってしまいそうだった。

「そんなわけないよ。もうボロボロ。綾波さんに指先で軽く突かれるだけで……いや、息を吹きかけられるだけで壊れるよ」

と答える。

すると綾波さんは明らかな反応を見せた。

これまで無表情だったそれを驚愕へと変え、真紅の瞳が揺れる。微かに眉を顰める、一度だけ何かを言いかける。

私はそれを聞き取れなかった。

「碓さん」

改めて言い直した綾波さんの顔は、いつも通りだった。

「な、なに？」

「ベッドで横になって」

「ええ……？」

意図がよくわからないが、元より私に用があつて来たのだ。ここは大人しく従っておくことにする。

「よいしょつ」と車椅子からベッドへと身体を移す。仰向けになり、次を待つ。

綾波さんは一度立ち上がるうとして——足元にゴミ箱につま先が当たる。

視線が自然とそちらに向く。そして中を覗き込むと、不思議そうに尋ねてきた。

「この黒いの、なに？」

「あー、それは音楽プレイヤーだよ。お父さんからもらったやつ。でももういらなから捨てるんだ」

「碓司令との繋がりを捨てるの？」

「繋がり？　そうか、そうだね。確かにそうだね。ならなおさらだよ。お父さんと私はもうわかり合えないから。あ、別に欲しかったらあげるよ。たぶんお父さんもその方が嬉しいだろうし」

「そう」

わざわざゴミ箱から拾い上げて、S-DATを机の上に置く。

貰ってくれるのならそれでもいい。私の視界に入らないのならどんな形でもいい。

こちらを振り返った綾波さんが、のしつとベッドに手を置く。ギシ……と、軋み音が再び静寂になった部屋に静かに響く。

そのままゆっくりベッドに乗り上がってきた綾波さんは私の真上で四つん這いになる。

本当に何がしたいのかわからないのだが。

なんだか変な気持ちになってしてしまう。

「あ、あの。綾波さ——」

そして、私の上に覆い被さってきた。

「え、えっ!？」

あまりに驚きすぎて、リアクションするのに精一杯だった。

その間にも綾波さんの細い腕が私の背中とベッドの隙間に潜り込み、がっちり私の身体を抱きしめる。

「ちよつと……いや！ やめっ!」

拘束から抜け出そうともがくが、それが叶うはずもなかった。

脚は動かないし、上半身は身動きできないレベルで腕ごとがっちりホールドされている。さらに上から全体重を乗せられている。これ以上ないハンドの前に、私はされるがままだ。

もしかして襲われてる?」

パニックになって、より一層暴れるがやはり無駄な努力だった。無意味に体力を消費するだけで、ほんの一分ほどで限界が来て、完全に抵抗すらできなくなってしまった。

熱のこもった荒い呼吸を繰り返し、恐る恐る尋ねる。

「私を……どうしたいの……?」

私の胸に顔を埋めていた綾波さんがぴよこ、と顔を上げてあどけない顔をしながら言った。

「……碇さんと一緒にほかほかしたい」

「……ん?」

「?」

「ほかほかって、これ……え? 流石にこれは違うと思うけど……」

間違はなく誤解されるようなスキンシップ。

完全に私を襲おうとするそれだった。

だが綾波さんはそんなことをする人ではないことはわかっている
とはいえ、突拍子過ぎた。

「これは違う……？　誰かとほかほかする方法は、ベッドでその人を
抱くのが一番いいって、ネットにあったから」

そんなことを言つて、小首を傾げた。

「あ——、なる、ほど、ね」

私はすべてを理解して思考を停止させ、再起動した。

どうやらドがつくほどの天然属性があったとは今初めて知った。

「とりあえず、腕、放してくれる？」

流石に私の真面目なお願いはすんなりと受け入れられ、拘束が解か
れた。

身体を起こす気力が残っていない私は、上に跨る綾波さんに諭す。

「あのね、その抱くつていうのはそのままの意味ではなくて……その
……言うの恥ずかしいんだけど……そういうことなの」

「そういうことって？」

「……男の人と女の人が愛し合う行為のこと、です……」

いったい何をしているのだ、私は。

本日二回目の自罰的な感情になりながら教える。

「愛し合う行為って、なに？」

「だめ、だめ。それ以上は言えない。私が恥ずかしくて言えない。ど
うしても知りたかったら自分で調べて。あ、人には訊かないほうがい
いから、本かネットでだよ」

「そう……わかったわ」

綾波さんが明らかにしゅんと落ち込んだ様子に、なんだか申し訳無
さを感じてしまう。

「なら、私と碇さんはほかほかできないのね……」

「……………」

やり方は誤解を招きかねないし、とても不器用で、下手だった。
でも、やりたいことが一貫しているのは痛いほどよくわかった。

綾波さんなりに、私のことを慰めようとしてくれていたのではない
だろうか。

でないとは自発的に行動することはまずないし、人とコミュニケーションを取るなんて以ての外だ。

成長した。

大きく、それも私なんかよりも大きく。

次第に人間味の増してくる綾波さんに対し、逆に私は透明になってきている。

少しだけ、自分が恥ずかしくなった。

私は両手で綾波さんの両手首を掴んでバランスを崩させ、前に倒れさせる。

「わ」

倒れ込んでくるその身体を私は受け止める。

改めての服越しの肉体的な接触。

生の熱は何にも代えがたい大切なエレメントだ。

今度は私から綾波さんの身体を抱きしめる。

ミサトさんが私にしてくれたように、優しく溶けてしまいそうな、でも熱い抱擁を。

とくん。とくん。

互いの心臓の音を、耳ではなく押し当てている胸で感じ取る。

静かな時間。

熱い熱い、燃えるような生の時間。

悦びに震える呼吸。

私は、他人を受け入れている。

「……気持ちいい」

つい、そんな感想が口から溢れた。

この熱も、のしかかる重さも全てが気持ち良かった。

深い絶頂にも似た感覚。

なんだか泣きそうだ。

耳元で甘い吐息をすると、ぴくりと綾波さんの身体が震える。

ゆつくりと、全身に染み渡っても沈黙の抱擁を続ける。

綾波さんからは甘くて良い匂いではなく、ほんの少しだけ塩っぱい匂いもした。

「気持ちいい?」

そう、私は囁いた。

「……わからない。でも、すごく胸が熱い。身体が熱い。もっとう
していたいと、思う」

再び綾波さんの腕が私の身体にまわされる。

今度は抵抗しなかった。自ら腰を上げて、腕を滑り込ませやすくす
る。

そうして互いに身体を絡ませ、より強く触れ合う。

「じゃあ、気持ちいいと思ってるんだよ。それにこれは、『ぽかぽか』す
る」

「これが……ぽかぽか」

「うん」

さらに求めようとしたのか、綾波さんがもぞもぞと動いて顎を私の
肩に乗せる。そして甘える猫のように頬擦りしてきた。

ちよつと過激の域に突入しかけているが、快く許す。

私にぽかぽかしてほしいと願ってくれたように、私も綾波さんにぽ
かぽかしてほしいと願っているから。

「……ありがとう。私は綾波さんのこと、きつと好きなんだと思う」

「……………」

「でも私はネルフの人じゃなくなるから、もう会うことはないと思う。
……………ごめんね」

心から謝る。

もはや誰も信じられないが、ミサトさんなら信じていい。そして綾
波さんなら信じられる。

自然体で私は綾波さんと会話をし、不自由ない受け答えをしてい
た。それも、私自身も不思議に思わずにだ。

私達の間には妙な波長があつて、それが歯車のように綺麗に合致して
いるのか。

どちらにせよ、私は綾波さんに対して明確な拒絶の意思は初めから
どこにも無かった。

「碓さんはエヴァに乗るために生きているわけではないわ。だから、

エヴァに乗らない生き方だってあるはず」

……そうだろうか。

私はエヴァに乗るためにここに来た。そしてこれを機に自分を変えようと奮起もしていた。

ああ。

ああ。

そうか。

私は、外的要因をダシに使って都合良く目標を掲げていたに過ぎなかったのだ。

生きているふりをしていた当時の私……でも仕方ないことだったと思う。

後ろ向きに生きていた私が、前を向けるはずなんてなかったのだから。

でも今は違う。

色んな人たちと触れ合って、人間的な変化は間違いなくある。結局は裏切られて人間不信になってしまったとしても、得たものは消えない。

この恐怖もいつ克服できるのかもわからない。

ひとりで生きていくことにはなるが、細々と私なりの幸せを見つけられたらいいな、と思った。

「そうだといいな……」

今日は色々なことがありすぎた。

どうやら随分と私は疲れていたようだった。

枕に顔を埋めていた綾波さんが頭を僅かに持ち上げる。私は少しだけ抱きしめる力を緩めた。

囁かれた言葉は、優しげに溢れた子守唄のようだった。

「——今までよく頑張ったわ」

抱き合ったまま、魔法をかけられたように私はゆっくりと重い瞼を下ろしていく。

綾波さんという掛け布団は、他の何よりも私を満たしてくれるものだった。

涙が、一筋だけ流れる。

今日はぐっすり眠れそうだ。

なぜなら、綾波さんから感じる温かさがこんなにも心地良いのだから。

鬼の書 破

これまでにないほど良い目覚めだった。

ベッドには綾波さんの姿はない。代わりに掛け布団をかけられている。

きつと私が完全に寝てから部屋を去ったのだろう。

時刻はすでに昼前。

数日前の私だったら顔を真っ青にしていただろう。こんなにも遅くなってしまったことと、朝食を抜きにしまったことに。

しかし私はなんとも思わなかった。たまには自堕落な朝を過ごすのもいいな、なんて考えてしまう。

これほど明るい気持ちでいられるのは綾波さんのおかげだろう。

昨晚の出来事がなければ、私はこのネルフに対して辛い思い出を最後に残してしまうところだった。

ベッドから起きて身支度を済ませ、内線で朝食兼昼食のお願いをする。内線に出たのはマヤさんだった。

それから十分ほど経った頃にドアのノック音が聞こえた。ドアに移動して鍵を開ける。

そして目の前に立っていたのはミサトさんと、その背後にふたりの黒服だった。

黒服たちがいるため、物々しい雰囲気には怯えると、ミサトさんが無言で下がるよう指示した。

「おはよう、カノンちゃん。今日は私が届けに来たわ」

「あ、はい。おはようございます」

「中入らせてもらうけどいいかしら。もちろん黒服たちは入れないわ。部屋の前で待機してもらうから」

「それなら……はい、大丈夫です」

「ありがとう」

カートをガラガラと片手で押しながら部屋に入ってくるミサトさん。

そのまま奥へと進み、さささつとカートに乗せていた朝食を机に並

べ始める。

「……………」

よく見ると、机からS—D—A—Tが消えていた。

結局綾波さんはもらったのか。まあ捨てられるよりはいいだろう、などと耽つている間にも用意は終わっていた。

「昨日のことは聞いてるわ。だいたい量減らしてるし食べやすいのにしたけど、これでいける?」

手のひらサイズのカップのヨーグルト。

拳大くらいのくるみパン。

あとは牛乳。

くるみパンは焼き上がりのようないい匂いがする。

「たぶん大丈夫だと思います」

今日はなんだか不思議といけそうな気がした。

パンを千切って口に運ぶ。

ゆっくり咀嚼して呑み込む。

少し喉が乾燥していたから、牛乳で潤す。

ひらすらその繰り返し。

昨日のような唐突な異変は起こらなかった。くるみパンの次はヨーグルトをぺろつと平らげておしまいだ。

「ちゃんと食べてくれてよかったわ。ところで朝はアパートのときは和食派だったけど、カノンちゃんはパンでもいけるのね」

「私は別にどっちでも全然いいですよ。和食のほうが朝すっきりできるからってだけの理由です」

「あら、そうなの」

「そうです」

他愛のない話題が終わると、穏やかだったミサトさんの顔が引き締まる。

ベッドに座り、顔の高さを合わせる。

「……………」

そうだろうなと思いつつ身構える。

「食べ終わったことだし、そろそろ本題に入っていいかしら」

「……はい。どうぞ」

するとミサトさんはカートの下の段に収納されていた肩掛けバッグを取り出し、その中から大量の書類を抜き取って一部を私に手渡した。

「大事な部分を抜粋して説明するわ。『碓カノン』の戸籍はあと二日で消される予定よ。それで新しい名前と戸籍情報はそこに載ってる。家の住所。カノンちゃんの所持金。これはこれまでの使徒撃破報酬やその他の福利厚生などを盛り込まれた総額よ。よほど豪遊でもない限り、生きるのに困ることはないわ」

書類の該当項目を見て、私は目を丸くさせる。

桁が想像より二、三桁ほど多い。

「他の書類の方に書いてるけど、ネルフを去ったとしてもカノンちゃんはたくさんの極秘情報を知っている。だから行動に監視はつくし、かなり制限がつく。それにもしもそういった行動を取った場合、ネルフはカノンちゃんを消さなくてはいけなくなる。これは絶対に守ってね」

「……はい」

「ん。だいたいそんな感じよ。何か質問はあるかしら」

「ありません」

「預かっていたスマホも返すわ。クラスメイトからたくさん連絡が届いてたわよ」

「いりません。どっちも辛くなるだけですから」

「……わかったわ。じゃあ……じゃ、あ……」

これまで事務的だったミサトさんの言葉がか細くなる。

顔をくしゃりと大きく歪め、僅かに俯く。

「……ねえ、本当にここを出て行くつもり？ 私たちのアパートに帰ってきてくれてもいいのよ？ エヴァに乗らないからって、私はカノンちゃんを捨てたりなんか絶対にしない。家事だってもっとできるようになって、ずっと支えてあげたいって本気で思ってる」

静かな水面に微かな波紋を広げるような声は、嘘偽りのない懇願のように聞こえた。

「……………」

「ホントは私、死んだ父に少しでも近づきたくてネルフに志願したの。カノンちゃんがお父さんから必要とされたくてエヴァに乗ったのと同じように。私はカノンちゃんに私の思いを重ねてしまっていたかもしれない。それを重荷に感じていたのも知ってる。今エヴァに乗る理由に失望したことも知ってる。だからこそ、エヴァという枷が外れたのなら……！ 今度こそ家族として本当に生きていきたいの……！」

「……………」

私は……これほどまでにミサトさんの必死な顔を見たことがあっただろうか。

ミサトさんとの生活は、以前の伯父さん伯母さんたちとのものより遥かに楽しかった。

ミサトさんと一緒にいたいという願いなどないと言うとそれは嘘になる。

私もできることならミサトさんの元から去りたくないと思ってるから。

唇が震える。

感覚がないはずの両脚に、冷たい幻痛を覚える。

物理的な距離はこんなにも近いのに、心の距離は私の方から駆け足で離れていつている気がする。

ミサトさんの顔から目を逸らして視線を落とせば、またまギプスをはめた左腕が視界に入る。

「……………」

もちろんわかっている。

これは私のせいではない。3号機が使徒に侵食され、爆発を起こした際に負った怪我だ。

完全に治るのだから少なくとも数週間はかかるはずだ。その間、本当に私の介護をするというのだろうか？

使徒殲滅の使命を背負ってネルフに勤務し、そして疲れ切った身体で帰宅した後は私の介護をする。

何もしない、エヴァに乗れることから逃げた奴の世話をするのだ。しかも自分のお金で。

さらに『碓カノン』に対する風評被害にも巻き込まれる。もしかしたら私はミサトさんのことを信じきれていないのだろう。たぶん、ミサトさんはそういったのも込みで言ってくれている。

それでも『迷惑をかけてしまったら』『実は面倒に思っているのは』なんて勝手な詮索をしまい、どうしても信じ切ることができない。

信じたいけど、私がそれを許せない……！
唇を噛む。

じわりと血の味が広がる。

「……ごめんなさい、ミサトさん」

私は深く、深く頭を下げた。

「私は人が怖いです。だからもう、人の少ない静かなところで生きていきたいです。……ごめん、なさい」

「……そう。なら最後にこれだけはさせて」

ミサトさんはベッドから立ち上がり、私の真正面に立った。そして中腰の姿勢になり、そのまま私を抱擁した。

綾波さんとはまた違う熱を感じる。

悲哀に似た寂しい熱。

「ごめんなさい。呼ばれたからここに来て頑張ってたのに、こんな結末になってしまつて。本当は私……全ての使徒殲滅が完了したら、アスカとカノンちゃんと一緒に生きていこうつて本気で考えてた。でももうぐちゃぐちゃになつちやつたわね」

「……それは残念です」

「いつの日か人への恐怖を克服したら、その時は私に連絡して。そしてたら私の家に招待してあげるから。その時はとびきり美味しい出前でも頼んで盛大にパーティーでもしましょう。もちろんアスカも一緒にね」

「……はい」

「だから……その時までのお別れよ」

「……………はい」

ゆつくりとミサトさんの身体が離れる。

同時に繋がりも離れてしまったような気がした。

途端に、石でできた太い柱に心臓を突かれたような強い衝撃がどんと襲いかかった。

これは本当の痛みではないはずなのに。泣いてしまいたくなるほど痛かった。

それからは最後まで私たちがフレンドリーな言葉を交わすことはなかった。

身支度を済ませ、ネルフの出入りゲートまでを職員の人払いが済まされている通路を進む。

今度はミサトさんにおんぶされてではなく、自分自身でだ。黒服と一緒になのは精神力で我慢する。

……………思えば。

ここに初めて来て、近未来的な施設を見た。

私の知らない世界を見た。

そこで私は学び、傷つき、得て、失った。

そして振り出しに戻る。

すべてを一新して、人知れずひっそりと生きるのだ。

これでいい。

ゲートを抜けて外に出ると、すぐ横に黒塗りの車が待ち構えている。車椅子ごと乗せられる福祉車両だ。

「いちごちゃん」

黒服に促されるがままに車の後ろへと移動する。

バックドアが開き、スロープがゆつくりと引き出される。私がある上に乗ると、車内から伸ばされたベルトが車椅子の骨に固定され、電動ウインチで引き寄せられるようにスロープを登り、車両に乗り込んだ。

ふと顔を上げると、ミサトさんと目が合った。

恐らくこれが最後になるかもしれないと思うと、勝手に口が言葉を話していた。

「――今まで、ありがとうございました」

外の音にかき消されなくらい、はつきりと伝えた。

そうだ。私はこの人への感謝を忘れてはいけない。そのことを知ってもらうと同時に、私自身に刻みつけるのだ。

ミサトさんが肩を震わせながら返事する。

その言葉をきちんと聞き届けた私は、大きく頷いた。

バックドアが閉じられ、私とミサトさんは隔てられる。

車が発進する。

私は適当な曲がり角を曲がってミサトさんの姿が完全に見えなくなるまで、後ろを向き続けた。

出会いと別れ。

今日はたくさんのものと一度に別れた。

ぽつかりと空いた虚ろな穴は、そう簡単に埋まることはないだろう。

人生とは出会いと別れの繰り返しとどこかで聞いたことがある。確かにそれは間違いない。この数ヶ月は私の人生で激動のそれだった。

それでもう、私に出会いはないだろう。

さようなら、皆。

私を守ろうとした皆、さようなら。

私は逃げる。皆を捨てる。

皆が死ぬ時は、私も一緒に死ぬからね。

前座席の黒服ふたりはまるでロボットのよう無言だ。

目的地はネルフ本部から少し離れた駅。

そこからのしか私が希望した住居には行けない。

挙げられた候補の中で、最も田舎なところ。小さな家。バリアフリーだけは条件としていた。

家政婦はいらない。誰の介護もいらない。

学校にも行かない。通信制でいい。

保護者は伯父さん伯母さんの名前だけ借りる。

お金はある。

義務教育さえ終われば、あとは何をしても自由だ。
通販で綺麗な花を買ってのんびり育てる人生なんて楽しそう。

……夢が膨らむ。

でも外出する時は気をつけよう。

世間に顔バレしているからマスクは必需品だ。いつか私の顔が忘れられるまで。

整形をしなかったのは、目に見えるお母さんからの遺産を消したくなかったから。

ミサトさんと別れて約30分で駅に到着した。

ここから先、黒服たちはついてこない。

私一人で生きるのだ。

人目に晒されることに耐えること。これはなんとしてでも克服しなければならぬ重要事項だ。

車から降ろされ、黒服たちと一緒に最後の荷物チェックをする。

どこに行けばいいかのメモはあるし、頭にも入っているから大丈夫。

「ではこれにて。あなたのこれからの人生が良いものでありますように」

表面上のお別れの言葉を私に差し出して、黒服たちは車に乗ってどこかに行ってしまった。

そして私は碓カノンではなくなる。そして明日から新しい名前です生きていく。

きちんとマスクはしておく。少し離れた場所だが、都会であることに変わりない。だからもちろん他人はいる。

深く呼吸を繰り返し、他人への恐怖を落ち着かせる。

今だけだ。今だけ耐えればいい。

遠くへ行ってしまうえばこんな苦しいことは二度と経験しなくていいのだ。

だから吐かないで。耐えて、私。

なるべく下を向きながら改札を通り、ホームに移動する。

ちょうどタイミングよく到着した電車に乗り込む。

しゅうう、とドアが閉まり、電車は静かに発進した。

思っていたより私以外の乗客が疎らでよかった。

ぼんやりとしつつ、時々揺れる吊り革を見上げたりする。停車する度に誰かが乗ってくるのが怖かった。でもそれ以上に、誰かが私の前を通り過ぎるのが怖かった。

碓カノンであることがバレるのではという恐れ。

誰かと同じ空間にいるという圧迫感。

さっきの黒服たちとはまた違う、じわじわくるタイプのもの。

心を無にし、あらゆる五感を遠のかせる。今ここに在るものを私の知覚器官を通して認知する、ひとつ後ろの感覚になる。

これは私の処世術のひとつ。私自身を客観的存在に置き換えることで、自分を他人事と捉える。

それがなんの前触れもなく切り替わった車両の赤灯と無縁であることは間違いなかった。

あまりに突然の出来事に、私の意識が引き戻される。

他の乗客たちも明らかな動揺を見せる。

続いて流れる女性の滑らかなアナウンスは、日本政府からの非常事態宣言を告げるものだった。この電車は最寄りの駅に停車し、指定ホールの退避用インクラインへの乗車を案内している。

これが何を指しているのかは瞬時に理解した。

だが私にはもう関係のないことだ。私はその世界から逃げる。

でも、どうしてか――。

「……使徒だ」

と口にしてしまう。

果たして、あの日常がすっかり染み付いてしまったが故の無意識の発言なのだろうか。

◆ その使徒はまるで、不穏という概念が肉体を得たかのようなだった。手足といったものはなく、首のない胴体のみ。顔と思われる部位に

は白い仮面が。

全身は黒い帯によって拘束されているかのようで、胸部には帯の隙間から赤々としたコアが僅かに覗いている。

空中を浮遊し、戦闘ヘリの攻撃を一切無視して旧小田原防衛戦を突破する様はあらゆるものを拒絶する絶対的主張。

だが、セントラルドグマのリリスに辿り着くためには要塞都市による弾丸と爆弾の嵐を抜け、さらにエヴンゲリオンの迎撃をも乗り越えなければならぬ。

これまでの使徒は様々なアプローチで侵攻してきたが、どの使徒も最後にはエヴァの前にして破れた。

悠々としている間に兵装ブロックはすでに配置、装填まで完了しており、一斉に射撃を開始する。四桁に迫る砲口やミサイル発射口が正確に使徒を捉え、衝撃音を第3新東京市に轟かせる。

これまでにない総攻撃は間違いなく使徒に命中しているが、異次元なほどに堅牢なA・Tフィールドを突破したのは一発もなかった。

そしてついに使徒が人類の攻撃に反応する。

一瞬、使徒の目が眩い光を放つ。

——直後、数秒前までの音を遥かに凌ぐ轟音が地表を舐め。

要塞都市、その七割を薙ぎ払い、蒸発させた。

昼過ぎの青々とした空に、世界の終わりを想起させるような紫の帳が下りる。

そして次元の桁が違う圧倒的破壊力の前に敗北した兵装ブロックが、『ジオフロントに次々と落下する』。

カノンを見送ってネルフに戻ってきていたミサトは、第一発令所へ向かうゴンドラに乗っついていながら車両が大きく揺さぶられるほどの地響きを感じていた。

「……………ここで衝撃波が届くなんて、ただ事じゃないわね」

たった一発で地下深くまではつきりと伝わる衝撃。

さきの第六使徒の加粒子砲を遥かに凌駕する瞬間破壊力。

間違はなくこれまでの使徒とは別格。

だがこれを迎え撃つのはレイと、ダミーシステムを組み込んだ初号

機しかない。

零号機は前回の使徒戦で左腕を激しく負傷し、修復も完了していない。ダミーシステムは一度しか実戦投入されておらず、どう行動するかはこちらでも完全な予測ができない。

不安要素があまりに強い。

……あの子がいれば。

もうどこにもいない、傷だらけの少女のことを想い、即座に首を振って否定する。

頼ってはいけない。

あれほど苦しんで去ったというのに、また乗って欲しいと少しでも願ってしまった。

自戒しながらゴンドラに設置されている内線で発令所にいるメンバーに鋭く指示を飛ばす。

「総力戦よ！ 要塞都市すべての迎撃設備を突貫運用！ 僅かでもいい、食い止めて」

設備の破壊や復興資金に足を引っ張られて出し惜しみをする余裕なんてどこにもない。

全力の全力で使徒を足止めする。突破されるのは目に見えている。だが、エヴァと会敵するまでに少しでも力を削ることができれば十分だ。

焦りにじわじわと襲われ始めたミサトの対向車線を通り過ぎたのは、赤の巨人を乗せた貨物車だった。

一瞬の出来事だったが、ミサトはそれを見逃さなかった。

「式号機?! 誰が乗っているの!?!」

『不明です。こちらからの出撃命令は出ていません!』

マコトの声を聞き、アスカではないことを確信する。

アスカは現在使徒封印柱に囲まれた棺桶に保管されている。何か異変があれば即座に警報が鳴り響いているはず。

つまり式号機に乗ろうとしているパイロットは、誰も知らない赤の他人。

セキユリティは何をやっているの!

と責める暇などなかった。少なくともこちら側の味方をして戦ってくれろと考えていいだろう。

ようやく到着したゴンドラから、飛び出すようにミサトは駆け出し、発令所へのドアを開いてついに合流する。

「状況は！」

刺すような質問に、マコトは素早く答えた。

「N2誘導弾を許可した第二波攻撃まで行いましたが、目標は健在。先程の一撃で地表全装甲システムが融解し、特殊装甲は24層まで到達、貫通しています」

「なんて火力……チツ！ エヴァによる地上迎撃では間に合わないわ！ ユーロに協力を要請！ 弐号機をジオフロント内に配備して！

零号機は？」

「左腕を応急処置中！ 辛うじて出せます！」

モニターに表示された零号機の修復状況を確認したマヤが伝える。

「完了次第、弐号機の援護に回して！ 単独行動は危険すぎる！ リツコ、初号機は？」

「現在、ダミーシステムで起動準備中」

普段は冷静なりツコも今回ばかりは額に脂汗を流している。

「作業、急いで！」

その間にも主モニターに地上に残存していたカメラが使徒の姿を捉える。

残っていた兵装もほとんどが壊滅させられ、地表には赤く輝く十字の山が屹立している。

使徒に巻き付く帯はすると解け、それらは生きているかのように波打ち、より一層不穏さを増す。

攻撃によって開けられた大穴を下り、リリースを目指す。阻む障害は、ない。

けたましいサイレン音が発令所では鳴り響き、スタッフたちはかつてない危機に、死も予感しながらも自分の為すべきことを為す。

「目標、ジオフロント内に侵入ッ！ 弐号機と会敵します!!」

初手でミスを犯すわけにはいかない。

偶然にも得た戦力をみすみす失うわけにはいかない。

誰かも知らない子供だろうが、誰にも捕縛されずに式号機の封印を解き、さらに射出まで済ませている。

間違いなく『仕込み』のされている子供だ。

だから接し方としては、前置きや表抜き言葉は不要。エヴァを操縦した経験を尋ねたりすることもない。操縦できるものとして接する。

シゲルからの報告を聞いたミサトは名無しのパイロットとの通信をマヤに確認する。

「式号機との通信は？」

「相互リンクがカットされています。こちらからは……」

すでに使徒はジオフロント内に侵入している。空に開いた大穴から顔を覗かせるまで一分もない。

そんな状況での、通信の拒絶。

つまり。

「そう……ひとりでやりたいのね」

◇

式号機とのシンクロは良好。

思考と動きのリンクにラグはほぼない。

両の拳を開閉させるテストが完了。

戦闘可能と結論づける。

メガネは……かけたままでいい。

新しい桃色のプラグスーツに身を包む真希波・マリ・イラストリアスは満足げに頷いた。

ベタニアベースの第三使徒戦。仮設伍号機の乗り心地はどちらかというと良くなかった。

脚が重く、細かな旋回や急停止などに難があつた。仮設とだけあつて、実際に日本での殲滅戦ではあまり活躍できないだろう。

専用プラグスーツも両腕に管を繋ぐ仕様はダサかった。四本脚にするための補助なのはわかるが。

そしてこのプラグスーツは素晴らしい。新品だからいい匂いがす

るのはもちろん、スーツの質感や肌に密着する感覚に大いに満足している。それに新型だから、胸もびったりで気持ちいい。

「いい匂い。他人の匂いのするエヴァも悪くない。第五次防衛戦を早くも突破。速攻で片付けないと本部がパーじゃん！」

足元に散らばっているマシンガン二丁を両手に持ち、天井からついに顔を見せた使徒に一斉射撃を開始する。

しかし使徒はA・Tフィールドを展開して無効化。それだけでなく、何十枚にも重ねて展開することで銃弾を一定距離から一発も寄せ付けない。

ゆったりと左右に帯を靡かせながらこちらに降下してくる使徒にマリは唸る。

「なにこれ、A・Tフィールドが強すぎる！ こっからじゃ埒が明かないじゃん！」

これ以上は銃弾の無駄遣いと判断してマシンガンを放り投げる。

そして足元に用意されていた武器コンテナをセンサーで開き、足でボタンを踏みつけることでバネに弾かれるように宙に浮いたダガー武器を取る。

「ほっ！ これで行くかくにやッ！」

地表に到達した瞬間を狙う！

疾走して使徒との距離を取りつつ大ジャンプ。頭上から落下エネルギーをプラスした渾身の一突きが、使徒を正確に捉えた。

そして、A・Tフィールドに激しく接触する音の爆発。

遅れて衝撃がジオフロント全体を揺るがす。

切っ先がA・Tフィールドに食い込み、武器を軸に身体を逆立ちの状態になる。

……なんてでかいバリア。

瞬間の目視で、実際はもつとだろうが少なくとも使徒自身の大ききの20倍はある。

もしかしなくても、使徒はこの攻撃をわざわざ避けるまでもないと判断したからこそ回避行動すら取らなかつたのか。

だがマリは寧猛に嗤う。

銃はシンプルに距離が遠すぎて銃弾の威力が落ちていた。落下攻撃はシンプルなA・Tフィールドの耐久テスト。

そして。

「ゼロ距離ならばっー」

素早く肩のウエポンボックスを開き、ありつただけのニードルガンを連射する。

狙いは顔面。まずは明確にダメージを与える。

しかしそれすらも、顔前にA・Tフィールドを多重展開して阻止された。

こいつ、早い……！

ニードルガンはこの式号機で初めて行った攻撃——いや、エヴァが使徒に見せる初見の攻撃。

ボックスが開いて発射までのラグはコンマ5秒もない。

反応速度……本能による防御体制への移行が抜群に高い。

1秒に満たない攻防。

終わりは、圧縮されたA・Tフィールドの爆発だった。

「ぐっー」

壁に強制的に押し出されるような感覚。

無様に地面を転がされながら一気に使徒との距離を開かされる。

崩壊したビルに激突してようやく停止した式号機は素早く使徒の姿を視界に収めようとする。

「いってて……て、ヤバッー」

A・Tフィールドの暴力。

幾枚も重なった状態で式号機の頭上に展開されているそれを認知して、本能的危機を察知。その場からバク宙して離脱することで、直後の圧縮攻撃から逃れることができた。

さつきまでいた場所の空間が激しく押し潰されているのを見たマリは、お遊びで勝てる相手ではないと認識を書き換える。

A・Tフィールドを自在に操り、完全に掌握しつくしている。だからあのような変則的な応用ができたのだろう。

「にやろう……なんて奴」

使徒は安易に移動したりすることはなかった。

攻撃を仕掛けてくることもなく、堂々とした様子で佇んでいる。

地下深くに眠るリリスに接触しに行けばいいのに、しない。

式号機の次の動きを待っている。

「……なるほどね。キミは障害を全部排除しないと満足できないんだにや」

徹底的に敵を叩きのめさないと納得できない様子だ。

マリの戦意は維持されている。むしろ昂りを見せる一方。体力もまだまだ余力を残している。

今はなんとか土俵には立てているが、一定のラインに踏み込まれると秒殺は目に見えている。

結論、不利。

敗北は避けられない。

このままでは。

マリはシートの上に立つ。

なればこそ、短期決戦を臨む。

現在の機体の膂力では倒せない。だから、全力の全力を出し尽くせるよう、一時的な強化が必要だ。

ただの強化ではない、身を引き千切られるような順応を乗り越えてでも。

マリは陽気に操縦席の上に立つ。

「どっっいしょ。このままじゃ勝てないな。……よし、試してみつか！」

拳を叩き、スイッチを切り替える。

ここからはほぼ本気モード。先程までの猫のじゃれ合いのようなふざけた戦闘は一切やめ。

眼鏡の縁を持ち上げつつ、これまでとは違う低い声で、式号機に言い聞かせる。

「……人を捨てたエヴァの力、見せてもらおうわ」

そして、誰も知らない音声コマンドを滑らかに入力した。

「モード反転。裏コード……ザ・ビースト」

刹那。

エントリープラグ内の雰囲気ガラリと切り替わる。モニター表示が落ち、赤黒く染まる。

肩の拘束具が激しく飛び散り、内部から筒状の突起物が骨格を抉りながら出現する。

マリのプラグスーツが式号機の変化——肉体の変質に呼応して高周波の音を発しながら身体を強制的に順応させる。

「くっ、う……い！」

小刻みに身動きしながら無言で悶える式号機にマリは鞭を叩く。

「我慢してよ、エヴァ式号機……私も、我慢するから……い！」
耐える。

身体中の細胞が暴れまわる。この変質は地獄の熱。

完了するまでに灼き尽くされかねない。

奥歯を強く噛み、この熱を耐える。

シンクロは濁り、だが荒々しさを増して結合する。

純粋な本能としての同調。理性を捨て、獣に堕ちる。

前屈みになると、背中からさらに十はくだらない数の突起物が新たに勢いよく出現する。

そして、本能を爆発させた式号機の四ツ目が輝いた。

全リミッター解除。

すべて規格外。

E計画に携わった技術者たちですら知らない仕様。

汚染区域突入も厭わぬ、プラグ深度マイナス値。

危険など百も承知。

この使徒は、無茶や無理をしなければ勝てないのだから。

息が苦しい。

内蔵が破裂しそうだ。

それを強引に抑え込んで、大きく口を開いて息を吐き出す。

L・C・Lに溶けていつているような感覚に襲われながらも、マリはありったけの意志力で自我を維持する。

グツと身体に力を込めて大きく目を見開き、5秒後の驀進に備え

る。

「身を、捨ててこそ……浮かぶ瀬も……あれッ!!」

式号機が限界まで口を開いて獣の咆哮を発したと同時に。

電源ソケットをパージし、エヴァとは思えない獣性の解き放たれた動きで大きく跳躍する。

プラグ内は血よりも赤く染め上げられ、活動限界のリミット表示も激しくノイズが走っている。

高く宙を舞う獣が、恐ろしい勢いで使徒に肉迫せんと落下する。しかし。

使徒のA・Tフィールドとの激しい衝突によって阻止される。

素早く離脱して別方向からの強襲。だがこれも防がれる。

こなくそ……!!

A・Tフィールドを使いこなす使徒にレベルの低いフェイントは無意味。

ならば顔前のこれをただ破壊し尽くすまで。

腕を高く掲げ。振り下ろす。

「らあッ!!」

鋭い破碎音とともにA・Tフィールドが碎け散る。

——いける。

活動限界まで時間もある。

この壁さえ突破できれば勝機はある。

「ああああああ——ッ!!」

がむしやらに殴りつける。

速く。もつと速く。

破壊のペースは上がり、使徒に到達できるとマリが確信した、その時。

使徒の両腕の帯がそれぞれ集約し、分厚い筒状の物質と化していることに気づいた。

「——!!」

回避行動を取るには、あまりに遅かった。

冷静さを欠いて、目の前のA・Tフィールドにはかり意識を集中さ

せすぎたマリの落ち度だった。

マリが息を呑むのと使徒が不意打ちをしたのは全くの同タイミングだった。

弾丸の如く伸びてきたそれが、無防備に胴を晒していた式号機を貫通する。

そのまま帯を波打たせ、左腕を肩口ごと切断し、右の脇腹を大きく抉りとった。

激しい血飛沫と一緒に地面に激しく落下した式号機はすぐに起き上がるも、すでに満身創痍だった。

止まらない血は瞬く間に地面を赤黒く染め、腹部からはエヴァの内蔵が生々しく零れ落ちる。

「うぐアッ！ あ……グ……ッ！」

強烈すぎるフィードバック。

全身を燃やされながら、なお患部から夥しい量の血が噴き出す錯覚に襲われる。

だが、まだ、戦える。

お前は知っているか。

獣っていうのは、追い詰められた時が一番凶暴になるってこと。

咆える。咆える。

式号機とマリの雄叫びが重なる。

今、両者の脳のすべてを支配しているのは、敵を屠ることのみ。

だからこそ、未だ闘志の衰える兆しなし！

さらに俊敏性の上がった足で地面を高く蹴り上げる。

約500メートルの距離を、瞬きの間に詰めんと駆ける。

肉体の限界を超越した機動力。

だがその速度すら使徒は正確に捉える。

再び打ち出された帯が、式号機の頭部を直撃した。後方へと吹き飛ばされた式号機は今度こそ動かなくなり、車に轢かれた猫のように痙攣している。

跡形もなく砕けた右側頭部からは、どくどくと脳汁が垂れ流しになっている。

人を捨てることを覚悟した特攻でも使徒には傷一つ与えられなかった。

絶望と諦めの空気が発令所を包み込む。

その時、リフトに乗ってジオフロントに上がってきたのはレイの乗る零号機だった。

痛々しいその腕にはライフルではなく、N2誘導弾が抱えられていた。

意図を瞬時に悟ったミサトは悲痛の叫びを放った。

『レイ！ 止めなさい！ レイツ!!』

しかしそれを無視してレイは使徒へと突撃した。

そして式号機と同じように、振り向きざまに展開された強力なA・Tフィールドに阻まれる。

誘導弾の弾頭と激しい接触し、風圧が辺りの木々を薙ぎ払う。

使徒と超至近距離に潜り込むことには成功したが、そこからはどうしても詰められない。

誘導弾後部のジェット噴射も起動させ、突破力を上乗せする。

「A・Tフィールド、全開……!」

さらに追加で零号機からの侵食。

なんとしてでも命中させようと、死に物狂いで腕に力を込め、下半身は一切動じずに地面に縫いつける。

徐々に侵食の効果が現れ始め、少しずつ、少しずつ弾頭の先端がA・Tフィールドに食い込みつつある。

「碇さんが、もうエヴァに乗らなくても、いいようにするっ！ だからっ!!」

……レイならきつと、カノンがネルフを去ることを止められたかもしれない。

簡単なことだ。

カノンに「行かないでほしい。助けてほしい」とお願いするだけだ。そうすればきつと、レイのために苦しみながらも決意をひっくり返していたかもしれない。

でもレイはそうしなかった。

なぜならそれは、とてもずるいことだとわかっていたから。信用されていることにつけ込んで、いいように使おうとするのと同じだから。

それにレイは心の底から願っている。

昨日の夜。

自分よりも小さくて細い彼女の身体を強く抱きしめながら言った言葉。

『碓さんはエヴァに乗るために生きているわけではないわ。だから、エヴァに乗らない生き方だってあるはず』

内向的で暗い自分を変える目的でここに来たと言っていた。

でもその方法は必ずしもエヴァに乗らないといけないわけではない。

成り行きでエヴァに乗っているだけで、本当はただの一般人。戦いなんてどう考えても向いてない、どこにでもいる女の子だ。普通の間だ。

エヴァに乗るためだけに生きているレイや、エヴァに乗るために長年訓練を積んできた式号機パイロットとは違う。

……平和に生きてほしい。

確かに重い障害をたくさん抱えることになってしまった。人間不信になるほどのトラウマを抱え込んでしまった。

二度と克服できないかもしれない。レイを含め、ネルフの関係者を憎むようになるかもしれない。

それでもレイは願うのだ。

これからのカノンの人生が幸せでありますように、と。

眠りに落ちる間際に見せたカノンの小さな涙が、レイの心に初めて『苦しさ』を感じさせたから。

もしいつの日かまた会える日が来たら、あの部屋から持ち出したこれを返してあげよう――。

ベコン、と弾頭の先端が潰れる異音が聞こえた。

レイによる侵食を上回り始めた使徒のA・Tフィールドが誘導弾を押し返し始めているのだ。

ジェット噴射の燃料はまだもう少しならもつ。だが、零号機自身の身体が持ちこたえられるかが怪しくなってきた。

完治していない両腕から血が滲み始め、レイは顔を顰める。ここで強引に爆発させても意味がない。

この絶壁とも言うべきバリアを突破しない限り、この特攻が無意味になってしまう。

カノンエヴァに乗せないためには、自分が使徒を倒さなければならぬのだ。

踵を深く地面に沈み込ませて一歩も引かない姿勢をとる。もっと集中して。

侵食の手を緩めないで。今ここで引けば、自分の願いに反してしまう。

二度と腕が使い物にならなくなってもいい。カノンは四肢を犠牲にしてまで式号機パイロットの命を救った。

ならレイだってそれくらいの覚悟はできる。

迸る熱のまま、限界の限界まで零号機を駆ろうとした、その時。

足元を這う赤の獣を見た。

獣はただの肉塊だった。

死に際の足掻き。

身体を地面にこすりつける這い方をしながら使徒と零号機の間で割って入り、両者を隔てるA・Tフィールドに食らいつく。

式号機に食いつかれたA・Tフィールドは、粘膜のように伸びてやがて伸縮の限界を迎えて破られる。

残り二枚。

「式号機……最後の仕事よ……!!」

思考力は残っている。

プラグ深度反転による重度のフィードバックにもまだもう少しなら耐えられる。まだ神経接続は切れない。

二枚目に食らいつき、破り捨てた。

あと――。

「一枚いいいいいいッ!!」

最後の残り滓をも燃やし尽くし、顎を割らんばかりの力で式号機が最後のA・Tフィールドを破った。

途端、障壁の失った誘導弾が使徒のコアに到達——することは叶わなかった。

これ以上A・Tフィールドを展開することができない使徒の最終防衛手段は、コアを胸部の外皮で覆うことだった。

「!!」

硬い外皮に先端の潰れた誘導弾が直撃する。

もう後戻りはできない。そして使徒の爆殺はできない。さらに侵食のためだけに展開していたため、この超至近距離と一瞬の間に防衛用に切り替える余裕がなかった。

でも、せめて——。

力を使い果たした式号機の首根っこを掴み、一拍後の爆風から少しでも遠ざけるために力の限り後ろへ放り投げる。

式号機に乗っているのが誰なのかはわからない。でも、レイと同じ、もしくはそれ以上の死力を尽くして使徒と戦ってくれた。

だからこそ、敬意と感謝を通信音声に乗せた。

「逃げて、式号機の人！……ありがとう」

『——ッ！』

……ああ。

そういえば。

一番言いたかった人には、まだ一度も言ったことがなかった。

そんなことをちよつぴり後悔しながら、レイは大爆発に呑み込まれた。

◆

個人用のシエルターがあるはずもなかった。

しかしネルフ本部に近いシエルターの構造ならとても大雑把だが覚えている。

エヴァでの仮想シミュレーションによる戦闘訓練で、兵装ビルや電力供給ビルの位置を覚える時に一緒に覚えた。流星に優先度は低かったから曖昧な部分が多いのだが。

よほど使徒の攻撃が圧倒的なのか、シエルターに逃げ込んできた人々の顔は不安や恐怖に支配されきっている。

「……一緒にいないほうが良さそう」

こんな状況で、もし私が誰かバテてしまったらどうなるかは想像がつく。そうはなつてほしくないから、記憶を呼び起こしながら、見つからないように人の流れから抜け出して私だけ別のシエルターに移動する。

シエルター同士の間には数百メートルほどの間隔があるが、別に苦ではない。電動車椅子だからレバーを倒せばいいだけだ。

一番近くにあったシエルターには人がいたようだからそこを飛ばしてさらにもうひとつ向こうのは人がいなさそうだった。

総床面積は2000平方メートル、最大収容人数は250人ほど。

何もなく、だだっ広いだけの空間。

非常用の電灯しか灯りはなく、そのせいで薄暗い。

私はシエルターの端っこに移動し、物言わぬ石像のようにその場でじつとする。

そうだ、私にすることは何もない。事が終わるまでここでただ待ち続けていればいいのだ。

きつと今頃ミサトさんや綾波さんたちが頑張ってくれているだろう。聞いたところによると、初号機もダミーシステムというのを使えば戦えるという。それが前回の使徒を倒したらしいし。

アスカの分の戦力が抜けているのは確かに痛い、ダミーシステムはきつと私以上の戦力を発揮してくれるだろう。

だから私が出る幕はない。

私は学んだ。

私は変に出しやばって間違いをする。それで自分を……時には誰かも傷つけてしまう人間だ。

だから何もしないほうがいい。

私がこうして大人しく静かにしていることこそが、皆のためになるのだ。

この戦いさえ終われば今度こそ私はここを去る。どこか遠いところ

ろに逃げて、人知れず生きる。

すると突然、ドアが慌ただしくノックされる音が聞こえた。誘導員ならこのドアはロックはかけられないことを知っているはずだ。

あるいは気が動転してしまい、ドアが開いていることに気づいていないのだろうか。

「……………これは……………仕方ない」

本当はずっと一人でいたかったけど、ずっとこの広い空間を占有するわけにはいかない。逃げ込んできた人がいるのなら、受け入れるのは当然のことだ。

怖いけど、今は緊急事態だから仕方ない。

恐る恐るドアに接近し、私はゆっくりと取っ手を握って開いた。

「助かった！ 皆！ ここ開いてるさかい、はよ入れっ!!」

勢いよく中に入ってきたのは、私の見慣れた人たちだった。

「鈴原、くん……………」

私の声に気づいた鈴原くんがこちらを見下ろした。

「もしかしてセンセか!」

と、勢いはそこで完全に停止した。

私の姿を見て言葉を失い、立ち尽くす。

「え……………セン、セ……………」

「……………あ」

私がこの状態に慣れつつあるだけで、クラスメイトの前に姿を現すのはこれが初めてだった。

本当なら嬉しい再会のはずだが、そんなことは全くなく、寧ろ最悪のそれだった。

私たちが沈黙している間にも、空いたドアから次々と他のクラスメイトたちがシエルターに駆け込んでくる。それだけではなく、大人や小さな子供までも含め、百人はいる。

皆が皆、土埃などで汚れきっていた。血を流している人も少なからずいた。鈴原くんも、額に血が滲んでいる。

どう話を切り出せばいいのかわからない。

喉に棘の塊を詰まらせたかのような苦しさを感じる。これは私の
言語能力の問題ではなく、感情的な問題だった。

「ま、まあ……そのなんや……久しぶりやな」

「あ……うん」

歯切れの悪い返事をした私は、さつと視線を反らしてしまう。

「ヒカ……委員長から……話は聞いた。ネットはよう使わんわし
も……碓のことは耳に入った」

「……そっか」

「わしらもさつきまで大変やったけど、碓のほうがもつと大変なん
やったんやろうな」

「いや、そんなことは……」

私は何もしていない。

ただ部屋に隔離されて不貞寝してただけだ。そしてエヴァを降
りると宣言して逃げようとしていた。

「ほら、委員長！ ケンスケ！ ちょっとこっち来いや！」

鈴腹くんが後ろを向いて手招きをすると、懐かしい友達がこちらに
近寄ってきた。

「なによ鈴原！ あなたもさつきと怪我人の手当を……って、カノン
……？」

「……マジか。まさかこんなところで再会できるとは思わなかつた
よ」

私はこの場から消えてしまいたくなった。

複数人に囲まれているという状態だけで人間不信による過剰反応
が出てきてしまう。

絶対に言われるであろう、「どうしてここにいるの？」が怖くて怖く
て仕方ない。

エヴァに乗りたくなくなって、だからネルフを去って、クラスメイ
トたちに一切何も言わずにどこかに逃げようとしていたんだなんて口
が裂けても言えない。言ってしまったらどう思われるかを想像した
くない。

「カノンと会えて本当に良かったわ！ 今回の避難警報はただごとで

はないし、私たちがさつきいたシエルターは壊れちゃって……だからここに来たの」

「壊れたって……皆は無事だったの？」

「それは……」

「……18人、瓦礫に巻き込まれて亡くなったよ。その内の4人はクラスメイトだった」

「――」
相田くんのログのような返答は、私の脳を凍りつかせた。

「今回ばかりは本当にヤバいとオレは思ってるんだけど……なあ、碓は何か知らないのか？ ネルフの人間なら使徒がどれくらい強いとかわかるはずだろ？ 地上にいる時に使徒を見ただけどき、複数のN2誘導弾の直撃を食らっても無傷だったんだ」

私は今回の使徒がどれくらいの強さなのかは何も知らなかったが、相田くんの話を聞いてほしいと推定することはできる。

N2を複数命中させられても無傷というのは、規格外レベルの防御力を誇っているのは間違いないさそうだ。私が初めて倒した使徒は、N2地雷ひとつで体表をある程度焼くくらいのダメージだった。

そしてシエルターが破壊されたということは、使徒はジオフロントまで侵入してしまっていることを意味する。

強敵であることは疑いようがない。

でも私は何もしない。

「あれは相当苦戦するぞ。そういうえば碓はエヴァには乗ら――」

「――ケンスケ。碓がここにおるんやぞ。察しろ」

「あ……そうだね。ごめん、碓」

平謝りする相田くんに「いいよ」と本当は許す資格なんてないのに許す。

私は三人との話は終わったと判断してじりじりと距離を取って隅っこの場所へと移動を開始する。

「ちよ、ちよっとカノン。どこに行くつもりなのよ」

ヒカリが伸ばした手が、向きを変えようとしていた私の手首を掴んだ。

「ひっ」

ぱしっ、と私は無意識に手を払い退けてしまう。

その音が、嫌にシエルター内に響いた。

三人だけでなく、シエルターにいる人のほとんどの意識が、視線が、私に向く。

一瞬にして私の恐怖心は爆発寸前にまで追いやられる。

「あ、いや……いや……ごめん」

自分の認識の外からの刺激を受けてしまった私は、つい反射的な行動をしてしまったていた。

悪意がないのはわかりきっていたのに。手に残る熱い感覚をひしひしと感じながら三人を見やる。

「つい……その……」

喉が焼けるように渴き、言葉が途切れる。

もどかしい。

どうしてこんなことをしてしまったのかを説明したいが、怖い。そもそも目を合わせることもすら難しい。

綾波さんやミサトさんならほとんど抵抗はなかったのに、どうしてか、私はヒカリたちのことをノーガードで受け入れることができない。い。

「わ、私のことは大丈夫だからさ、ほら、三人は怪我人の手当てとかしてあげてよ」

「カノンは手伝ってくれないの?」

「無理だよ……手伝えないよ……だって私こんなんだし、器用に指動かせないからちゃんできないよ。それに……人と話すのが怖い」

私は何に向かって会話をしているのだろうか。これでは硬いコンクリート床と会話しているみたいだ。

リハビリで手の指もだいたい思い通りに動かせるようになった。でも指の一本一本を意識して力を込めるのはあまりに困難だ。大きなものなら指すべてを使えるから誤魔化しながら掴める。でも細かったり小さいものは無理だ。精度はがくと落ちるし、数分間ほどしか

集中できない。休憩を挟まなければほとんど機能しない。

もうこれ以上改善はできなさそうであることはなんとなく感じている。

初めは車椅子の車輪すら上手く握れなかったのだ。ここまで改善できたのならば素直に喜ぶべきなのだろう。

「……そうか。じゃあセンセはわしらとは話したくないってことか」

そんなフラットな言い草に、私は取り繕うように口を開く。

「そんなつもりじゃ……!」

「でもせやろ? 最初にわしと目があつたきり、一回もこつち見てくれへんやないか」

「——っ」

反論できない。

そして自罰。

ふたりとは問題なく会話ができていたというのに、どうして今の私は一方的に拒絶するような態度を取ってしまったているのか。今はたくさん人がいる状況だからだと言えるが、これはただの言い訳に過ぎない。

「ちよつと鈴原、言いすぎよ。カノンに何があつたのかわかつてるでしょ? 人間不信みたいなのになつても仕方ないわよ。今はそつとしておいたほうがいい」

「そうか? 委員長は本当にそう思ってるんか? わしは違うぞ。委員長、わしらは知ってるはずや。ケンスケ、お前はわかるよな? わしらがセンセに助けられた日、こいつが傷ついてるのを間近で見たお前なら」

鈴原くんの呼びかけに、親友は静かに頷く。

そしてふたりは一緒に私に向かって歩いてくる。

近づいてくる。

逃げたい、なんて思っている間にも元々数メートルしかなかった私達との距離はほぼゼロになっていた。

「碇」

相田くんと呼ばれ、私は恐る恐る顔を上げた。

ふたりは床に片膝をついて私を見上げていた。

その瞳はふぎけたり非難したりするようなものではなく、真剣さの滲んだ、真つ直ぐな眼差しだった。

「傷ついている時こそ、誰かが近くについてやらないといけないんだ。そうじゃないと辛いだろう？　ひとりで抱え込んでしまったら潰れてしまう。誰かいなかったか？　碓のことを大切に想って、側に寄り添おうとした人が」

「――」

いた。

ふたりも。

でもそれらをすべて振り払って逃げようとしていた。

「すまんなセンセ。一番大事な時に側にいてやれないで。本当は委員長とわしら、何度もネルフに行ったんやで。たぶん今の状態のセンセと会わせたくなかったんやろな。配慮ってやつか。全部門前払いされたわ」

違う。

違うの。

謝られる資格なんてこれっぽっちもないのに。

「……私、逃げようとしてたの。エヴァに乗りたくなくなったからネルフをやめて、ここから遠く離れたところに逃げようとしてた。それもクラスメイトの誰にも言わないで。だからむしろ怒ってくれていいよ。なんでそんな大事なことを教えてくれなかったんだって」

「そうやな。確かにそれは誰でも怒るわな。ずっと心配してた奴が突然どっかいなくなるんやから」

「うん……ごめん」

「というわけで、この避難が終わったらちやんと話そうぜ。オレたちはエヴァ関係なしに碓のことを大切な友達だと思ってるんだ。家がないのなら委員長の家に移り込めばいいんだしさ」

「うんうん……って、ええっ!？」

強く賛同する素振りを見せるヒカリだったが、後半部分に素っ頓狂な声を出した。

しかしながらやや上を見上げながら指で数を数える。

「……私達姉妹が三人プラスカノンで、使えそうな部屋は……うん、あるね。大丈夫！ お金もまあ、なんとかなるでしょ！」

「てなわけで、碓のリスタートは使徒が倒されてからだね」

ここにいて居続けていいのだろうか。

ヒカリたちはこう言っているものの、やはりこの地域は人口密集地帯だ。ということはつまり私を知っている人は多いし、その分だけ私は窮屈な生活を送ることになってしまう。

今更整形を申し出る？

嫌だ。この顔だけは死ぬまで変えたくないという変な意地がある。名前を捨てたのは、碓という名前に執着する理由はないし、カノンは私自身が決めて改名したものだから私の自由だ。

所詮は子供の浅知恵。

そんな風にお父さんは思うかもしれない。

結局世の中が回るのは大人の深い考えのもとにあるわけだし、私達は大人に庇護してもらうことで生きている。

大人になれ、とお父さんに言われた。

私にはまだなれない。なりかたもわからない。

それでも、私が素直に人に悩みを打ち明けて相談するという行爲が、微々たるものかもしれないが大人への一歩だったらいいな。

この三人とは他人とは違って絆があるし、ある程度の信頼はできているから。

「うん……ありが——」

胸に熱いものを感じながら友達に感謝の言葉を伝えようとした瞬間。

強烈な破壊音とともに分厚い壁を粉碎して何かが一部だけシエルタワーに侵入してきた。

私を含め、全員があまりの出来事に反応できなかった。木っ端微塵に破壊された、大小問わずコンクリート片が広い床に散らばり、外からの土煙が流れ込んでくる。

反射で顔を覆っていた私は、使徒の攻撃で流れ弾を受けてしまった

のかと想像しながら煙が晴れるのを待ち、シエルターに侵入してきた何かを見ようとした。

恐らくジオフロントにある……ピラミッド型建造物の欠片か、それとも自然公園に生えている木々の一部だと予想して。

だが私の視界に飛び込んできたのは、赤い巨人の、グロテスクに破壊された頭部だった。

「……………式号機？」

さらによくよく見ると、私の知る式号機とは明らかに外見が変化している。使徒による攻撃によって変形したとかそういうのではなく、まるで獣のような……悍ましい歯をびっしりと生やした口腔がある。そしてこれは間違いなく使徒によるものだろうが、右の頭部を大きく抉られ、中の脳がまる見えになっている。口からは止めどなく血が流れ、それはあつという間にシエルターの床を満たした。

一般の人々が悲鳴を上げる。

エヴァの存在すら知らない人からすると、式号機こそが化け物に見えるのかもしれない。

幸い、壁の破壊に巻き込まれた人はいないようだった。

そのこたに安堵しつつも私は大きな疑問を抱かずにはいられなかった。

今、式号機に乗っているのは誰だ？

私の心の中の疑問に応えるかのように、式号機の頭部が微かに動いた。

『いつていつて……死んじゃうところだったにやー』

アスカではない。

アスカはもつと引き締まった声で話す。

そして三つの眼光が私を捉えた……ような気がした。

『あれ？ 何でこんなところにいんの、君？ 一機足りないと思ったら、そういうことか……』

明らかに私のことを指して言っている。

どこかで聞いたことのあるような声だったが、そんなことは今はどうでも良かった。

「……私はもう、エヴァに乗らないって決めたの」

皆がいる前でこんなことを言いたくはなかったが、このパイロットの呼びかけを無視するわけにもいかなかった。

せつかくバレないようにマスクをしていたのに、これでは全くの無意味だ。

「え……君があのだカノンなのか!」などという言葉が飛んでくるが、私はなるべく無視した。

『エヴァに乗るかどうかなんて、そんなことで悩むやつもいるんだ。でもこのままだと君も皆も死んじゃうよ……? だって初号機はダミーシステム起動しないっぽいし、零号機は特攻したけど使徒無傷だったし』

「特攻って……! 綾波さんが!? 綾波さんは大丈夫なの!」

『わからないにや。もう、使徒を止められるのは誰もいない。希望は初号機しかないけど、起動しないから駄目かも。逃げたほうがいいよ。ほら、手伝うからさ』

そう言つてパイロットは式号機を動かして壁穴の隙間から私をすくい上げようと手を伸ばしてきて――。

『ん? 何してるの、君たち?』

その動きを止めた。

私の前には、三つの影。

遮るようにして三人が立っている。

両手を大きく広げてさらに一歩、大きく前に出た。

「カノンは連れて行かせないわ」

委員長は凜とした声できっぱりとパイロットを拒絶した。

『んー、いやいやいや。逃がすだけだから別に変な意味はないんだけどにやー……君たち、今の状況わかってる? エヴァに乗るにしても逃げるにしても、一刻の猶予もないんだよ?』

「カノンはエヴァに乗ることでもいつも傷ついてる。こんなことになつてしまったのに、それでも戦わされるの?」

『んん? 話が噛み合っていない感じだね。そりゃあこつちとしては子猫ちゃんに戦ってほしいけど、それは子猫ちゃん次第なんだにや。そ

の判断をするために、まずはこの場所から連れ出さないと』

「センセはもうエヴァに乗りとうない言うてるんや。だからお願いやからそつとしておいてやってほしい」

もちろんヒカリたちに式号機を止める術はない。

指で弾くだけで致命傷を負わされることは間違いない。

だというのに、立ち続ける。

私に見せるその背中には、子供だということにとっても頼もしく、大きく見えた。

ヒカリたちは殺されるかもしれないという恐怖心があるはずなのに、なお私への純粋な気持ちがあるというのか。

なぜ、そこまで。

なぜ、なぜ、なぜ！

私は皆を捨てたのだ。

もう守らない。

そんな私の一時の自己中心的な気持ちで捨てた。私がエヴァに乗れば守れるはずの、将来的に死ぬかもしれない人を見殺しにした。

だから責めていい。むしろ責めるべきだ。

私はもちろん大きく傷つくが、正当性のある非難だから言い返さない。言い返せない。

それを受け止める覚悟もしていない。逃げようとすらしていた。

誰もいないシエルターに行こうとしたのがその証拠。

どこまでも自分勝手に、救えない愚か者。

それが私だ。

だからこんな私を大切に想ったりすることなんかよりも、自分の命を何よりも優先するのが普通だ。

わからなかった。

何か裏があつて、そのために私を守ろうとしているのだと邪推してしまうほどに。

そして私の戸惑いは増す。

ヒカリたちだけでなく、そろそろとクラスメイトを含めて一般人たちも集まり、同じように両手を大きく広げて立ち塞がる。

式号機が低く唸る。

「な、なんで……！」

ついに私は疑問を口にした。

見ず知らずの人たちに、慟哭にも似た叫びで問う。

中年の男性が振り返る。

皺の寄った目元を緩やかに綻ばせ、答える。

「それは、君を助けたいと思っっているからだよ」

「――」

脳天を貫かれるほどの衝撃。

たったそれだけ。それ以上なんてない。裏も深さもない、浅い理由。

「私達の命は碓カノンに救われたもの」

「彼女の我儘くらい叶えてやってはくれないか」

「傷だらけの女の子に守られる世界は本当に幸せなのか」

「碓カノンを責める人の何万倍も、碓カノンを褒める人がいる。少なくともここにいる僕達は皆褒める人だ」

「どうか休ませてやってほしい」

「その結果俺たちが死ぬのなら、それは仕方のないことだ」

「普通の生活、普通の人生を送って欲しいと私達は願ってる」

なんだ、これは。

なんだ、この感情は。

……苦しい。今まで負った、どんな傷よりも苦しい。胸の奥まで掻き篦りたいほど熱い！

熱くて熱くて仕方がない！

しかし私はこの感情の奔流を発散させる方法がわからなかった。

堪えて、堪えて、堪えて。

両手を胸の前に持つてきて、ぎゅつと押し付ける。

それでもどうしようもなくなって、熱は上へ上へと駆け登る。私はそれを止められない。

喉を伝い。

顔に広がり。

そして、透明な雫となって私の目元から溢れた。
止まらない。全然止まらない。

拭えども拭えども、熱はまったく収まらない。

彼ら彼女らの言葉が、私の霧散した心の形を再構成していく様を感じ取った。

久しく忘れていた、深い感動から来る涙を私は流していることに気づいた。

目の前がぐしゃぐしゃになる。

一体私は、この世界の……人々の何を見ていたのだろう。

こんなにも眩しくて暖かくて、嬉しいものが目の前でキラキラと存在感を強く放っているというのに。

「……………ああ」

私はこの人たちを守らない。

見殺しにする。

そういう決断をした。

でも。

でも。

守りたいという気持ちは、やはり私の中にある。

ああでも、裏切られるのが怖い。

そんないつまでも決着のつかないせめぎあい。

全員は守れない。

私は聖女ではない。正義の味方でもない。

私が命を懸けて戦い、皆の命を守ったとしても日常を壊してしまうのは避けられない。

日常を奪われた人たちの怨嗟の声に耳を傾けていたらまた私は壊れる。

やっぱり後悔して、決断を激しく後悔する。

ならどうすればいいか。

皆を守ろうと努力しなければいい。

皆を守ろうと強く意識するからこそ、私は脆くなるのだ。

良い子であろうと私は努めていた。

だから駄目だったのだ。

そう。私は私が本当に守りたいと思った人たちのためだけに戦う。そうすれば、余計なノイズを気にしないで済む。『ついで』で皆を守ることができたのならそれでいい。

しかしその道は嫌悪されるべき道。

人の命の価値を相対的に下げる、悪魔の業。

私は良い子ではなくなり、悪い子になる。

でもそれでもいい。

なぜなら、そうしてでもこの人たちを——三人の親友を守りたいと思っただけから。

マスクを外す。

私の顔を見た人々は静かに固唾を呑んだ。

ゆっくりと手元のレバーを倒し、前に進む。

海が割れるように私の進む道を皆が開ける。

式号機の目の前で私は進行を止めた。

式号機を通して、パイロットと目が合ったと確信した。

「私は行くよ」

背後でどよめきが起こる。

私を守ろうとしていたのに、当の本人が戦場へ——地獄へ戻ることを望んでいるのだからそのどよめきは当然のものだ。

「カノン」

ヒカリの声が背中に触れる。

私は頭だけゆっくりと振り返らせた。

……ヒカリは泣いていた。しゃくりあげることはず、目を真っ赤に泣き腫らしながら私を見ていた。

しばらくの沈黙。

「……ごめん、ヒカリ。私は行くよ。世界が終わるのを望んでるわけではないし。私は別に死にたいって思ってるわけでもないし」

これは気が狂った末の行動ではない。

きちんと私なりに考え、結論づけたものだ。

もちろん、これが間違えた結論なのかもしれない。いつかきつと、

これもまた後悔するかもしれない。
だとしても。今この瞬間の私は絶対に間違っていないと胸を張れる。

「——生きたい。そのために地獄に行くの」

私はヒカリだけでなく、鈴原くんと相田くんがしっかりと頷くのを見てから正面に向き直った。

そして地獄への片道切符を切るべく、獣に語りかけた。

「お願い。連れて行って」

『……君の勇気に敬意を』

「——行ってくるね」

上から覆いかぶさった式号機の手が車椅子ごと私を掴み取る。

浮遊感とともにシエルターから連れ出される。歩いているというより、這っているようなりズムで手の中の私に振動が伝わる。

やがて振動は止まり、ゆっくりと掌が開かれた。

目の前に広がったのは、私の知らないジオフロントだった。

あれほど緑に溢れていた健康的な自然は一切消し飛ばされ、木々は枯れ、灰色の天蓋が仮初の空を覆っている。

生命の存在を感じさせない、死んだ大地が広がっていた。

「——」

どれほど壮絶な戦闘を繰り返していたかは想像に難くない。

使徒はどこ。

なかなか収まらない煙の中から懸命に使徒の姿を探す。

そして、いた。

黒い、奇怪な形をした存在。

何本もの帯をゆらゆらと揺らしながら、正面の巨人を見下ろす。

「零号機……っ!?!」

零号機には逃げる素振りすら見せない。

両腕も失い、完全に行動不能になっている。

使徒がゆっくりと前屈みになる。それに連動するように仮面の裏で何かが激しく蠢き、長く巨大な器官が仮面を押し上げながら伸びる。

それは迷いなく零号機へと迫り、その胴体をたった一口で丸呑みした。

「綾波さん!!」

残された零号機の膝から上は勢いよく血が噴き出し、バランスを失って倒れる。

生々しい咀嚼音がジオフロント全体に響く。

これは、綾波さんを食べている音だ。

我が人生で、これほど怒りが込み上げたことはなかった。

怒り狂いそうだった。

やがて咀嚼を終えた使徒は零号機の頭部カバーだけを汚らしく吐き出し、ゴクリ、と嚥下した。

喉に当たる部分の膨らみが胴に落ちていくのを見た。

すると使徒の身体に変化が訪れる。

悍ましい不気味な、低い産声を上げながら帯の下で丸みのある新たな肉体を生成する。

白い肌。二本の腕。二本の脚。そして胸部には二つの膨らみ。さらにその中心にはコアを覆う胸骨。

それは、女性そっくりの身体。

綾波さんを取り込んだことで、使徒が新たなステージへと進んだのだ。

『零号機と……融合してる。パイロットごと吸収してしまったんだ。もう誰も勝てないかもしれない。それでも君は戦うの……?』

私はその問いを無視した。

答えるまでもなかったからだ。

私の無言を答えとして受け取ったパイロットは私を優しく下におろす。

指の隙間から、勢い余って車椅子が倒れないように気をつけながら地面に降り立つ。

そして、レバーではなく、自分の手で車輪を掴んで前に進みだした。くそ……くそっ!

私の脚が麻痺していなければ、走ってケイジまで行けるのに!

車椅子のスピードではどうしても駆け足に劣る。
でもだからといって止まるわけにはいかない。

もどかしい。指が緊張と恐怖と麻痺で思い通りに動かせない。
だが進む。確実に近づいている。

ネルフに別れを告げたはずなのに、一日足らずで戻ってきてしまっ
た。それも、エヴァに乗るために。

何をしているのだろう、私は。

何度も何度も掌を返して。

恥ずかしい。

でもそれでもいい。だって私は子供だし、子供だから我儘を言うの
だ。

背を見せていた使徒が何の前触れもなく振り返り、光線を放つ。狙
われたのは本部直上の地上施設で、巨大な爆発とともに蒸発した。

爆風が離れていた私にも襲いかかり、僅かに浮遊感を感じたと思え
ば、私の身体は宙へ飛ばされていた。

「あぐ……ッー」

背中から激しく落下する。

一瞬だけ、意識が白黒した。

鋭い呼吸を繰り返し、急いで車椅子を探す。

幸い車椅子は四メートルほど離れた位置に倒れていた。見たところ、骨がひしゃげたりといった外傷もない。

速く、速く。

スカートに土を擦り付けるようにして地面を這う。両腕を必死に
前に伸ばし、車椅子へと向かう。

悔しい……。

こんななんじやいつまで経っても辿り着けない。こんなことをして
いる間にもいつ使徒がリリスに向かい始めるかわからない。

声にならない声を上げてから私は歯を食いしばる。

「……ん？ カノンちゃんじゃないか」

弾かれるように私は顔を持ち上げた。

そこには土に塗れた加持さんが、いつも通りの飄々とした顔で私を

見下ろしていた。

「加持、さん……？　こんなところで何をしてるんですか……？」

「俺かい？　見ての通り、俺はすいか畑の世話をしてるのさ。さつき
の爆発で全滅したけど、もしかしたら無事なやつがいるかもしれない。
い。それを探しているんだよ」

「そんなことしてる——」

「君こそ、こんなところで何をしているんだい？」

「……………」

加持さんの瞳は、飄々としていながらも私に『尋ねていた』。

そういえばここはすいか畑だった。

もう跡形もなく荒れ果てている。美味しそうだったすいかたちは
ざつと見る限りすべて割れて中身を地面に撒き散らしている。

「俺はここですいか畑の世話をすることしかできない。俺にあの使徒
は倒せないからな」

「……………」

「……………君はまた戦うのかい？　一度はさよならをしたのに、また
戻ってきて」

「……………」

加持さんは私に訊いている。

覚悟を、訊いている。

「あれだけ傷ついたのに。もう誰も信じられないのに。それでもエ
ヴアに乗りたいと」

私なんかよりずっと立派な大人。

いつも有耶無耶で、翻弄されて、半端な私とは違う。

ついさつき抱いた覚悟。

それを加持さんは『本当にそれでいいのか』と最終確認をしている
のだ。

「乗ります」

私は加持さんを見上げ、ありったけの意志力を込めて答えた。

「ほう。それはどうして？」

「守りたい人がいるからです」

「でもそれはこれまでと同じだよね？」

「違います。私はもう皆を守りません。私は私のためだけに、私が守りたいと思った人だけのためにエヴァに乗るんです」

加持さんは僅かに肩の力を抜いた……ように見えた。

「その覚悟を後悔しないと断言できる？」

「できません。いつかきつと、どうしてあんなことをしてしまったんだらうって後悔します。それを受け止める覚悟もしてません」

「じゃああまり意味が——」

「それでも」

「……………」

付け焼き刃でもいい。

いつそのこと、今この瞬間だけの覚悟でもいい。

曖昧で、ふわふわしてて。いつまで経っても自分の芯というものを自覚しない半端者でも。

「それでも私は——今、立ち上がらないといけないから」

この想いは決して止めてはいけないから。

「……そうか。そうか。まあ結局の所、人つてのは理屈とかじゃなくてその時の感情で生きているところもあるもんな」

寂しい笑みを浮かべながら、加持さんはゆっくりと頷いた。

「だから加持さん。私を助けてください。私を……あの場所に連れて行ってください」

「喜んで。傷だらけの少女を地獄へ運ぶ死神の役、確かに任されたよ」

加持さんは私に近づき、ひよい、とお姫様抱っこをした。

「え!? ちょよ、ちよつと! せめておんぶとかで……………」

流星に男の人にそんなことされるのはあまりに恥ずかしい。

「急いでるんだらう? 早く行こうぜ」

わざとだ! この人絶対わざとだ!

いたずら小僧のような笑みを口の端に浮かべた加持さんは私の言葉を見無視して走り出す。

使徒はまだジオフロントを練り歩いているだけで、セントラルドグマへの道は見出してないようだ。

しかしながらいつバレるかは時間の問題。

「……君は幸せにならないといけない」

「え？」

突然言われた言葉に、私は聞き返してしまう。

「俺には弟がいてね。セカンドインパクト後にある施設にいたんだ。でもそこでの生活から仲間と一緒に弟を連れ出して逃げたんだ」

思い出話をする場合ではないのでは思いつつも、黙って耳を傾ける。

「食料の調達が難しくてね。だから俺たちは拠点の近くにあつた軍の基地から非常食を盗んで生きるような生活を送ってた」

まだ本部までは距離がある。

「ある日、俺が忍び込む当番でね。しくじって捕まえられた。で、銃を突きつけられて怖くなって……拠点の場所を教えてくださいましたんだ」

「それで……どうなったんですか？」

「なんとか命からがらそこから逃げ出した俺は一目散に拠点に戻ったよ。でも拠点にはもう誰もいなくて、死体の山しかなかった」

「……………それは」

加持さんはさつきと同じ、寂しそうな笑みを浮かべた。

「ああ。俺のせいだ。俺が仲間を……弟を売ったんだ。後になって激しく後悔したさ。きつとそれは葛城も同じだ。あいつはセカンドインパクトを間近で見たただひとりの人間で、父親の命と引き換えに生き延びた」

「あの……どうしてそんな話を……？」

「知っておいてほしかったからさ。誰かを犠牲にして生き残ってしまった、幸せになる資格のない俺たちのことを。その点、君は違う」

「どこですか？」

「アスカを助けたじゃないか」

「……私はアスカを助けてなんていませんよ。私がおつと早く決断していれば、あんなことにはならなかったはずです」

「……でもアスカは死ななかつた。もし君が本当に何もしていなければ、きつとダミーシステムが使徒ごとアスカを殺していた。君は誰も

犠牲にしなかつたんだ。そこが決定的に違うところ。俺たちではもう進めない道を君は進んでいる。だから俺たちは、人間として君のこゝとをこの世の誰よりも尊敬している」

「駄目ですよ加持さん。こんなときに言わないでくださいよ。ずるい。ずるすぎます……」

「前も言つただろう？ 大人はずるいくらいがちようどいいのさ。……ん、そろそろだな」

いつの間にか本部はすぐそこだった。

顔を引き締めた加持さんは勢いよく本部に侵入し、目的地に向けて一直線に駆け出した。



ゲンドウは困惑を隠しきれなかつた。

初号機ケイジ上部にあるモニタールーム。その操作盤を前にして、目下に鎮座する初号機を見下ろす。

リツコの報告によると、使徒が零号機を取り込み、それによって使徒の判別パターンが零号機へと切り替わっているという。

セントラルドグマに判別パターンが使徒であるものが侵入した際、ネルフはもちろん、ここら一帯の地域を巻き込むほどの自爆装置が作動する。

しかし零号機へと変化したのなら、それを回避されてしまう。つまり、苦もなくリリースにたどり着かれてしまう。

そして最後の砦となる初号機は、ダミープラグを受け入れないでいた。

試運転をし、問題なく起動した。使徒を倒す実力も見せている。だから今回も起動するはずだ。

前回から手を加えたところで不具合を起こしているということも絶対がない。

それなのに、なぜ。

失敗を告げる人工アナウンスとともに、初号機の項に埋め込まれていたダミープラグが排出される。

「なぜだ……なぜ私を拒絶する、ユイ……！」

この緊急事態時に、何を考えているのか。

その瞬間、大量のモニターたちにあるものが映される。ゲンドウは何も操作していない。これは初号機からの単方向な操作だ。

そしてゲンドウは、自身を囲むように表示されたそれを見て、目を見開いた。

こちらを見る、カノンの顔。

ゲンドウは低く吼えた。

「これが……これがお前の答えだというのか……！　しかしあいつは私たちの——」

『——お父さん!!』

どくん、と心臓が高く跳ね上がるのを感じた。

ガラス張りされたモニタールームの前面からケイジを見下ろす。

そこにはふたりの人間がいた。

ひとりは加持リョウジ。

そして、彼に抱えられた碓カノン。

『私を……私を、この初号機に乗せてください!!』

カノンと視線が交差する。

ほんの数日前、ヒステリックを起こして自殺しようとしていた少女が、今度は揺るぎない自我を抱いて戻ってきた。

ダミーでいい。

カノンが乗る必要はない。ダミーの有用性が証明された今、カノンは不必要だ。ゲンドウの中では、元よりレイの代わりとして呼び戻しただけの予備パイロットだった。

しかしどうしても問わなければならなかった。

事実、初号機は起動しない。起動するにはカノンしか受け入れられないとまで。

そこへまるで、仕組みられたように本人が乱入してきた。

その真意は……奈辺にありや。

「なぜここにいる」

一瞬、躊躇うようにカノンは俯いた。

しかし、拳を握りしめてゆつくりと顔を持ち上げると、見たことの

ないような凜々しい顔で言い放った。

『私がッ！ エヴァンゲリオン初号機パイロットだからです!!』
思い出す。

初めて初号機を見せ、乗るように迫った時の反抗的の言葉とは違
い。

紛れもない自分の意志でこの鬼に乗るのだな、と。



オペレーターたちが使徒の攻撃による被害を次々と報告する。

その中に、ついに最悪の報告が飛び込んできた。

「最終装甲板、融解!!」

「マズい！ メインシャフトが丸見えだわ！」

ミサトは事態が加速度的に悪化していく中で、敗北を悟る。

初号機は動かない。零号機は取り込まれ、弐号機は戦闘不能。そし
て自爆装置も作動させられない。

メインシャフトを降りさえすれば、一直線にセントラルドグマまで
到達されてしまう。

しかしそれよりも前に、直通しているこの発令所への接触は避けら
れない。

「目標、ターミナルドグマ第七層を降下中！」

「ここに来るわ！ 非戦闘員退避!!」

素早いミサトの指示の下、速やかに退避が開始される。

しかし主モニターの電源を落とすと同時に、画面を突き破って使徒
が発令所まで侵入してきた。

あれほど猛威を振るっていた絶対的存在の使徒が、目の前に。
まだひ弱な人類がこんなところにたくさんいたのか。

ぬうつと顔を突き出し、ミサトたちの立つ位置に急接近した。
ほんの数メートルの距離。

その仮面の表面質感すらはつきり見えるほどの超至近距離。
虚ろな眼孔の奥から、チカチカと死の光が迸り始める。

ミサトは死を悟った。

歯を食いしばり、胸元のペンダントを握りしめ、直後の極光を待つ。

しかし目は絶対に閉じない。

たとえ無念の死を遂げるとしても、敵を最後まで睨み、抵抗の意志は途絶えさせない。

そして。

右側の壁を使徒以上の勢いで破壊して飛び込んできた紫の鬼が、無防備を晒していた使徒の顔面を殴り飛ばした。

「エヴァ初号機……!?!」

ミサトは初号機の横顔を見る。

ダミーシステムの起動中は、目が赤く発光するという仕様になっている。そして今日の前の初号機の目は、白い。

つまり人が乗っている。

人が乗っているということは一——。

「カノンちゃん!!」

強襲は成功。

体幹を崩した使徒の両肩を掴み、カノンは発令所の外へと押し出す。

「おおおおっ!!」

奥の壁をも突き破り、地面に倒れ込んだ使徒の上に馬乗りになって拳を振り下ろそうとする。

しかし、既のところまで反応した使徒が光線を放ち、振りかざしていた左腕を肩口から先を吹き飛ばす。

デッキに移動していたゲンドウは、初号機の大量の血を浴び、左腕が自分に接触すれすれで飛んできても一切動じない。

「あああああああ——!!」

カノンは久しく忘れていたフィードバックを誤魔化すように雄叫びを上げながら腹に蹴りを入れ、体当たりをし、射出リフトまで強引に押し出す。

リフトに誘導したカノンは素早く叫んだ。

「ミサトさん!!」

『固定ロック、全部外して!!』

ロックが解除されたのを見るまでもなく、射出ボタンを蹴り押し

た。

上昇のGを感じながらも使徒の仮面を掴み、壁に押し付ける。激しい火花を散らしながらジオフロントまで浮上し、身体をリフトに固定されていたなかったため、二体とも宙へ勢いのまま投げ出される。

目まぐるしく変化する状況に追いつかない使徒の胸骨を掴み、こちらが上になって落下エネルギーと一緒に地面に叩きつけた。

「はあああああッ!!」

コアの位置はおおよそ把握できている。

胸部の中心。帯に巻かれた最奥。

数回ほど拳撃を繰り出す、やはり硬い。私の知るコアの硬さと一致する。

咄嗟に使徒がA・Tフィールドを展開しようとするが、先回りをしてこちらから展開。侵食して一方的な戦況を確保。

帯を乱暴に捲ると、その奥に赤いコアの存在を確認できた。だが帯は生き物のように暴れ、コアに巻き付こうとする。

それを引き剥がすべく、左足で使徒の顎を押さえ、渾身の力で帯を引っ張る。

「ぐうっ! ううううう!!」

ゴムのように弾力があるが、繊維が伸縮の限界を迎えて徐々に千切れ始めている。

もう少し……あともう少しで……!!

途端、初号機はそのままの姿勢で項垂れてしまった。

「な、なに!!」

プラグ内の点灯は赤に切り替わり、内部電源がゼロになったことを示すディスプレイが表示されている。

「こんなつ、時に……!!」

なんとかして動かそうとしても初号機はびくともしない。

その間にも、拘束から解かれた使徒は好機と言わんばかりに両腕を帯へと変化させ、初号機の胴体を深々と貫いた。

「——ぐ、ガ」

……しまった。

ああ、わかつている。

戻らなければ。私はあの戦場に死体を晒したままだ。

戻らないと。

ゆつくりと、これまで動かなかった両脚を動かして進む。

やって来たのは穏やかな草原。

否、バラに満ち満ちた平原だ。

生まれたままの姿の私は、足の裏に土の感触を感じながら目的もなく進む。

バラは見たことのないような色をしていた。よく知る赤ではなく、桜色。花の一つに顔を近づけて匂いをかぐと、甘くて良い匂いがした。不思議と穏やかな笑みが溢れる。

暖かい春風を背中に受け、導かれるように私は進んだ。

ずっとずっと進んだ。

何年も歩いてきたような気すらする。

そしてついにゴールに着いた。

そこにあつたのは、小さな墓石だった。大きさで言うと、プールで使うビート板くらい。

そしてその足元には桜色のバラに満たされた棺桶と、中にひとりの少女が私と同じく裸体で安置されていた。

私はそつと中を覗き込んだ。

「んんん？」

私と瓜二つ……ではなかった。

大部分が私と似ているが、どこか違うような気がする。

身体つきもそっくりなのに。

どちらにせよ、私はこの少女にただならぬ興味を抱いた。理由は説明できない。

そもそもこの少女は死んでいるのか？

肌は生を感じる赤みがかっているし、今にも動き出しそうだ。

好奇心に負けた私は、割れ物に触れるかのようにゆつくりと少女の頬に触れた。

少女は死んでいた。

氷のように冷たかった。

それだけではない。私が触れた瞬間、みるみるうちに死体は干からびて骨と皮だけになってしまった。

「ひいッー」

恐ろしくなつて、尻餅をついてしまう。立ち上がり、その場から離れようと後ろを振り向いた途端。

今干からびたはずの少女が、何事もなかったかのように私の目の前に立っていた。

白いワンピースを見を包み、バラでつくったであろう花冠を被っている。

生きて。

場面は変わる。

どこか暗い手術室。

私は中央に配置されている寝台と、そこに寝かされている人物を見た。

その人物とは今さつき見た少女だった。

しかし、何が起こったのかわからないが、腕や脚が欠損している。どう見ても意図して切除されたものではなく、何かに巻き込まれて大怪我を負った……と見ていいだろう。

少女はまだ息をしていた。

だが本当に虫の息で、あと数分ほどで絶命するのが目に見えていた。

欠損部からは血が流れ続け、床にまで溢れて血の池を作る。

ひんやりと素足に血が触れるのを感じながら私は少女を眺め続ける。

少女の目はすでに何も映していなかった。

光は失われ、頭部から流れる血が目に入っても何も感じていない様子。

……微かにだが、潰れた唇が震えている気がする。

懸命に耳を濟ませるが、私にはよく聞き取れなかった。

死にたく、ない……！！

また場面が変わる。

私は砂浜に仰向けで倒れているようだった。

暑さも寒さも、まるで感じない。

プラグスーツの姿の私はゆっくりと起き上がる。

そこは夜の海。

像と化した巨人たち眠る赤い海。満天の星空広がる虚空。

遙か水平線には、巨大な人の首。

赤より赤い瞳は私を見て、嗤っている。

この世の終わりを想起した。

暗く、暗く。どこまでも暗く。

それだというのに、地表は太陽の光を受けていないはずなのにやけに明るい。

ぼんやりとした意識のまま、停止していた呼吸を再開させる。

鼻腔いっぱいに吸い込んだ空気は、無臭。

ずっと昔に、誰かに教えてもらったことがあった気がする。生きている海には匂いがあつて、どちらかという腐臭だが、それこそが命の循環をしている証なのだ。

その人を思い出そうとしても、何重にもモヤがかかったように思い出せない。

そう、この星は終わっている。生命の香りがどこにもない。

私もそして、終わっている。

……ふと、私の左隣にひとりの少女が私と同じように倒れているのに気づいた。

私とは色の違う、赤いプラグスーツ。

身体中に包帯が巻かれていて、とても痛々しい。

生きているのか死んでいるのかわからない。

じりじりと接近して、手を伸ばす。

優しく顔に触れ、顎までなぞるようにした。

しかし反応はまるでなかった。ぴくりと頬が震えただけで、それ以上はなかった。

瞬きはせず、じっと私を見上げている。

「ねえ、君はどうしてここにいるの？」

「それはあんたを殺してやりたいと思ったからよ」

返事は即座に返ってきた。

ならばと私は返す。

「じゃあなんで私を殺さないの？」

「それはあんたを殺すことすらバカバカしいからよ」

「そうなんだ」

「ええ。だから私はもう何もしないわ。あんたが私に何をしても抵抗しない。このスーツを剥ぐもいいし、傷つけてもいいし、なんなら殺してもいい。すべてあんたの自由よ」

「わかった」

私はそつと右手を少女の首に伸ばす。

瞳は変わらず、私を見ている。

そのまま首の裏に手を潜らせ、頭を持ち上げる。

ささつと私は正座をして、その膝上に頭を置いた。

「はっ」

少女は本心から、は？ と思っただろう。

「何してんのよ、あんた」

「え？ いや……何したらいいかわからなかったから……」

「そうはならないでしょ。膝枕？ あんたを殺したいと思ってる奴に、膝枕？ ふざけるのもいい加減にしないよ。それにスーツのゴムっぽい質感が気持ち悪いわ」

「ほんとう？ ごめんね、じゃあ……」

そう言つて私は一度膝枕をやめて、少女の頭を一旦砂浜に預ける。

私は手首のボタンを押してスーツの吸着を停止させ、スーツを脱いだ。

そして再び膝枕を再開する。

「なんで裸になるのよ。きも。理解できないわ」

嫌悪感を剥き出しにして少女は私を責め立てた。

「別にいいでしょ。女同士だし。ここには君しかいないし。それに、この世界には私達しかいないし」

「まあ……それもそうね」

「ね？ で、どう？ 良くなった？」

「ふん」

「どうやらマシにはなったようだ。」

「恐らくこの少女の性格は所謂ツンツンというものなのだろう。」

「これから永遠に、私はこの人とふたりで生きていく。私たちが人間かどうかは知らないが、ずっと、生命の失せた地球でふたりのイヴとして。」

「私は子守唄を歌うことにした。」

「幼き日、すでに顔も覚えていない母が私を寝かしつけるのに歌っていた子守唄。」

「もちろん歌詞なんて覚えていない。うろ覚えだ。」

「でもリズムや音程などはだいたい覚えている。」

「なにそれ、子守唄のつもり？ 私を子供扱いしないで」

「無視無視。」

「綺麗なブロンズの髪を撫でながら私は歌う。」

「歌の魔法にでもかかったのか、少しずつ少女の瞼が重くなっていく。」

「どう？」

「私は再び訊いた。」

「……ふん」

「少しだけ照れている。」

「それに気づかれたのが余計に恥ずかしかったのか、「見るな！」と顔を背けてしまう。もぞもぞと動くせいで膝がむず痒い。しかししばらく待っていると、穏やかな吐息が聞こえてくる。」

「気持ち悪くは……ない、わ……」

「私はこの少女の頭にバラの冠を被せた。」

「もう少女は動かない。生きながらにして、永遠の眠りについた。」

「私は慈しむように、少女の頬にキスを落とした。」

◇

「私はあなたではない。あなたは私の罪。」

深いまどろみから這い上がる。

淡い陽光は、電車の中をじんわりと暖かくする。

誰かが私の上に覆いかぶさっている。

必死に何かを叫んでいる。

叫びながら、私の胸を叩いている。

生きなさい！ あなたの死に場所はここじゃない！！

ああ……でも眠いの。すごく。

意識も朦朧としているし、それに身体感覚がない。指一本すら動かせる気配がない。

身体が段々冷たくなっていく。

心地いい。

このまま眠ってしまったら、どれほどの快眠になるのだろう。

許さないよ！！ ここで死ぬなんて、私が絶対に許さないからツ！！

私に覆いかぶさる誰かは泣いていた。

大粒の涙が止めどなく私の顔に落ちる。

落ちた涙はマグマのように熱く、じんわりと生の悦びが伝播する。

でもこれだけでは足りない。

私の眠気を吹き飛ばすほどではない。

眠って、起きたら皆の朝食とお弁当の用意をするのだ。

確か冷蔵庫に冷凍の唐揚げがあるはずだから、それを入れておかないとアスカに怒られる。

「あんたの唐揚げのほうが嬉しいんだけど」なんて言われても、さすがに毎回作るのは許してほしいな。

ああミサトさん、朝っぱらからビールなんて……これから仕事でしよう？

その後は学校に行つて、ヒカリたちクラスメイトと楽しい学校生活を送るのだ。そういえば、この前鈴原くんたちとゲームセンターに行けなかったから、今度また連れて行ってやると約束してくれた。

あれ、いつになったら行けるかな。

そうそう。だから英気を養うために、眠るのだ。

綾波レイを、助けなさい!!

——覚醒する。

命を思い出した私の魂が、生を渴望せんと暴れる。

まだ足りない。死んでいた呼吸を再開しようとする唇がわななく。

途端、何かに唇を塞がれる。

注がれるは、熱い魂の残滓。

「ツはー・はぁッ!・・・はっ!!」

息を吹き返した私は貪るように呼吸をした。

目を極限まで開き、鼻と鼻が触れ合うほどの距離にいる人物を見る。

あの棺桶にいた少女そのものだった。

ぼろぼろと泣いていたのがよくわかるほど、涙の跡が頬に残っている。

よかった。

優しく微笑んだ少女は私から離れると、向こう側の座席に座った。

電車は相変わらずどこへ向かっているのかわからない。無限にループする景色は、まるで円環の世界をぐるぐる廻っているようだ。

さあ、立ち上がって。今度ばかりは私も力を貸すよ。

どうして力を貸してくれるの？

私は問うと、少女は当たり前だと言わんばかりに目元を緩めた。

そんなの決まってるじゃない。私たちが、あの子を愛しているからだよ。

◇

動け。動け。動け。

我が心臓よ、動け。

今動かないと、私は一生後悔する。私の生死問わず、一生後悔する。目の前にいるのだ。目の前に綾波さんの気配を強く感じているのだ。

暴走でもなんでも……なんでもいい!!

本当になんでもいいから、今、動け!!

私にはわかつている。

綾波さんは、わざと私を引き止めなかったのだ。

もし綾波さんが私に残っていてほしいとお願いしていれば、私は間違いなくネルフを去るという決断はしなかった。

でもそれはエヴァに乗り続けるということになり、あの夜の願いに反してしまう。

だから何も言わなかったのだ。

それは私のことを大切に想ってくれていた何よりの証拠。

誰よりも純粹に人を想うことのできる女の子。

私はあの夜に心を救われたのだ。

嬉しかった。すごく嬉しかった。

だから今度は、私が救う番だ。

何のために命を吹き返した。

何のためにここにいる。

「ご、オ……っ……、ふっ……!」

……動け。

ここまで醜くあがきながら生きて、エヴァに乗って戦ってきた。人の悪意を知った。

でも、人の尊き善意もたくさん知った。

今私を動かしている原動力は、燃えカスをもさらに燃やし尽くす命の炬によつて供給されている。

「ああ——あ、あ」

動け。

目的はただひとつ。

私が守りたいと思った人を守るためだけに。

「ああ、ああ……あああ——」

動け！

綾波さんを救うために！！

だってこんなお別れなんてあまりにも悲しいじゃないか。

私はまだ一度も、綾波さんの笑顔を見たことがないのに。

きっとその笑顔は、今まで私が見たどんなものよりも美しく、可愛くて、綺麗だと思っから——。

「あ——あああ……っ、お」

それを目に焼き付けるためならば。

私は私のすべてを捧げてもいい。

「あああああッ！ ああああああ——……！！」

だから！！

だからこそ——！！

綾
波
を
返
せ

鬼の書 急

世界は酷く、澄み渡っている。

青く燃える心臓。

血管が破裂せんばかりに巡る血液。

青の世界。

私の世界は、青い。

どこまでも綺麗で、呑み込まれてしまいそうだ。

再起動した初号機を私はゆっくりと起き上がらせた。

初号機が緑ではなく青く発光を始め、ゆらゆらと焰が揺れる。

ゆらゆら。ゆらゆら。

私はだあれ？ あなたはだあれ？

わすれないで。わすれないで。

私は……私達は、碇レイ。

顎の拘束具を砕き、無音の咆哮を放つ。

威嚇ではない。

ただ。

お前を殺すと伝えるためだけのものである。

それが合図となり、使徒がノーモーションで帯をこちらに射出した。

その速度は通常の反射神経ではとても視界に捉えられない。

私に到達するまでの時間はコンマの世界だ。

——しかし。

『ゼルエル——絶壁よ』

前面に翳した私の掌から超高密度のA・Tフィールドが展開されたのと、それに使徒が直撃したのは全くの同タイミングだった。

ジオフロント全体を激しい轟音が叩きつけ、虚ろなソラに稲妻の亀裂が走る。

そしてA・Tフィールドはあらゆる物質を通過させない絶対の壁となり、使徒の攻撃も例外ではない。

帯が潰れてドス黒い粘液状の物体がどろりと広がってA・T

フィールドを覆う。どういう原理かは不明だが、そのまま粘液とA・Tフィールドを接着させ、伸びていた帯を縮めて使徒が身体を肉迫させてくる。

超至近距離のなった使徒が仮面の奥の眼孔を瞬かせて光線を放つ。しかしこれも私のA・Tフィールドが完全に防ぎきり、同心円状に波紋となって幾重にも波動が広がった。

『レリエル——虚構よ』

切断されていた左腕を伸ばせば切断面から眩い燐光が溢れ、一瞬で腕の形となって肉体を補う。

そして拳を握りしめ、光の腕を変化させる。複数の立方体で輪を作り、光線を打ち切った使徒の正面へ展開。

鋭い風切り音が発生し、輪は外回りに一回転だけした。その力を一点に集中させることで、爆発的な加速を一方的に与える。

未知の現象に反応が遅れた使徒を遥か後方まで吹き飛ばした。

「あぎい、——……あ」

白く溶けていく。

私のすべてが、ゆっくりとエヴァに蝕まれていく感覚。

自分の肉体の先端部分がわからなくなっている。足先、指先、頭頂。どこからどこまでが私なのかを見失う。

輪郭を失い、肉体を失い、自己を失う。

私を定義するものは果たして何なのか。

でも、まだ終われない。

この敵から綾波を救い出すまで、絶対に終わらない。

極限まで色の抜けた幻想世界。

ひび割れのような吐き気を催す光景の最奥に、青い魂の輝きを見る。

『ラミエル——極光よ』

我が眼から放たれるは破滅の光線。

まだ立ち上がっていない使徒へと真っ直ぐ伸びる。

咄嗟にA・Tフィールドを張るが、破壊する必要すらなく、それごと使徒を押し潰すほどの光圧で灼く。

一方的な暴力による制圧。

反撃の糸口……その思考する暇すら与えない。

私の魂は昇華する。

身体が熱い。

青く。蒼く。さらに碧く。

初号機により深く入り込んでいつているのを感じる。

後戻りできない片道を全速力で駆け進んでいる気分だ。

この先は地獄？ それとも天国？

いや、そのどちらでもない。

そんなの、私にわかるはずがないのだから。

私の動かない脚の代わりに初号機が歩く。

頭頂に頂く、白い光の輪。

天使にでもなつたつもりか。

知らない。

勝手に初号機がそうなつていつているだけ。私の知る由ではない。

綾波を救うために必要な変化だというのならば許す。

なんなら天使らしく翼でも生やしてみせるがいい。

この戦いの後、私がどのような生命になつてもいい。ヒトですらな

くなつてもいい。その覚悟は決して揺るがない。

世界の存続？

端からそんな大きいものを背負えるようなヒトではないことは、私

が一番良く理解している！

大義名分よりも、目先にある私の欲しいものを優先する！

だから綾波は、絶対助ける——！！

『——極光よ！！』

薙ぎ払うように縦方向に光線が走る。

その射線上にいた使徒のA・Tフィールドを豆腐のように切り裂き、胸を胸骨ごと破壊してコアを露出させる。

そして使徒のさらに後方、ドーム状の壁にまで威力が減衰されることなく到達し、灼光と轟音と爆風がジオフロントを蹂躞する。

数秒遅れて衝撃波が私のもとにも届き、一度薙ぎ倒された木々が二

度目の死を恐れるように宙を飛び回っているように見えた。

行きなさいカノンちゃん！ 誰かのためじゃない！！ あなた自身の願いのために——！！

ああ、そうだ。そうだとも。

私は進む。進撃する。

使徒はすでに満身創痍。私の一方的な苛虐に、もはや立ち上がることもすらできなくなっている。

仮面の奥の瞳は私の何を見ているのだろう。まだ立ち向かう勇気の光？ それとも怯えの光？ どちらにせよ私にはわからないから意味がない。

ついに使徒の側まで徒歩で寄った私は、使徒の顔面を渾身の力で殴り潰した。体液が飛び散り、それらが私の顔にかかった。

ビクン！ と使徒の身体が大きく跳ね上がり、大ダメージの感触を得る。

その裏で私自身の存在証明も崩れ去る。

前方から後方へと突き抜けていく鈍色の虹の光線に無限に貫かれる。

「は、ア——う、ギ——、……」

皮膚を通り肉を通り、骨も細胞にさえ届く。

タンパク質が分解されて組織間の結合が維持できなくなる。

溶ける。溶ける。溶ける。

私の肉体がL・C・Lに滲み、消える。

それでも私の魂はここに健在である。

碧く輝く、尊き篝火。

「ああッ！ あああアアアア——……ツツ！！」

この魂だけは絶対に汚されない。まだ汚されてやらない。この後——綾波を助け出したあとなら、いくらでも陵辱していい……からッ！！

……から、耐えろ！

そう。耐えるのよ碇カノン。

私も私のすべてを使つてあなたを支える。

だから——絶対に勝って!!

初号機から伸びる崩壊の手を、誰かが防いでいる。

でもそれはいつまでも防げるわけではない。

さつさとケリをつけないと、私もこの子も限界を迎える。

……いや。

とうに限界などとづくに昔に迎えていたか。

『アラミサエル——相縁よ』

右腕を高く振り上げ、コアに触れる寸前まで振り下ろす。

掌を広げ、不可視の腕をコアへ潜り込ませる。

途端、形容し難い未知の感覚が五臓六腑に染み渡る。

不快感や狂うほどの痛みではなかった。

ほんのり暖かくて、母親の子宮内で羊水に包まれるような。

ただそれだけ。

それと同時に何もかもがどうでもよくなる脱力感に襲われる。直

前まで私を犯されていたすべてから解放され、救済を感じ取った。

このまま委ねてしまいたい。

どこまでも沈んでいきながら眠ってしまいたく——。

違う!

カノン! あなたはそこに行くだけじゃない!!

そこに行つて、綾波レイを助け出すの!!

泡になりかけていた意識を再集約させる。

「ハ、——あ、っ!!」

まだコアの表層から少し沈んだに過ぎない。

最深部へはまだまだ遠い。

心を燃やせ。私の魂は使徒のコアなぞに取り込ませてなるものか。

水銀の海に潜り込むような自殺行為。飛び込むが最後、二度と戻っ

てこれない。

いや。いや!

戻ってきてみせる。せめて綾波だけでも、絶対に戻らせる。

そして届く。コアの最奥。

光の腕がそこに存在する二重のコアに爪先が触れた瞬間、声が聞こ

えた。

「——ダメなの。もう、私はここでしか生きられないもの」
いったい何を言っている。

そんなところで生きられるはずがない。もし生きることができるとしても、それはヒトとしてではない。

だから私の方こそダメだ。

「綾波っ!？」

「いいの、碇さん。私が消えても代わりはいるもの」

代わりはいるもの。

脳髓にその言葉だけが何度も反復する。

本当にそうだろうか？

人間にはそれぞれに個性があり、たとえ双子であつても例外ではない。綾波の言葉の真偽に触れるほど余分な思考は割けない。

だから、そこにある——私が見ている事実を叫んだ。

「違う！・綾波は綾波しかない！」

そうだ。

今まで触れ合った綾波こそが真実であり、感情の機微、あるいは成長を一番近くで見た。

もし綾波ではない綾波が現れたとしても、私は見分けられる。

私を知っているこれまでを信じるのだ。

「だから今、助ける……!!」

天使の輪は白から赤へと急変し、そのサイズをじわじわと広げる。

初号機の胸部拘束具も割れ、内部で命の胎動をしていたコアが姿を現す。

物理法則を無視し、天使の加護もないのに宙へ浮上していく。使徒もそれにつられる形で共に浮上する。

初号機の節々から溢れ出る光の奔流が、幾重にも別れて天使の輪だったドス黒い円の中央へと吸われていく。

別の空間へと私と初号機の何かが吸われている。

だが今はそんなことどうでもいい。

潜在的な力が溢れるのを感じる。

際限なくそのすべて、ありつたけを込める。

先程までは片手だったのを、今度は両手を翳しながら、遙か遠い記憶から呼び起こした権能を重ねて行使する。

喉を使い潰すつもりで咆える。

なるべく必要以上に使徒のコアを削り取らないように最新の注意を払いながら円柱型の空洞を生成する。

その先に見える。

2つ目のコア。彼女の眠る魂の鳥籠。

もはや初号機の操縦すら覚束ない。

さらに深部へ潜り込もうとすることへの抵抗か、一向に腕を伸ばせない。前方からの身体を灼く虹の光線。すでに虹ではなくなり、青と黒と、若干赤の混じったものへと変化している。そしてその光量、抵抗力は段違いに上がっている。

もう操作レバーを握りしめる力すら尽きそうだ。

「——オ、……あ、ア」

さつきから連れ人の気配を弱く感じる。

それに私自身も限界へのカウントダウンを始めている。

初号機の操縦を断念。ホールドして操作レバーから手を放す。前のめりになって操縦席にしがみつきながら前進を開始する。

「く、……そ………」

脚を動かせないからとてつもなく遅い。

だからといって腕の力だけでも到底難しい。

下半身を引きずるようにしながらゆっくりと前進する。

もう少し、だ……よ！

脚は……私のを貸すっ、からっ！

連れ人も息が絶え絶えだ。

呼吸は浅く、目の焦点も合っていない。

それでも私に力を与えんとじわりと私の身体に融合する。

瞬間。

巨大な異物を挿入されたような強烈な圧迫感に打ち震えた。

「ガ」

しかしすぐに全身に浸透し、懐かしい感覚が脚に宿る。肉体はすでに失っているからこの身体は精神体……と言うべきだろうか。この場限りの火事場力。

ともかく、これで楽に進める。

楽とはいっても前方から押し寄せる光線は勢いを増すばかりだ。

腕が壊すくらい覚悟で這い進み、足腰に力を入れて踏ん張る。

呼吸なんてとてもできない。

ぐにやりと歪む視線の先に、闇色のドームの中央で膝を抱いて丸くなっている綾波の白い背中が見える。

「綾波っ!!」

私の声に気づいたのか、雪のように白い髪を揺らして私を見上げてきた。

その赤い瞳は、何を語っているのか残念ながら私にはわからなかった。

でも、今やるべきことだけははっきりしている。

囚われの綾波を覆うドームは明らかに異質な雰囲気を放っている。闇よりさらに闇の色。

ヒトにとって未知の領域。

私はそこに無遠慮に突撃すべく力を振り絞って前進するが、境界面との間に絶大な斥力が働くようにまるで接触できない。

目と鼻の先にあるというのに、その先へ行くことのできないむず痒さと苛立ち。

——届け。

私達の心の声が強く重なる。

あともう少し。ほんの少しだけ進むことができたなら私達の勝ちだ。

勝つために私は自身の何もかもをかなぐり捨ててここまでやってきたのだ。その場凌ぎの、自分をそれっぽく納得させるためだけの安っぽい覚悟を決めて。

今更捨てることなんてできない。

綾波を助けるまでは、絶対に。

「お、お、お、お、お……!!」

行け、行け、行け!!

届け、届け、届け!!

私のすべて、すべてを叩き込みながら叫ぶ。助ける。

ただその一心。

私と連れ人の想いは完全に一致している。

もし私だけだったら無理だったかもしれない。どれだけ立派な願望を掲げても実力が伴っていないければ、それはただの口先だけになっ
てしまっていた。

でも、この人と一緒ならきつと大丈夫。

ありがとう。

私を信じてくれて。

一緒に突破しよう。呼吸を整えて、心をシクロクさせよう。

もう意味のない、呼吸というリズムをとるためだけ動作をする。

大きく息を吸い、胸を膨らませる。

落ち着いて吐き。薄っすらと瞼を持ち上げる。

『いくよ』

巨人の手で押さえつけられるような重い抵抗を受けながら、ゆっくり手をドームに突入させる。表面はどろりとした粘性の高い液体でできていて、それさえ突破すれば中は驚くほどしんと静かな暗闇だった。

そしてたった数メートル先に彼女の姿を捉える。

「綾波、手をつ……!?!」

呼びかけようと口を開いた途端、口内に入り込んできた未知の物質に喉を潰された。

この空間に存在するあらゆるものが私にとって劇物。綾波はなんともないようだが、私には一刻の猶予もない。どれだけ強い意志力があっても身体を壊されてはどうしようもない。

肌が爛れ、真皮をも引き剥がし、内側の皮下組織が晒される。

猶予は数十秒ほど。

これ以上はどう足掻いても持ちこたえられそうにない。

筋肉が硬直して思うように腕を伸ばせない。

麻痺だから伸ばせないのではない。腕はほぼ思いのままに動かせる。だからこの空間のせいなだけだ。

私をもっと気合を入れて、頑張れば届く。

一秒がとてつもなく長く感じる。その分だけ受ける地獄の時間も長く感じる。でも待てる。私が本当の意味で死ぬまで待てる。その自信だけはあった。

だから私は限界の限界まで尽くす。

冷え切った手は温もりを求めるように真っ直ぐ伸びる。

助けるために。

そして呼ぶのだ。

「来い……!!」

ピクリと白い身体が震える。

身体が完全に私の方に振り向く。

しばし目を伏せて憂うような素振りを見せ、次に私を見上げる。久しぶりに見る彼女の顔は、今にも消え入りそうなほど弱々しかった。

私は耐えかね、心の赴くままに咆えた。

「レイ!!」

最後のひと押し。

潰れた喉を更に潰してふたつの音をぶつける。

ひしやげたようなひび割れた声になってしまった。

初めて呼ぶ綾波の下の名前は、私の旧名と一致しているはずなのにどこか違うと感じた。

その理由は、私と綾波ではレイという名前の重みが違うからか。

「!!」

綾波が大きく目を見開く。

どんな葛藤を頭の中で繰り広げているかは知らない。

どうして助かろうとしないのかもわからない。

でも、私が必死に求めることで助けてほしいと思わせることはできる。

昨日、私が助けられたように。

ゆつくりと綾波の腕が持ち上がり、伸びてくる。

私はそれを、『助けてほしい』という自己主張であると受け取った。これに応えるために、私はここに来た！

少しずつ、少しずつ手と手の距離が縮まっていく。

指先が触れそうになったその瞬間、最期の火事場力で一気に腕を伸ばし、救いを求める手をしっかりと握りしめた。

そして、なけなしの根性で綾波を力任せに闇の監獄から引きずり出した。

驚くほど滑らかに私の胸元に飛び込んできた彼女の反対の手には、私の部屋から持ち出したであろうあの音楽プレーヤーがしっかりと握られていた。

私の動きにリンクして、同時期に初号機が二重コアの最奥を摘出する。

それと同時に使徒の身体がL・C・Lとなって爆散——するはずが、完全に爆散することはなかった。途中で巻き戻るように一箇所に集まり、使徒ではなく巨大な綾波の身体を形成した。

「……ありがとう、綾波さん。色んなこと、本当に感謝してる」

脱力した綾波さんの身体をいつそう強く抱きしめた私は許しを乞うように囁く。

どくん、どくと衣服を纏っていない綾波さんから素肌越しに感じる生の鼓動は、私が私の意志で、納得できる形で助けられた証だ。

アスカの時のような半端な助け方ではない。

あの後悔を繰り返さないことができたのだ。

「ごめんなさい。何もできなかった……」

そんな謝罪の言葉を、真っ直ぐに受け取った。

「いいの……これで。これでいいの……」

ああ、良かった。

連れ人も極度の限界状態から解放されて静かに微笑んでいる。

綾波さんの身体が透けるように初号機に溶け込んでいく。

私の想いに応えた初号機の目覚めた力は、徐々にジオフロントだけ

でなく地上へと到達する。

ネルフ本部の直上を破壊し、反転した重力によって瓦礫がゆつくりと宙へ遡る。

ジオフロントと地上を繋ぐ巨大な空洞が開く。

無から出現した赤の輪は、現世を侵食するかのよう広がっている。

初号機は紫の鬼ではなく光の巨人と化し、ついさっきまで身体から溢れていた光の奔流が六対の翼を形成する。

その姿は天使などではなく、墮天使に近い。

エヴァ初号機という人造人間が命を得て、世界の理を超えた新たな生命として再誕する。

代償として、古の生命は滅ぶ。

歓喜せよ、美しい霊の降臨だ。

天から遣われし使徒と交わりて、神の座を臨む。

自然の乳房を吸った黄金の稲穂は、天上の楽園にて蒼い風にあおられる。

ただひとり、ソラへの挑戦者として見上げる我を讃えるがいい！

悪人の我は、枯れた桜色のバラでできた道を裸足で征く。

血に塗れた足跡は歓喜の印となる。

いつかはそれが、地に還ると知っていても。

世界の終わりが開始される。

わたしと初号機を爆心地として、莫大なエネルギーが収束し始めている。

綾波さんを助け出したことに安堵した私は、安息の眠りにつくべく重くなってきた瞼の動きに従う。

綾波さんも私と触れ合っている安心感からか、しだいにうとうとし始める。

眠ろう。眠ってしまおう。

私達は頑張った。ジオフロントまで侵入した強大な使徒を倒したのだ。あとの回収処理などはすべてミサトさんたちがやってくれるはず。

そして――。

不思議なものを見た。

ジオフロントの天蓋から音もなく降り注ぐ、赤い尾を引く流星。覚醒めようとしていた私を、寸分の狂いもなく貫いた。

「――ハ」

魂を縫い付けられたような、重い衝撃。

使徒のコアへ侵入するときには比べれば痛みは遥かに軽い。だが激痛であることに変わりはない。

同時に、取り返しのつかない一撃を受けたことを悟った。

覚醒めようとしていた碧い魂の篝火は恐ろしい勢いで鎮火される。

肉体を溶かされ、魂となった私の存在をさらに希薄にさせる、強烈な眠りへの誘い。

声が――聞こえ、る……。

ヒトとしての……思考、存在を停止――させられる……直前。すぐ

耳元で――声が、聞こえた。

「碓さん……!!」

耳に妙に残る……聞き慣れた声。

いつの日か、これに似た声で子守唄を聞かされたことがあったような。な。

……誰の声だっただろうか？



終わりを告げる赤の世界は波が引くように晴れ、満月の夜が再開される。

そして、ひとときわ強く輝いて見える月光を背景に一体のエヴァが降り立つ。

藍色のカラーリングに、黄色をアクセントとした神々しいボディ。

光の輪を頂戴し、赤く光るバイザーが不穏な雰囲気を放つ。

深い深い眠りについた初号機の元に降り立たんとする。

新たなエヴァ、Mark. 6のパイロット――渚カヲルは目元を伏せて地表を見下ろす。

「――さあ。約束の延長だ、碓レイ君」

彼女の旧名を口にするカナルは、強い意思を込めた声で言葉を繋いだ。

「今度こそ……たとえ君だとしても——幸せにしてみせるよ」



とても暖かい、誰かの温もり。

開けていた窓から入り込んでくる風が鼻先を撫で、僅かにむず痒い。

鼻をむずむずさせたレイがゆっくり目を開けると、大好きな母が慈しむように自分を見ていたのに気づいた。

「あら。もう起きたの？ お眠りさん」

静かに微笑む母に、レイはもぞもぞと胸に頭をすりつける。

「起きてない。もいつかい寝るもん」

「そう。じゃあもう一回寝ましようか」

ベッドの中でくつつくように寝ていたレイと母。

崩れかけていた掛ふとんを丁寧に伸ばし、母はレイの身体が冷えないようにかけ直した。

今日は金曜日。

明日は土曜日でその次は日曜日だ。

レイは無意識に母の栗色の髪に触れ、そのあまりの艶に思わず感想

を眩く。

「すごい、きれい」

「そう？ 嬉しいわ。レイも私の血の方を強く継いでるから、きつと綺麗な髪になるはずよ」

「お父さんみたいにぼさぼさになるのは、や！」

「それもそうね。いつも言ってるのに身だしなみだけは中々整えようとしなのは悪い癖ね。レイにうつたらどうするのかしら」

「いや！ いや！ おひげぼーぼーになりたくない！」

「ふふふ！ それはさすがに大丈夫よ」

面白おかしく笑った母は、レイの頭を優しく撫でた。

だんだん気持ちよくなってきたレイは、二度寝に突入しようとしてこくりと船を漕ぎ始める。

指でレイの頬を突つけば、ぷにぷにと柔らかく変形する。

母はそれがとても面白く、同じくらい愛おしく感じた。

「レイ。私の子。私の可愛い娘。あなたはきつと美人さんになるわ。私と同じかそれ以上に。だから……人を大切に想うことのできる、優しい女の子に育つてね」

レイに果たして今の言葉が聞こえていたのだろうか。恐らく聞こえていない。もう眠り始めたレイの耳にはほとんど届いていないだろう。

しかし母はそれでもよかった。これからたっぷり愛情を注いで育てるのだから。

たくさん褒めるだろう。

たくさん叱るだろう。

たくさん泣き、泣かされることもあるだろう。

そういうのが子供を育てるというものだ。

リスクだったりリターンだったり、そんな理屈めいた計算じゃない。

原動力は、ただ愛という概念に帰結する。

父と母で紡いだ愛の証。

いずれふたりがこの世を去った後も子供は生き、番を得て新たに血

を……命を繋ぐ。

これは何の特別なことではない、生物としての本能に従った繁殖。それによる継承でしかない。

だが人はそこにロマンや哲学、夢を見出す。

……未来。

未来なのだ。

母……碓ユイにとって、娘の碓レイは未来である。

いくら研究の道を極めたとしても、人としての愛は誰にでもある。

それはあの無愛想な父にもある。例外などない。

ユイは子守唄を歌うことにした。

特別でもなんでもない、みんなのよく知る子守唄。

レイはすでに穏やかな寝息をたてて眠っている。

顔を撫で、絹のような肌を指先で感じる。

リズムに合わせ、レイの背中をぽんぽんと優しく叩く。

ようやく離乳食も卒業したところではあるものの、やはりユイの乳に懐かしさを覚えているところがあるのだろうか。

時々レイの口元が何かを吸うように窄めたりするような仕草が見受けられる。

思わず笑みを漏らしたユイは、果たしてどちらが親離れ、もしくは子離れできていないのだろうかと考えながら子守唄を続ける。

と、ここで父……ゲンドウが帰ってきたようだ。

玄関のドアが開く音が聞こえた。

レイを起こさないようになるべくトーンを落としてで「おかえりなさい」と言うと、状況を察したゲンドウはユイと同じようにトーンを落として「ただいま」と返して寝室にやって来た。

「今レイが寝てるのよ」

ゲンドウはユイの腕の中で眠るレイを見て僅かに顔を緩めた。

「……そうか。夕食はもう済ませたのか？」

「いえ、まだよ。もう少しだけしてから用意しようと思っていたわ」

「もし疲れているのなら適当に私が冷凍食品をでも温めておくが」

「ダメよ。目を離したらあなた、すぐにだらしなくなるんですもの。」

「ちゃんと私がやります」

「……わかった」

的確に事実を突きつけられたゲンドウは大人しく引き下がることにした。

しかしながら荷物だけさっさと自室に置いて手洗いを済ませると、すぐに寝室に戻ってきた。

「ん？ どうしたの？」

不思議そうにユイが小首を傾げる。

「いや……別に」

そう言いながらもゲンドウはユイのすぐ真横に座り込み、眠りに落ちたレイの顔をまじまじと見つめる。

その様子を見守っていたユイが口を開いた。

「これを言うと良くないかもしれないけど、レイがあなたの血を強く継いでなくて良かったわね」

容姿はどう見てもユイに似ている。

ゲンドウの遺伝子なんて少しも混じっていないようにすら見えてしまう。

だがレイは正真正銘、ユイとゲンドウの間にできた子供であり、DNAでもそれは証明されている。

「そうだな。女の子なのに私みたいならしない男の血が強かったらどうなっていたか」

「それはそれで良いとは思わよ。だって、あなたにも可愛いところがあるのだから」

「知らん」

「……レイがあなたの髭は嫌って言ってたわよ」

ユイはゲンドウをからかいながら、綺麗に剃られたその顎に触れる。

「髭を伸ばすならちゃんと整える。伸ばさないならちゃんと剃る。私は何も言わなかったらジャングルみたいになってたわよ、絶対に」

「レイが自分から勝手に私に頼ずりするのが悪いだろう。それで笑いながらジョリジョリが嫌って……本当に嫌がっているのかわからな

いことを言う」

「でもそんなことしてもらえないのは本当に今だけよ。小学生になったらもうしてこないだろうし、反抗期にでもなったら今度はゴミを見るような目で見られる可能性だってあるんだから」

「……確かに」

無条件で親の愛を受け取ってもらえるのはこの数年の間だけであることに、ゲンドウは唐突に焦燥感を募らせた。

普段はレイの方からスキンシップをしてきているから何とも思わなかったが、ユイの言うとおりだ。

今でさえ一緒にお風呂に入っているが、徐々に違和感を覚え始めて入らなくなり、やがては触れあうことすら避け始めるだろう。

今、父親として何をすれば愛を注げるのかと考えたゲンドウの身体はすでに動いていた。

いつもの就寝するときの動きでベッドに潜り込み、ユイとレイの真横まで近づく。位置としては、左からユイ、レイ、ゲンドウ。

そしてゲンドウは腕を伸ばしてレイの頭の上を通ってユイの背中の後ろまで回す。

男としてはやや頼りない腕だが、それでもユイはそれに身を委ね、ゲンドウに寄り添った。

ふたりに挟まれたレイが一瞬だけ「うにゅっ」と呻くのを聞いて、つい口の端が緩んでしまう。

ゲンドウはこの小さな命があまりに愛おしくてたまらなかった。

見る度に本当に自分の娘かと疑ってしまうほど可愛いらしい容貌だが、しっかりと『私の娘だ』と胸を張って言える。

もし男の子だったらレイではなくシンジと名付けていた。しかしどちらにせよ、ゲンドウは間違いなく等しく愛しただろう。

なぜなら、父にとって子供とは未来そのものなのだから。

真っ直ぐユイとレイを見つめるゲンドウは、優しい声で囁いた。

「お前たちは……私にとってかけがえの無い、何よりも大切な家族だ」
……だから、これからたくさん幸せになろう。

そう、ゲンドウは強く願いながら言葉を続ける。

それを聞いたユイは、幸せに満ち満ちた笑みを浮かべたのだった。

「ところであなた、汗臭いからはやく出てください」
「……わかった」

急 You are (not) faker.
嚴重拘束、監視

ずっと、ずっと空を見上げる。

星々はそれぞれの輝きを放ち、遙か天蓋を美しく彩っている。

……ただそれだけ。

私はその景色を無感動に見上げている。

誰もいない浜辺。リズムカルに押し寄せる静かな赤い波。それがお尻のあたりまで波の足が伸びてきて、じんわりと砂に染み込んで消える。

ずっとその繰り返し。特にやることはなかった。だからここで時間を無為に過ごすことで、暇を潰していた。

ふと、立ち上がろうとした。でも長い間動かしていなかった身体はまるで言うことを聞かず、鉄の鎖で縛り付けられたようにビクともしない。まあそれならそれでいいやとあっさり諦めようとしたが、それでも鉛のように重い身体を無理に起き上がらせた。

なぜそうしようとしたのかは自分でもわからない。なんとなくそうしたいという思いが湧き上がったから。

浜辺を歩く。のんびりと、歩き方を思い出すような足取りでふらふらとどこまでも進む。

目的地も、そもそも目的もない行動。しやりしやりとした砂の感触が足裏から伝わる。打ち上げられたワカメやらで時々面白おかしく遊び、満足したら歩行を再開する。

右手は海。左手には陸地。私はその境目を進んでいる。

いったい、いつから私はこのような状態になっているかは忘れてしまった。ただ、私という生物がこの星に生きることを許されている事実だけははつきり理解している。

果たして誰が、あるいは何が許可したのか。ふと後ろを振り返れば、そこには無限とも言える誰かの足跡があった。しかし間もなく波や風にあおられてそれらは消え、まっさらな浜辺に戻る。

ああ。

ここまでだ。

ここまでだったのだ。

私が今まで進んできた道のりは。そんな啓示に似た直感。

途端、だらりと身体の力が抜け落ちた。受け身すら取れずにその場に崩れ落ちる。

私という自我は辛うじて存在する。だがもう進めない。どれだけ頑張っても、ここまでしか進めないのだ。

何かが足りない。私を助けてくれる、何か——誰かが足りない。でもここには私しかない。

そもそも他人という概念は私が消し去った。人間とは私である。単一個体を指す。

だからまたここで終わる。

やり直した。

ゆつくりと薄れ始める意識。

もう何度目かすらわからない。そうして繰り返して、繰り返して。結局は駄目だったと痛感させられる。

——そうしていると、私ではない誰かの足音が聞こえた。

ザク、ザク、と私よりはつきりと砂浜を踏みしめる音。とても力強い音。やがて私のすぐ横でその音が止まった。

「——私がやるよ」

誰、だ。

眼球を必死に動かしてその正体を視界に入れようとする。

「ゆつくり休んで」

頭を撫でられる。

髪の毛に触れられている感触は無かった。直接頭皮に触れられているような。

ああ、それもそうだ。

とうに私の身体はミイラのように干からびているのだから。もはや骨と皮しかない身体はあつという間に塵になっていく。

重さを失った魂はどこへともなく去るのみ。

私は最後の力を振り絞って、託した。
あとはお願ひ、と。

◆ 私はずでに死に体だったミイラの最期を看取ると、代わりに歩き始めた。

誰にも到達できなかつた世界。

予測不可能、何が待ち構えているのかわからない世界。
未知。

恐怖は無いといえば嘘になる。だって知らないものにひとり立ち向かうなんて、簡単にできることじゃないから。

ならば逃げ出してしまえばいい。何もせず、ここで死ぬまでならだらしていい。誰も私に干渉してこない、静かで穏やかなここで永遠に過ごすのだ。

悲しみや苦しみのない、幸せな世界。

楽しみも喜びもない、不幸せな世界。

果たして私は何を求めているのだろうか……というのは曖昧にしたい自分の心の現れで、たぶんはつきりしているのだと思う。ただ、それを自分自身でそうだと強く肯定してやることができなただけ。

しばらく歩いてしていると突然、黄金の霧が勢いよく眼前に広がった。前方から一気に押し寄せてきて、後方へと突き抜ける。

反射的に両腕を顔の前に持ってきたが、何らかのダメージなどは特になかった。なんだったのだろうか、と首を傾げつつ前を向いた時、私はありえないものを見た。

十数メートルほど先に、ふたりの少女がいたのだ。

「

自分以外の人間の存在に私は久しぶりに感動を覚えながら接近しようとするが、ふたりからただならぬ空気を感じた。

しばし凝視して様子を窺ったが、私の足は無意識に動いていた。

「何やってるの!!」

なんと、片方の少女がもう片方の少女の上に馬乗りになって首を絞めていたのだ。

私は高く砂を蹴り上げながら走り、その勢いそのまま馬乗りしている少女に体当りした。

「う、ぐっ……い！」

急いで首を絞められていた方の少女の意識を確認すると、特に呼吸は乱れておらず、生死に異常はなさそうだった。

ちよつと無表情なのは怖いが。

私の体当たりの直撃を受けた少女は低い呻き声をあげながららふらと立ち上がった。死んだ魚のような目で私を見ると、ゆつくりとこつちに向かつて歩き始める。

「……なんだ、君も生きてるんだ。誰かは知らないけど、ここは私が望んだ世界。だから誰もいらさない」

今にも壊れてしまいそうな虚しさを漂わせた表情。長い黒髪をゆらゆらと揺らす様は不穏さを強調させる。

たぶん、話し合いは通じなさそうだなと思った。どうしようもなく心が廃れている時に、人の言葉なんて素直に受け取れる余裕があるはずもない。

ここでどれだけ少女を諭そうとしても逆に苦しめるだけになるだろう。自分の一方的な思想を張り通したがっているのだから、その衝動をなるべく受け入れてやるしかない。

私は両腕を大きく広げた。そして少女の到達を待つ。

向こうは両腕を前に伸ばし、私に接触した瞬間、躊躇いなく無防備を晒していた私の首を絞め上げ始めた。

「ぐ、ウ……ぎい！」

手抜きなど一切せず、本気で殺しにきている。

呼吸を奪われ、私は必死に少女の手を掴んで離させようともがく。

少女はこちらを見もせず、ずっと俯いている。

「死ね。死ね。死ね。皆死んでしまえ。誰もいなくなつてしまえ。誰も私に優しくしてくれない。私を愛してくれない。そんな人たちはいらないんだから」

ふるふると震えているのは私と彼女、どちらの腕なのだろう。

目が充血し、視界がぼやけ始める。首から上が熱くなって、頭頂か

らゆつくりと冷たくなっていく。

私にこの少女は救えない。

なぜなら少女にとつて、ここが終着点だからだ。これが未来であり、物語の終わり。ハッピーエンドかバッドエンドかというところ、それは私にはわからない。

だってこれは、少女なりに足掻いて手に入れた報酬なのだから。

とはいえ私もここで大人しく殺されるつもりはない。力づくで抵抗すればこの腕を強引に退かし、そして逆に殺すこともできる。

だがそれをしない。

私はぐい、と少女の身体を強く抱き寄せた。

「何をっ!？」

少女の身体は私とだいたい同じ体格だった。違うところといえば、私より鍛えられているところ。

女の子らしい柔らかさを残しつつ、筋肉の主張が感じられた。

そして全く同じところは、命の鼓動に力がないことだ。

首を絞める力が少しだけ弱まった。呼吸をする僅かな余裕を取り戻す。

「……………」

「何で…………何で今さら優しくするの!! 後戻りできないところまでできてしまつて、もう、そんなの欲しくないのに…………ツ!!」

「……………」

「離して! 殺すよ!! 本当に殺すよ!! あ、ははは!! 私、一番たくさんの人を殺した人間なんだから。だから一人くらいどうつてこないんだよ!？」

しかし威圧しようとするほど絞める力が弱くなっていつている。

その事実気づき、少女は苦しそうに嗚咽を漏らし始めた。

私は澄んだ目で同じ高さにある少女の目を見つめる。

「……………」

「何か言つて! 何でもいいから! 怒つてもいい! 呪つてもいい! だから、お願い…………お願いします…………私を見捨てないで…………忘れないでください…………」

ついに手が私の首元から完全に離れる。

ずるりと力なくそのまま崩れ落ち、地面に膝をつく。そしてしまいは啜り泣きを始めた。

隠そうとしない嗚咽。情けなく泣きじゃくる姿はとても胸を締めつけられた。

救いようのない結末。

これは、可能性のひとつ。

どのような道筋を辿ってここに至ったのかは訊かない。

その苦しみを共有されても、私には解決できない。SFチックに過去への逆行をさせられれば結末を変えることができるのかもしれないが、当然私にそんな力はない。

だから救わない。救えない。

「私、何が間違ってたの……？ 頑張ったのに。一生懸命頑張ったのに」

うわ言のように呟く少女に口を開く。

「そんなの、私にはわからないよ。だって、君が何をしてきたかなんて知らないから」

「……」
絶句、というのはこのような顔のことを言うのだろう。

あらゆる感情の抜け落ちた顔でこちらを見上げ、その後、失意の念にぐったりと俯いた。

「私、行くね？」

「……どこへ？」

「私の物語の終わりに。どこなのかはわからないし、どう行くのかもわからない。でも諦めずに足掻いて足掻いて、時々誰かの力も借りて進み続けたら。きつと辿り着けるはずだから」

少女の横を通り抜ける。

ずっと仰向けに倒れる赤い少女の横も通り抜ける。

私の居場所はここではない。もっと違う、別のどこかだ。

砂浜の砂が突風に一粒残さず消し飛ばされ、海は失せ、ソラは墜ちる。

「ああ………そんな『強さ』が私にもあったら、こんな終わりにならなかったのかな」

ゆっくりと顔を持ち上げた過去は、そう悔しそうに儂い笑みを浮かべながら心情を吐露したのだった。



カラカラカラ。

カラカラカラ。

何か軽い音が断続的に鳴っている。

小さな車輪の音……だろうか。

深いまどろみから這い上がるように意識が浮上し、底に沈んだ眠りからゆっくり、ゆっくりと目を覚ます。

生まれて少しの赤子のような気分で瞼を開き、世界を見る。

見るという行為そのものが懐かしすぎるせいか、視界が弱くなっている。

なんだか赤い下敷き越しに見ているような。凝視すると、視界の隅に何かの数値やらが集中している。

「心肺機能は正常です。四肢の麻痺は……まだ不明です。サルベージからしばらく経っているので時間の問題かと……はい、目は開いています」

特に何も考えずに起き上がろうとするが、身体がビクとも動かない。

触れられている感覚から察するに、金属質のバーが手首を巻き込んで腰と、足首にそれぞれ降ろされていて拘束具の役割をしている。

「え……う？ え？」

まるでわからない。

唯一動かせる首から上を左右に振って、周囲の状況を把握しようとした。

カプセル型のとても狭い部屋？ の一室に私はいるようだ。私を拘束するベッドが部屋の大部分を占めていて、四隅には軍人のような暗色の服を着た男の人がそれぞれ立っている。彼らは私に向けて銃口を向け――

「ひっ！」

状況を理解した私は、その場から逃げなるべく身体を暴れさせた。しかし拘束具は過剰なほど頑丈で、びくともしない。

死ぬ？ 殺される？

何か罪を犯したような記憶はない。目が覚めた途端に殺されるなんて理不尽な状況になっている経緯すらわからない。

何もわからない。何もわからないまま、終わってしまうのか。

「暴れないでください！ すみません、一旦銃は下げてください」

明らかに男の声ではない、ソプラノの声。

ハツとして声のした方向を向くと、怯える私を見下ろす女性がいる。

女性と言ってもおそらく二十歳前後で、まだ少女らしさを強く残している。

水色のスカーフを首に巻き、黒いベレー帽を被っている。焦げ茶色のロングヘアで、前髪は左右に分けている。ほんの若干だけ垂れ目になっていて、やんちゃそうな面影がある。

泣きそうになっていた目をそっとハンカチで拭ってもらう。

「大丈夫。大丈夫ですから。この人たちは絶対に撃ちません。だから安心してください。ゆっくり深呼吸して」

言われるがままに、落ち着きを取り戻すべく深呼吸をする。吸い込んだ空気は透き通ったような味がした。

そうして数度繰り返す内に、ようやく落ち着けた……と思う。どうしてこれほど嚴重に拘束されているのかということ以外は。

「一応私の言葉は理解できるようですね」

そんな当たり前すぎる独り言を遠く聞きながら、視線だけを動かして女性に問いかけた。

「あの……ここはどこですか？」

「……言葉も話せるようです。意識に問題はなさそうです」

女性はどうか私の状況の確認と、それを通信機で誰かに報告しているようだった。

狭い一室は高速で移動を続けている。おそらくレール上を電車の

ように走っている……のだろうか。

いや、そんなことよりも。

今の状況になっっている経緯を――

「えっと……何があつたんだっただけ……」

「……記憶の継続性は怪しいです。後ほど本人から直接ヒアリングを行つたほうがいいかもしれません」

通信機を耳から離すと、女性は私の顔の真上に位置するパネルディスプレイを操作して、内側を鏡のようにしてみせた。

そこに映るのは、ひとりの少女の顔。

その首元には見慣れないチョーカーが巻き付けられていた。

真つ黒で、正面には二本の赤く太い線が横に入っている。ほんの少しだけ盛り上がっていて、それがただの飾りではないことがわかる。

皮膚に触れている感覚としては、布や皮などのような柔らかさはないが、柔軟性を持つ硬さは有している。

「これが誰か、わかりますか？」

数秒ほどディスプレイに映る顔をまじまじと見つめた私は、ぽつりと言った。

「えっと……これが私……ですか？」

◆
どこかに到着したようで、ストレッチャーと一緒に運び出された私はされるがまま連れて行かれる。

銃口を向けられることはなくなつたが、まるで犯罪者を護送する人のように私から目を離すことは決してない。

少し複雑な気分だ。

あれこれと訊きたいことが山ほどあるのだが、そのような空気ではないことは肌感でわかる。

私が運び込まれたのはドーム状の空間だった。首の可動範囲が制限されているためすべてを見渡すことはできないが、かなりの広さがある。

壁には蜘蛛の目のようにシンメトリーに配置された丸い窓があり、外はどうやら赤いようだ。少なくとも夕焼けの赤ではなさそう。では何かとなると私にはわからない。

そして何より驚くべきは、見たことのないような機械類で満たされていることだ。ドームの天井から下に伸びる太い背骨のような鉄骨から足を伸ばすように複数のアームが伸び、その先端にシートが備わり、人が座っている。

とりあえずここは……私が寝覚めたここは、一般的な場所ではないことがわかった。

矢継ぎ早にやってくる報告を聞きながら、手元の電子デバイスを素早く操作してスタッフが作業をしている。

拘束台の移動を終えると、ベレー帽の女性は全体を見渡せる高い位置で腕を組んで立っている女性に話しかけた。

「検体、BM-03、拘引しました」

「了解。拘束を解いて」

抑揚のない返事と指示に従い、女性は私を拘束していた器具を解除した。ガシャン、と音を立ててバーが上がり、身体が自由になった。

「下がっていいわ」

起き上がっていいのだろうか。数秒ほどの悩んだが、大丈夫だろうと判断して徐ろに身体を起こそうとした。

しかしその瞬間、明らかな違和感に気づいた。

「え、あ、あれ……脚、が……？」

動かない。

というより、感覚がない。

それになんとか腕も動きが鈍い。特に指先は細かい動きができな

い。
なんだこれは。拘束されていたから身体が少し痺れているだけなのか？ それにしては限定的すぎるし、症状に違いがあるのがおかしい。

となると、私には何か病気があるのだろうか……？

何度か脚に触れて擦ってみるが、まるで何も感じられない。怖いくらいに。まるで存在が死んでいるかのようだ。

だが上半身を起こすことはそこまで難しくない。掌を台について、ゆつくりと起き上がらせた。

先ほど指示を出した女性が地位の高い人なのだろう。赤い軍服を羽織る立ち姿から漂う雰囲気は、とても強そうだった。ここからだとは斜め後ろからしか見えないのが残念だ。

「……？」

そして何やら私に視線が向けられていることに気づく。

ふいと視線を向けると、スタッフたちが私を見ているようだった。確かに部外者である私が来たのだから奇異の目で見られるのは仕方ないのかもしれないが、それだけではないような気がした。

なんとというか……憐れみや憎しみといった、あまり良くない感情の色味が混じっているよう。

比較的若そうなピンク色の髪色の女性はあからさまに私を睨みつけている。

私……あの人にすぐく迷惑なことをしてしまったのだろうか。

……圧倒的アウェイ空間。

それがこの場所の印象だ。

「碇……カノンちゃんていいのよね」

女性はすぐ横に立っている短髪の金髪女性に確認するように尋ねた。

「そうね。物理的情報ではコード第三の少女と完全に一致。生後の歯の治療跡など身体組織は、ニアサー時を100%再現しているわ」

「じゃあ身体的障害は？ サルベージ時にすべて修復されたはずよね」

「ええ。その通りよ。でも脳がまだそれを認識できていない可能性が高いわ。根気強くリハビリをすれば、自然と日常生活を送れるようになるでしょう」

「そう……良かったわ」

そこでちらりと僅かにこちらに顔を向けた。

女性はややごついサングラスをかけており、かつ無表情のせいで表情はまるで読めなかった。

「で、記憶喪失の方は？」

「それは不明ね。初号機覚醒時に確認された意識の混在が影響しているかも。記憶が戻るかどうかは今のところはなんとも」

「了解」

「なお、深層シンクロテストの結果は分析中」

「頸部へのDSSセンサーは？」

女性は今度こそ身体の向きを少しだけだがこちらに向けた。

サングラスの奥の瞳に私がどう映っているのかはわからない。

「すでに装着済みよ、葛城艦長」

あまり聞き慣れない名称を理解するのに、数秒の時間を要した。

艦長と呼ばれているということとは、ここは船内なのか。

そうしてぼんやりしている間に装着されているセンサーから電子音が鳴る。

「ん？ んん？」

その間にも金髪の女性がコントローラーを操作してアクティブに切り替える。

「作動正常。パスコードは艦長専用」

そしてコントローラーは艦長に手渡される。

「了解」

ようやく一連の会話が終わったようだ。

用があつて私がここに連れてこられたのだろうが、向こうから私に声をかけてくる様子はない。疎外感を覚えた私は、おずおずと口を開いた。

「あの……？」

一瞬、水を打ったように場が静まり返る。

断続的に飛んでくる通信連絡が場を再開させ、スタッフたちが仕事を再開させる。

私が気づかなかっただけで、タイミングが悪かったのだろうか。

「……碇カノンちゃん」

艦長は低い声で呼びかけてきた。

その名前がすぐに私のものであると理解することができず、反応が遅れてしまった。

「……あ、はい。ごめんなさい。それが私の名前なんですよね」

「ええ。少尉から話は聞いています。あなたの身柄は我々が保護します。以後、スタッフの指示には必ず従うように」

「わかり……ました?」

随分と一方的な命令だが、ここで変に反発する意味はなさそうなので大人しく従うことにする。

「面会終了。彼女を隔離室へ」

「えっ」

あまりに呆気ない、面会とすら言えるかどうかかわからないコミュニケーションを終了させられてしまった。

普通ならここから自己紹介とか、ここがどこだとか、私がどうして記憶喪失になっているかだとか、そしてこれからどうなるかだとかの説明がされるべきではないか。

艦長という一番偉い地位の人だから忙しいかもしれないが、これはあまりに不親切ではないだろうか。

だから、私が直近で思った疑問をひとつだけぶつけてみることにした。

「艦長さん、私のこの首のつてなんですか? 外せないんですけど……?」

頑張ってチョーカーの端に指を潜らせて引っ張るも、まるで取れない。ピンなども触った感じだどこにもないし、完全に外す手段が見当たらない。

ファッションとしても、黒いチョーカーというのはあまり受け入れ

難い。

「それを外すには私の許可が必要です。そして私が許可を出すことは決してありません」

「……………」

よくわからないまま首を傾げる。

艦長の持つコントローラーの操作に連動して電子音が鳴ったから、このチョーカーには何らかの機能があるのだろう。

説明が足りないのではと思って食い下がろうとしたが、先程のベレー帽の女性にそこはかとなく横に入られる。

「さ、行きましよう碇さん。実は今警戒態勢中なんです。皆さんの邪魔をしないようにしましょう」

再び台座に寝転がるように促され、私は黙ってそれに従う。

すると連れてこられたときと同じように拘束用の金属バーが降ろされてまた全身を拘束されてしまう。

「どうしてこんなことするんですか？ 私、別に暴れたりしないですけど……………」

「念の為ですよ」

「……………」

念の為だとしてもここまで嚴重にする必要はないと思うのだが、果たして真意はどこにあるのか。銃を持った男の兵士たちも、銃口をこちらに向けることはなくなったが、一瞬たりとも目を離さないと言わりの凄まじい眼力で私を見下ろしている。

不気味な処遇だが、なんとなく私が一般的な扱いをされていないことは理解できた。

ストレッチャーに乗せられた私はそのままそくさとその場から連れ去られる。比較的廊下の広さは確保されているため、通行に支障はなさそうだ。ただ、すれ違うスタッフの人に見られるのはなんだか恥ずかしかった。

ここは何らかの施設であることは予想していたが、最新の設備を備えているのは目的地に到着するまでによく理解できた。隅々まで清潔感が行き届いており、私の知らない機械などが目まぐるしく視界に

入ってきた。

やって来たのは、鉄格子で区切られた独房だ。

出入りをする扉に南京錠のようなものはなく、代わりにカードリーダーがあった。

ベレー帽の女性は服の内に垂らしていたIDカードを出してそれにかざした。するとピ、と電子音の後にガシャン、と扉の開く音が鳴った。

「ストレッツチャーごと中には入れられないので、一旦起こしますね」
そう言うのと拘束具が再び外され、私はもう一度自由になった。

頑張つて先ほどと同じように上半身は起こしたが、そこまでだ。下半身は一切の脳の伝令を受け付けず、石像のように動かない。

「……すみません、脚が動かなくて」

申し訳無さそうに謝ると、女性は「大丈夫ですよ」と小さく笑いながら答えた。

「私が運びますので、くれぐれも暴れないようにしてくださいね」
「え？」

聞き間違いかと思っている間にも私の背中と膝裏に腕を滑り込まされ、ひよいと軽々と持ち上げられてしまった。いわゆるお姫様抱っこというものをされ、私は赤面しながら口だけで抵抗した。

「お、重いですよ……！」

「これくらい大丈夫です。これでも軍人なので、この重さなら全然抱きかかえられますから」

「降ろしてください……恥ずかしい、ですよ……」

「ダメです。それとも男の人に代わってもらいますか？」

言われてチラリと視線をずらして銃を持つ男の人たちに向ける。

ちよつと雰囲気怖いから、この人にしてもらったほうがまだマシなのは否定できない。

独房の中に入り、そこにあるベッドに寝かしつけられる。一応枕と掛ふとんはしっかりあるようで、安心して眠ることはできそうだ。女性には掛ふとんまで律儀に掛けようとしてきたが流石にそこまでは丁重にお断りした。

「移動用の車椅子は今日中に配布しますね。さっきのストレッチャー同様、拘束具はつけさせていただきますが。その両脚の麻痺は完治が可能なので、これから定期的にリハビリをしていきます。手も同様です」

このよくわからない状態の脚と手が治ると聞いて、私は安堵のため息を吐いた。

「よかった……リハビリよろしくお願いします」

「……………ええ。それでは私たちはこれで。しばらく警戒態勢が続くので、絶対に安静にしてくださいね」

「はい、わかりました」

女性はうんと頷くと、私を置いて独房から出た。同時にロックのかかる音が鳴った。

これでもう、私がここから出ることは絶対にできない。誰かの許可がない限り何もできない。

誰かに自由を征服されるというのがあまりに非現実的すぎて、実感がわかない。こういうのを危機感がない、というのだろうか、目覚めてからの現在までを振り返ると仕方のないことだろう。

やがて独房の前から誰もいなくなった。

とても静かで、微かに聞こえる空調の音と、私自身の息遣いしか聞こえない。

途端に、もし誰も来なかったらどうしようという恐怖に襲われた。独房の広さは非常に狭く、今私が寝転がっているベッドがあとひとつあればそれだけでいっぱいになるほどだ。あとは流し台と、ベッド脇に設置されている簡易トイレのみ。

閉塞感に苦しめられるフェーズには陥っていないが、長時間放置されるとうなるかわからない。

こちらから外部に連絡する手段は何もない。

「……………怖いよ」

仰向けで、白い天井を見上げたままポツリと呟く。当然誰も反応しない。寂しくてちよつと泣きそうだ。でも小学生ではないから我慢する……そういえば私は年齢的に中学生なのだろうか？ それとも

高校生？

本当に何もわからない状態。ここがどこかわからないし、そもそも私が誰なのかもわからない。ここに人たちからは敵視されているような節があるし、何がどうなっていて、これから何をすればいいのかわからない。

とにかく安心できる何か欲しかった。

枕の上にある掛ふとんに手を伸ばし、温もりを求める。しだいに私の体温に温められたそれから、僅かながら安心感を得られた。

しばしもぞもぞと身じろぎをして一言。

「――寝にくいな」

寝返りのできない身体に、小さく悪態をついた。

疎外感

小学生の頃、車に轢かれたことがある。

クラスメイトにお母さんを馬鹿にされたことが悔しくて、怒って、下駄箱で喧嘩をしたあと飛び出すように校門を出たところを――。

打ちどころが悪かった――なんてことはなかった。

非常に幸運なことに、数日ほど入院しただけですぐに日常生活に復帰できるほどの軽症だった。医師たちに身体が鋼でできているのではないかと疑われたくらい。

退院した私を出迎えた伯父夫婦は、目を逸らしながらおかえりと言った。

◆ 妙に身体が硬いような印象。

そういえば、ここは知らない寢床だったか。

パチクリと目を覚まし、ごしごしと目を擦ることでぼやけていた視界を普段通りに戻す。そしておそらく普段通りでないのは、両脚。自分の意志で動かすことができないため、わざわざ手で掴んで動かさなければならぬ。

喉が渴いたし、お腹も空いた。

きゆるる、と控えめなお腹の虫が鳴り、私はお腹をさすりながら狭い部屋をキョロキョロと見回した。

相変わらずの独房のような狭い部屋。明かりは十分行き届いているから暗い印象は持たないものの、非情に簡素という印象は持つ。

ドアはロックされているから外に出られないし、こちらから連絡をする手段もない。特にやることもないため再び目を閉じる。

恐ろしいほどの静寂。自身の微かな呼吸音のみが聞こえる。

これからどうなるか。漠然と考えてみる。

原因は不明だが私はどうやら記憶喪失らしい。だから碇カノンという名前を忘れていたようだ。この場合は警察とかに行つてなんとかしてもらわないといけないのだろうか。だがこの施設での私に対する扱いは、丁重ながらもどこか刺々しい。敵視すらされている節が

ある。容易にスタッフたちと友好的になれるかどうか怪しい。変に刺激しないよう、大人しく従順な子でいるべきだろうか。

……………不安だ。

そして二度寝に突入する。



次に目を覚ますと、なぜかさつきいた狭い部屋ではなく、トレーニングルームのような空間へ移動させられていた。あの例の台に拘束された状態で。

すぐ隣で誰かが私を見下ろしている。

「あ、碓さん。起きたんですね」

私がここに来てから一番コミニケーションをとっている女性だ。華やかな笑みをこちらに向け、慣れた手付きで拘束具を解いてくれた。

女性の補助を借りながらゆっくりと上半身を起き上がらせる。

やはりと言うべきか、改めて見渡してもここがトレーニングルームであることは間違いなさそうだ。よくあるレッグプレスやシールドアップレスなど、あまり筋トレに明るくないがひと通り器具は揃っているように見える。部屋の広さは大きめの道場くらい。

「いつせーのーで移りますよー」

すぐ横に運んでてきくれた車椅子に、一緒に掛け声をかけて乗り移る。腕だけの力ではとても難しいため、腰と膝裏を支えてもらいながらようやく乗り移ることに成功する。

近いうちに自分でできるようになってもらいますからね、と言われ、少し恥ずかしげにはいと頷く。

「先日お伝えした通り、これから定期的に碓さんのリハビリを始めます。今日は脚をほぐすマッサージをメインにしますねー」

「あ、はい……………よろしくお願いします」

スリッパを脱いで、裸足を差し出す。

病衣もふくらはぎくらいまで上げて、マッサージしやすいようにしておく。

そつと割れ物を扱うかのように手が私の右の太腿に触れる。

「何か感じますか？」

「特に……何も感じないですね……」

「なるほど。碓さんの身体はサルベージされたことよってかつての身体的障害が回復しています。ただ、身体は大丈夫でも碓さん自身が慣れていないので今のような状態になっています。なので日頃からたくさん刺激してあげることによって段々感覚を取り戻していくはずですよ」

「は、はあ……ちなみにそのサルベージって、何ですか？」

もももみとりズミカルに私の太腿をほぐす女性の穏やかな顔を見下ろす。

女性は薄っすらと目を瞑り、どこか遠くに意識を向けるように口を開く。

「サルベージっていうのは、エヴァに取り込まれた人を現実世界に引き戻す作業です。一般的には沈没船とかの引き上げ作業を指す言葉なんですけど」

「取り込まれたって……私、そのエヴァっていうものに何かされたんですか？」

「された……というより、した……ちやうかな」

「えっと……？」

「本当はこのまま何も思い出せないで、ここですっと管理されるほうが皆も碓さんも幸せやねんけどな」

「？」
明らかに不穏な発言ではあったが、その声には何とも言えぬ辛さが滲んでいるように感じ、私は反射的に発しようとした言葉を寸前で飲み込んだ。

このトレーニングルームは比較的広いが、今は誰も利用していないようだ。そこに私たち二人だけがいるとなるとなんだか沈黙が辛くなってしまうが、だからといって私から何かを話しかけるような積極性はなかった。と終わろうとしたが、聞きたいことが山のようにあることを思い出した。

「あの……」

「ん？」

手はマッサージを続けながらこちらを見上げる。

「その、結局のところ私って今どういう状態なんですか？　ここがどこなのかもわからないですし、私がどうして記憶喪失になっているかもわからないんです。それに……ちよつと言い難かったんですけど、皆の視線があまり……その……」

「……………」

女性は僅かに視線を反らした。

「あの？」

「碓さんの思っている通り、碓さんのことをよく思っていない人はたくさん……いえ、ほぼ全員です。ですがそんなことになっている理由を私からは話せません。近々艦長から説明があるはずなので、それまで待っていてください」

サングラスをかけ、冷ややかに私を見下ろしたあの人の姿が脳裏をよぎる。

第一印象は……正直なところあまり好ましくはない。

「そんなに話せないことなんですか？」

「それは……そんなことはない、んですけど、そう簡単なことじゃないんです」

これ以上食い下がると不快感を抱かれるだけになるだろうから、この話題についてはもう触れないでおくことにした。

「お姉さんも私のことをそう思ってるんですか？　仕事だから仕方なく私の相手をしてきているだけで」

女性は数秒ほど無言でマッサージを続ける。

少し、指に力が入ったように見えた。

「まあ、ないと言うと嘘になりますよ。でもだからといって責める資格は私達にはないんです。それどころか本当は感謝しないといけない。だから、その板挟みにあってどう対応すればいいかまだはつきりできない……というのが私の気持ちです」

「感謝、ですか」

過去の私がしたであろう悪行を、今の私が記憶喪失だからという理

由で容易に裁けない。だから誰も私を直接非難することができない。ではたった今耳にした感謝とは、いったい。

悪人に見出す感謝とは。

これも同様に安易に深堀りしてはいけなさそうだったから、口を嚙むことにした。

マッサージは続く。

足の甲と裏をググ、と指の腹で圧迫し、脹脛を入念に揉み、そのままゆっくりと足の付根に向けて進んでいく。

そして丁度付根の少し手前の部分で。

「あ、ん」

ほんの微かだが、何か気持ちのいいものを感じた……様な気がした。

私の声に反応した女性はさっと顔を上げ、驚きの混じった表情を見せた。

「今……感じました……？」

ぱちりと目が合う。

そつと視線を外し、私は自分の脹脛のあたりに手を伸ばして触れてみた。そのままスス、と流れるように太ももへと移る。

……確かに、感じてるとは明確に断言はできないが、微かにピリピリとした感覚が肌の表面を傳う感覚を得た様な気がする。

すかさず自分の手で同じように数度ほど試したあと、口を開いた。

「たぶん……はい。ほんのちよつぴりではあるんですけど、たぶん感じることができました」

ものすごい感動、というものは残念ながらなかった。私の脚は正常であると認識しており、それが今この瞬間まで続いていたのだから、当然の感覚として受け取っただけなのだ。

「良かったですね碓さん！ この調子でリハビリを続けましょうね。このマッサージの方法なども教えます。そうしたら近いうちに以前のように歩けるようになりますから」

「そうですね。お姉さんのおかげです」

「お姉さんだなんてそんなそんな。碓さんにはやく元気になってほ

しいだけですから」

あ、この人は好きになれそうだな、と思ったのはこの瞬間だった。屈託のない笑顔を向けられるのは目覚めてから初めてのことだったから、少しチョロクくなっているのかもしれない。という自覚もある。

そしてふと、背中に誰かの視線を感じた。

ゆっくりと振り向くと、トレーニングルームの出入り口で壁に寄りかかったまま腕を組み、こちらを見ている少女がいた。

ブロンドの長髪。目はキリツとしていて蒼い目。モデルにも負けないほどのスレンダーな全身を真っ赤なツルツルした質感のスーツで包んでいる。

見たことのないデザインの服が気になっていると、少女は機嫌を悪くしたのか、私にも聞こえるように「チツ！」とあからさまな舌打ちをし、踵を返して消えた。

「……………」

私、なにか悪いことをしたのだろうか。

したといえば、人の服装をジロジロ見てしまったことだろうか。何かのコスプレにしか思えなかったから気になるのは仕方ない。

「大丈夫ですよ碓さん。たぶんあれ怒ってないですから」

「え、怒ってないんですか？ 間違いなく怒ってますよあれ。あとでちゃんと謝りに行ったほうがいいんじゃない？」

「そんなことしたら怒られますよ、きつと」

「ええ……………」

地雷の位置がよくわからないから、ひとまず言う通りにしておいたほうがよさそうだ。

「脚の改善は見受けられましたが、手や腕の方はどうですか？ 以前は軽度の麻痺があつたと診断書にあるのですが」

視線が腕に移り、私は自然と目の前で腕を動かしてみせた。

ぐるりと一周させ、手のひらを開いたり閉じたりをし、そして指を曲げたりもする。特に脚と同じ症状はない。軽度の麻痺なるものも違和感はない。

私の様子を職人顔でしばらく眺めていた女性は、真面目な顔で大きく頷くと今度は私の腕を掴んだ。

脇の部分から手首を超えて指先まで触診していく。視線で問われ、私は「問題ないですね」と伝える。

元より軽度の障害であったことが幸いしたのか、腕に関しては完治と言っていていいレベルと判断をしてもらえた。

「今日はこのあたりにしますか？ 治ってきていることは確認できましたので、明日から本格的にリハビリを始めようと思うんですけど」脳内で日程について考えているのだろうか、女性は軽く天井を見上げながら私にも聞こえない独り言で指で何かを数えている。

「私って結局のところ何したらいいのかわからないですし……だからといって何もしないのはちよつと暇なので、お姉さんさえ良ければ、もう少し付き合ってほしいです」

「了解つ。私も時間は問題ないので、それじゃあ無理のない範囲で続けましょうか」

陽気に答えた女性はすくつと立ち上がった、その瞬間。

私たちの和やかな雰囲気を砕くようなけたましい警報が、トレーニングのスピーカーから突然流れ始めた。

明らかに聞いたことのない警報だが、何やら緊急事態が発生したのだとは瞬時に理解できた。

咄嗟に女性に状況を聞こうとして顔を持ち上げると、混乱しきっている私とは対照的に、気を引き締めた顔をしていた。

『ネーメジスシリーズの接近を確認。全艦、第二種戦闘配置！ 補給作業を中断し、乗員移乗を最優先！』

警報が止むと同時に、男の人の声が流れる。

言葉を聞き取ることに問題はなかったが、そのほぼすべてを理解することはできなかった。

ただ、戦闘、という言葉だけは身体全体が質量のある重さとしてのしかかってきたのをはつきりと感じた。

すう、と体温が上がり、目が見開かれる。まるで試合前にアスリートがする武者震いのそれだ。

無意識的にそうはなつたが、何をすればいいのかわからない私は助けを求め目女性を見た。すると、「大丈夫。大丈夫ですから」とぽんと頭を撫でられた。

「安心してください。私が碓さんを必ず守りますので。……といって私が直接何かをすることはないので、大人しくしているだけですけどね」

てへ、と可愛らしく舌を出したのは、この人なりに私を落ち着かせようとしてくれた形なのだろう。

さつと変わった緊迫した面持ちで私の乗る車椅子のグリップを掴み、トレーニングルームを後にする。

この施設の全体像は何も把握できていないが、結構広いことが予想できる。通路は細く長く続いているし、入り組んでもいる。部屋も、小部屋と、艦長と会った場所のような、ある程度の人数が集まって何かしらの作業をする大部屋を複数見かけている。

私の知る限り日常ではお目にかかれないような最先端技術を利用してあるっぽい、それ以上の推測は今ではできない。

通路を行き交うスタッフたちは、見るからに雰囲気ガピリピリしている。時折私を見る人もいるが、特に無反応でそのまま小走りに去っていく。

戦闘、と警報では伝えられていたが、スタッフたちの体格を見る限りとても屈強とは言えない人たちが大多数を占めている。

ではこれから何が起こるのか――。

「着きましたー！　ここで待機してやり過ぎしましたよ」

私たちが駆け込んだのは、先程のトレーニングルームよりふたまわりほど小さな、学校によくある保健室くらいの大きさの部屋だった。

とはいっても本格的な医療機器が備わっており、どちらかという医療室と捉えるほうが正しそうだ。

「戦闘とはいえっても私たちにできることはありません。戦闘員じゃないので。でもここにいたら何かあったときにすぐに治療できます」

医療機器の点検を始める女性を尻目に私は頷く。

「なるほどです」

「たぶんよくあるやつなので、これまで通り、当該区域からの離脱になるでしょうね」

「離脱？ 離脱でしたらこんなところでのんびりしてないで、はやく外に行ったほうがいいんじゃないですか？」

「あー。そういう心配は大丈夫です。この施設そのものが移動をするので！」

「ん……う？ ここって建物じゃないんですか？」

特に深い理由も根拠もない憶測はどうやら違っていたようだ。

何らかの軍のような組織であることは間違いないから……という流れだったのだが。となるとこの施設一帯が巨大な何かとなると、無難なのは巨大船だろう。そして戦闘などと言う不穏なことも放送されているので、巨大戦艦と言ったほうが正しいか。

……いったい何と戦うのだろう。

「すみません、そういえば戦闘ってというのは何と戦うんですか？ 私の知らない間に日本が外国と戦争をしているとか……ですか？」

女性は点検をする手をピタリと止めた。

ゆっくりとこちらを振り向き、私に鳩が豆てっぽうを食らったような顔を見せた。

数秒ほどの硬直後、再起動した女性は諭すように口を開く。

「いえ、そういうんじゃないんです。国とかそんなんじゃないくて、人類の存亡をかけた戦いなんですよこれ。それで今襲ってきているのはきつとネ——」

少し関西っぽい訛りのある返事を最後まで聞き取ることにはかなわなかった。

突如。

それほど強くはないものの、床に押し付けられる重力を感じた。車椅子の手すりを握り、正体不明の重力に耐える。

これが何を意味するのか私には分からなかった。敵から攻撃を受けたのかと思っただが、そうだとしたら強い衝撃が襲ってくるはずだ。それが無いということは、別の何かが起こっている。

女性はあからさまに度肝を抜かれた様子で、高い声で叫んだ。

「え、飛ぶん?! まさかヴンダーで倒すん?!」

少しすると身体にかかる力から解放され、ふと軽くなつて一瞬だけ浮き上がる感覚になった。

その後緩やかにそれは治まり、平常に戻った。

「これって大丈夫なんですか……?!」

私は焦りのままに尋ねた。

「大丈夫……だとは思いますが。葛城艦長が勝算もなしにヴンダーを発進させないでしようし」

「ヴンダーってなんですか?!」

「この艦のことです。ヴンダーは空を飛べるんですよ!」

それって宇宙○艦ヤ○トですよね?! などというツツコミを入れたい気持ちをぐつと堪え、ひとまずは飲み込むことにする。

そんな馬鹿なことを言える状況ではない……はずだ。

しばらく息を潜めている間にも、数度ほど大きな衝撃が部屋全体を揺るがした。

果たしてどんな戦いが繰り広げられているのかは何も分からないが、ただ非常に激しいものであることはわかる。

そうして私の恐怖心を薄れさせようと女性がヴンダー（どうやら空を飛ぶ戦艦らしい）の簡単な説明をしている内に、

『状況終了。担当員はこれよりヴンダーの損傷箇所の修復に移れ』

との艦内アナウンスが入った。



「——さて。今まで放置気味で悪かったわね。これまでのあなたについてと、これからのあなたの処遇についてに説明をします」

この面会室を隔てるガラス板の向こうで、パイプ椅子に座る短髪の金髪女性からそう告げられた。

前日の出来事から一夜明けて呼び出されたわけだが、非常にフラットな口調で淡々と話が始まる。

金髪女性から少し後ろに離れた位置で、艦長がキャップを目深に被り、腕組みをしながら壁にもたれかかっている。

昨日からお世話になつている女性は私の横に立っている。

場の空気があまり良くないのは直感で悟った。

「まずこれは確認なのだけれど。あなたは本当に記憶喪失なのね？」

以前の記憶は何ひとつ覚えていないのかしら」

「あ、はい……すみません。私がどこで何をしていたのかは……何も覚えてないです」

「そう。では私たちのことも覚えていない？」

「はい……ごめんなさい」

「謝らなくていいわ。仕方ないもの」

ハキハキと会話を進める女性は次に手元のデバイスを操作した。その瞬間、ただのガラス板だと思っていた壁の一部が通常の液晶パネルのように暗転し、複数のウィンドウを表示させた。どれも動画や写真がメインで、どうやら過去の私が登場しているようだ。

それは、学校で授業を受けている風景や、友達と何気ない会話をしている場面、さらに下校しているところなどといった日常を写したものであった。

私の知らない私……。

何とも言えぬ感覚だ。私と同じ背丈の人物が私の容姿を真似して演じていると言われたほうが納得できる。

そして次は先程の日常とはガラリと変わり、普通に生きていればまです身に着けないようなぴつちりスーツを纏う私が映された。

誰かから説明を受けて威勢よく返事をする、小走りで金属の床を走っていく。その後を追うようにカメラも追う。映像の中の私が立ち止まったのは、巨大な鬼の顔の前だった。首から下は赤い液体に沈んでいて、動く気配はない。

「え……何これ」

巨大……ロボット。

場面が変わり、街の夜。

点々と光るビルは実は普通のビルではなくて、超巨大な重火器が内蔵されていたり、ミサイルなどを発射したりする特殊な建造物だった。

地面の一部が口を開け、身体をロックされた状態で地下からロボッ

トが搬送された。

夜闇に鋭い眼光を迸らせ、ロックが解除されると同時にだらりと前のめりになり、眼前にいる巨大な敵に向かい始める。

「これがあなたの出撃の記録、その一部よ」

「……え？　これ……え？　ロボット……戦ってるのって、もしかして私がこれに乗ってるのですか？」

「そうよ」

「――」

溜めのない肯定に言葉を失う。

この人たちは私を騙そうとしているのではないか？　そんな疑いを抱いてしまうほど、見せられたものは受け入れがたいものだった。

巨大ロボットが巨大な敵と戦う？　私がぴっちりスーツを着て、そのロボットに乗って戦っていた？

アニメやマンガの世界の話ではないのか？

突如として私の中でこの人たちに対する警戒度が跳ね上がった。ただでさえ何も知らない今の私は、非常に嘘の情報で塗り込ませやすい。仮に事実だとしても、この人たちが一般人ではないことは間違いない。

「何か思い出したかしら？」

驚きはしたものの、そこから記憶が刺激されるようなことは起こらない。

首を横に振ると、女性はこれといった反応はせずに、さらに映像や画像を見せながら説明を続けた。私がどんな女の子で、どんなことをしていたのか。ネルフという組織に所属していて、そこでエヴァという巨大な人造人間のパイロットとして、人類を滅ぼそうとする使徒と戦っていること。

私の脚が不自由なのも戦闘による後遺症（実は他にもあつたらしい）で、さらにはパイロットであることが世間にバラされて人間不信に陥ったこと。しかしそれでも戦うことを選び、その結果、私がニアサイドインパクトなるものを起こした。

やはりあまりにも現実離れた事実だったが、説明が非常に上手

だったのでおおよその理解はできた。

「現在、初号機は本艦の主機として使用中。ゆえにパイロットは不要です」

ワニのような頭をしたヴンダーの機体がパネルにワイヤーフレーム表示され、分解されていく形で腹部がアップされる。

「あなたの深層シンクロテストの結果が出ました。シンクロ率は0.00%。仮にあなたがエヴァに搭乗しても起動しません」

いくつかの色を帯びたラインが調和を取れずにゆっくりと波打っている。そして0.00%という数値が確かに表示されている。

「良かったですね、碓さん」

すぐ横の女性が安堵とともにそう言うが、いまいち実感がわからない。

「は、はあ……」

シンクロ率というものがゼロであることに何の利点があるのかわからないが、とりあえず悪くはない意味だろうから素直に受け取っておくことにする。

「……とはいえ、先に突如12秒間も覚醒状態と化した事実は看過できません。ゆえにあなたにはDSSチョーカーを装着させてあります」

金髪女性が変わらぬ声色で説明を続ける。

次にパネルに表示されたのは、どうやら私の首に装着されているらしいチョーカーのようだ。チョーカーの中身は、正方形に囲まれた奇怪な無数の記号たちが列を為して循環している。

「これは……なんですか？」

「私たちへの保険。覚醒回避のための物理的安全装置。私たちの不信と、あなたへの罰の象徴です」

「罰……？」

突然危険な言葉が並べられ、私は黒いチョーカーに触れながら言葉を反駁した。

「エヴァ搭乗時、自己の感情に呑み込まれ、覚醒リスクを抑えられない事態に達した場合、あなたの一命をもってくい止めるということだ

す」

「それって……私が死ぬってことですか？」

「否定はしません」

「……………」

もう一度チョーカーに触れる。

初めに触れたときは変なの、なんて思っていたが、とんでもない危険物だったのか。

これはただのチョーカーなどではない。私を縛りつける首輪だ。

肌に張り付いているような見た目だが、単なる質量ではない、もつと別の精神的な重みを感じた。

わからない。わからない。

いきなり不信とか罰とか言われてもわからない。だって、そのニアサイドインパクトというものもろくに知らないのだから。私が起こしたらしいが、『今の私』にその記憶はない。だから謂われのない冤罪だ。

——なんてことを言つて通じるような雰囲気ではない。

すでに三人は私の出方を窺うような素振りを見せている。ここで変に暴れたらそれこそ本末転倒だ。

でも、それでも。

……圧倒的情報量と、突きつけられた残酷な事実を受け入れられるほど私は強くない。

「あ、え……、っ」

いつの間にか病衣の袖を濡らしていることに気が付き、隠すように急いで目元を拭った。

「ご、ごめんなさい。ちよつと……その……。う」

「……………」

死というのは、こう、老衰などで穏やかに諭されるものではないのか。あるいは突然死。

なのにこれは何だ。私の命がこの人たちに握られている現実は。

落ち着こうとすればするほど感情が大きく揺れ、不安定になってしまふ。

私は勢いのままに、なおもこちらを見向きもせず微動だにしない艦長に話しかけた。

「艦長さん、これって現実なんですか？ 私、わからないです。なんにもわからないです。このチョーカーを外してください……。お願いします……。なんでもしますから……」

しかし艦長は口だけを動かした。

「先日も言ったように、私がそれを外す許可を出すことは決してありません」

「……………私はこれから、何をすればいいんですか？ 何か皆さんのお手伝いをすることになるんですか？」

「サルベージによる身体的障害の改善は確認できたので、引き続きリハビリに励みながら記憶も思い出していきなさい。それ以外に関しては、あなたはもう何もしないでもいい」

「何も？」

「ええ、何も。基本的には彼女の指示に従いなさい。——少尉、この子に官姓名を」

「はいー」

少尉と呼ばれた女性は畏まった返事をする、脇に挟んでいたバインダーを前に移動させ、ペコリとお辞儀をした。

「えっと、今更ですが碓さんの管理担当医官、鈴原サクラ少尉です。よろしくです」

「は、はい」

「さっきパネルに映ってた、碓さんの友達の子です」

ほら、このジャージの格好をしたいかにもって奴がお兄ちゃんです、なんて解説を付け加える。

確かにパネルに映っているジャージ姿の男の子と私はそれなりに仲良さそうに見える。だがそれよりも非常に気になった点があった。

「妹？ 姉じゃなくて……ですか？」

どう見たって鈴原サクラという女性の外見は中学生ではない。確かに童顔ではあるものの、それを考慮したとしても二十歳は迎えていておかしくない。対してジャージの男の子は中学生。

矛盾が生じている。明らかに年齢差がある。

「はい、妹です。へへへ」

とますます理解できない私の顔を見て照れくさそうに鼻をかく。

「いったい何が……」

「——あれから14年も経ってるってことよ、もやし」

そう私の疑問への回答を述べたのは、誰でもない新たな人物の声だった。

弾かれるように顔を上げた私の視界の奥、艦長がもたれ掛かっている壁際のドアからいつの間にか姿を見せていた少女がいた。

トレーニングルームで一瞬だけ顔を合わせ、舌打ちをされたことは記憶に新しい。

その時と変わらぬ赤いぴっちりスーツに身を包み、暗赤色のパーカーを羽織り、両ポケットに手をつ突っ込んでいる。

よく見るとスーツには補修の跡らしき赤いガムテープが所々巻かれている。それに目元は何だかやさぐれているようにも見える。その双眸ははつきりと私を捉えている。

そういえば、この少女も先程の記録映像に出ていた。

記録によると彼女も私の友達だったようだが——。

顎をしゃくりあげると彼女は舌打ちをした。

「……本当に私のこと、忘れたのね」

「……………ごめんなさい」

なよなよした私の物言いに辟易したのか、少女はポケットから手を出し、ドカドカとやや大げさに足音を鳴らしながら私に接近してきた。そして私達を隔てるパネル前で大きく拳を振りかぶり——。

……コツン、と軽くパネルを小突くに留まった。

そしてそのままゆっくりと力の入っていた拳が開かれ、ポケットへと戻っていった。

てつきり全力で殴りかかってくるものだと思いこんでしまった私は、呼吸を止め、沈黙を続けながら彼女を見上げる。

「私は式波・アスカ・ラングレー。セカンドチルドレンで、エヴァ式号機のパイロットをしているわ。昔はあんたとミサトと私で同居して

いたんだけど」

「ミサト……って？」

「ん」

顎で後ろを指した先には、未だ姿勢を崩さない怖い面持ちを維持している艦長が。

「……………ホントに？　というより式波さん……見た目が14年前と変わってない、よね？」

サクラの身体が成長したのが14年も経っていたからというの納得も理解もできた。だが式波さんはどうだ。記録と全く姿が変わっていない。というより、成長が止まっているとも言える。

それこそ、お伽噺にある不老が相応しい……。

またこれは私にも同じことが言える。

「エヴァの呪縛」

「呪縛……？　その左目の眼帯は？」

「あんたには関係ない」

物を言わせない強い口調に、私はそれ以上の追及をする勇氣は湧かなかった。

「——ふん。もう満足よ。それじゃ」

最後にそう言い残すと、式波さんはそそくさとドアの向こうに消えてしまう。

結局式波さんの人となりを把握することは叶わなかったが、少なくとも記憶を失った私とのファーストコンタクトとしてはそれなりに会話することができたと思う。

それでもやはり一方的な失望を感じずにはいられなかった。もし私が記憶喪失ではなかったら、なんて考えたりもするが、今となってはどうしようもない。

「当時あなたが操縦していた初号機内はすでにすべて探索済みです。結果、発見されたのはあなたと……なぜかこれが復元されていたわ。検査の結果、問題なかったため返却します」

そう金髪女性から伝えられると同時に目の前のダッシュボードから勢いよく棚が飛び出し、その中にはビニール袋に包まれた黒い直方

体の物体が入っていた。

促され、そつと直方体を手にする。よく観察すると、イヤホンケーブルが接続されていることに気づき、これが音楽プレイヤーであることを理解した。

刹那、脳が焦げるような微細な刺激を感じ取った。おそらくこれは……私にとつてすごく大切なものだった……と思う。

「その反応……何か思い出したかしら？」

「ほんの少しだけですけど。これが大切なもので……誰かに一度預けたことがあつた気がするんです」

預けた、というより自棄になつて投げ出した、のほう合っているかもしれない。

「なるほど。記憶は完全に欠落しているわけではないよね」

記憶の断片からさらに何かを思い出そうと集中し始めようとしたその時、遠くで爆発音のような轟音が鳴り響いた。この面会室に強い衝撃波などは届いていないが、ただごとではないことは明らかだった。

壁に設置されていた内線のブザーがすくさま鳴り始め、艦長は即座に受話器を手にした。

「私です。……二機も？ ええ、わかつたわ……本命のお出ましか」

「え？ え？ 何かまた新しい敵が来たんですか？」

一気に場の雰囲気差し迫つたものへ変質したことを感じ取つた私は、向こう側にいるふたりに問いかける。

するとこの部屋からではなく、どこからかわからない、テレパシーのような声が私の耳に届いた。

『——碓さん、どい』

「!!」

その透き通つた水色の声に、私は確かに聞き覚えがあつた。

……繋がる。パズルのピースたちがひとりだに一つになるかのよう。今、思い出しかけていた記憶の断片が、形のあるものになったのを自覚した。

この声を私は知っている。

この声の主の顔や名前はまだ思い出せないが、私はこの人のために命をかけたことを思い出した。

あれは……あれは……、残念ながら思い出せない。……そうだ、助けるため。何かから助けるために命をかけたのだ。

「知ってる……！ 私、この人知ってます！ 私を呼んでいます!!」

ほんの一部だが、初めて明確に記憶を掘り起こせたことに半ば興奮しながら私はパネルの向こうのふたりに必死に訴えかけた。

だがその反応はあまりに冷たいものだった。

私の方を見向きもせず、ただリモコンの操作でパネルの透過を停止させ、私との視覚的接触を遮断したのだ。

「え……？ どうして……？」

パネルに触れ、その向こうにいるふたりに細い声で問うた。だがもちろん声が聞こえてくることはなかった。

「どうしてこんな酷いことをするんですか？ 私、ほんの少しだけですけど、やつと記憶を思い出せたのに……」

ふたりですら私のことを避けようとしているのだろうか。艦長は昔私と暮らしていたというのならば、それなりに絆があってもおかしくないはずだ。

なのにこれは……この冷めたやり取りは……なんだ？

『——碓さん、どい』

再び聞こえる。

間違いない。

「碓さん！」

サクラさんの差し迫った声も、もはや遠くの雑音に感じる。

この人たちは私に冷たい。

一方的にすべてを押し付けてくるし、そして私の話なんてこれっぽっちも聞いてくれない。

いつの間にか固く拳が握りしめられていて、自分が怒っていることに気づいた。このままだと何も好転することはなさそうだった。比較的好意的に接してくれるサクラさんには申し訳ないが、この先を考えると、ここで我慢するのは悪手だと思った。

どう状況が転ぶかなんて私にはわからない。
しかしながら、今より悪くなることはないはずだ。

「——ここだよ!!」

ソラに向け、私を探し求める声に応える。

瞬間。

すぐ横の壁が砕けた。

コンクリート片が部屋の中に飛び散り、大量の煙を巻き上げる。

思わず片腕を顔の前に突き出し、入り込んできた強風に吹き飛ばされないようにもう片方の腕で車椅子にしがみついた。服も髪も激しく摩く。

壁に空いた大穴から、巨大な手が侵入してきた。

その外には青々とした空が広がっている。しかし、軍艦たちが点々と空に浮かんでいるという奇妙な光景だった。

そして。

ぬっ、と姿を見せたのは、ついさっきまで説明を受けていたエヴァンゲリオンというロボットの頭部。

——そのエヴァは。

——紫の鬼だった。

モラトリアム

エヴァンゲリオンは複数機いるという。

私が専属となっているエヴァンゲリオンは初号機らしい。頭頂部の長い角が特徴的で、紫色のカラーリングに緑のアクセントがある、鬼のようなデザイン。

初号機に乗り、人類を滅ぼそうとする敵と私が戦っていたなんてとても信じられない。だが、そのエヴァの実物が目の前にある以上、私はすでに常識に従って判断できるような世界にいないことを自覚させられた。

ヴンダーの壁を突き破って中に侵入してきたエヴァは、私を誘うようにその手を僅かに広げた。

破片や煙などが一旦落ち着き、はつきりとエヴァを視界に捉えることができる。

初号機……ではなさそうだ。

紫色のカラーリングで、角があることは共通しているものの、サブカラーが濃い水色で、目元のデザインも微妙に異なっている。

零号機や弐号機とも違う。

とはいえ、そもそもとしてエヴァがやって来るとは思わなかった。ただ、この機体の中にはパイロットがいて、先程の呼びかけはその人物によるものなのだろう。

『碓さん、その手に乗って』

セリフに少し違和感を覚えはしたものの、気に留めることなく私は車椅子を進めようとした。

「ダメよ、カノンちゃん！　ここにいなさい」

命令口調の鋭い声が横から聞こえ、ハッと振り向く。

そこには同じく破壊された隣の部屋で、残骸の上に立つ艦長が私とエヴァを睨みつけていた。片方だけ割れたサングラスから覗く瞳には、非常に強い眼力がこもっている。その手には、私の首に装着されているDSSチョーカーの起爆スイッチを制御するコントローラーが握りしめられている。

今にもスイッチを押すぞと言わんばかりの姿勢だ。

どうやらエヴァの侵入によってパネルが破壊されたことにより、隣の部屋との境界がなくなったようだった。

私は艦長さんのサングラスをも射抜くつもりで睨む。

「私はいらない子なんでしょう？ さつき何もしないでいいって言つたばかりじゃないですか」

「しかし、身柄は私たちで保護します」

あまりにも身勝手な言い分に、ついに我慢の限界を迎えてしまう。

「保護……っ！」

目が覚めてから今日まで、何もわからないことだらけだった。肝心なことは何も教えてくれないし、ここにいる皆はどこか違う世界にいるようで、私は浮き立っていた。

昔この人と暮らしていたなんて記憶はない。だからこそ関係をゼロから構築することができた。構築した結果、それはマイナスとなった。これまでのやり取りからも、優しさなんてとても感じられなかった。

襟を千切らんばかりに引っぱり、首元のDSSチョーカーを見せつけながら吼えた。

「これが保護ですか？ 誰も私の話を聞いてくれない！ 皆が私のことを憎むような目で見てくる！ 私の命は艦長さんの指先ひとつで簡単に消されるッ！ こんな、脅しによる監禁じゃないですか!! 私はこのなところにいたくないですよ!!」

「……………」

空に浮かぶ軍艦たちからの一斉射撃。

狙いは初号機に似たエヴァ。

ゴン、という激しい発射音とともに砲弾が次々にエヴァに向けて放たれている。だがエヴァはそれらを無視して私の決断と、行為を待っている。

「エヴァは味方なんですよね？ どうして攻撃するんですか!!」

「だからこそよ！ ネルフのエヴァはすべて殲滅します」

「……………ここもネルフじゃないんですか？」

「私達はヴェイレ。ネルフ壊滅を目的とする組織です」

ヴェイレ。また知らない情報。

ネルフとは使徒から人類を守護するために存在する組織であると聞かされている。そこに私も所属していたと。

ではこの状況はいつたいどういうことだ。前提知識のない私からすると、世界を守ろうとしているネルフにヴェイレが攻撃している。つまり、ヴェイレは悪なのではないのだろうか。

まだそこまで結論を急ぐ必要はないかもしれないが、そう捉えられてもおかしくない。

やはり、何もかも足りていない。

私が艦長……ひいてはヴェイレを信用する要因がなにひとつ見当たらない。

なおもエヴァアへの攻撃は続いている。そうしているうちにまた新たなエヴァアが姿を現した。単眼で、黄色がメインカラーの機体。おそらく零号機だ。

零号機は初号機らしきエヴァアの側に寄り、両肩に装備している白く厚い衣を靡かせながらバリアらしきものを展開して砲撃を防ぎ始める。

「私を呼んだんです。私はこの人を助けたことがあります。これだけは絶対に間違えてません！」

「違うわ！ レイはもういないのよカノンちゃん！」

「……レイっていう人を私は助けたんですね。今知りましたよ。それに、いないって言うてもここにいないじゃないですか」

「……」

艦長は無言で私を見る。

そこにどのような想いがあるかはわからないし、どうでもいい。ただこの瞬間、ヴェイレと私との間の亀裂が決定的になった。

艦長からの弁明も釈明もない。

「やっぱりだ。本当のことは教えてくれないし、嘘をついてまで私をここに閉じ込めたいんだ。——こんなところ、願い下げです」

心は決まった。

私は私が助けた人を信じることにする。

車椅子を進め、崩れた床でなんとか体勢をキープしたまま手の上へと移動する。その間、艦長は何の干渉もしてこなかった。

「碓さんー」

背中に届いたサクラさんの声に、私は振り向いた。

「勝手もいいですけど、エヴァにだけは乗らんでくださいよ！ ホンマ勘弁してほしいわ……」

その声には切願が入り混じっていた。私には真意を押し量ることはできなかつたが、失望と落胆もあつたと思う。

船内に侵入していた手が離れ、私を落とさないように大きな指で覆われる。

それから目的地に到着するまでに何が起こつたのかを私が知ることとはなかつた。



「逃がすな、コネメガネー！ 壱号機は必ず仕留めろ!!」

アスカは式号機へのケイジに向かうべく廊下を全力で走りながら、通信機で同僚に言葉を荒らげた。

「合点承知っ！」

同僚——マリは威勢のいい返事を返し、準備万端の8号機を出撃させる。ピンクのカラーリングに複眼の機体は、ハンドガンを装備している。

現場からやや離れた位置に登場した8号機は、武器を構えてカノンを確保した壱号機が姿を表すのを待つ。

そして予想通り悠々と晒した壱号機。その頭を狙い、トリガーを引き絞る。

ドン、という発射音とともに弾丸が放たれる。寸分の狂いもなく、吸い込まれるように命中し、次の瞬間には頭部が跡形もなく粉碎されるだろうとマリは確信した。

しかし、まるで未来予測をしているとしか思えない驚異的な反射速度で壱号機が身を引いたのを見て、目を丸くした。

弾丸は角を掠め、少量の火花を散らすだけに留まつた。

「生物の域超えてるにや!?!」

思わず驚きの声を上げるが、すぐに意識を切り替える。流石は本命と言われるだけのことはある。Mark. 9といい非常に厄介なエヴァだ。

どちらにせよ、もつと距離を詰める必要がある。今度は反応すらできなほど近づいて。

背中に接続されている電源ソケットをパージし、壱号機に接近を試みるためヴンダー上を走る。

壱号機と視線が交差する。その眼から戦意の類いは感じられない。あくまで今回の襲撃目的はカノンの奪取だからか。

走りながら再度照準を合わせて二、三と連射するも、素早くカバーに入ったMark. 9の放つA. Tフィールドによって阻まれる。

そのままMark. 9がやや前斜姿勢を取ると、首に巻く衣が生物のように蠢いてロケットへと変形した。

ロケットに壱号機が張り付くのを見てマリは獰猛に牙を剥く。

「逃がすか!」

敵の離脱手段はロケットしかない。ならばMark. 9さえ潰せば、あとはヴンダーと弐号機で確実に壱号機を仕留めればいい。

即座に狙いを壱号機からMark. 9へと変え、トリガーを引く。すると今度は不思議なことに、A. Tフィールドの感触もなく頭部が弾けた。恐らく壱号機を守るために集中させていたのではないかという憶測を立てるが、これを速やかに放棄して目標に集中する。

頭部破損という重大なダメージはパイロットにもフィールドバックとして届いているはずだが、特にそれらしきひるみなどはない。

「やっぱし『アダムの器』か!?!」

今度はプラグ周辺を吹き飛ばす。そうすれば確実に停止するはず。

しかしマリが仕留めに入る前にブースターに点火し、爆発的なスピードで壱号機と共にヴンダーから離脱していく。

「挨拶くらいしてけおらァー!」

破れかぶれの射撃が命中するはずもなく、僅か2秒ほどで豆粒サイズになるまで距離を離されてしまった。

一方、壱号機に破壊された壁から外に出てヴンダーの艦長——ヴィレの総司令葛城ミサトは高々とチョーカーのスイッチを掲げていた。スイッチはまだカノンに装着されたDSSチョーカーが通信範囲内であることを示している。

まるで彫像のように動かないミサトの背中に、リツコが言葉を鋭く投げつける。

「彼女を初号機より優先して奪取したという事は、トリガーとしての可能性がまだあるという事よ！ ミサト！ DSSチョーカーを！」
それでもミサトはトリガーに指をかけたままで、動じることはなかった。

そして——。

甲高い電子音が鳴り、同時に通信範囲外に出たことを示す『OUT OF RANGE』が表示された。

時間切れ。

カノンをネルフに奪取された。ミサトは高く掲げたままだった手を下ろし、無言で空を眺める。

なぜやらなかったのか。とリツコは糾弾しなかった。普通に考えると、ネルフにカノンを奪われるのなら殺してしまったほうが人類のためになるのだ。

しかし……いや、だからこそ。リツコは何も訊かなかった。

ただ起こった事実と結果に対して忠実に動き始める。

「副長より通達。追撃不要。各位、損傷個所の応急処置と艀装作業を再開」

艦長の背中では、14年もの時が停止していた少女の言葉に打ちひしがれたかのように、ひどく小さく見えた。

◆ 「！」

ふと意識が戻ると、私はきれいなベッドで寝かされていた。

眠気は少し残るが、直近の記憶を思い出しながらゆっくりと上半身を起き上がらせる。

エヴァというロボットの手に乗せられて、ヴンダーから連れ去って

もらった……はず。急激な慣性を受けたのが最後に覚えていることだ。そこからの記憶がないということは、おそらく手の中で気絶してしまったのだろう。

なにせ空の上で攻撃を受けながら離脱して距離を取ったのだ。少々私への影響が荒々しくなっても仕方のないことだろう。

部屋は何もない無垢の白で、広さはそれなり。インテリアやデジタル機器は一切なく、あるのは部屋の外へ続くドアと、天井の照明と、一面のガラス窓と、そして――。

「……？」

部屋の色に不釣り合いなほど真っ黒なぴっちりスーツを着込んだ少女が微動だにせず直立している。

水色のショートヘアで、紅い瞳が私を見ている。表情は全くの真顔で、なんと声をかければいいかわからない。

それは向こうも同じなのか、一向に話しかけてこない。もしかして無口な子なのかと思ひ、ならばと日常で話しそうな差し障りのない言葉をなんとか絞り出して投げかけようとしたその瞬間。

「こつち」

とだけ少女が言った。

そして私の返事を待たずにすたすとドアへ向かう。たった一言だったが、おそらくあの時の声と同じだったから、この人こそがレイなのだろう。

「え、あつ」

などと狼狽えている間にも少女は部屋から出て行ってしまう。

動こうにも脚がまだ思うように動かないから、ついて行くことができな

きない。

「ちよ、ちよつと待つてー！ レイさんー！」
咄嗟に名前呼びをしてしまったが、こうでもしないと戻ってきてくれないと思った。

少しすると足音が近づいてきて、少女が部屋に戻ってきた。

「なぜついてこないの？」

きよとんとした顔で不思議そうに尋ねてくる。

私は掛ふとんをめくり、両脚に触れながら言った。

「私、脚が動かないの。だから車椅子とかがあつたら欲しいなーって思うん……だけど……」

「ないわ。ジオフロントに行けばあるかも」

「ジオフロント？ でもそこに行くにはここから出ないとだから……」

「取ってくるより行ったほうが早いわ。だから——」

そう言う少女は私の方に接近してきた。

何をするのか分からないからジツとしておく。すると、膝の裏と背中の下にそれぞれ腕を伸ばし、私の身体はひよいと抱きかかえられた。

「ほあっ?!」

いわゆるお姫様抱っこをされた。

まさかそうなるとは全く予期できなかったから、思わず変な声を出してしまう。

この細い腕のどこにそれほどの力が宿っているのか。落ちてしまわないように両腕を首にまわす。

「お、重くない?」

「問題ないわ」

「ホントに?」

「ええ」

「無理してない?」

「あなたが暴れなければ」

「あ、はい」

その一言で、私は素直に大人しくしていることにした。

私という荷物がある状態でも特に不自由な様子なく歩き始め、部屋を出る。長い間人がいなかったのだろうか、廊下は手入れがされていないらしく、埃が溜まっていたり、壁には所々ヒビが入っていたりする。

エレベーターを降りて、施設を出る。とはいっても外に出るわけで

はないからそのまま表示盤の案内に従って突き進む。

そうして着いたのは、ずいぶんと錆びたケーブルカーだった。ドアは壊れたのか元からなく、中に入る。

「その長方形のスイッチを押してくれるかしら」
「うん」

言われ通り操作パネルのスイッチを押すと、ガコン、と車体が一度大きく揺れた。

「大丈夫なのこれ？」

「問題ないわ」

揺れは一度だけで、その後は普通にケーブルカーが降り始める。地下鉄のような暗闇をしばらく進んだところで突然、景色が一気に開けた。

そこは見たことのないほど荒れ果てた広大な土地だった。地表は逆三角形型でくり抜かれた空洞で、その下に建造物が確認できる。だがそれも何かに挟られたかのように大きな穴が空き、隣接する巨大な池は血色の液体（おそらく固体）で満たされている。

想像を絶するような激しい攻防があったのか、地面にはクレーターが目立つ。

——青空の下にて佇む、灰の都。

ようやくケーブルカーが目的地にたどり着き、私たちはそこから降りてさらに進む。

まずは見たことのないような長距離エスカレーターを下る。ざっと目算でも100メートルはあるだろう。

「そういえばなんだけど、名前を……聞いてもいい？ 下の名前しか知らなくて」

「私の名前はアヤナミレイ」

「以前の私はなんて呼んでたの？」

「知らない」

適当な返事だなあと思いつつも、ならばと顔を上げる。

「……じゃあ綾波さんでいい？」

「ええ」

綾波さんはこちらを見下ろすことはなかった。

ただ超至近距離で綾波さんを見ることでわかることがあった。

それは、まるで陶器のようにすべすべの白い肌であること。女性の100人中1000人が羨む美貌なのは間違いない。成長期の子供はニキビや肌荒れに悩まされるなどといったことがあるが、まったくの無縁だろう。

どのような手入れをすればこの完璧に近い肌を手に入れられるのだろうか。

顔が良くてスタイルも良くて、ちよつと無愛想なところはあるけどそれも良いところとしてとらえればこれが本物の美少女というものなのだろう。

長い長いエスカレーターが終わり、通路を歩く。

コンクリートの壁にはネルフのロゴが刷られているが、執拗にその部分を破壊したような銃痕が目立つ。というより壁や天井、床も激しい銃撃戦の痕跡がある。

「ここでもすごい戦闘があつたの?」

「ええ。ネルフ内での紛争があつたわ。その結果、ネルフとヴィレの全面戦争に発展した。それは今も続いている」

私が眠っていた14年もの間に、どうやら本当に様々なことが起きたらしい。それはもう確定的だ。

「ねえ綾波さん、少し休まない? ほら、ここまでずっと私を運んできたから腕とか疲れたでしょ? そこに……ちよつと壊れてるけどベンチがあるから休もうよ」

そう言いながら私が指したのは、休憩所らしき空間。らしき、と表現したのはその面影がもう殆ど残っていないなかつたからだ。破壊された自動販売機などから辛うじて推察ができた。

ベンチは中央に隣り合わせで二つ並んでいる。だがひとつは跡形もなく壊れているので使えるのはもう片方のみだ。

「問題ないわ。碓さんは軽いから、目的地に着くまでなら休憩は不要よ」

「そうなの? ちなみにあとどれくらい?」

「約十分」

結構長い時間私を抱えているが、（基本無表情だからわからないが）まだ余裕のありそうな顔だったから、変に疑ったりせず信じていることにした。

エヴァのパイロットというのは操縦だけ上手ければいいものだと思うのだが、どうやら肉体面でも鍛えられるのか。私もパイロットだったらしいから、脚さえ完全に復帰すれば実はそれなりに運動ができたりする……のかもしれない。

私の提案した休憩所の真横をスルーし、綾波さんは歩を進める。

廊下が終わり、今度は高所を進む。足場の幅は五メートルほどあるから余裕はあるが、そこから落ちれば落下死は免れないほどの高さがある。

錆び……ではなさそうな血色に変色した鉄の床。

ここは果たしていったい何の場所だったのだろうか。記憶のない私には見当もつかない。

少し歩くと、下の方から音が聞こえてきた。正確には、近づいたことよって音が聞こえるようになった。

それは音楽だった。誰かがピアノを演奏している。ここでそのようなことをする人がいるとは驚きだ。

物珍しさから、私はちよつと綾波さんをお願いをして縁側まで移動してもらおう。

なるべく重心をずらさないように、綾波さんの負担にならないような態勢を維持しながら足場の下を見下ろした。

確かにいた。

グランドピアノを構え、その周囲は自分で掃除でもしたのか、地面はほとんど真っ白だ。そして人の高さほどの木がグランドピアノのすぐ横に植えられている。

そこで呼吸をするかのように演奏する少年が、ひとり。人間というのは第一印象が外見……つまり容姿や身だしなみで決まることが多いという。

私が少年に初めに抱いた感情は、完全性だ。生物としての完全性で

ある。

無のように白い髪。遠くからでもよくわかる整った顔立ち。明らかに日本人ではない。ピアノを弾くその所作には育ちの良さが滲み出ている。さらに音楽に明るくない私でも、この演奏が非常に上手であることがわかる。演奏が終わり、不意に少年は腕を下ろす。そして私達の気配に気づいたのか、こちらを見上げた。

わたしと目が合った……ような気がした。遠くて分からないが、そんな気がした。さすがに遠距離で突然声を大にして会話を始めるのは失礼だろうから、ひとまずはこの場を離れることにした。会釈でもしておけばよかつたかもとちよつぱり後悔する。

次にやってきたのは室内で、照明も全く無いため視界が非常に悪い。

しかし綾波さんはまるで暗視ゴーグルでもしているのかと疑いを持ってしまうほど迷いなく進む。

およそ30メートルほど進み、右折。数歩歩いたところで綾波さんは足を止めた。

「……」

途端、照明が一気に明るくなった。

眼前にはグラウンドほどの巨大な半円のドームが聳えている。そのドームには何やら制御柱のようなものが複数突き刺さっていて、明らかに湯気ではなさそうな白い煙が絶えることなく発生し続けている。

そのせいなのかは不明だが、若干生物の腐ったような臭いがする。嫌悪感を覚えるほどではないが、あまり好きではない。

「これは……？」

このドームの中に何かが保管されているのだろうか。表面には『13』と刻印されていて、おそらく番号のことかと思われる。

「——エヴァだ」

低い低い男性の声が聞こえた。

発生源は私のちょうど目の前。少し上の位置。

二メートルほどの段差の上に、40代後半、もしくは50代前半の

男性が立っていた。

前の開けた黒いスーツに身を包み、威圧感と毅然たる態度を滲ませている。顔立ちを窺いたいところだが、両目はバイザーで隠されているため分からない。

式波さんの眼帯のときは不思議に思ったから訊くことができたものの、この人の場合は訊くことすらできない雰囲気を纏っている。

「エヴァンゲリオン第13号機。お前とそのパイロットの機体だ」

男性がそう言うと言明がさらに追加され、スポットライトのようにもう一人に当てた。

姿を現したのは、ついさつきまでピアノを弾いていた少年だ。少年はちらりとこちらを見ると、薄っすらと笑みを浮かべる。

「時が来たならその少年とこのエヴァに乗れ。話は終わりだ」

「え、あ、はい」

とても端的に私に指示を残した男性は、背を向けるとさつきと姿を消した。

大人の人だったし、なんだか怖そうだったし、おそらく偉い人なのかな、なんて呑気なことを考えていたら少年もいなくなっていた。

「さつきの人って誰なの？」

「ネルフの総司令よ。それにあなたの父親でもある」

「ええっ?! あの人が私のお父さん？」

私が驚きの声を上げたのは、非常に無愛想だからだったのではなく、実の娘に14年ぶりに再会したというのに何の言葉も投げかけてくれなかったからだ。

さつきはあくまで上の人との会話ではあったが、「久しぶりだな」くらいでもいいから一言声をかけてくれてもいいのではないか。

どちらにせよ、まずは改めて話をしたい。もしかすると、もう一度会ったら態度が激変して柔和なものになっているかもしれないし。

「綾波さん、あの人のところに連れて行ってくれない? ちょっと話したいこととかがあるんだけど」

そう言うと、綾波さんの顔が初めて無表情からほんの少しだが崩れた。

「……腕が疲れてきたわ。先に車椅子を探しましょう」

「ああごめんなさい！ そうだよね！ わざわざ運んでもらってるのにわがままだったよね。車椅子の方を先にしよ！」

私がお姫様抱っこをする立場だったらきつと五分ももたなかったろうが、綾波さんは数十分もちこたえてみせている。

即座に私のお願いを取り下げて車椅子の確保に移る。不気味なエリアを抜けて、またよくわからない通路を進む。壁はガラス張りになっていて、その向こうには大量のロボットの手と思われるものがレールにぶら下がって運ばれている。何かの製造中なのだろうか。

意外と目標物ははやく見つかり、長い間ずっと放置されていた一室にホコリを被った状態で車椅子が数台安置されていた。

ふたりで協力してホコリを払い、ようやく座れるようになった。綾波さんに座らせてもらおうと行為に移るが、存外に雑すぎるフオローをされた結果、車椅子にお尻をバスケットボールのようにダンクされる形になってしまった。

「いたっ」

ぎし、と車椅子の骨がなり、わずかに残っていたホコリが舞う。

「綾波さん、もう少しだけ優しくしてね？」

少しも申し訳無さそうな顔をしていないが、

「ごめんなさい」

とちゃんと言えただけよしとしておくことにする。

よくよく見れば錆びがあったりするも、無視はできるし手入れさえすれば問題ない。

「先に部屋を案内するわ」

私の背面にまわり、グリップを掴んだ綾波さんはそう言った。

お姫様抱っこされていたときは前を見るために首を曲げなければいけなかったが、今はそんなことは不要だ。押されるがままに進み、たどり着いたのはとある一室。

中は非常にシンプルな造りで、家具はたったふたつ。安っぽいベッドと丸椅子のみだ。壁は白で床は暗い赤。天井はグレーで、照明のシーリングライトたちがほど良く部屋を明るくしている。

目がつくのは、壁掛け電話とドア横にある電子錠らしきもののみ。生活するには困らなさそうだが、気になる点が三つ。

「綾波さん、これって食事とかお手洗いとか、あとお風呂もどうすればいいの?」

「食事は時間になったらその壁から出てくるわ。トイレはこの部屋を出て突き当りのところ。お風呂は大浴場しかない。また今度案内する」

この部屋は本当に必要最低限のものしか揃っていない。これだとテレビや雑紙などといった娯楽にはあまり期待出来なさそうだ。

などと考えている間にもいつの間にか綾波さんは姿を消そうとしていた。何の気配を感じさせないで消えようとする堂々っぷりに驚きつつ呼び止める。

「綾波さん、ちよ、ちよっと」

「なに?」

ちらりとこちらを振り向く綾波さんの姿はまるでポーズを取る雑誌モデルのようだった。

「その、これから私は何をしたらいいのかな……って」

すると、さも当たり前のように返事が返ってくる。

「碇司令の命令に従えばいいわ。あとは知らない」

「知らない? なら逆に綾波さんは暇なとき何してるの?」

「何も」

「何も……?」

「ええ。命令があるまで待機してる」

とても失礼なことだが……人形のようなだな、と思ってしまった。

誰かからの指示を待ち、それ以外は何もしない人形。私のお父さんだという碇司令にとっては非常に使い勝手のいい部下だろう。

フィギュアのように可愛い少女。性格がミステリアスなところも相まって、学校だったらものすごい人気が出ること間違いなしだ。

と、ここまで考えていると、自分もヴィレでは人形になりかけていたことを思い出す。

艦長さんの場合はリハビリ以外は何もするな、が命令だったから人

形ですらなかったのかもしれない。

もしかすると私は綾波さんのことを言えない、もつと低俗な存在に成り果てていた可能性があった。

そう考えると、綾波さんに抱いた感想はあまりに非常識すぎた。

「さようなら」

反応のない私を見て話が終わったと判断したのか、綾波さんは今度こそ何処かへ行ってしまった。

呼び止めることはしなかった。

今日だけで色々なことがありすぎた。情報が錯綜していて整理ができない。本当はこのまま司令官に会いに行きたいのだが、今日のところは諦めることにする。明日、改めて行動しよう。

食事の知らせは唐突だった。壁の一部が外側にスライドし、戻つてくるとトレーに乗せられたカラフルなペースト状の食事が提供される。

味は普通。空になったトレーをあつた場所に戻すと、数秒ほどで勝手に回収された。

今から部屋の外を出歩く気分ではないため、もう寝ることにする。

車椅子から自力でベッドに移る。

ベッドはやや硬く、背中にもふもふ感があまりないのが気になって仕方がない。もうちよつといいものを要求したいところだが、それを誰に伝えればいいのかわからない。司令官だろうか。

DDSチヨーカーの違和感を思い出し、少しでも首筋を搔く。ついでに沿うように指先で一周してみたが、接合部がまったくわからない。艦長はDDSチヨーカーを外すことはないなどと言っていたが、そもそも一生外すことができなかつたりしないだろうか。さすがにそれは悪い方向に考えすぎか。

そうしているうちにも、瞼がどんどん重くなって、目を開けていられなくなつて……。

◆ 夢を見た。

しかし痛くて怖かつたから内容なんて覚えてない。

◆ 部屋には時間を知るものがないから、何時に起きることができたのかわからない。一応睡眠はそれなりに取れたとは思う。

そしてやはりというべきか、ちよつと背中が痛い。これはベッドに慣れるしかないのか。

ふと頭を持ち上げると、すでに食事が提供されていた。そそくさと車椅子に乗り移り、食事を済ませると次に提供された制服などで身支度を整える。

好奇心で壁掛け電話を使ってみるが、どこにも繋がっていない。おそらくどこかからこちらへの一方通行。

今日やることは大きくふたつ。

司令官に会って話をするのと、リハビリをすることだ。前者は当然として、後者も手を抜いてはならない。何もしなければ、脚は動かないという認識が改めて脳に上書きされ、二度と歩けなくなりそうで怖い。しかしながらリハビリをする場所を私は知らない。そもそもそんな場所があるのかわからないし、あつたとしてもひとりでできるかとなると怪しかったりする。だからできれば綾波さんにも手伝ってくれると嬉しいのだが。

ともあれこの部屋を出ないことには何も始まらない。

錆びのある車椅子を進ませ、部屋を出る。ちなみにこの車椅子は電動ではないため、自力で車輪を回転させなければならぬ。

ついでにヴェレで渡された、音楽プレーヤーも携帯している。はつきりとは思いつけないが、これには大切な思い出が詰まっていることだけは覚えている。だから持ち運ぶことにした。

ネルフに来て薄々勘づいてはいたのだが、人が全くいない。私の知る限りたった三人しかいない。たったそれだけの人数でこのネルフという巨大な施設を管理、運用できているのだろうか。

「……そんなわけないよね」

散策すれば、施設内の荒れ果てた箇所は明らかに放置されていることがわかる。

崩壊した壁。何かの飛行物の残骸。何の用途で使用されていたか

私にはわからない機械の墓。整理されていない道具など。挙げだせばきりが無い。

だがすべてが静止しているわけではなく、現在も稼働を続けている場所もあった。昨日はレールで運ばれる巨大なロボットの手たちを見たが、今壁ガラスの向こうで、兵器の骨組みであろう機械類が大量に運ばれている。ここは……兵器の製造工場地帯だろうか。

凝視しても人はいないため、おそらく完全にオートメーションになっている。オートメーションといえば、先の食事の提供などもきつとそうだろう。

14年という長い空白期間でどれほど技術が進歩したのか私にはわからない。そういう専門家ではないし、空飛ぶ戦艦なんて科学の結晶のようなものが存在している時点でもう私の理解の範疇を超えている。

リハビリ用の部屋でなくてもジムとかでもいいから、と願いながら散策すること体感で一時間ほど。さすがに腕が疲れてきた。明日は筋肉痛だなど確信をしてすぐ脇の隅の方に車椅子を寄せた。そのまま身体の力を抜き、しばしの間だけ目を瞑って休憩することにした。あまり遠くまで離れすぎると今度は部屋まで帰れなくなって迷子になってしまふなんてことは避けたい。さすがに道中に案内図くらいはあるだろうと楽観視していたが、残念なことに見当たらなかつた。迷子になったことを他の人に知られたくないという恥じらいがあるのだ。

まだ道はだいたい覚えているがそろそろ……といった具合。もうちよつとだけ散策しようかな、とひとときの休憩を終えて目を開いた途端、

「——おや、眠っていたのかと思ったよ」

超至近距離。

サッカーボールひとつ分くらいの距離まで顔を近づけ、私を観察していたと思われる少年がいた。

「!!」

驚きのあまり、声すら出すことができずに身体をビクリと大きく跳

ね上がらせることしかできなかつた。その様子を見た少年はくすりと笑みを漏らす。

「面白い反応をするんだね君は。驚かせてしまったようだね。すまない」

「ううん、大丈夫だよ……」

つい恥ずかしい反応をしてしまった。この人から見た私の顔は絶対にとマトよりも赤くなっている。と想像するだけで恥ずかしさが重なってしまう。

あわあわしてどう次に繋げればいいのかわからない私に少年は続けた。

「ところでこんなところで何をしていたんだい？ 君の部屋からはだいぶ遠いところまで来たようだけど」

「リハビリがしたくて……その……そういうのができる場所を探してたの」

「ん？ 君は昔ネルフに所属していたはずだ。なら場所はわかると思うけど……あ、確かにネルフ内部構造もあれから少し変わったから、迷うのも仕方ないね」

「そういうわけじゃなくて、私、記憶喪失だからこのことわからなくて」

「———そうだったのか。なら、今度からどこかに行く時は誰かが同伴したほうがいいね」

本当は散策している間に誰かに会うことができれば、その人に案内してもらおうともこっさり考えていた。

できればコミュニケーションのとったことのある綾波さんが良かったが、そんな贅沢を言っではいけない。

この少年はおそらく私と同じ年と見ていいだろう。そういえば私は何才で中学生何年生だろう？ 少年の服装は、ヴィレで見せられた過去の学校生活ビデオで見た男子の制服と同じだ。だから同じ学校の生徒だったことがわかる。

しかしビデオでこの少年を一度も見なかったはずだ。

少年は物珍しそうに私が乗る車椅子を観察しながら尋ねてきた。

「君の過去の戦闘データは見させてもらっているよ。僕はてつきり初号機からサルベージされた時に障害も完治したものと思っていたんだけど、違ったかい？」

私達の視線は共に動かぬ脚に向く。

サルベージされたから治る、という話はヴィレでも聞いたが、その原理を私はまだよく理解できていない。

「身体の方は確かに治ってるらしいんだけど、脳がまだそれを認識してないって。だからリハビリをして感覚を取り戻さないといけな
いってヴィレの人に言われたんだ」

「なるほど……理解できたよ。なら僕がそのリハビリを手伝ってあげよう」

ひとつ頷いた少年は屈託のない笑みで嬉しい提案をしてくれた。私にとってはこの上なく助かる。

話していると思うのだが、初対面だというのに非常に心待ちが軽くコミュニケーションが取れている。

私は人見知りの人間だから、ファーストコンタクトを取る際は聞き手側に立つというか、あまり話そうとはしない。

しかし少年と話していると、自然と言葉が引き出される。等量の会話のキャッチボールができている。

「ありがとう！ あの……えつと……」

「僕はカラル。渚カラル」

「わ、私は碓カノンです。これからよろしくお願いします」

「うん、知ってるよ。……カノン……カノンか」

表情をスツと悩み顔に変え、数度ほど私の名前を口にする渚君。

しかしすぐに元通りになって口を開く。

「さっそく今からリハビリをしようじゃないか。なに、僕はモラトリアムの間は基本的に暇だからね。ピアノを引いて時間を潰す毎日だったよ」

渚君の見た目は子供だが、纏う雰囲気や話し方がすごく大人びている。どういう育ち方をすればそんな人間になれるのか不思議でならない。そして私が同じようになれるとも思えない。

記憶喪失とはいっても、これまでの他人との会話からは性格のギャップなどは特に指摘されなかった。きつと前の自分も、ことあるごとにおどおどするような人間だったのだろう。

……少し、思い出した気がする。確か私は、こんな暗い性格を改善したいからエヴァに乗り始めた。エヴァに乗ることで改善する、というの直接的なものではなく、副次的なものだったはず。

どう副次的に結びつくのかまではまだ思い出せない。

どちらにせよ、エヴァに乗ると決断したことによって人生が大きく変わり、今の私がいる。

記録は残っている。過去の私が何をし、どんな戦績をあげ、どんな怪我を負ったのか。だがそこに感情は記録されていない。

当時の私は何を感じた。何に喜び、何に苦しんだ。

そういった部分を私は思い出したい。

「君のことをもつと知りたいな。碓カノン君」

男の人にこれほど積極的に入り込まれるのはあまり慣れてない。たぶん顔が赤くなるのは隠せていると思うが、緊張して心臓がバクバク打っているのは隠せていない。胸に手を当てなくても音が聞こえるほどのだ。

もしかして渚君にも聞こえてる？ まさか気づかないふりをしてくれている？ 「もしかして緊張してるのかい？」などと言われてしまったら私は恥ずかしさのあまり息を引き取ってしまうだろう。

……さすがにそれは杞憂だと信じたいところ。

何とか心の平穏を保ちながら会話を継続する。

「前のことは知らないから、話せることはあまり少ないと思うよ？」
「大丈夫さ。話してるうちに碓君の人となりがわかってくる。それにもしかしたら何か思い出すきっかけになるかもしれないだろう？」

「うん、そうだね」

案内するべく車椅子のグリップを渚君が掴む。

私の知らない道をぐんぐん進む。

ヴィレに比べてネルフはすごく人が少ないけど、渚君も綾波さんもいるからとても楽しく過ごせそう。

ただ……。

司令官に言われたことを思い出す。私はこの人とエヴァに乗ることになる。きつとエヴァに乗って、人類を滅ぼそうとする使徒という敵と戦わされる。

以前の私はそんな非日常に自身を捧げていた。今の私には、正直なところ戦いと言われてもピンとこないし、寧ろ戦いはあまりしたくない。

だが『私』は戦っていた。ならば私にもできると信じたい。

……きつと渚君もさつき言った通り、私にとってもこの時間はモラトリアムなのだろう。

今やるべきことに目を向けよう。

まずはリハビリだ。

エヴァの操縦方法は知らないけど、たぶん、脚が動くようにならないとそもそも乗れないと思うし。

別世界

渚君と他愛のない話をしている間に、目的地にあつという間に到着した。思っていたより遠い距離を移動することになったが、実はちゃんとした医療施設があるらしい。その大部屋に私達はやってきた。電気は通ってないのではと心配になるほど部屋は暗かったが、スイッチを押せば問題なく明るくなった。

配置されているのはリハビリをメインとしたトレーニングマシンが多く、これなら私も励めそうだ。

ただ予想通りではあるが、あまり部屋が掃除されていないことを除いて。

「ところで脚はどうだい？」

「まだ動かすことはできないけど、触られたらわかるくらいには」

そう言いながら自身の脚に触れる。

正常な感覚がいったいどれほどの感度なのかは不明だが、問題なく触れられていると認知できるようにはなっている。

放置していても次第に脚の感覚を思い出している気がする。

「なるほど、なら今日は立つまではせずに脚を動かすことだけに集中しよう。僕はリハビリの方法とかあまりよくわからないんだけど、こんな感じでもいいのかい？」

「うーん、いいんじゃないかな？ 私だってよくわかってないもん」

「わかった。確か図書室があるはずだから、今度参考になりそうな本を持つてくるよ」

「いいの？ ありがとう！」

渚君がベンチに腰掛け、面と向かい合うように私はその前に移動する。

そのまま何も次の動きがないまま数秒、若干苦笑いを浮かべながら渚君が口を開いた。

「……」ここで訊くのは僕もどうかと思うのだけど、何をすればいいのかな？」

「とりあえずマッサージ……とか？ ヴィレでは付き添いの人がやつ

てくれてたから」

「そうなのかい？　ならひとまずそれをしてみようか」

そう言うと、何気なく腕を伸ばして私の脚に触れようとした。

「ちよ、ちよっと待つてー！」

制止させたことに不思議に思っているのか、きよとんとした顔で私を見てくる。

咄嗟に口に出してしまったのだが、男子が女子の足に触れ、さらにマッサージまでするという構図は……あまりに……あれではないだろうか。

もしかして私が過剰反応しているだけか？　いやそんなことはない。常識とまでは言わないが、普通は憚るような行為のはずだ。これは記憶喪失などとは無関係で私にもわかる。

しかし渚君は何食わぬ顔で躊躇いなく始めようとした。私は彼の第一印象を完全性と評していたが、だからこそその行動かもしれない……？

とはいえこれはあくまでリハビリ。そういった下心に従った行動ではない。何より善意で私を手伝ってくれているのだ。これは邪推した私に非がある。

「ご、ごめん。何でもないよ。それじゃあ……お願いします」

「うん。頑張るよ」

男の人とは思えない、白く細い指が私の太ももに触れる。少しひんやりしているが、熱はちゃんと伝わってくる。

すべての指と掌を使い、満遍なくマッサージが始まる。

「ところで碓君はピアノは好きかい？」

ふと雑談を振られ、昨日見たことを思い出しながら答える。

「うーん、ちよっとわからないかな。でも少なくとも嫌いではないよ」
「良かった。いつでもいいんだけど、僕と一緒にピアノをしてはくれないだろうか。実はいつも僕一人で弾いて、誰も聴いてくれないんだ」

ピアノ素人の私があればほどの演奏をしていた渚君と一緒に弾けるとは到底思えないが、リハビリを手伝ってくれている。だからできる

範囲で恩返しはしてあげたい。それに結局セルフでも基本的に暇を
持て余すことになる気がしたから、私にとつても嬉しいお誘いだ。

ふたつ返事でOKをすると渚君はよほど嬉しかったのか、にこにこ
しながらマツサーズを続ける。

先日のサクラさんにしてもらったときは大きく違つて、明確に感
覚は取り戻してきている。

私の拙い知識ではリハビリは長い時間をかけてようやくといった
はずなのだが、サルベージという聞き慣れない特殊な治療方法(?)だ
からなのか、想像以上にはやく日常生活に復帰できそううだ。

「これくらいでいいかい？ それとももう少し？」

「ううん、十分だよ。ありがとう。ちよつと脚が動くか試してみるね」
いったん渚君の手が離れる。

「——ふんっ！」

上半身を強張らせ、一瞬だけ呼吸を止める。そして勢いを下半身
……特に足を意識して伝達させた。だが、残念ながらそう上手くいく
ことはなく、ピクリともしなかつた。微かに震えるくらいのことは期
待していたが、それすらなかつた。

楽観視しすぎていたため、その反動は少しばかり辛かつた。

「うーん……どうやらまだ難しそうだね。僕が持つて動かすから、脚
に動くことを思い出させるっていうのはどうかな？」

「うん……」

私の差し出した脚の膝裏と踵を支えてゆつくりと持ち上げる。そ
して関節を曲げて動かし始める。非常にゆつくりとした動きで五回
行うと、次は反対の足で同じことをする。それを三セット繰り返し
た。

動いている、という感覚はなんとなくわかるのだが、それをものに
することができない。私が自分の力で試そうとするのをいきんだ顔
で察知した渚君は時々手を止めてくれる。しかしそれでも自発的に
動かすことは叶わなかつた。

この一連の流れを何度も何度も繰り返すこと一時間ほど、ようやく
今日はこのあたりで終わることにした。

本当はもつともつとやりたいのだが、脚に変に無理をさせるわけにはいかないし、渚君をこれ以上拘束するのも申し訳ない。

私の方から声掛けをして、今日のリハビリはここで終わらせることにする。

「本当にありがとう、渚君。すごく助かったよ」

進展はなかったが、実に良いリハビリができたと思う。

まだ完治まで先行きは長いだろうが、必ず自分の足でしっかりと歩けるようになるかと信じている。

「それならよかった」

長い時間付き合ってもらったことだし、このまま解散というのも忍びない。

間を置かせずに私は提案する。

「今度は私が渚君のお手伝いをするね。ピアノだけ。今からでも大丈夫？」

「もちろんだとも」

部屋を出て、来た道に戻っていく。渚君がいなくても、一人でもここに来られるように道を頭に叩き込みながら。

そのせいか、戻り道は会話ひとつなかった。振り返れば、少し空気を読んでそちらを意識しておくべきだったと内省する。

続いてやってきたのは、ネルフに来たときはずっと上の位置から見下ろしたが、今回はその見下ろしていた地面にいる。目の前には大きなグランドピアノ。横への吹き抜けから陽光が差し、この場所の存在感をいいかんじに引き立たせている。

鍵盤に向かい合うように移動した私達はそれぞれ顔を見合わせた。

「これ……私は何をすればいいの？ 本当に初心者なだけけど」

たぶん私がピアノを触ったことがあるのは、学校の音楽室に設置されているピアノで興味本位で遊んだときくらいだろう。だろう、としたのはそれらの記憶……学校生活の記憶が思い出せないからそう表現した。

「大丈夫。誰だってそうさ。無理だと思うかもしれないけど、とにかく新しいことを始める変化はいいことだよ。生きるためにもね」

「そうなの？ 新しいことか………。間違えても笑わないでね？」
控えめな姿勢で保険をかけておく。

もし想像以上に下手だったら恥ずかしいという感情以外消え失せてしまうだろう。

「笑わないさ。ピアノの連弾も音階の会話。初めはズレるかもしれないけど、しだいに合うようになる」

渚君が椅子を引いたのを見て、私も車椅子を少し前に出す。華奢な両指を鍵盤の上に乗せるのを見て、同じような動作をした。

再度私達の目が合う……瞬間。

勢いよく息を吸い込んだ渚君が両肩を上げ、そしてアグレッシブに演奏を始めた。穏やかな印象だった彼が力強く演奏するのを真横で見るのは新鮮なものだ。

いけない。連弾をしているのだから私もどこかでピアノを引かないといけない。スピーディーに進行するメロディーのどこに首を突っ込めばいいかわからず、間と思われる小休止に、右の人差し指で低い音の出る鍵盤を短めに叩いた。

音程は合っていないが、それでもメロディーが止まることはない。98%が渚君、残りが私といつところ。差し込む隙を見つけ、合いそうな音を挿入するので精一杯だ。

一音だけではならず、両手の人差し指を使ったり、さらには他の指も使って複数音を同時に鳴らしたりもする。残念ながら、やはり初心者の私には渚君とびったり息を合わせることはできなかつた。

一通り演奏を終えた後、私は緊張が解けたからか長い長い息を吐いた。

「初めての連弾はどうだったかな？」

申し訳なさに返す。

「ちよつと……難しかったかな。でも私が入るタイミングはなんとなくわかった気がするから、あとはそれに指が間に合うかだと思う。あと音程とか」

「初めてにしては上出来だと思うよ。確かに少しズレたりした部分は多々あったけど、なに、これから反復練習をすればいいだけさ。きつ

と僕たちはいいパートナーになれる」

屈託のない自信のある笑みを向けられるとなんとなくそんな気がしてしまう。いいようにおだてられているのはわかっているものの。「さて。今日はこんなところにしておこうか。リハビリもピアノも僕たちはまだまだこれからって感じではあるけど、時間はある。頑張ればきつと上手くいくよ」

その日はひとまずこれで解散となった。

司令官との面会はできなかったが、今日のところは良しとしておく。このままなあなあにするつもりはないから、近いうちに必ず面会はしたい。どんなことを言われるかわからないしちよっぴり怖いけど。

そんな気持ちを抱きながら数日を過ごしていると、予想外の出来事が起きた。

◆ 司令官から呼び出しを受けたのだ。

初対面はかなり一方的な対話と別れだったから、基本的に司令官は私など用はないと思っていたが、どうやらそんなことはないらしい。

冷静に考えるならば、用があるから呼んだ。ない時は話す必要もない、となってしまうのか。

司令官と会おうと思ったことは幾度となくあったし、実際に会いに行ったこともあったのだがそれが叶うことは一度たりともなかった。理由はわからない。

ここ数日のリハビリは結構順調で、特に脚に関してはついに自分の意志で動かすことができるようになった。だがまだ立って歩くとまではないかないため、渚君の献身的な支えはしばらく必要そうだ。

そしてピアノはというと、こちらもめきめきと力をつけている。渚君の演奏にある程度追いつけるようになったし、音程ミスもかなり減った。というのも本来私が弾くべき箇所を短縮しているからである。残念ながらまだすべてを弾き切るほどの実力はない。しかし、ここ最近は一緒にピアノを弾くことを心から楽しめるようになってい

る。

初めは私のお願いを聞いてくれたからそのお返しという義務感からだったけど、今では待ち遠しい。

「何か良いことでもあったのかい？」

愉しそうな私の様子を感じ取ったのか、渚君が声をかけてきた。

もうすぐで司令室。車椅子を渚君に押ししてもらい、その脇に綾波さんも控えている。本当は私だけが呼ばれているのだが、三人一緒に行くつもりだ。三人になった理由はよく覚えていない。たぶん成り行き。渚君はともかくとして、綾波さんは偶然遭遇したからついでに、というなんともぼつたりな感じ。

「これから司令官……お父さんに会えるっていうのが大きいね」

「……君の願うようなことは起こらないと思っただけがいい」

「え？」

珍しく否定的なことを言われ、つい聞き返してしまふ。背後を振り返り渚君を見る。彼はなんとも言えぬ顔で、気難しそうに続ける。

「気を悪くしてもらいたいのだけど、君の御父上はあまりに君に関心を持っていない。きつと今回は、何か命令が下されるだけだろう」

「そう……なの？」

「うん。予め伝えていたほうが、現実との落差で受けるショックを少しでも抑えられる」

ここで嘘をつくとは思えないし、そんな人間ではないし、事実なのだろう。

上機嫌だった私にあえて伝える。

あまり好ましくない行為だが、私を思つてのことなのはよくよく理解できる。だからどちらかという感謝しなければならぬ。

……そもそも今日の私は、少しばかり調子に乗っていたのかもしれない。

それに釘をさしてもらった、といった感じか。

「うん、わかったよ。ありがとう」

「感謝されるようなことではないさ」

「……着いたわね」

綾波さんの言葉で私の視線は正面に戻った。

それは扉とは言えないほど、とてもボロボロだった。激しい爆発に巻き込まれたのか、下半分がひしゃげて無くなっている。それに地面も小さな瓦礫などが目立ち、車椅子で踏んでしまいそうだ。

「……………」が司令室なんだよね?」

という問いに。

「ええ」

と綾波さんは返す。

そして重そうなドアを開け、私達は司令室に入室した。

中はさらに驚くことになっていて、部屋の約半分ほどが消失していた。消失、というより破壊、という表現が正しい。

地面だけでなく、天井も破壊されているのだ。開いた空洞からは外の光景が見えてしまっている。部屋の色味も、錆びか何なのか全体的に少し赤いし、不気味な雰囲気醸し出している。

そして部屋の奥、ぽつんとデスクがひとつ置かれていた。そこにひとり椅子に座り、その隣にほっそりとした老翁が直立している。

渚君が車椅子を押し、そのふたりに接近する。

「なぜお前たちがいる」

そう、司令官は低い声で言った。

バイザーを身に着けているから分からないが、おそらく渚君と綾波さんを見て言ったものだろう。

「成り行きです。途中で碇君と会ったので、案内を兼ねて付き添っていました」

「そうか」

「僕たちは席を外したほうがいいですか?」

「いや、いい」

司令官は話を区切り、じつと（おそらく）私を見た。

「カノン、お前のことは聞かせてもらった。本当に何も覚えていないのか。エヴァのことや、それ以前のことを」

「はい……………」でも、ちよつとだけ思い出せたことがあるんです。音楽プレーヤーがすごく大事なものだったり、綾波さんを助けたことがあつ

たりとか……」

「そうか。ではエヴァに乗った時の記憶はどうだ。今エヴァに乗って、問題なく操縦できるか」

「なんだか……非常に事務的な会話が繰り返されている。私の状態を確認するだけの会話。」

「それは……できないと思います。だって操縦方法がわからないので……」

「わかった。ならば第13号機が完成するまでに訓練を受けろ。指導はそのふたりにしてもらえ」

「あ、はい……」

あくまで今は上司と部下だからこのようなやりとりに徹しているのだろうか。

いや、司令官が私に……娘に興味を持っていないという渚君の言葉が事実ならば、本当にこのまま会話が終わってしまいそうだ。

それに訓練といっても脚はまだ完治したわけではないから、万全な状態で取り組めそうにもない。

「訓練の際は壱号機の機体データを使い」

「……壱号機をですか？ 第13号機ではなく？」

ピクリと眉を動かした渚君が食い下がる。

「お前が知る必要はない。話は終わりだ。時が来るまで、それぞれのできることに専念しろ」

ぴしやりと締め切るような言い括りをする司令官は、まるで私たちなど眼中にないかのように手元の別作業に取りかかり始める。

「あの……」

という控えめな言葉は、特に深いことを考えもしないで喉元からせり上がったものだった。

司令官の視線が再び持ち上がる。そのバイザーは黒よりも黒く、その奥の瞳は全く見えないが、やや面倒そうな気配を纏っている。

「なんだ。私は忙しい」

「その、前の私って、司令官のことをなんて呼んでましたか？ 私はお父さんって呼んでもいいんですか……？」

「……………」

司令官の手が止まる。

不愉快そうな顔はしていなかった。ただ、刹那の間だけ硬直した、と思う。

ひとつ、大きな呼吸をして返事が来る。

「そんなことを訊いてどうする。くだらない話に付き合っている暇はない」

「忙しいかもしれないけど、これは家族のことですよ？ そんなにくだらないんですか？」

「そうだ。今のお前との会話は無意味だ」

ヴィレの艦長も大概だが、この人はもつとだった。

渚君の事前情報がなければ私はきつと怒りを露わにしていた。司令官は私にほとんど興味がないらしい。それもこの人が本当に私のお父さんなのかすら疑いを持ってしまうほど。

くだらない。無意味。私への冷笑的な態度はいつたどこから来ているのか。もしそんな疑問をぶつけても神経を逆撫でするだけだろう。

おそらく現時点で対話を試みるのは得策ではない。指摘された通り、ほぼ無意味だ。なぜなら私は司令官のことを憶えていないし、司令官は私に歩み寄ってくれない。

ゆえに、今回は軽いアプローチだけで済ませることにした。

司令官はきつと、怖いのではない。他人に対してあまりにも興味や思いやりがないせいで極端な反応をし、その結果怖がられるのだ。と思う。

「じゃあわかった。最後にひとつだけ訊いていい？」

「……………なんだ」

しかし。これだけは訊いておかなければならない。

三人も他の人がここにいるし、聞かれてしまうことになるのは恥ずかしいが……………それでも。

僅かに声が震えるも、言い切る。

「お父さんは私のことを愛してる？」

私はお父さんをまだ愛することができない。お父さんのことをすべて忘れてしまっているから。関係性も知らない。

だから、愛を伝えてほしい。愛されていることを実感したい一心からきたものだった。

だがお父さんは目に見えてつまらなさそうに答えた。

「……一番無意味な質問だ。さっさと出て行け」



「……で、憂さ晴らしにピアノを弾きに来たんだね。動機は不純だけど、一緒に弾いてくれるのは嬉しいよ」

そういつも通りの爽やかスマイルを向ける渚君。

真横でピアノに向き直る私は喉を鳴らして力強く頷く。お父さんとのきちんとしたファーストコミュニケーションは、残念ながら失敗と言つていい。振り返つても、あの時の言動で私に悪い点はなかったはず。なるべく低姿勢で臨んでいた。

なのにあれだ。いったいどうしてあんな堅物が結婚して私が生まれたのだろう。

並々ならぬやる気を感じ取った渚君が、それではと演奏を始めようとして――。

「あ、ごめんね渚君。ちょっと待って」

すんでのところで制止させ、私はある行動を始めた。

腕の力で車椅子からお尻を浮かし、脚は支えるだけのものとして、右手は車椅子、左手はピアノの縁を掴む。そして素早く両手でピアノの縁を掴み、ササ、と意図を察して空けてくれた渚君の隣に座った。

ネルフに来たばかりの頃はできなかったが、今では脚の麻痺もだいぶ改善できている。まだ支えがないと立ったり歩けないが、それも時間の問題だろう。

「とても上手になってきたね。君と一緒に歩くのが楽しみだよ」

……数日間交流してわかったのだが、渚君は間違いなく女たらしの部類だと思う。失礼に当たるから直接伝えはしないが。

天然でこうも胸がムズムズするセリフを言ってくる。まるで人の形をした二次元のイケメンキャラと話しているような気分になる。

学校に通っていたときは、さぞかしモテモテだったに違いない。そして当の本人はその自覚がないとみた。

渚君が演奏を始めたことで瞬時に意識を切り替える。

まったく同じ曲。すでに耳にタコができるくらい聴いた。夜寝るときにいつの間にか脳内でこれが何度もしピートされるくらい。

合間のアクセントとして瞬間的に私が弾く部分はほぼマスターしたと胸を張れる。これは曲としての強さを魅せるパート。半端な力で鍵盤を叩くのではなく、力強く叩くのだ。

ノツてきた渚君が「いいよ、いいよ！」なんて言いながらピートアツプしていく。なんだかその様子が面白くて、私ももつと頑張ってみたくなる。

まだ私が音程のズレなどをしてしまうため、時間を忘れるような美しいハーモニー……とは残念ながらならないが、それでも非常に有意義な演奏だと胸を張って言える。

私達の指がリンクし、リズムカルに鍵盤を叩く。吹き込んでくる風はまるで春の訪れのように。ぽかぽかして、温かい。心も身体も喜んでいる。

たのしく過ごす時間はあっという間で、体感でほんの数分のように感じられた演奏が終わった。

「ふう〜っ！」と収まらぬ興奮を吐いて渚君の顔を窺う。彼はとても満足そうに頷きながらこちらを見た。私はなかなか疲れてしまったが、渚君はまだ余裕のありそうな顔だ。

「すごく良かったよ、碓君。こんなにも没頭できたのは初めてだよ」「本当？ よかったあ……。でも、やっぱりまだ音程とかはミスしちゃったよ……。ごめんね」

「何も問題ないさ。別にこれが点数として数値化されるわけじゃない。大切なのは、僕たちがどれだけシンクロできたか。その点で言うと今までで一番だ」

最高評価らしいようだなによりだ。

私は車椅子に移り、少し疲れた手をぶらぶらと振る。そして一気に脱力して背もたれに身体を預ける。

「……本当に今までで一番だ」

そう、渚君がぼつりと呟いた。

「え?」

と私は頭の向きを変えた。

「いや、なんでもないよ。それより今日はこの辺りでお開きにするかい?」

「うーん、そうだね。このあと綾波さんと用事があるし……あ」

そういえばしばらく忘れていたことがある。ふとスカートのポケットにある異物に気づいて思い出した。徐ろにポケットに手を入れて、目当てのものを取り出す。

それは音楽プレーヤーだった。

ヴィレで返却された唯一の私物。しかしちゃんと再生されない。自室で暇をしているときに時間を潰すのにもってこいのアイテムだが、壊れていてはどうしようもない。だから、いつか近いうちにダメ元で訊いておきたかったのだ。

「ねえ、渚君ってこれ直せたりする?」

手に乗せた音楽プレーヤーを渚君に差し出す。

明らかに物理的に壊れているわけではなさそうだから、どこかの接触到異常が生じているだけだと思う。しかしそれを分解して修理となると、できる自信がない。

受け取った渚君は手で表裏にしたり片目で凝視したりをしながら言った。

「うん、これならきつと直せると思うよ」

「ほ、ほんと?! その……修理お願いしても……いい、かな?」

「もちろんさ」

この音楽プレーヤーは私にとって大切なものである……はずだ。これがちゃんと動くようになって、曲を聴くことでなにか思い出せるかもしれない。

記憶を取り戻す、大きな前進だ。

「ありがとう! とりあえず今日はこの辺りで帰るね」

「うん、わかったよ。じゃあまた明日」

車椅子を動かし、自室に戻る。

普段ならもう一曲くらいやっているのだが、今日は別の予定が入っている。というのも、綾波さんとお風呂に入るのだ。

ネルフに来てから、毎日ではないが二日に一回ほどの頻度で入浴している。初めは三日ほどしていなかったから、流石に身体の汚れが気になってそれとなく綾波さんに尋ねたところ、浴場があるとのことだったので即決即断だった。

シャワールームもあるらしいのだが、ちゃんとお風呂のある方がいいに決まっている。しかしネルフ施設は半壊状態だ。浴場も実は露天風呂になっていたりしないか懸念だったが、そんなことはなかった。きちんと清掃が行き届いている。

曰く、渚君しか使っていないようで、彼が一人でキレイにしたらしい。まあまああの広さのあるここを。

使わせてもらうことに感謝しつつ、脚が治ったら清掃のお手伝いをしようと心に決める。

着替え（替えの同じ制服と下着）を持って綾波さんと合流する。綾波さんはいつも通り手ぶらだ。初回ではそれを指摘したのだが、どうやらプラグスーツなるいつも着用している黒いぴっちりスーツは、私の理解が及ばないほど高性能らしく、結論から言うと問題ないらしい。やや納得はできなかったが、本人が済まし顔で「問題ないわ」と言うからもう私が折れた。

ネルフの浴場は一般的な銭湯と同じで、それなりの広さのある脱衣室がある。多くあるロッカーのうちひとつを綾波さんが選び、私はその隣を選ぶ。

脚が動くようになったとはいえ、車椅子から立ってた脱衣はまだできなない。適当に脱いでくしゃくしゃのプラグスーツをロッカーに放り込む綾波さんを尻目に、ちよつと時間がかかってしまったが私も裸になる。

そして車椅子を風呂用のものに変える。これで浴場に車椅子のまま入ることができる。

引き戸を引くと、すでに湯船いっぱいになっているお湯の湯気が浴

場に満たされていた。

ふたりだけで入るには広すぎる空間だが、まあ、こういうのもいいだろう。

「なんだか貸し切りみたいだね」

「貸し切りなもの」

やや興奮している自分の子供っぽさを自覚しつつ、洗い場に移動する。

綾波さんは、こちらから話しかけない限り基本的に無口な人だ。自分から話しかけることはほとんどない。

そういえば、初めて一緒にここに来たときは、身体を洗いもせず湯船に直行したことを思い出した。私に止められて「？」と言う顔をされたのはよく覚えている。

綾波さんもここに来るのは初めてだそうで、ではこれまでは別の手段で済ませていたらしい。

ゴシゴシと持ち込んだタオルで身体を洗い、頭を洗う。車椅子に座っているからといって速度が格段に落ちることはない。

「綾波さんって渚君と話したことあるの？」

ふと、こんなことを尋ねてみる。

私の知る限りでは、私がネルフに来てから二人が会話した場面一度も見ることがない。

無口だが受け答えはちゃんとしてくれるし、渚君は見ての通り好青年。犬猿の仲というわけでもあるまい。

「ないわ」

「え？ ないの？」

「ええ」

「なんで？」

「必要ないもの」

ばっさり切り捨てるその言い方は、少し悲しく感じた。

「渚君に興味がないから話さないって感じ？」

「ええ」

「じゃあお父さんに渚君と話せて言われたら話すの？」

「ええ」

「私のお父さんは大切？」

「ええ」

なんだか適当に答えられているような気がする。自分の身体を洗い終えた綾波さんがそそくさと洗い場から湯船へと移動しようとするから、待ったをかけたついで私も急いで身体を洗い終える。

まだ私は綾波さんの介護なしで湯船に浸かることができない。車椅子ごとならば可能だが、前回から車椅子をなしにしたのだ。その場合は足を滑らせて溺れてしまわないように常に支えてもらう必要がある。

追いかけて湯船の縁まで移動した私は、綾波さんの肩を借りながら立ち上がる。歩くのはたった数歩だ。ぎこちない動きながら前に進み、ゆっくり、ゆっくりと段差を降りて太もも辺りまでお湯に浸からせた。

「あ、あああああ〜……」

至福。

じんわりと脚から頭にかけて熱が伝播する。

滑ったりしないように、手を握りながらゆっくりと底にお尻を下ろす。

体勢をキープするために綾波さんは私のすぐ後ろに座り、両腕を私のお腹の前に回してホールドする。

「はあああああ〜……」

たまらず風船から空気が抜けるような二度目の声が漏れる。同時にリラックスしきった身体の力が抜けたのを察知して綾波さんがぎゅっと私の身体を自身の身に寄せた。

「ごめんね、ありがとう」

「問題ないわ」

目を瞑り、だらしなく口を開けてこの熱が広がるのを静かに感じ続ける。

「私って前はどんなキャラだった？」

たぶん素は根暗だと思う。それが致命的なレベルなのか、世間話程度は問題なくできる自称なのか。深い根拠はないがおそらく後者より。しかしさっきの綾波さんへのイジりは私のキャラではないだろう。

特に考える素振りすら見せずに返事がくる。

「知らない」

「本当に？」

「ええ」

「もしかして私たちって……友達じゃなくてただの知り合いとかだったの？」

「知らない」

「ええ……」

あまり嘘はつかない人だから、そう嘘を繰り返すことはないと思う。だが少なくとも、当時の綾波さんは私との距離感を把握していなかった。

私に触れる腕の力は変わっていない。ほぼ常にその心は静かである。

それきり会話は途切れる。私達は完全に沈黙して、気配すら消すかのように温かいお湯に身を委ねる。

こうすることで、記憶喪失のことや、大人たちのこと、そしてネルフとヴェイレの戦争のことを忘れられる。ただ無心になって、離人感に到達するのだ。

その内に少し眠たくなって、無意識に綾波さんの腕をぎゅつと掴んでしまう。

「あわ、わっ！」

と慌てて離すも、当の本人は無反応だ。しかしやや瞼を閉じかけている。寝落ちして結果私が溺れるなんてことはあつてならないから、この辺りで上がるよう提案する。

脇の下から持ち上げられて、胴が長く見える猫のような気分になりながら湯船から出て車椅子に移った。そして床タイルに滑らないように気をつけながら引き戸を開けて脱衣所に戻った。

とりあえず、といった感じで適当にバスタオルで身体を拭いてさつさと綾波さんが同じプラグスーツを着るまでの時間はわずか数分。私は洗面台のドライヤーを使い、時間をかけて髪を乾かしたりした。服のパターンは残念ながら制服しか支給されない。綾波さんはあれだし、渚君もそういえば制服だったし、あまりそうだったものに興味がなさそうだ。ネルフにはまだ行ったことのない区画がたくさんあるから、そのどこかにももしかすると使えそうなものがあつたりするかもしれない。

少なくとも、パジャマがほしい。制服で寝るのは些か面倒である。だつてスカートだし。

マネキンのようにじつと私を見ていた綾波さんに声をかけて浴場を出る。

廊下は最低限の明かりしかついていなくて、どこか不気味だった。すでに慣れてはいるが、それでも。天然の心霊スポットだ。意に介さずスタスタと進む綾波さんの心はおそらく鉄製だろう。私はガラス。そんな思念を振り払って口を開いた。

「ねえ、綾波さん。エヴァってどんなの？ 怖かつたりする？」

近いうちに乗ることになるエヴァについて知っておきたかった。

「怖くないわ」

「他には？」

「他……わからない。でも、エヴァに乗るあなたはとても強かつたらしいわ」

「そうなの？」

自分の手のひらを見つめながら聞き返す。

こんなほとんど力のないひよろひよろの腕でどうやって戦っていたのだろう。もしかすると、エヴァに乗ると人が変わったたりしていたのだろうか。

お願いだから今すぐに過去の私が戻ってきて欲しい。私の代わりに使徒を倒してほしい。

「戦うのは怖かつたりしないの？」

戦うとはどういうことか私にはわからない。

ネルフはヴィレと戦争の最中だから、前回のようにヴィレのエヴァとの戦いも発生するのか。その時私は戦えるのか。怪我をさせる……いいや、最悪人を殺す覚悟があるのか。

きつと私にはない。それは過去の私も同じであると信じたい。

「怖くはないわ」

「私もヴィレと戦うことになる可能性があるんだよね？　人を傷つけるようなことは嫌だよ」

「敵は勝手に邪魔をしてくるだけよ。私たちは私たちの使命を果たす。必要ならば敵を殺すわ」

「――」

少し、頭が痛い。

本人にそのつもりはないだろうが、親身になって私を介護してくれている。そのことに感謝をしている。だから歩み寄れると思っていた。

だが、私と彼女では住む世界や価値観が全く異なっているとひどく痛感させられた。これはおそらく、私の認知が緩すぎただけだと思う。

これは戦争だ。互いに何を正義として戦っているのかは知らないが、命の削り合い――殺しが起こるもの。

ヴィレでのスタッフたちのピリついた空気。ネルフでのお父さんの態度。綾波さんの冷酷な宣言。

ドス、と現実という刃物に深々と刺された気がした。

私はきつと……いや、間違いなく、最悪のタイミングで、最悪な状態で目覚めてしまったのだ。そのことに、今ようやく気づいた。

力が抜け、頭をだらりと下げる。そして足元を見下ろしながら小さく呟いた。

「そう……なんだね。どうして皆、平和に生きることができないんだろうね」

「人間だからよ」

その短い言葉には多くの理由が統合されたもののように聞こえた。そして底知れぬ私たちの間にある深い溝が垣間見えた気がした。そ

れは私との認知の歪み。おそらく、戦時中である今ならば綾波さんの認知のほうが正しいのだろう。戦いに消極的な人間はきつと死ぬから。

カラカラカラ。

こつ、こつ、こつ。

カラカラカラ。

こつ、こつ、こつ。

それきり、自室に着くまで綾波さんの足音と綾波さんに押される車椅子の車輪の音だけが、誰もいない通路に静かに響いた。

気のせい

ネルフでの生活スタイルにはだいぶ慣れた。

もう迷子になることはほとんどないし、ペレット食に対しても心の中
で文句を言わなくなった。

私の当面の目的は記憶を取り戻すこと、そしてエヴァを知ることだ。今の私はあまりにエヴァに対して無知である。本当は戦う意志なんてないが、ネルフに滞在させてもらっている以上はやれと言われたことはやらないといけない。そこに私の気持ちは介在しない。

食事も衣服も場所も、無償で提供されているわけではない。何もせず、ただ与えられるだけで生きていくわけではない。

これは契約だ。生活を担保するかわりに敵と戦えという契約。

今朝は少し、寝覚めが悪い。

あまり気乗りしないテンションのまま何気なくベッドから起き上がる。

「……………あれ？」

頭が回っていないなかったから気づくのに遅れたが、普段以上に脚をうまく動かすことができる。そのまま意識して前に踏み出し、まだ寝ぼけた声で呟いた。

「……………歩けるじゃん」

しかしながら数歩しか進めず、バランスを崩して倒れてしまう。以前なら誰かの手助けがなければそこから起き上がれないのだが、スムーズに成功した。

私の脚はもう間もなく完治する。本当にただ使い方を忘れていただけのようだ。本当ならばここで喜ぶべきなのだろう。だが私はそうできなかつた。

直近に控えているであろうエヴァに関する出来事にやや憂鬱になつてきている。

私だけが平和ボケしすぎていて、周りとの乖離が怖い。だから早く記憶を取り戻してこの環境に真に馴染みたい。

私が目覚めたことを察知したのか、壁から着替えの制服やら朝食やら

が即座に出現する。順に朝の支度を済ませ、部屋を出た。

……が、すぐに戻った。

特に何かをやりたいという意志が湧かないのだ。別に渚君とのリハビリの時間まではだいたい余裕があるからいいや、なんて考えてもう一度ベッドにインする。

今のこの気持ちは……そう、勉強をせずにテスト当日を迎えた学生の心境だ。上手く自分の心を表現できたことに満足感を得られた。だからこのすつきり感のまま二度寝に突入する。

◆ 嫌な夢をみた。

私はアスファルトの上で死んだように倒れる、重傷の私を見下ろしている。これはまるで、天へと上る魂が、死んだ肉体を見下ろしているかのような構図だ。

これは……なんだ。

到底受け入れられない状況に、私はパニックに陥る。

よく見ると私の肉体は中学生のものではなく、おそらくもう少し幼い……小学生低学年ほどだ。

頭を掻きむしりたくなる。こんな記憶は知らない。だがあまりに既視感がありすぎる。その矛盾がシナプスを弾けそうなほど活性化させる。

だがそれに到達点はない。なぜならそのような記憶、私にはないのだから。

◆ だからこれは……この惨劇は……なんだ？

「……くん、碓くん」

呼びかけが聞こえ、私は跳ねるように身体を起き上がらせた。

肩を揺すつてくれていたのだろう、心配そうな顔で渚君が私を見つめている。

「え、あ、あ……ごめんなさい」

汗をかいたわけでもないのに、胸の気持ち悪さが強く残っている。「大丈夫かい？ 時間になっても来なかったから様子を見に来たんだ

けど……」

「ああ……」

壁時計を見やると、日課となった彼とのリハビリの時間をとうに過ぎていた。衝動的に寝てしまったから、起きる時間のことを考えていなかった。

渚君に謝りつつベッドから足を降ろす。

「今日はどうする？ 気分が優れないのならなしにしようか？」

「ごめんね……気分が悪いってわけじゃないの。ただなんか憂鬱っていうか、やる気が起きなくて……」

「今日が初訓練の日だけど、それもやめておこうか？」

「ううん、私の都合で欠席なんてできないと思うからちゃんとするよ」

やや俯きながらも、それだけはと意志を表明する。

熱はない。身体の倦怠感もない。これはただの気持ちの問題。

渚君は隣に座り、そつと私の背中に触れた。

「らしくないね。何か嫌なことでもあったのかい？」

「嫌なこと……嫌なことではないと思う。そんな特定のことじゃなくて、もつとふわつとした……この場所というか、空気が私に合わないような気がして、それで……」

「どう合わないのかな？」

「わからない。でもなんだか怖い。綾波さんがいい人なのはなんとなく分かるんだけど、住む世界が違う感じ。お父さんも同じ。たぶん渚君も。普通の、戦いの知らない私には理解できない考えに追いつけない。追いつきたくないって思っすらいる」

もやもやをとにかく考えつくままに言語化しているからきちんと言わっているかわからないが、私なりに努力した。

本当はここから抜け出して、もつと安全で平和な、どこかの施設に保護されたい。そこで一般的な日常に戻りたい。

ここには私服はないから可愛いのか、ショッピンングモールに行ってお買い物とかがしたい。あとは普通に美味しいものが食べたい。自分で料理するのもいい。

これがホームシックというものだろうか。家のことは思い出せない

いけど。

「そうか」

渚君は深く頷き、優しく背中を撫でてくれた。それだけでなんだか恐怖が微かであるが和らいだ気がした。

何日もしハビリを共にしたからわかるが、この人は邪な気持ちでスキャンシップをしたりはしない。年頃の男の子であるからにはそういったものに少なからず興味があると思うのだが、まるで聖人のように穏やかだ。

「確かに碓君にはこの世界は合わないと思う。当然さ。住んでいた世界が違うのだから。ただ、嫌なことでもやらなければならぬときだってある。それはわかるよね？」

「うん」

「気づいているとは思うけど、君はエヴァに乗れるからここにいます。以前もそうだった。エヴァに乗ることで価値を見出され、仲間や友達がいいた」

「それってつまり、私がエヴァに乗らなかつたら、私の価値がなくなるってこと？」

「……残念ながら、今の世界ではそうだね。他者に施しを与える余裕なんてないのが現状だ。だから自分の力を証明し続けたいけない。でも大丈夫、僕が碓君を全力で手助けするよ」

そう言っ、渚君はポケットから預けていた音楽プレーヤーを取り出して差し出してきた。

「……」

心が豊かでない、他人のために何かをすることはできない。

これまでふたりで積み上げてきた信頼関係。手助けするというのなら、本当に手助けしてくれるのだろうか。

ピアノの連弾というコミュニケーションで培った連携。阿吽の呼吸。

お父さんとは違って、この人なら信じられる。

「……わかった。私、頑張ってみる」



「渚君、やっぱり嫌。千歩譲ってもこれだけは嫌」

「わからないな……。これが危ないものだったりするわけじゃないのに」

「あーなるほど、前の私は心を殺してたんだねわかったよ」

断固拒否と言わんばかりに腕でバツ印を作って不思議そうに首を傾げる渚君に突きつける。

ロッカー前。渚君に差し出されたそれを私は許すわけにはいかなかった。受け取ったら最後、何かを失いそうな気がしたから。

当然これは受け入れなければならぬことである。頭ではちゃんと理解しているのに、身体は拒絶の姿勢を崩さない。

「プラグスーツを着るのがそんなに嫌なのかい？」

「それってあれでしょ？ 水着みたいなぴっちりスーツなんでしょ？」

なんでエヴァに乗るのに恥ずかしい格好をしないといけないのさ!?」

思い起こすは綾波さん。特に着替える理由がないから常にプラグスーツを着用しているからその姿を頻繁に目にしてはいたが、あれは羞恥心を酷く刺激する。

「なんでって言われても……。これがエヴァに乗るのにとっても重要な装備だからだとしか。こう見えても時代の最先端の技術が使われているんだよ?」

「これが? ホントに?」

澁々とプラグスーツを受け取って、伸縮性や表面の質感、さらに首の部分を広げて中を覗き込む。

見た感じ、渚君の言った通りただのぴっちりスーツではないことがひと目でわかった。まず、襟部分が硬い。おそらくステンレス製……。いや、樹脂製か? ぐるりと空洞が一周していて、複雑なブロックが張り巡らされている。

基本的な裏地はスクール水着のようなシンプルな伸縮性のある素材、だけではなく、それなりに硬さと厚みを感じられた。

背中に逆三角形の……。パツク? がくっついていて、開け方がわからない。カんだとこれが最先端技術がふんだんに使われていそうなの

気がする。

そして思ったのが、このスーツは非常にぶかぶかである。

これを……私が着るのか。

喉がゴクリと鳴った。

「ああ、ぶかぶかなのは問題ないよ。着たあとに手首のボタンを押せば、中の空気が排出されて肌に密着するから」

膝の上にひとまずプラグスーツを置き、車椅子の背もたれに全力でもたれる。

苦惱。問答。

何がどうなっても結局これを着ないことには何も始まらないのだが、それへの踏ん切りがついていなかった。ちよつとわがままが過ぎているとは理解している。渚君を困らせたくないというのもある。

碓カノンならば特に気にすることなくこれに着替えていただろうが、私は違う。しかしながら、エヴァに搭乗することで何かを思い出すきっかけになるかもそれない。

その可能性がある限り、結局私は拒否することができない。

「……もう、わかったよ。着替えるからちよつと外で待つてて」

「うん、待つてるよ。着替えにくかったら僕を呼んでね。手伝うから」

「呼ばないからね」

そして渚君は去り際に、

「あ、ちなみにプラグスーツは中に下着とかなしだからね」

と言いつつ残した。

「えっ」

つい振り返るがそこにはもういない。

下着が駄目ということは、裸になってからプラグスーツを着ないといけないのか。スクール水着の場合でも下にサポーターを着用しているのに、それすらなしというのか。

驚きというかショックというか、もうどうにでもなれ精神で制服をすべて脱ぎ、下着も脱ぎ、生まれたままの姿になる。

プラグスーツを目の前に掲げ、どうすればいいのか思案する。首の穴しかないのだが、どう考えても胴体が通るほど大きくないし、伸縮

性があるわけでもない。

しばし悩み、ついにヘルパーを呼ぶのもやむなしとなったとき、適当に触れていた襟の左右と背中のバックパックらしき部分に不自然な窪みの線を発見した。

それぞれをグッと割るように力を入れると、パカッと前後に別れた。穴が二つある状態だ。

「あ、なるほど」

バックパック部分の穴に右脚、左脚の順に入れ、全身をプラグスーツ内に収める。その後首の穴に頭を通す。これが正しいプラグスーツの着用方法だろう。そして最後に手探りで手首のスイッチを見つけてそれを押した。

その瞬間、

「ひゃわっ!!」

しゅー、と次第に空気が抜けて密着すると思っていたが、シュツ！と一瞬で抜けたことに思わず驚きの声を上げてしまい、ふと鳥肌が立って身悶えする。

腕や腰などを動かし、変な突っ張りなどがなかったことを確認する。下着なしだと色々と擦れて気持ち悪くなる懸念があったが、実際に着てみると特にそういった印象はなかった。ちゃんとその辺は考えられているらしい。

脱いだ制服を畳んでロッカーに仕舞い、鏡の前に立ち、そつと触れる。

「やばいね……」

スクール水着は学校が定めたものだからそこまで違和感なく着ていたが、このプラグスーツは、よくわからない組織が開発したロボットに乗るためのものという特殊性がある。

それは非日常的であり、だからこそ強烈な違和感を覚え、羞恥に震える。

身体のラインはもちろん、胸の凹凸もくつきりと出ているではないか。それに、無地でいいのにわざわざよくわからないデザインも付け

加えているからなおさらである。

こんな格好で人前に出るのか？ 恥ずかしすぎて死にそうだ。トマトのように顔が赤くなっているのが鏡を見なくてもわかる。

覚悟を決めて、私は車椅子とともに更衣室を出た。

すぐ側では渚君が壁にもたれかかりながら、下を向いて目を瞑っていた。

「終わったんだね。どうかな？ そのプラグスーツは合ってる？」

私の姿を見て、顔色一つ変えない。

それは安堵すべきなのか悲観すべきか。どちらかというところ前者だろう。

太もものあたりを摘んだりして問題ないことをアピールしてみせる。

「まあ……合ってる。終わったらすぐ脱ぐからね！」

「わかったよ。ならばやく終わらせようか」

車椅子を押してもらい、シンクロテストなるものをするために目的地へ向かう。

まず初めにやってきたのは、操作室だ。壁の一面にはびっしりコンピュータ類が並べられ、さらにガラスの向こう側はオレンジ色の液体で満たされた巨大プールがある。そこに斜めに刺すように細長いカプセル状の物体が浸かっている。

「碓君にはあのエントリープラグの中に入って、エヴァとのシンクロテストをもらうよ。それから実際にエヴァに乗って仮想訓練することになる」

「う、うん。でもあのエントリープラグ？ っていうのにどうやって入ればいいの？」

「ちよつと待ってね」

そうやって渚君はささつと、コンピュータを操作すると、ガコン、ガコン、とエントリープラグがプールから引き上げられる。そして真ん中のあたりが開いて口を開けた。

ここからでは遠くてよく見えないが、やや大げさなシートがあるのがわかる。

「仮想訓練までならパイロットひとりでもできるよう簡略化、オートメーション化されている。今のネルフはこれが一番手っ取り早いパイロットの育成方法さ」

「渚君もこの方法で訓練したの？」

「いや、僕はこんなことしなくても大丈夫だよ」

「なる、ほど？」

「部屋を出て左に進んだら、あとは標識に従えばいい。具体的な指示は僕が出すよ。……あ、まだ歩けないんだよね。シートに座るときは助けが必要になるから、やっぱり僕と一緒に行ったほうがいいか」

「ああ、いや、大丈夫だよ。それくらいならできると思う。頑張ってみる」

「そうなのかい？ 僕の助けが必要そうだったら呼んでね」

「わかったよ」と首肯して操作室を出る。指示通りに左に進むと、エントリープラグらしきイラストと、その下部に矢印が描かれた壁を発見する。

さらに奥に進み、目的の部屋を発見し、中に入る。中は部屋という様子などではなく、すぐ目の前にスライドドアが三つ並んでいる。

それぞれの上部にはランプがあり、私はひとつだけ緑色に点灯していたドアの方を選ぶ。

ドアを開くと、10メートルほどのボーディング・ブリッジのような通路が伸びていた。その通路をも抜けると、ようやく先程操作室から目視していた光景が目の前に広がった。

地面はやや錆びた鉄板で、ジェットコースターの乗り場のように、左手にエントリープラグが斜め向きに聳えている。思ったよりエントリープラグは大きかった。ハッチは開いていて、私が座ることになるであろうシートを覗くことができる。

『シートに座れそう？』

スピーカーから渚君の声が聞こえた。

「頑張る。これくらいできないとお父さんに何言われるかわからないし」

腕に力を入れて、私は車椅子からゆっくりと立ち上がった。

肘掛けに両手をつきながらエントリープラグの方に身体の向きを変え、数度ほど呼吸を整え、軽く勢いをつけて手を離した。たった数歩の出来事だが、久々の冒険のような気持ちだった。寄りかかるようにエントリープラグに張り付き、持ち手などを利用して時間をかけて中に入り、もぞもぞと身体を動かしてようやくシートに座ることができた。

シートと言ってもよく目にする普通の椅子などではなく、脚は垂直に下ろすのではなく前に伸ばし、左右の肘掛けあたりに前後にずらすことのできるような操縦桿がある。シートそのものはSFチックな構造で、灰色。背もたれは僅かに後ろに傾いている。お尻や背中に触れるクッションはふかふかではないが、しつとりとした質感。それでいながら衝撃の吸収性能もあるように見える。

エントリープラグ内はやや閉塞感がある。奥行きが結構あって、ちよつと怖くなる。

『うん、ちゃんと座れたようだね。じゃあエントリープラグを閉じるよ』

そのアナウンスと同時に、ゆっくりと開いていたハッチが閉じていく。それと同時にプラグ内に淡い明かりが灯る。やがて完全に密閉された。

非常に低い音が、滲むように鳴っている。

突然、プラグ内にオレンジ色の液体が下から注入され始めた。

これから何が起こるのかわからない私はパニックになり、責めるように叫んだ。

「渚君！ こ、これ何?! 私溺れちゃう!!」

『心配しないで。それはL・C・Lといって、ただの液体じゃない。普通に呼吸をするように取り込めばいいよ』

『そんなこと言っただって……!』

身体が無意識に逃げようとするが、そこまで私の脚は反応は回復していない。あつという間に腰までL・C・Lに浸かってしまう。温度は生温かった。

そのままお腹、胸、首……と水位が上がったところで私は目一杯空

気を肺に送り込み、目を瞑った。

ついにプラグ内が完全にL・C・Lで満たされた。

静かな時間。

生温かったはずのL・C・Lから確かな温もりを得、浸る。

やがて息が続かなくなつて、暴れるようにL・C・Lを口内に含んで飲み込んだ。呼吸ができないという先入観から手で鼻と口をふさぐも、意味はなかった。

しかしなぜか溺れる感覚はなく、飲むのではなく確かめるように小さく取り込む。

そうすると、自然と呼吸ができていた。

『落ち着いたかい?』

「うん、すう——…、うん。落ち着いた」

『じゃあシンクロテストを始めるね。その後続けてエヴァでの戦闘訓練をもらう。僕がサポートするから安心して』

「うん、わかった」

低い唸り音が身体の芯に響くほど重くなっていく。

同時に、プラグスーツを通して肌に直接静電気みたいなのが帯電する感覚に震える。

意識は深く、深く。より深く。太陽の決して届かない深海のさらに底へ。

呼吸が浅くなる。必要最低限の量に落ち着く。死体だと勘違いされてもおかしくなさそう。

…そして、峠を超えた感覚。

心身の負荷が一気に解放される。

まるで光を目指して海底から海面へと上るよう。

そうして自意識が完全に静寂となったとき、唐突にノイズに吞まれた。

◇

集中する。

スコープを覗き込む。

私に超長距離射撃のセンスなどない。

機械によつてすべて制御されているから、私はディスプレイが発射のサインを示した瞬間にトリガーを絞ればいい。

……だったはずなのに。

灼け消えて平たくなつた山で、私は発射姿勢をとる。

G型装備が壊れ、マニュアルで射撃しなければならぬ。そもそも私は射撃なんて行為するしたことがない。エヴァに乗り始めたことで、間接的に銃を手に持ち始めたくらいだ。無茶にもほどがある。

無謀。馬鹿げている。不可能。

そんな文字が脳裏で赤く光る。

……が、ここでやらないわけにはいかない。私の行為は、人類が生き残るか否かの命運がかかっているのだから。

覚悟？ そんなものはいらない。私のあらゆるすべてをこの一射に注ぎ込むのみ。

——使徒が超高出力の光線を放つ。

私の頭部に直撃……するより前に、綾波さんが前に躍り出た。装備した盾を構え、私が照準を合わせるための時間稼ぎをする。

しかし盾は十数秒で融解し、ついに綾波さんは己の身体を盾とした。

そしてようやく照準が合い、すでに引き金にかけていた指を引き絞った。

◇

腕が引き千切れてもいい気持ちで操縦桿から抜こうともがく。

だが溶接されたかのように両の腕はビクともしない。ダミーシステム用のサポーターが私の動きを制限しているのだ。バイザーから強制的に見せられる様子は地獄だった。

一方的に破壊……いや、捕食される3号機。

死に物狂いで叫び、抵抗しても凶暴性に目覚めた初号機を止めることはできなかつた。

お父さんは人でなしだ。人殺しだ。3号機のパイロットである鈴原君を殺そうとしている。

腕を引き千切り、内蔵を食い破り、頭部を殴り潰した。

「とまってー」とか「やめて！」なんて言っていたけど、最後の方はもう、意味をなす言葉を発することすらできていなかったと思う。

そうして取り出されたエントリープラグが握りつぶされる瞬間を、私は見ていることしかできなかった。

初号機とのシンク口はとつくに切れていたのに、まるで自分が握り潰したかのような感覚が手に残った。

そして鈴原君の死亡報告を聞いた瞬間、私はあとで死のうと考えた。

◇
ターミナルドグマで、私は無抵抗のカヲル君を殺した。

手には血に濡れた肉の感触がまざまざと

「——ッ!! ツッ!!」

激しく脳が揺さぶられたような酔い。

血が沸騰しかけたが、大丈夫だったようだ。

『大丈夫かい?』

「……………」

今のは……いったいなんだ?

もしかして私の記憶の一部なのだろうか。視点は明らかに私だったし、記憶の中で操縦していたエヴァは初号機だった。

エヴァに触れたことで、それらを僅かながら思い出したのか? きつとそうだろう。だがなんだ……? 私自身が妙に腑に落ちない、理由が説明できない違和感があった。

特に私が渚君を——。

『碓くん、聞こえるかい? 気分が優れないのなら中止するよ』

「あ……うん。大丈夫。ちよつとくらつとしただけ。もう平気だよ」

『本当に? もし危険だと思ったらすぐに言うんだよ』

「うん」

痛みを感じたとかではない。

ただの目眩に似た何か。ただのフラッシュバックだったのだろう。

『シンク口率は……十分。ハーモニクスも正常。これなら何も問題は

ないね。碇くん、なにか違和感があつたりしない?』

「特にないよ。強いて言うなら、なんだかちよつと心がふわふわする感じ」

もう少し具体的に言うならば、第三者によって私の身体が操作されているような感覚。主導権は私にあるが、若干の介入が入ってくる、みたいな。

プラグ内には私には理解できないデータがいくつかのディスプレイでオーバーレイ表示されている。

『ちよつと今から仮想映像を投影するから、前方をよく見ていてほしい』

虹、モノクロ、ノイズ、と順に前方から波が急速に駆け抜けた後、突如さつきまではなかったはずの光景が広がった。

市街地。

ビルなどのリアリテイはあまりなく、ポリゴンで生成されたデータの景色であることはすぐにわかった。

そしてすぐに気づいたのは、私の視点が非常に高いということだ。高所恐怖症を自覚している訳では無いが、ふと見下ろすと、地面までの距離にゴクリとつばを飲む。

『それが実際にエヴァに乗ったときの視点だ。操作方法を説明すると、今握っている操縦桿はあくまで補助的なもので、基本的に自分の思考がそのまま反映される。だから、歩くことを考えるとそれをエヴァが読み取って歩くんだ。ちよつと歩いてみて』

てつきり操縦桿を適当に奥に押し込めば進むと思っていたが違うようだった。

歩くことを考えろ、と言われても難しい。普段そのようなことを考えているか? などと考えていたら突然視点が上下に揺れて前に進んだ。

「え、今ので歩いたの?!!」

歩き出したはいいものの、速度はゆっくりだし、どうやって止めればいいのかわからない。出鱈目に操縦桿を動かしている間にもエヴァは進み続け、そしてビルに突っ込んで小さなポリゴンを大量に撒き散

らした。

当然エヴァも倒れる。倒れる、という私の反射的危険察知からか、受け身だけはとってくれた。

あくまで仮想だからか、若干の衝撃が届いただけで私へのダメージはない。

『しばらく基礎訓練をする必要があるそうだね。ひとまず自在に走り回れるようになるまで頑張ろうか』

「先が長くなりそう……」

『きつと大丈夫だよ。記憶はなくても身体はよく覚えているはず。すぐに慣れるさ。とりあえず立とうか』

そうだね、と相槌を打って地面に倒れたままのエヴァを起き上げらせようとした、その時。

——カノンちゃん、立ち上がって!!

そんな鋭い声がどこかから聞こえた。

「!!」

女性の声だった。渚君の声ではない。

なんとなくヴィレの艦長の声に似ていたような気がする。……いや、気のせいだ。艦長はあんなに切羽詰まった声を出したりしなさそうだし。

一度失敗して尻餅をついてしまったが、二度目で立ち上がることに成功する。渚君の指示通りに歩き始め、一時停止し、左に曲がったり後ろに下がったりを繰り返す。

指示が出された瞬間に私はその通りに動いているはずだが、エヴァ本体への出力にほんの少しだけラグを感じてしまう。これを訊いてみたら、どうやらシンクロ率というものが関係しているという。名称だけでもなんとなくわかる。しかし高ければ高いほどいいというものではないらしく、高シンクロ率時にダメージを受けてしまうと、私に返ってくるフィードバックの重みが大きくなるという。

そのせいで私は大怪我をしたことがあるらしい。

「なんだか旗あげゲームみたいだね」

『余裕そうだね。なんならレベルを上げるかい?』

「あ、ごめん。なんでもないです」

渚君の言った通り、身体がエヴァの動かし方を思い出したかのよう
に次第に動きがスムーズになっていくのがわかる。

確かに思考を読んでエヴァは動いている。操縦桿はどちらかとい
うと、無意識の動作の受け皿のようなものだと考えている。レース
ゲーム中にカーブに合わせて身体を傾けてしまうのと同じ道理だ。
さらに操縦桿には複数のボタンがあり、これはすべて覚えるのに少し
時間がかかりそうだ。

『うん、やっぱり順調だね。軽くランニングして、次にダツシユをして
みようか』

「わかった」

歩けるのならランニングもそこまで難しくはない。気にするべき
は、エヴァは非常に巨体なため、周りの建築物を破壊してしまわない
ように意識しなければならぬことだ。歩く度にアスファルトが割
れるのは……うん、こればかりは仕方ない。渚君も何も言っ
てこないし。

実際はもつと長いが、体感で30mほど進んだあたりからダツシユ
に切り替える。高い俊敏性が求められ、許容ではあるものの、やはり
シンクロ率の影響で完全リアルタイムな動きはできない。

全力ダツシユなんてどれほど久しぶりだろう。記憶喪失になる前
の車椅子生活期間も含めるとそれなりの長さだったと思う。

——もつと、もつと速く走ったことがあったと思う。それこそ、音
速に迫るくらい。あれは確か、宇宙から落下する使徒を倒すために
走った……はず。

両の手のひらにジクリとないはずの痛みが駆ける。

『今日はここまでにしよう。成果としてはとても素晴らしいものだ。
明日からは武器の使い方をレクチャーするよ』



カヲルはシミュレーターを終了させ、エントリープラグのハッチを
開く前に通告した。

「今からエントリープラグ内のL・C・Lを排出するから、肺のL・

C・Lを吐いてね」

『えっ』という困惑が聞こえたが、特に補足することもなかったのもそのままハッチを開くボタンを押した。

オレンジ色の液体が勢いよく排出され、少ししてから、口から同じ液体を吐きながらカノンのそのそと姿を現した。激しく咳き込みながらL・C・Lを吐き出そうと四苦八苦しているようだ。助けに行くべきかと考えたが、ほどなくして自力で車椅子に座ってドアの向こうに消えた。すぐにこの部屋に帰ってくるだろう。

碓ゲンドウが第13号機ではなくわざわざ壱号機のパーソナルデータを用いたことに、納得はし難いが理解はしている。彼はカノンに期待しているのではないだろうか。壱号機と干渉することによって、記憶を呼び起こすだけでなく、その先を。

きっとそうに違いない。あれだけ家族に執着する男だ、カナル自身の経験上、断言してもいいレベルである。

本来の目的は達成できるかは未知数だが、記憶が戻る素振りは訓練中に多く見られた。エヴァの操縦にまだぎこちなさが見受けられるところを見ると、完全に記憶を取り戻したとは言えない。

碓ゲンドウがひとまずカノンに求めることは、最低限エヴァを動かして戦闘ができるようになること。その責任がカナルにある。

いつの間にか数歩だけだが歩けるようになっていし、経過は順調と見ていい。

「この調子なら大丈夫そうだね」

ドアが開き、車椅子に乗ったカノンがやって来た。

全身だけでなく車椅子もびしょびしょに濡らしながら、ふくれっ面の様子だ。

「ちよつと渚君！ もっところ……なかったのっ!!」

「とうとうっ」

「あのオレンジのを吐くの、すごくしんどいんだけど！ うええ……、喉が痛い……」

そう言うときまだ残っていたのか、気持ち悪そうに腹部を抱えて数度咳き込む。

さすがに人前で吐くことは我慢したようだ。全力顔で胸を強く叩いて呑み込む素振りを見せ、うっすらと目尻に涙をためながら睨みつけてくる。

「それは慣れの問題としか言えないね。でも以前の君も、慣れずに悪戦苦闘してたらしいよ」

「だめじゃん前の私……ということとは今の私は絶対だめじゃん……。とりあえずびしょびしょで気持ち悪いから制服に着替えてくる！このプラグスーツ、着心地が良いのは認めるけど、やっぱり恥ずかしくて着たくない！」

それは諦めて、とはとても口にできず、ぷりぷりしたカノンが部屋を出て行くのをニヒルなスマイルで見送るにとどめたカナルだった。

Who am I?

——やはり、脚の筋肉は衰えたとしか言いようがない。

渚君や綾波さんより少し身長が低いといっても脚の太さが明らかに私の方が細い。

筋肉をつけねば、と思った。

しかしネルフの食事はよくわからない色をしたペレット状のやつだけだ。良い栄養を摂取できているとはあまり思えない。

だから単純に私自身が脚を鍛えなければならぬと考えた。あとシンプルに足腰が弱まっている。おばあちゃん並みと指摘されてもぐうの音も出ない。

ぎこちなさはあるがもう誰の力も借りずにそこまで問題なく歩けるようになったから、歩く感覚を取り戻すと同時に筋肉をつける。

エヴァの操縦に脚の自由不自由が関係ないことはわかったが、だからといって何もしないでもいいというわけではない。これは私が普通の生活を送れるようになるために必要な運動である。

移動はもうなるべく車椅子は使わないようにした。その代わり必ず渚君か綾波さんに付き添ってもらうことになった。迷惑をかけてしまうが、ふたりとも否定する要素はないと領いてくれた。

「綾波さん……その……ありがとう、ね」

長い長い沈黙に耐えかね、私はアキレス腱を伸ばすストレッチをしながら口を開いた。

深い理由はない。場を紛らわそうとして、「今日はいいい天気ですね」みたいな差し障りのない会話を開始してしまったのだ。

リハビリルームのベンチに座り、じっと私を観察していた綾波さんはきよとんとした。

「何が？」

「その、ほら、渚君もだけど、今まで私をここまでよくしてくれたから」「命令だからそうしただけ」

「それでもだよ」

同年代の人がいつも近くに来てくれるのはとても心強かった。

変な気遣いとかを考えなくていいから。物事に対する捉え方というか、人間性というか、そういつた部分ではすれ違うことはあったが、それでもふたりとの日々は満喫できたと思う。

十分ストレッチをして身体をほぐし終えた私はいざと歩行を始める。さすがに制服姿で本格的に運動をすることはできないから、血眼になってネルフ中を探して一着だけ見つけたボロボロのスーツウェアを洗濯して着込んでいる。

渚君に不思議な顔で「プラグスーツでいいのでは」と指摘されたが、断じてNOを突きつけた。あれはエヴァに乗るときしか着たくない。ふたりの達観した姿勢は、きつと羞恥心を捨てたことで得られたものだろう。つまり私は永遠に同じ領域に達することはできない。

ストップアウトを片手に握りしめ、「ふっふっふっ」とリズムカルに呼吸を繰り返しながら弧を描くように歩く。そんな様子を綾波さんは真顔で眺めている。

「今の私ってだいたい筋肉とか脂肪とか落ちてると思うからつきたいんだよね。食事とかがつてお父さんとかに言ったらちゃんとしたやつに変えてくれたり……するかな？」

これは推測だが、ネルフは資源問題に直面していると考えている。スタッフがいないし、エヴァに関することのみに心血注いでいる印象。逆に施設内のインフラや私達への待遇はなるべくコストカットしているように感じられる。

それはもちろん食事にも直結するわけで。

「わからない。でもダメだと思う」

「だよね……。あ、というか、普通に外に買い出しに行けばいいじゃん！　なんでこんな当たり前のこと思いつけなかったんだろ。あとで一緒にスーパーとかコンビニでもいいから一緒に買い出し行かない？」

新しい環境ということだけに視界が狭まっていたせいで、すっかり外の世界のことを忘れていた。

色んなことが一気にどつと起こったから、そんなことを気にする余裕がなかったのだと思う。

「ダメ」

しかし帰ってきたのは否定。

「ええ」と言われると思っていた私は歩くスピードを落とすとした。

「ダメ？ どうして？」

「外には何も無いから」

「何もって、そんなことないはずだよ」

「本当よ。何も無いわ」

綾波さんは時々よくわからないことを言うから、失礼なのはわかっているけど、あまり真に受けないほうがよさそうさ。

きつとももの言いようだろう。渚君に訊けばちゃんと答えてくれるはずだ。この後の予定は決まったね、なんて考えつつリハビリを続ける。

変に足を引きずるような歩き方になってしまわなくて良かった。そうなるってしまうのではという恐怖が密かにあったが、どうやら杞憂に終わるようだ。

足に熱がたまり、疲れが蓄積されてきたことを認識したところで歩くのをやめた。綾波さんの隣に座り、水分補給をし、保冷剤をふくらはぎなどに当てる。

「ふう……」

「今日はこれで終わり？」

「うん。汗かいたからシャワーしてくる。その後は渚君のところに行ってくるね」

そう言って私は車椅子に乗り移った。

「わかったわ」

綾波さんが立ち上がり、私の背後にまわって車椅子を押し始める。

向かう先はシャワールーム。そこでひと通り汗を流し、いつもの制服に着替えた。

「あなた——」

胸元のリボンを結び終えたとき、珍しく綾波さんから声をかけてきた。珍しい、などというレベルではなく、おそろく初めてだ。

きゅっ、とりボンの位置を微調整し、鏡から綾波さんの方へと向き

直った。

「どうしたの?」

「……いえ、なんでもないわ」

「そう?」

まあ……自分から話しかけたこと自体を前進と見ておく。そしてシャワールームを出て、綾波さんとはそこで別れた。

このまま渚君に会いに行こうかと思ったが、運動直後というものもあつて、少し疲れた。

仮眠を取つてからにしよう、と予定を変更し、回れ右をしてすでにどこかへ行つた綾波さんと同じ道を辿つて自室へ戻る。

だが予想外だったのは、ドアの前に渚君が立っていたことだった。

私の接近に気づいた渚君は壁に背中を預けたまま気前よく片手を自身の肩の高さまで上げた。

「やあ碓くん。ちよつと話したいがあつてね。ここで待つてたんだ」

「そうなんだ。ここで話すのもあれだから私の部屋に入ろうよ」

ドアを開けて快く中へ招き入れる。

年頃の男子を、借り物とはいえ自分の部屋に入れるのはいかながなものかと思つたりするが、渚君ならまあ大丈夫だろうと漠然とした信頼をもとにスルーしていたりする。

それに部屋にはベッドやテーブル以外何もなければ片付けたりする必要がない。私色に染まっていない部屋だから、自分のものではないという意識がある。

「ごめんね。ベッドしか座れるところなくて」

そう言いながらホテルスタッフとまではいかないが、それっぽく素早くベッドメイキングをする。

「ありがとう。僕は別に立ったままでもいいんだけど」

「それはだめだよ。ほら、客人はもてなさないかね」

「そうかい? ならお言葉に甘えるよ」

渚君がベッドに腰掛け、私は車椅子のまま正面を向き合うような位置取り。

「話つていうのは……?」

そう話を切り出すと、渚君はしばし考え込むような素振りを見せてから口を開いた。

「……もう間もなく第13号機が完成する。そうなると当初の予定通り、僕と君は第13号機に乗ることになるだろう」

「う、うん。そのためにヴィレから私を連れ出したんだもんね」

「君の身体はエヴァの操縦を覚えている。それはここ数日の訓練で明らかだ。でも記憶がまだ戻らないのは正直なところ、僕にとっては不安要素なんだ」

「……」

「どうか落ち込まないでほしい。君が悪いわけじゃないからね。だからといってこのままエヴァに乗せるわけにもいかない。君は今の世界のことや、僕たちが何をしようとしているかを理解しなければならぬと思うっている」

渚君は真剣な面持ちで言い終えた。

軽い気持ちで部屋に招き入れ、適当な雑談が始まると思っていた私は、いつの間にか背筋をピンと伸ばして聞き入っていた。私からちよつとした話をしようと考えていたが、どうやらそのような雰囲気ではない。

ネルフとヴィレの対立。使徒と戦うためのはずのエヴァが互いに潰そうとする状況。外界との関わりが一切存在しないネルフ。

これまで箱の中の出来事しか世界を認知できていなかった。どういう経緯と理由があつて、今、何がどうなっているのか。周囲からひた隠しにされていた真実が、ついに明かされると聞くと、「やつとだ」という気持ちになる。

私だけがまわりの人間と明らかに違っていた温度感を払拭することができない。

「知りたい。本当はずつともやもやしてたから。誰も教えてくれなかったもん」

「そうだね。でもそれは時に優しさだったりすることもある。ほら、『知らないほうが幸せなこともある』ってやつだ。君は今それに触れようとしている。いいんだね？」

いつも通りの口調だが、確かに意志が強く込められているのを感じた。しかしながら辞退するつもりは端からない。

私は真剣に頷いた。

「……わかった。じゃあ今から世界の真実を教えよう。だいぶ足場が悪いところを歩くことになるけど、大丈夫?」

「え、うん。毎日リハビリしてるんだから、それくらいきつと大丈夫だよ」

先程まで運動をしていたのだから問題ない。

己の状態を確認する。

筋肉に疲労は間違いない溜まっているが、今すぐ悪影響が出るといふわけではない。ちゃんとマッサージなどもした。

一緒に部屋を出て、前を歩く渚君の後ろを追うように車椅子を進める。途中、私がこれまで安全のために近寄らなかつた、天井から千切れたケーブルやらがぶら下がる通路を進む。

しだいに純白だった壁の色に若干錆色が混ざり始める。不思議には感じたが、実際にそれに触れようなどとはしなかつた。指に錆がついたら嫌だし。

突き当りの自動ドアが開くと、多目的トイレくらいのごく小さな小部屋の中に入る。壁際には防護服のようなものが吊るさされていて、そのすぐ横にはステッカーが貼られている。風化したのかわからないが、ほとんど掠れていて読むことができない。しかしながらフィリングで読むと何かの警告のように見える。

来た方と反対側の壁にはまたドアがあつた。

「碓くん、このドアの向こうが外だから、行く前にこの防護服を着ておいて」

「どうして?」

「I結界が今の君にどのような影響を与えるのかわからないからね」
「?」

聞き覚えのない専門用語だ。

結界? A. Tフィールドのような何かだろうか。よくわからな
いが、ここで変に追及するつもりはないので大人しく防護服を今着て

いる制服の上から着込んだ。渚君とふたりで不備がないことを確認してから、ついに外と繋がるドアを開いた。

「あー、なる、ほど？」

よくある鉄の足場が目の前にある。ただし赤く錆びきっている。

そして地面と思われる存在は確認できず、遙か下は霧で見えなくなっている。ボロボロのコンクリートの壁から生えているような足場（これも錆びている）はずっと下に続いていて、壁には申し訳程度に手すり代わりに鎖が繋がっていた。

音や感覚でわかるのだが、ここは結構地面から高い位置だと思う。

渚君が言っていた『足場が悪い』というのは、物が散乱していて歩きにくいという意味だと思っていたが、まったく違った。想像の100倍くらい足場が悪いではないか。前もってちゃんと聞いておけばよかった、などと後悔しつつ、ここまで来たのなら最後までいってしまおうという思いきりで、ズボンのポケットに両手を突っ込んだ状態でスタスタと降りていく渚君の後を追う。

渚君は防護服を着なくても大丈夫なのか、なんて疑問が浮かぶ。しかし壁に肩を擦り付けながら鎖を両手で握り、両足でしっかりと一段を踏んでから次の一段へ進む私の慎重さの前に消える。

時々、ギィ、という明らかに嫌な音が鳴る段差を踏もうものなら「ひっ！」とその場に蹲ってしまう。

私がそうしてもたもたしている間にも、まるで日常と変わらない感じで下へ降りる渚君の姿が見えなくなってしまう。

「待って渚君っ！ 怖いよ！ うわ……っ！」

不意にやってきた強風が霧を運んで来て、私達の間を分断するように雪崩込んでくる。

視界に彼が映っていたから頑張っただけでここまで来たのに、見失ってしまったらもう進めなくなってしまうそうだった。

身を固めて雲が通り過ぎるのを待った後、恐る恐る顔を持ち上げると――

「ごめん、初めからこうしていれば良かったね。あともうすぐだから頑張ろう」

そう言つて、こちらに手を差し伸べる渚君が立っていた。

助けが来た、なんて勘違いを起こしそうなほど救われた気がして、

「……うん、頑張る」

少し泣きそうな顔のまま頷いてその手を取った。

高所にいるのに、平然とした様子で私がバランスを崩さないように見守りながら二人三脚で続きを降る。

終わりが見えたのはその後本当にすぐだった。階段が終わつて平面の床が現れたことで、心なしか不安が一気に晴れた。

最後の一段を降るやいなや、冷や汗かただの汗か、それとも涙かわからない液体に濡れた顔をタオルで拭きたいという衝動に駆られながらぺたりとその場に座った。

床の先を見てみるとまだ階段が続いているようだったが、私が絶望する前に「ここで到着だよ」と何よりも安心させる言葉をかけてくれた。

依然として景色は雲で覆われていて全く見えない。

……と、まるで私達が到着したことがトリガーかと思うように。

「真実が見えるよ」

ふわりと周囲一帯の雲が、波が引くように晴れていった。

——それは地球ではなかった。

大地は血のように赤く染まり、さらに何百kmにも渡る亀裂があり。数え切れないほどの巨大な赤い十字架が雲を貫くほど屹立し。そして、生命の存在感を一切感じ取ることができなかった。

それに一番驚くべきは、地上にもうひとつ天体が存在していたことだ。その天体は球体で、地球の縮小モデルのようだった。目の粗い網目状の赤い模様が上書きされていて、さらに自転している。その場から移動するような様子はない。

いつの間にか地球は異星になっていたのか。

「これ、は——」

この星は死んでいる。死星だ。

視覚を司る器官以外の活動がすべて停止しているような錯覚。

この光景から目を離すことができなかった。

「これが、君が初号機と同化している間に起こったサードインパクトの結果だよ」

「サード……インパクト？」

知らない間に世界が変わるような天災が起こっていたのか。

しかし私が起こしたとされるのはニアサードインパクト。その後、ということになるのか。

だがどちらにせよ。

「これじゃあ他の皆は……」

「この星での大量絶滅は珍しいことじゃない。むしろ進化を促す面もある」

赤い世界。

赤いソラ。

蒼い初号機。

鬼に堕ちる。

背骨を砕いた刺創。

目覚めて。

薄っぺらい覚悟を決めて。

綾波さんを救って。

「生命とは本来、世界に合わせて自らを変えていく存在だからね。しかし、リリンは自らではなく、世界の方を変えていく。だから、自らを人工的に進化させるための儀式を起こした。古の生命体を贄とし、生命の実を与えた新たな生命体を作り出すためにね。全てが太古よりプログラムされていた絶滅行動だ。ネルフでは人類補完計画と呼んでいたよ」

「ネルフがこれを……。お父さんはいったい何をやってるの……？」

赤い初号機の∞。

染まる大地。

終わる世界。

人類の廃絶。

棺桶に封印されて。

ソラへ打ち上げられて。

蒼い壱号機。

「あ、う……、頭が」

これまで固く閉ざされていた回路が急に開かれ、記憶の濁流が一気に押し寄せてきている。それを受け止められず脳のシナプスが花火のようにパチパチと激しく弾ける。

「混乱するのも無理はない。ゆっくり、落ち着くんだ」
違う。違うの。

現実を受け止められないとかそれ以前の問題。

今までの記憶。日常。戦い。私がやったこと。私が受けたもの。すべて。悉く。遍くが思い出されているのだ。

「碓カノン君。一度覚醒し、ガフの扉を開いたエヴァ初号機はサードインパクトのトリガーとなってしまうた。リリンの言うニアサードインパクト。全てのきっかけは、君なんだよ」

頭を抱えて視界を真下に向ける。

「そんな……違う。私はただ綾波さんを助けたくて、必死になって……本当にただそれだけだったの。でもこんなことになる、なんて……」

遠い目で大地を見下ろしていた渚君がちらりとこちらを向いた。

「……思い出したのかい？」

「……たぶん。私がアスカとミサトさんと暮らしていたこと。学校の友達。男の人に私の正体をバラされたこと……全部」

「それは良かった。いい思い出ばかりではないだろうけど、君には必ず必要な記憶だ。君の行動の結果が今の世界だということも、忘れてはいけない記憶だよ」

「こんなこと急に言われてもどうしようもないよ……私が世界を滅ぼしたってこと？ 私皆を……ころ……」

「直接ではないけど、間接的に君が人類を滅ぼしたのは事実だ。例外としてヴェレのように本当にごく一部の生存者はいるけどね」

これ以上は渚君と会話をしたくなかった。

ようやく戻った記憶を、圧倒的不変の事実で押しつぶされるような感覚に陥ってしまうからだ。

言葉の意味はわかるが、絶対に理解しなくなかった。理解してしまえば、『私が世界を終わらせた』という認識が根付いてしまう。

全身の毛穴が開き、汗がふく。恐怖に目の焦点が合わない。

たちの悪い嘘をつかれていのだと信じたいが、あの時の私の覚醒は、言い逃れできないものだった。

「そう、どうしようもない君の過去。君が知りたかった真実だ。結果として、リリンは君に罪の代償を与えた。それが、その首のものじゃないのかい？」

不意に首につけられたチョーカーに触れようとするが、防護服に阻まれる。

ミサトさんはやむを得ない場合はこれを使って私を殺すと言った。あれほど親密だったはずなのに、そう言わせるほどのことを私はしてしまっただのだ。

殺す？ 殺す……。ヴィレのスタッフたちから向けられた視線の正体は敵意などという優しいものではなく、殺意だったのか。

「罪だなんて……私は誰にもそんなことしてないよッ！」

「君になくても他人からはあるのさ。とはいえ、この罪は本来、君ではない誰かが背負うものはずだった」

「ならどうしてこんなことになってるの……!？」

「どこからか、仕組まれた運命が少し狂ってしまったんだ。そしてそれがどんどん波及した。運命力は誰かから君に託された。その人のために、どうか向き合ってあげてほしい。それがきつと、互いにとつて救いにもなるはずだから」

いつそう力強く自分の頭を抱え込む。

そんな私を、渚君は依然として冷静な目で見下ろしていた。



掛け布団を全身を覆うように被さり、真つ暗な世界の中でSIDA Tを流す。逃げ込むように、何度も何度もリピートさせる。

思い出した記憶の整理はついたが、現実との折り合いがつけられない。世界が想像を絶するほどの変貌の遂げていたなんて到底信じられるわけがなかった。だが事実としてあの光景を見てしまったし、

渚君の言うことに思い当たる節がないわけでもない。

綾波さんを助けたあの時、私は間違はなくヒトではない力を行使していた。3号機との戦闘で、私が心肺停止している間に発揮したらしいパフォーマンスの次元の桁数が違っていた。あれは……なんだろう……全能感に近かった気がする。まるですべてを意のままにできると錯覚した。

それこそが皆の言う『覚醒』なのだろうか。

どちらにせよ、私にすべての原因があるということに一部たりでも理解を示してしまっているのが問題だ。

とうに昼など過ぎている。あのよくわからない昼食がついに喉を通らなくなり、初めて吐いてしまった。

もう今日は何もしたくない気分になったが、なんとかして気を紛らわせたいと思った。こうしてS—D A Tで無意味に音楽を流しているが、それだけでは足りない。

綾波さんに会いたいと強く願った。

私が助けた綾波さん。私の話を聞いてくれる同じ年の同性が欲しかった。あまり会話のキャッチボールは期待できないが、それでもこのどうしようもない気持ち言葉を言葉にして少しでも気分を落ち着かせたかった。

乱暴に掛け布団を床に投げ捨て、ベッドから降りた。そしてふらふらと自室から出た。向かったのは綾波さんの私室。何度か立ち寄ったことがあるから場所は知っていた。ほぼ高確率で主はいなかったが。

地下深くまでくり抜かれた巨大な支柱が目立つ空間にの脇に、ぼつりと存在するプレハブ。これがそうだ。

「綾波さん、いる？」

返事がなかった。

「……いない？」

再度ノックして本当にいないと確信してから恐る恐る中を覗き込む。初めてここに来た時は綾波さんが裸だったから、特に気をつけ

改めていないのを確認したところで、大人しく部屋に戻ることにした。いつ帰ってくるのかわからないのに、のんびり待てるほど心の余裕がない。

無駄足だったな、と思いつつ帰路につく。

もうすぐ第13号機が完成するというのに、こんなテンションでは操縦できる自信がない。

もう、寝て気を紛らわせるしかない。

「第3の少女」

「！」

ぼんやりしすぎていた。

突然誰かに声をかけられ、驚きのあまり私はびくりと跳ね上がる。

「あ………こんにちは」

声のした方向を見ると、ベンチに腰掛けた高齢の男性がこちらを見ていた。14年も経ったのだからさらに老けてはいるが、誰かはわかる。確かこの人は……。

「冬月副司令………ですよね。私に何か用ですか？」

ほっそりとした体型だったのがさらに痩せこけていて、もう骸骨のようだった。

この人と私はまったく面識がない。組織図的に知っているだけで、昔はネルフ内でたまにすれ違いざまに簡単な挨拶をする程度の間柄だ。

綾波さん以外と話したい気分ではなかったが、かといって適当にやり過ぎることはできずに足を止めた。

「将棋は打てるかね」

「将棋、ですか？ まあはい、ちよつとだけなら………」

「結構だ。付き合いたまえ。飛車角金は落としてやる」

そう言うと副司令はベンチから立ち上がり、ついて来いと言わんばかりに歩き出した。一方的に決められた気がしてならないが、素直について行くことにした。

連れられたのは、非常に暗い部屋だ。広さすらわからない。一般的なものと変わって、階段を上がって中に入る。

中央に将棋盤が置かれており、そこに薄暗いスポットライトが降りている。

「座れるかね」と尋ねられ、「大丈夫です」と畳の上に膝を落とした。これくらいなら問題ない……と思ったがシンプルに正座が辛かったので数秒後には両脚をハの字にした。

「先手は譲ってやる」

それぞれの駒がどう動くかを思い出しながら、副司令と順番に駒を進めていく。

深い知見などないため、とにかく取られそうな駒などに注視して、かつ攻められそうなきは勢い良く攻める。だが主力の駒を抜いているというのにのらりくらりと躲され、いつの間にか私の持っていた飛車角はこちらを向いていた。

「心を静かに落ち着かせる。戦いに勝つために必要なことだ」

負けの可能性が濃厚になり、ここからどう巻き返せばいいのかわからなくなって頭の中で静かに混乱していると、そう指摘された。

「――」

焦りは思考のみと思っていたが、落ち着いてみると、両の拳が膝の上で力強く握りしめられていた。中は汗を書いている感覚すらする。顔はもつと酷いことになっているだろう。

「三手先で、君の詰みだ」

「……………」

今や王手と宣言されて、その度に付け焼き刃的に王を逃したり手持ちの駒を挟むので精一杯になっている。

逆転の目はない。

圧倒的な実力差に、どちらも楽しめているとは言い難い。

「うむ……………これなら楽しめるか？」

盤上の駒をかき集め、箱に入れ、それを逆さにして将棋崩しの山をつくった。

「老人の趣味に付き合ってくれて礼を言う」

「いえ……………たまにはこういう気晴らしも嬉しいです」

私は山を崩さないように慎重に駒を指で引き抜く。これならば難

しいことを考える必要はなく、山のバランスのみ集中すればいい。

「私も臆病でね。口実でもなければこうして君と話す機会を持てなかった。君はお母さんを覚えているかね？」

粛々と順番に駒を引き抜いていると、ふとそんなことを訊かれた。あまりに唐突な内容で、一種の心理戦でも仕掛けてきたのかと思っ

た。

「いえ、まだ小さかったので。それにお母さんのものはすべてお父さんが捨ててしまったから……」

お母さんがいなくなってしまうってから私の人生が大きく変わった。もみずつと一緒にいれば、もつとずつといい方向に……お父さんが私を忌み子のように扱うことはなかっただろう。

副司令は自身の懐を漁ると、一枚の写真を私に見せた。大人が数人と、女性が赤ちゃんを抱いている写真だ。

そして、私はその女性に見覚えがあった。

「この人は……綾波さん？」

非常に大人びている、というより紛れもない大人だ。今の綾波さんは外見だけは私と同じ14才。だからこれはおかしい。しかし他人の空似とは思えないほど似すぎている。強いて異なる点をあげるとすれば、髪色がグレーがかった栗色であることくらいだ。

「碓レイの母親だ。旧姓は綾波ユイ。大学では私の教え子だった」

「——え？ この人が私のお母、さん？ どう見たって綾波さんじゃ……」

「今は初号機の制御システムになっている」

「——え？ どう、いう」

何を言っているのかがわからなかった。

初号機の制御システムになっている。制御システムになるというのはいったいどういう意味だ？ パイロットのような操縦者ではなく、別のナニカ。

生きている人間をシステム化するというのが具体的にどういうことなのかはわからない。

なおも落ち着いた様子で駒を抜き取る彼の皺の目立つ指への焦点

がなかなか定まらない。

衝撃などというレベルを超えた鈍痛が近かった。

「うむ。ようやく電源が復旧したか」

パツ、と赤い障害灯が光り、部屋の全容がようやく明かされる。同時に私たちの側面側の向こうに倒れていた何かがいくつものワイヤーで吊り上げられる。

それは巨大な十字架だった。誰かが磔にされているなんてことはなかったが、表面に印のように巨人のシルエットがつけられている。

ここは何かの実験場だった。それも真つ当なものではない、おぞましいものと直感した。

「エヴァのごく初期型制御システムだ。ここでユイ君が発案したコアへのダイレクトエントリーを、自らが被験者となり試みた。君はそれを見ていなかったがね。結果、ユイ君はここで消え、彼女の情報だけが綾波シリーズに残された」

副司令のすぐ後ろにも明かりがつく。

ハニカム構造の壁だ。しかしそのひとつひとつの穴には人の首がそれぞれ無造作に置かれている。

——綾波さんの首が、こんなにもある。

「ひっ」

悲鳴を上げたのはあまりに非現実的な場面に遭遇したからというだけではない。首の一部が目をギョロギョロと動かして私を見たような気がしたからだ。

今すぐにも逃げ出したくなかったが、腰が抜けて立ち上がることができない。

だからもう何も見ないでいいように、乱暴に両手で目を塞いだ。

「君の知っている綾波レイは、ユイ君の複製体の一つだ。その娘もユイ君同様、初号機の中に保存されている。すべては碇の計画だよ」

「わからない……わからないです……！ 怖い！ じゃあ綾波さんは私のお母さんのクローンってことですか!! お父さんは何をしてるの?!」

頭がぐちゃぐちゃになっておかしくなりそうだ。将棋崩しなんて

くだらない遊びになんて戻れるはずがなかった。今すぐにも理解できない恐怖を誤魔化すために、駒の山をぶっ壊してやりたい。

「おっと。駒はそんな乱暴に扱ってはいかんよ。そうやって世界を崩すことは造作もない。だが、作り直すとなるとそうもいかん。時と同じく、世界に可逆性はないからな。人の心にも。だから今、碓は妻と娘を取り戻すためにあらゆる犠牲を払っている。自分の魂もだ。君には少し、真実を伝えておきたかった。碓の事も」

どくん、と心臓が跳ねた。

少し今、聞き捨てならない言葉が聞こえた気がした。

恐ろしいほどの静寂が自分の中に訪れ、これまでの自我の揺れ的一切が鈍くなった。

「……待ってください。妻と娘って……娘はここにいないじゃないですか」

「いやいない。碓ユイと碓レイはもうこの世にはいない」

「それは私が改名したから、『碓レイ』という名前がなくなったという意味ですか？」

「それも違う。碓レイはユイ君と同様、壱号機の制御システムになっている」

「は？」

時間が停止した。

きつと一日くらいだと思う。

その間私は呼吸をしていなかった。

将棋盤から駒がなくなっていることに気づいたことでようやく失っていた正気を取り戻した。

「私が壱号機の制御システム……？ そんなはずないです。だって私ここにいるもん！ だから間違ってます！」

「君の記憶は小学生低学年頃——交通事故に遭ったときから開始している。それ以前のことは何も覚えていない。なぜなら記憶が存在しないからだ」

「……………」

必死になって昔の記憶を思い出す。

だがこれといって明確に思い出せるものがない。しかしそれこそ幼少期の記憶だ。脳をこんなに熱くしてまで覚えていなかったのなら仕方ない。

「誤魔化してはいけない。どんな人間でも臆げながらも昔のことは思い出せるものだ。君にはそれが一つもないだろう？」

しかしそれを逃してはくれなかった。

「そんな、こと……………」

「なら質問を変えよう。いったいいつから『碓カノン』だった？ そもそもなぜ『カノン』なのかね？ 本当に君が考えた新しい名前か？」

「あ、えつと…………それは…………」

——答えられない。

自分が改名したいと言い、それをお父さんがOKしたからという認識でいる。

改めて振り返れば、小中学生の私が親から授かった大切な名前を自分から変えたいなどと果たして本当に思ったのだろうか。そのような覚えはあまりない。

自身を明確に自覚したときから私は碓カノンである。レイ。レイ。綾波レイではなく、碓レイ。そうしようと話し合っていた両親の姿が――。

このままだと思惑の坩堝に囚われそう。何か重大な思い違いをしているのではと考えてしまう。

カノンとは、いったい何だ――？

「君の正体を教えよう」

動揺して目の前で起こっていることすらわからなくなってしまう間に、既に駒は床から拾われ、副司令の陣には駒が初期位置に綺麗に並べられていた。

「ま、待って、聞きたくない！ やめてください!!」

情けなく懇願する。そんなことをしても何も変わりはないのに。人生を決定づける重大なモノが飛び出る。そう確信していた。それも悪い方向に。

怖くて怖くてどうしようもなかった。鼓膜を破り、耳を引き千切りたい。しかし氷漬けにされたように硬直した身体では何もできなかった。

そうして、高齢とは思えないほどしっかりして、ずっしりと重みのある言葉が告げられた。

「――君の正体は、自分を碓レイだと思い込んでいる誰かだ」

挫けないで

「綾波さんは知ってたの？ 私が碓レイじゃなくて、人ですらなかったって」

ぼんやりと。

部屋の隅で体育座りをして小さくなっている私は床の大きな埃を見下ろしながら口にした。

どうやってここにやってきたかわからない。気づいたら綾波さんによってプレハブハウスに連れ込まれていた。副司令からあの話を聞いたあと、何をしていたのだろう。

思い出せない。思い出せないほど衝撃が強すぎて、しばらく脳が自己を放棄して放浪していた……のだと思う。

「もう何もわからないよ。お父さんは私たちで何がしたいの……?」

いつもの黒プラグスーツの彼女は直立不動で私を見る。部屋の中はキャンプ用の寝袋とランプ、そして少し大きめの医療用センサー機材のみ。らしいと言えばらしい。

「エヴァに乗って戦わせる。それだけよ」

「そんなの、間違ってるよ……絶対おかしい……」

私たちは何のために生きているのか。お父さんによつて意味を見出され、生きる権利を与えられ、何も教えてもらえずにここまで大きくなった。

ただでさえ私が人類をほぼ絶滅させたという事実だけでも押し潰されそうなのに、その上私がお父さんの娘ではなかったことがなによりも辛くて苦しかった。「お父さん」とこれまで呼んでいたのが馬鹿みたいだ。お父さんはそんな私をきつと、憐憫かそれ以下の感情を抱いていたのだろう。忌避、が近いのか。

碓ゲンドウという人が私にとつての父だと当然のように思っていた。今さら他人のふりなんてできない。

「……なんで、何も言ってくれなかったの?」

「何も……つて?」

「14年。14年も経ったんだよ？ 私に会えて嬉しい……はないか

も知れないけど、何か話したいこととかないの？」

「ないわ」

「あの時のことも？」

「あの時って、何？」

「私が綾波さんを助けた時」

「知らない」

「――」

……わかっていたはず。記憶を取り戻したときから。

綾波さんは綾波ユイのクローンで、綾波シリーズのうちの一人。たとえ性格は一緒でも、記憶や体験したものは異なる。そしてそれらによる人格形成にも差異は出る。

「そっか。そういうことなんだね」

当然ありえる可能性だった。

馬鹿みたいに交流を図った自分が馬鹿だった。

「ごめん、やっぱり帰る」

頭の中がぐちゃぐちゃになって、どうしようもなくなった。考えることを完全に諦めた。もう考えることに苦痛が伴う。痛い。何もかもが嫌になって、何もしたくなくなった。この苦しみから解放される方法を誰か教えてほしい。

ゆつくりと立ち上がり、ドアカーテンに手をかける。

「碓さん」

「なに？」

私は振り返らなかつた。

「あなた、死にそうな顔をしてるわよ」

……ああ、そうか。

だから綾波さんはここに私を連れてきてくれたのか。
プレハブハウスを後にする。

そして、そのままの足でネルフを出て外に飛び出した。

◆

外に出ることはできなかつた。ネルフ本部は、地上から天まで伸びる一本のメインシャフトによって支えられている空中要塞となつて

いる。

そのメインシャフトを降りる手段がどうしてもわからないため断念。かつて木々が青々と茂っていて人工的な自然が美しかったジオフロントに足を運ぶことにした。

壊れそうなモノレールを経由し、今は見る影もないジオフロントに一步を踏み出す。

そこは過去の景色はまるで嘘だったかのように荒れ果てていた。緑なんて一切ない。鋼の大地と、血かL・C・Lかわからない赤色が当たり一面に飛び散っている。

死んだ大地とはこの事を言うのだろう。地表ではこれの何万倍もの広さで同じことが起こっていると思うと気が狂いそうだ。

行くあてもなくふらふらと彷徨う。ジャリ、ジャリ、と砂ではなく小石サイズの砂利を踏んでいる感触。歩きにくい。所々地面がひび割れていて、場所によっては人ひとりが落下してしまいそうな大きさのものまであった。

細心の注意を払ってさらに進み、真っ赤になったベンチを見つけた。少しだけ休もうと思った。自然と歩も速まり、指先で肘置きに触れた途端。

「えっ」

砂の城が崩れるように、さらさらとその形が崩れ落ち、後には赤い塵の山しか残らなかった。

「――」

私は数分、その場から動けなかった。

昔見た赤い海に似た何かを感じたからだ。

加持さんは言っていた。赤い海は死んでいる海なのだ。これも同じだ。物質として死んでいたのだ。辛うじて保っていた形を、私が触れたことよって失ってしまった。

「――」

これがサードインパクト。

私が原因となって発生した人工災害。

スカートが汚れることなんて考えずにその場に座り込んだ。両膝

を腕で抱え、前を見る。

憂鬱な光景はそこにずっとある。錆びた鉄の匂いがする風が静かに凩いでいるだけ。

そして私は、決定的なものを見てしまった。

人だ。

人がいた。

ただし、真つ赤な人形のようにだった。何かから逃げているようにも見えた。似たポーズをした赤い塊がちらほらと点在している。

微動だにしない。数秒、数分眺めても何も変化が起こらない。男女の判別すらつかない。もちろん誰かなんてわからない。だが、『人』だ。

喉が強く震え、視界が揺れる。

「あ

これが私がエヴァで戦った結果。

こんなことが世界中で？

「ああ、あ

良かれと思つてやったことが、最悪の形に。

しかも、碇レイはすでに死んでいて、私は人間ですらなかった？

「——あああ、ああ、あ、あッ」

どうなっている？

私は、いつたい、なにを……命をかけて、なにをしていた……？

私はなぜ生きている？ 私は？

? ? ? ? ? ? ? ?

頭がどうにかなりそうだ。狂いそうだ。頭を掻きむしる。荒い呼吸を繰り返す。この気持ち悪さと自己嫌悪と歪さと羞悪をどうすれば受け止めることがで

「う、あ、あああああッッ!! ああ、あああつ! ——あああああ

あッッ!!!」

叫んだ。

喉が裂けてもいいと思うくらい叫んだ。どうせ誰もいないし、迷惑になんてならない。

激情のまま、理性を失った動物のように音を長い間轟かせた。ゴロゴロと喉に固形物を感じるほど乾燥したところでようやく止めた。咳をする。

何もかもに対する理由付けが嫌になった。いつそのこと、殺してほしいとも思った。

今までの人生が崩れる。私のこれまでは、世界を壊すためにあった。そもそもただの代理人だった。

この事実には、どうすれば気が狂わずにいられるだろうか。

——これを罪だと渚君は言った。

私がした覚えはないが、それでも罪なのだ。向き合えるはずがない。規模が文字通り桁違いすぎる。酷い。渚君は無理なことを私に言った。

「適当なこと言わないでよ……」

当事者じゃないからそんなことが言えるのだ。

この推し量ることのできない罪の重圧を意識するだけで、心臓が見えざる手によって驚掴みにされる錯覚に陥るというのに。

……ふと。人の気配を感じ、顔を上げた。

「」

そこには今一番対面したくない人物が私を見下ろしていた。

互いに石像のように固まり、見つめあい、数秒ほど経って、ようやく。

「何をしている」

「……お父さん」

何年経つても変わらぬ見慣れた黒い上着に、こちらはサングラスからバイザーに変化している。赤黒い光は何の思考も悟ることができない。

十数年という年月を感じさせないほど様相はさほど変わっていない。しかし威厳は以前よりさらに増しているように思う。

「お父さんの方こそ、こんなところで何してるの」

「お前の声が聞こえたから来ただけだ」

「わざわざ……」

「お前にちょうど伝えることがあったからな」

「私が碇レイじゃないってこと？」

やや探りを入れるように先出ししてみた。

「違う。第13号機が完成した」

なにそれ。私についてのコメントはないの？

「私にエヴァに乗れって？」

「そうだ。そのためにお前はここにいるのだから」

お父さんには私はただのスペアとしか思っていないのだろう。

感情の機微のない、ただの事務連絡。

「嫌だ」

エヴァに乗って戦ったことで結果的にサードインパクトが発生した。私のせいで。次乗ったら何が起こるかわからない。

サクラさんの言う通り、エヴァには乗らない。

何もせず、朽ちる。それだけが私が世界のためにできることだ。

「そうか。ではここにいる意味はもうない。出ていけ」

どうせお前の代わりはいるのだから。

そう言われた気がした。きっとその通りだし、ネルフのどこかに『私』が大量に保管されているのだろう。

もしそれらと顔を合わせてしまったら、私は何をしてしまうのか自分でもわからない。

立ち上がった。スカートについた赤い埃を払い、お父さんの隣を走り抜けた。逃げるように立ち去った私を、お父さんは一瞥することもなかった。

◆ ——— 時は満ちた。

第13号機の完成を知覚したカヲルは、ピアノの独奏を止めて静かに顔を持ち上げた。

日の鎮まり。帳の陰り。

思っていたより建造期間が長かったが、その間カノンのリハビリや記憶を取り戻すことができたのだから、結果としては良い。

ピアノから離れる。向かう先はあそこしかない。

おそらく、カノンは今頃さらなる現実に向き合えずに苦しんでいることだろう。だが仕方ない。それはいつか必ず明かされる伏線で、知らずして『先』に進むことはできない。だからこれは必要な過程なのである。

と伝えても、本人をさらに困惑させるだけ。

カヲルの心境はどことなく穏やかだった。感情が薄いというわけではなく、この超然とした態度はいつたいつから身についたものか。

目的地——カノンの部屋の前のドアでぴたりと足を止める。数度呼吸をし、ノックした。

「碓くん、僕だよ。入っていいかな？」

返事はなかった。

しかしごそごそと部屋から物音がしたのを聞き逃さなかった。

一般的に、カヲル含めネルフから与えられている個室にロック機能はない。ごそごそが落ち着いたらしいことを確認してからスライドドアを開いた。

カノンは確かにいた。布団で身体を完全に覆って小さく丸くなっている。ベッドの脇には少し赤い汚れがついたスカートが雑に脱ぎ捨てられている。

地上に出たとは考えられないから……ジオフロントにいたのか。そう結論づけてカヲルはベッドに近づいた。

あと一歩という距離になってもカノンは何も反応を示さなかった。カヲルは話を始めた。

「第13号機が完成した。予定通り、僕たちはエヴァに乗るだろう」

「……知ってる。お父さんに言われた」

「知っていたんだね」

「でも私乗らないから。エヴァ乗らない。何もしない」

ぶつきらばうに答えるその様子は、なにか嫌なことがあったのだとすぐにわかる。

その原因も、きっと碓ゲンドウに会ったことに起因するだろう。

「どうして？」

「どうしても何も、私がエヴァに乗ったからこんな世界になったんでしょ?」

「間接的にはそうだね」

「じゃあ乗らないでしょ普通」

早口にまくしたてるカノンの声には焦りと恐怖が入り混じっていた。変に刺激しないよう、カナルは努めて冷静にコミュニケーションを続ける。

「このままだと人類は緩やかに絶滅する。それを防ぐための第13号機なんだ」

「嫌だ! 私乗らないから! そんな理由なんかじゃ乗らないから!

それにもうお父さんの命令を聞く必要もない! 私お父さんの子供じゃないし、人ですらないんでしょ?! 頭がおかしくなりそうだよツ! だって私のこれまでが全部意味なかったってことじゃん!!」

「碓ゲンドウからそう言われたのかい?」

「……冬月さんから」

「そうか」

綾波さんを助けてなかった。私なりに必死の覚悟を決めて、その結果、何もできずにただ世界を滅ぼしただけ! それに私はクローンだった? なにそれ? テレビのドッキリって言ってくれないと本当に狂っちゃうよ?」

ギリギリと一文字一文字を摺り潰して発する様子は、普段のあどけない佇まいとは真逆だ。こちらにまで奥歯を噛みしめる音が聞こえる。

「そんな言葉で君が救われるとは思わないな」

カノンの身体が掛け布団越しでもよく分かるほど激しく震える。

「救いなんてないよ。そういう次元の話じゃないってことくらい、渚君でもわかるでしょ?!」

突然起き上がったカノンの顔はおよそ正気とは思えないほど憔悴しきっていた。目元を真っ赤に泣き腫らし、精神的にやられたのか、荒い呼吸を繰り返すせいで軽い過呼吸に陥っている。

自身の制服のネクタイを乱暴に外し、襟首を広げて細い首筋を晒し

た。

そこに巻かれている、というより接合されたとしか思えないほど継ぎ目の見えない黒いチョーカーは、ただのアクセサリーなどではなく、トリガーで装備者を確実に殺す首輪だ。

「エヴァに乗ったらこれで殺すってミサトさんにも脅されてるんだよ？ だから何もできないし、もう何もしたくないの。本当に私を救いたいだったら——」

そう言うと、カノンはカヲルの右手を掴み、ぐいと強引に自身の膨らみに触れさせた。その動きに少しの躊躇いはなかった。あまりに想定外の行動に、カヲルはその手を咄嗟に振り払うことができなかった。

制服の上からでもわかるその膨らみの存在。下着越しではあるが、それでも感じる確かな弾力は生物学的に男として何も感じないわけではなかった。

「何も考えられないくらい、私をめちゃくちゃにして壊してよ。それもできないのなら、もう……殺して……」

消え入りそうな声でそう、懇願された。

破滅の願い。ボロボロだ。何もしなくても消えそうな心。カノンの望み通りにするのもしひとつの対応としてはもちろんある。

だが、一時の感情のまま放ってしまった言葉の重さをカノン自身がわかっていない。まだまだ心が幼い、と悟りつつカヲルは優しく手を振り払った。

「それは……駄目だ。落ち着くんだ。そんなことをしても君自身がさらに傷つくだけ。僕も含めて。これは間違った行動だよ」

「じゃあ、どうしたら……!」

頭をガジガジと掻きむしり、再び泣き始める。

カノンがここまで業を背負う必要は本来なかった。そもそもこの運命は受け継いだもの。だから、本人が本当に望むのであればすべてを放棄して逃げることをカヲルには止められない。

だが、それでも、『碓カノン』として生きるこの少女の生き様を、中途半端なところでゲームセットにさせてはならないとカヲルは考え

る。

乱れてしわしわになった制服。カノンの背中は見た目以上に小さい。軽く叩けば砕けてしまいそうなほど。そこに乗っているのは世界を終わらせたという謂われのない罪。

救いなどという抽象的で現実性のない言葉は一時の安らぎにもならないかもしれない。

「だから一緒に第13号機に乗ろう。エヴァで変わってしまったことは、エヴァで再び変えてしまえばいいんだ」

「そんなこと言ったら、もう何も信じられないよ」

「でも、僕の話は信じてほしいな」

「……無理だよ」

「どうして？ 短い間ではあったけど、互いを理解し合えたと思っっているよ。君といて僕は楽しかった。君は違うのかい？」

「違うよ、楽しかったよ、すごく。でもそれとこれとは違う。だってこれは命に関わる話だよ？」

「そうだね。だから僕がいる。僕が必ず君を守る。だからどうか。どうか僕のことを信じてほしい。お願いだ」

初めて聞く、芯のある低い声だった。

カノンはカラルの抱く印象とは大きくかけ離れた物言いに静かに驚く。カラルもそれ以上言葉を紡ぐこともしなかった。

涙に濡れた目元を四度ほど指で擦る。そして身体の向きを変えて、カラルと正対した。

何処か掴みどころがない雲のような雰囲気を纏っている普段とは全く異なり、今まで見たことのないほど真剣な眼差しで見られていることによく気づき、カノンは息が詰まった。

「……」

これまでは誰かを救うためにすべてを捧げてきた。

ありきたりな理由だが、他人からすると立派な理由。

たまには守られるのも悪くない。違う。守られていたいという願望が強くなる。だってこれまでこんなにも頑張ってきたのだから。それ相応のご褒美というか、そういったものがあるべきだと。

自分は世界を滅ぼしたらいいからそんなことは口が裂けても言えないが。とはいえエヴァに乗る以上、何をするかはまだ知らないが、戦うという義務がカノンにも課せられる。その上で、カナルはカノンを守ると言っている。

「本当に？」

「本当に。絶対だ。顔を上げてごらん」

その意図は分からなかったが、カノンは言われるがままに首を差し出すような体勢をとった。するとカナルが両手をそって首元に近づける。それを静かに目を閉じて受け入れる。

そして、聞き慣れない電子音が鳴った。と同時に僅かに感じていた圧迫感が消えた。

「え、あ、え？」

気づいた頃にはそれがカナルの手にあり、流れるように自身の首に移し替えた。再び短い電子音が鳴り、それ——チョーカーに赤い線が走るのが見えた。

カノンの困惑をよそに、カナルは自らを殺すかもしれない首輪を人差し指で触れた。

「リリンの呪いとエヴァの覚醒リスクは僕が引き受ける。気にしなくていいよ。元々は僕を恐れたリリンが作ったものだからね。いずれはこうするつもりだったんだ」

カノンには何を言っているのかよく分からなかったが、エヴァに搭乗した結果殺されるという最大の脅威が解決したことは間違いない。

その事実が、荒んでいた心を多少なりとも落ち着かせることができた。落ち着かせることができた結果、ついさっきまでの言動を冷静にふり返る余裕が生まれた。ストレスに押し潰されて、周りが見えなくなっただけで自己中心的な振る舞いをしていただけの自分の姿。

勢いのままにあんな破滅的な誘惑なんてしてしまった。カナルが自制心のある少年だったから良かったものの、あまりに無責任なことだった。

ベッドから降り、裾がまだ少し赤いスカートを履く。床に投げ捨てていたS—D A Tも拾い上げ、再びベッドに腰掛ける。

「ちよつと落ち着いた。私、バカなことしてたね……本当にごめんなさい」

「仕方ないさ。状況が状況だ。しかも冬月副司令にそんなことまで言われたら、誰だって気をやられてしまうだろう」

「……」

「しかしどうやら君も冬月副司令も、少し勘違いをしているようだけどね」

意味深に述べるカナルはカナルの隣に腰掛け、そのまま矢継ぎに続けた。

「いいかい碇君。君の希望はドグマの爆心地に残る二本の槍だけだ。それが補完計画発動のキーとなっている。僕らでその槍を手にするばいい。そうすればネルフもフォースインパクトを起こせなくなるし、第13号機とセットで使えば、世界の修復も可能だ」

世界の修復という言葉に目に見えて反応を示したのは言うまでもない。

「よかった……渚君ならきつとできるよ」

「君となら、だよ。エヴァ第13号機はダブルエントリーシステムなんだ。二人でリリンの希望となろう。今の君に必要なことは何よりも希望。そして勇気と心の余裕だからね」

「すごいね。私のこと、なんでもわかっているみたい」

カノンは照れくさそうに頬を赤らめた。

「いつも君のことしか考えてないからね」

「え？ あ、ありがとう……」

純粹に告白とも受けて取れるカミングアウトに、カノンの乙女心が揺さぶられる。だがカナルの人柄を知っているカノンは、これは女殺しの常套句だと自身を言い聞かせて落ち着かせる。

彼の顔をちらりと見ると、こちらの様子をうかがっていた。ここまですくしてもらったのに、目を逸らすのは流石に失礼だと思っただから、勇気を出してこちらからも相手の顔を視界にしっかり捉える。

「ありがとう。渚君」

へにやつ、とした微笑みになっていたかもしれぬ。

だがカヲルはそんなカノンの小さな笑顔を受けて満面の笑みで返した。

「カヲルって、呼んでほしいな」

「うん……カヲル君。私も、その、カノンでいいよ」

「ありがとう」

「私の方こそ、色々とありがとう」

立ち上がったカヲルが手を差し伸べる。カノンよりもずっと大人びている彼の手はとても頼もしかった。

「ピアノと同じだ。二人一緒ならいいことがあるよ。カノン君」

「うん。頑張ろうね、カヲル君」

自分と同じくらい色白な手を掴み、カノンは立ち上がった。

引きこもりはもうやめて、エヴァに乗る。罪悪感を完全に拭い去ることはまだできないが、なんとか前向きな決意ができるようにはなった。

世界を元に戻す。

それこそが——それだけが唯一の希望。

変わり果てた赤い地球を、青く美しい地球に戻すのだ。

カノンは勇気を持ってひとり深く頷いた。カヲル君とならできると。

「……ちなみにカヲル君。さっきのその……あの……あれは忘れてくれると嬉しいんだけど」

「あれって？ ……ああ、君が僕を誘ったことかい？」

澄ました顔で言ってくるところ、これといって印象深い出来事ではないと思われているのだろうか。であるならばその方がカノンとしては助かる。

まだそういうのに反応してもらえらることで喜ぶほどの年齢でもない。

「わざわざ口にしなくていいからっ。死にたくなるほどの黒歴史なんだから、絶対にそのことを話すことも、思い出すのはダメだから。今すぐ全部忘れてよね」

「わかったよ」

これがふたりの最後のフランクな会話になった。

ターニングポイント

羞恥で消極的になっている場合ではない。

プラグスーツに着替え終えて更衣室を出ると、すでに着替えたカヲル君が私をドア横で待っていてくれた。

何気に彼のプラグスーツ姿を見るのは初めてである。私と同じ黒を基調としていて、デザインも似ている。第13号機はダブルエントリーだからそういったところでも調和性を意識しているのか。私と同じで、彼のスラリとした身体のラインが浮き上がっている。そもそも男子のプラグスーツ姿を見ることが初めてだった。

まじまじと見ないように注意しつつ私は口を開いた。

「ごめん、お待たせ。行こうカヲル君」
「うん」

私達の間になんかあった世間話などといった会話は生まれなかった。

これからやるのは、壊してしまった世界を修復するための大切な儀式。あのカヲル君であっても緊張しているのだろうか。私はそんな横顔を一瞥する。

プラグスーツの硬い靴底が床を叩く音が静かに響く。

ふたりで一体のエヴァを操縦するというのが初体験、いや、世界で初の試みになるだろう。テストなしの一発本番。しかしカヲル君とならきつとできると信じている。

カヲル君に導かれて到着したのはよく見知ったケイジ——ではなかった。ターミナルドグマへの直通空洞。その真上。そこに新たなエヴァが両肩を上からのアームでホールドされた状態でぶら下がっていた。

外見は初号機に酷似。異なるのは、瞳が四つであることと、胸部装甲にやや厚みがあるくらいだ。エントリープラグの挿入口はうなじではなく、その左右からクロスするように口がある。私たちの搭乗を今か今かと待っているかのよう。

陰湿な真つ暗な巨大空間。地面にある奇妙な文様が放つマグマの

ような光だけが私達との地表距離を示す。文様の中心、非常に分厚いゲートのロックが解除され、アラート音とともにごうん、と重い音を響かせながらゆっくりと開かれる。

底が見えない。赤色灯が一定の間隔ごとに配置されているのは確認できるが、本当に底が見えない。

私たちは分かれてエントリープラグに乗り込み、ハッチが閉まると自動的にエヴァへの挿入が開始された。

ああ。

あの紋様は確か、セフィロトの樹というものだった気がする。男子はああいうのが好きそうだ。

プラグの挿入が完了したという通知がされ、次にシンクロのフェーズに移る。見慣れた係数、用語の羅列がディスプレイ上を走り、成功の文字が表示される。そして虹やモノクロといった景色が前方から後方へと突き抜けた後――

「シンクロできたね」

そう、右に現れたカヲル君に語りかけた。

私たちのリンクが、互いのシートから伸びるオレンジ色の五線譜のような光で絡み合っている。

「当然だよ。――さあ、カノン君」

「うん」

足元に開かれるは底なしの地下。

向かうはずとずっと下の、私のカルマ。

槍を手に入れ、世界を救う。

「エヴァンゲリオン第13号機、起動」

声に反応し、第13号機が甲高い音を鳴らし、目元に黄色の光が宿る。

オートで動作確認が行われ、程なく完了する。私とカヲル君の動きは同期し、それが第13号機の動きとして出力される。適当に両手を握りしめると、それがしっかりと反映されていることを確認した。

「問題ないようだね。じゃあ行くよ」

「あのロープを使えばいいの?」

「流石に自由落下できる距離ではないからね」

上からゆっくりと降りてくるロープ。一定の間隔で小さい足の置き場がくつついていくだけだ。そしてすでに先客がいる。

首のない黄色の機体。

「Mark. 9……?」

「彼女は護衛さ」

「あ、そうなんだ」

Mark. 9と同じようにロープに足をかけ、降下を開始する。速度は軽いランニングくらい。

自分を高所恐怖症ではないと思うが、こうも暗闇を見せつけられると不安になってしまうのは無理もないと思う。命綱だってないし。

「そういえば壱号機は来ないの？ 護衛なら多いほうがいいんじゃないの?」

「僕たちが爆心地に向かっている間に本部を攻撃されたらどうしようもないからね。ヴィレの動きを警戒して待機だよ。それに、壱号機が表に出ることは基本ないんだ。だからMark. 9さ」

私たちが槍を手に入れた瞬間にすべてがハッピーエンドで終わるのだ。それならば護衛は壱号機も追加するかもしくはも待機にさせればいい。

私は……。

「護衛なんていらないよ」

どちらの機体も、あまり目に入れたくない。

壱号機には私のオリジナルがいるし、Mark. 9のパイロットは

「綾波さんじゃないのに」

空洞の雰囲気が変わる。

赤色灯すらなくなり、本当に完全な暗闇に包まれる。現在位置は爆心地から約3000m地点。

エヴァのヘッドライトが点灯し、深海のように暗かった空間に光が存在を放つ。筒状の空洞であることには変わらなかったが、壁との目視的な距離感を微妙に推し量ることができない。普通に考えるのな

のようなスライドクランク機構が駆動し、専用特殊装備をシートに接続させる。チカチカと機構が点滅し、エヴァの目がいつそう光り、高周波音がプラグ内に満ちる。

「テンポを合わせよう。ピアノの連弾を思い出して。——いくよ、カノン君」

静かに目を閉じ、カヲル君とすべてが完全にリンクする瞬間を待つ。

楽譜の五線譜に似た虹色の帯が私たちの前で球を描き、様々なパラメーターの付箋がその周囲を漂う。

葉の先端から雫が垂れる瞬間を待つかのように、際限なく先鋭化される意識は呼吸をも停止させる。

そして——

「っ」

第13号機が感知した私たちの完全なリンクと、私たち自身が感覚的にそれを知覚した瞬間は全くの同一だった。

右足の爪先がドームに触れた途端、高い金属音が響き、セントラルドグマの最終防壁が音とともに沈み込むように崩れ始める。それは自然的な崩壊ではなく、ドームは触れた部分を中心として無数の立方体に分解され、火花を散らしながらその存在を失っていく。

「やったね！」

互いに喜びの顔を向ける。

そのままMark. 9と降下を続け、ようやく地面が見えた。

「着いたよ。セントラルドグマの最深部。サイドインパクトの爆心地だ」

そこは白一色。

血色のL・C・Lが白骨化した無数の頭蓋で埋め尽くされ、不気味としか表現のしようがなかった。しかも、その頭蓋の大きさは人間のそれではない。巨人……おそらくエヴァと同じくらいの……。

ネルフの航空機が一機だけ、翼以外のものが原型を留めていない状態で放置されている。

一番目に映るのは、地面に倒れる赤い十字架の側で、助けを乞うよ

うに四つん這いになって右腕を空に伸ばす首無し白い巨人。

生命の母、リリスだ。

「これが、リリス？」

「だったものだ。その軀だよ」

「ミサトさん……命がけで守っていたのに」

妙なものに気づく。

ただの抉れた傷かと思ったが、よく見ると失った頸部から真っ白なエヴァの上半身が生えているではないか。しかも、自らの胸を槍で貫いている。いや、あれは——自分ごとリリスを貫いているのか。

「あれは……エヴァ？」

「そう。エヴァMark. 6。自律型に改造され、リリンに利用された機体の成れの果てさ」

「……………」

サードインパクトの瞬間、何があったのか。私には想像できない悲惨なことと、超非現実的なことが起こったことだけは予感できる。それくらいだ。

……ついに頭蓋の丘に足をつける。同時に骨を砕く音が響いたが、意識しないようにした。

改めて軽い動作確認を行い、Mark. 9も着地していることを確認してから、再びリリスを見上げる。エヴァの機体と比べても何倍も巨大な身体には、もう私の目には尊厳というものは存在していなかった。

「あそこに突き刺さっているのが目標物？」

リリスと同化しているMark. 6共々貫く槍と、リリスのうなじの少し下を貫く槍。その二本がきつとそうだ。

「そう、ロンギヌスとカシウス。二本の槍を持ち帰るには魂がふたつ必要なんだ。そのためのダブルエントリーシステムさ」

「それなら、私じゃなくても——」

ちらりと視線だけを後ろでこれまで沈黙を貫いているMark. 9に送る。

「いや、リリンの模造品ではムリだ。魂の場所が違うからね。さ、始め

るよ」

「え？ 模造品って……なら私もダメなんじゃ……？」

「大丈夫だよ。碇ゲンドウも君が条件をクリアしていることは知っている」

「それってどういう……？」

どうも腑に落ちなくてさらに問いたただそうとしたが、そんな場合ではないことは理解しているつもりだ。ここはぐっと抑え込んで、今やるべきことに気持ちを切り替える。

なだらかな骨の丘を上る。

一歩進む事に聞こえる破碎音は不快だ。はやく終わらせてしまいたいという感情がふつふつと込み上げてくる。

「——ちよつと待って、変だ」

突然、カヲル君がエヴァの歩を止めた。

この機体は私とカヲル君の意識の同調によって操作されている。どちらかがズレれば、操作に齟齬が生じてしまう。

顎に手を当て、二本の槍を見上げながら何かを考えているようだった。

「どうしたのカヲル君？」

と私は尋ねる。

「おかしい、二本とも形状が変化して揃っている」

そう言われてもう一度観察する。

槍の位置が高くて全体像を正確に把握しきれないが、確かに大きな違いは確認できない。

「早く槍を抜こうよ。そのためにエヴァに乗ってきたんだから……」

しかしだからどうだというのだ。私達の目標はまさにあれで、あれがなければ世界を元に戻すことができない。私のやったことが帳消しにならない。

必ずあの槍を手に入れなければならないのだ。

なおも考え込むカヲル君を鼓舞しようとした瞬間、すぐ背後で激しい爆発が発生した。爆風が第13号機をよろめかせる。

「うわっ!!」

瞬時に警戒態勢に移行。この爆発はこのエリアに仕掛けられていた不発弾だった可能性？ いや、いや、そんなはずはない。

であるならば――

エヴァ二機が急接近する警告が鳴り響く。だが即座に態勢を崩した第13号機を起き上がらせ、守りの姿勢を取る時間を与えてくれないことはわかる。

凄まじい速度で落下してくる赤いエヴァ。第13号機の肩パーツからパージされた部位から四つのクラゲ型ユニットが射出され、奇襲をユニットが展開したA・Tフィールドで防ぐ。

跡形もなく吹き飛ばされた頭蓋骨とL・C・Lが高く舞い上がる。そして巨大なオレンジ色の壁が重厚な衝撃音を響かせた。

一拍遅れて態勢を立て直した私はA・Tフィールドを通して奇襲した相手をようやく視界に収めた。

「式号機――アスカ……！」

これ以上は薙刀の刃が通らないと判断したアスカは素早く後方に下がり、華麗に着地する。

『カノン?! あんたまさかエヴァに乗ってんの?!』

アスカの声には驚愕と非難の色が見えた。

「そうだよ。エヴァに乗って、世界を元通りにするの！」

『ガキは、エヴァに乗るな!』

構えを取り、私に刃を振り下ろさんと骨の地面を高く蹴り上げる。私は即座にユニットを前方に展開して再び防御しようとする。

だがその前にカバーに入ったMark. 9の鎌が式号機の背後から首を撫でようとする、その瞬間、上部からの何者かの狙撃によってMark. 9が地面に叩きつけられた。

Mark. 9はしばらく狙撃者の対応に手間取られるだろう。

「っ」

引き続き予定通りユニットによるA・Tフィールドの展開で防御する。眩い火花を散らして式号機は仰け反るが、瞬時に態勢を立て直して突貫を続けてくる。そのどれもが、非常に機動力の高いユニットが高い反応速度で展開するA・Tフィールドに阻まれている。

アスカの敵意は強く、ついこちらが弱気になってしまいそうだと
うしてこんなことをしてくるのか理解できないが、だからといって反
撃するのも憚られる。私にはアスカを攻撃する理由がないからだ。
ただ私は、あそこにある槍が欲しいだけなのに。

「なんで邪魔するのアスカ?! あれは私たちの希望の槍なんだよ!」

『あんなこそ! 余計なこと! するんじゃないわよ! クソもやし
! またサードインパクトを起こすつもり?!』

「違う! 槍があれば全部やり直せる。これで世界が救える!」

式号機の猛攻が一旦止まり、だらんと肩の力を脱力させる。

武装を解除するのかと思いきや、ため息を吐き、

『……まだまだガキね』

と呆れ気味に言い放った。

「ツ!」

私の気持ちも知らないくせに、よく言ったものだ。

アスカはそういうところがある。そんなだから、今となっては昔だ
が、私にとってはしばらく前に家で大喧嘩したのだ。結局そのまま1
4年も経過してしまっただけなのに。

目が覚めて世界が変わり果てていて。

何もわからないままここに拉致されて。現実を知って絶望しながら
も、ようやく希望の光が見えたのだ。それに向かって頑張っている
ところなのに、なんで邪魔する!

「この……わからず屋!」

アスカを黙らせる。

怪我はさせない。式号機を戦闘不能にさせるだけでいい。ユニツ
トを守勢から攻勢に切り替える。

式号機の周りに纏わりつき、すばしっこく飛び回る。コンマ一秒で
も視界から逃すと、その隙に背後を取ってA・Tフィールドによる攻
撃を許す。

エヴァの操縦スキルは明らかに当時より卓越しているが、蝶のよう
に舞い蜂のように刺す攻撃をすべて捌き切ることはできず、あつとい
う間に式号機を吹き飛ばす。

その間に先程から頑なに動かないパートナーに檄を飛ばす。

「カフル君も手伝ってよー！」

横目で彼を見ると、考えるポーズのまま石像のように固まっている。

「……カシウスとロンギヌス、対の槍が必要なんだ。なのにここには同じ槍が二本あるだけ」

思い通りにいかない。焦燥感がピークに達する。

Mark. 9は相手の二体目のエヴァとの戦闘で合流できない。

「カフル君ー！」

「そうか……いー！　そういう事か、リリンー！」

ユニットの猛攻をついに突破したアスカが、野太い雄叫びを上げながら私に肉迫する。

刃の軌跡は推測できる。私だって伊達に戦闘経験を積んでいない。これならばA・Tフィールドを展開せずとも余裕をもって回避できる。

大振りな振り下ろしを後方へ跳躍することで回避。直後、デイレイを挟んでユニットと連携して私が直接式号機に攻撃しようと両足の踵に力を入れた瞬間。

運悪く足場の骨が崩れ、片足が沈み込んで重心がズレてしまい、アスカに致命的な隙を晒してしまう。

「！」

それを見逃してくれるはずもなかった。

一瞬で薙刀を持ち直し、アスカが爆発的な速度で私との距離を詰めてくる。

「まず、いッー！」

脊髄反射でユニットを私とアスカの間に移動させる。A・Tフィールドを張る余裕もない。

物理で凌ぐ！

第13号機の胸元に吸い込まれるはずだった切っ先は、複数のユニットを貫いて爆風を起こすのみに終わる。

想定外の爆風の強さ。怯む私に追撃が来る！

煙から上空へ飛び出す赤い影。薙刀を変形させた双剣を両手に持ち、今度こそ刈り取らんと落下してくる。

少し前まではこちらが優勢だったが、あつという間に形成が逆転して翻弄される側になっている。

アスカの双剣を、伸ばした両手で受け止める。掌に刃が少し沈む。そこにさらに式号機の自重が加わり、重い……！　そして痛い！

重心を意識して下半身をしっかりと地面に立たせ、上半身にひねりを加えて式号機を投げる。それしかない。間違いなくアスカも根性で抵抗してくるだろうが、ここは勝負だ。単純な力では負けるが、重心の安定している私の方が有利。

「邪魔しないで！」

『大人しくやられる、クソもやしいッツ!!』

勢い負けしたら一気に押し込まれる。

だからこちらも負けじと吼える。刃が更に食い込む。

だが、急にバッテリーが切れたかのように完全に脱力した式号機の間隙を逃すほど私も素人ではない。

本来の私の力より何倍も出力する第13号機は式号機を遠方へと投げることに成功した。激しく骨の残骸を巻き上げながらボロ雑巾のように倒れる式号機。まだバッテリーが完全に切れたわけではなさそうだが、動きは非常にぎこちなく、これ以上の戦闘は不可能と判断していいだろう。

おそらくペアで来ただろうエヴァの支援で携帯型バッテリーが投下され、それににじり寄るのを見届けると私は背中を向けた。

「カヲル君、今のうちに槍を」

なんとか障害を取り除くことができた。ようやく目的を果たすことができる。リリースとの距離は近い。すぐにでも足元に到着する。

「……やめようカノン君。嫌な予感がする」

「えっ？」

カヲル君の顔色は見るからに良くなさそうだ。

どちらかと言うと辛そう。明らかに異常であることはひと目で分かる。だがここで止まるわけにはいかない。

ここまで来たのだ。あともう少し。あともう少しで終わる。だからここは多少無理をしても頑張るところではないのか。

「だめだよカヲル君！ 何のためにここまで来たの！」

「もういいんだ。あれは僕らの槍じゃない」

「僕らの槍じゃないって……槍が必要だって君が言ったんだ。だから私はエヴァに乗ったんだよ！」

私の部屋であれだけのことを言って、私を奮い立たせてくれたのだ。それに応えたいというこの強い想いをどうすればいい!!

誰もが私の邪魔をしてくる。アスカも、そしてカヲル君でさえも。もういい。もういい。ひとりでやる。私は槍を抜くと決めた。そのためここにいる。

リリースの足元に辿り着いた第13号機がよじ登り始める。

カヲル君は口だけだ。私に協力してくれないのならもういらぬ。ガコン、とシートの脇にあるレバーを操作してシングルオペレーションに切り替える。

第13号機はもう、私のもの。

「操作系が……！」

カヲル君の悲痛の声は耳に入らない。

私の視界にあるのは赤い二本の槍、ただそれだけ。リリースのうなじに到達し、Mark. 6の身体に登り、ついに槍が手に届く位置に。希望が、ここにある。

「カヲル君のために、みんなのために槍を手に入れる。そうすれば世界は戻る！ そうすればミサトさんだって——！」

元に戻った世界で、またみんなと楽しく過ごしたい。ミサトさんやアスカ、綾波さんとクラスメイトのみんなとおしゃべりがしたい。

やりたくてもまだやれてないこと、たくさんある。

また学校生活がしてみたい。青春だって醍醐味じゃないか。それだってしてみたい。いっぱいいいっぱいしたいことがあるのだ。目の前の槍を抜く、たったそれだけでその願いが叶う！

だから、抜く——！

『ヤバイ、コネメガネ！ 妨害物は片付いてる！ AA弾の使用を許可

！ 壱号機はもう侵入に気づいてるはず！』

リリスの背に立つ。

それとほぼ同時に肩辺りに何かが一発ほど撃ち込まれる。痛みはあるが全くの許容範囲内。弾は馴染むように体内に取り込んでいった。

そう、この機体にはA・Tフィールドがない。そのためにあのユニットたちを装備していた。

もう私を邪魔するものは何もない。探知によれば、壱号機も落下してきているからあと数十秒もすればここに到着する。

第13号機の両胸が赤く輝く。

甲高い高周波が最高潮になった瞬間、胸部装甲が分離して新たな二本の腕へと変形した。

——異型。人ならざる姿。御身。

四つ腕を広げ、世界再編の儀式の開始を告げる。

漫画のような、独りよがりな世界を望むのではない。みんなが望む、普通で、良い意味でも悪い意味でもすべての人間に平等な、以前と同じ世界に戻す。そこに私の余計な意志は介在しない。

「だめだカノン君……!!」

創造主や女神になりたいのではない。世界を救いたいわけでもない。世界を破壊した罪の贖罪として、これは私が行わなければならない義務である。

カナル君とも元に戻った世界で過ごしたい。だからそんな顔をしなないでほしい。

そして。

ついに槍をこの手に握——

『カノン、お願いやめて!!』

その言葉に、私の手が止まる。ただ言われただけならきつと無視していた。だが手を止めざるを得なかった。

なぜならそのあまりに切実な声を聞くのが初めてで、あまりに信じられなくて、つい息が詰まるほどだったからだ。

ゆっくりと後ろを振り返り、声のした方向を見下ろす。

「……アスカ」

『やめて、カノン……それを抜いたらあんたは絶対に後悔するわ。あんたは碓ゲンドウに操られてるだけよ』

やめてほしい。

今になって、この瞬間になって情に訴えかけるような言い方は一番私に効く。わかっててやっているとしか思えない。

「——っ、——……」

『その槍はあんたが思ってるようなものじゃない。むしろ逆。あんた、また世界を終わらせたいの!?!』

「アスカは黙ってて!」

うるさい、うるさいうるさい!

目標が文字通り手の届く場所にあるのに惑わすようなことを言わないで!

もう一度黙らせようか。今ならまともに動けない式号機の脚を折るくらいできる。

『誰が槍のこと教えたの! 碓ゲンドウでしょ!』

「違う、カヲル君だよ!」

苛立ちを隠すことなく、アスカに当たるように声を荒げる。

「あ」

そういえば。

……その本人はさつきからずっと私にやめようと何度も言っていた。カヲル君を見やる。彼は私が一旦思いとどまったことに安堵の息

を吐いている。白い顔をより一層白くさせている。

さつきまではほとんど相手にしなかったが、今度はきちんと話を聞いてみることにした。

念を押すように尋ねる。

「この槍は本当に抜いたらだめなの？」

「……抜かないほうがいい。槍の状態が事前情報と違う。一度帰還するべきだ」

「私、カヲル君を信じたらからここまで来たんだよ？　なのにやつぱりやめようなんて言い出して、今の私の気持ちが変わる？」

自然と感情が乗ってしまう。

「本当にすまないと思ってる。誹りはあとでいくらでも受ける。だから今は、今はどうか槍に触れないでほしい」

「……ッ！　……——」

裏切られたのに、また信じてしまおうとしている自分がいる。

だって私はどこまでも冷たいヒトではないから。カヲル君が私に悪意を抜けてきたことなんて一度たりともないから。私達の信頼関係に大きな亀裂は入ったが、壊れはしないほど強固。

私は冷静。いたって冷静。冷静に考えた結果、この槍を抜くべきという結論は覆らない。

だがこのもやもやは——胸に泥が詰まったようなこの息苦しきは何だ。ふたりの魂の訴えを退けてでも強引に槍を抜いても私の心は救われるのか？

ふたりとも悪人なんかじゃないことは知っている。これではまるで今の私が

「悪人じゃない……」

目の前のくすんだ希望。

ゆつくりとMark・6の身体から降り、リリースの背中できくりと膝を折る。

世界を元に戻す手段を直前で断念させられる絶望。あまりにも悔しすぎて、また泣いてしまう。

これから私はどうしたらいい？　どうしたら償えるはずのないこ

の罪を向き合っていけばいい？

「……っ、ううっ、うっ……」

『カノン……』

ここまで懇願されたら、やめる以外の選択肢がないじゃないか。ふたりともずるい。私の性格につけ込んでいるみたいだ。卑怯だ。

「っ……わかつ、た。槍は……抜かないよ……うう……」

これが私の選んだ結末。

後悔しかない。ただ、ふたりの制止を無視できるほど覚悟が決まっていなかっただけ。

——そして。壱号機が来る。

絶対レイ度

落下音が段々と大きくなる。

壱号機は私たちがセントラルドグマに潜っている間、ヴィレからネルフ本部を強襲されないよう残されていた。

ネルフのエヴァに潜入されている今、もう待機する必要がなくなつた。

補足時から気づいてはいたが、壱号機は自由落下している。いくらエヴァの機体といえど、この超長距離降下を何の装備もなしに耐えられるとは思えない。

流星の如くドームに侵入した壱号機は、自身と地面との間に何重ものA・Tフィールドを展開する。

それに接触するとA・Tフィールドがゴムのように伸びて落下速度を吸収し始める。一枚が耐えられず破れても、次の一枚、また次の一枚と勢いを受け止め続ける。

そうして大爆発のような衝撃をドーム全域に轟かせながら壱号機は着陸に成功させた。

『……なんてやつ』

アスカの悪態。その言葉通り、あんなA・Tフィールドの使い方なんて私も見たことがない。

初号機に瓜二つで、私のオリジナルが保管されている機体。戦闘力は未知数。少なくとも私の味方……のはずだ。

壱号機の蒼い眼光は、ドーム上部の崩れきつてない亀裂、アスカ、そして私を順に見た。

纏う雰囲気には戦う意思はあまり感じられない。オリジナルである碓レイの意思によって操縦されているのか定かではないが、今更ここに何をしに……いや、考えられるのはひとつ。ヴィレのエヴァの排除だ。

ここで潰すことができればヴィレにとって取り返しのない致命的な大打撃になる。そう考えるとタイミング的には完璧だ。弐号機はまだ万全ではない。

しかしながらそれを何もせずに見ているだけという選択肢は私にはない。

だが、とてもその選択に従って動けるような精神的状態ではない。

「カノン君、操作系を戻してくれないかい？」

「そう、だね……うん」

鼻をすすり、シングルオペレーションからダブルオペレーションに戻そうと手を動かし始める。

ふたりに操作できるようになれば、最悪壱号機との戦闘をカヲル君に任せることもできる。

しかし壱号機は私の予想に反し、式号機を完全に無視してリリスの方向——私の方へと向かってくるのではないか。

「こつちに来る……？」

次の瞬間戦闘になってしまうかもしれない。その最悪の想定に身体が強張り、操作系を戻そうとしていた手は自然と操縦桿を握り直し、身体に染み付いた無意識が戦闘モードに切り替わる。

「今の壱号機は何をするか僕にもわからない。反応できるようにだけはしておくんだ」

リリスの踵から、背中、うなじとたった二回の軽やかな跳躍で私の前に立つ。

やはり何も意思は感じない。至近距離すぎるため、数歩下がって様子を窺う。リリスに刺さったままの槍を見て、私を見る。

……なぜ抜かない？

という無言の圧を全身の肌で感じ取った。瞬間、私は壱号機の行動を悟った。

「アスカ!!」

そして、

『コネメガネー!』

『承知の助!』

先程壱号機が一瞥したドーム上部の亀裂が煌めき、ズドン、と狙撃音が鳴った。

私が槍を抜こうとした瞬間に撃ち込んできたのがあのピンク色の

エヴァだったのか。

A・Tフィールドで難なく弾丸を防いだ壱号機は再び跳躍してMark・6の頭部に上った。

「……壱号機に魂はひとつしかない。抜いたとしても最悪の事態はまず発生しない。ということは、壱号機の役目は僕たちが失敗した場合の次の一手？ ……槍の回収か？」

カヲル君が分析している間に、バッテリーのチャージを済ませたらしい式号機が壱号機に飛びつき一緒にリリスの身体から落下する。

「いや、腑に落ちない。それなら今壱号機を寄越す必要はないはずだ。何かを見落としている気がする。碇ゲンドウと冬月コウゾウは何を考える？」

壱号機はネルフのエヴァ。

なら味方だ。であれば本当にアスカと一緒に戦闘をしてもいいのか？ という葛藤が生まれる。

壱号機が槍を抜くつもりだと悟った瞬間、咄嗟にアスカの名前を叫んでしまった。敵対行動と思われるもおかしくない。

今どうするべきなのか。まわらない頭を必死に動かして最適でなくとも最善を導き出す。

「私たちは壱号機の味方。だから攻撃はしない。でも式号機が破壊されないようにはする」

カヲル君の言う通り、壱号機が槍を抜いたところで儀式は始まらない。なら別に見逃してもいいと考えた。

カヲル君に問う余裕はない。すでにアスカと壱号機との戦闘が今にも始まろうとしている。

リリスの背から降り、互いに距離を取って隙を窺う両者に接近する。私の気配を感じたのか、壱号機がこちらを振り向いた。それが合図となり、式号機が目にも止まらぬ速さで肉迫する。

邪魔をするな

私に向けられた無音の重圧。

肌が波打ち、全身の骨が軋み、内臓が圧迫された。

「オ、ぶ、い」

視界が……いや、生命活動が数秒ほどシャットアウトさせられたかと錯覚する、初めての感覚だった。

いつの間にか第13号機は倒れていた。催した吐き気に耐えられず、カヲル君のしている横で胃の中身を倒れたまま吐き出してしま
う。

今のは……なん、だ。

「カノン君!? どうしたんだい!」

怪我はない。大した肉体的なダメージを受けた様子はない。精神的ダメージとも違うような。起き上がることはすぐにできる。

カヲル君は生命の危機を刺激する今の圧を感じなかったのか？

口元を拭い、目の前で浮遊するL・C・Lに溶けた吐瀉物を手で
払った。

「何か……やられた。痛くはないけどすごくキツイ」

これを何度もやられたら死ぬかもしれない。

壱号機の間をついたはずの弐号機はいつの間にか頭を鷲掴みにさ
れている。

地面を蹴り飛ばし、一気に壱号機の元へ翔ぶ。どうせ私の動きも読
まれているだろう。変に突撃するのではなく、目の前で止まり、攻撃
するでもなく、あえて普通に接するように壱号機の腕を掴んだ。

「アスカを放して」

頭がこちらを向く。

先程の言霊のような干渉はしてこない。しかし、弐号機を掴む手に
さらに力が入り、アスカの苦痛の呻き声を聞いた瞬間、行動した。

腕をつかんでいた手と反対の手を壱号機の首元へ添える。そして
右足で思い切り両足首を刈り取るくらいの気持ちで蹴り上げた。

私の両手がそれぞれ支点となり、足元を掬われてバランスを失った壱号機が倒れる。同時に弐号機も解放される。

壱号機はすぐに飛び跳ねて私たちと距離を取り、上部からの援護射撃を器用に躲しながら再び槍の元へ移動する。

ここで私は、本当に抜かせていいのかという葛藤がまたしても発生した。

アスカたちは槍に対して行われようとする全てを防ごうとしている。私はネルフ側の人間。ヴィレが嫌で抜け出したのだ。そのヴィレ側であるアスカに全面的に協力というわけにもいかない。

今の槍が想定通りの状態でないのなら、きちんと問題ないことを確認をしたうえで改めて手にすればいい。またここに降りてくる面倒を除くために一度持ち帰るという選択も理にかなっている。

私は槍で世界を救うことを諦めていない。今やることを苦渋の選択で諦めただけだ。

「アスカには悪いけど、協力するつもりはないよ。今のはアスカが傷つくのが嫌だったから止めさせただけ」

『ネルフに槍が渡ったら終わりなのよ！ アンタまだそんな生温いこと言ってるの？!』

バッテリーの充電が不十分だったのか、再びガクリと項垂れてダウンする弐号機。

『クソッ!』

私はそんなアスカを尻目に壱号機の後を追う。

すでに壱号機は二本の槍に触れ、抜く寸前だった。ハニカム構造の眼がいつそう碧く輝き、顎の拘束具を破壊して口を開く。

そして轟く超咆哮。

カタカタと地面に散らばる無数の頭蓋が震えて互いに接触する音が不気味だった。

第13号機とは違って腕が二本しかないはずの壱号機の臂力は並大抵のものではなく、両足首を白化したMark. 6の身体に沈み込ませている。

その間にも撃ち込まれてくる弾丸もA・Tフィールドで拒絶し、つ

いに勢いよく槍が抜かれた。

その瞬間を見上げていた私は、もし壱号機が覚醒状態になった場合は手のひらを返して壱号機を速攻で撃破するつもりだった。

しかし次に発生したのは、リリスの軀があらさまに膨れ上がり始めたことだ。みるみる極限まで肥大化するリリスは、風船のように一気に破裂し、セントラルドグマ全体を浸水させるほどのL・C・Lを噴き出す。

「うわっ!!」

唐突に足場がなくなつて落下するが、なんとか咄嗟に受け身を取ることができた。

壱号機は槍を握りしめたまま、不思議な力でその場に浮遊している。そして壱号機の視線の先には、先程までは絶対にいなかった第三者が存在した。

その第三者は浮遊していた。

しかし横たえるような形で、しかも節々を不自然に痙攣させている。明らかに異常だ。さらに、あれはどう見てもエヴァである。そのシルエツトはおそらくリリスに同化していた機体、Mark. 6と一致する。

何が起こっている？ たくさんのことが一気に起こっているせいで状況の整理ができない。

視界の端で新しいディスプレイが表示される。警告音とともに表示されたその文字列は、

「パターン青!! 第12の使徒!!」

意味がわからない!

あれはエヴァだ! エヴァが使徒なわけが——いや、3号機の例があった。だからといって、今、この場で使徒が活動を再開すればどうなる?! そもそもリリスと同化していたのにどうして一緒に消えずに分離した!?

……サードインパクトの弾丸はこいつか!?

しかしリリスが破裂した今、姿を見せる理由はもう——

「カヲル君、これって本当にこのままで大丈夫なの!？」

「止めよう！ 壱号機は何かをしようとしている！ きつと良くないことだ！」

壱号機は緩やかに降下し、L・C・Lの水面に立つ。それ以上のアクションは見受けられない。

私は一刻も早くカヲル君にも操縦権を復活させるべきとは思いつつもバシャバシャと浅い池を蹴り進めながら接近した。

混乱が混乱を呼び、カオスな状況になっている。

私はもう、槍で世界を救うことすらこの時はすっかり頭になかった。

「こんなことをして何がしたいの!?!」

答えはない。

足を動かさずに私の方へ滑らかに平行移動してきた壱号機が私を見下ろす。攻撃の予兆は見られない。

一方的なものではあったが、何度か私に意志を垣間見せてはいる。だからコミュニケーションは取れるはずなのだ。

碓カノンは碓レイのクローンであり、自身のクローンが目の前にいるというのが不快なのだろうか。

無言の時間がしばらく続くかと思われたが、そんなことはなかった。壱号機の両腕に微妙に力が入ったのを見て、私は身構えた。

そして次に壱号機が行ったのは、あまりに予想外で、驚くほど自然な動きだった。

両腕を軽く振り、なんと持っていた二本の槍をこちらに投げてきたのだ。

攻撃の意図なんてない……そう、まるで床に落としたり消しゴムを投げ渡してくれる友達のような。穂先がこちらに向いているわけでもない、何なら受け取りやすいように投げられている。

だからこそ、私も呆気にとられ、

「えっあっ」

深い考えを介在させることもできず、脊髓反射で自然と両手を差し出し。

どちらの槍もしっかりと収まってしまった。

「

あ

直後にまた「あ」と音を発しようとしたが、すでに何もかもが手遅れだった。

カヲル君の嫌な予感が外れて、正しく儀式が始まるのではと逃げの思考が脳裏をよぎったが、第13号機の制御が一切効かなくなったのを瞬時に理解し、違うとわかった。

槍の穂先が急に姿を変え、螺旋状から二又へとなる。

「あ、？」

いつの間にか表舞台に戻ってきたMark. 9が、電子音のような鈍い咆哮を上げ始めて再起動しようとしていた第12の使徒の首を鎌で刈り取る。

人が乗っていればそれで終わりだが、使徒はコアを破壊されない限り死なない。それを指摘する気力なんて存在せず、また途端に切断面から黒い繊維状の物質が触手のように飛び出し、宙を彷徨い始めたかと思いきやこちらに急接近してきた。

「ひっ！」

思わず私は両腕で顔を覆ったが、機体にダメージは発生しなかった。それどころか第13号機を包むようにそれらは集結し、急速に黒から赤へ色を変え、どぶん、と粘性のある液体に機体が沈んだ。重みがあり、ねっとりとしている。

平衡感覚が失われ、何が起こっているのか、これから何が起こるのか何も分からなくなつてパニックに陥る。乱暴に操縦桿を前後させるが何も反応がない。

私が今半狂乱になって叫んでいるのかわからない。叫んでいるかわからない。

ガチャガチャとレバーを操作してカヲル君に操作権を復活させようとしても何も変わらない。

「まさか第1使徒の僕が、存在しないはずの13番目の使徒に落とされるとは……」

頭を抱え、ぽつりと呟いたカヲル君を見やる。

「カナル君、これどうなってるの!?!」

「始まりと終わりは同じというわけか……さすがリリンの王だ」

意味深な発言ではあったが、そんなことに態々言及する精神的余裕など一片たりともない。

それだけではなく、さらに新しいパターン青の検出が表示された。場所はエントリープラグ内、カナル君の首元。

「どういうこと? 何が起こってるの!?!」

第13号機を覆う赤はゆっくりと陰影がはつきりし、それは人の顔だと判別できるようになった。

その顔は眼球の無い眼窩を剥き出しにした、正気の失せた虚ろな私であり、綾波レイであり、そして碓レイだった。

「ああああああああああああああああああああ!!!」

発狂。

目に映る光景を見ることに耐えられず、両手で目元を覆う。そのまま指で目を潰しかねないほどに。

私の悲鳴を皮切りに、第12使徒だったものが膝を抱いた赤い胎児に変化したかと思いきや突然縮小し、四つ目になった第13号機の前で一口サイズの赤い球体——コアになった。

それを第13号機が勝手に噛み砕く。その瞬間、セントラルドグマに眩い光が散乱し、機体が神々しいほど真つ白に輝いた。

この感覚を私はよく知っている。

自身の魂の位が格上げされ、全能感に満たされるこれ。綾波さんを助ける時に至ったものと似ている。

ということとは。

これは——

「え、待って……ち、違う……私は……」

両手を退け、再び視界を取り戻した私は喉がぎゅうう、と締め付けられる想いで吐露した。

第13号機の背中から巨大な角を生やし、さらに二重の光輪まで出現させた。

明らかに私のときとはわけが違う、もっと上位の覚醒だ。

「待って……ねえ、待って……」

完全に私の制御から独立した第13号機が降りてきた昇降路を粉々に粉碎しながら一気に飛び上がる。ほんの数秒ほどで青々とした空が広がり、赤い大地が遙か向こうまで続いている。

私のすぐ隣にはMark 9が着いてきている。

こんな上空まで来て何をやるかなんて、私でもわかってしまった。頭上から同心円状に、とてつもないスピードで赤い波紋が広がっていく。それは前回とは比較にならないほど超大規模で、地球全体を覆ってしまうのではないかと思ってしまうほどだった。

目の焦点が合わない。これから行われるであろう、私の理想とは真逆の儀式を特等席で見せられる現実から逃げ出したくてたまらない。心臓が干からびて生きた心地がしない。

大地に巨大な地響きと同時にひびが走る。次の瞬間には世界の終わりのように大地が割れ、死んだ大地が跡形もなく崩壊する。割れた底から地表に姿を表したのは、超巨大なUFOのような、正体不明の赤黒いオブジェクト。

瓦礫や住宅街などが異常重力によって巻き上げられ始める。

金属を引きちぎるような不快感と共に、頭上の波紋が不気味に回転を始める。

「私が槍に触ってしまったから、なの……？」

「これって——」

「——フォースインパクト。その始まりの儀式さ」

なんとなくはわかっていたが、いざ言われるとどうしようもなく苦しんで、辛くて、また泣き出してしまった。

「こんなことがっ、したかったわけじゃないのに……!」

「わかってるよ。碇ゲンドウの計画に踊らされた僕が悪かったんだ」

「違うっ! カラル君は何も悪くない……悪いのは全部……!」

槍を抜くことをやめようと提案された時に駄々をこねずに速やかに従っていけば。

壱号機がやってくる前にはやくカラル君に操作権を戻していれば。壱号機のあるな露骨な罠に引っかかるほど私が馬鹿じゃなければ。

こんなことにはならなかった。私が後戻りできたはずの起点を全部無駄にして、アスカの想いも切り捨てた結果、こうだ。私の独りよがりな思い込みと適当な希望的観測。

地中から引き上げられた超巨大物体のえらのような部分が駆動し、無数の赤い人型の巨人が放り出され、瓦礫とともに空を漂う。

この世ならざる光景。不穏に満ちた空間。

カヲル君が装着しているDSSチョーカーに反応が起こり、首を囲うようにいくつもの小さな立体物が出現した。以前ヴィレで受けた説明を克明に思い出す。

「カヲル君、首輪が！」

あれを今すぐに止めなければならぬ。

咄嗟にカヲル君に触れようと手を伸ばすが、見えない壁によって阻まれる。力いっぱい叩いても私の力ではびくともしない。

突然、横殴りの衝撃が襲い掛かり、全身を激しく揺さぶられた。

すぐに態勢を立て直してその正体を見ると、第13号機に突撃してきたヴンダーだった。

「ミサトさん……!!」

ヴンダーの発するA・Tフィールドによって船首に拘束され、身動きが取れない。

そして、四門の主砲が赤く輝いて砲弾が前方に放たれた。すぐさま別のA・Tフィールドが展開され、それに砲弾を跳ね返らせることで第13号機に命中させた。

「っ！」

痛くはあるが、もうフォースインプクトを止めるためなら何にでも継りたい気持ちだった。

しかしそれが叶うことはなく、突如ヴンダーの主砲が爆発し、墜落する。拘束から解放された第13号機は予定爆心地に戻る。

「何が?」

周囲を見回し、その人物に向かって叫ぶ。

「綾波さん、何してるの?!!」

存在しない頭部から何度も執拗に光線を放つMark. 9——綾

波さんは何も答えない。

二度、三度とさらに光線を放つと、遠ざかっていくヴンダーを追いかけて船体に接触した。そこからは翼に隠れてしまい、こちらからは見えなくなってしまう。そこによりやく地下から這い出たアスカが追い始める。

多くの人間が数多の思惑で動いている。

私もその一人に過ぎないが、結果としてお父さんに操作された、思惑のトリガーだった。

そして用済みとばかりに混沌と化して戦場となったネルフ本部上空で一切の手を出させてもらえず、こうしてプラグ内に閉じ込められている。

プラグを強制射出させようとしたが、何も起こらない。

ヴンダーと綾波さんのことも気になるが、今はカヲル君のDSSチョーカーを何とかしなければならぬ。でもその手段が思い浮かばない。

「カヲル君、あの時みたいに外せないの?！」

「やろうとした瞬間に僕は死ぬだろうね」

「っ!」

「何か……、何か方法が……!」

私からカヲル君へ直接的に何かすることはできない。

DSSチョーカーの本来の目的は、私が再び覚醒状態になった場合に私の息の根を止める事でインパクトの物理的な阻止だったはず。ならば覚醒状態が解除されればいい。

発動されようとしているフォースインパクトは二本の槍、ふたつの魂が条件である。であれば、魂が欠ければいい。

なりふり構っている場合などではなかった。落ち着いて考える心の余裕もない。

私は震える手を見下ろし……ゆっくりと自身の首に触れた。

「——止めるんだカノン君。そんなことをしても誰も幸せにならない」

「だ、大丈夫だよ……。私なんていない方が皆幸せになれるから……」

世界を一度壊して、それに飽き足らずまた壊そうとしている。そんな人間もどきが生きていていいわけがない。

私はきつとお人好しだから、また誰かに説得されてエヴァに乗って、また取り返し問題を起こすだろう。

そんなのは私が嫌だ。もう絶対にエヴァに乗らなくていいように、根絶すればいい。

カヲル君の首を囲う立方体の角が明らかに伸びている。もういつ発射されるかわからない。それまでに一刻も早く死ななければならぬ。

「……それに、僕は自分を殺そうとする君を見たくない」

「——、でもッ！」

「いいんだ」

あと数刻の命だというのに、私以上に穏やかな表情でカヲル君は言った。

「君は悪くない。僕が第13の使徒になってしまったからね。僕がトリガーだ」

「そんな下手な嘘つかないでよ……私、一回ちゃんと諦めたのに。こんなことになって、もうどうしたら……」

槍を手にすることでフォースインパクトが発動することを知っていたら、私は絶対にセントラルドグマへの降下をやめていた。

それにアスカとカヲル君に説得されてちゃんと諦めた。なのに、壱号機に全部ぐちゃぐちゃにされた。

「魂が消えても、願いと呪いはこの世界に残る。意志は情報として世界を伝い、変えていく。いつか自分自身の事も書き換えていくんだ」
心が耐えられない。

さつきもカヲル君が止めなかったら、私は間違いなく自殺していた。だって、それくらいのことをしなければこの過ちを償えないから。もう、誰とも顔を合わせることができないから。

私のせいでカヲル君が死ぬのだ。私が殺したようなものではないか。

「ごめん。これは君の望む幸せではなかった。ガフの扉は僕が閉じ

る。カノン君が心配することはない」

完全に地中から浮き上がった巨大物体は第13号機の真下にて滞空している。

沈黙を保っていた第13号機が動き出す。片方の槍を高く掲げ、自らの腹部を貫いた。

「あ、うがッ！」

フィードバックに喘ぐ私に構うことなく、さらにもう片方の槍も同じように貫いた。

「うう、ッ！！」

少しでも第13号機の活動を抑制するためか。

お腹を押さえて痛みを耐えながら、必死に叫ぶ。

「私の幸せなんてどうでもいいから、ただ、カヲル君に死んでほしくないの……！」

もしかしたら奇跡が起こって、私とカヲル君を隔てる壁が壊れてそちら側に行けるかもしれない。そう考えるしかなく、ひたすら見えないう壁を叩き続ける。でももう叩きすぎて、うまく力が入らない。

「お願い……お願いします……誰かカヲル君を助けて——……」

「君たちを縁が導くだろう。それぞれの居場所と幸せがきつと見つかる」

「待って……そんな事言わないで……まるで遺言じゃ、ない……っ」

「……あと、そうだね。君との出会いは僕にとって本当にかげがえのないものだった。なぜなら君は、僕の恩人だからね」

「何を言ってるのか、わからない……！」

カヲル君が私を見た。

私は死に際だと言うのに、驚くほど落ち着いた笑みを浮かべる彼の笑顔を見た。

自分の心臓が萎縮する。無限に引き伸ばされた刹那、無意識に私は目に焼き付けんとしていたのかもしれない。

「そんな顔しないで、カノン君。僕は必ず、また君に会いに行くから」
「カヲル君！」

そしてDSSSチョーカーの安全装置は定められた機能を発動し、装

着者の頸部を、囲っていた複数の突起物が爆発的な速さで貫いた。あまりの勢いに私は咄嗟に身を引いてしまう。

生々しい血の音。

目の前の透明の壁が赤一色に染まる。

それが何であるかわからないほど思考力が低下してはいなかった。壁にへばりついた、いくつかの小さな肉塊がゆっくりと下に落ちる。その様子を文字通り目を点にして眺める。

その向こう側には頭部と胴体が切断された、数秒前まではカヲル君だったものが転がっていた。

もう生きていないのは明白だった。

信じられなかった。

死んだ人を見るのが初めてだから。だから、私は確か死ぬ瞬間は見れていなかったから、もしかすると死んでいないのかもしれないと思ってしまった。

だから、私のせいではないと思いたかった。

でも現実はそのようではなくて、もうカヲル君の魂はいなくて、私のせいで死んだ。

こんな……こんなにも酷いやり方で。

誰にも何もさされていないのに、胸が本当に苦しくなった。とても痛い。両手で押さえても全然楽にならない。

あまりに多くの自責の濁流に、何も考えられない。

これが。

人を殺す感覚なのだろうか。

……。

私の起こしたニアサイドインパクトの影響で、数え切れないほどの人間が死んだ。それは私が直接行ったものではないから、なんとかしてようやく事実として理解することができたのだ。

なのに、仲の良いひとりの少年を殺した現実は途方もない痛みだった。この痛みは知らない。

「ああ、あああ、あ」

身体に力が抜けて、入り、を何度か繰り返す。腕の筋肉がぶるぶると震える。自分の手をどこに位置させればいいかわからず、もぞもぞとさせる。

「はっ、はっ、はっ」

短い呼吸をしながら、二度と動かないカヲル君を見ている。

どうしようもなく終わっている状況を、これからどうにかする希望があるはずもなかった。ただただ壁に上半身を擦り寄せて、声のない声で啜り泣くことしか、もうできることがなかった。

何かをした結果、悪いことが起こるのならもう何もしない。今すぐに消えてしまいたい。死んでしまいたい。

精神的自傷行為が止まらない。止めてはならない。そんな義務感でいっぱいになる。

必要な魂がひとつ欠けたことでフォースインパクトが一時停止する。自身を槍で貫いていた第13号機の覚醒状態は一時的に沈静化し、落下を開始する。

すぐに落下体勢を取らなければ大怪我は避けられないのだが、私にそんなことはどうでも良かった。ただ自分を呪って傷つけるだけ。

このまま落下して、頸椎を激しく打ち付けて死んでしまいたい。そう強く願った。

しかしそれを迎えるより先に、第13号機の機体が大きく揺れた。

『後始末は済んだ！ しつかりしろ子猫ちゃん！』

回線に入ってきた、聞き覚えのない声。いや、私を子猫ちゃんなどと呼んだ人がかつていたような。

でも返事をする気力がどこにも残っていない。

ただ無心になって呆然と俯くことしかできない。

さらに何かを言われるが、その日本語を理解することすら困難になった。五感がじわじわと滲み、どこかへ遠ざかっていく感覚。

さらに意識が不確定になっていく。

その時。

唐突にエントリープラグが射出された。おそらく外部から緊急射出のレバーを引かれた。

プラグ内が暗転し、カヲル君の姿が見えなくなる。

「あ」

もう、なにもいやだ。

◆

ガフの扉を維持するための保険だった碇カノンが第13号機からいなくなつたことで、ようやく機体が停止した。

それによつて超広範囲に広げられた輪が逆再生のように中心に向かって閉じられ、それと同時に、中心から降臨しようとしていた正体不明のオブジェクトも扉の向こうへと消えた。

それによつて発生していた異常重力も元に戻り、地下から持ち上げられた超巨大オブジェクトが落下する。他にも巻き上げられていた有象無象も雨のように落下し、壊滅状態だった一帯が、さらに破壊される。

フォースインパクトは完遂されなかった。

ただしこれは本人の意図したものではなく、寧ろ回避する選択をしていた。だからこそ誰よりも傷が深かった。

それも、希望と信じて縋っていた槍によつて引き起こされたのならばなおさらである。

◆

「なんなのよもうっ！」

アスカは少し歪んで開きにくくなっていたエントリープラグのハッチを思いきり蹴つてこじ開けた。

外の光景は、まさに終わっていた景色がさらに終わっていた、と言うべきだった。人類が築いた建造物やらがフォースインパクトによつてさらに砕け、そこら中に散らばっていた。

ただ変わらないのは、すべてが血のような赤一色であること。

ごそごそとリーダーを手に取り、プラグから出て赤い大地に立つ。

「あつちか……？」

確か第13号機から射出されたエントリープラグはこの方角であっているはず。しばらく歩いていると、簡単に発見した。だって赤くないから。

レバーを手で回し、ハッチを開ける。中にはすでにL・C・Lが排出され、シートの上で小さくうずまわっているカノンの姿があった。

セントラルドグマではあんなに意気込んでアスカに対して強気だったというのに、なんだこのザマは。

アスカはため息を吐き、

「行くわよ」

とだけ言った。

背を向け、エントリープラグから降りて歩き始める。しかしカノンが着いてこない。そもそもプラグから出てくるとは正直思っけなかったから、まあ予想通りだ。

さらに大きなため息を吐いてから引き返し、再びエントリープラグに上り、仁王立ちしながら中を覗く。

カノンはぴくりとも動かず、身動きをすることもなくアスカを見ることもしない。

「自分のことばかり。何もしなきゃ済むと思ってる」

中に侵入して、カノンの腕を乱暴に掴んだ。

抵抗はなく、アスカにされるがまま立ち上がる。

「甘えるな！ ホントもやし。私に手間かけさせないで」

片手で顎を持ち、もう片方の手で控えめにビンタする。カノンは少し痛がる顔をしたが、それ以上の反応はなかった。怒らないし、泣かない。というより泣きすぎたのか、目の下が真っ赤だ。

なんとかしてエントリープラグから引きずり出すことには成功したが、すぐさまカノンは地面に座り込んでしまう。

「あんだ……」

完全に無気力だ。目が死んでいる。

自分自身を放棄している。

おそらくナイフを突きつけられ、刺されたとしても絶命するまで無抵抗でいそうな危うさがある。

「さつきまで立ってたでしょ！　また立ってちゃんと歩きなさいよ！」

猫を抱き上げるみたいに両脇を持ち上げて立たせる。しかし。

「はあ？」

また座り込んでしまう。

「そう、じゃあそこで勝手に野垂れ死になさい」

てこでも動かなさそうなカノン尻目に視線を持ち上げると、丘の向こうから誰かが歩いてくるのが見えた。

「さつきのパイロットね。綾波タイプ初期ロットか」

量産型だからその通りなのだが、綾波レイに極めて外見が一致している。と同時に鎮まっていた怒りがふつふつと再燃する。

こいつが乗っていたMark・9に式号機を自爆せざるを得ない状況にさせられた。戦闘中、明らかにパイロットの意志を無視して勝手にMark・9が動いていたことなんて関係ない。

良くて大破。最悪回収すら困難な状態になっているかもしれない。そこは機体回収班と技術部に頼る他ない。

レイは無言のままアスカの前に到着し、そしてカノンを見る。

リーダーをかざすためにアスカは地面に突き刺さったエントリープラグの先端に上る。

「……ここはL結界密度が高すぎる。これじゃ助けに来れないわ。リンが近づけるところまで移動するわよ」

ひよいと飛び降りたアスカは、新しく増えたお荷物と文字通りのお荷物を交互に見て何度目かわからないため息を吐いた。

「……クソッ。あんた、私とこいつの荷物持ちなさい」

そう言つてアスカは自分とカノンのシヨルダーバッグをレイに押し付ける。レイは文句ひとつなく受け取った。

「私はあんたの保護者じゃないっての。必ず100倍にして返してもらうから」

嫌そうな顔を隠さずにカノンに接近すると、背中で身体を受け止め、両の膝裏に手首を潜り込ませてカノンをおんぶの姿勢で持ち上げた。

が、

「え、あんたホントにちゃんと食べてんの……？ もやし以下の枯れ葉じゃない。流石に私もドン引きなんだけど」

少し軽いだろうとは思っていたが、それよりもずっと軽かった。重さを考慮して少し勢いをつけて立ち上がったから、勢い余って前に倒れるところだった。

ネルフは深刻な食糧難であることはヴィレで推察されていた。碇ゲンドウが娘のカノンを軽視していたとしても、それでも貴重なパイロットだ。ちゃんと栄養を考えた食事は提供されていたはず。

実は提供されていなかった？ それとも食事を受け付けなかった？ あるいは単純に過剰なストレス？

14年も眠っている間に世界が大きく変わっていけば精神的にくるものがあるだろう。それにセントラルドグマでのやり取りから察するに、サードインパクトの真実も知っている様子だった。

どちらにせよ、ミサトに反抗してネルフを選んだことがこの結果に繋がった。

「……あんたはミサトの指示に大人しく従っていればよかったのよ」

ぴくりとカノンが反応を示し、静かに泣き始める。

「……………クソ」

自業自得だと思いう反面、少し言い過ぎた気がしたアスカは、カノンがやがて泣き疲れて背中中で眠るまで沈黙を貫いた。

そんな様子をレイは黙って観察していた。その手には、カノンが落とした所持品であろうS—D A Tが握られていた。

そして三人は歩き始める。

赤い大地を。

苦痛

ザク。ザク。ザク。

死んだ大地を歩く。

ここにはプラグスーツ姿の三人しかいない。水もない。食料もない。厳密には適当なコンビニとかに転がっているが、ずっと昔に期限が切れている。数年なら非常時だからと許容するが、十年以上となると流石に手は出せない。なによりコア化しているから無理だ。

アスカとレイは水だけで十分だし、数日ほど断水しても耐えられる。ただしカノンはダメだ。カノンはまだ水と食料を摂取しなければならぬ身体だ。

このままだと良くて三日。なるべく早く早く救助してもらわなければならない。それについてはすでにアスカが手を打っており、L結界密度の高くない、リリンが侵入できる合流地点まで行けばいい。

ただしこのペースでは少々遅い。

理由は明白で、アスカがカノンを背中に抱えたまま進んでいるからだ。

「あんだ、ここからは自分で歩きなさい。私の背中で十分休めたでしょ」

小さい公園のベンチにカノンを座らせ、強気にそう告げた。

燃え尽きたように項垂れ、何の反応も示さないカノンに忘れかけていた怒りが再燃する。

レイはそんなふたりをすぐ脇でぼんやり観察している。

「こいつの首根っこを掴んで引き摺ってでも歩かせなさい」

「それは命令?」

「命令よ」

カノンに近づく。レイはカノンの手を握り、ゆっくりと立ち上がらせた。

「行きましよう」

しかしうんともすんとも言わず、その場から歩きだそうとしない。木のように動かない。

「碓さん、行きましよう」

そう言つてもう一度しつかりと手を握り直し、レイが引つ張る。すると、倒れないように脚を前に出したようにしか見えない動きではあったが、ともかく自力で歩いた。

「歩けるのだったら最初から歩けての。行くわよ」

隠しもせず舌打ちをしたアスカはリーダーに視線を落とす、歩き始める。

すぐに住宅街がアスカたちを迎える。住民は当然存在せず、しんと静まり返っている。元々何色だったかわからない赤い車や、電柱、コンテナなどが異常重力によって浮き上がってゆつくりと回転している。

それらに一切注意が向くことなく三人は無言のまま進む。かつては河川敷だった、今は大量の土砂によって埋め立てられた平野。見る影もないシヨツピングモール跡地。支柱が崩壊し、視界の向こうまで横向きに倒れている高速道路。枯れた花畑。

こんな光景、とつくの昔に見慣れている。

だからどうした。なにかコメントをしてやればいいのか。「これ、あんたがやったのよ」なんて言ってしまうば、またカノンがめそめそ泣き始めるだろう。

そんな無様を見るのも苛つく。無駄なエネルギーを使いたくない。それにレイも自発的にこちらに何かを働きかけたりしないから気楽ではある。

セカンドインパクト後は常夏だった日本も、ニアサー、サードインパクトの影響でさらに地軸の傾きがずれ、四季が狂ってしまった。

今日が暑すぎず、寒すぎずの気温で良かった。とアスカは思う。もしそうでなかったら、カノンの生命維持に支障が出るから。当然プラグスーツに生命維持機能があるとはいえ、限界はある。

さつき公園で手首の機能維持状態をチラ見したが、徐々に機能が低

下してきている。あと半日くらいでアラートが鳴るだろう。そこからもうしばらくは耐えられるだろう。

「……無駄な心配よ」

それまでに合流できる予定だ。

いちいちカノンを心配してやる必要なんて無い。アスカはふたりに聞こえないように小さく舌打ちした。

等高線のように表示されるレーダーを見つめる。歩き始めた時と比べると、L結界密度が明確に低い地域にいる。まだリリンが防護服を着用していても接近できない地域ではあるが、合流地点ならば防護服前提で安全である。

「あと半日くらいで着くわ。待たせる訳にはいかないから、急ぐわよ」
少しペースを上げるアスカ。

レイも同じようにペースを上げ、手を引かれるカノンも上げざるを得なくなる。

ずっと遠くから見えていたあるものの横を、ようやく通り過ぎる。ビルほどの大きさの赤い十字架。撃破されたエヴァインフィニティのL・C・Lが急速に凝固したものだ。

見上げると壮観だが、アスカからするともう見慣れたオブジェクトだ。チラ見すらせずスタスタと後にする。

数時間ほどぶつ通しで歩き続け、一度カノンのために休息を取る必要があると判断した。後ろを振り返ると、明らかに疲れが溜まって顔色が悪くなり始めている。汗もかいているようだし、きつと補給も必要かもしれない。

「あそこで少し休憩よ」

目をつけたのは、複数の自動販売機が横並びになっているちよつとした休憩スペースだ。

ベンチは破損しているから使えそうにないので、仕方なくカノンを地面に座らせる。するとバッテリーの切れた人形のように項垂れる。

目は虚ろで、疲労もだいたい溜まっているようだ。数回休憩を挟んだとはいえ、二日ぶつ通しで歩き続けたからそうなるのも仕方ない。

と、カノンの手首からピツピツと電子音が鳴る。バッテリー残量が

限界に近づき、プラグスーツの生命維持機能が大幅に低下している警告だ。

エヴァの呪縛によってL結界に耐性はあるが、アスカやレイほどではない。身体がコア化するなどといったことは起こらないはずだが、体調不良くらいは起こるかもしれない。よくよくカノンを観察すると、ただ虚ろなどではなく、意識も朦朧としている。

アスカは、急がねばと少し焦りを感じた。

また背負ってやらないといけなさそうだ。合流地点まではあと少し。頑張ればいける。

そう考えて早速休憩の終了を通告しようとしたその時、遠くからエンジン音が聞こえた。それは間違いなくこちらに接近してきて、やがてアスカたちを眩い光で照らしながら直ぐ側で止まった。車だ。

運転席のドアが開き、人が降りる。

生身ではなく、全身をオレンジの防護服に包んでいる。顔は逆光でよく見えない。しかしその声は、聞き慣れたものだった。

「悪い。遅くなった。大丈夫か碓？」

「こんなところまで来なくても、もうすぐで合流地点に行けたのに」

「まあまあ。碓がいるって聞いたからには、そりゃあ早く会いたくなるもんだよ」

「当の本人はこんなだけどね。乗せるの手伝って」
「了解」

気さくにアスカと会話をする男らしい人はカノンに近寄るとひよいと持ち上げた。

「うん、碓も全然変わってないな。あれ？ちゃんと飯食ってるのか？ エヴァパイロットの待遇がこんなのはいただけないなあ」

「こいつ、ネルフに寝返ってたのよ」

「なんか色々事情がありそうだな。その辺りは移動しながら聞こうじゃないか」

眠りに落ちたのか、それとも意識を失ったのか、男にされるがままカノンは車の左後方席に詰め込まれる。そして三人目を見て、男は驚き半分で言った。

「よく見たら綾波じゃないか。いるならいるって最初に言ってくればよかったのに」

「こいつはファーストじゃないわ」

「あー……なるほどね。さあ、君も乗った乗った」

「ええ」

我が物顔で助手席に乗り込むアスカ。右に後部座席にレイが乗り、車は発進した。舗装されていない悪路を進むのに特化したオフロード車が、小刻みに揺れながら進む。弱い人は車酔いになりそうだが、三人は特に問題なさそうである。唯一酔いそうな人物は眠っている。「あれだろ？ 二日前のものすごい戦いでヴィレと逸れた感じだろ？」

「そうよ」

「離れてもおおよその観測ができたくらいだったよ。空を埋め尽くすあの忘れられない輪。もしかしてフォースインパクトでも起こっていたのか？」

「その通り」

「で、俺たちが生きてるってことは、アスカたちが止めたと」

「厳密には違うけど、その認識で合ってるわ」

「そうか……」

窓から外を眺めると、富士山と同じくらいのサイズの超巨大物体――黒き月が横たえている。

とつくに赤くなった世界の光景に見慣れていた男――相田ケンスケも思わず感嘆の声を漏らす。

「こいつがまんまと騙されてトリガーにさせられたのよ」

「碇が？ なるほどね。そりゃこうもなるか」

バックミラー越しにカノンを見る。

死んだように眠るカノンの頭部はレイの膝の上に置かれている。

「……自業自得よ」

「しばらく療養が必要だな。ちょっと栄養状態含め色々良くないから、ひとまずトウジに診てもらおう」

「ええ。あと、着いたらミサトに連絡したいから無線使わせて」

「いいぜ」

そうしてまるで夫婦の会話のように他愛のない感じで起こったこと、カノンの動向をひと通り話した。

ケンスケはしばらく無言になり、そして口を開いた。

「ミサトさんもミサトさんだし、碓も碓で悪いところがあつたんじやないかな？ あとアスカはもつと素直になるべきだった」

「は？」

容赦のない食い気味なアスカを躲すように続ける。

「照れ隠しは俺には通用しないよ。言いたいことを言えずにお別れなんて、この世界じゃよくある話だからな」

「……………」

見えてきたのは、これまでとは打って変わってまた奇妙な場所だった。ちよつとしたビルくらいの高さの真つ黒な柱が一定の間隔を開けて何本も整然と並んでいる。ただ水平に並んでいるのではなく、非常に広い区画を覆うように見える。距離が離れていても全体を俯瞰できないくらい広い。

さらに柱と柱の間には何らかの薄紫色の膜が張られている。その膜の向こう側は赤くない。明らかにL結界の影響を受けていない。言い方を変えればL結界を弾いているのだ。

ケンスケはその膜に接近すると、躊躇いなく突っ込む。あわや大事故が起こったりすることはなく、にゅっ、と車は受け入れられ、中に入る。

中は村と呼べる集合帯が形成されていた。レトロ感のある仮設住宅群が、申し訳程度の電灯でほんのりと照らされている。深夜だから仕方ないが、外を出歩いている人間はほとんどいない。数人の警備隊とすれ違いくらいだった。

車は迷いなくそこそこの大きさの建物の横に止まった。

「着いたよ。碓と綾波をトウジに一旦預けて、俺とアスカは帰ろうか」
ドアを開け、運転席から降りたケンスケは後部座席からカノンを抱きかかえる。

そして建物に入ろうとすると、ちよつどガラガラとドアが開き、の

そりと白シャツ姿の男が出てきた。痩せ型で、好青年がそのまま大きくなつた容貌。しかし大人の余裕が見え隠れしている。

男は気さくに手を上げた。

「おうケンスケ、待つとつたで」

「悪いなあトウジ。話した通り碇と綾波を預かつてもらつていいか？

あと碇だけ念のため軽く診察してもらえると助かる」

「わかつた。開けとるからすぐにも診よか」

「頼んだ」

ケンスケから丁重にカノンを受け取るトウジ。と、ここで訝しげな表情を浮かべてカノンをまじまじと見下ろす。

「こりゃあかんで。抱くだけで平均体重より低いのがわかるわ。栄養失調の疑いもありそうやから、血液検査もしといたほうがええ」

「その辺は任せるよ。じゃあ俺とアスカは帰る。明日改めて伺うからよろしく」

「おうよ」

アスカを連れて車内に戻つたケンスケは、静かに去っていく。

「今日だけ悪いけど患者用のベッドで我慢してくれ。明日ちゃんと用意するさかい」

「ええ」

トウジの後ろを着いて歩くレイ。

中に入り、電気をつける。短い渡り廊下の向かいを曲がると入院によく使われる白いベッドが複数台並べられている。

そのひとつにカノンを横たわらせると、すぐにトウジは診療器具を取りに部屋を出る。

「そのプラグスーツ脱がしといってくれんか？ わしはその構造知らんからな」

こくりと頷いたレイは廊下へと消えたトウジを視線で見送り、カノンへと向き直つた。

数日も身に着けたままだったから、いくら超高性能のスーツだとしても狭苦しさはあつただろう。手首のボタンを連続して押すと、プラグスーツのびつちり感がなくなり、一気にぶかぶかになった。

裏の首筋から割るようにして上半身の前半分と後ろ半分を分ける。黒髪の長髪を巻き込まないようにゆっくり首部分からゆっくりと脱がしていく。むわっと中で濡れた汗が……というのがないことがプラグスーツの高性能なところ。長期間身につけたままでもなるべく着心地を損なわないように出来得る限りの仕組みがなされている。

あとは簡単で、脚の部分からズルズルとずらしていくだけで。そして最後に足がプラグスーツから完全に離れて完了だ。

「脱がしたものは適当に隣の台にかけた。」

裸体となったカノンは明らかに肉付きが悪く、腹部も非常に薄く、肋骨が浮いているのがよくわかるくらいだった。特に意味なくぼんやりと見ている間に診療器具を運んできたトウジが帰ってくる。

「おう。ありがとう。せやけどそれじゃあ寒いやろうから掛け布団をかけような」

今さっきプラグスーツをかけた台に器具を乗せ、その次に掛け布団をかけてやった。聴診器を手に取り、自分の両耳にイヤークピースを入れ、先端に伸びる円形の膜型をカノンの胸に当てる。

「んー、平気そうやな」

次に両手でカノンの顔を掴み、親指で両の目元の下を少し下に引っ張ってまぶたの裏を露出させる。そこを凝視したトウジは短く唸った。

「やっぱな。貧血気味やわ。……ちゃんと飯食えてなかったんやな」
「何をしているの?」

突然、レイがそう質問してきた。

レイには裸のカノンをべたべた触っているだけにしか見えなかったのだ。

「なんや、こないなことも知らんのか? 身体に異常がないかとか調べてるんや」

「そう」

聴診器を戻し、次は数十センチのゴムの紐と、アルコールを染み込ませたガーゼを手に取った。二の腕あたりを紐できつく縛り、肘の内側を人差し指でなぞり、ぷつくりと浮き出た血管の位置を把握する。

ガーゼで丁寧にその周辺を拭き、そして注射器を手取る。慎重に針の先端を血管に合わせると、静かに刺した。

すると自然と血が注射器内部に溜まっていき、トウジが十分と判断したところでゆっくりと針を抜いた。それと同時に絆創膏を貼り付ける。

「今のは？」

「血を調べるんや。そうすると健康状態がわかる。調べるのは後回しやけどな。一旦はこれでよしや。カノンもめっちゃ熟睡してるようやし、病衣だけ着せてあとは休ませよう。お前もそのベッド使うとええ。プラグスーツは脱ぐか？ 病衣もう一着持ってくるけど」

「私はこのままでいい」

「ほうか」

テキパキと手慣れたスピードでトウジはカノンに下着と病衣を着せた。

「そいじゃおやすみ。朝になったら起こすからゆっくり休んでくれ。お疲れさん」

そう言つてトウジは診療器具を持って、電気を消し、白衣を揺らしながら部屋から出ていった。

静かな夜に、虫のさえずりだけが聞こえる。木製のドアの隙間から入り込む空気の声。

与えられたベッドに小さく座っていたレイは、もぞもぞとカノンの元に移動した。特に深い理由があったわけではない。あまり眠くなくて、暇だっただけ。ベッドに腰掛け、静かな吐息を立てて眠るカノンを見下ろす。

レイがカノンと面と向かって最後にコミュニケーションを取ったのは、酷く落ち込み、ネルフ内を幽霊のように歩いているのを見かけたから危険と判断してプレハブハウスに連れ込んだ時だ。

終始悲観的な言葉を述べ、苦しそうな顔をさらに苦しそうにし、終いには諦めたような雰囲気が出ていった。

その表情があまりにも……あまりにも無だった。綾波も自身が無表情であることを自覚しているが、そんな彼女でさえ見ていられない

ほどだった。だから彼女を引き止めてまでこんな言葉をかけていた。『あなた、死にそうな顔をしてるわよ』

今もそうだ。今寝ているこの瞬間も。

全然穏やかに見えない。唸ったりしている様子はなく普通に見えるが、どうも直感が違うと語る。言葉などでは表現できない、感覚的なもの。

中途半端に終わってしまったが、フォースインプクトは発動された。渚カヲルを排除することにも成功した。碇ゲンドウの計画通り。部下であれば喜ぶべきことでは？

カノンがここまで苦しんでいる理由がどうしてもわからなかった。いつしかレイはカノンの手を握っていた。

「温かい」

すぐに手を離す。無意味な行動だ。これで何かが起こるわけではない。

さつきと自分のベッドに戻り、あまり眠くはないが目を閉じた。



何かに顔を触れられている感覚があった。しかもそれは濡れている。さらに何度も何度も触れてくる。

ゆつくりとカノンは瞼を持ち上げると、至近距離に二つの影があった。ひとつは犬。もうひとつは1、2歳児程の幼児。エリザベスカラーを首に巻いた犬は、カノンの頬を追加で二回舐めると元気に吠えた。

すると、

「こらっ！ 犬はそっから先入ったらあかんぞ！」

という声とともに脇の白カーテンが開き、男がベッドの横に立って幼児を腕に抱きかかえた。

「氣いついたか。分からんか？ ワシやワシ！ トウジ、鈴原トウジや。ほんまに久しぶりやの、カノン」

カノンは状況を飲み込めていないようで、無表情でトウジを見上げたままだ。

まあええかとペンライトの光をカノンの両目に当て、瞳孔の開閉が

問題ないか光を左右に振る。

「まあ多少事情は聞いとるが、けつたいな話でよう分からん。とにかく元気そうで何よりや。どや？ もう動けるか？」

むくりと身体を起こしたカノンはゆっくりと部屋を見回した。

病室であることを理解したことで満足したのか、それ以上の思考を止めて俯く。

朗らかに微笑んだトウジはカノンをベッドから立ち上がらせ、出勤していた看護師と協力して中学校時代の女子用ジャージを着せる。そしてジツパーを首元まで上げてやる。

「行けそうやな。ほなら家に行こか。腹も減つとるやろ。外はちよつと寒いで〜」

部屋を出てエントランスに向かう途中でレイの姿があった。レイはしやがんで先程カノンの頬を舐めていた犬とにらめっこをしている。

と、別の看護師が声をかけてきた。

「先生、その子、着替えたくないそうですよ」

「ま、そのままでもええやろう」

「あとタミフルがもう無くなりそうです」

「分かった。分配長に相談しとく。すまんが今日はこれで上がらせてもらうわ。ほな行こうか」

トウジに連れられるまま歩くカノン。木造の建物を出ると陽の光を浴び、思い出すように外を眺めた。

オレンジ色の夕日は昨日までのようにただ赤い世界を写しておらず、別のものをカノンに届けた。

多くの人がいた。現代的な街とは遠くかけ離れていて、時代に逆行した昭和チックな印象が強いが、確かに人々が済む空間がそこにはあった。

車両専用のレールが円形の地面ごと音を鳴らしながら回転する。

人々の暮らし。営み。生がここにある。

「ここ、不思議。人がいっぱいいる」

「なんや、人混みは初めてか。ここはあちこちの生き残りが集まった

集落の一つ、第3村や。千人くらいで暮らしとる。あれが食べもんの配給所。週三回、日を決めて配つとる」

トウジが視線を向けた先では、数十人程が並んでチケットと交換して順番に食料などを手に入れていた様子が見える。

「先生、こんにちは」

三人の前を通ろうとした妊婦の女性が声をかけてきた。

「おお、松方さん。もうすぐやったな。無理したらあかんで」

松方と呼ばれた女性は大きな腹部を優しくさすりながらレイとカノンを見た。

「先生、その二人？ クレーデイトから預かったって子」

「まあそんなもんや。よろしゅう頼むわ」

「うん。それじゃあ失礼します」

「おう」

女性が立ち去るや、レイは疑問を口にした。

「クレーデイトってなに？」

「クレーデイトっちゅうんは、ヴィレが作った支援組織のことや。支給だけやのうて、この村と他の村との交易も手伝ってもらうとる。ワシらの村だけじゃ、とても生きていけんさかいな」

近くに積まれているコンテナにそのクレーデイトと思われるロゴの塗装がされていた。次にレイは線路に沿って歩く、腹部の膨らんだ動物を見つめた。

「あれは何？ 犬と形状が違う」

「うん？ あれは猫や」

「猫？」

列車の下に潜り、うすまくなり、大きくあくびを一つ。妊娠している。それに腹部の大きさからして、出産が近い。

レイは膝について猫を覗き込む。

「猫見んのも初めてか？ 車輻の下を根城に十匹くらい住んどる。ここじゃ犬や猫もおるだけでうれしいもんや」

ついにトウジの家に到着する。昔のような現代風な一軒家などではなく、やはり昭和時代に逆行したかのような平屋。表札は少し錆び

ていて、スズハラの下に『急患のときは右の呼び出しボタンを押すこと』と赤文字が刻まれている。

「ここが、古いながらも楽しい我が家や。一軒家で贅沢させてもらうとる」

村の医者という重要性の高い仕事に従事しているトウジは良い待遇を与えられている。この家がその一つだ。

トウジは、威勢よく引き戸を引いて中に入る。

「ただいま！ すぐ晩飯の支度するからな」

どたどたと靴を脱いで上がるトウジ。

「おいおい待たんかいな。流石に土足で上がるんはなしや。ちと待つててくれ」

何食わぬ顔でそのまま上がろうとした綾波を止めたトウジは、すぐに雑巾を持ってきてプラグスーツの足裏を拭かせた。

カノンはというと自発的に靴を脱ぐことはなく、放置しておくはずと玄関で立ち尽くしていそうだったので、仕方なくトウジが靴を脱がしてやって家に上げた。

案内されたのは古風な居間。畳敷きで、やや狭い。居間というより和室だ。中央にはテーブルがあり、そこに60代前半と思われる男が胡座をかいて座り込んでいた。

「オヤジさん、少しこのふたりをここに置くことになりました。よろしゅう頼みます」

「うむ。さあ、こっちに来て座りなさい」

オヤジさんと呼ばれた中年の男に促されるままレイとカノンはテーブルに座る。レイは正座。カノンは体育座りをしてすぐに視線を落とした。

ふたりに自発的に会話をする意思はなく、どうやら男も同じようだった。トウジが鍋を別室から運んでくるまで妙な沈黙が流れる。

「えいよつと。みんなお待ちどうさん。さあ、熱々のうちに食べるで！」

テーブルに置かれた鍋はぐつぐつと煮えていて、熱せられた味噌汁の具が非常に食欲を唆る。いい匂いも部屋に充満し、トウジは待ちき

れないとばかりに気持ち顔に出る。

テキパキと全員分の配膳を済ませ、お椀に味噌汁をよそう。

いただきます、とトウジと男が口にして食事が始まる。美味しそうに味噌汁を口に運ぶふたりを観察するレイが、真似をするようにお椀を口元に運ぶ。ゆらゆらと湯気だつそれをしばし凝視してからようやく味噌汁を口に含む。

「どや、美味しいやろ？」

「口の中が変。ホクホクする」

レイは両手に持つお椀に視線を落とす。

「せや！ それが『美味しい』や！」

次にトウジはさつきから石像のように全く動かないカノンに目を向け、焦らせないように優しく声をかける。

「カノンは食わんのか？ 食いたくなったらいつでもええんやからな」

「ワシの娘は下ごしらえがしつかりできとるからな」

男の自慢気な話に、トウジがそうやと深く頷く。

「ほんま、世界一の嫁さんや。会うたらびつくりするで」

そこでちょうどタイミング良く玄関の引き戸が開かれ、女性の声が聞こえてきた。

「ただいま、遅くなってごめんなさい」

「おう、おかえり！ 待つとったで！ カノン、分かるか？ ワシの嫁さんや。委員長やで！」

ピク、とカノンの肩が大きく震えたのをトウジは見た。

間もなく今のドアが開かれ、赤ん坊を抱いた女性が入ってきた。あの頃の少女が大人になった姿。ヒカリだ。

佇まいは皆の委員長ではなくなっていて、慎ましい女性へと成長している。床に膝をおろし、レイ、そしてカノンを懐かしげに見つめた。「連絡受けた時は信じられなかったけど、こうして目の前にいてもまだ夢みたい。久しぶりね、カノン。綾波さんも」

「違う。私は綾波じゃない」

レイは即座に答える。すると、

「なんや違うんか？　じゃあ——」

「そっくりさんや！」「そっくりさんね！」

夫婦の楽しそうな声にびっくりした赤ん坊がぐずり始めた。大慌てであやすヒカリにぐいと顔を寄せたレイは、目を大きく開きながら問うた。

「何、これ」

「おう、ワシらの娘、ツバメや。かわいいやろ？」

「人なのに小さい。どうして小さくしたの？」

「なんや、赤ちゃん見るんも初めてか？」

「産まれたときはもつと小さいの。赤ちゃんはどんどん大きくなるのよ」

レイはおそるおそる人差し指を近づけ、赤ん坊の頬に触れた。できたての餅のようにふつくらとした触感。そしてふわつと熱が指先から伝わってくる。ぐずっていたツバメが静かになり、つぶらな瞳はレイを捉えた。

「これが……可愛い？」

心に強く感じた感情をどうにか言葉にしたレイに首が千切れるほどトウジが首肯する。

「せやろ？　かわいいやろ？　なんせワシらの娘やからなあ」

トウジがそう言うのとツバメがまた泣き始めた。

「ああつ。ごめんねえ。大きい声出すからびっくりしちやつた？」

「すまんツバメえ。泣かせてもうたかなあ」

そんな家族の幸せそうなワンシーンを見ていたカノンは静かに泣いていた。啜り声を上げることもなく、ただ彼らを見てぼろぼろと泣いていた。

「またもや玄関の引き戸が開かれ、誰かが入ってきた。」

「お、大将のお出ましや」

我が家のように自然な様子で部屋に入ってきた人物は、酒瓶を掲げて見せた。

「悪い。遅くなった」

「昨晚、レイカノンアス力を拾い、第三村に連れてきた男。相田ケン

スケだ。

「おおお！」

一升瓶を見て、トウジと義父が思わず喜び歓声を上げた。その声の大きさに反応したツバメが再び泣き出してしまう。

すぐにヒカリがツバメをあやしつつ、口元に人差し指を当てるジェスチャーをした。

「シュー！」

◇

「なにしてるの？」

トウジたちのいる部屋の暗い隣の部屋。

授乳を始めたヒカリの隣にレイが立っている。トウジの陽気な歌声が漏れ聞こえている。

「赤ちゃんは、お乳を飲んで大きくなってくの」

レイは自分の胸を見下ろし、下から支えるように手を当てた。

「そっくりさん。あなたにはまだ無理よ」

「……わからない。綾波レイなら、どうするの？」

レイはオリジナルの綾波レイではない。綾波レイ自体がクローンではあるが、この個体はヴィレ、あるいは世界と戦争をするために量産された綾波シリーズの一人に過ぎない。

『綾波レイであれ』と義務付けられて活動していた個体はネルフの管轄区域から大きく離れてしまっている。ゆえにネルフからの指令を受け取ることができない。

何をすればいいかわからなくなったレイが自分で精一杯考えた結果が、『綾波レイならどうする』という自問だった。

「あなたは、綾波さんとは違うんでしょ？ だったら、自分で思ったことをすればいいの」

一蹴されるかのようなシンプルな回答。

レイの瞳が見開かれる。式号機との戦闘時、パイロットも似たようなことを言っていた。

沈黙する。

自由への不安がレイの中で渦巻く。

そしておずおずと尋ねた。

「違って、いいの？」

◇

「久しぶりだな、碓。相田だよ。相田ケンスケ」

大人になつたクラスメイトは、涙の跡が残るカノンの隣に座り、昔と変わらない落ち着きのある声で語りかけてきた。

トウジは歌唱を止めると、カノンをケンスケと挟み込むようにしやがみ込んだ。

「そや、ケンスケや。お前を助けてくれたやつちや。ワシらもこいつのサバイバルオタクぶりに、随分と助けられた。こいつがおらんかったら、ワシらもとうの昔に野垂れ死にや」

カノンは膝に顔を埋めてしまった。ふたりは黙って互いに視線を交わす。

すると、カノンのこれまでの態度に我慢できなくなった義父が一升瓶を床にドンと置き、カノンを叱責した。

「カノンちゃん！ 無口はいい。だが出された飯は食べ。それが礼儀だ！」

「まあオヤジさん。無理に飯に誘ったワシもいかんかった。今日はそつとしといたつてえや」

トウジが宥めて場を鎮めようとするが、止まることはなかった。

「しかしトウジ君。これだけ貴重な飯をもらつといて一口も食わんとは、失礼にも程がある！」

襖がさつと開かれてヒカリが居間に戻ってきて、眉をきゅつと顰めて声を抑えつつ父を宥める。

「お父さん、ツバメが起きるわよ。さ、後片付けして、布団敷きましょ。ほらあなた、そっくりさんとカノンちゃんの分も」

するとケンスケが立ち上がり、なおも顔を上げないカノンを見下ろして言った。

「いや、碓は俺が引き受けるよ。その方がよさそうだ」

◆

目覚めた直後に目にした人々の営みがすっかり静まり返った夜。

鈴虫の鳴き声が涼し気に響き、ちらほらと家の灯りが見える。

月明かりはかつての第三新東京市とは比べ物にならないくらい綺麗だった。

カノンはどこに向かっていているかもわからないケンスケの後ろに着いて歩く。

経年劣化したアスファルトがそこかしこでひび割れ、その隙間から雑草が伸び伸びと生えている。今や意味をなくした標識などにも蔓が絡まっている。

「意外だったろ。トウジと委員長が結婚したのは。中学のときはケンカばっかしてたもんな。まあきっかけは、ニアサードインパクト。その後の苦勞が二人の縁結びだ」

村から少し離れた場所へと歩くふたり。

「碇、ニアサーも悪いことばかりじゃない」

赤い燐光に身を包んだ送電塔が、不気味に回転しながら浮かんでいる。

綺麗な月明かりを落としていた月には、ネルフの高所からカヲルと一緒に見た時と同じで格子状の赤い模様が浮かび上がっている。

「俺のところで預かってもいいんだけど、日中は基本仕事だからいいんだ。アスカはきつと碇に強く当たってしまうだろうから、俺よりも適任の人を紹介するよ」

やがて見えてきたのは、トウジの診療所より少し小さいくらいの施設。それでも今日見た村人たちの家と比較するとずっと大きい。さらに清潔感もあるように見える。

「この人は今の碇にはぴったりのはずだ。きつと碇も気に入ると思う」

ここは公民館という認識のほうが正しいかもしれない。

ぼつりと一部屋だけ灯りがついてるのが外から確認できる。

ケンスケは扉の前に立つと、軽く三度ノックした。

はーい、と女性の声が聞こえ、次にサンダルを履く音が聞こえる。ガラガラ、と扉が開かれて中からひとりの女性が寝間着の姿で顔を出した。

その女性はカノンよりもずっと年上で、紅葉のような赤いショートカットに、柔らかかそうな薄緑の瞳。顎はシュツとしていて、人懐っこい猫のような口をしている。

女性はカノンを見るや否や、黄色い声を上げた。

「うわあ！ すっごく可愛い子だね。アスカなんかと全つつ然違うよ！」

寝間着で出るのはどうなんだ……とぼやいたケンスケは言葉を続ける。

「今朝相談した通り、やっぱりここに預けることにしたよ。トウジのところは碓にはきつと合わない」

「いいよいいよ。こんな大きな家をもらっておいて、たった一人はホント寂しくて」

お前の家ではないんだけどな、またぼやく。

「これも伝えた通りだけど、今の碓は何もできない。仕事を手伝うこともできないけどそれでもいいか？」

「大丈夫。私の話を聞いてくれるだけでもすごく助かるよ」

「そうか。そう言ってくれて助かる。時々俺かアスカあたりが様子を見に来ると思うから、よろしく頼むよ」

「わかった」

わしわしとカノンの頭の上に手を置いたケンスケは、

「じゃあな碓。ちゃんと良い子でいるんだぞ」

と手をひらひら振りながら元来た道を帰っていく。

ほどなく、おろおろはしないが身寄りの友達がなくなったことに少なくとも静かに動揺し始めたカノンの瞳を女性は見た。

「君のような可愛い子が来てくれて嬉しいよ。ここで気の済むまでゆっくりしていていいからね」

「……」

「あ、そうだ。自己紹介がまだだったね」

と女性は手を合わせた。そして年頃の少女のようにこやかな笑みを浮かべ、元気に手を差し伸べた。

「初めまして。私は霧島マナ。よろしくね、カノンちゃん」

無我

カノンは俯くだけで、マナの自己紹介に反応を示すことはなかった。

「とりあえず中に入ろっか。風邪ひいちやうからね」

中に招き入れるマナはすたすたと奥へ進む。

施設内部はシンプルな間取りで、広めの玄関のすぐ近くに男女に分けられたトイレがあり、その奥には部屋の扉がいくつか並んでいる。向かいの壁には掲示板のようなものが設置されていて、様々な連絡事項などが記載された紙がピンで留められている。

そしてその横に大広間が続くであろう少し大きいダブルスライドドアがある。

今歩いている通路の突き当りに曲がり角があったが、そこに向かうことはなく、マナに連れられるままひとつの部屋に入った。

中はひとり用のホテル部屋くらいの広さだった。床に敷かれた布団だけで半分ほどに満たないほどのスペースが埋まり、さらに壁に向かった小さな机と椅子やクローゼットで、部屋が非常に狭く感じられる。

「こんな狭い部屋でごめんね。他にも部屋はいくつかあるんだけど、そこは仕事で使う用なんだ。でもお布団を畳めば少しは広くなるからー！」

カノンは許可を求めるようにマナを観察し、マナの領きを確認して部屋の中に入ると、ふらふら部屋の隅に移動して小さくなってトウジの家と同じように膝を抱えるように座り込んだ。

「お布団でちゃんと寝るんだよ？　いつも朝は私早く起きるんだけど、カノンちゃんはどうする？　一緒に起こしてあげようか？」

「……………」

「うん、無理はしなくていいからね。起きたい時に起きればいいよ。何かあったらいつでも私の部屋に来ていいから。場所はすぐ隣だからわかると思う」

不意に接近すると、カノンはビクリと肩を揺らしてより一層小さく

なった。マナはそんなカノンの頭にそつと触れ、「おやすみ」と呟いた。そして背中を向け、静かにドアを閉める。

足音が遠ざかり、すぐ近くのドアが開いて閉じる音が聞こえるまでカノンは耳を澄まして聞いていた。

マナは自室でござござと物音を立てることなくさつさと眠りについたようだった。

カノンは時折小さく身動きするだけで一切物音を立てることはなかった。暗くなった部屋で、無意味に床を見ている。ただそれだけ。そうして朝が来た。

◆霧島マナの朝ははやい。

目覚ましは貴重な電池を使うものなので基本使わない。時計はひとつだけで、この部屋にはない。ゆえに己の体内時計に従って起床する。

ベッドからのそつりと起き上がり、寝間着姿のまま自室を出て洗面所に向かう。カノンの様子を確認するべきかと目を擦りながら一瞬考えたが、起きたいときに起きてくれればいいと自分が言ったので、彼女の自由にさせることにした。とはいえ昼にはちゃんと確認しようとする。

最低限の水で顔を洗い、寝癖を丁寧になおす。そうすると鏡の前にはパツチリとキマった立派な女性が映る。

「うん」

あとはいつも通りに軽く朝食を済ませ、着替えも済ませて仕事の身支度が完了した。

エプロンを身に着けている。2、3体ほどのミニキャラが刺繍されていて、料理をするためのものではないらしい。

大きなダブルスライドドアを開けば、明らかにマナのためとは思えない幼児サイズのものが多く配置された大部屋が姿を現す。

小さな椅子。小さなテーブル。おもちゃ箱。十数人分のロッカー。幼児向けの装飾などなど。

カーテンを開き、朝の光を室内に迎え入れる。

マナは保育士である。資格はない。

訳あってこの村に住むことになり、いつの間にかこうなっていた。だからこの施設はあくまで借り物だが実質マナの家といえる。与えられた建物の規模でいうとトウジの同じくらいであり、村にとって重要度の高い役職に就いている。

第3村の大人はほぼ全員が働いている。働かざる者食うべからずだ。そのため子供たちはどうしても放置されがちになってしまう。親の仕事を手伝ったりケンスケから勉強を教わったりできる子はいるが、幼児はそう簡単にはいかない。ゆえにそういった幼い子供の面倒を見る場所の存在が必要不可欠なのだ。

千人ほど暮らしている村とはいえ、子供の数が少ないのは村の問題に留まらず人類全体の問題にもなる。今や人類は絶滅の危機に瀕していて、コア化した大地の浄化と奪還に等しく速急に解決しなければならぬ。

現に村だけでなくヴィレも結婚と子育てを推進していて、ある程度の手当も出る。

今の子供たちはニアサー後に生まれてきたことになる。マナたちが生きていた間に、子供たちに昔の世界を取り戻してやれるかはとても厳しいと言わざるを得ない。それでもミサトを初めとして少しずつ少しずつ青い地球を取り戻すべく戦っているのだ。

大部屋を掃除して迎え入れる準備を整えたマナは再びカノンの部屋の前に立つ。時刻は九時前。そろそろ起きてても良い頃合いだ。

「カノンちゃん起きてる〜?」

軽くノックをして声をかけるが返事はない。もう一度ノックしようかと思ったが、寝ているかもしれないし、起きていたらしつこく思われるだろうからやめておいた。

ケンスケからは過度に干渉しすぎないようにと言われている。年下とのコミュニケーションに手慣れたマナにカノンを託したのは最善の対応だっただろう。

「いつでもいいからね」

ドアから離れ、そろそろやって来るであろう子供たちを待つべく施

設の外に出る。

すでに太陽はのぼり、働きに向かう人たちが遠くにちらほら見える。肉体労働でも男性にも負けないくらい動けると自負しているが、こちらはこちらで以外と肉体労働なのだと思ったのは、この職と居場所を与えられてすぐのことだった。

緩やかな丘を上ってやって来た親子をマナは笑顔で出迎えた。

「おはようございますー！」

「ええ、おはようございます。今日もこの子をお願いできますか？」

「はいもちろん」

そう言つて女性から預けられた子供たちをひとりひとり中へと案内していく。

いつもはだいたい十人に満たないくらいだ。幼児と言つても0歳児が預けられることはあまりない。基本的に親が付つきりになつて育児をするからだ。それは前述したこの村の体制が理由である。さすがのマナも追加で0歳児を複数人預かるのは責任を取れる範疇を超えてしまう。

ゆえにだいたい2、3歳児くらいの子が多く、常に問題がないか気を張らなくていいからマナも請け負える。

今日はこれくらいかな、とドアを閉めて中に入る。ちらりと視線をやるが、カノンは部屋を出た様子はまだない。

大広間に子供たちを入れ、荷物をロッカーにしまわせ、手洗いうがいをさせる。その後席につかせ、朝の会を始める。

「はい、皆おはようございます」

おはようございます！ と元気いっぱいの返事にマナは深く頷き、つつがなく朝の会がいつも通り進み、お遊戯の時間になる。この時間帯は特にマナが特に注意深く子供たちを監視しておかなければならない。

ものの取り合いになりそうなら仲裁に入るし、危ないことをしようとしていたら急いで止めに入る。ひとりでいる子を見かけたら相手をしてあげたりなど。

非常に疲れる業務だが、やりがいはとても感じている。子供たちに

関わるのは楽しいし、幸せだ。

そうしてヴィレがどこから持ってきて与えられたピアノを弾いて皆で歌を歌う。ちなみにマナはピアノが上手ではないため簡単なものしか弾けない。だがそれでも良い。ハイレベルなものは求められていないし、子供たちが楽しく歌えることができればそれで良いのだから。

昼になると、昼食の時間だ。

ニアサー以前のような潤沢な食料は第三村にはないため、子供たちも多少の影響は受けてしまう。とはいえ飢餓に陥るほどではない。それに子供たちは大切な未来だ。手を抜く理由などどこにもない。

この時マナは同時に食事の躰を行ったりする。汚い食べ方をしていたら注意し、お箸を正しく使えていなかったら持ち方を教えたり。食事を終えたあとはおやすみの時間である。

どうしても食事後はうとうとする子が多いのと、寝ている間に食器などの片付けが行える利点がある。

「はい、皆おねんねのお時間だよー」

てきぱきと全員分の敷き布団を並べると、吸い込まれるように子供たちは次々と自分から潜り込む。

眠りが浅い子には付き添って子守唄を歌い、穏やかな吐息を確認すると、大広間を離れた。

カノンの部屋を訪れ、ドアをノックした。

「カノンちゃん、起きてる？」

再びノックをするも、反応がない。

本当にまだ寝ているだけかもしれないが、起きていてマナの呼びかけを無視している可能性もある。

無理に部屋に押し入るのはよくない。自分から何かアクションを起こさなければこちらにも動きやすいのだが、悩ましい。

カノンを引き取った以上、寝床や食事を与えるだけであとは知らんぱりなどといったことは絶対にしないつもりだ。寄り添って、心の傷を癒やしてあげたい。

とはいえ無計画に今日を迎えてしまったのは事実だ。カノンの心

身を詳しく把握していなかった。そこは反省点である。

「私の仕事が終わったなら、一緒にお風呂に行こうか。昨日お風呂入れ
てないでしょ？ 仮設の公衆浴場があるの」

裸の付き合いをすれば、少しでも心を開いてくれると期待して。

今はこれ以上カノンに話しかけるのは控えることにした。静かに
ドア前から去り、子供たちが起きた後の用意をする。ここからは普段
通りの業務だった。

しかし今日だけ少し違ったのは、お昼寝時間が終わって子供たちが
遊び始めてしばらくすると、突然ひとりの子がカノンの手を引いて大
広間に連れてきたことだ。

「あれ？ どうしたの？」

マナは予想外のカノンの登場に驚きながら尋ねた。

「えつとね、おねえちゃんがひとりでいたから、あそぼうって連れてき
た」

連れられた本人は変わらず上の空で、魂が抜けたように子供に手を
引かれるがままになっている。呼びかけに答えることはなく、このま
まだと皆も扱いに困ってしまうだろうと考えた。

「ありがとう連れてきてくれて。でもね、お姉ちゃんは心の病気で疲
れちゃってるの。だから、そつとしておいてくれると嬉しいな」

「それっていつなおるの？」

「うーん、皆が優しく話しかけてくれたら、いつか治ると思うよ」

「うん、わかった」

子供からカノンを引き取り、子供用の椅子を急いで用意した。この
まま部屋に戻してやったほうがいいかもしれないと考えたが、本当に
ひとりつきりにしてしまうのはなんの解決にならない。無理のない
範囲で多くの人と触れ合ってほしい。純粋な子供たちと過ごしてほ
しい。

「ごめんねカノンちゃん。こんなことになっちゃって。とりあえず今
日だけここにいてくれるかな？」

返事が返ってこないことを承知したうえで耳打ちし、カノンを座ら
せた。

見知らぬ少女の登場に皆はおもちゃあつちのけで興味津々とばかりに近寄ってくる。「だあれ?」とか「あそぼう!」などとといった言葉を投げかけられるが、カノンは予想通り俯くだけだ。良くも悪くも純粹な子どもたちは、それだけで半数以上が興味を失って別のことを始める。

子供たちがカノンに何か良くないことをしてしまわないかがマナは気がかりだったが、子供たちの面倒を見るのに手一杯であり意識を割くことができなかった。しかしそれらはすべて杞憂に終わり、全く動こうとしない動物園の動物を観察するようなシニールな光景になっていた。

唯一、突然カノンがすすり泣きを始めたことだけは手放しで放置できなかった。反応が返ってこないことなど百も承知で「どうしたの?」と訊く。

子供たちもいきなり泣き始めたと言うものだからなおさらわからない。とにかくこのままこの場に置いておくのは良くないから、手を取って部屋に帰らせておいた。

その後はいつも通りだった。夕方くらいには仕事を終えた親たちが迎えに来て、それが誰もいなくなるまで続く。いなくなったあと、片付けや村人から搬入されている食料などの整理などをしなければならぬ。

すべて終え、溜め込んだ疲れを息に乗せて吐き出したのが夜の19時。今から夕食の準備をしなければならない。カノンの分も忘れないようにしないとね、とふんわり思い出しながら台所に立とうとした時、インターホンの鳴る音がした。

「はいー。」

この時間に来客なんて珍しい。

特に今日、そういつた予定はなかったはずだ。台所から玄関に移動し、閉めていた鍵を開けてドアを開ける。

「あら、こんな時間にどうしたの?」

マナよりひとまわり小さい少女がとても不機嫌そうに立っている。顔はそっぽを向いている。手にはビニール袋。

「ん、これ。ケンケンが持って行けって」
「アスカ」

ビニール袋を受け取り、中を見るとタツパに入れられた豚汁が入っていた。ついさつきできたものなのだろう、まだ温かい。

「それだけ。……あいつは?」

「あいつって……カノンちゃん?」

「それ以外にないでしょ」

「うーん、そうだねえ……。ずっと静かにしてる。話しかけても口を開いてくれないの」

「ふん、そんなこったろうと思ったわ」

大きさに鼻を鳴らしたアスカは「それじゃ」とさつきと踵を返して帰ろうとする。マナはその手を握った。

「待って。せつかくなら会ってあげてよ。友達なんでしょ?」

「友達い? 別に友達でもなんでもないわよ。今も昔も。それに霧島さんがちゃんと面倒を見てるならそれでいい」

「どうせ戻ってもやることないんだからいいじゃん。ほら、入った入った」

「ちよっ!! 腕引っ張んな! このナルシスト!」

勢いに任せて中へと連れ込むマナ。不意を突かれた招きにアスカは完全に拒絶することができず、結局なし崩し的にお邪魔することになった。

「ちようど今から夕食するところだったから手伝ってくれない?」

「は? なんで私が手伝わないといけな」

「これとこれ。この器に豚汁入れといて。あそうだ。アスカも食べる?」

「いらない。あと勝手に決めるな」

そう言っつてぶつぶつ小声で恨みつらみを吐きながらも器を受け取ってしまったアスカは、素直に用意を進める。

てきぱきと豚汁以外の惣菜を別の皿に盛り付ければ完成だ。

マナとカノンの分をそれぞれのトレイに乗せる。台所から移動して、カノンの籠もっている部屋の前に立つと、アスカはいっそう不機

嫌そうな顔をした。

「……チツ」

落ち着かない足で床を数度前掻きする。

マナはそんなアスカを一瞥した後、ノックをして中に入った。今度は遠慮なしに声掛けもしなかった。

ベッドに寝転がる姿はなく、岩のように部屋の隅で小さくなっていた。体育座りで膝を抱え、頭を俯かせている。

ふたりが入ってきた瞬間、ビクリと身体を震わせはしたがそれきりだ。

「ほらカノンちゃん、ご飯食べよう。アスカも心配でわざわざ来てくれたんだよ?」

「はあ?! 捏造するなバカ!」

ちゃぶ台の上にふたり分のトレイを置き、マナはカノンの前に座った。

そつと手を伸ばし、少し冷えたカノンの手を包み込む。

「みんな心配してるんだよ? 落ち込んだままだと何もできないよ?

「ご飯食べて元気になろう?」

「こいつは何もしたくないのよ。生きたくも死にたくもない。どっちの勇気もないただの抜け殻よ」

刺々しい横槍に少しムツとしたマナは、振り向いてコメントをする。

「……アスカは妙にカノンちゃんへの解像度が高いね」

「しばらくは一緒に過ごしていたんだから、嫌でもだいたいのはわかるわよ」

「十年以上も前なの?」

「……」

「ふーん……」

なんとも言えぬ納得顔で会話を終わらせると、ちゃぶ台ごとカノンの前に移動させた。

そして堂々と対面に座ると、マナは何食わぬ顔で食事を始めた。

「ごめんね、カノンちゃん。ちよつと急かすようなことを言っちゃっ

たね。別に急がなくていいから、いつか前を向けるようになるといいな。ただし私はたくさんアタックするけど。あとで一緒にお風呂に行こうね。アスカも一緒だよ」

「!?」

マナに喋らせると色んなことが勝手に決められる。

完全に彼女のペースに呑まれているアスカはイヤイヤ期の子供のように否定するが、右から左に簡単に流される。

結局最後まで微動だにしなかったカノンを前にもりもりと夕食を平らげたマナは、「また用意するからね」とお盆を下げて一旦部屋から出た。

しばらく部屋に残されたふたりの間には、重い空気が流れる。

アスカは我が物顔で数歩歩き、壁にもたれかかって腕組みをした。そして薄く目を瞑って視線を伏せる。

「——あなた」

その声には怒りや喜びといった感情は含まれていなかった。

長いため息を吐き、視線をカノンへ向ける。

「いつまでももうじうじしてんじゃないわよ。気持ち悪い」

「……」

「……つままないわ、あなたといると。何にも返してこない。人形ごっこしてるみたい。今のあなた、ファースト以上に人形よ。もうただの骨」

「……」

「……フン、やっぱ帰る」

ここまでコケにしてもカノンは何も言い返さなかった。超温厚な彼女だが怒る時は怒る。それすらないのは、アスカからするとあまりに意気地なしだった。

不機嫌が頂点に達したアスカは舌打ちまでした後、最後に一言残してやろうかとカノンの横で膝までついたが、「……くそっ」と断念してのそりと立ち上がった。

部屋を出ようとしたところをちようど戻ってきたマナと対面してしまう。

「どうしたのaska」

「帰る」

「え、これから一緒にお風呂に行くって」

「帰るから。それはあんたが勝手に決めたこと。私は知らない」

明らかにこれ以上はふざけてこの場に留まらせられないほど機嫌を悪くしているのを察したmanaは、しぶしぶ横にずれて道を譲る。

ずんずんと通ったaskaは、振り返りもせずにはさっさと施設から出ていってしまった。

「やだやだ。あんなにストレス溜める生き方してたら老け顔になっちゃうわ」

やれやれと両肩を上げたmanaは皮肉の込めたコメントを呟いた。

「askaが帰ったのはもう仕方ないから、ふたりにお風呂行くっか」

そう言って再び部屋を出て少しすると、着替えなどが入っている手提げバッグを持って戻ってきた。

そしてカノンを立ち上がらせて一緒に歩き、玄関で靴を履かせて外に出た。

すでに太陽は地平線に沈みかけていて、黄金色の光が村全体を淡く照らしている。一時間もしないうちに暗くなるだろう。丘から見下ろす村の光景はとても印象的で、平時のカノンであれば足を止めて見入っていたかもしれない。

手を引かれるままに丘を下り、旧式の列車が何両か連なっている場所についた。窓の部分は隙間なくカーテンが降ろされていて、列車の上部に空けられた隙間から明かりと湯気が漏れていることから、改築して風呂として利用していることがわかる。

「あーよかったよかった。時間はまだ大丈夫そうだね。村の区域ごとに一時間しか使えないルールだからさ。さ、早く行こう！」

『女湯』とシンプルな風呂に入る女子が絵本テイストで描かれている看板のドアを手動で開き、中に入る。

中身は車両そのまま、片側の座席をすべて取り外して代わりに脱いだ衣服などを入れる籠を収納する棚が配置されている。

ちょうど中年の女性が数名ほど風呂から上がってタオルで身体を

拭いているところだった。マナはカノンと一緒に邪魔にならないように少しだけ離れた位置に移動して豪快に服を脱いだ。

ぐしゃつとしたまま籠に突っ込もうとしたが、他人の目が気になるのか、最低限それっぽく軽く畳んで改めて籠に入れる。その間一分と少し。

かかしのように棒立ちしているカノンのジヤージをジツパーを下ろし、インナーを脱がせてブラジャーのホックを外す。そして男子小学生のイタズラでやるズボンずらしのように勢いよく二段構えでズボン、パンツと下ろしてすっぽんぽんにした。

「――」

さ、行くよ。と口にしようとして今一度カノンを視界に収めたところでマナは一時停止した。

肉付きが明らかに足りていない。もともと少食だつてせいでこうなったと言われても受け入れがたいほどだ。悪い意味で腰が細いし胴が薄い。少し手の大きい人が両手でカノンの腰を掴んだら指先がつくくらい。第3村が発足された当時の、特に栄養失調の酷い子供ほどではないがそれを想起させた。

アスカは健康体でありながらあの抜群のスタイルだが、カノンは不健康でかつ小さい。よくアスカがもやしと言っていたが、これでは枯れたもやしだ。

本人が拒否するのなら無理に食べさせる必要はないと考えていたが、考えを改めなければならぬかもしれないと思いつつ、マナはカノンの手を握って湯船が設けられている車両へ移動した。

一般家庭にあるものより五倍ほど大きい湯船。一、二人でなく五人以上が入ることを想定しているからこの大きさである。

カノンをバスチェアに座らせ、身体を洗う用に設置されているプールから桶でお湯をすくい、頭から浴びせた。背中にくっついた黒髪をまとめて前面にやり、ボディソープを泡立てて染み込ませたタオルで背中からゴシゴシと洗う。

元々垢なんて目立たない陶器のような肌だったので、さほど時間はかからない。右腕、左腕、腋下をさっさと洗い、次はバスチェアごと

前を向かせる。

再び髪を後ろにさつとやり、首から順に足先まで丁寧に洗った。桶のお湯を浴びせ、泡を流す。

「いつもカノンちゃんって髪の毛のケアとかってどうしてるの？」

もう一度、今度はゆっくりと頭からお湯を浴びせる。頭頂から毛先までゆっくり撫でるように手櫛を数度。そしてシャンプー液をなじませて空気を含むようにわしゃわしゃとすると泡立ってきたので、それを髪全体までゆっくり広げていく。この時、指の腹で頭皮を洗うことで爪先で頭皮を傷つけてしまわないように意識する。

十分洗えたところで、雑にならないようしつかり時間をかけて泡をお湯で流す。

「うん、いいでしょう！」

座りっぱなしのカノンの身体が冷えてしまわないうちにささつとマナも自分の身体を洗い、カノンを誘導して湯船に浸からせた。

床にお尻をつき、マナは中年男性のように「あゝ」と声を漏らす。もちろん他の人がいたら我慢していた。カノンもこの気持ちよさには無反応を貫くことはできなかつたようで、「ほ……」と微かに可愛らしい声を出していた。

夜は暗く、外で鳴く鈴虫の音が聞こえてくる。

湯気に満たされた車内でふたりの肌の赤みを増している。カノンは少し瞼を下ろし、ぼんやりと反対側の壁を視界に収めている。頬の力は緩み、全身が脱力しているのがわかる。

無表情なのは変わらないが、少しでも安らいでくれていることがマナには嬉しかった。

隣り合うふたりだったが、マナはさらにカノンの方に近寄った。それも腰が接触するほどに。しかしカノンは拒絶などといった反応は示さない。

だからなのか、マナは唐突にこんなことを口にした。

「——私、スパイだったんだ」

僅かにカノンが顔をこちらに向けようとしたが、誤差のような角度しか回転させるだけでそれ以上は期待できそうになかつた。

「今はもう違うよ。昔の話。私がカノンちゃんと同じくらいの時」

思い起こす、14年前の記憶。

「ネルフにスパイしようとしてたの。ほら、なんとなくわかるでしょう？ ネルフが使徒だけじゃなくて、外部組織からの干渉に対しての防衛もしていたこととか」

当時のネルフは絶大な権力と力を保有していた超法規組織だった。その気になれば国家転覆ができるし、やりようによっては故意的にサードインパクトを引き起こして全人類を抹消できた。

もちろん政府は動向を監視していたが、それでもネルフの持つ情報量と技術力には劣る。裏を突かれたりですべてを掌握することは不可能だった。

情報戦を仕掛けようものなら、世界でトップの頭脳であるMAGIに瞬殺される。世界中にあるネルフ支部たちのMAGIレプリカを総動員すればしばらく拮抗させることができるかもしれないが。

ゆえに物理的に内情を探るしか無い。そこを戦略自衛隊だったり政府だったりパイとして、霧島マナや加持リョウジを送り込むことになったのだ。

しかしそこに予期せぬ誤算があり、

「私がいざこれからって時にカノンちゃんがエヴァパイロットであることが晒されちゃったから、ネルフのセキュリティレベルが一気に跳ね上がって計画が中止になっちゃった」

ひとりのジャーナリストが碇カノンの正体を世界に暴露したことで、すべてが狂った。

当然本人は酷い鬱状態に陥り、ネルフによって嚴重に保護される。そして二度とこのようなことが起こらぬように電光石火の早さでセキュリティの見直しと強化がされた。

そうなるのはもう、すでに内部深くまで浸透できている加持リョウジですら身動きが取りにくくなっただろうし、マナは第一歩を踏み出すことすらできなくなった。

「カノンちゃんをターゲットにして接触しようとしたの。あの二人とは違って、肉体的にも精神的にも付け入る隙が多かったから。あと、

おそらく碇ゲンドウの娘であろうあなたが何も知らないはずがないからね」

作戦会議時に説明はされていた。

式波・アスカ・ラングレー。綾波レイ。碇カノン。

ホワイトボードに貼り付けられた、街中で撮影された三人の盗撮写真。

バチカン条約により、一国のエヴァ保有数は三機までという縛り。そして三人のこれまでの動向と校内での様子を考えるとエヴァパイロットであることは予想できた。

その中でも、まず式波アスカは接触候補から真っ先に除外された。あれは生粋のエリート。そう仕上げられた少女だ。動きを間違えろとすぐに看破される可能性がある。

次に綾波レイ。ネルフの秘蔵っ子。情報があまりにも少ないため除外。

逆に碇カノンは極めてターゲットに相応しい。なにせ碇ゲンドウの娘であり、まだ一般人の感覚が抜けていない。そして普段の様子は周囲に無警戒。身体能力は平均より少し下。精神年齢も、いい意味でも悪い意味でも純粋な中学生だった。唯一の懸念点があるとすれば、小学生高学年から中学入学までの記録がちぐはぐなところ。間違いなく改竄があつたのは明らかだが、その詳細が不明であることのみ。そこが碇カノンを碇ゲンドウの娘ではないのではないかという疑いを抱く理由である。

「それで諦めて引き上げようとしたところで……ね」

ニアサー。

それからは怒涛の毎日。大地から滲むように、大地を赤く染めながら次々と姿を現すようになったエヴァインフィニティを駆除する非日常。大義名分を得た外部がネルフに対してすべての情報の開示を求めて拒否された結果、強行突入されることになる。そして繰り広げられる戦闘の中、どさくさに紛れてサードインパクトが引き起こされてしまう。

あれはネルフとネルフ内部から蜂起したヴィレ、そんな事情を知ら

ない外部というカオスのような三つ巴合戦だった。

マナは対エヴァ・使徒を想定して建造された巨大ロボットのパイロットとして戦闘に参加したが、ネルフから放出された、バチカン条約に真つ向から喧嘩を売るような大量のネーメズイスシリーズによつて一瞬で破壊された。そして圧倒的な力の差を思い知らされた。命からがら機体から脱出したマナは赤くなった大地を彷徨い、餓死しかけていたところをヴェレによつて救出された。

「実は何度もカノンちゃんに近づきはしていたんだよ？ ガードが固くて距離は離れていたけど。だから当時のカノンちゃんを私はそれなりに知っているつもり」

近寄り過ぎたら覆面のボディガードに悟られる。そのギリギリを攻めた接近。

そのリスクを冒してでも得られるものは大きかった。彼女の性格。考え方。所作。癖。

どれも心に付け入るのに重要なファクターだった。

もしスパイだとかそんな役割なんてなくて。マナが普通のひとりの少女だったら。しがらみなく話しかけることができ、もつとはや、中学生の時に良い友達になれていたのかな、なんて考えながら。「いつかあの時のように戻って、ありのままのカノンちゃんとお話したいな」

嘘偽りのないすべてを曝け出したうえで、マナは本心を伝えた。

「ごめんね。少し気を悪くする話をしちゃったね」

時間だ。

そろそろ次のグループが来る頃合いだろう。

カノンを浴槽から出させて脱衣所に戻る。バスタオルで水気が残らないように全身を拭いてやり、ドライヤーなんてないから限られた時間で素早く髪を乾かす。

持ってきた着替えに着替えさせて、新しくやって来た村人たちとすれ違うように列車を後にした。

外はすっかり暗くなつていて、ぽつぽつと配置されている電灯だけが夜道の頼りになる。節電のため、この時間になると明かりを落とす

て就寝し始める家がある。

「身体を冷やさないように、早く帰ろうか」

もと来た道に戻り、丘を上り、施設に戻ってきた。

「ただいまー。歯磨きしてさっさと寝よ。明日も仕事だからね」

ほかほかの身体のまま洗面所へ。

予備の歯ブラシを与えるが、見事に鏡と無表情にらめっこをしていたら仕方なく歯磨きをしてやる。

ここまで来るとカノンだけでなくマナも眠気に襲われる。瞼が下がりはじめた様子を見て、眠気には勝てないのね、などと微笑ましく思いながらカノンをマナの自室へと連れてきた。

自分の部屋でないことに気づいたカノンはしかし何の抵抗もしなかった。

そのままされるがままに布団に寝かしつけられ、マナと身体をくっつけることになった。そもそもひとり用の布団だから仕方ない。掛け布団から身体が溢れないようにカノンの背中に腕をまわしてしっかりとホールド。向かい合う形で就寝する。

「おやすみ。明日はちゃんと起こすからね？」

目が合う。

傷心の彼女は何も言わずに静かに目を閉じた。

今はまだそれでいいとマナは思った。



「っ、……ふ……っ」

「うう……うっ、う……」

「い、いやだ……ごめんなさい……。私、そんな……つもりじゃ……」
声が聞こえて、マナは目を覚ました。

まだ夜だ。

腕の中で眠るカノンは、とても苦しそうに弱々しく頭を振りながら泣いていた。起きているのか？　と思っただが、どうやらそうではないようだ。起こしてやるべきか悩む間にも寝言は続いた。

「しにたい……うっ、うう、う……」

大粒の涙は止まることなく枕を濡らす。

ようやくちゃんと聞くことができた言葉がこのようなものとなっ
てしまったことにマナは大きなショックを受けた。

心に傷を負った人間はこれまでに何度か見たことがあるが、酷い部
類だろう。なにせ背負わされているものがあまりにも別次元だから。

「みんな……わたし、が——」

最後まで言い切る前にカノンを力強く抱きしめた。自分を見失っ
て、放棄してしまわないように。

寝言が止まる。起こしてしまったかもしれない。

だが、しばらくすると痛いくらい抱きしめ返してきた。涙が服に染
みってくるのがわかる。

マナはカノンが穏やかな吐息を立てるようになってから、自分も睡
魔に身を委ねた。